經典部

第五卷

BL 1411 T8J3 1929 v.5

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂

國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
V.5

昭和新纂 國譯大藏經 經典部 第五卷

大般涅槃經第一 目次

卷第一

序品第一……一

卷第二

純陀品第二……二五

哀歎品第三……四一

卷第三

長壽品第四……五七

金剛身品第五……七三

名字功德品第六……八一

卷第四

四相品第七之上……八四

卷第五

四相品第七之下……一〇四

卷第六

四依品第八……一三〇

卷第七

邪正品第九……一五四
四諦品第十……一六八
四倒品第十一……一七一

卷第八

如來性品第十二……一七四
文字品第十三……一九六
鳥喩品第十四……二〇四

卷第九

月喩品第十五……二一一

菩薩品第十六……二一七
卷第十
一切大衆所問品第十七……二四四
現病品第十八……二六五
卷第十一
聖行品第十九之上……二七九
卷第十二
聖行品第十九之中……三一一
卷第十三
聖行品第十九之下……三三四
卷第十四
梵行品第二十之一……三五八
卷第十五
梵行品第二十之二……三八九
卷第十六

梵行品第二十之三……四一八
卷第十七
梵行品第二十之四……四五〇
卷第十八
梵行品第二十之五……四七七
嬰兒行品第二十一……四九七
卷第十九
高貴德王菩薩品第二十二之一……五〇一

大般涅槃經

第一

經典部

第五卷

大般涅槃經 卷第一

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

序品第一

（一）是の如く我聞けり。一時、佛、拘尸那城、力士生地、阿夷羅跋提河の邊、娑羅雙樹の間に在したまふ。爾の時世尊は大比丘八十億百千人と俱なり。前後圍繞せり。二月十五日、涅槃に臨みたまふ時、佛の神力を以て大音聲を出したまふ。其の聲法界に徧滿して乃ち有頂に至る。其の類音に隨ひて普く衆生に告ぐらく、『今日、如來、應供、正徧知、衆生を憐愍し衆生を覆護し、等しく衆生を視たまふこと羅睺羅の如し。爲に歸依と作り世間の舍と爲りたまふ。大覺世尊、將に涅槃したまはんと欲す。一切衆生若し疑ふ所有らば、今悉く問ふべし。最後の問と爲せ』と。爾の時に世尊、晨朝の時に於て、其の面門より種種の光を放ちたまふ。其の明雜色にして、靑、黃、赤、白、頗梨、碼碯なり。光徧く此の三千大千の佛の世界を照したまふ。乃至十方も亦復是の如し。其の中の有らゆる六趣の衆生の、斯の光に遇ふ者、罪垢煩惱一切消除す。是の諸の衆生、是を見聞し已りて心大いに憂惱し、同時に聲を擧げて悲號啼哭すらく、『嗚呼慈父、痛しき哉苦しき哉』と。手を擧げて

【序品】本經の序說。釋尊が將に入寂せられんとするを聞きて、多數の弟子を初め、天神鬼神乃至鳥獸蟲類に至る迄所謂五十二衆が悲歎號泣して會座に列することを說く。

【一】序記、釋尊將に涅槃に入り給はんとするを說く

【拘尸那城】釋尊入滅の地にして具には拘尸那揭羅クシナガラ(Kusinā-gara)といふ。

【力士生地】力士族の棲居せる土地を云ふ。力士とは當時强力を有せる種族の名。

【阿夷羅跋提】河の名。無勝河と譯す。原音はアヂタアヴァティ(Ajitavati)と云ふ。

【娑羅雙樹】娑羅は印度に產する落葉樹にして高さ百尺餘に達す。學名Shorea Robustaと

云ふ。雙樹とは釋尊入滅の地に雙本の婆羅樹が高く空にそびえたるがありたるを以て名けらる。この樹釋尊の入滅の悲しみて色を失ひ白色を呈し、恰も白鶴の群集せるが如く見えしを以て後世これを鶴林と云ふ。

【涅槃】梵語ニルヷーナ（Nirvāṇa）の音譯。泥洹とも書く。滅度寂滅圓寂等と譯す。眞理を窮めたる佛教の最高目的たる理想境を云ふ。又普通には釋尊その他諸佛の入滅を云ふことあり。今もその意味なり。

【神力】神通力のこと人以上の神祕的偉力を云ふ。

【有頂】有頂天のこと。この世界（三界）の最上たる無色天を云ふ。

【類音】衆生の千差萬別なる機類に

頭を拍ち、胸を椎ちて大いに叫ぶ。其の中、或は身體戰慄し、涕泣哽咽するもの有り。爾の時、大地、諸山、大海皆悉く震動す。時に諸の衆生、共に相謂ひて言はく、「且く各裁抑して、大いに愁苦すること莫れ。當に共に疾く、拘尸城の力士生處に往詣し、如來の所に至りて頭面禮敬し、『如來般涅槃したまふこと莫く、世に住すること一劫若くは減一劫なりたまへ』と勸請すべし」と。互相に手を執り、復是の言を作さく、「世間は虛空となり、衆生は福盡き、不善の諸業增長して世に出でん。仁者、今當に速かに往き、速かに往くべし。如來久しからずして必ず涅槃に入りたまはん」と。又是の言を作さく、「世間は虛空となり、世間は虛空となれり。我等今より救護有ること無く、宗仰する所無し。貧窮孤露にして、一旦無上世尊に遠離せば、設し疑惑有らんとき、常に復誰にか問ふべき」と。

(二)時に無量の諸の大弟子あり。尊者摩訶迦旃延、尊者薄拘羅、尊者優婆難陀、是の如き等の諸の大比丘の、佛光に遇ふ者、其の身戰掉し、乃至大いに動じて自ら持すること能はず。心濁迷悶し、聲を發げて大いに叫び、是の如き等の種種の苦惱を生ず。爾の時復、八十百千の諸の比丘等有り。皆阿羅漢にして、心に自在を得、所作已に辨ず。諸の煩惱を離れ諸根を調伏す。大龍王の如く大威德有り。空慧を成就し、己利を逮得す。栴檀林の栴檀圍繞するが如く、師子王の師子圍繞するが如し。是の如きの無量の功德を成就す。一切皆是佛の眞子なり。各晨朝、日の初めて出づる時に於て、常住の處を離れ、方に楊枝を用ふるに佛の光明に遇ふ。更に相謂ひて言はく、「仁等、宜しく速かに澡漱清淨にすべし」と。

適應する各別の聲。

【如來】佛の別號梵語タターガタ(Tathāgata)の譯絕對如實の眞理より來生せる意。

【應供】梵語阿羅漢(Arhat)の譯、佛の別號。供養を受くべき價値ある人の意。

【正徧知】梵語三藐三佛陀(Samyak-sambuddha)の譯佛の別號、正しく徧ねく一切を知るものの意。

【衆生】一切の生きとし生けるものの意。

【羅睺羅】釋尊の一子、ラーフラ(Rāhula)の音譯。後釋尊につきて出家す、佛の十大弟子の一人、密行第一と稱せらる。

【大覺世尊】大覺者世尊の意、世尊とは佛の尊號にして尊師と云ふ意、

【面門】釋尊の御

是の言を作し已りて擧身毛竪ち、徧體血現じて、波羅奢華の如く、渧泣目に盈ちて大苦惱を生ず。衆生を利益し安樂にし、大乘第一空行を成就せんと欲するが爲に、如來の方便密教を顯發し、種種の說法を斷絕せざるが爲に、諸の衆生の調伏の因緣の爲の故に、疾く佛所に至り、佛足を稽首し、繞ること百千币し、合掌恭敬して卻つて一面に坐す。

爾の時、復拘陀羅女、善賢比丘尼、優波難陀比丘尼、海意比丘尼と、六十億の比丘尼等と有り。一切亦是大阿羅漢なり。諸漏已に盡きて心自在を得、所作已に辦じ、諸の煩惱を離れ、諸根を調伏して猶し大龍の如く、大威德有りて空慧を成就す。亦是朝、日の初めて出づる時に於て、擧身毛竪ち、徧體血現じて波羅奢華の如く、渧泣目に盈ちて大苦惱を生ず。亦衆生を利益し安樂にし、大乘の第一空行を成就せんと欲す。如來の方便、密教を顯發して、種種の說法を斷絕せざるが爲に、諸の衆生の調伏の因緣の爲の故に、疾く佛所に至りて佛足を稽首し、繞ること百千币し、合掌恭敬して、卻つて一面に坐す。比丘尼衆の中、復諸の比丘尼の、皆是菩薩人中の龍なる有り。位十地に階し安住して動ぜず。衆生を化せんが爲に現じて女身を受け、而も常に四無量心を修習し、自在力を得て能く佛を化作す。爾の時に復、一恆河沙の菩薩摩訶薩有り。人中の龍、位十地に階し、安住して動ぜず。方便して身を現ず。其の名を海德菩薩、無盡意菩薩と曰ふ。是の如き等の菩薩摩訶薩を上首と爲す。其の心皆悉く大乘を敬重し、大乘に安住し、大乘を深解し、大乘を愛樂し、大乘を守護し、善能く一切世間に隨順す。是の誓を作して言はく、「諸の未度の者、當

に度を得しむべし。已に過去無數劫の中に於て淨戒を修持し、善く所行を持す。未解の者を解し三寶の種を紹ぎて斷絕せざらしめ、未來世に於て當に法輪を轉ずべし」と。大莊嚴を以て自ら莊嚴す。是の如き、無量の功德を成就し、等しく衆生を觀ること一子を視るが如し。亦晨朝、日の初めて出づる時に於て、佛の光明に遇ふ。擧身毛豎ち、徧體血現じて波羅奢華の如く、涕泣目に盈ちて大苦惱を生ず。亦衆生を利益し安樂にし、大乘第一空行を成就せんが爲に、如來の方便密敎を顯發し、種種の說法を斷絕せざらんが爲に、諸の衆生の調伏の因緣の爲の故に、疾く佛所に至り、佛足を稽首し、繞ること百千帀し、合掌恭敬して卻つて一面に住す。

(二)爾の時、復二恆河沙の諸の優婆塞有り。五戒を受持して威儀具足す。其の名を威德無垢稱王優婆塞、善德優婆塞等と曰ひ、上首爲り。深く樂ひて諸の對治門を觀察す。所謂苦樂、常無常、淨不淨、我無我、實不實、歸依非歸依、衆生非衆生、恆非恆、安非安、爲無爲、斷不斷、涅槃非涅槃、增上非增上、常に樂ひて、是の如き等の法の對治の門を觀察す。亦無上の大乘を樂聞し。所聞の如くし已りて、能く他の爲に說かんと欲す。善く淨戒を持し、大乘を渴仰す。既に自ら充足し、復能く餘の渴仰者を充足す。善能く無上の智慧を攝取し、大乘を愛樂して大乘を守護す。善能く一切世間に隨順して未度の者を度し、未解の者を解し、三寶の種を紹ぎて斷絕せざらしめ、未來世に於て當に法輪を轉ずべし。大莊嚴を以て自ら莊嚴し、心常に深く淸淨の戒行を味ふ。悉く能く是の如きの功德を成就し、諸の衆

口。

【三千大千】大宇宙卽ち三千大千世界を云ふ。

【十方】東西南北の四方と四維と上下とを合して十方と云ふ。

【六趣】地獄餓鬼畜生阿修羅人天の六道、迷の世界を云ふ。

【慈父】釋尊をさす。

【般涅槃】パリニルヴーナ(Parinirvana)の音譯。圓寂と譯す。寂滅の意。

【二】以下所召の大衆を明す。初めに大衆弟子比丘比丘尼を召す。

【摩訶迦旃延】佛の十大弟子の一人、論議第一と稱せらる。梵名マハーカートヤーヤナ(Mahakatyayana)眉垂、好眉等と譯す。

【薄拘羅】梵名ヴァックラ(Vakkula)

善容と譯す。
【優波難陀】梵名ウパナンダ（Upananda）大歡喜、重喜等と譯す。
【八十百千】百千は十萬、八百萬のこと。
【空慧】空の理を悟りたる智慧を云ふ。
【己利】自利に同じ自己の解脫を云ふ。利他に對す。
【栴檀林】香木栴檀チャンダナ（Candana）の林。
【波羅奢華】樹名梵名パラーシャ（Palāśa）の花。花樹と譯す。花は赤大にして赤く、葉は日未だ照さざる時は黑く日照せば赤脈現れ、日沒すれば黃となると云ふ。
【大乘第一空行】眞如實相に徹したる圓滿至極の道行。
【祕教】佛の神祕力によりてあらはさるる深奧の教。

生に於て大悲心を生じ、平等にして二無く、一子を視るが如し。亦晨朝に日の初めて出づる時に於て、如來身を闍毗せんと欲するが爲の故に、人人各香木萬束を取り、栴檀沈水、牛頭栴檀、天木香等、是の一一の木、文理及び附、皆七寶微妙の光明有り。譬へば種種の雜彩畫飾の如く、佛力を以ての故に是の妙色有り。靑、黃、赤、白なり。諸の衆生の樂見する所と成る。諸木皆種種の香を以て塗り、鬱金、沈水及び膠香等、散ずるに諸華を以て莊嚴を爲す。優婆羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。諸の香木の上に五色の旗を懸く。柔軟微妙なること猶し天衣の如し。憍奢耶衣、芻摩繒綵なり。是の諸の香木、載するに寶車を以てす。是の諸の寶車、種種の光を出す。靑、黃、赤、白なり。轅輻皆七寶を以て廁塡す。是の一一の車、駕するに駟馬を以てす。是の一一の馬、駿疾風の如し。一一の車前、五十七の寶妙幢を建立し、眞金の羅網其の上を彌覆す。一一の寶車、復五十の微妙の寶蓋有り。一一の車上、諸の華鬘を垂る。優婆羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。其の華純ら眞金を以て葉と爲し、金剛を臺と爲す。此の華臺の中、多く黑蜂有り。其の中に遊集して歡娛受樂し、又妙音を出す。所謂無常、苦、空、無我なり。此の音聲の中、復菩薩の本所行の道を說く。復種種の歌舞、伎樂、箏、笛、箜篌、簫、瑟有りて鼓吹す。是の樂音の中、復是の言を出す。「苦なる哉苦なる哉、世間は空虛なり」と。一一の車前に、優婆塞の四つの寶案を擎ぐる有り。是の諸案の上に、種種の華有り。優婆羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。鬱金諸香、及び餘の熏香あり。微妙第一なり。諸の

【拘陀羅女】クッダーラ(Kuddara)尼。
【善賢】スバドラー(Subhadra)
【優波難陀】ウパーナンダー(Upananda)
【海意】サーガラマティ(Sagaramati)
【諸漏】漏は煩惱の別名。
【十地】佛道を修行して佛陀たる理想境に至る階次を五十二に分類し、その中十信、十住、十行、十回向を終りたる後に進む階位なり。佛道修行者としては極めて進みたる位なり。
【四無量心】四等定とも云ふ。慈悲喜捨の四、菩薩の心願を云ふ。
【恒河沙】ガンヂス河の沙。無量無數の意味に用ゐらる。
【菩薩摩訶薩】ボーデーサットワ、

優婆塞、佛及び僧の爲に諸の食具を辨じ、種種備足す。皆是栴檀、沈水香の薪、八功徳水の成熟する所なり。其の食甘美にして、六種の味有り。一つに苦、二つに酢、三つに甘、四つに辛、五つに鹹、六つに淡なり。復三德有り。一つには輕軟、二つには淨潔、三つには如法なり。是の如き等の種種の莊嚴を爲して力士生處の娑羅雙樹の間に至る。復金砂を以て其の地に徧布し、迦陵伽衣、欽婆羅衣、及び繒綵衣を以て砂上に覆ひ、周帀して十二由旬に徧滿す。佛及び僧の爲に七寶の師子の座を敷置す。其の座高大にして須彌山の如し。此の諸座の上に皆寶帳有り。諸の瓔珞を垂れ、諸の娑羅樹、悉く種種の微妙の旛蓋を懸け、種種の好香、用ひて以て樹に塗り、種種の名華、以て樹間に散す。諸の優婆塞、各是の念を作さく『一切衆生、若乏しき所有らば、飲食、衣服、頭目、肢體、其の所須に隨ひて皆悉く給與せん。是の施を作す時、欲、瞋恚、穢濁、毒心を離れ、餘の思願、世の福樂を求むること無く、唯、無上淸淨菩提を志す。』是の優婆塞等、皆已に菩薩の道に安住す。復是の念を作さく『如來、今我が食を受け已りて、當に涅槃に入りたまふべし』と。是の念を作し已りて身毛皆竪ち、徧體血現じて波羅奢華の如く、涕泣目に盈ちて大苦惱を生ず。各各供養の具を齎持し、載するに寶車を以てす。香木、幢幡、寶蓋、飮食、疾く佛所に至る。佛足を稽首し、其の所持の供養の具を以て如來に供養し、繞ること百千帀す。聲を擧げて號泣し、天地を哀動し、胸を椎ちて大に叫び、淚下ること雨の如し。復相謂つて言はく『苦なる哉仁者、世間は虛空なり世間は虛空なり』と。便ち自ら身を擧げて如來の前に

マハーサットヴ(Bodhisattva, mahāsattva)の音譯。
菩薩とは覺有情と譯し、佛道を修行する自覺せるものを云ひ、摩訶薩とは大有情と譯し佛道を修行して一切の衆生を救濟するもの。佛を除きて衆生中最上なるが故に大有情と云ふ。
【大乘】梵語マハーヤナ(Mahāyāna)の譯。乘とは運乘の意、乘せ運ぶ事。佛が教によりて救の衆生を悟りの岸に乘せ運ぶこと、その乘物が大きく徹底せる教なるを以て大乘と云ふ。
【度】梵語波羅蜜ハーラミター(Pāramitā)の譯。到彼岸と譯す。救濟若しくは解脫の意。
【三寶】佛教の別名に用ゐらる。佛寶法寶僧寶の三。

投じ、佛に白して言さく『唯願はくば如來、哀みて我等が最後の供養を受けたまへ』と。世尊、時を知りて默然として受けたまはず。是の如く三請するに悉く皆許されず。諸の優婆塞所願を果さず、心悲惱を懷き、默然として住す。猶し慈父の、唯一子有りて、卒かに病みて命終し、殯送還歸して極めて大いに憂惱するが如し。諸の優婆塞、悲泣懊惱することとも亦復是の如し。諸の供具を以て一處に安置し、卻つて一面に在りて默然として坐す。

(四)爾の時に復、三恆河沙の諸の優婆夷有り。五戒を受持し、威儀を具足す。其の名を壽德優婆夷、德鬘優婆夷、毘舍佉優婆夷等と曰ひ、八萬四千に上首爲り。悉く能く正法を護持するに堪忍す。無量百千の衆生を度せんが爲の故に女身を現ず。家法を訶責し、自ら己身を觀ず。四毒蛇の如く、是の身常に無量の諸蟲に唼食せらる。是の身臭穢にして貪欲獄縛す。是の身惡むべきこと猶し死狗の如し。是の身不淨にして九孔常に流る。是の身城の如く、血肉、筋骨、皮其の上を裹み、手足は以て卻敵の樓櫓と爲り、目を竅孔と爲し、頭を殿堂と爲す。心王中に處す。是の如きの身城は諸佛世尊の棄捨したまふ所、凡夫愚人の常に味著する所なり。貪淫、瞋恚、愚癡の羅刹其の中に止住す。是の身堅からざること、猶し蘆葦、伊蘭、水沫、芭蕉の樹の如し。是の身無常にして念念に住せず。猶し雷光、暴水、幻燄の如く、亦水に畫くに、畫くに隨ひ、隨ひて合するが如し。是の身壞し易きこと、猶し河岸の崚に臨める大樹の如し。是の身久しからず。當に狐狼、鴟梟、鵰鷲、烏鵲、餓狗に食啖せらるべし。誰か有智の者、當に此の身を樂むべき。寧ろ牛迹を以て大海水を盛る

とも、具さに此の身の無常、不淨、臭穢を説くこと能はじ。寧ろ大地を丸として棗等の如く、漸漸に轉た小さくして、猶し亭藶子、乃至微塵の如くならしむとも、具さに此の身の過患を説くこと能はじ。是の故に當に捨つること、涕唾を棄つるが如くすべし。是の因緣を以て諸の優婆夷、空、無想、無願の法を以て、常に其の心を修す。深く大乘經典を咨受することを願ひ、聞き已りて亦能く他の爲に演説す。本願を護持し女身を毀呰す。甚だ患厭すべし。性堅牢ならず、心常に是の如きの正觀を修習して、生死際み無き輪轉を破壞す。大乘を渴仰して既に自ら充足し、復能く餘の渴仰の者を充足す。深く大乘を樂ひ、大乘を守護す。女身を現ずと雖も、實は是菩薩なり。善能く一切世間に隨順して未度の者を度し、未解の者を解す。三寶の種を紹ぎて斷絶せざらしめ、未來世に於て當に法輪を轉ずべし。大莊嚴を以て自ら莊嚴し、堅く禁戒を持して、皆悉く是の如きの功德を成就す。諸の衆生に於て大悲心を生じ、平等にして二無きこと一子を視るが如し。亦晨朝に日初めて出づる時に於て、各相謂つて言はく『今日宜しく雙樹の間に至るべし』と。諸の優婆夷、設くる所の供具前に倍勝す。持して佛所に至りて佛足を稽首し、繞ること百千而して佛に白して言さく『世尊、我等今、佛及び僧の爲に諸の供具を辦ず。唯願はくば如來、我が供を哀受したまへ』と。如來、默念として許可したまはず。諸の優婆夷所願を果さず、心に惆悵を懷き、卻つて一面に住す。

(五)二 爾の時、復、四恆河沙の毘舍離城の諸の離車等、男女、大小、妻子、眷屬、及び閻浮提

【法輪】 教法(をしへ)のこと。佛の教へは衆生の迷ひを碎くこと恰も車輪の轉じて瓦礫を碎くが如きを以てかく云ふ。

【三】 是より所召の優婆塞を明す。

【優婆塞】 ウパーサカ(Upāsaka)の音譯、近事男、淸信士等と譯す。佛道に入りたる在家の男子を云ふ。

【五戒】 佛道修行者の守るべき戒律不殺生戒、不偸盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五。

【闍毘】 茶毘に等し燒くこと。

【優鉢羅華】 梵名ウトパラ(Utpala)蓮華の一種、四蓮華の一、青蓮華を云ふ。

【拘物頭華】 梵名クムダ(Kumuda)黄色の蓮華。

【波頭摩華】 梵名パドマ(Padma)

の諸王の眷屬有り。法を求むるが爲の故に、善く戒行を修して威儀を具足し、異學の正法を壞する者を摧伏せり。常に相謂つて言はく、『我等當に、金銀倉庫を以て、甘露無盡正法深奥の藏をして、久しく世に住せしむるが爲にすべし。願はくば我等をして、常に修學することを得しめたまへ。若佛の正法を誹謗する者有らば、當に其の舌を斷つべし。』復、是の願を作さく、『若、出家の禁戒を毀る者有らば、我當に罷めて俗に還りて策使せしめ、能く正法を深樂し護持すること有らば、我當に敬重すること父母に事ふるが如くすべし。若衆僧の能く正法を修するもの有らば、我當に隨喜して勢力を得しむべし』と。常に大乘經典を樂聞せんと欲し、聞き已りて亦能く人の爲に廣說す。皆悉く是の如きの功德を成就せり。其の名を淨無垢藏離車子、淨不放逸離車子、恆水無垢淨德離車子と曰ふ。是の如き等、各相謂つて言はく、『仁等、今速かに佛所に往くべし。』辨ずる所の供養種種具足す。一一の離車、各八萬四千の大象を嚴り、八萬四千の駟馬の寶車、八萬四千の明月寶珠、天木、梅檀、沈水の薪束、種種各八萬四千有り。一一の象の前に寶幢、旛蓋有り。其の蓋小さき者も周帀縱廣一由旬に滿つ。旛の最も短き者も長さ三十二由旬、寶幢下き者も高さ百由旬なり。是の如き等の供養の具を持ちて佛所に往き至り、佛足を稽首し、繞ること百千帀して、佛に白して言さく、『世尊、我等今者、佛及び僧の爲に諸の供具を辨ず。唯願はくば如來、我が供を哀受したまへ。』如來、默然として許可したまはず。諸の離車等所願を果さず、心に愁惱を懷き、佛の神力を以て地を去ること七多羅樹、虛空の中に於て默然

赤色の蓮華。

【芬陀利華】梵名フンダリーカ(Puṇḍarīka)白色の蓮華。

【憍奢耶衣】コウシエーヤ(Kauśeya)

【芻摩】クシユマ(Kṣuma)麻衣と譯す。

【七寶】金、銀、瑠璃、頗黎、硨磲、赤珠、瑪瑙、

【八功德水】八種の功德を有する水、澄淨、淸冷、甘美、輕輭、潤澤、安和、除患、增益の八德

【迦陵伽衣】細滑衣と譯す。

【欽婆羅衣】毛と絲とを雜へて織りたる衣。

【四】是より所召の優婆夷を明す。

【優婆夷】ウパーシカー(Upāsikā)淸信女と譯す。佛道に入れる在家の女を云ふ。

【九孔】身體に於ける九つの孔。

【貪淫】渴愛、愛欲のこと。根本の煩惱なり。
【瞋恚】忿怒の煩惱。
【愚癡】無明ともいふ。事理に迷ふ心を云ふ。以上三を三毒と稱し、佛道を修するに最も障害となるものなり。
【伊蘭】エーラヴナ(Eravana)花は美しけれど惡臭强き樹。
【空無相無願の法】空とは存在に對して否定する義にて眞理の實相を云ふ。無相とは差別の相なきを云ひ、無願とは要求すべき法なきを云ふ。この三を三三昧又三解脱門と稱し、眞理を極め、さとりの門を開くに最も必要なものとせらるる。
【五】是より所有の離車衆を明す。
【毘舍離】地名ヴ

として住す。

(六)爾の時、復、五恆河沙の大臣、長者有り、大乘を敬重す。若し異學の正法を謗ずる者有らば、是の諸人等の力能く摧伏すること、猶し雹雨の草木を摧折するが如し。其の名を日光長者、護世長者、護法長者と曰ひ、是の如きの等上首爲り。設くる所の供具前に五倍す。具供に持ちて雙樹の間に往詣し、佛足を稽首し、繞ること百千帀して佛に白して言さく、『世尊、我等今者、佛及び僧の爲に諸の供具を設く。唯願はくば哀憫して我等が供を受けたまへ。』如來默然として之を受けたまはず。諸の長者等所願を果さず、心に愁惱を懷き、佛の神力を以て地を去ること七多羅樹、虛空の中に於て默然として住す。

(七)爾の時に復、毘舍離王及び其の夫人、後宮の眷屬、閻浮提内の有らゆる諸王有り。阿闍世幷及城邑、聚落の人民を除く。其の名を月無垢王等と曰ふ。各四兵を嚴りて佛所に往かんと欲す。是の一一の王、各一百八十萬億の人民、眷屬有り。是の諸の車兵、駕するに象馬を以てす。象に六牙有り、馬は疾きこと風の如し。莊嚴、供具前に六倍す。諸の寶蓋の中、極小の者有り。周帀縱廣八由旬に滿つ。旛は極て短き者も十六由旬、寶幢下き者も三十六由旬なり。是の諸王等、正法に安住し邪法を惡賤す。大乘を敬重し、大乘を深樂す。衆生を憐愍して等しく一子の如く、持する所の飲食香氣、流布して四由旬に滿つ。亦晨朝に日の初めて出づる時に於いて、是の種種の上妙の甘膳を持ちて、雙樹の間に詣で、如來の所に至りて佛に白して言さく、『世尊、我等、佛及び比丘僧の爲に是の供具を設く。唯願

イシャリー（Vaiśālī）現在のパトナ市より恒河を隔てて東北方二十七哩の地點に在す。釋尊在世當時は一種の自由共和國なりしと云ふ。

【離車】リッチャヴィー（Licchavi）の音譯。毘舍離の刹帝利種の一族。

【閻浮提】瞻部洲とも云ふ。須彌山を中心とした四大洲の一。

【六】是より所召の大臣長者衆を明す。

【七】是より所召の毘舍離王衆を明す。

【阿闍世】中印度摩掲陀國王の名。アジャータシャトル（Ajātaśatru）未生怨と譯す。父王を頻婆娑羅、母を韋提希と云ふ。初め佛教の迫害者なりしが、後には釋尊に歸依し入滅後第一結集の外護者

はくば如來、哀愍して我が最後の供養を受けたまへ。」如來、時を知りて亦許可したまはず。是の諸王等所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。

（八）爾の時に復、七恆河沙の諸王の夫人有り。唯阿闍世王の夫人を除く。衆生を度せんが爲に女身を受くるを現ず。常に身行を觀じ、空、無想、無願の法を以て其の心を熏修す。其の名を三界妙夫人、愛德夫人と曰ふ。是の如き等の諸王の夫人、皆悉く正法の中に安住し、禁戒を修行して威儀具足す。衆生を憐愍して等しく一子の如くす。各相謂つて言はく「今、宜しく速かに世尊の所に往詣すべし。」諸王の夫人の設くる所の供養、前に七倍す。香華、寶幢、繒綵、旛蓋、上妙の飲食なり。寶蓋小き者も周帀縱廣十六由旬、旛最も短き者も三十六由旬、寶幢下き者も六十八由旬、飲食の香氣、周徧流布して八由旬に滿つ。是の如き等の供養の具を持ちて如來の所に往き、佛足を稽首し、繞ること百千帀して佛に白して言さく「世尊、我等、佛及び比丘僧の爲に是の供具を設く。唯、願はくば如來、哀愍して我が最後の供養を受けたまへ。」如來時を知り、默然として受けたまはず。時に諸の夫人、所願を果さずして心に愁惱を懷き、自ら頭髮を拔き、胸を椎ちて大いに哭し、猶、慈母の新に愛子を喪へるが如くにし、卻つて一面に在りて默然として住す。

（九）爾の時に復、八恆河沙の諸の天女等有り。其の名を廣目天女と曰ひ、上首爲り。是の如きの言を作さく「汝等諸姉、諦かに觀よ諦かに觀よ。是の諸人衆の設くる所の種種の上妙の供具、如來及び比丘僧に供せんと欲す。我等も亦當に是の如きの微妙の供具を嚴設して、

となり大に佛敎の宣揚につとめた。
【四兵】象兵馬兵歩兵車兵。
【由旬】由旬那ともかく。里數を表す。
【八】是より所召の夫人衆を明す。
【師子座】佛の坐し給ふ座を云ふ。佛この人中の最勝なること獸中の獅子の如きを以てかく云はる。轉じて國王高僧の座席をもいふ。
【九】是より所召の天女衆を明す。

如來に供養すべし。如來受け已りて當に涅槃に入りたまふべし。諸姉、諸佛如來の出世は甚だ難し。最後の供養も亦復倍す難し。若佛、涅槃したまはば世間は虛空とならん。是の諸の天女は大乘を愛樂し、大乘を聞かんと欲す。聞き已りて亦能く人の爲に廣く說く。大乘を渴仰して既に自ら充足し、復能く諸の渴仰の者を充足す。大乘を守護し、若異學の大乘を憎嫉するもの有らば、勢能く摧滅すること雹の草を摧くが如し。戒行を護持して威儀具足す。善能く一切世間に隨順して、未度の者を度し未脫の者を脫し、未來世に於て、當に法輪を轉ずべし。三寶の種を紹ぎて斷絕せざらしめ、大乘を修學し、大莊嚴を以て自ら莊嚴す。是の如きの無量の功德を成就し、等しく衆生を慈むこと一子を視るが如し。亦、晨朝に日の初めて出づる時に於て、各種種の天木香等を取る。人間の有らゆる香木に倍す。其の木香の氣、能く人中の種種の臭穢を滅す。白車、白蓋四白馬を駕す。一一の車上、皆白帳を張る。其の帳の四邊、諸の金鈴を懸く。種種の香華、寶幢、旛蓋、上妙の甘膳、種種の伎樂あり。師子座を敷き、其の座の四足は純紺瑠璃なり。其の座の後に於て各各皆七寶の倚牀有り。一一の座前に復金几有り。復、七寶を以て燈樹と爲し、種種の寶珠、以て燈明と爲し、微妙の天華其の地に徧布す。是の諸の天女、是の供を設け已りて、心哀感を懷き、涕淚交も流れて大苦惱を生ず。亦衆生を利益し安樂にせんが爲に、大乘の第一空行を成就し、如來の方便密敎を顯發せん。亦、種種の說法を斷ぜざるが爲に、佛所に往詣して佛足に稽首し、繞ること百千帀して佛に白して言さく、「世尊、唯願はくば如來、

我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。諸の天女等所願を果さず、心に憂惱を懷き、卻つて一面に住し、默然として坐す。

（一〇）爾の時に復、九恆河沙の諸の龍王等四方に住す。其の名を和修吉龍王、難陀龍王、婆難陀龍王と曰ひ、上首爲り。是の諸の龍王も亦、晨朝に日の初めて出づる時に於て、諸の供具を設くること人天に倍す。持ちて佛所に至りて佛足に稽首し、繞ること百千帀して佛に白して言さく、『唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來、時を知りて默然として受けたまはず。是の諸の龍王所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に坐す。

（一一）爾の時に復、十恆河沙等の諸の鬼神王有り。毗沙門王上首爲り。各相謂つて曰はく、『仁者、今者速かに佛に詣すべし。』設くる所の供具諸龍に倍するを持ちて佛所に往き、佛足に稽首し、繞ること百千帀して佛に白して言さく、『唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來、時を知りて默然として許したまはず。是の諸の鬼王所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に坐す。

（一二）爾の時に復、二十恆河沙の金翅鳥王有り、降怨鳥王上首爲り。復、三十恆河沙の乾闥婆王有り、那羅達王上首爲り。復、五十恆河沙の摩睺羅伽王有り、大善見王上首爲り。復、六十恆河沙の阿修羅王有り、睒婆利王上首爲り。復、七十恆河沙の陀那婆王有り、無垢河水王、跋提達多王等上首爲り。復、八十恆河沙等の羅刹王有り、可畏王上首爲り。惡心を捨離して更に人を食せず、怨憎の中に於て慈悲心を生ず。其の形醜陋、佛の神力を以て皆

【一〇】是より所召の龍衆を明す。
【和修吉】ヴースキ（Vāsuki）九頭龍と譯す。
【難陀】ナンダ（Nanda）歡喜と譯す。
【婆難陀】ウパナンダ（Upananda）大歡喜と譯す。
【一一】是より所召の鬼神衆を明す。
【毘沙門王】ヴァイシュラヴァナ（Vaiśravaṇa）多聞と譯す。四天王の一。
【一二】是より所召の金翅鳥を明す。
【金翅鳥】ガルダ（Garuḍa）の譯。
【乾闥婆】ガンダルヴァ（Gandharva）香陰と譯す。樂神なり。
【緊那羅】キンナラ（Kiṃnara）疑神と譯す。歌神なり。
【摩睺羅伽】マホーラガ（Mahoraga）大腹行と譯す。鬼族の一。
【阿修羅】アスラ

(Asura) 常に戰爭を好み鬪爭を事とする惡神、單に修羅とも云ふ。
【睒婆利】チャンパール(Campalu)香花と譯す。
【陀那婆】ダーナヴット(Dānavat)有施と譯す。
【跋提達多】バドラダッタ(Bhadradatta)賢授と譯す
【羅刹王】ラークシャサ(Rakṣasa)暴惡可畏と譯す。
【三】以下八衆同衆を列す。
【大香象】マハーガンダハスチー(Mahāgandhahasti)
【羅睺象】ラフハスチー(Rahuhasti)
【金色象】スヷルナヷルナハスチー(Suvarṇavarṇahasti)
【甘味象】アムリタハスチー(Amṛtahasti)
【迦陵頻伽鳥】カラピンカ(Kalavi-

悉く端正なり。復、九十恒河沙の樹林神王有り、樂香王上首爲り。復、千恒河沙の持咒王有り、大幻持咒王上首爲り。復、一億恒河沙の貪色鬼魅有り、善見王上首爲り。復、百億恒河沙の天の諸の淫女有り、天藍婆女、鬱婆尸女、帝路沾女、毗舍佉女上首爲り。復、千億恒河沙の地の諸の鬼王有り、白濕王上首爲り。

(一三)復、十萬億恒河沙等の諸の天子及び諸の天王、四天王等有り。復十萬億恒河沙等の四方の風神有り。諸の樹上の時、非時の華を吹きて、雙樹の間に散ず。復、十萬億恒河沙の主雲雨神有り、皆是の念を作さく『如來、涅槃焚身の時、我當に雨を注ぎて、火をして時に滅せしめ、衆中熱悶せば、爲に淸涼を作すべし』と。復、二十恒河沙の大香象王有り、羅睺象王、金色象王、甘味象王、紺眼象王、欲香象王等上首爲り。大乘を敬重し、大乘を愛樂す。佛、久しからずして當に般涅槃したまふべし。各各無量無邊の諸の妙蓮華を拔取して佛所に來至し、頭面に佛を禮し、卻つて一面に住す。復、二十恒河沙等の師子獸王有り、師子吼王上首爲り。一切衆生に無畏を施與す。諸の華果を持ちて佛所に來至し、佛足に稽首し、卻つて一面に住す。復、二十恒河沙等の諸の飛鳥王有り、鳧、鴈、鴛鴦、孔雀の諸鳥、乾闥婆鳥、迦蘭陀鳥、鸜鵒、鸚鵡。俱翅羅鳥、婆嘻伽鳥、迦陵頻伽鳥、耆婆耆婆鳥、是の如き等の諸鳥、諸の華果を持ちて佛所に來至し、佛足に稽首し、卻つて一面に住す。復、二十恒河沙等の水牛、牛羊有り、佛所に往至して妙香乳を出す。其の乳、拘尸那城の有らゆる溝坑に流滿し、色香、美味悉く皆具足す。是の事を成じ已りて、卻つて一面に住

nka）妙聲好聲と譯す。鳥の名。
【迦蘭陀】カランダ（Karanda）好聲と譯す。鳥の名。
【俱翅羅】コーキラ（Kokila）鵴鵑鳥と譯す。
【婆嘻伽】鴿鵠と譯す。
【一四】是より一衆無數を明す。
【一五】是より所召の比丘比丘尼を明す。
【阿僧祇】アサンクヤ（Asamkhya）の音譯。無數と譯す。印度の數名。
【熙連河】ヒラニヤヴチー（Hiranyavati）古來跋提河と同一なりと云ふ説あり。
【摩訶迦葉】マハーカシヤパ（Mahakasyapa）大飲光と譯す。佛の十大弟子の一人。頭陀第一と稱せらる戒行を持して佛の遺教を守り第一結集の上首たり。

す。復、二十恆河沙等の四天下の中、諸の神仙人有り、忍辱仙等上首爲り。諸の華香及び諸の甘果を持ちて佛所に來詣して佛足に稽首し、佛を繞ること三帀して佛に白して言さく、『唯、願はくば世尊、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として許したまはず。時に諸の仙人、所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に坐す。

（一四）閻浮提の中の一切蠭王、妙音蠭王上首爲り。種種の華を持ちて佛所に來詣して佛足に稽首し、佛を繞ること一帀して、卻つて一面に住す。

（一五）爾の時に閻浮提中の比丘、比丘尼、一切皆集る。唯、尊者摩訶迦葉、阿難の二衆を除く。復、無量阿僧祇恆河沙等の世界の中間有り、及び閻浮提の有らゆる諸山、須彌山王上首爲り。其の山の莊嚴は、叢林翁蔚、枝葉茂盛にして、日光を蔭蔽す。種種の妙華周徧嚴飾し、龍泉、流水清淨香潔なり。諸天、龍神、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、神仙、咒術、作倡妓樂、是の如き等の衆其の中に彌滿す。是の諸の山神、亦佛に來詣し、佛足に稽首して卻つて一面に住す。復、阿僧祇恆河沙等の四大海神、及び諸の河神有り、大威德有り、大神足を具す。設くる所の供養前に倍勝す。諸神身光、伎樂燈明、悉く日月を蔽ひて、復現ぜざらしむ。古婆華を以て熙連河に散じ、佛所に來至し、佛足に稽首して、卻つて一面に住す。

（一六）爾の時に拘尸那城の娑羅樹林、其の林變じて、白きこと猶し白鶴の如し。虛空の中に於て、自然に七寶の堂閣有り。彫文刻鏤し、綺飾分明にして、周帀に欄楯あり衆寶雜廁せり。

【阿難】アーナンダ（Ananda）歡喜と譯す。佛の十大弟子の一人。佛の聞持第一と稱せらる。常に佛に常侍せり。
【一六】是より悲近召遠の文なり。
【白鶴】鶴林の語これより生ず。
【鬱單越國】須彌山を中心とした四大洲の中、北倶盧洲を云ふ。
【忉利】忉利天のこと。欲界の第二天。
【一七】是より所召の天神を明す。
【四天王】欲界の四王天に居り佛法を守護する四王。東方持國天、南方増長天、西方廣目天、北方多聞天。
【釋提桓因】帝釋天の異名。シャクラデーヹーンドラ（Sakradevendra）能天主と譯す。忉利天の天主にして四天王及他の三十二天を領す。

堂下に多く流泉、浴池有り。上妙の蓮華其の中に彌滿し、猶し北方、鬱單越國の如く、亦忉利の歡喜園の如し。爾の時に娑羅樹林の中間、種種の莊嚴、甚だ愛樂すべきこと、亦復是の如し。是の諸の天人、阿修羅等、咸く如來涅槃の相を覩、皆悉く悲感し、愁憂して樂まず。

（一七）爾の時に四天王、釋提桓因、各相謂つて言はく、「汝等觀察せよ。諸天世人、及び阿修羅、大いに供養を設けて最後に如來を供養せんと欲す。我等も亦、當に是の如く供養すべし。若我、最後に供養することを得ば、檀波羅蜜則ち成就滿足すること難からずと爲す」。爾の時に四天王の設くる所の供養前に倍勝す。曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、迦枳樓伽華、摩訶迦枳樓伽華、曼珠沙華、摩訶曼珠沙華、散多尼迦華、摩訶散多尼迦華、愛樂華、大愛樂華、普賢華、大普賢華、時華、大時華、香城華、大香城華、歡喜華、大歡喜華、發欲華、大發欲華、香醉華、大香醉華、普香華、大普香華、天金葉華、龍華、波利質多樹華、拘毘羅樹華を持ち、復、種種の上妙の甘膳を持ちて佛所に來至し、佛足に稽首す。是の諸の天人の有らゆる光明、能く日月を覆ひて復現ぜざらしむ。是の供具を以て佛に供養せんと欲す。如來、時を知りて默然として受けたまはず。爾の時に諸天、所願を果さず、愁憂苦惱して卻つて一面に住す。爾の時に釋提桓因及び三十三天、諸の供具を設くることも亦前に倍勝す。及び持する所の華も亦復是の如し。香氣微妙にして甚だ愛樂すべし。得勝堂幷に諸小堂を持して佛所に來至し、佛足に稽首して佛に白して言さく、「世尊、我等大乘を深樂

【檀波羅蜜】布施波羅蜜に同じ。布施の行。ダーナパーラミター(Dāna-pāramitā)

【一八】是より所召の梵衆を明す。

【梵衆】梵衆天とも云ふ。色界初禪天の第一。梵王の眷屬。

【一九】是より所召の阿修羅衆を明す

【毘摩質多】ヴェーマチトラ(Vemacitra)實錄と譯す四阿修羅の一。

し愛護す。唯、願はくば如來、我が食を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。時に諸の釋天所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。乃至第六天の設くる所の供養、展轉して前に勝る。寶幢、旛蓋あり、寶蓋小き者も四天下を覆ふ。旛最も短き者も四海を周圍す。幢最も下き者も自在天に至る。微風旛を吹きて妙音聲を出す。上甘膳を持して佛所に來詣し、佛足に稽首して佛に白して言さく、『世尊、唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。是の諸天等所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。

(一八)上有頂に至り、其の餘の梵衆一切來集す。爾の時に大梵天王、及び餘の梵衆、身の光明を放ちて四天下に徧うす。欲界の人天、日月の光明悉く復現ぜず。諸の寶幢、繒綵の旛蓋を持す。旛の極めて短き者も、梵宮に懸りて娑羅樹の間に至る。佛所に來詣し、佛足に稽首して佛に白して言さく、『世尊、唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。爾の時に諸梵所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。

(一九)爾の時に毘摩質多阿修羅王、無量の阿修羅大眷屬と俱なり。身の諸の光明梵天に勝る。諸の寶幢、繒綵の旛蓋を持す。其の蓋の小き者も千世界を覆ふ。上妙の甘膳佛所に來詣し、佛足に稽首し、佛に白して言さく、『唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。諸の阿修羅所願を果さず、心に愁惱を懷き、

【三〇】是より魔神を明す。
【魔王波旬】マーラパーピーヤ(Māra Pāpiya)魔は殺者障礙等と譯す。善法を妨げ功德を奪ふもの、波旬は又魔王の名にして又殺者等と譯す。
【他枳、咤咤羅侘枳云々】是は陀羅尼なり。意味不明。
【外道】佛教以外の諸宗教。異教邪宗の意。

卻つて一面に住す。

〔三〇〕爾の時に欲界の魔王波旬、其の眷屬諸天、婇女、無量無邊阿僧祇の衆と地獄の門を開きて淸淨水を施し、因つて告げて曰はく「汝等今者能く爲す所無し。唯、當に專ら如來、應供、正徧知を念じ、最後の隨喜供養を建立すべし。當に、汝等をして長夜に安を獲しむべし。」時に魔波旬、地獄の中に於て、悉く刀劍無量の苦毒を除き、熾然の焰火、雨を注ぎて之を滅す、佛の神力を以て復是の心を發す。諸の眷屬をして、皆刀劍、弓弩、鎧仗、矛矟、長鉤、金椎、鉞斧、鬪輪、羂索を捨てしむ。持する所の供養一切人天の設くる所に倍勝す。其の蓋小き者も中千界を覆ふ。佛所に來至し、佛足に稽首して佛に白して言さく「我等今者、大乘を愛樂し大乘を守護す。世尊、若し善男子、善女人有り、供養の爲の故に、怖畏の爲の故に、誑他の爲の故に、財利の爲の故に、隨他の爲の故に、是の大乘を受く。或は眞、或は僞ならん。我等爾の時に、當に是の人の怖畏を除滅せんが爲に、是の如きの呪を說くべし。「他枳、咤咤羅侘枳、盧呵隷、摩訶盧呵隷、阿羅、遮羅、多羅、娑呵。」是の呪能く諸の失心者、怖畏者、說法者、不斷正法者にして外道を伏するが爲の故に、己身を護らんが故に、正法を護らんが故に、大乘を護らしめんが故に、是の如きの呪を說く。若能く是の如きの呪を持する者有らば、惡象の怖無し。若曠野、空澤、險處に至るに怖畏を生ぜず。亦、水火、師子、虎狼、盜賊、王難無し。世尊、若能く是の如きの呪を持する者有らば、悉く能く是の如き等の怖を除滅せん。世尊、此の呪を持する者は、我當に之を護り、龜

【四部衆】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を云ふ。

【大自在天】マヘーシュヷラージヤ（Maheśvararāja）の譯。三目八臂の天神。

【梵釋】梵天と帝釋天とのこと。

【八部】八部衆とも云ひ、印度に於て天神鬼族の總稱に用ふ。天龍夜叉乾闥婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺羅伽を云ふ。

【三千大千世界】印度にては須彌山を中心として日月四天下等の世界を一世界と稱し、之を千個合したるを小千世界と云ひ、小千世界を千個合したるを中千世界と稱し、中千世界を千個合したるを大千世界と稱し、その大千世界を三千倍したるものを三千大千世界と云ふ宇宙の總稱なり

の六を藏するが如くすべし。世尊、我等今者、諛諂を以て是の如き事を說かず。是の呪を持する者は、我、當に至誠に其の勢力を益すべし。唯願はくば如來、我等が最後の供養を哀受したまへ。』爾の時、佛、魔波旬に告げて言はく、『我、汝の飲食供養を受けず、我、已に汝が說く所の神呪を受く。一切衆生、四部衆を安樂にせんと欲するが爲の故なり。』佛、是を說き已りて默然として受けたまはず。是の如く三請するに、皆亦受けたまはず。時に魔波旬所願を果さず、心に愁惱を懷き、卻つて一面に住す。爾の時に大自在天王、其の眷屬無量無邊、及び諸の天衆と設くる所の供具、悉く梵釋、護世四天王、人天、八部、及び非人等の有らゆる供具を覆ふ。梵釋の設くる所は、猶し聚墨の珂貝の邊に在るが如し。悉く復現ぜず。寶蓋小き者も、能く三千大千世界を覆ふ。是の如き等の供養の具を持して佛所に來詣して佛足に稽首し、繞ること無數帀して佛に白して言さく、『世尊、我等奉る所の微末の供具、猶し蚊蚋の我を供養するが如く、亦人有りて、一掬水を以て大海に投じ、一小燈を然じて百千の日を助け、春夏の月衆華茂盛なるに、一華を持して衆華に益すこと有り亭歷子を以て須彌山に益さんが如し。豈當に大海、日明、衆華、須彌を益すこと有るべきや。世尊、我今奉る所の微末の供具も亦復是の如し。若三千大千世界の中に滿つる香華、伎樂、旛蓋を以て如來に供養すとも、尚言ふに足らず、何を以ての故に如來諸の衆生の爲に、常に地獄、餓鬼、畜生の諸の惡趣の中に於て、諸の苦惱を受く。是の故に世尊、齊しく哀愍せられて、我等が供を受けたまへ。』

【二一】是より他の世界衆を明す。

【如來乃至佛世尊】如來の十號と稱し佛の尊號なり。如來より順次數へて世尊に至り、十一號となれども、普通前の十號を別號とし最後の世尊を總號と稱す。或は佛世尊を一にして數ふるものあり。前三は前に註す。

【明行足】眞理を證ることの明かなるを明と云ひ、戒定慧の三學を修むるを行と云ふ。如來は明行具足するを以てかく云はる。

【善逝】スガタ(Sugata)の譯。好去とも云ふ。如實の道を修して悟の彼岸に逝くものの意。

【世間解】ローカヴッド(Lokavid)知世間とも譯す。一切世間の事象を知るものの意。

(二二)爾の時に東方、此を去ること無量無數阿僧祇の恆河沙微塵等の世界、彼に佛土有り。意樂美音と名け、佛を虛空等、如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。爾の時に彼の佛、即ち第一の大弟子に告げて言はく、「善男子、汝今、宜しく西方の娑婆世界に往くべし。彼の土に佛有り。釋迦牟尼如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。彼の佛久しからずして、般涅槃したまふべし。善男子、汝此の世界の香飯を持すべし。其の飯香美にして、之を食すれば安隱、以て彼の佛世尊に奉獻すべし。世尊、食し已りて般涅槃に入りたまはん。善男子、幷に禮敬して所疑を請決すべし。」爾の時に無邊身菩薩摩訶薩、即ち佛教を受けて座より起ち、佛足に稽首して右に繞ること三帀し、無量阿僧祇の大菩薩衆と倶うて、彼の國より發して此の娑婆世界に來至す。時に應じて此の間三千大千世界、大地六種に震動す。是の衆中に於て、梵釋四王、魔王波旬、摩醯首羅、是の如きの大衆是の地動を見、身を擧げて毛竪ち、喉舌枯燥し、驚怖戰慄して各四散せんと欲す。自ら其の身を見るに、復光明無く、有らゆる威德悉く滅して餘り無し。是の時に文殊師利法王子、即ち座より起ちて諸の大衆に告ぐ、「諸の善男子、汝等懼るること勿れ。汝等懼るること勿れ。何を以ての故に。東方此を去ること無量無數阿僧祇の恆河沙微塵等の世界に一つの世界有り。意樂美音と名け、佛を虛空等如來、應供、正徧知と號す。十號具足す、彼に菩薩有り、無邊身と名け、無量の菩薩と此に來至して如來を供養せんと欲す。彼の菩薩の威德力を以

【無上士】アヌッタラ(Anuttara)の譯、無上最勝の人の意。
【調御丈夫】プルシャダミヤサーラティ(Purusadamyasarathi)衆生を調御する丈夫の意。
【天人師】シャースタデーヴァーマヌシャーナーム(Sastadevamanusyanam)の譯、天と人との教導師の意。
【佛】は佛陀(Buddha)の音譯。覺めたる人。覺者、知者の意。
【世尊】バガヴット(Bhagavat)の譯。尊師と云ふに同じ。
【婆婆世界】婆婆はサハ(Saha)の音譯にて堪忍土と譯す。この世界を云ふ。
【六種に震動】震天動地の大感動を表示する語。一般に六方に地の動くことを云ふ。

ての故に、汝が身光をして悉く復現ぜざらしむ。是の故に汝等、歡喜を生ずべし。恐怖を懐くこと勿れ。爾の時に大衆、悉く皆、遙に彼の佛の大衆を見るに、明鏡の中に、自ら己が身を觀るが如し。時に文殊師利、復大衆に告ぐらく、『汝今、彼の佛の大衆を見る所此の佛を見るが如し。佛の神力を以て、復當に是の如く、九方の無量の諸佛を見ることを得べし。』爾の時に大衆、各相謂つて言はく、『苦なる哉、苦なる哉。世間は虚空となり、如來は久しからずして當に般涅槃したまふべし。』

(二二)是の時に大衆一切、悉く無邊身菩薩、及び其の眷屬を見るに、此の菩薩の身、一一の毛孔、各各一つの大蓮華を出生す。一一の蓮華、各七萬八千の城邑有り、縱廣正等にして毗舍離城の如し。牆壁、諸塹七寶雜廁す。多羅寶樹七重に行列し、人民熾盛にして安隱豐樂なり。閻浮檀金、以て御簾と爲す。一一の御簾、各、種種の七寶の林樹有り、華果茂盛なり。微風吹動して微妙の音を出す。其の聲和雅にして猶し天樂の如く、城中の人民是の音聲を聞き、即時に上妙の快樂を受くることを得。是の諸塹の中に、妙水盈滿し、清淨香潔にして眞瑠璃の如し。是の諸水の中に、七寶の船有り。諸人之に乘じて遊戲し澡浴し、共に相娛樂し、快樂極り無し。復、無量の雜色の蓮華あり。優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。其の華縱廣、猶し車輪の如し。其の塹岸の上に多くの園林有り。一一の園中に五つの泉池有り。是の諸池の中に復諸華有り。優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華なり。其の華縱廣、亦車輪の如く、香氣芬馥にして甚だ愛樂すべし。其の水清淨

にして、柔軟第一なり。鳧鴈、鴛鴦其の中に遊戯す。其の園各衆寶の宮宅有り。一一の宮宅、縱廣正等にして四由旬に滿つ。有らゆる牆壁は四寶の成ずる所なり。所謂金、銀、瑠璃、頗梨、眞金の窻牖、欄楯を周帀す。玫瑰を地と爲し、金沙上に布く。是の宮宅の中、多く七寶の流泉、浴池有り。一一の池邊に各十八の黃金の梯陛有り。閻浮檀金を芭蕉樹と爲し、忉利天の歡喜園の如し。是の一一の城に各八萬四千の人王有り。一一の諸王に各無量の夫人、婇女有り。共に相娛樂し歡喜して樂を受く。其の餘の人民も亦復是の如し。各住處に於て共に相娛樂す。是の中の衆生は餘名を聞かず、純ら無上大乘の聲を聞く。是の諸華の中に、一一各師子の座有り。其の座の四足は皆紺瑠璃にして、柔軟の素衣、以て座上に布く。其の衣微妙にして三界に出過す。一一の座上に一王有りて坐し、大乘の法を以て衆生を敎化す。或は衆生有りて書持し讀誦し、說の如く修行す。是の如く大乘經典を流布す。爾の時に無邊身菩薩、是の如きの無量の衆生を放ちて自身に安止し、已りて世樂を捨てしむ。皆是の言を作さく『苦なる哉苦なる哉世間は虛空となり、如來は久しからずして當に般涅槃したまふべし。』と。

爾の時に無邊身菩薩、無量の菩薩に周帀圍繞せられ、是の如きの神通力を示現し已りて、是の種種の無量の供具、及び以上の妙香美の飮食を持す。若し是の食の香氣を聞くことを得ること有らば、煩惱の諸垢皆悉く消滅す。是の菩薩の神通力を以ての故に、一切の大衆悉く皆是の如きの變化を見ることを得。無邊身菩薩は身大無邊にして量虛空に同じ。唯、

【文殊師利】マンジュシュリー(Mañjuśrī)菩薩の名。妙吉祥、妙德等と譯す。普賢と一對となり釋尊の智慧を表示す。

【三】是より此見彼來を示す。

【閻浮檀金】ジャンブナダスヷルナ(Jambunadasuvarṇa)ジャンブは樹名ナダは江又は海の意。閻浮樹の下に流るる河の中に生ずる沙金を云ふ。黃金中最も良質なりと云はる。

【無上大乘】無上至極の佛の敎を云ふ。

【三】是より供不受を示す。
【十方】東西南北四維上下を云ふ。
【陀那婆神】ダーナヷット（Dānavat）有施と譯す。天神の名。
【一闡提】イッチヤーンテカ（Icchantika）の音譯略して闡提とも云ふ。斷善根、信不具足等と譯す。佛法を誹謗して出離解脱の可能性なきものを云ふ。
【無量壽佛】アミターユス（Amitāyus）の譯。普通阿彌陀佛と稱する佛是なり。
【極樂世界】スカーヷティー（Sukhāvatī）の譯にして樂有世界の意。阿彌陀佛の淨土なり

諸佛を除きて餘は、能く是の菩薩の身、其の量の邊際を見ること無し。爾の時に無邊身菩薩及び其の眷屬、設くる所の供養前に倍勝して佛所に來至す。佛足に稽首し、合掌恭敬して佛に白して言さく『世尊、唯願はくば哀愍して我等が供養を受けたまへ。』如來時を知りて默然として受けたまはず。是の如く三請するに、悉く亦受けたまはず。爾の時に無邊身菩薩及び其の眷屬、卻つて一面に住す。南、西、北方の諸佛世界も亦、無量の無邊身菩薩有り、持する所の供養前に倍勝す。佛所に來至し乃至卻つて一面に住す。皆亦是の如し。

(三三)爾の時に娑羅雙樹、吉祥福地、縱廣三十二由旬、大衆充滿して間に空缺無し。爾の時に四方の無邊身菩薩及び其の眷屬、所坐の處、或は錐頭、針鋒、微塵の如し。十方微塵の如き等の諸佛世界の諸大菩薩、悉く來りて集會す。及び閻浮提の一切の大衆も亦悉く來集す。唯、尊者、摩訶迦葉、阿難の二衆、阿闍世王及び其の眷屬を除きて、乃至毒蛇の、視れば能く人を殺すと、蛣蜣蝮蠆及び十六種の惡業を行ずる者と一切來集す。陀那婆神、阿修羅等悉く惡念を捨て、皆慈心を生ず。父の如く、母の如く、姉の如く、妹の如く、三千大千世界の衆生、慈心相向ふことも亦復是の如し。一闡提を除く。

爾の時に三千大千世界、佛の神力を以ての故に。地皆柔軟にして丘墟、土沙、礫石、荊棘、毒草有ること無く、衆寶莊嚴すること、猶し西方、無量壽佛の極樂世界の如し。是の時に大衆、悉く十方微塵の如き等の諸佛世界を見ること明鏡に自ら己身を觀るが如く、諸佛の土を見ることも亦復是の如し。

【二四】 瑞相を結す

【二五】 機縁解語を示す。

(二四)爾の時に如來の面門、出す所の五色の光明、其の光明かに耀きて諸の大會を覆ふ。彼の身光をして悉く復現ぜざらしめ、作すべき所已りて、還りて口より入る。

(二五)時に諸の天人、及び諸の會衆、阿修羅等、佛の光明の還りて口より入るを見て、皆大いに恐怖し、身毛竪を爲す。復是の言を作さく『如來の光明出で已りて還つて入る。因緣無きに非ず。必ず十方に於て作す所已に辨じ、將に是の最後に、涅槃せんとするの相ならんは何ぞ其れ苦しき哉、何ぞ其れ苦しき哉。如何ぞ世尊、一旦四無量心を捨離して人天所奉の供養を受けず、聖慧日光、今より永く滅し、無上の法船斯に沈沒す。嗚呼痛しき哉世間大いに苦なり』と。手を擧げ胸を椎ちて悲號啼哭す。支節戰動して自ら持すること能はず。身の諸の毛孔血を流して地に灑く。

【純陀品】この品は優婆塞純陀が釋尊に供養せることを明す。

【一】純陀の獻供を明す。

【純陀】チュンダ(Cunda)妙義と譯す。釋尊が最後の供養をうけたる人のこと。

【善果】善き果報のこと。

【刹利】刹帝利とも云ふ。クシャトリヤ(Kṣatriya)の音譯。印度に於ける四姓の一。武士階級なり。

【婆羅門】ブラフマン(Brahman)の音譯。四姓中の僧族を云ふ。

【毗舍】ヴイシャ(Vaisya)四姓中の商人その他一般民を云ふ。

大般涅槃經 卷第二

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

純陀品第二

（一）爾の時、會中に優婆塞有り。是拘尸城の工巧の子なり、名を純陀と曰ふ。其の類十五人と倶なり。世間をして善果を得しめんが爲の故に身の威儀を捨てて座より起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝を地に著け、合掌して佛に向ひ悲感流涙して佛足を頂禮し、佛に白して言さく、『唯願はくば世尊及び比丘僧、哀みて我等が最後の供養を受けたまへ。無量の諸の衆生を度せんが爲の故に。世尊、我等今より主無く、親無く、救無く、護無く、歸無く、趣無く、貧窮饑困ならん。如來に從ひて將來の食を求めんと欲す。唯願はくば哀みて我等が微供を受け、然して後涅槃したまへ。世尊、譬へば刹利若は婆羅門、毗舍、首陀、貧窮を以ての故に遠く他國に至るに、役力農作して好調牛を得、良田平正にして諸の沙鹵、惡草、荒穢無く、唯天雨を希ふが如し。調牛と言ふは身口の七を譬へ、良田平正は智慧を譬へ、沙鹵、惡草、荒穢を除去するは、煩惱を除くに譬ふ。世尊、我今身に調牛、良田有り、衆穢を耘除す。唯、如來の甘露の法雨を希ふ。貧の四姓とは即ち我が身是なり。無上の法

【首陀】スードラ(Sūdra)四姓中の最下級たる奴隷階級を云ふ。

【身口の七】十惡の中、身業の三と口業の四とを加へて七とす。身業の三とは殺盜婬の三惡。口業の四とは妄語、兩舌、惡口綺語の四惡を云ふ。

【二】釋尊純陀の供養を受け給ふ事を明す。

【一切種智】諸法實相の眞理を證り得て、無明の闇を破する佛智を云ふ。茲には佛の尊稱に用ふ。

【無上調御】無上絶對なる調御丈夫の意にて佛の尊稱に用ゐらる。

【壽命色力安樂無閡辯才】以上の五を五果と云ふ。この五の常住なるを常の五果となす。常命は無始無終にして死滅なきを云ひ、常色は非色に云

の財寶に貧し。唯、願はくば哀愍して、我等の貧窮、困苦を除斷し、無量の苦惱の衆生に拯ひ及したまへ。我今、供する所は復微少なりと雖も、冀はくば如來、大衆に充足することを得ん。我今主無く、親無く、歸無し。願はくば矜憫を垂るること羅睺羅の如くなしたまへ。』

(二)爾の時に世尊、一切種智、無上調御、純陀に告げて曰はく『善い哉善い哉、我今汝が爲に貧窮を除斷し、無上の法雨を汝が身田に雨して、法芽をして生ぜしめん。汝今、我に於て壽命と色と力と、安樂と無閡辯才とを求めんと欲す。我當に、汝に常の命と色と力と安と、無閡辯とを施すべし。何を以ての故に。純陀、施食に二つの果報無差なる有り。何等をか二つと爲す。一つには受け已けて阿耨多羅三藐三菩提を得。二つには受け已りて涅槃に入る。我今、汝が最後の供養を受けて汝をして檀波羅蜜を具足せしめん。』

(三)爾の時に純陀、即ち佛に白して言さく、佛の所説の如き、二施の果報差別無しとは、是の義然らず。何を以ての故に、先の受施者は煩惱未だ盡きず、未だ一切種智を成就することを得ず。亦、未だ衆生をして檀波羅蜜を具足せしむること能はず。後の受施者は、煩惱已に盡き、已に一切種智を成就することを得、能く衆生をして、普く檀波羅蜜を具足することを得しむ。先の受施者は猶是衆生、後の受施者は是天中天なり。先の受施者は猶是雜食身、煩惱身、是後邊身、是無常心なり。後の受施者は無煩惱身、金剛身、法身、常身、無邊身なり。云何ぞ而るを二施の果報等しくして差別無しと言はん。先の受施者は未だ檀

波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足すること能はず。唯肉眼を得て、未だ佛眼乃至慧眼を得ず。後の受施は、已に檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足し、肉眼、乃至慧眼を具足することを得。云何ぞ而るを二世の果報等しくして差別無しと言はん。世尊、先の受施は、受け已りて之を食し、腹に入りて消化して命を得、色を得、力を得、安を得、無閡辯を得。後の受施は、食せず、消せず、五事の果無し。云何ぞ而るを、二世の果報等しくして差別無しと言はんや。』

(四)佛の言はく、『善男子、如來已に無量無邊阿僧祇劫に於て、食身、煩惱の身有ること無く後邊身無し。常身、法身、金剛の身なり。善男子、未だ佛性を見ざる者、煩惱身、雜食の身、是後邊身と名く。菩薩、爾の時に飯食を受け已りて金剛三昧に入る。此の食消し已りて即ち佛性を見、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に我、「二世の果報等しくして差別無し」と言ふ。菩薩、爾の時に四魔を破壞す。今涅槃に入り、亦四魔を破す。是の故に我、「二施の果報等しくして差別無し」と言ふ。菩薩、爾の時に廣く十二部經を說かずと雖も、先より已に通達す。今涅槃に入り、廣く衆生の爲に分別して演說す。是の故に我、「二施の果報等しくして差別無し」と言ふ。善男子、如來の身、已に無量阿僧祇劫に於て飲食を受けず諸の聲聞の爲に、說きて「先に難陀、難陀波羅の二牧牛女の、奉する所の乳糜を受け、然して後に乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得」と言ふ。我實は食せず。我今、普く此の會の大衆の爲に。是の故に汝が最後に奉する所を受け、實は亦食せず。』

即し、法身の謂なり。常力は窮盡なき力を云ひ、常安樂は安閑不動にして變異なきを云ひ、常無閡辯才とは一切の我に被るに無緣の慈悲普く法益を施すを云ふ。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌッタラサンミヤクサンボディ（Anuttarasamyaksambodhi）無上正偏智と譯す。無上絕對なる佛の智慧、佛の德に名く。

【三】二施について純陀難問す。

【二施】一は釋尊成道の直前に於ける難陀、難陀波羅の二少女の乳糜の供養を云ひ、二は釋尊の涅槃の直前に於ける純陀の供養を云ふ。

【雜食身、煩惱身、後邊身、無常身】以上を有漏の四身と云ふ。未だ正覺を得ざる煩惱の身

(五)爾の時に大衆、佛世尊の、普く大會の爲に、哀みて純陀が最後の供養を受けたまふを聞きて歡喜踊躍し、聲を同じうして讃じて言はく「『善い哉善い哉、希有なり純陀。汝今字を立て、名虚しく稱せず。純陀と言ふは解妙義と名く。汝今是の如きの大義を建立す。是の故に實に依り義に從ひて名を立つ、故に純陀と名く。汝今現世に大なる名と、利と、德と、願とを滿足することを得。甚だ奇なり純陀、生れて人中に在り、難得無上の利を得。善い哉純陀、優曇華の世間に希に有るが如し。佛の世に出づることも亦復甚だ難し。佛に値ひて信を生じ、法を聞くこと復難し。佛の涅槃に臨み最後に供養し、能く此の事を辦ずるは復是よりも難し。南無純陀、南無純陀、汝今已に檀波羅蜜を具す。猶し秋月十五日の夜、清淨圓滿にして諸の雲翳無く、一切衆生瞻仰せざること無きが如し。汝も亦是の如く我等に瞻仰せらる。佛已に汝が最後の供養を受けて、汝をして檀波羅蜜を具足せしむ。南無純陀、是の故に汝を「月の盛滿、一切衆生の瞻仰せざること無きが如し」と說く。南無純陀、人身を受くと雖も、心佛心の如し、汝今純陀、眞に是佛子羅睺羅の如く、等しうして異ること有ること無し。』」

爾の時に大衆、即ち偈を說きて言はく、

汝人道に生ずと雖も、已に第六天を超ゆ
我及び一切衆、今故に稽首して請ず
人中の最勝尊、今當に涅槃に入りたまふべし

なり。

【無頒滿身、金剛身法身、常身、無邊身】以上を無漏の五身と云ふ。正覺を得たる佛の身なり。

【般若波羅蜜】六度の一。六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪、智慧の六種の行。般若波羅蜜は智慧波羅蜜なり。

【佛眼】五眼の一。佛の智慧をさす。

【慧眼】五眼の一。空の理をさとりたる智慧。

【五事の果】前にあぐる命色等の五果を云ふ。

【四】佛純陀の難に答へ給ふ文。

【佛性】本來自性清淨なる眞如法性を云ふ。佛たるの性能なり。

【金剛三昧】金剛の能く一切に無碍なる如く、一切法に通達し能く變ぜざる定を云ふ。

【四魔】煩惱、陰死、天の四魔を云ふ。何れも正道を妨ぐるものなり。
【十二部經】釋尊所說の聖典をその內容より大別して十二に分ちたるもの。一契經（修多羅 Sūtra）二孤起頌（伽陀 Gāthā）三重頌（祇夜 Geya）四授記（和伽羅 Vyākaraṇa）五無問自說（優陀那 Udāna）六因緣（尼陀那 Nidāna）七譬喩（阿波陀那 Avadāna）八方廣（毗佛略 Vaipulya）九本性（闍多伽 Jātaka）一〇本事（伊帝目多 Itimuttaka）一一未曾有（阿浮達摩 Adbhutadharma）一二論義（優婆提舍 Upadeśa）
【難陀、難陀波羅】釋尊が苦行林を出でて尼連禪河に浴し、將に菩提樹のもとに至らんとするときに乳糜を供

汝應に我等を憫み、唯願はくば速かに
佛に、久しく世間に住して、無量の衆を利益し
智所讃、無上甘露の法を演說したまへ。と請ぜ
汝若佛を請ぜずば、我が命將に全からざらんとす
是の故に爲に、調御師に稽首するを見るべし

(六)爾の時に純陀、歡喜踊躍すること、譬へば人有りて父母卒に喪し、忽然として還活するが如し。純陀の歡喜することも亦復是の如し。復起ちて佛を禮し、偈を說きて言さく、

快い哉己の利を獲、善く人身を得
貪恚等を除し、永く三惡道を離る
快い哉己の利を獲、金寶聚を遇得し
調御師に値遇して、畜生に墮することを懼れず
佛は優曇華の如く、値遇して信を生ずること難し
遇ひ已りて善根を修し、永く餓鬼の苦を滅したまふ
亦復能く、阿修羅の種類を損減したまふ
芥子を針鋒に投ず、佛の出でたまふ是よりも難し
我已に檀を具足して、人天の生死を度す
佛の世法に染したまはざる、蓮華の水に處るが如し

善く有頂の種を斷じ、永く生死の流を度る
世に生じて人と爲ること難く、佛世に値ふことも亦難し。
猶し大海の中に、盲龜の浮孔に遇ふが如し
我今食を奉する所は、願はくば無上の報を得て
一切の煩惱結、摧破して堅固無し
我今此處に於て、天人の身を求めず
設使之を得る者も、心亦甘樂ならず
如來我が供を受けたまへば、歡喜量有ること無し
猶し伊蘭の華の、栴檀の香を出さんが如し
我が身は伊蘭の如し、如來我が供を受けたまふ
栴檀香を出すが如し、是の故に我歡喜す
我今現報、最勝上妙の處を得
釋梵諸天等、悉く來りて我を供養す
一切諸の世間、悉く大苦惱を生ず
佛世尊、今涅槃に入りたまはんと欲するを知るを以て
高聲に是の言を唱ふ、世間に調御無し
衆生を捨つべからず、視ること一子の如くせらるべし

養せる二少女。ナンダ(Nanda)難陀波羅(Nandabala)

【五】如來の住世を講ずる文。

【優曇華】ウヅムバラ(Udumbara)の音譯。靈瑞華と譯す。如來又は轉輪聖王の出世する時に開くと云はる

【南無】歸命と譯す。茲善哉の意に用ゐらる。

【第六天】欲界の頂なる第六他化自在天なり。第六天を超ゆれば梵天に等し。

【人中の最勝尊】釋尊をさす。

【調御師】調御丈夫に同じ。釋尊に對する敬語。

【六】瞻請の文をあぐ。

【貪恚等】貪瞋癡の三大煩惱。

【三惡道】地獄、餓鬼、畜生の三道は惡の果によつて生ずる所なるを以て惡道と稱す。

【煩惱結】煩惱も結も同意、心身を惱亂する精神作用を煩惱と云ひ、心身を纏縛する故煩惱を結と云ふ。

【伊蘭】エーランダ(Eranda)樹名。極めて臭氣强く花は紅色にして美なるも之を食へば狂死すと云ふ。

【現報】現在世に得たる果報。

【須彌寶山】須彌山に同じ。この世界の中央にある大山。

【七】是より請を遮す。

【諸佛の境界】佛の證りの心境、佛と佛とのみ知り給ふ境地を云ふ。

【諸行性相】生滅變化すべき諸の有爲法の本體と差別の形相。約言すれば現象界の諸象と云ふが如し。

【三界】欲界色界無色界の三。迷の世界を云ふ。

如來僧中に在りて、無上の法を演說したまふ
須彌寶山の、大海に安處するが如し
佛智能善く、我等が無明の闇を斷じたまふ
猶し日出づる時、雲を除き光普く照すが如し
如來能善く、一切諸の煩惱を除きたまふ
猶し虛空の中、雲起りて清涼を得るが如し
是の諸の衆生等、戀慕して悲慟を増し
悉く皆生死の、苦水に漂はさる
是を以ての故に世尊、衆生の信を長じ
生死の苦を斷ぜんが爲に、久しく世間に住したまふべし

(七)佛、純陀に告げたまはく「是の如く是の如し、汝が所說の如し。佛の出世の難きこと優曇華の如し。佛に値ひて信を生ずるも、亦復甚だ難し。佛の涅槃に臨み、最後に食を施して、能く檀を具足すること、倍す復甚だ難し。汝今純陀、大いに愁苦すること莫れ。應當に歡喜し、深く自ら、最後に如來を供養するに値ふことを得、檀波羅蜜を成就し具足することを慶幸すべし。佛に久しく世に住せられんを請ふべからず。汝今當に諸佛の境界を觀ずべし。悉く皆無常なり。諸行性相も亦復是の如し。」卽ち純陀の爲に、偈を說きて言はく、

一切の諸の世間、生ずる者は皆死に歸す

【諸有】二十五有をさす。生滅變化すべき諸現象を云ふ。

壽命無量と雖も、要必ず終盡有り
夫盛なる必ず衰ふること有り、合會は別離有り
壯年久しく停らず、盛色病に侵さる
命死に呑まれ、法の常に住する有ること無し
諸王の自在を得、勢力等しく雙ぶ無きも
一切皆遷滅す、壽命も亦是の如し
衆苦は輪際無く、流轉して休息無し
三界皆常無く、諸有悉く樂に非ず
道は本性相有り、一切皆空無なり
可壞の法流轉して、常に憂患等有り
恐怖の諸の過惡、老病死衰惱す
是の諸邊有ること無く、壞し易くして怨に侵さる
煩惱に纒裹せらるること、猶し蠶の繭に處するが如し
何の智慧有る者ぞ、當に是の處を樂むべき
此の身は苦の集る所、一切皆不淨なり
扼縛癰瘡等、根本は義利無し
上諸天の身に至りて、皆亦復是の如し

【八】純陀重請の文。

【結漏】結も漏も共に煩惱の異名。

【九】是より傍論の文。文殊と純陀と如來の有爲無爲を論ず。

【空三昧】諸法皆空の眞理に住する禪定。

諸欲は皆常無し、故に我貪著せず
欲を離れて善く思惟し、眞實の法を證す
究竟じて有を斷ずる者は、今日當に涅槃すべし
我有の彼岸に度り、一切の苦を出過す
是の故に今者に於て、唯上妙の樂を受く

（八）爾の時に純陀、佛に白して言さく、「世尊、是の如し是の如し。誠に聖言の如し。我今所有の智慧微淺にして、猶し蚊蚋の如し。何ぞ能く如來涅槃深奥の義を思議せん。世尊、我今已に、諸大龍象の菩薩摩訶薩の諸の結漏を斷ぜること、文殊師利法王子に等し。世尊、譬へば幼年初めて出家を得る、未だ戒を具せずと雖も、即ち僧數に隨するが如し。我も亦是の如し。佛、菩薩の神通力を以ての故に、是の如きの大菩薩の數に在ることを得。是の故に我今如來をして、久しく世に住して、涅槃に入らざらしめんと欲す。譬へば饑人の、終に變吐無きが如し。唯願はくば世尊も、亦復是の如く、常に世に住して入涅槃したまはざれ。」

（九）爾の時に文殊師利法王子、純陀に告げて曰はく、「純陀、汝今是の如きの言を發して、如來をして常に世に住して、般涅槃せざらしめんと欲すること、彼の饑人の變吐有ること無きが如くなるべからず。汝今當に諸行性相を觀ずべし。是の如くに行を觀ずれば、空三昧を具す。正法を求めんと欲せば、是の如くに學すべし。」

【煩惱魔】四魔の一。煩惱はよく身心を惱害するを以て魔と云ふ。
【陰魔】又蘊魔とも云ふ。色等の五蘊はよく種々の苦惱を生ずるが故に魔と云ふ。
【天魔】又他化自在天魔とも云ふ。他化自在天はよく人の善事を害するを以て魔と云ふ。
【死魔】死はよく人の命根をたつを以て魔と云ふ。

純陀問うて言はく、「文殊師利、夫如來は天上人中に最尊最勝なり。是の如きの如來は、豈是行ならんや。若是行ならば生滅の法と爲ん。譬へば水泡の、速かに起り、速かに滅するが如く、往來流轉すること猶し車輪の如し。一切の諸行も亦復是の如し。我聞く、諸天は壽命極長と。云何ぞ世尊、是天中天にして壽命更に促んで百年を滿たざらん。聚落主の如き勢自在を得。自在力を以て能く他人を制す。是の人福盡きて其の後貧賤に、人に輕蔑せられ、他に策使せらる。所以は何ん。勢力を失するが故なり。世尊も亦爾なり。諸行に同じうす。諸行に同じうすれば卽ち稱して天中天と爲すことを得ず。何を以ての故に。諸行は卽ち是生死の法の故なり。是の故に文殊、如來を觀じて諸行に同じうすること勿れ。復次に文殊、知りて說くと爲ん。知らずして說きて、而も如來諸行に同じと言ふや。設使如來を諸行に同じうすれば、卽ち三界の中に於て、天中の天、自在法王と爲すと言ふことを得ず。譬へば人王に大力士有らん。其の力千に當り、更に能く之を降伏する者有ること無し。故に此の士一人當千と稱す。是の如きの力士は、王の愛念する所、偏に爵祿を賜ふ。封賞自然なり。千人に當ると稱することを得る所以は、是の人未だ必ずしも力千に敵せず、但種種の技藝所能の能く千に勝るを以ての故に、當千と稱するが如し。如來も亦爾なり。煩惱魔、陰魔、天魔、死魔を降す。是の故に如來を三界尊と名く。彼の力士の一人、當に千に當るが如し。是の因緣を以て、種種無量の眞實功德を成就し具足す。故に如來、應供、正徧知と稱す。文殊師利、汝今憶想分別して、如來法を以て諸行に同じうすべからず。譬

【梵天】ブラフマ(Brahma)の譯。色界の諸天神。

【慧眼】眞理を透見する智慧を云ふ。

【有爲】有爲法(サンスクリタダルマ Saṃskṛta-dharma)即ち生滅變化すべき諸象。

【無爲】無爲法(アサンスクリタダルマ Asaṃskṛta-dharma)即ち生滅變化なき平等常住の法を云ふ。

へば巨富の長者子を生じ、相師之を占ふに短壽の相有り。父母聞き已りて、其の家嗣を紹繼するに任へざるを知り、復愛重せず、之を視ること草の如くするが如し。夫短壽者は、亦復沙門、婆羅門、男女、大小に敬念せられず。若如來をして、諸行に同じうせしめば、亦復一切世間の人天衆生に奉敬せられず。如來の所說は不變、不異、眞實の法なり。亦受者無し。是の故に文殊、說きて「如來一切の諸行に同じ」と言ふべからず。

復次に文殊、譬へば貧女の如し。居家救護の者有ること無し、加ふるに復病苦、饑渴に逼められて遊行、乞匃し、他の客舍に止り、一子を寄生す。是の客舍の主驅逐して去らしめ、是の兒を擕抱して他國に至らんと欲す。其の中路に於て惡風雨に遭ひ、寒苦並び至る。多く蚤虱、蜂螫、毒蟲に唼食せらる。恆河を經由し兒を抱きて度る。其の水漂疾なれども而も放捨せず。是に於て母子遂に共倶に沒す。是の如きの女人、慈念の功德にて、命終の後梵天に生ず。文殊師利、若善男子有りて、正法を護らんと欲せば、「如來、諸行に同じ、諸行に同じからず」と說くこと勿れ。唯當に自ら責むべし、「我今愚癡にして、未だ慧眼あらず」と。如來の正法は思議すべからず。是の故に如來、定んで、是有爲、定んで是無爲と演說すべからず。若正見は「如來、定んで是無爲」と說くべし。何を以ての故に。能く衆生の爲に善法を生ずるが故に。憐愍心を生ずるが故なり。彼の貧女の、恆河に在りて子を愛念するが爲に、身命を捨つるが如し。善男子、護法の菩薩も、亦是の如くなるべし。寧ろ身命を捨つとも、如來、有爲に同じと說かず。當に如來、無爲に同じと言ふべし。如

【忉利天】欲界三十三天を云ふ。帝釋天の君臨する天國なり。

【轉輪王】チヤクラヴァルティラージヤ（Cakravarti-rāja）の譯。世界に君臨する大王を云ふ。輪王又は轉輪聖王とも云ふ。

【三十二相】三十二大人相とも云ふ。佛の具へ給ふ三十二の相好、印度に於ける人相說である。在家にありては轉輪聖王となり、出家しては如來となる相なりと云ふ。

【一〇】文殊師利純陀を讃ず。

來、無爲に同じと說くを以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を得。彼の女人の梵天に生ずることを得るが如し。何を以ての故に。護法を以ての故なり。云何が護法。謂ゆる說きて「如來、無爲に同じ」と言ふ。善男子、是の如きの人、解脫を求めずと雖も、解脫自ら至る。彼の貧女の、梵天を求めざれども、梵天自ら應ずるが如し。文殊師利、人遠行し、中路に疲極して他舍に寄止す。臥寐の中に、其の室忽然として大火卒かに起る。即時に驚寤し、尋いで自ら思惟すらく「我今に於て定んで死せんこと疑はじ」と。慙愧を具ふるが故に、衣を以て身を纏ひ、即便命終して忉利天に生ず。是より已後、八十反を滿ちて大梵王と作り、百千世を滿ちて人中に生じ、轉輪王と爲る。是の人復三惡趣に生ぜず。展轉して常に安樂の處に生ずるが如し。是の緣を以ての故に、文殊師利、若善男子、慙愧有らば佛を觀じて諸行に同じうすべからず。文殊師利、外道邪見は、如來、有爲に同じと說くべし。持戒の比丘、是の如く如來の所に於て、有爲の想を生ずべからず。若如來、是有爲と言はば、即ち是妄語。當に知るべし、是の人死して地獄に入ること、人自ら己が舍宅に處るが如くならん。文殊師利、如來眞實に是無爲の法。復是有爲と言ふべからざるなり。汝今日より生死の中に於て、無知を捨てて正智を求むべし、當に如來、即ち是無爲と知るべし。若能く是の如く如來を觀ずる者は、具足して常に三十二相を得、疾く阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。

（一〇）爾の時に文殊師利法王子、純陀を讃じて言はく「善い哉善い哉、善男子、汝今、已に長

【八十種好】八十隨形好ともいふ。三十二相に附隨せる八十の細相なり

【十八不共の法】佛陀特有の十八種の德、他の二乘善薩と共にせざる德一に身に失無し、二に口に失なし、三に念に失なし、四に異想なし、五に不定心無し、六に不知已捨なし、七に欲に減なし、八に精進に減なし九に念に減なし、十に慧に減なし、十一に解脫に減なし、十二に解脫知見に減無し、十三に一切の身業智慧に隨ひて行ふ、十四に一切の口業智慧に隨ひて行ふ、十五に一切の意業智慧に隨ひて行ふ、十六に智慧過去世を知ること無碍なり、十七に智慧未來世を知ること無碍なり、十八に智慧現在世を知ること無碍なり。

壽の因緣を作す。能く如來は是常住の法、不變異の法、無爲の法と知る。汝今、是の如く善く如來の有爲の相を覆ふ。火を被る人、慙愧の爲の故に、衣を以て身を覆ふ。是の善心を以て忉利天に生じ、復、梵王、轉輪聖王と爲り、惡趣に至らず、常に安樂を受くるが如し。汝も亦是の如し。善く如來の有爲の相を覆ふが故に、未來世に於て、必ず定んで當に三十二相、八十種好を得、十八不共の法を具足し、無量の壽命、生死に在らず、常に安樂を受け、久しからずして應正徧知と成ることを得べし。純陀、如來、次後に自ら當に廣く說くべし。我と汝と倶に、亦當に如來の有爲を覆ふべし。有爲、無爲且く共に之を置かん。汝、時に隨つて速かに飯食を施すべし。是の如く施すは諸施中の最なり。若、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、遠行疲極して須ふる所の物、應當に淸淨に、時に隨ひて給與すべし。是の如く速かに施すは、卽ち是、具足檀波羅蜜の根本種子なり。純陀、若し最後に佛及び僧に施す有らば、若は多、若は少、若は足、不足、宜しく速かに時に及ぶべし。如來正爾に當に般涅槃したまふべし。』純陀の言はく、『文殊師利、汝今何が故ぞ、此の食を貪爲して多少と足不足と、我をして時に施さしむるを言ふや。文殊師利、如來、昔日苦行したまふこと六年、尙自ら支持したまふ。況んや今日須臾の間に於てをや。文殊師利、汝今、實に如來正覺斯の食を受けたまふと謂ふや。然るに我定んで知りぬ、如來の身は卽ち是法身、食身と爲すに非ざることを。』

（一一）爾の時に佛、文殊師利に告げたまはく、『是の如し是の如し、純陀の言の如し。善い哉純

【二】如來の印讃及悦可の文。

【悦可】稱美し許可すること。

【倒想】顚倒せる考へ。

【金翅鳥】妙翅鳥とも云ふ。翅金色にして兩翅の廣さ三百六萬里、須彌山の下層に住し、常に龍を取つて食となす。梵音カルダ（迦樓羅 Karuḍa）

陀、汝已に微妙の大智を成就し、善く甚深の大乘經典に入れり。』文殊師利、純陀に語りて言はく『汝、如來は是無爲者、如來の身は卽ち是長壽と謂ふ。若、是の知を作さば佛に悦可せられん。』純陀答へて言はく『如來は獨我を悦可したまふに非ず。亦復一切衆生を悦可したまふ。』文殊師利の言はく『如來、汝及以び我等一切衆生に於て、皆悉く悦可したまはん。』純陀答へて言はく『汝、如來悦可したまふと言ふべからず。夫悦可とは、則ち是倒想なり。若倒想有らば、則ち是生死なり。生死有らば卽ち有爲の法なり。是の故に文殊、如來は是有爲と謂ふこと勿れ。若、如來は是有爲と言はば、我と仁者と倶に顚倒を行ず。文殊師利、如來は愛念の想有ること無し。夫愛念は、彼の乳牛の其の子を愛念し、復饑渇して、行きて水草を求むと雖も、若は足、不足にして、忽然として還歸するが如し。諸佛世尊は是の念有ること無く、等しく一切を視たまふこと羅睺羅の如し。是の如く念ずる者、卽ち是諸佛の智慧境界なり。文殊師利、譬へば國王の調御駕駟の馳せんと欲するに、驢乘の之に及ばしむるは、是の處有ること無きが如し。我と仁者とも亦復是の如し。如來の微密深奧を盡さんと欲すとも、亦是の處無し。文殊師利、金翅鳥の虛空を飛昇すること無量由旬なるに、大海を下觀して、悉く水性の魚鼈、黿鼉、龜龍の屬を見、及び己影を見、明鏡に於て諸の色像を見るが如し。凡夫の少智は、是の如きの所見を籌量すること能はざるが如し。我と仁者とも亦復是の如し。如來の智慧を籌量すること能はず。』文殊師利、純陀に語りて言はく『是の如し是の如し、汝の所說の如し。我、此の事に於て達せずと爲すに

【一二】文殊最後の供養を奉獻すべきを說く。

【五體】右膝、左膝、右手、左手、頭首の五。五輪とも云ふ。この五體を地に投ずるを敬禮の最上とす。

【一三】釋尊有爲法の無常を說く。

非ず。直、汝が諸の菩薩事を試みんと欲す。』

（一二）爾の時に世尊、其の面門より種々の光を出したまふ。其の光、明かに曜きて文殊の身を照す。文殊師利、斯の光に遇ひ已りて即ち是の事を知りぬ。尋いで純陀に告ぐらく、『如來、今者是の瑞相を現じたまふ。久しからずして必ず當に涅槃に入りたまふべし。汝、先に設くる所の最後の供養は、宜しく時に佛に奉獻し、大衆に及ぼすべし。純陀當に知るべし、如來是の種種の光明を放ちたまふこと、因緣無きに非ざることを。』純陀、聞き已りて悲塞默然す。佛、純陀に告げたまはく、『汝、佛及び大衆に奉施する所、今正に是時なり。如來正爾、當に般涅槃すべし』と。第二第三も亦復是の如し。爾の時に純陀、佛語を聞き已りて、聲を擧げて號哭し、悲咽して言さく、『苦なる哉苦なる哉、世間は虛空なり』と。復、大衆に白さく、『我等今者、一切當に共に五體を地に投じ、同聲に佛を勸めて般涅槃したまふこと莫からしむべし。』

（一三）爾の時に世尊、復純陀に告げたまはく、『大いに啼哭して自ら其の心を亂すこと莫れ。當に是の身は猶し芭蕉、熱時の炎、水沫、幻、化、乾闥婆城の如く、坏器、電光、亦水に畫くが如く、死に臨むの囚、熟果段肉、織の經の盡くるが如く、碓の上下するが如しと觀ずべし。當に諸行は猶し雜毒の食の如く、有爲の法は諸の過患多きを觀ずべし。』

是に於て純陀、復佛に白して言さく、『如來、久しく世に住したまふことを欲せず。我當に云何ぞ啼哭せざるべき。苦なる哉苦なる哉世間は虛空なり。唯願はくば世尊、我等及び

諸の衆生を哀憫して、久しく世に住して般涅槃したまふこと勿れ。」佛、純陀に告げたまはく「汝今、是の如き言を發すべからず。我を哀憫するが故に久しく世に住せよ。我、汝及び一切を哀憫するを以て、是の故に今日涅槃に入らんと欲す。何を以ての故に。諸佛の法爾なり、有爲も亦然なり。是の故に諸佛は是の偈を說きたまふ。

有爲の法は、其の性無常なり
生じ已りて住せず、寂滅を樂と爲す

純陀、汝今當に一切行雜、諸法無我、無常、不住を觀ずべし。此の身は多く無量の過患有り、猶し水泡の如し。是の故に汝今啼泣すべからず。」

(一四)爾の時に純陀、復佛に白して言さく、是の如し是の如し。誠に尊敎の如し。如來、方便示現して涅槃に入りたまふと知ると雖も、而も我憂惱を懷かざること能はず。覆うて自ら思惟して、復慶悅を生ず。佛、純陀を讃すらく、善い哉善い哉。能く如來、衆生に示同して方便涅槃したまふを知る。汝今當に聽くべし。娑羅娑鳥、春陽の月、皆共に彼の阿耨達池に集るが如し。諸佛も亦爾なり、皆是の處に至る。純陀、汝今諸佛の長壽、短壽を思惟すべからず。一切の諸法は皆幻相の如し。如來中に在りて、方便力を以て染著する所無し。何を以ての故に。諸佛の法も爾なり。純陀、我今汝が獻る所の供養を受け、汝をして、生死の諸有の流を度脫せしめんと欲するが爲の故なり。若し諸の人天、此に於て最後に我を供養せん者は、悉く皆當に不動の果報を得、常に安樂を受くべし。何を以ての故に。我は

【一四】純陀領解の文。

【娑羅娑鳥】サラーサ（Sarasa）の音譯。鴻鳥なり。

【阿耨達池】無熱と譯す。アナヷタプタ（Anavatapta）の音譯。地名。贍部洲の中心、香山の南、大雪山の北に在り。周り八百里。金銀瑠璃等其岸を飾れり。金沙彌漫して清波皎鏡なり。八地の菩薩願力を以ての故に化して龍王となり中に潜宅せり。清冷水を出して贍部洲に給すと西域記に在り。

【福田】田は生長を以て義とす。應に供養すべき者に於て之を供養すれば能く福報を受く農夫の田に播種して秋收穫の利を得るが如し。

【一五】純陀辨供の文。

【聲聞緣覺】之を二乘と云ふ。聲聞とは佛の聲教をきき四諦の理をさとり煩惱を斷ずるもの。緣覺とは佛の聲教によらず自ら十二因緣の理をさとりて煩惱を斷ずるもの。共に大乘の菩薩に比して智慧淺薄にして、自利の行人とせらる。

【哀歎品】此の品は純陀及諸比丘如來の般涅槃を哀歎するに對して、如來凡夫の四顚倒を說き、無我有我を宣說し給、ふ章なり。

是衆生の良福田なるが故なり。汝苦復、諸の衆生の爲に福田と作らんと欲せば、速かに所施を辨ぜよ。久しく停るべからず。」

（一五）爾の時に純陀、諸の衆生の度脫を得るが爲の故に、頭を低れ涙を飲みて佛に白して言さく『善い哉世尊、我若福田と爲るに堪任せん時、則ち能く如來の涅槃及び非涅槃を了知せん。我等今者及び諸の聲聞、緣覺の智慧、猶し蚊蚋の如く、實に如來の涅槃及び非涅槃を量ること能はず。』爾の時に純陀及び其の眷屬、愁憂啼泣して如來を圍繞し、香を燒き華を散じ、心を盡して敬奉し、尋いで文殊と座より去りて食具を供辨す。

哀歎品第三

（一）純陀去り已りて未だ久しからざる頃、是の時に此の地六種に震動す。乃至梵世も亦復是の如し。地動に二つ有り。或は地動有り、或は大地動あり。小しく動ずる者を名けて地動と爲し、大いに動ずる者を大地動と名く。小聲有る者を名けて地動と曰ひ、大聲有る者を大地動と（名く）。獨地動する者を名けて地動と曰ひ、山林、河海、一切動ずる者を大地動と名く。一向に動ずる者を名けて地動と曰ひ、周囘旋轉するを大地動と名く。動くを地動と名け、動く時能く衆生をして心を動ぜしむるを大地動と名く。菩薩初、兜率天より閻浮提に下る時を大地動と名く。初生出家より阿耨多羅三藐三菩提を成じ、法輪を轉じ、及び

【一】此より此の土の聲聞衆に對す。

【兜率天】欲界の第四天。一生補處の菩薩は必ず此の天に在り、次に此の閻浮提に下生して八相成道をなす。

【二】正請の文。

【調御師】調御丈夫に同じ。釋尊をさす。

【人仙】人中の仙人間中の聖者と云ふ意。釋尊をさす。

般涅槃するを大地動と名く。今日如來、將に涅槃に入りたまはんとす。是の故に此の地是の如く大いに動ず。

〔二〕時に諸の天、龍、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人及び非人、是の語を聞き已りて身毛皆竪ち、同聲に哀泣して偈を說きて言さく、

稽首す調御師、我等今勸請す
人仙に遠離し、永く救護有ること無し
今佛の涅槃を見、我等苦海に沒す
悲戀して憂惱を懷き、犢の其の母を失ふが如し
貧窮にして救護無きこと、猶し困病人の
醫無ければ自心に隨ひて、應ぜざる所の食を食するが如し
衆生煩惱の病、常に諸見に害せられ
法の醫王に遠離し、邪毒の藥を服食す
是の故に佛世尊、遺捨を見るべからず
國に君主無ければ、人民皆饑饉するが如し
我等も亦是の如し、蔭及び法味を失ふ
今佛の涅槃を聞き、我等の心迷亂す
彼の大地動に、諸方を迷失するが如し

【旃陀羅】印度四姓の最も下賤なる種族にして暴惡、殺者、屠者、賤民等と譯す。

大仙涅槃に入り、佛日地に墮ち
法水悉く枯涸す、我等定めて當に死すべし
如來の般涅槃、衆生極めて苦惱す
譬へば長者子の、新に父母を喪ふが如し
如來涅槃に入り、如其還りたまはざれば
我等及び衆生、悉く救護有ること無けん
如來涅槃に入り、乃至諸の畜生
一切皆愁怖し、苦惱して其の心を焦す
我等今日に於て、云何ぞ愁惱せざらん
如來放捨を見ること、猶し涕唾を棄つるが如し
譬へば日の初めて出でて、光明甚だ暉炎なり
既に能く還りて自ら照し、亦一切の闇を滅するが如し
如來の神通光、能く我が苦惱を除きたまふ
大衆の中に處在すこと、譬へば須彌山の如し
世尊、譬へば國王諸子を生育し、形貌端正にして、心に常に愛念す。先に技藝を教へて悉く通利せしめ、然して後、之を棄てて旃陀羅に付せんが如し。世尊、我等今日法王の子と爲り、佛の教誨を蒙るに、已に正見を具す。願はくば放捨したまふこと莫れ。如其放

捨せらるれば、卽ち王子に同じからん。唯願はくば久住して、涅槃に入りたまはざれ。世尊、譬へば人有りて善く諸論を學し、復此の論に於て怖畏を生ずるが如し。如來も亦爾なり。諸法に通達して、而も諸法に於て亦怖畏を生ず。若、如來をして久しく世に住して、甘露味を說きて一切に充足せしめたまはば、是の如きの衆生は、則ち復地獄に墮することを畏れず。

世尊、譬へば人有りて、初、作務を學び、官の爲に收められ、之を囹圄に閉ぢん。人有りて之に問ふ「汝、何事を受くる。」答へて「我今、大憂苦を受く。若其脫することを得ば則ち安樂を得ん」と言はんが如し。世尊も亦爾なり。我等が爲の故に、諸の苦行を修したまふ。我等今者、猶未だ生死苦惱を免るることを得ず。云何ぞ如來安樂を受けたまふことを得ん。

世尊、譬へば醫王の善く方藥を解し、偏へに祕方を以て其の子に敎授して、其の餘の外受學の者に敎へざるが如し。如來も亦爾なり。獨甚深祕密の藏を以て、偏へに文殊に敎へ我等を遺棄して顧憫せられず。如來、法に於て祕吝して、彼の醫王の、偏へに其の子を敎へて外より來る諸の受學の者を敎へざるが如くなること無かるべし。彼の醫の苦ろに敎ふること能はざる所以は、情に勝負を存するが故に祕惜有り。如來の心は終に勝負無し。何が故ぞ是の如く敎誨を見ざる。唯願はくは久住して、般涅槃したまふこと莫れ。

世尊、譬へば老、少、病、苦の人の、夷塗を捨遠して險道を行くに、險道多難備さに衆苦を受く。更に異人有り、見て之を愍み、卽便示すに平坦の好路を以てするが如し。世尊

【二十五有】衆生の流轉する生死界を分ちて二十五にせるもの。有は因果不亡の義。因によりて必ず果を得るものなり。四洲(四有)四惡趣(四有)六欲天(六有)梵天(一有)無想天(一有)五那含天(一有)四禪天(四有)四空處天(四有)の稱なり。

【三】如來の答。

【若は空不空】以下十五の雙句あり。

我も亦是の如し。言ふ所の少とは、未だ法身を增長せざるの人を譬ふ。言ふ所の老とは、重煩惱を譬ふ。言ふ所の病苦とは、未だ生死を脫せざるを譬ふ。言ふ所の險道とは、二十五有を譬ふ。唯願はくは如來、我等に甘露の正道を示導して、久しく世に住して涅槃に入りたまふこと勿れ。』

(三)爾の時に世尊、諸の比丘に告げたまはく、『汝等比丘、凡夫、諸の天人等の如く、愁憂啼哭すること莫れ。當に勤めて精進して、繫心正念すべし。』時に諸の天人、阿修羅等、佛の所說を聞きて、止して啼哭せず。猶し人有りて其の愛子を喪ひ、殯送已に訖りて抑止して哭せざるが如し。』

爾の時に世尊、諸の大衆の爲に是の偈を說きて言はく、

汝等當に意を開くべし、大いに愁苦すべからず
諸佛の法皆爾なり、是の故に當に默然すべし
不放逸行を樂ひ、心を守りて正憶念し
諸の非法を遠離して、自ら慰めて歡樂を受けよ

『復次に比丘、若疑惑有らば、今皆當に問ふべし。若は空不空、若は常無常、若は苦不苦、若は依非依、若は去不去、若は歸非歸、若は恆非恆、若は斷若は常、若は衆生非衆生、若は有若は無、若は實不實、若は眞不眞、若は滅不滅、若は密不密、若は二不二、是の如き等の種種法の中、疑ふ所有らば今應に咨問すべし。我當に隨順して、汝が爲に之を斷ずべ

【八難】佛を見ず正法を聞くを得ざるを難と云ふ。これに八種あり。地獄、畜生、餓鬼の三趣にあるものは苦劇しくして法をきくを得ず。長壽天、北洲にあるものは樂しみ多くして法を聞くことを得ず。盲聾瘂瘖世智辯聰は世智あるが故に法を聞くを得ず。佛前佛後にあるものは佛に遭はず法をきくことを得ず。この八種を八難とす。

【結使】結は心身を結縛する義、使は心身を驅使する義。煩惱の異名。

【我今現在】この一節は眞の三寶を示す。我は佛寶、大衆和合は僧寶、如來法性は法寶なり又法寶の中三點を具す。如來は般若、法性は法身、不倒は解脫。この三を秘密藏と名け一切法を藏す。

し。亦當に汝が爲に、先に甘露を說き、然して後に乃ち當に涅槃に入るべし。

諸の比丘、佛の出世は難し。人身得難く。佛に値うて信を生ずる、是の事も亦難し。能く忍び難きを忍ぶ、是も亦復難し。禁戒を成就し、具足して缺くこと無くして阿羅漢果を得る、是の事も亦難し。金を沙に求むるが如く、優曇鉢華のごとし。諸の比丘、八難を離れて人身を得ること難し。

汝等、我に遇ひて空しく過ぐべからず。我、往昔に於て種種に苦行し、今是の如きの無上の方便を得。汝等が爲の故に、無量劫の中、身、手足、頭目、髓腦を捨つ。是の故に汝等放逸すべからず。汝等比丘、云何が正法の寶城を莊嚴する。種種の功德珍寶を具足し、戒定智慧以て牆塹と爲す。汝今、是の佛法の寶城に遇ふ。此の虛僞の物を取るべからず。譬へば商主の眞寶城に遇ひ、諸の瓦礫を取りて、便ち家に還るが如し。汝も亦是の如し。寶城に値遇して虛僞の物を取る。汝諸の比丘、下心を以て知足を生ずること勿れ。汝等今者、出家を得と雖も、此の大乘に於て貪慕を生ぜず。汝諸の比丘、身に袈裟、染衣を服することを得と雖も、心猶未だ大乘の淨法に染まらず。汝諸の比丘、乞食を行じて多處を經歷すと雖も、初べて未だ曾て大乘の法食を求めず。汝諸の比丘、鬚髮を除くと雖も、未だ正法の爲に諸の結使を除かず。汝諸の比丘、今當に眞實に汝等を教勅すべし。我今現在、大衆和合し、如來法性、眞實にして不倒なり。是の故に汝等應當に精進し、攝心勇猛にして諸の結使を摧き、十力慧日既に潛沒し已らば、汝等當に無明に覆るべし。諸

【十力慧日】十力は佛の智德にして慧日は佛の智慧を日に譬へしもの。

【伊字の三點】梵字の伊の字は三點ありて縱ならず横ならず不竝不別にして之を如來の三德秘密藏に喩ふ。

【摩醯首羅】大自在天のこと。三目八臂ありて白牛に乘ず。

【四】比丘の疑執を明す文。

【無常苦空無我】小乘佛教の根本教條にして、外道の常樂我淨に執するを破す。

の比丘、譬へば大地、諸山、藥草、衆生の用と爲るが如し。我が法も亦爾なり。妙善甘露の法味を出生して、而も衆生の種種の煩惱病の良藥と爲す。我今、當に、一切衆生及び我が諸子、四部の衆をして悉く皆祕密藏の中に安住せしむべし。我も亦復當に是の中に安住して涅槃に入るべし。何等をか名けて祕密の藏と爲す。猶し伊字の三點の如し。若竝べば則ち伊を成さず、縱も亦成さず。摩醯首羅の面上の三目の如くにして、乃ち伊を成すことを得。三點若別なるも亦成すことを得ず。我も亦是の如し。解脫の法も亦涅槃に非ず、如來の身も亦涅槃に非ず、摩訶般若も亦涅槃に非ず。三法各異なるも亦涅槃に非ず。我今是の如きの三法に安住して、衆生の爲の故に涅槃に入ると名く。世の伊字の如し。」

(四)爾の時に諸の比丘、佛世尊の定んで當に涅槃したまふべきを聞きて、皆悉く憂愁し、身毛竪を爲し、涕泗交も流る。佛足に稽首し、繞ること無量币し、佛に白して言さく、「世尊快く無常、苦、空、無我を說きたまふ、世尊、譬へば一切衆生の、迹の中象迹を上と爲すが如し。是の無常想も亦復是の如し。諸想の中に於て最も第一と爲す。若精勤に之を修習する者有らば、能く一切の欲界の貪愛、色無色の愛、無明憍慢、及び無常想を除く。世尊、如來若無常想を離るれば、今則ち涅槃に入るべからず。若離れざれば、云何ぞ說きて「無常想を修すれば三界の愛、無明、憍慢、及び無常想を離る」と言ふや。世尊、譬へば農夫、秋月の時に於て、深く其の地を耕して、能く穢草を除くが如し。是の無常想も亦復是の如し。能く一切の欲界の貪愛、色無色の愛、無明憍慢、及び無常想を除く。世尊、譬へ

ば田を耕すに秋耕を上と爲すが如く、諸迹の中象迹を勝と爲すが如く、諸想の中に於て無常を最と爲す。世尊、譬へば帝王の命將に終らんとするを知りて、天下の獄囚繫閉を恩赦し、悉く脫するを得しめて、然して後に命を捨つるが如し。如來今者も亦是の如くなるべし。諸衆生の一切の無知無明の繫閉を度し、皆解脫せしめて然して後に涅槃したまへ。我等今者皆未だ度を得ず、云何ぞ如來、卽ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。世尊、譬へば人有りて鬼に持へられんに、良呪師に遇ひ呪力を以ての故に、便ち除差を得るが如し。如來も亦爾なり。諸の聲聞の爲に無明の鬼を除き、摩訶般若解脫等の法をして、世の伊字の如くなるに安住することを得しむ。世尊、譬へば香象の、人に縛せられんに、良師有りと雖も禁制すること能はず、頓に羈鎖を絕ちて自ら恣にして去るが如し。我未だ是の如く五十七煩惱の繫縛を脫せず、云何ぞ如來、便ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。世尊、人瘧を病み、良醫に値遇して苦む所を除くことを得るが如し。我も亦是の如し。諸の患苦、邪命、熱病多し。如來に遇ふと雖も病未だ除愈せず、未だ無常の安隱常樂を得ず。云何ぞ如來、便ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。世尊、譬へば醉人の自ら覺知せず、親疏、母女、姉妹を識らず、迷荒淫亂、言語放逸、不淨の中に臥す。時に良師有り、藥を與へて服せしめ、服し已りて卽ち吐き、還りて自ら憶識して心に慙愧を懷き、深く自ら克責し、酒を不善諸惡の根本と爲す。若能く除斷すれば、則ち衆罪を遠くるが如し。世尊、我も亦是の如し。往昔已來生死に輪轉して、情色に醉はされ、五欲を貪嗜す。

【五十七煩惱】煩惱を五十七種に數へしもの。

【五欲】色聲香味觸の五境、卽ち五官に感ぜらるゝ外界を云ふ。これらは人の欲を引き起すが故に欲と名づく。

【五】執を破し疑を除くの文。

非母母想、非姉姉想、非女女想、非衆生に於て衆生想を生ず。是の故に輪轉して生死の苦を受く。彼の醉人の不淨の中に臥するが如し。如來、今當に我に法藥を施して、我をして煩惱の惡酒を還吐せしむべし。我未だ醒寤の心を得ず。云何ぞ如來、便ち放捨して涅槃に入りたまはんと欲する。

世尊、譬へば人有りて、芭蕉樹を嘆じて以て堅實と爲すも、是の處有ること無きが如し。世尊、衆生も亦爾なり。若我、人、衆生、壽命、養育、知見、作者、受者、是眞實と歎ぜんに、亦是の處無し。我等是の如く無我想を修す。世尊、譬へば漿滓の復用ふる所無きが如し。是の身も亦爾なり。我無く主無し。世尊、七葉華の香氣有ること無きが如し。是の身も亦爾なり、無我無主なり。我等是の如く心常に無我の想を修習す。佛の所說の如く、一切諸法は我我所無し。汝諸の比丘、應當に修習すべし。是の如く修し已らば則ち我慢を除く。我慢を離れ已りて便ち涅槃に入る。世尊、譬へば鳥迹の空中に現ずとは、是の處有ること無きが如し。能く無我想を修習する者有りて、而も諸見有らば亦是の處無し。』

(五)之 爾の時に世尊、諸の比丘を讃じたまはく『善い哉善い哉、汝等善能く無我想を修す。』時に諸の比丘、卽ち佛に白して言さく『世尊、我等但、無我想を修するのみならず、更に其の餘の諸想を修習す。所謂苦想、無常、無我想なり。世尊、譬へば人醉ひて其の心眩亂し諸の山川、城郭、宮殿、日月、星辰皆悉く回轉するを觀るが如し。世尊、若苦、無常想、無我等の想を修せざるあらば、是の如きの人は、名けて聖と爲さず。諸の放逸多けれ

ば生死に流轉す。世尊、是の因緣を以て、我等善く是の如きの諸想を修す。」爾の時に佛、諸の比丘に告げて言はく、「諦かに聽け諦かに聽け。汝向に引く所の醉人の譬は、但文字を知りて未だ其の義に達せず。何等をか義と爲す。彼の醉人の、上の日月の、實は回轉に非ざるを見て回轉の想を生ずるが如し。衆生も亦爾なり。諸の煩惱無明に覆はるるが爲に顚倒心を生じて我を無我と計し、常を無常と計し、淨を不淨と計し、樂を計して苦と爲し、煩惱に覆はるるを以ての故に、此の想を生ずと雖も、其の義に達せず。彼の醉人の非轉處に於て轉想を生ずるが如し。

我とは即ち是佛の義、常とは是法身の義、樂とは是涅槃の義、淨とは是法の義なり。汝等比丘、云何ぞ而も「我想有るは憍慢貢高にして生死に流轉す」と云ふや。汝等、我も亦無常、苦、空、無我等の想を修習すと云ふが如きは、是の三種の修實義有ること無し。我今當に勝の三修法を說くべし。苦なる者を樂と計し、樂なる者を苦と計す。是顚倒の法なり。無常を常と計し、常を無常と計す。是顚倒の法なり。無我を我と計し、我を無我と計す。是顚倒の法なり。不淨を淨と計し、淨を不淨と計す。是顚倒の法なり」是の如き等の四顚倒の法有り。是の人正しく諸法を修することを知らず。汝諸の比丘、苦法の中に於て樂想を生じ、無常の中に於て常想を生じ、無我の中に於て我想を生じ、不淨の中に於て淨想を生ず。世間も亦常、樂、我、淨有り。出世も亦常、樂、我、淨有り。世間法は字有りて義無く、世出間は字有り義有り。何を以ての故に。世間の法に四顚倒有り、故に義を知らず・

所以は何ん。想顚倒、心倒、見倒有り。三倒を以ての故に、世間の人樂の中に苦を見、常に無常を見、我に無我を見、淨に不淨を見る。是を顚倒と名く。顚倒を以ての故に、世間字を知りて而も義を知らず。何等をか義と爲す。無我とは卽ち生死、我とは卽ち如來、無常とは聲聞、緣覺、常とは如來法身、苦とは一切外道、樂とは卽ち是涅槃、不淨とは卽ち有爲法、淨とは諸佛菩薩の所有の正法なり。是を不顚倒と名く。不顚倒を以ての故に字を知り義を知る。若四顚倒を遠離せんと欲せば、是の如きの常、樂、我、淨を知るべし。』

(六)時に諸の比丘、佛に白して言さく『世尊、佛の所說の如く四倒を離るれば、卽ち常、樂、我、淨を了知することを得。如來は今者、永く四倒無ければ、卽ち已に常、樂、我、淨を了知したまふ。若已に常、樂、我、淨を了知せば、何が故ぞ住まること一劫半劫して、我等を敎導して四倒を離れしめたまはざる。而も放捨せられて涅槃に入らんと欲したまふ。如來若し顧念の敎勅を見ば、我當に、至心に頂受して修習すべし。如來若當に涅槃に入りたまふべくば、我等云何ぞ是の毒身と同じく共に止住して梵行を修せん。我等も亦當に佛世尊に隨ひて涅槃に入るべし。』

(七)爾の時に佛、諸の比丘に告げたまはく『汝等、是の如きの語を作すべからず。我今有らゆる無上正法を、悉く以て摩訶迦葉に付囑す。是の迦葉は、當に汝等の爲に大依止と作るべし。猶し如來の、諸の衆生の爲に依止處と作るが如し。摩訶迦葉も亦復是の如し。當に汝等が爲に依止處と作るべし。譬へば大王の統領する所多く、若し遊巡の時は悉く國事を

【想顚倒心倒見倒】此の三倒古來異說あり。一に曰く、想受行の三蘊に對すと。一に曰く、凡て心有りて境を緣ずれば心倒、次に想像は想倒、能く識別するは見倒なりと。一に曰く初心の妄計は心倒、心緣想を成ぜば想倒、相成じて永く執するは見倒なりと。

【六】偏行を破するの文。

【梵行】梵は淸淨の義。菩薩修道の淨行を云ふ。

【七】如來正法を迦葉に附屬し、無我有我を說き給ふ文。

【摩訶迦葉】マハーカーシャパ(Mahākāśyapa)大飲光と譯す。釋尊十大弟子の一。頭陀第一と稱せらる。

以て大臣に付囑するが如し。如來も亦爾なり。所有の正法も亦以て摩訶迦葉に付囑す。汝等當に知るべし。先より修習する所の無常、苦想は是眞實に非ず。譬へば春時諸人等有り、大池に在りて浴す。船に乘りて遊戲し、瑠璃寶を失ひて深水の中に沒す。是の時に諸人、悉く共に水に入りて是の寶を求覓し、競ひて瓦石、草木、砂礫を捉へ、各各自ら「瑠璃珠を得」と謂ひて歡喜して持ち出すに、乃ち眞に非ざるを知る。是の時に寶珠猶水中に在り、珠力を以ての故に水皆澄清す。是に於て大衆、乃ち寶珠の猶水中に在るを見ること、猶し仰ぎて虛空の月形を觀るが如し。是の時に衆中に一りの智人有り。方便力を以て安徐として水に入り、即便珠を得るが如し。汝等比丘、是の如く無常、苦、無我想、不淨想等を修習して、以て實義と爲すこと、彼の諸人の各瓦石、草木、砂礫を以て寶珠と爲すが如くなるべからず。汝等、應當に善く方便を學して、在在處處に常に我想、常樂淨想を修すべし。復當應に先より修習する所の四法の相貌、悉く是顚倒と知り、眞實に諸想を修することを得んと欲せん者、彼の智人の、巧に寶珠を出すが如くすべし。所謂我想、常樂淨想なり。」爾の時に諸の比丘、佛に白して言さく「世尊、佛先に諸法無我なり、汝當に修學すべし。是を修學し已らば、則ち我想を離る。我想を離るれば、則ち憍慢を離る。憍慢を離るれば、涅槃に入ることを得と說きたまふが如き、是の義云何。」佛、諸の比丘に告げたまはく「善い哉善い哉、汝今善能く是の義を咨問して、自ら疑を斷ぜんと爲す。譬へば國王の闇鈍少智なるに、一りの醫師有り、性復頑嚚、而も王別たずして厚く俸祿を賜ふ。

【八種の術】一に治身、二に治眼、三に治胎、四に治小兒、五に治瘡、六に治毒、七に治邪、八に治星。今如來の八正道よく八倒の病を治するに喩ふ。

【四十八年】外道に就學するもの給侍の年時を四十八年とするの說なり。

衆病を療治するに純ら乳藥を以てす。亦復病起の根原を知らず。乳藥を知ると雖も、復善く風冷、熱病を解せず。一切の諸患に悉く乳を服するを教ふ。是の王、是の醫乳の好醜、善惡を知るを別たず。復明醫有り。八種の術を曉り、善く衆病を療し、諸の方藥を知り、遠方より來る。是の時に舊醫咨受を知らず。反つて貢高輕慢の心を生ず。彼の時明醫即便依附し、請じて以て師と爲し、醫方祕奧の法を咨受す。舊醫に語りて言はく、「我今仁を請じて以て師範と爲す。唯願はくば我が爲に宣暢、解說せよ。」舊醫答へて言はく、「卿、今若能く我が爲に給使すること四十八年せば、然して後に乃ち當に汝に醫法を教ふべし。」時に彼の明醫、即ち其の教を受け、「我、當に是の如くすべし。我、當に是の如くすべし。我が所能に隨ひて當に走使を給すべし。」是の時に舊醫、即ち客醫を將て共に入りて王に見ゆ。是の時に客醫、即ち王の爲に種種の醫方、及び餘の技藝を說く、「大王當に知るべし。善く分別すべし。此の法は是の如し、以て國を治すべし。此の法は是の如し、以て病を療ずべし。」爾の時に國王、此の語を聞き已りて、方に舊醫の癡闇無智を知り、即便驅逐して國界を出さしめ、然して後に倍す復客醫を恭敬す。是の時に客醫是の念言を作さく、「王を教へんと欲せば、今正に是時なり。」即ち王に語りて言さく、「大王、我に於て實に愛念せば、當に一つの願を求むべし。」即ち答へて言はく、「此の右臂より餘の身分に及ぶまで、意の求むる所に隨ひて一切相與へん。」彼の客醫の言さく、「王、我に一切の身分を許すと雖も、然も我、敢て多く求むる所有らず。今求むる所は、王、一切國內に宣令せんことを願ふ。今よ

【辛苦鹹甜酢】これを五味と云ふ。

り已往、復舊醫の乳藥を服することを得ざれ。所以は何ん。是藥の毒害傷損多きが故に。若故服する者は、當に其の首を斬るべし。乳藥を斷じ已らば、終に復橫死の人有ること無く、常に安樂に處せん。故に是願を求む。」時に王、答へて言さく「汝の求むる所は蓋し言ふに足らず。尋で爲に一切國內に宣令せん、凡そ諸の病人、皆悉く乳を以て藥と爲すを聽さず。若藥と爲す者は、當に其首を斬るべし。」爾の時に客醫、衆藥を和合す。辛、苦、鹹、甜、酢等の味を謂ふ。以て衆病を療するに、差ゆることを得ざる無し。其後久しからずして王復病を得。乃ち是の醫を命ず「我今病困、當に云何が治すべき。」醫、王の病を占ふに、乳藥を用ふべし。尋で王に白して言さく「王の患ふる所の如きは、應當に乳を服すべし。我先時に於て乳藥を斷ずる所は、是實語に非ず。今若服すれば、最も能く病を除く。王今熱を患ふ。正に乳を服すべし。」時に王、醫に語らく「汝今狂するか、熱病と爲んや。而も乳を服すれば、能く此の病を除くと言ふ。汝先に毒と言ふ、今云何ぞ服せしむ。我を欺かんと欲するか。先醫の讃ずる所を、汝是毒と言ひ、我をして驅遣せしめ、今復好にして、最も能く病を除くと言ふ。汝の言ふ所の如きは、我が本の舊醫、定んで汝に勝ると爲ん。」是の時に客醫、復王に語りて言さく「王今、是の如きの語を作すべからず。蟲の木を食して字を成す者有り。此の蟲是字、非字を知らず。智人之を見て、是の蟲字を解すと唱言せず、亦驚怪せざるが如し。大王、當に知るべし、舊醫も亦爾なり。諸病を別たずして悉く乳藥を與ふ。彼の蟲道の偶字を成すことを得るが如し。是の先の舊醫乳藥の好醜、

善惡を解せず。」時に王、問うて言はく、「云何が解せざる。」客醫、王に答ふ、「是の乳藥は亦是毒害、亦是甘露。」「云何が是の乳、復甘露と名く。」「若是の乳牛、酒糟、滑草、麥麩を食せず、其の犢調善、放牧の處高原に在らず、亦下溼ならず。飲ますに清水を以てし馳走せしめず、特牛と共に一羣を同じうせず。飲食調適、行住所を得。是の如きの乳は能く諸病を除く。是即ち名けて甘露の妙藥と爲す。是の乳を除き已りて、其の餘の一切は皆毒害と名く。」

爾の時に大王、是の語を聞き已りて讃じて言はく、「大醫、善い哉善い哉、我今日より始めて乳藥の善惡、好醜を知り、即便之を服して病除癒するを得たり。」尋時に一切國内に宣令せん、「今より已往、當に乳藥を服すべし。」國人之を聞きて皆瞋恨を生じ、咸く謂つて言はく、「大王、今者鬼に持へらる。是狂と爲すや。我等を誑して復乳を服せしむ。」一切人民皆瞋恨を懷きて、悉く王の所に集る。王の言はく、「汝等我に於て瞋恨を生ずべからず。此の如きの乳藥、服と不服とは悉く是醫敎、是我が咎に非ず。」爾の時に大王及び諸の人民、踊躍歡喜し、倍す共に是の醫を恭敬、供養す。一切病者、皆乳藥を服して病悉く除愈するが如し。汝等比丘、當に知るべし。如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊も亦復是の如し。大醫王と爲りて世に出現し、一切の外道、邪醫を降伏したまふ。諸王衆中、是の如きの言を唱へたまふ、「我醫王と爲り、外道を伏せんと欲す。」故に是の言を唱ふ、「我無く、人、衆生壽者、養育知見、作者受者無し」と。

比丘當に知るべし、是の諸の外道の我を言ふ所は、蟲の木を食して偶字を成すが如くなるのみ。是の故に如來、佛法の中に於て、唱へて無我と言ふ。衆生を調へんが爲の故に、時を知るが爲の故なり。是の如きの無我、因緣有るが故に、亦有我と說く。彼の良醫の、善く乳の是藥、非藥を知るが如し。凡夫の吾我を計する所の如きに非ず、凡夫、愚人の我を計する所の者、或は說きて言ふ有り「大いさ拇指の如し」或は「芥子の如し」或は「微塵の如し」と。如來の我を說く、悉く是の如くならず。是の故に說きて「諸法無我」と言ふ。實は無我に非ず。何者か是我、若法是實、是眞、是常、是主、是依、性は變易せず。是を名けて我と爲す。彼の大醫の善く乳藥を解するが如し。如來も亦爾なり。衆生の爲の故に諸法の中眞實に我有りと說く。汝等四衆、應當に是の如く是の法を修習すべし。」

【長壽品】此品は如來戒律を護持して長壽の業を得たることを宣說す。
【一】佛戒律につき比丘に勸問す。
【富人】如來を譬へしもの。
【百斤の金】百何解脫を譬へしものなりと云ふ。

大般涅槃經 卷第三

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

長壽品第四

(一)佛、復諸の比丘に告げたまはく「汝、戒律に於て疑ふ所有らば、今汝が問を恣にせよ。我當に解說して、汝が心をして喜ばしむべし。我已に一切諸法の本性の、空寂を修學して明了に通達す。汝等比丘、如來のみ唯諸法の本性の空寂を修す」と。復、比丘に告げたまはく「若戒律に於て疑ふ所有らば、今悉く問ふべし。」時に諸の比丘、佛に白して言さく「世尊、我等智慧の能く如來、應供、正徧知に問ふこと有ること無し。所以は何ん。如來の境界は思議すべからず。有らゆる諸定は思議すべからず。演ぶる所の敎誨は思議すべからず。是の故に我等の智慧の、能く如來に問ふこと有ること無し。世尊、譬へば老人の年百二十なる、身長病に嬰りて牀席に寢臥し、起居すること能はず。氣力虛劣にして餘命幾も無きが如し。一りの富人有り。緣事に行かんと欲し、當に他方に至るべきに、百斤の金を以て彼の老人に寄せて是の言を作さく「我今他行す。是の寶物を以て持用つて相寄す。或は十年を經、或は二十年、事畢りて當に還るべし。還らん時に我に歸せ。」是の老病

【年二十五】二十五三昧を譬ふと云ふ。

【阿難】アーナンダ(Ananda)慶喜と譯す。釋尊常隨の弟子にして十大弟子の一人、多聞第一の稱あり。

人卽便之を受く。而も此の老人復繼嗣無し。其の後、久しからずして病篤くして命終し、寄する所の物悉く皆散失す。財主行より還りて求索するに所無し。是の如きの癡人、所寄の可不を籌量することを知らず。是の故に行より還りて求索するに所無し。是の因緣を以て財寶を喪失するが如し。世尊、我等聲聞も亦復是の如し。如來の殷勤の敎戒を聞くと雖も、受持して久住することを得しむること能はざること、彼の老人の他の寄付を受くるが如し。我今無智にして、諸の戒律に於て、當に何の問ふ所なるべき。』佛、比丘に告げたまはく『汝等今者若し我に問はば、卽ち能く一切衆生を利益せん。是の故に汝に諸有の疑網、恣に所問に隨へと告ぐ。』時に諸の比丘、佛に白して言さく『世尊、譬へば人有りて、年二十五、盛壯端正、多く財寶、金銀、瑠璃有り。父母、妻子、眷屬、宗親、悉く皆具さに存す。時に人有り、來りて其に寶物を寄せ、其の人に語りて言はく「我緣事有り、他處に至らんと欲す。事訖りて當に還るべし。還らん時に我に歸せ。」是の時に壯夫、是の物を守護すること自己の有の如くす。其の人病に遇ひ、卽ち家屬に命ず。是の如きの金寶、是他の寄する所、彼若し來り索めば悉く皆之を還せ。智者は是の如く善く籌量を知る。行より還りて物を索むるに、皆悉く之を得て亡失する所無きが如し。世尊も亦爾なり。若し法寶を以て阿難、及び諸の比丘に付囑せば、久住を得ず。何を以ての故に、一切の聲聞及び大迦葉、悉く當に無常すべきに、彼の老人の、他の寄物を受くるが如し。是の故に無上の佛法を以て、諸の菩薩に付すべし。善能く問答して是の如きの法寶、則ち久住を得て無量千世

增益熾盛にして、衆生を利安するを以て、彼の壯人の他の寄物を受くるが如し。是の義を以ての故に諸の大菩薩、乃ち能く問はんのみ。我等の智慧は猶し蟁蚋の如し。何ぞ能く如來に深法を咨請せん。』時に諸の聲聞默然として住す。

(二)爾の時に佛、諸の比丘を讃じて言はく『善い哉善い哉、汝等善く無漏心、阿羅漢心を得。我も亦曾て念ず。此の二縁を以て、大乘を以て諸の菩薩に付して、是の妙法をして久しく世に住せしむべし。』爾の時に佛、一切大衆に告げたまはく『善男子、善女人、我が壽命は稱量すべからず。樂說の辯も亦盡すべからず。汝等宜しく意に隨ひて、若は戒、若は歸を咨問すべし。第二、第三も亦復是の如し。』

(三)爾の時に衆中に一りの童子菩薩摩訶薩有り。是多羅聚落の婆羅門種なり。姓は大迦葉、佛の神力を以て、即ち座より起ちて偏へに右臂を袒ぎ、繞ること百千帀し、右膝を地に著け、掌を合せて佛に向ひ、佛に白して言さく『世尊、我今者に於て少しく咨問せんと欲す。若し佛聽したまはば乃ち敢て發言せん。』佛、迦葉に告げたまはく『如來、應供、正徧知、汝が問ふ所を恣にし、當に汝が爲に說きて、汝が疑ふ所を斷じて、汝をして歡喜せしむべし。』爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、如來哀愍して已に聽許を垂る今當に之を問ふべし。然るに我、所有の智慧微少にして、猶し蟁蚋の如し。如來世尊、道德巍巍として純ら栴檀師子の難伏不可壞の衆を以て眷屬と爲す。如來の身は猶し眞金剛の如し。色は瑠璃の如く、眞實にして壞し難し。復是の如きの大智慧海に圍繞せられ、是衆

【二】　佛比丘を讃ず

【無漏心】生滅變化なく穢れなきものを無漏と云ふ。清淨なる心。

【阿羅漢心】阿羅漢は正覺を得たるものゝ稱、その心境を云ふ。

【此の二縁】聲聞は不能、菩薩は可能なるの二縁なり

【三】大迦葉婆羅門の請問を明す。

【童子菩薩摩訶薩】童子は別位、菩薩は通位なり。十住中の第九住位を童眞子住と名く。又文殊童子に類せば十地となる。

【多羅聚落】ターラ(Tāra)村

會中の諸の大菩薩摩訶薩等、皆悉く無量無邊の深妙功德を成就す。猶し香象の如し。是の如き等の大衆の前に於て、豈敢て發問せんや。今當に佛の神通の力を承け、及び大衆の善根威德に因りて少しく問を發すべきのみ。即ち佛前に於て偈を說きて曰さく、

云何が長壽、金剛不壞身を得
復何の因緣を以て、大堅固力を得る
云何が此の經に於て、究竟じて彼岸に到る
願はくば佛微密を開き、廣く衆生の爲に說きたまへ
云何が廣大、衆の爲に依止と作り
實は阿羅漢に非ずして、量羅漢と等しきことを得る
云何が天魔の、衆の爲に留難を作すを知らん
如來波旬の說、云何が分別して知りたまはん
云何が諸の調御、心喜眞諦を說きたまふ
正善具さに成就して、四顚倒を演說したまふ
云何が善業を作したまふ、大仙今當に說きたまふべし
云何が諸の菩薩、能く見難きの性を見る
云何が滿字、及與半字の義を解す
云何が共聖行、娑羅迦隣提

【滿字半字】滿字は圓滿究竟せる教を云ひ、半字は方便未究竟の教を云ふ。

【娑羅迦隣提】サラサ、カランダ（Sārasa, Karaṇḍa）娑羅と迦隣提との二鳥の名。二鳥共に雙遊不離の鳥なれば菩薩の一行、一切行するに譬ふ。

云何が日月、太白與び歳星の如き
云何が未發心、而も名けて菩薩と爲す
云何が大衆に於て、無所畏を得ること
猶し閻浮金の如く、能く其の過を說くこと無き
云何が濁世に處て、汚れざること蓮華の如くなる
云何が煩惱に處て、煩惱染むこと能はず
醫の衆病を療して、病に汚されざるが如くなる
生死の大海の中、云何が船師と作る
云何が生死を捨つること、蛇の故皮を脫するが如くなる
云何が三寶を觀じて、猶し天意樹の如くする
三乘若は無性、云何が說くことを得
猶し樂未生の如く、云何が受樂と名く
云何が諸の菩薩、不壞衆を得
云何が生盲の爲に、眼目導と作る
云何が多頭を示す、唯願はくば大仙說きたまへ
云何が說法者、增長すること月初の如き
云何が復示現して、涅槃を究竟す

【四】佛迦葉を讃し給ふ。
【一切種智】一切無明を破する佛の智慧。

云何が勇進者、人天魔道を示す
云何が法性を知り、而も法樂を受く
云何が諸の菩薩、一切の病を遠離す
云何が衆生の爲に、祕密を演說す
云何が畢竟、及與不畢竟を說く
如其疑網を斷ぜば、云何が定說せざる
云何が而も、最勝無上の道に近くことを得ん
我今如來に請ふ、諸の菩薩の爲の故に
願はくば爲に甚深、微妙の諸行等を說きたまへ
一切諸法の中、悉く安樂の性有り
唯願はくば大仙尊、我が爲に分別して說きたまへ
衆生の大依止、兩足尊妙藥
今諸陰を問はんと欲すれども、我智慧無く
精進の諸の菩薩、亦復
是の如き等の甚深、諸佛の境界を知ること能はじ

(四)爾の時に佛、迦葉菩薩を讃じたまはく「善い哉善い哉、善男子、汝今、未だ一切種智を得ざるも我已に之を得たり。然るに汝が問ふ所の甚深密義、一切智の問の如く、等しうし

【道場】菩提樹下成道の道場を云ふ。

【五】佛長壽の因果を說き給ふ。

て異ること有ること無し。善男子、我道場の菩提樹の下に坐して、初めて正覺を成ず。爾の時に、無量阿僧祇恆河沙等の諸佛世界に諸の菩薩有り。亦曾て我に是の甚深の義を問ふ。然るに其の問ふ所の句義功德も、亦皆是の如く等しうして異ること有ること無し。是の如く問はば、則ち能く無量の衆生を利益す。』爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、我が智力の、能く如來に是の如きの深義を問ふ無きこと、世尊、譬へば蟁蚋の、大海の彼岸に飛過し、虛空に周徧すること能はざるが如し。我も亦是の如し。如來に是の如きの智慧の大海法性の虛空甚深の義を咨問すること能はず。世尊、譬へば國王、髻中の明珠を典藏臣に付するに、藏臣得已りて頂戴恭敬し、守護を增加するが如し。我も亦是の如し。如來所說の方等深義を頂戴恭敬し、增加守護せん。何を以ての故に。我をして廣く深智慧を得しめんが故なり。』

(五)爾の時に佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、諦かに聽け諦かに聽け。當に汝が爲に說くべし。如來所得の長壽の業、菩薩是の業因緣を以ての故に長壽を得。是の故に應當に至心に聽受すべし。若業能く菩提の因と爲らば、應當に誠心に是の義を聽受し、既に聽受し已りて、轉じて人の爲に說くべし。善男子、我是の如きの業を修習するを以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を得。今復人の爲に廣く是の義を說く。善男子、譬へば王子の罪を犯して獄に繫がれんに、王甚だ子を憐愍し、愛念するが故に、躬自ら駕を回らして其の繫所に至るが如し。菩薩も亦爾なり。長壽を得んと欲せば、應當に一切衆生を護念して子想を同じ

【大慈大悲大喜大捨】慈悲喜捨の四無量心なり。菩薩の廣大無邊なる利他心なり。

【五戒】五種の戒律、不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五。

【十善】十惡を止むるもの、十善道、十善戒とも云ふ。不殺生、不偸盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十。

【六】長壽子想に就て問答す。

【布薩】諸惡不善の法及び諸の煩惱を斷じて究竟淸淨の梵行を修するをいふ。毎月十五日と三十日との半月毎に衆僧集りて戒經を說き、犯戒を懺悔す。原名ポーシャドハ(Posadha)淨住、增長、說罪等と譯す。又說戒とも云ふ。

うし、大慈、大悲、大喜、大捨を生じ、不殺戒を授け、善法を敎修すべし。亦當に、一切衆生を五戒、十善に安止し、亦地獄、餓鬼、畜生、阿修羅等の一切諸趣に入りて、是の中の苦惱の衆生を拔濟し、未脫の者を脫し、未度の者を度し、未涅槃の者に涅槃を得しめ、一切の諸の恐怖の者を安慰すべし。是の如き等の業因緣を以ての故に、菩薩則ち壽命長遠を得、諸の智慧に於て自在を得、壽終る所に隨ひて天上に生ず。」爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、菩薩摩訶薩の等しく衆生を視たまふこと、一子の想に同じ。是の義深隱にして、我未だ解すること能はず。世尊、如來の說きたまひし菩薩、諸の衆生に於て平等心を修し、子想を同じうすと言ふは應ぜず。所以は何ん。佛法の中に於て戒を破する者、逆罪を作す者、正法を毀る者有り。云何ぞ當に是の如き等の人に於て、子想を同じうすべけんや。』佛、迦葉に告げたまはく『是の如し是の如し。我、衆生に於て實に子想を作すこと羅睺羅の如し。』

(六)迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、昔十五日僧布薩の時、曾て具戒清淨の衆の中に於て一りの童子有り。善く身口意業を修習せず。隱屛處に在りて說戒を盜聽す。密迹力士、佛の神力を承けて、金剛杵を以て之を碎きて塵の如くす。世尊、是の金剛神は極めて暴惡を成し、乃ち能く是の童子の命根を斷ず。云何ぞ如來、諸の衆生を視ること子想を同じうして羅睺羅の如くならん。』佛、迦葉に告げたまはく、『汝今、是の如きの言を作すべからず。是の童子は卽ち是化人、眞實に非ざるなり。破戒毀法を驅遣して、衆を出でしめんと

【具戒清淨衆】二百五十戒を具足せる比丘、五百戒を行持せる比丘尼を云ふ。完全に戒律を持てるものの謂なり。

【說戒】布薩に同じ。

【密迹力士】グヒヤパーダ(Guhyapāda)の譯にして密迹金剛又は金剛神とも云ふ。夜叉神の異名にして佛法擁護の神族なり。

【金剛杵】武器の名。

【驅遣羯磨等】七羯磨をあぐ。羯磨(Karma)は業、事、所作、作法等と譯す。比丘の受戒又は懺悔するときの作法なり。この文に七羯磨あり。安註には前の四は律文の四羯磨、後の三は三苦擯なりと云ふ。三苦擯は僧衆の中より擯出せられ、四

欲するが故なり。金剛密迹も亦是化なるのみ。迦葉、正法を毀謗し、及び一闡提或は殺生、乃至邪見、及び故犯禁有り。我是等に於て悉く悲心を生じ、予想を同じうすること羅睺羅の如し。善男子、譬へば國王の、諸の羣臣等の王法を犯す有らば、罪に隨ひて誅戮して捨置せざるが如し。如來世尊は是の如くならず。毀法の者に於て驅遣羯磨、訶責羯磨、置羯磨、擧罪羯磨、不可見羯磨、滅羯磨、未捨惡見羯磨を與ふ。善男子、如來、法を謗ずる者の與に是の如き等の降伏羯磨を作す所以は、諸の行惡の人の果報有ることを示さんと欲するが爲の故なり。善男子、汝今當に知るべし。如來は卽ち是れ惡の衆生に恐畏無からんことを施す者にして若は一光、若は二、若は五を放つに、或は遇ふこと有らん者は悉く一切の諸惡を遠離せしむ。如來は今具さに是の如きの無量の勢力有り。善男子未だ見るべからざるの法を汝見んと欲せば、今當に汝が爲に其の相貌を說くべし。我涅槃の後其の方面に隨ひて持戒の比丘ありて威儀具足し正法を護持し、法を壞する者を見て卽ち能く驅遣訶責糾治するあらば、當に知るべし。是人福を得ること無量にして稱計すべからず。善男子譬へば王有り專ら暴惡を行じ、會重病に遇ふこと有らん。隣國の王有り、其名聲を聞きて兵を興して來り、將に之を滅せんと欲す。是の時病王勢力無きが故に、方に乃ち恐怖して心を改め善を修す。而も是の隣王福を得ること無量なるが如し。持法の比丘も亦復是の如し。壞法の人を驅遣訶責して善法を行ぜしめば、福を得ること無量なり。善男子、譬へば長者所居の處は、田宅、屋舍に諸の毒樹を生ず。長者知り已りて卽便斫伐して悉く

羯磨は衆外に出さるるに及ばずと雖も羯磨の主並に十四知事たることを得ず。今共に四羯磨と稱すれども自ら輕重あるなり。

【七】更に長壽子想に就て問答す。

【栴檀】香木の名チャンダナ（Can-dana）の音譯。

永く盡さしむるが如し。又少壯の首に白髪を生ずれば、愧ぢて翦拔して生長せしめざるが如し。持法の比丘も亦復是の如し。戒を破し正法を壞する者有るを見ば、即ち驅遣、訶責、擧處すべし。若善比丘、壞法の者を見て、置きて驅遣、訶責、擧處せずば、當に知るべし。是の人佛法中の怨なり。若能く驅遣、訶責、擧處せば、是我が弟子、眞の聲聞なり。』

(七)迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、佛の言ふ所の如きは、則ち等しく一切衆生を視たまふこと、子想を同じうして羅睺羅の如くしたまはず。世尊、若一人有りて、刀を以て佛を害したてまつらん。復一人有りて、栴檀を佛に塗りたてまつらん。佛二人に於て、若等心を生ぜば、云何ぞ復當に毀禁を治すべしと言はん。若毀禁を治せば是の言則ち失せん。』佛、迦葉に告げたまはく『善男子、譬へば國王、大臣、宰相の諸子を産育せんに、顏貌端正、聰明黠慧、若は二三四、將ゐて嚴師に付し、是の言を作さく「君、我が爲に諸子を教詔して、威儀、禮節、技藝、書數、悉く成就せしむべし。我が今の四子、君に就いて受學す。假使三子杖に由りて死して、餘の一子有るも、必ず當に苦治して要ず成就せしむべし。三子を喪ふと雖も、我終に恨まず。」迦葉、是の父及び師、殺罪を得るや不や。』『不なり世尊。何を以ての故に。愛念を以ての故に。成就を欲するが爲にして、惡心有ること無し。是の如きの教誨、福を得ること無量なり。』『善男子、如來も亦爾なり。壞法の者を觀ること、等しうして一子の如し。如來今、無上の正法を以て、諸王、大臣、宰相、

【四部衆】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆。

比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷に付屬す。是の諸の國王及び四部衆、應當に諸の學人等を勸勵して戒、定、智慧を增上することを得しむ。若し是の三品法を學ばず、懈怠破戒して正法を毀る者有らば、國王、大臣、四部の衆、應當に苦治すべし。善男子、是の諸の國王及び四部衆、當に罪有るべきや、否や。』『不なり世尊。』『善男子。是の諸の國王及び四部衆、尙罪有ること無し。何に況んや如來をや。善男子、如來善く是の如きの平等を修し、諸の衆生に於て一子想を同じうす。是の如く修する者、是を菩薩平等心を修し、諸の衆生に於て一子想を同じうすと名く。善男子、菩薩是の如く此の業を修習すれば、便ち長壽を得、亦能善く宿世の事を知る。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、佛の說きたまふ所の如く、菩薩若平等心を修し、諸の衆生を視ること子想を同じうする有らば、便ち長壽を得とは、如來、是の如きの言を作したまふべからず。何を以ての故に。知法の人の如き、能く種種の孝順の法を說く。家中に還り至れば、諸の瓦石を以て父母を打擲す。是父母は是良福田なり、利益する所多し。遭ひ難く遇ひ難し。好く供養すべきに、反つて惱害を生ず。是の知法の人言行相違す。如來の言ふ所も亦復是の如し。菩薩、等心を衆生に修習して、子想を同じうせば長壽を得、善く宿命を知り、常に世に住して變易有ること無かるべし。今者世尊、何の因緣を以て、壽命の極短なる人間に同じき耶。如來將諸の衆生に於て、怨憎想を生ずること無きや。世尊、昔日何の惡業を作す。害する所幾如にして是の短壽を得て、百年を滿たざるや。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、汝今、何に緣りてか如來の

【八大河】印度に於ける八種の大河、恒河、閻摩羅河等。文中に出すが如し。

前に於て、是の麤言を發す。如來の長壽は、諸壽の中に於て最上最勝なり。所得の常法は諸常の中に於て、最も第一と爲す。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、云何が如來、壽無量を得たまふ。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、八大河の如き、一つには恆河と名け、二つには閻摩羅と名け、三つには薩羅と名け、四つには阿夷羅跋提と名け、五つには摩訶と名け、六つには辛頭と名け、七つには博叉と名け、八つには悉陀と名く。是の八大河及び諸の小河は、悉く大海に入る。迦葉、是の如く一切人中天上、地及び虛空の壽命大河、悉く如來壽命海の中に入る。是の故に如來壽命無量なり。復次に迦葉、譬へば阿耨達池の四大河を出すが如し。如來も亦爾なり。一切の命を出したまふ。迦葉、譬へば一切の諸の常法の中に虛空第一なるが如し。如來も亦爾なり。諸常の中に於て、最も第一と爲す。迦葉、譬へば諸藥に、醍醐第一なるが如し。如來も亦爾なり。衆生の中に於て壽命第一なり。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、如來の壽命若是の如くならば、住すること一劫若は減一劫して、常に妙法を宣ぶること大雨を澍ぐが如くなるべし。』『迦葉、汝今如來の所に於て、滅盡の想を生ずべからず。迦葉、若今比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、乃至外道の五通神仙の自在を得る者有り。若は住すること一劫、若は減一劫、空中に經行し、坐臥自在なり。左脇に火を出し、右脇に水を出す。身煙焰を出すこと、猶し火聚の如し。若壽を住めんと欲せば能く意の如くなることを得。壽命の中に於て脩短自在なり。是の如きの五通、尚是の如きの隨意神力を得。豈況んや如來、一切法に於て自在力を得て、

【八】世出世の法につきて問答す。

【出世間の法世間の法】出世間の法卽ち迷界を離れたる佛教の法と在迷世俗の法。

【醍醐】牛乳を最も精製したるものにて、五味の最上とす。

當に壽を住むること半劫、若は一劫、若は百劫、若は百千劫、若は無量劫なること能はざるべきや。是の義を以ての故に、當に知るべし、如來は是常住法、不變易法なり。如來の此の身は是變化身にして、雜食身に非ず。衆生を度するが爲に毒樹を示同したまふ。是の故に捨てて涅槃に入るを現ず。迦葉、當に知るべし、佛は是常法、不變易法なり。汝等是の第一義の中に於て勤めて精進し、一心に修習し、既に修習し已りて、廣く人の爲に說くべし。」

(八)爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、出世の法は世間の法と何の差別有りや。佛の言ふ所の、佛は是常法、不變易法の如くば、世間も亦梵天是常、自在天常、變易有ること無し。我が常性も常、微塵も亦常と說けり。若如來是常法と言はば、如來、何が故ぞ常に現じたまはざるや。若常現したまはずば何の差別か有らん。何を以ての故に。梵天乃至微塵世性も亦現ぜざるが故なり。」

佛、迦葉に告げたまはく、「譬へば長者に多くの諸牛有りて、色種種なりと雖も同じく共に一羣たり。放牧人に付して水草を逐はしむ。唯醍醐の爲にして乳酪を求めず。彼の牧牛者、搆り已りて自ら食す。長者命終してあらゆる諸牛、悉く羣賊に鈔掠せらる。牛を得已りて婦女有ること無ければ、卽ち自ら搆搾し、得已りて食す。爾の時に羣賊各相謂つて言はく、「彼の大長者、此の牛を畜養し、乳酪を求めず、唯醍醐の爲にす。我等今者當に何の方を設けて之を得べきや。夫醍醐とは名けて世間第一の上味と爲す。我等器無し、設

使乳を得とも安置の處無し。」復共に相謂へらく「唯皮嚢のみ有り、以て之を盛るべし。」盛る處有りと雖も、鑽搖を知らず。漿猶得難し、況んや復生酥をや。」爾の時に諸賊、醍醐を以ての故に之に加ふるに水を以てす。水多きを以ての故に、乳酪、醍醐一切俱に失ふが如し。凡夫も亦爾なり。善法有りと雖も、皆是如來正法の餘なり。何を以ての故に、如來世尊涅槃に入り、後如來遺餘の善法、若は戒、定、慧を盜竊す。彼の諸賊、羣牛を劫掠するが如し。諸の凡夫人、復是の戒、定、智慧を得と雖も、方便有ること無く、解脫すること能はず。是の義を以ての故に、常に戒、定、慧、常に慧解脫を獲得すること能はず。彼の羣賊方便を知らず、醍醐を亡失するが如く、又羣賊醍醐の爲の故に、之に加ふるに水を以てするが如し。凡夫も亦爾なり。解脫の爲の故に、我衆生壽命士夫、梵天自在天微塵世性、戒定智慧及び解脫、非想非非想天卽ち是涅槃なりと說く。實は亦解脫涅槃を得ず。彼の羣賊醍醐を得ざるが如く、是の諸の凡夫、少梵行父母を供養する有り。是の因緣を以て天上に生じて、少安樂を受くることを得。彼の羣賊の加水の乳の如し。而も是の凡夫、實は少梵行を修し、父母を供養するに因りて、天上に生ずることを得ることを知らず。又戒、定、智慧、歸依三寶を知ること能はず。知らざるを以ての故に常、樂、我、淨と說く。復之を說くと雖も、而も實は知らず。是の故に如來、出世の後、乃ち爲に常、樂、我、淨を演說す。轉輪王世に出現す。福德力の故に羣賊退散し、牛に損命無し。時に轉輪王、卽ち諸牛を以て一の牧人の巧便多き者に付す。是の人方便して卽ち醍醐を得。醍醐を以ての故に、

【九】法性に就て問答す。

【無想天】色界十八天の第十三。四禪天の第四、この天に生るれば一期の間心想起らず。故にこの名あり。

一切衆生患苦有ること無きが如し。法輪聖王世に出現するの時、諸の凡夫人、戒、定、慧を演說すること能はざれば、卽便棄捨す。賊の退散するが如し。爾の時に如來、善く世法及び出世法を說く。衆生の爲の故に諸の菩薩をして、宜しきに隨ひて演說せしむ。菩薩摩訶薩、旣に醍醐を得、復無量無邊の衆生をして、普く無上甘露の法味を得。所謂如來の常、樂、我、淨なる是の義を以ての故なり。善男子、如來は是常不變易法なり。世間の凡夫愚人の梵天等は是常法と謂ふが如きに非ざるなり。此の常法の稱、要ず是如來は是餘法に非ず。迦葉、應當に是の如く如來身を知るべし。迦葉、諸の善男子、善女人、常に當に心を繫けて此の二字佛は是常住を修すべし。迦葉、若善男子、善女人此の二字を修する有らば、當に知るべし、是の人は我が所行に隨ひ我が至處に至る。善男子、若是の如きの二字を修習して、滅相と爲す者有らば、當に知るべし、如來は則ち其の人に於て、爲に般涅槃したまふ。善男子、涅槃の義は、卽ち是諸佛の法性なり。』

(九)迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、佛の法性とは其の義云何。世尊、我今法性の義を知らんと欲す。唯願はくば如來、哀愍して廣く說きたまへ。夫法性とは、卽ち是捨身なり。捨身とは無所有と名く。若無所有ならば、身、云何が存せん。身、若存せば、云何ぞ身、法性有りと言はん。身、法性有らば、云何が存することを得ん。我今、云何が當に是の義を知るべき。』佛、迦葉に告げたまはく『善男子、汝今是の如く滅は是法性と說くことを作すべからず。夫法性は滅有ること無きなり。善男子、譬へば無想天の、色陰を成就して、

【三歸】佛法僧の三寶に歸依すること。

【一〇】迦葉三寶常住を奉じ、佛領讃し給ふ。

而も色想無きが如し。問ひて「是の諸天等、云何が住し、歡娛受樂し、云何が想を行じ、云何が見聞す」と云ふ。善男子、如來の境界は、諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。善男子、說きて「如來の身は是滅法なり」と言ふべからず。善男子、如來滅法、是佛の境界なり、諸の聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。善男子、汝今、如來何の處に住し、何の處に行じ、何の處に見、何の處に樂むと思ふべからず。善男子、是の如きの義も亦、汝等が知り及ぶ所に非ず。諸佛の法身、種種の方便は思議すべからず。

復次に善男子、應當に佛法及び僧を修習して、常想を作すべし。是の三法は異相有ること無し。無常相無く、變異相無し。若三法に於て異相を修する者は、當に知るべし。是の輩は清淨の三歸、則ち依處無し。有らゆる禁戒皆具足せず。終に聲聞、緣覺の菩提の果を證すること能はず。若能く是の不可思議に於て常想を修する者は、則ち歸處有り。善男子、譬へば樹に因りて則ち樹影有るが如し。如來も亦爾なり。常法有るが故に、則ち歸依有り。是無常に非ず。若如來は是無常なりと言はば、如來は則ち諸天世人に歸依せらるる處に非ず。」

〔一〇〕迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、譬へば闇中に樹有りて影無きが如し。』『迦葉、汝樹有りて影無しと言ふべからず。肉眼の見る所に非ざるのみ。善男子、如來も亦爾なり。其の性常住、是不變異なり。智慧眼無ければ見るを得る能はず。彼の闇中に樹影を見ざるが如し。凡夫の人、佛の滅後に於て、說きて「如來は是無常法なり」と言ふも亦復是の

【金剛身品】此品は如來身の金剛にして常住不變不可壞なることを說示するの章なり。
【一】如來身の金剛不壞について問答す。
【善男子】以下三番あり。初番に三句、第二番に八十句、第三番に十七句あり。初番三句は如來身は人天身に非ることを明す。

如し。若如來は法僧に異ると言はば、則ち三歸依處を成ずること能はず。汝が父母の、各各異るが故に、故に無常ならしむるが如し。』

迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、我今より始めて、當に佛、法、衆僧の三事常住を以て、父母を啓悟し、乃至七世皆奉持せしむべし。甚だ奇なり世尊、我今當に、如來法僧、不可思議を學すべし。既に自ら學し已りて、亦當に人の爲に廣く是の義を說くべし。若諸人の能く信受せざる有らば、當に知るべし、是の輩は久しく無常を修す。是の如き等の人には、我當に之が爲に霜雹と作るべし。』

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚ずらく、『善い哉善い哉、汝今善能く正法を護持す。是の如きの護法、人を欺かず。人を欺かざるの善業緣を以ての故に長壽を得、善く宿命を知る。』

金剛身品第五

(一)爾の時に世尊、復迦葉に告げたまはく、『善男子、如來身とは是常住身、不可壞身、金剛身、非雜食身、卽ち是法身なり。』迦葉、佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如く、是の如き等の身我悉く見ず。唯無常、破壞、塵土、雜食等の身を見る。何を以ての故に。如來、今當に涅槃に入りたまふべきが故なり。』佛迦葉に告げたまはく、『汝今、如來の身不堅可壞凡人の身の如しと謂ふこと莫れ。善男子、汝今當に知るべし。如來の身、無量億劫堅牢

【如來の身】以下第二番の文。八十句通じて非身是身を明す。

【知者有ること無く】以下第三番の文。この中十七句、無知無有知者、無不知者を明す。

にして壞し難し。人天身に非ず、恐怖身に非ず。雜食身に非ず。如來の身は非身是身、不生不滅、不習不修、無量無邊、足迹有ること無し。無知無形、畢竟清淨、動搖有ること無し。無受無行、不住不作、無味無雜、是有爲に非ず。非業非果、非行非滅、非心非數、不可思議、常不可議、無識離心にして、亦心を離れず。其の心平等、無有亦有、去來有ること無し。而も亦去來、不破不壞、不斷不絕、不出不滅、非主亦主、非有非無、非覺非觀、非字非不字、非定非不定、不可見了了見、無處亦處、無宅亦宅、無闇無明、寂靜有ること無し。而も亦寂靜、是無所有、不受不施、清淨無垢、無諍斷諍、住無住處、不取不墮、非法非非法、非福田非非福田、無盡不盡、離一切盡、是空離空、常住ならずと雖も念念滅に非ず、垢濁有ること無し。無字離字、非聲非說、亦修習に非ず。非稱非量、非一非異、非像非相、諸相莊嚴、非勇非畏、無寂不寂、無熱不熱、覩見すべからず。相貌有ること無し。如來一切衆生を度脫す。度脫無きが故に能く衆生を解す。解有ること無きが故に衆生を覺了す。覺了無きが故に實の如くに法を說く。二有ること無きが故に、不可量、無等等、平かなること虛空の如くにして、形貌有ること無し。衆生の性に同じく、不斷不常、常に一乘を行ず。衆生三を見、不退不轉、一切の結を斷ず。不戰不觸、非性住性、非合非散、非長非短、非圓非方、非陰入界、亦陰入界、非增非損、非勝非負、如來の身是の如きの無量の功德を成就す。知者有ること無く、不知者無く、見者有ること無く、不見者無し。爲有るに非ず、爲無きに非ず。非世非不世、非作非不作、非依非不依、非四大非

【二】迦葉領解、法身不可壞身を説示す。

不四大、非因非不因、非衆生非不衆生、非沙門、非婆羅門、是師子、大師子、非身非不身、宣説すべからず。一法相を除き、算數すべからず。般涅槃の時般涅槃せず。如來法身、皆悉く是の如きの無量の微妙功德を成就す。迦葉、唯如來のみ有りて、乃ち是の相を知る。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。迦葉、是の如きの功德如來身を成ず。是雜食長養する、所の身に非ず。迦葉、如來眞身功德是の如し。云何ぞ復諸疾、患苦、危脆、不堅坏器の如くなるを得んや。迦葉、如來病苦を示す所以は、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故なり。善男子、汝今當に知るべし、如來の身卽ち金剛身なり。汝今日より、常に當に專心に此の義を思惟すべし。食身を念ずること莫れ。亦當に人の爲に、如來身卽ち是法身と説け。』

(二)迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、如來是の如きの功德を成就したまふ。其の身云何ぞ當に病苦、無常、破壞有るべき。我今日より、常に當に如來の身、是常法身、安樂身なるを思惟すべし。亦當に人の爲に是の如く廣く説くべし。唯然なり世尊、如來の法身は金剛不壞なり。而も未だ所因云何を知ること能はず。』佛、迦葉に告げたまはく『能く正法を護持する因緣を以ての故に、是の金剛身を成就することを得。迦葉、我往昔に於て法を護るの因緣、今是の金剛身常住不壞を成就することを得。善男子、正法を護持する者は五戒を受けず、威儀を修せず、刀劍、弓箭、矛槊を持ちて、戒淸淨の比丘を守護すべし。』迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、若比丘有りて守護を離れ、獨空閑、塚間、樹下に處ら

【修多羅】以下九部經。前に註せる十二部經について見るべし。亦九分教ともいふ。

ば、當に是の人、眞の比丘と爲すと說くべし。若守護に隨逐する行者有らば、當に知るべし、是の輩は是禿居士なり。」佛、迦葉に告げたまはく、「是の語を作して禿居士と言ふこと莫れ。若比丘有りて、所至の處に隨ひて供身取足り、經典を讀誦し思惟坐禪す。來りて法を問ふもの有らば、卽ち爲に宣說す。所謂布施、持戒、福德、少欲、知足、能く是の如き種種の法を說くと雖も、然も故師子吼を作すこと能はず。師子に圍繞せられず。非法の惡人を降伏すること能はず。是の如きの比丘、自ら利し、及び衆生を利すること能はず。當に知るべし、是の輩懈怠懶惰、能く持戒し淨行を守護すと雖も、當に知るべし、是の人は能く爲す所無し。若比丘有りて、供身の具、亦常に豐足す。復能く所受の禁戒を護持し、師子吼を能くして廣く妙法を說く。修多羅、祇夜、受記、伽陀、優陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毗佛略、阿浮陀達磨を謂ふ。是の如き等の九部の經典を以て、他の爲に廣く說く。諸の衆生を利益し安樂にするが故に、是の如きの言を唱ふ。「涅槃經の中、諸の比丘を制す、奴婢、牛羊、非法の物を畜養すべからず。若比丘、是の如き等の不淨の物を畜ふる有らば、應當に之を治すべし。如來先に異部經の中に於て、比丘是の如き等の非法の物を畜ふる有らば、某甲國王、法の如く之を治す。驅つて俗に還らしめよ」と說く。若比丘有りて、能く是の如き師子吼を作す時、破戒の者有りて、是の語を聞き已りて、咸共に瞋恚して是の法師を害せん。是の說法は、設復命終すとも、故持戒自利利人と名く。是の緣を以ての故に、我國主、羣臣、宰相、優婆塞等說法の人を護ることを聽す。若正法を護ること

【歡喜增益如來】佛の名。以下如來の十號を列す。

【阿閦佛國】阿閦佛(Aksobhya-buddha)のゐます國。阿閦は不動、無動等と譯す。その國は東方に在り。

を得んと欲する者有らば、當に是の如く學すべし。迦葉、是の如くに破戒にして、法を護らざる者を禿居士と名く。持戒者は是の如きの名を得るに非ず。善男子、過去久遠無量無邊阿僧祇劫に、此の拘尸城に於て佛有りて出世す。歡喜增益如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。爾の時に世界、廣博嚴淨、豐樂安隱、人民熾盛にして饑渇有ること無し。安樂國の諸の菩薩等の如く、彼の佛世尊、世に住すること無量、衆生を化し已りて、然して後乃ち娑羅雙樹に於て般涅槃に入る。佛涅槃の後、遺法世に住すること無量億歲、餘四十年佛法未だ滅せず。爾の時に一りの持戒の比丘有り、名を覺德と曰ふ。多くの徒衆有りて眷屬圍繞す。能く師子吼して九部の經典を頒宣廣說す。諸の比丘を制して「奴婢、牛羊、非法の物を畜養することを得ざれ。」爾の時に多く破戒の比丘有り。此の說を作すを聞きて皆惡心を生じ、刀杖を執持して此の法師に逼る。是の時、國王名を有德と曰ふ。是の事を聞き已りて護法の爲の故に即便說法者の所に往至して、是の破戒の諸の惡比丘と共に戰鬪を極めて、說法者をして危害を免ることを得しむ。王、時に創を被りて擧身周徧す。爾の時に覺德、尋いで王を讚じて言はく、「善い哉善い哉、王は今眞に是正法を護る者、當來の世、此の身當に無量の法器と爲るべし。」王、是の時に於て法を聞くことを得已りて、心大いに歡喜す。尋いで即ち命終して阿閦佛國に生じ、彼の佛の爲に第一の弟子と作る。其の王の將ゐ從へる人民、眷屬、戰鬪の者有り、隨喜の者有りて一切菩提の心を退かず。命終して悉く阿閦佛國に生ず。覺德比丘、

【三】如來常身の問答。

卻後壽終りて亦阿閦佛國に往生することを得て、彼の佛の爲に聲聞衆中の第二の弟子と作る。若正法滅盡せんと欲する時有らば、應當に是の如く受持擁護すべし。迦葉、爾の時の王とは卽ち我が身是なり。說法比丘は迦葉佛是なり。迦葉、正法を護る者は、是の如き等の無量の果報を得。是の因緣を以て、我今日に於て、種種の相以て自ら莊嚴し、法身不可壞身を成就することを得。』

(三)迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、如來常身猶し石に畫くが如し。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、此の因緣を以ての故に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、應當に勤加して正法を護持すべし。護法の果報廣大無量なり。善男子、是の故に護法の優婆塞等、刀杖を執りて是の如きの持法比丘を擁護すべし。若五戒を受持し具する者有るも、名けて大乘の人と爲すことを得ざるなり。五戒を受けざるも爲に正法を護る者は乃ち大乘と名く。正法を護る者、應當に刀劍器仗を執持して法師を侍衞すべし。』迦葉、佛に白して言さく、『世尊、若諸の比丘、是の如き等の諸の優婆塞、刀杖を持する者と共に伴侶と爲らば、師有りと爲るや。師無しと爲んや。是持戒と爲んや。是破戒と爲んや。』佛、迦葉に告げたまはく、『是等破戒人と爲すと謂ふこと莫れ。善男子、我涅槃の後、濁惡の世、國土荒亂し、互に相鈔掠して人民饑餓せん。爾の時に、多く饑餓を爲すの故に發心出家するもの有り。是の如きの人を名けて禿人と爲す。此の禿人の輩、持戒、威儀具足、清淨比丘の正法を護持するもの有るを見て、驅逐して出さしめ、若は殺し若は害す。』迦葉菩薩、復佛に白し

【阿蘭若】阿練若とも書く。アーラニャ（Araṇya）の音譯。閑靜處、寂靜處、等と譯す。人家に遠く離れた閑靜の地にして修行する處。後には寺院の稱にも用ゐらる。

て言さく、「世尊、是の持戒の人の正法を護る者、云何が當に村落、城邑に遊行して教化することを得べき。」「善男子、此の故に我今持戒の人、諸の白衣の刀杖を持する者に依りて、以て伴侶と爲すことを聽す。若し諸の國主、大臣、長者、優婆塞等、護法の爲の故に刀仗を持すと雖も、我說きて是等を名けて持戒と爲す。刀仗を持すと雖も、命を斷ずべからず。若し能く是の如きは、卽ち名けて第一持戒と爲すことを得。」迦葉言さく、「夫れ護法の者は、謂はく正見を具し、能く廣く大乘經典を宣說す。終に王者の寶蓋、油餠、穀米、種種の果蓏を捉持せず。利養の爲に國王、大臣、長者に親近せず。諸の檀越に於て心諂曲無く、威儀を具足し、破戒、諸の惡人等を摧伏す。是を持戒護法の師と名く。能く衆生の眞善知識と爲る。其の心弘廣、譬へば大海の如し。」「迦葉、若し比丘有りて、利養を以ての故に、他の爲に法を說く。是の人所有の徒衆眷屬、亦是の師に效ひて利養を貪求す。是の人、是の如く便ち自ら衆を壞す。迦葉、衆に三種有り。一つには犯戒雜僧、二つには愚癡僧、三つには清淨僧なり。破戒雜僧は則ち壞すべきこと易く、持戒淨僧は利養の因緣、壞すること能はざる所。云何が破戒雜僧といふ。若し比丘有りて、禁戒を持すと雖も、利養を爲すの故に、破戒の者と坐起行來し、共に相親附し、其の事業を同じうす。是を破戒と名け、亦雜僧と名く。云何が愚癡僧といふ。若し比丘有りて阿蘭若處に在り。諸根不利、闇鈍甖瞢、少欲乞食、說戒の日及び自恣の日に於て、諸の弟子に清淨懺悔を教へ、非弟子の多く禁戒を犯すを見て、敎へて清淨懺悔せしむること能はず。而も便ち與共に說戒自恣す。是

【四重禁】四重禁戒の意にして、殺生偸盜邪淫妄語の四重罪を云ふ。

【一字を解す】一字は律の一字なり。

【善く契經を持するもの】律を持するものに準じて五事あり。一隨時教化、二知有餘、三知無餘、四非經不證經、五是經應證。

を愚癡僧と名く。云何が清淨僧と名くる。比丘僧有りて、百千億の魔の壞すること能はざる所なり。是菩薩衆本性清淨、能く上の如きの二部の衆を調へて、悉く清淨衆の中に安住せしむ。是を護法無上の大師と名く。善持律の者、調伏して、衆生を利せんと欲するが爲の故に、諸の戒相、若は輕、若は重を知る。是律に非ざる者は則ち證知せず。若是律なる者は、則便證知す。云何が衆生を調ふるが故にす。若諸の菩薩、衆生を化せんが爲に、常に聚落に入りて時節を擇ばず。或は寡婦、及び淫女の舍に至り、與に同じく住止して多年を經歷す。若是聲聞は爲すべからざる所、是を調伏利益衆生と名く。云何が知重なる。若如來、事に因りて制戒するを見、汝今日より、愼んで更に犯すこと莫れ。四重禁の如きは、出家の人の作すべからざる所。而るを故らに作すは、是沙門に非ず。釋種子に非ず。是を名けて重と爲す。云何が輕と爲す。若輕事を犯すに是の如く三たび諫むるに、若能く捨つる者は、是を名けて輕と爲す。非律不證とは、若不清淨物受用すべしと讃說する者有らば、共に同止せず。是律應證とは善く戒律を學び、破戒に近かず、所行戒律に隨順する有るを見て、心に歡喜を生ず。是の如く能く佛法の所作を知りて、善能く解說す。是を律師、善く一字を解すと名く。善く契經を持するも、亦復是の如く。是の如し。善男子、佛法無量思議すべからず。如來も亦爾なり、不可思議なり。」迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、是の如く是の如し。誠に聖言の如し。佛法無量思議すべからず。如來も亦爾なり。不可思議なり。故に知りぬ。如來常住不壞にして變異有ること無し。我今善學し、

亦當に人の爲に廣く是の義を宣ぶべし。』

(四)爾の時に佛、迦葉菩薩を讃じたまはく、『善い哉善い哉、如來身は即ち是金剛不可壞身なり。菩薩、應當に是の如く善く正見、正知を學す。若能く是の如く了了知見すれば、即ち是佛の金剛の身、不可壞身を見ること、鏡中に於て諸の色像を見るが如し。』

名字功德品第六

(一)爾の時に如來、復迦葉に告げたまはく、『善男子、汝今應當に善く是の經の文字、章句、所有の功德を持すべし。若善男子、善女人有りて、是の經名を聞きて四趣に生ぜば、是の處有ること無し。何を以ての故に。是の如きの經典、乃至無量無邊の諸佛の修習する所の所得の功德、我今當に說くべし。』迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、當に何んが此の經を名づくべき。菩薩摩訶薩、云何が奉持せん。』佛、迦葉に告げたまはく、『是の經を名づけて大般涅槃と爲す。上語も亦善、中語も亦善、下語も亦善なり。義味深邃にして、其の文も亦善なり。純備具足、清淨梵行、金剛寶藏滿足無缺なり。汝善く諦らかに聽け。我今當に說くべし。善男子、言ふ所の大とは、之を名づけて常と爲す。八大河悉く大海に歸するが如し。此の經は是の如く一切の諸の煩惱結、及び諸の魔性を降伏し、然して後に、大般涅槃を要して身命を放捨す。是の故に名けて大般涅槃と曰ふ。善男子、又醫師一つの

【四】佛の讃。

【名字功德品】此品は大般涅槃經の經名についてその功德を說示するの章なり。

【一】經名大般涅槃の意をのぶ。

【四趣】地獄、餓鬼、畜生、阿修羅の四。

【大般涅槃】大圓寂と譯す。釋尊の圓寂を取りて本經の名とす。

【上語も亦善】以下七善をあぐ。

祕方有りて、悉く一切所有の醫術を攝するが如し。善男子、如來も亦爾なり。所說の種種の妙法、祕密深奧藏門、悉く皆此の大般涅槃に入る。此の故に名けて大般涅槃と爲す。善男子、譬へば農夫春月に種を下し、常に希望有り。既に果實を收むれば、衆望都て息むが如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し。餘經を修學すれば、常に滋味を希ふ。若是の大般涅槃を聞くことを得れば、餘經所有の滋味を希望する、悉く皆永く斷ず。是の大涅槃は能く衆生をして諸の有流を度せしむ。善男子、諸の迹の中、象迹を最と爲すが如し、此の經も是の如し。諸經の三昧に於て最も第一と爲す。善男子、譬へば耕田に秋耕を勝と爲すが如し。此の經も是の如し、諸經中の勝なり。善男子、諸藥の中に醍醐第一なるが如し。善く衆生の熱惱亂心を治す、是の大涅槃を最も第一と爲す。善男子、譬へば甜酥の八味具足するが如し、大般涅槃も亦復是の如し、八味具足す。云何が八と爲す。一つには常、二つには恆、三つには安、四つには清涼、五つには不老、六つには不死、七つには無垢、八つには快樂なり、是を八味と爲す。是の八味を具す。是の故に名けて大般涅槃と爲す。若諸の菩薩摩訶薩、是の中に安住し、復能く處處に涅槃を示現す。是の故に名けて大般涅槃と爲す。迦葉、善男子、善女人、若此の大般涅槃に於て、涅槃せんと欲する者は、當に是の如く如來常住、法僧も亦然るを學すべし。」

(二)迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「甚だ奇なり世尊、如來の功德思議すべからず。法僧も亦爾なり、不可思議なり。是の大涅槃も亦思議すべからず。若是の經典を修學する者有ら

【有流】有見を生ぜしむる煩惱の義、有は三界の果報に、流は四種の煩惱にて三界の生死海に流轉せしむる義に名く。

【三昧】サマーデイ(Samādhi)の音譯、定、正受等と譯す。心を一處に定めて動ぜざるを云ふ。

【法僧】法寶と僧寶。

【二】迦葉如來の功德を讚歎す。

ば、正法眼を得、能く良醫と爲る。若未學者は當に知るべし、是の人盲にして慧眼無く、無明に覆はる。』

【四相品】此品は如來身口意の三密を開說し、口密に於て四相を說き、以て品名とす。

【一】口密を開き四相を明す。初に自正を明す。

【四相】自正と善因緣解とは自行、正他と能隨問答とは化他なり。

【二】第二正他を明す。

大般涅槃經　卷第四

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

四相品第七之上

(一)佛、復迦葉に告げたまはく、「善男子、菩薩摩訶薩大般涅槃を分別し開示するに四相義有り。何等をか四と爲す。一つには自正、二つには正他、三つには能隨問答、四つには善解因緣義なり。迦葉、云何が自正なる。若佛、如來諸の因緣を見て說く所有り。譬へば比丘大火聚を見るが如し。便ち是の言を作さく、「我寧ろ是の火聚の熾然たるを抱くとも、終に敢て如來所說の十二部經、及び祕密に於て、此の經は是魔の所說と言はず。若如來法僧無常と言はば、是の如きの說者自ら侵欺し、亦人を欺くと爲す。寧ろ利刀を以て自ら其の舌を斷つとも、終に說いて如來法僧是無常と言はざるなり。若他說を聞くも亦信受せず。此の說者に於て憐愍を生ずべし。如來法僧思議すべからず。」是の如く持すべし。自ら己身を觀ずるに、猶し火聚の如し。是を自正と名く。

(二)迦葉、云何が正他。佛、法を說く時、一りの女人有りて嬰兒を乳養す。佛所に來詣して佛足に稽首し、顧念する所有りて心自ら思惟し、便ち一面に坐す。爾の時に世尊、知り

て故らに問ひたまはく、「汝愛念を以て、多く兒に酥を含め、消と不消とを籌量することを知らず。」爾の時に女人、即ち佛に白して言さく、「甚だ奇なり世尊、善能く我が心中の所念を知りたまへり。唯願はくば如來、我に多少を敎へたまへ。世尊、我今朝に於て多く兒に酥を與ふ、恐らくは消すること能はじ。將壽を夭すること無きや。唯願はくば如來、我が爲に解說したまへ。」佛の言はく、「汝が兒の食する所、尋いで即ち消化して壽命を增益せん。」女人聞き已りて心大いに踊躍す。復是の言を作さく、「如來は實說なり、故に我歡喜す。世尊、是の如く諸の衆生を調伏せんと欲すが爲の故に、善能く分別して消、不消を說きたまひ、亦諸法無我、無常を說きたまふ。若佛世尊、先に常を說くは、受化の徒、常に此の法、彼の外道に同じと言ひて、即便捨て去るべし。」復女人に告げたまはく、「若兒長大して、能く自ら行來せば、凡そ食噉する所、能く消し難きを消す。本與ふる所の酥は、即ち供足せず。我が所有の聲聞の弟子も亦復是の如し。汝が嬰兒の如く、是の常住の法を消すること能はず。是の故に我、先に苦、無常を說く。若我が聲聞の諸の弟子等、功德已に備へて、大乘經典を修習するに堪忍すれば、我是の經に於て、爲に六味を說く。云何が六味なる。苦は酢味、無常は鹹味、無我は苦味を說き、樂を甜味と爲し、我を辛味と爲し、常を淡味と爲す。彼の世間の中に三種の味有り。所謂無常、無我、無樂なり。煩惱を薪と爲し、智慧を火と爲す。是の因緣を以て涅槃の食を成す。常樂我を謂ふ。諸の弟子をして、悉く皆甘嗜ならしむ。」復女人に告げたまはく、「汝若緣有りて他處に至らんと欲せば、惡

【三】第三能隨問答を明す。
【大施檀越】大布施を行ふ人を云ふ。大施はマハーダーナ（Mahā Dāna）の譯、檀越はダーナパテ（Dānapati）の音譯施主と譯。
【四】以下能隨問答中斷肉立制を明す。

子を驅りて其の舍を出でしめ、悉く寶藏を以て善子に付示すべし。」女人、佛に白さく、「實に聖教の如く、珍寶の藏善子に示し、惡子に示さざるべし。姉、我も亦是の如し。般涅槃の時に、如來微密無上法藏、聲聞の諸の弟子等に與へず、汝が寶藏惡子に示さざるが如く、要らず當に諸の菩薩等に付囑すべし。汝が寶藏を善子に委付するが如し。何を以ての故に。聲聞の弟子、變異想を生じて、佛如來眞實に滅度すと謂ふ。然るに我眞實に滅度せざるなり。汝遠く行きて未だ還らざるの頃、汝の惡子、便ち汝死すと云ふも、汝實は死せざるが如し。諸の菩薩等は說きて如來常に變易せずと云ふ。汝が善子、汝死すと言はざるが如し。是の義を以ての故に、我無上祕密の藏を以て、諸の菩薩に付す。善男子、若衆生の、佛は常住不變異なりと謂ふ者有らば、當に知るべし是の家は、卽ち佛有りと爲す。是を正他と名く。」

(三)迦葉、云何が能隨問答なる。若人有りて、來りて佛世尊に問はく、「我當に、云何が錢財を捨てずして、而も名けて大施檀越と爲すことを得べき。」佛の言はく、「若沙門、婆羅門等、少欲知足にして、不淨物を受けず畜へざる者有らんに、當に其の人に、奴婢、僕使を施すべし。梵行を修する者に、女色を施與し、酒肉を斷ずる者に、酒肉を施與し、不過中食に、過中食を施し、不著華香に、華香を施與せん。是の如き施者は、施の名流布し、聲天下に聞えて、未だ嘗て己が一毫の費を損せず。是を則ち名けて能隨問答と爲す。』

(四)爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、食肉の人に肉を施すべからず。何を以て

【三種の淨肉】比丘の食して罪とならざる三種の肉を云ふ。見ず、聞かず、疑はざるもの。即ち一に我眼其の殺すを見ざるもの、二に我が爲めに殺せりと聞かざるもの、三に我が爲めに殺したるやの疑なきもの。【十種の不淨】本經の梵行品に出づ。人、蛇、象、馬、猪、狗、狐、猿猴、獅子、鷄の十種の肉は不淨とす。【九種の淸淨】九種の淨肉を云ふ。前の三種の淨肉に自死、鳥殘、不爲已殺、生乾、不期遇、前已殺の六を加ふ。

の故に。我肉を食せざる者を見るに大功德有り。』佛迦葉を讚じたまはく『善い哉善い哉、汝今乃ち能善く我が意を知る。護法の菩薩應當に是の如くなるべし。善男子、今日より始めて聲聞の弟子に肉を食するを聽さず。若檀越の信施を受くるの時是の食を觀じて子肉の想の如くすべし。』迦葉菩薩復佛に白して言さく『世尊、云何が如來、肉を食するを聽したまはざる。』『善男子、夫肉を食する者は、大慈の種を斷ず。』迦葉又言さく『如來、何が故ぞ先に、比丘に三種の淨肉を食することを聽すや。』『迦葉、是の三種の淨肉は、事に隨ひて、漸く制す。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、何の因緣の故に十種の不淨、乃至九種の淸淨、而も復聽さざるや。』佛、迦葉に告げたまはく『亦是事に因りて漸次にして制す。當に知るべし。即ち是現斷肉の義なり。』迦葉菩薩復佛に白して言さく『云何ぞ如來、魚肉を稱讚して美食と爲すや。』『善男子、我も亦魚肉の屬を美食と爲すと說かざるなり。我甘蔗、杭米、石蜜、一切の穀麥及び黑石、蜜乳、酪酥、油を說きて以て美食と爲す。種種の衣服を畜ふべしと說くと雖も、畜ふべき所の者は要ず是壞色なり。何に況や是の魚肉の味に貪著せんや。』迦葉、復言さく『如來、若不食肉を制したまはば、彼の五種の味、乳酪、酪漿、生酥、熟酥、胡麻油等、及び諸の衣服憍奢耶衣、珂貝、皮革、金銀の盂器、是の如き等の物も亦受くべからず。』『善男子、彼の尼揵の所見に同じうすべからず。如來所制の一切の禁戒、各異意有り。異意の故に三種の淨肉を食することを聽し、異想の故に十種の肉を斷ず。異想の故に一切悉く斷じ、自死の者に及ぶ。迦葉、我今日より諸の弟子

【憍奢耶衣】 絹の衣服の稱。
【尼犍】 裸形外道のこと。ニルグランタ(Nirgrantha)の音譯にしてジャイナ(Jaina)教の一派。極端なる禁欲主義の外道なり。
【四道の聖人】 四果の聖者に同じ。四果は預流果、一來果、不還果、阿羅漢果を云ふ。
【正法滅して】 佛教の世に行はるゝ時代を分ちて正法、像法、末法の三期とす。普通正法五百年、像法千年、末法萬年とす。

を制して、復一切の肉を食することを得しむるなり。迦葉、其の肉を食する者、若は行、若は住、若は坐、若は臥に、一切の衆生、其の肉氣を聞ぎて悉く恐怖を生ず。譬へば人有りて師子に近き已り、衆人之を見、師子の臭を聞ぎて亦恐怖を生ずるが如し。善男子、人蒜を啖へば臭穢惡むべし。餘人之を見、臭を聞ぎて捨て去る。設ひ遠く見る者も、猶視ることを欲せず。況や當に之に近くべきやの如く、諸の肉を食する者も亦復是の如し。一切の衆生其の肉氣を聞ぎ、悉く皆恐怖して畏死想を生ず。水、陸、空行の有命の類、悉く之を捨てて走り、咸く此の人は、是我等の怨と言ふ。是の故に菩薩食肉を習はず、衆生を度せんが爲に食肉を示現す。之を食するを現ずと雖も、其の實は食せず。善男子、是の如きの菩薩、清淨の食猶尚食せず、況や當に肉を食すべきや。善男子、我涅槃の後無量百歳、四道の聖人悉く復涅槃し、正法滅して後、像法の中に於て、當に比丘有るべし。貌像持律、少しく經を讀誦す。飮食を貪嗜して其の身を長養し、身に被服する所麤陋醜惡、形容憔悴、威德有ること無し。牛羊を放畜し、薪草を擔負す。頭鬚爪髮、悉く皆長利なり。袈裟を服すと雖も猶し獵師の如し。細視徐行、猫の鼠を伺ふが如く常に是の言を唱ふ、「我羅漢を得」と。諸の病苦多くして糞穢に眠臥す。外に賢善を現じ内に貪嫉を懷く。瘂法を受くること婆羅門等の如し。實は沙門に非ずして沙門の像を現ず。邪見熾盛にして正法を誹謗す。是の如き等の人、如來所制の戒律、正行、威儀を破壞し、解脫の果を說けども、淸淨法を離れ、及び甚深祕密の敎を壞す。各自ら意に隨ひて經律を反說し、是の言を作さ

【五】第四善解因緣義を明す。【波斯匿王】釋尊當時の舍衞國の王にして歸佛せり。原名プラセーナジツト(Prasenajit)勝軍、和悅等の譯あり。

く「如來、皆我等に肉を食するを聽したまふ」と。自ら此の論を生じて是佛說と言ふ。互に共に爭訟して、各自ら是沙門釋子と稱す。善男子、爾の時に復諸の沙門等有りて、生穀を貯聚し、魚肉を受取し、手自ら食を作し油餅を執持す。寶蓋、革屣、國王、大臣、長者に親近し、占相星宿、醫道を勤修し、奴婢、金銀、瑠璃、硨磲、碼碯、頗梨、眞珠、珊瑚、琥魄、璧玉、珂貝、種種の果蓏を畜養す。諸の技藝を學び、畫師泥作、造書敎學、種植根栽、蠱道呪幻、諸藥を和合し、作倡伎樂、香華身を治し、樗蒱圍棊、諸の工巧を學ぶ。若比丘、能く是の如きの諸の惡事を離るる者有らば、當に說くべし「是の人は眞に我が弟子」と。「爾の時に迦葉、復佛に白して言さく「世尊、諸の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、他に因りて活くる、若乞食の時、雜肉の食を得ば、云何が食することを得て淸淨法に應ぜん。」佛の言はく「迦葉、當に水を以て洗ひ、肉と別れしめて、然して後乃ち食すべし。若其の食器、肉に汚さるるも、但味無からしめば用ふることを聽す。罪無し。若食の中に多く肉有る者を見ば、則ち受くべからず。一切の現肉は、悉く食すべからず。食する者は罪を得。我今是の斷肉の制を唱ふ。若廣說せば、則ち盡すべからず。涅槃時到る。是の故に略說す、是を則ち名けて能隨問答と爲す。

(五)迦葉云何が善解因緣義なる。如四部の衆來りて我に問うて言ふ有らん「世尊、是の如きの義、如來初出何が故ぞ波斯匿王の爲に、是の法門深妙の義を說かずして、或時は深と說き、或時は淺と說き或は名けて犯と爲し、或は不犯と名く。云何が墮と名け、云何が律と

【波羅提木叉】戒律の異稱。プラテイモクシャ（Prātimokṣa）の音譯。別解脫と譯す。

【四惡趣】地獄、餓鬼、畜生、修羅の四趣。

【阿鼻】阿鼻旨とも書く。原名アビーチ（Avīci）無間と譯す。八熱地獄の最下無間地獄のこと。この地獄に墮せるものは苦を受くること間なきを以て無間と云ふ。

【戒威儀】毘尼藏即ち律藏をさす。

【深經】修多羅藏即ち經藏をさす。

【善義】阿毘曇藏即ち論藏をさす。

【四重】四種の極重罪の意にして四波羅夷即ち殺盜淫妄の四重罪なり。これを犯すものは精神的死罪にして再び佛門に入ることを得ず。

名け、云何が、波羅提木叉の義と名くる」と。佛の言はく「波羅提木叉とは、名けて知足と爲す。威儀を成就し、受畜する所無し。亦、淨命と名く。墮とは四惡趣を名く。又復墮とは地獄に墮し、乃至阿鼻、其の遲速を論ぜば暴雨に過ぎたり。聞く者驚怖し、堅く禁戒を持して威儀を犯さず。知足を修習して一切の不淨の物を受けず。又復墮とは、地獄、畜生、餓鬼を長養す。是の諸義を以ての故に名けて墮と曰ふ。波羅提木叉とは、身、口、意の不善邪業を離る。律とは、戒威儀深經、善義に入り、一切不淨の物を受け、及び不淨の因緣を遮す。亦四重、十三僧殘、二不定法、三十捨墮、九十一墮、四悔過法、衆多學法、七滅諍等を遮す。或は復人有りて一切戒を破す。云何が一切。四重法、乃至七滅諍法を謂ふ。或は復人有りて、正法の甚深經典を誹謗し、及び一闡提、具足成就し、一切相を盡して因緣有ること無し。是の如き等の人、自ら「我は是聰明利智」と言ふ。輕重の罪、悉く皆覆藏す。諸惡を覆藏すること、龜の六を藏すが如し。是の如きの衆罪、長夜悔いず。不悔を以ての故に、日夜增長す。是の諸の比丘、犯す所の衆罪、終に發露せず。是所犯をして遂に復滋蔓せしむ。是の故に如來、是の事を知り已りて、漸次に制して一時にすることを得ず。」

爾の時に善男子、善女人有りて佛に白して言さく「世尊、如來久しく是の如きの事を知る。何ぞ先制せざるや。將世尊、衆生をして阿鼻獄に入らしめんと欲すること無きや。譬へば多人、他方に至らんと欲して正路を迷失し邪道に隨逐す。是の諸人等、迷を知らざる

【十三僧殘】四波羅夷罪の次の重罪にしてその數十三あり。僧としての生命が僧殘存せる程度の罪なり。
【二不定法】罪性不定のもの、一種の嫌疑罪なり。之に二種あり。
【三十捨墮】棄捨すべき墮罪の意。之に三十あり。
【九十一墮】三十捨墮罪に次ぎ捨すべき財物なき故に單に懺悔罪なり。之に九十一あり。
【四悔過法】說罪とも云ふ。衆僧の前にて懺悔すべき罪之に四種あり。
【衆多學法】百學法とも云ふ。僧の學修すべき戒。之に百あり。日常の規範なり。
【七滅諍法】僧侶間の諍議を止め之を判決する七種の方法なり。以上四重より以下は小乘の戒律なり。

が故に皆是道と謂ふ。復人の是非を問ふべきを見ざるが如し。衆生是の如く、佛法に迷ひ正眞を見ず。如來、爲に先に正道を說き、諸の比丘に、此は是犯戒、此は是持戒と敕し、當に是の如く制すべし。何を以ての故に、如來正覺是眞實とは、正道を知見し、唯如來天中の天有りて、能く十善增上の功德、及び其の義味を說く。是の故に啓請す。先に戒を制すべし。」佛の言はく、「善男子、若如來、能く衆生の爲に、十善增上の功德を宣說すと言はば、是則ち如來、諸の衆生を視ること羅睺羅の如し。云何ぞ難じて、將世尊、衆生をして地獄に入らしめんと欲すること無しと言はん。我一人の阿鼻地獄に墮する因緣有るを見ば、倘是の人の爲に世に住すること一劫、若は滅一劫せん。我衆生に於て大慈悲有り、何に緣りてか、當に子想の如くする者を誑して地獄に入らしむべき。善男子、王の國內に納衣者有りて、衣に孔有るを見て、然して後乃ち補ふが如し。如來も亦爾なり。諸の衆生に、阿鼻地獄に入る因緣有るを見て、卽ち戒善を以て爲に之を補ふ。善男子、譬へば轉輪聖王の先に衆生の爲に十善の法を說き、其の後に漸漸惡を行ふ者有らば、王卽ち事に隨ひて以て漸く之を斷ず。諸惡を斷じ已りて、然して後自ら聖王の法を行ふが如し。善男子、我も亦是の如し。所說有りと雖も先制を得ず。要ず比丘、漸く非法を行ずるに因りて、然して後に方に乃ち事に隨ひて之を制し、樂法の衆生、敎に隨つて修行す。」是の如き等の衆、乃ち能く如來法身を見ることを得。轉輪王の所有の輪寶思議すべからざるが如し。如來も亦爾なり。思議すべからず。法僧二寶も亦不可思議、能說法者、及び聞法者も皆不可思議なり。

【具足成就】茲には一切の惡を具足し成就する意。
【一切相】一切の善の意。
【龜の六】四足と頭と尾。
【六】四相一相を明す。初に四一を明す。
【四事】四相をさす。
【七】涅槃を料簡す。

是を善解因縁義と名くるなり。菩薩是の如く四種相義を分別開示す。是を大乘大涅槃中の因縁義と名くるなり。

（六）復次に自正とは、所謂是の大般涅槃を得。正他とは、我比丘の爲に說きて「如來は常に存して不變なり」と言ふ。隨問答とは、迦葉、汝が所問に因るが故に、廣く菩薩摩訶薩、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の爲めに是の甚深微妙の義を說くことを得。因縁義とは、聲聞、緣覺、是の如きの甚深の義を解せず。伊字の三點、解脫涅槃摩訶般若を成じ、祕密藏を成ずるを聞かず。我今、此に於て闡揚分別して、諸の聲聞の爲めに慧眼を開發す。假使人有りて、是の如きの言を作す。是の如きの四事、云何ぞ一つと爲す、虛妄に非ずや。即ち反質すべし。是の虛空、無所有、不動、無閡、是の如きの四事、何等の異有る。是豈に名けて虛妄と爲すことを得んや。「不なり世尊、是の如きの諸句は、即ち是一義なり。所謂空の義なり。自正、正他、能隨問答、解因縁の義も、亦復是の如し。即ち大涅槃、等しくして異有ること無し。」

（七）佛、迦葉に告げたまはく、「若し善男子、善女人有りて、是の如きの言を作さく、「如來無常、云何が當に是無常と知るべきや。佛の言ふ所の如きは、諸の煩惱を滅するを名けて涅槃と爲す。猶し、火滅して悉く有る所無きが如し。諸の煩惱を滅するも亦復是の如し。故に涅槃と名く。云何ぞ如來、常住法、不變易と爲すや。佛の言に曰へるが如きは、諸有を離るるをば、乃ち涅槃と名く。是の涅槃の中諸有有ること無し。云何ぞ如來、常住法不變

【法常】法常樂我淨の略。
【亦常】亦常樂我淨の略。
【八】常無常の論義を擧ぐ。

易と爲すや。衣の壞し盡くれば、名けて物と爲さざるが如し。涅槃も亦爾なり。諸の煩惱を滅すれば、名けて物と爲さず。云何ぞ如來、常住法不變易と爲すや。佛の言に曰へるが如きは、離欲寂滅を名けて涅槃と曰ふ。人の首を斬れば、則ち首有ること無きが如し。離欲寂滅も亦復是の如し。空にして有る所無し。故に涅槃と名く。云何ぞ如來、常住法不變易と爲すや。佛の言に曰へるが如きは、譬へば熱鐵の椎打ずるに、星流れ散じ已りて、尋いで滅して所在を知ること莫きが如し。正解脱を得るも亦復是の如し。已に淫欲諸有の淤泥を度り、無動處を得ば所至を知らず。云何ぞ是來常住法不變易と爲すや。』『迦葉、若人の是の難を作す者有らば、名けて邪難と爲す。迦葉汝も亦是の憶想を作して、如來性是滅盡と謂ふべからざるなり。迦葉、煩惱者を滅するを、名けて物と爲さず。何を以ての故に。永畢竟の故に。是の故に常と名く。是の句寂靜、上有ること無しと爲す。諸相を滅盡して遺餘有ること無し、是の句鮮白常住無退。是の故に涅槃を名けて常住と曰ふ。如來も亦爾なり、常住にして變無し。星流と言ふは煩惱を謂ふなり。散じ已りて、尋いで滅して所在を知ること莫しとは、諸の如來、煩惱滅し已りて、五趣に在らざるを謂ふ。是の故に如來是常住の法にして、變易有ること無し。復次に迦葉、諸佛の師とする所は、所謂法なり。是の故に如來恭敬供養す。法常を以ての故に、諸佛も亦常なり。』

(八)迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『若煩惱の火滅すれば如來も亦滅せん。是則ち如來常住の處無し。彼の迸鐵の赤色滅し已りて、所至を知ること莫きが如し。如來煩惱も亦復是の

【後宮】統化の境にして閻浮提を喩へ、後園は賞翫の所にして常樂我淨を譬ふと云ふ。

如く滅して所至無し。又彼の鐵の、熱と赤色と滅し已りて有ること無きが如し。如來も亦爾なり、滅し已れば無常なり。煩惱の火を滅して便ち涅槃に入る。當に知るべし、如來即ち是無常なり。』『善男子、言ふ所の鐵とは諸の凡夫を名く。凡夫の人は、煩惱を滅すと雖も、滅し已りて復生ず。故に無常と名く。如來は爾らず。滅し已りて生ぜず、是の故に常と名く。』『迦葉、復言さく、『鐵、色滅し已りて、還つて火中に置けば、赤色復生ずるが如し。如來若し爾らば、應に還つて結を生ずべし。若し結還つて生ぜば、即ち是無常なり。』佛の言はく、『迦葉、汝今是の如き言を作すべからず。「如來無常」と。何を以ての故に。如來是常なればなり。善男子、彼の木を然し、滅し已りて灰有るが如く、煩惱滅し已りて便ち涅槃有り。壞衣、斬首、破缾等の譬も亦復是の如し。是の如き等の物、各名字有り。名けて壞衣、斬首、破缾と曰ふ。迦葉、鐵の冷え已りて、還つて熱からしむべきが如く、如來は爾らず、煩惱を斷じ已りて畢竟清涼なり。煩惱の熾火更に復生ぜず。迦葉當に知るべし、無量の衆生は猶し彼の鐵の如し。我無漏の智慧の熾火を以て彼の衆生の諸の煩惱結を燒く。』『迦葉、復言さく、『善い哉善い哉。我今諦かに如來所說の諸佛是常を知る。』佛の言はく、『迦葉、譬へば聖王後宮に處在し、或時遊觀して後園に在り。王諸の采女の中に在らずと雖も、亦聖王、命終と言ふことを得ざるが如し。善男子、如來も亦爾なり。閻浮提界に現ぜず、涅槃の中に入ると雖も、無常と名けず、如來無量の煩惱を出でて涅槃安樂の處に入り、諸の覺華に遊びて觀娛受樂す。』

【九】廣く身密を開す。
【耶輸陀羅】ヤショーダラー(Yaśodharā)釋尊在俗の時の妃拘利城主善覺王の女。

(九)迦葉、復問はく『佛の言に曰へるが如きは、「我已に久しく煩惱の大海を度す」と。若し佛、已に煩惱の海を度しなば、何に緣りてか、復耶輸陀羅を納れて羅睺羅を生ずる。此の因緣を以て、當に知るべし。如來未だ煩惱諸結の大海を度したまはず。唯願はくば如來、其の因緣を說きたまへ』。佛、迦葉に告げたまはく『汝言ふべからず。如來久しく煩惱の大海を度せば、何に緣りてか、復、耶輸陀羅を納れて羅睺羅を生ず。是の因緣を以て、當に知るべし、「如來、未だ煩惱諸結の大海を度せず」と。善男子、是の大涅槃は、能く大義を建つ。汝等、今當に至心に諦らかに聽くべし。廣く人の爲めに說く、驚疑を生ずること莫れ。若菩薩摩訶薩、大涅槃に住する有らば、須彌山王、是の如く高廣なる、悉く能く取りて芥子に入れしむ。其の諸の衆生、須彌に依らば、亦迫迮ならず。往來の想無く、本の如く異ること無し。唯應度の者、是の菩薩須彌山を以て芥子の中に內れ、復還つて本の所住の處に安止するを見る。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、能く三千大千世界を以て芥子に入れ、其の中の衆生も亦迫迮、及び往來の想無く、本の如く異なること無し。唯應度の者、見是の菩薩の、此の三千大千世界を以て芥子の中に內れ、復還つて本所住の處に安止するを見る。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、能く三千大千世界を以て一毛孔に入れ、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有り。十方の三千大千諸佛世界を斷取して針鋒に置き、棗葉を貫くが如くにして、他方の異佛世界に擲著す。其の中の衆生、往反何れの處に在りと爲すを覺えず。唯應度の者、乃ち

【首楞嚴經】シューランガマスートラ(Śuraṅgamasūtra) 勇健經と譯す。現存のものなりや否や不明なり。

【林微尼園】ルンビニー(Lumbini) 園、釋尊降誕の地なり。

能く之を見、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、十方の三千大千諸佛世界を斷取して右掌に置き、陶家の輪の如く、他方の微塵世界に擲置す。一りの衆生の往來の想有る無し。唯應度の者、乃ち之を見るのみ、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復、菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、一切十方の無量諸佛世界を斷取して、悉く己身に內る。其の中の衆生悉く迫迮ならず、亦、往反及び住處の想無し。唯應度の者、乃ち能く之を見、乃至本處も亦復是の如し。善男子、復、菩薩摩訶薩の大涅槃に住する有りて、十方の世界を以て一塵の中に內る。其の中の衆生も亦迫迮往反の想無し。唯應度の者、乃ち能く之を見る。乃至本處も亦復是の如し。善男子、是の菩薩摩訶薩大涅槃に住すれば、則ち能く種種無量の神通變化を示現す。是の故に名けて大般涅槃と曰ふ。此の菩薩摩訶薩の示現すべき所の、是の如きの無量の神通變化は、一切衆生の能く測量する無し。汝今、云何ぞ能く如來愛欲に習近して、羅睺羅を生ずと知らんや。善男子、我已に久しく是の大涅槃に住して、種種に神通變化を示現す。此の三千大千世界の百億の日月、百億の閻浮提に於て、種種示現すること、首楞嚴經の中に廣く說くが如し。我三千大千世界に於て、或は閻浮提に涅槃を示現す。亦畢竟じて涅槃を取らず。或は閻浮提に母胎に入るを示し、其の父母をして我が子の想を生ぜしむ。而も我が此の身、畢竟じて愛欲和合に從ひて生ずるを得ざるなり。我已に久しく、無量劫より來た愛欲を離れ、我が今此の身、卽ち是法身なり。世間に隨順して入胎を示現す。善男子、此の閻浮提林微尼園に、

【摩耶】(Māyā) マーヤー釋尊の母、淨飯王の后なり。

【頂相】無見頂相の略、如來の頭頂に存する特相。三十二相の一。

母摩耶よりして生ずるを示現し、生じ已りて卽ち能く東行七歩して、是の如きの言を唱ふ。「我人天、阿修羅の中に於て最尊最上」と。父母、人天見已りて驚喜し、希有の心を生ず。是の諸人等是嬰兒と謂ふ。而も我が此の身、無量劫來久しく是の法を離る。是の如きの身は卽ち是法身、是肉血、筋脈、骨髓の成立する所に非ず。世間の衆生法に隨順するが故に、示して嬰兒と爲す。南行七歩して、無量の衆生の爲に上福田と作らんと欲するを示現す。西行七歩して、生盡きて永く老死を斷じ、是最後身なるを示現す。北行七歩して、已に諸有の生死を度るを示現す。東行七歩して、衆生の爲に導首と作ることを示す。四維七歩して、種種の煩惱、四魔の種性を斷滅して、如來、應供、正徧知と成ることを示現す。上行七歩して不淨の物に染汙する所と爲らざること、猶し虛空の如くなるを示現す。下行七歩して、法雨地獄の火を滅して、彼の衆生をして安隱樂を受けしむるを示現す。禁戒を毀る者に霜雹を示作す。閻浮提に於て　生じて七日し已りて剃髮を示現す。諸人皆、我是嬰兒初始て髮を剃ると謂ふ。一切の人天、魔王、波旬、沙門、婆羅門、能く我が頂相を見る者有ること無し。況や刀を持し、之に臨みて髮を剃ること有らんや。若刀を持して我が頂に至る者有らば、是の處有ること無し。我已に久しく無量劫の中に於て鬚髮を剃除す。世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、剃髮を示現す。我既に生じ已りて、父母我を將て天祠の中に入り、我を以て彼の摩醯首羅に示す。摩醯首羅卽ち我を見る時、合掌恭敬し、立ちて一面に在り。我已に久しく無量劫の中に於て、是の如きの人天祠法を捨離す。世間法

【五欲】五官の欲を誘引する色聲香味觸の五境を云ふ。

【悉達太子】釋尊在俗時の太子名。シッダールタ(Siddhārtha)

【具足戒】比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒を云ふ。一切の戒律を具備するが故に具足戒と云ふ。

に隨順せんと欲するが爲の故に、是の如きを示現す。我閻浮提に於て耳を穿つを示現す、一切衆生、實に能く我が耳を穿つ者有ること無し。世間の衆生法に隨順するが故に、是の如きを示現す。復、諸寶を以て師子璫を作りて、其の耳を莊嚴す。然るに我、已に無量劫の中に於て莊嚴具を離れ世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、是の示現を作す。學堂に入りて書疏を修學するを示す。然るに我、已に無量劫の中に於て具足成就す。徧く三界の所有の衆生を觀るに我が師と爲るに堪任する者有ること無し。世間法に隨順せんと欲するが爲の故に、學堂に入るを示す。故に如來、應供、正徧知と名く。乘象、槃馬、角力、種種の技藝を習學するも、亦復是の如し。閻浮提に於て、復、王の太子と爲ることを示現す。衆生皆、我太子と爲り。五欲の中に於て歡喜受樂すと見る。然るに我、已に無量劫の中に於て、是の如きの五欲の樂を捨離す。世間の法に隨順せんと欲するが爲の故に、是の如きの相を示す。相師我を占す「若し出家せずば、當に轉輪聖王と爲りて閻浮提に王たるべし。」一切衆生、皆是の言を信ず。然るに我、已に無量劫の中に於て轉輪位を捨て法輪王と爲る。閻浮提に於て采女五欲の樂を離れ、老、病、死及び沙門を見已り、出家して道を修するを現す。衆生皆、悉達太子初始て出家すと謂ふ。然るに我、已に無量劫中に於て出家學道し、世法に隨順す。故に是の如きを示す。我、閻浮提に於て出家して具足戒を受け、精勤修道して須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果を得るを示現す。衆人皆是、阿羅漢果得易く難からずと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て阿羅漢果を成ず。諸の衆生を度脱せ

【須陀洹果】佛道修行に於ける聖者の地位にして聲聞四果中の初果なり。原名スローターパンナ（Srotāpanna）預流果と譯す。

【斯陀含果】聲聞四果中の第二の地位にして原名サクリッダーガーミン（Sakṛdāgāmin）一來果と譯す。第二果の聖者なり。

【阿那含果】聲聞四果中第三の地位にして、原名アナーガーミン（Anāgāmin）不還果と譯す。第三果の聖者なり。

【阿羅漢果】聲聞四果中第四の地位にして最高なり。聲聞は之を極果とす。原名アルハーン（Arhan）殺賊、應供等と譯す。

【優鉢羅香】優鉢羅は青蓮、その香甚だ淨潔なりと云ふ。

んと欲するが爲の故に、道場の菩提樹下に坐し、草を以て座と爲し、衆魔を摧伏す。衆皆、我始めて道場の菩提樹下に於て、魔宮を降伏すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て、久しく降伏し已り、剛彊の衆生を降伏せんと欲するが爲の故に、是の化を現ず。我又、大小便利、出息、入息を示現す。衆皆、我實に便利、出息、入息有りと謂ふ。然るに我が是の身、所得の果報、是の諸患無く世間に隨順す。故に是の如きを示す。我又、人の信施を受くるを示現す。然るに我是の身、都て饑渇無く、世法に隨順す。故に是の如きを示す。我又、諸の衆生に示同するが故に睡眠有るを現ず。然るに我、已に無量劫の中に於て、無上の深妙の智慧を具足し、三有の進止威儀、頭目腹背、擧身疾痛、木鎗債對、盥洗手足、澡面漱口、楊枝自淨を遠離す。衆皆、我是の如きの事有りと謂ふ。然るに我が是の身、都て此無きなり。手足清淨、猶し蓮華の如く、口氣淨潔、優鉢羅香の如し。一切衆生、我是人と謂ふ。我實に人に非ず。我又糞掃衣を受け、澣濯縫治するを示現す。然るに我、久しく已に是の衣を須ひず。衆人皆、羅睺羅は是我が子、輸頭壇王は是我が父、摩耶夫人は是我が母、世間に處在して諸の快樂を受く。是の如きの事を捨て、出家學道すと謂ふ。衆人復言さく「是王の太子瞿曇大姓、世樂を遠離して出世の法を求む。」と。然るに我、久しく世間の愛欲を離る。是の如き等の事は悉く是示現す。一切の衆生、咸く是人と謂ふ。然るに我、實には非なり。善男子、我此の閻浮提の中に在りて、數數示現して涅槃に入ると雖も、然れども我、實は畢竟涅槃せず。而も諸の衆生、皆如來眞實に滅盡すと謂ふ。而も

【輸頭壇王】シュッドーダナ(Suddhodana)白飯又は淨飯と譯す。釋尊の父王。迦毗羅衞國王。

【瞿曇】ゴウタマ(Gautama)釋尊の俗姓。

【閻浮提】須彌山を中心としたる四洲の一。南方に位す。前に註す。

如來性は實に永く滅せず。是の故に當に知るべし。「是常住法、不變易法なり。」善男子、大涅槃とは、即ち是諸佛如來法界、我又、閻浮提中世間に出づるを示現す。衆生皆、我始めて成佛すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て、所作已に辦じ、世法に隨順す。故に復、閻浮提に於て出家、成佛を示現す。我又、閻浮提に於て禁戒を持せず、四重罪を犯すを示現す。衆人皆見て、我實に犯すと謂ふ。然るに我、已に無量劫の中に於て、堅く禁戒を持して漏缺有ること無し。我又、閻浮提に於て、一闡提と爲るを示現す。衆人皆、是一闡提と見る。然るに我、實は一闡提に非ざるなり。一闡提ならば、云何ぞ能く阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。我又、閻浮提に於て、和合僧を破するを示現す。衆生皆、我是破僧と謂ふ。我人天を觀るに、能く和合僧を破する者有ること無し。我又、閻浮提に於て、正法を護持するを示現す。衆人皆、我是護法と謂ひ、悉く驚怪を生ず。諸佛法爾なり、驚怪すべからず。我又、閻浮提に於て、魔波旬と爲るを示現す。衆人皆、我是波旬と謂ふ。然るに我久しく無量劫の中に於て、魔事を離れ、清淨無染なる猶し蓮華の如し。我又、閻浮提に於て、女身佛と成るを示現す。衆人之を見て、皆甚だ奇なり、女人能く、阿耨多羅三藐三菩提を成ずと言ふ。如來畢竟女身を受けず。無量の衆生を調伏せんと欲するが爲の故に女像を現ず。一切諸の衆生を憐愍するが故に、復種種の色像を示現す。我又閻浮提の中、四趣に生ずるを示現す。然るに我、久しく已に諸趣の因を斷ず。業因を以ての故に四趣に墮せんや。衆生を度せんが爲の故に是の中に生ず。我又閻浮提の中、梵天王と作ることを

示現して、梵に事ふる者をして正法に安住せしむ。然るに我實は非、而も諸も衆生は咸く皆、我眞の梵天と爲ると謂ふ。天像を示現し。諸の天廟に徧うするも、亦復是の如し。我又閻浮提に於て、淫女の舍に入るを示現す。然るに我、實は貪欲の想無く、清淨にして汚れざること、猶し蓮華の如し。諸の貪淫著色の衆生の爲に、四衢道に於て妙法を宣說す。然るに我、實は欲穢の心無し。衆人、我女人を守護すと謂ふ。我又閻浮提に於て、青衣の舍に入ると示現す。誘化して正法に住せしめんと欲するが爲なり。然るに我、實は是の如きの惡業、青衣に墮在すること無し。我又閻浮提の中、教師と作るを示現し、童蒙を開化して正法に住せしむ。我又閻浮提に於て、諸の酒會、博奕の處に入るを示現す。種種の勝負、諍訟を示現して、彼の諸の衆生を拔濟せんと欲するが爲にす。而も我、實は是の如きの惡業無し。而も諸の衆生、皆我、是の如きの業を作すと謂ふ。我又、久しく冢間に住して大鷲の身と作るを示現し、諸の飛鳥を度す。而も諸の衆生皆、我是眞實の鷲身と謂ふ。然るに我、久しく已に是の業を離る。彼の諸鳥鷲を度せんと欲するが爲の故に、是の如きを示現す。我又閻浮提の中、大長者と作るを示現す。無量の衆生を安立して、正法に住せしめんと欲するが爲なり。又復示して諸王、大臣、王子、輔相と作る。是の衆中に於て、各第一と爲す。正法を修せんが爲の故に、王位に處す。我又閻浮提の中、疫病劫起り、多くの衆生有りて、病に惱され、先に醫藥を施し、然して後に、爲に微妙正法を說き、其をして、無上菩提に安住せしむるを示現す。衆人皆、是病劫起ると謂ふ。又復閻浮提の中、饑

【東弗于逮】プールヴヴデーハ(Pūrvavideha)勝身と譯す。須彌四洲の一。東方に位す。
【西瞿耶尼】アパラガダーニー(Aparagadānī)牛貨と譯す。須彌四洲の一西方に位す。
【北欝單越】ウッタラクル(Uttarakuru)最上と譯す須彌四洲の一。北方に位す。
【八】常住に就て問答す。

餓劫起り、其の所須に隨ひて飲食を供給し、然して後、爲に微妙正法を說きて、其をして、無上菩提に安住せしむるを示現す。又復閻浮提の中、刀兵劫起り、卽ち爲に法を說き、怨害を離れしめ、無上菩提に安住することを得しむるを示現す。又復示現して、計常想の者の爲に無常想を說き、計樂想の者の爲に苦想を說き、計我想の者に無我想を說き、計淨想の者に不淨想を說く。若衆生の三界に貪著する有らば、卽ち爲に法を說きて、是の處を離れしむ。衆生を度するが故に、爲に無上微妙の法藥を說く。一切煩惱の樹を斷ぜんが爲の故に、無上法藥の樹を種植す。諸の外道を拔濟せんと欲するが爲の故に、正法を演說す。復示現して、衆生の師と爲ると雖も、而も心初べて衆生の師の想無し。諸の下賤を拔濟せんと欲するが爲の故に、現じて其の中に入りて、爲に法を說く。是惡業、是の身を受くるに非ざるなり。如來正覺、是の如く大般涅槃に安住す。是の故に名けて常住無變と爲す。閻浮提の如く、東弗于逮、西瞿耶尼、北欝單越も亦復是の如し。四天下の如く、三千大千世界も亦復是の如し。二十五有、首楞嚴經の中に廣く說くが如し。是を以ての故に大般涅槃と名く。若菩薩摩訶薩、是の如きの大般涅槃に安住する有らば、能く是の如きの神通變化を示して畏るる所無し。迦葉、是の緣を以ての故に、汝羅睺羅は、是佛の子と言ふべからず。何を以ての故に。我往昔、無量劫の中に於て、已に欲有を離る。是の故に如來、名けて常住にして變易有ること無しと曰ふ。』

(八)迦葉復言さく、『如來、云何が名けて常住と曰ふ。佛の言に曰へるが如きは、「燈滅し已

りて方所有ること無きが如し」と。如來も亦爾なり。既に滅度し已らば亦方所無し。」佛の言はく『迦葉、善男子、汝今是の如きの言を作すべからず。「燈滅盡し已りて方所有ること無し。如來も亦爾なり。既に滅度し已らば方所有ること無し」と。善男子、譬へば男女燈を然すの時、燈器の大小悉く中に油を滿つ。油在ること有るに隨ひて其の明猶存す。若油盡き已らば、明も亦俱に盡くるが如し。其の明滅するは煩惱滅を譬へ、明滅盡すと雖も燈器猶存す。如來も亦爾なり。煩惱滅すと雖も法身常存す。善男子、意に於て云何。明と燈器と俱に滅すと爲んや、否や。」迦葉、答へて言さく「不なり世尊、俱に滅せずと雖も然も是無常なり。若法身を以て燈器に譬へば、燈器無常なれば法身も亦爾なり。是無常なるべし。」「善男子、汝今是の如きの難を作すべからず。世間に器と言ふが如く、如來世尊は無上の法器なり。彼の器は無常、如來には非ざるなり。一切法の中、涅槃を常と爲す。如來之を體す、故に名けて常と爲す。復次に善男子、燈滅と言ふは、是阿羅漢所證の涅槃なり。貪愛の諸の煩惱を滅するを以ての故に、是を燈滅に譬ふ。阿那含をば名けて有貪と曰ふ。貪有るを以ての故に、說きて「燈滅に同じ」と言ふことを得ず。是の故に我、昔覆相に說きて「譬へば燈滅の如し」と言ふ。大涅槃を燈滅に同じうするに非ず。阿那含は數數來るに非ず。又二十五有に還來せず。更に復臭身、蟲身、食身、毒身を受けず。是則ち名けて阿那含と爲すなり。若更に身を受くるは名けて那含と爲し、身を受けざるは阿那含と名く。去來有るは名けて那含と曰ひ、去來無きは阿那含と名く。』

【四相品下】此品は前品に繼ぎ、如來の意密を開說する章なり。
【一】如來の意密を開く如來の祕密藏について論議す。

大般涅槃經　卷第五

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

四相品第七之下

（一）爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、佛の說きたまふ所の如きは「諸佛世尊に祕密藏有り」と。是の義然らず。何を以ての故に。諸佛世尊には唯密語有りて密藏有ること無し。譬へば幻主、機關、木人の、人の屈伸俯仰を覩見すと雖も、其の內、之をして然らしむるを知ること莫きが如し。佛法は爾らず。咸く衆生をして、悉く知見することを得しむ。云何ぞ當に「諸佛世尊に祕密藏有り」と言ふべき。」佛、迦葉を讚じたまはく「善い哉善い哉善男子、汝が言ふ所の如く「如來實に祕密の藏無し。」何を以ての故に。秋滿月の空に處して顯露、清淨にして翳無く、人皆覩見するが如し。如來の言も亦復是の如し。開發顯露清淨にして翳無し。愚人解せず、之を祕藏と謂ふ。智者了達すれば、則ち藏と名けず。善男子、譬へば人有りて、多くの金銀を積みて無量億に至る。其の心慳吝にして、肎て惠施して貧窮を拯濟せず。是の如く積聚するを、乃ち祕藏と名くるが如し。如來は爾らず。無量劫に於て無量の妙法、珍寶を積聚し、心に慳吝無く、常に以て一切衆生に惠施す。

【刹利】刹帝利とも書く。クシヤトリヤ(Kṣatriya)の音譯。印度四姓中の一。王族武士の階級なり。
【毘舍】ヴイシヤ(Vaiśya)の音譯。印度四姓中の一、商事業に從事する平民階級なり。
【首陀】シユードラ(Śūdra)の音譯。最下級の種族にして賤民奴隸の類なり。

云何ぞ當に「如來祕藏す」と言ふべき。善男子、譬へば人有りて身根具せず、或は一目、一手、一足無く、羞恥を以ての故に人をして見せしめず。人見ざるが故に、名けて祕藏と爲すが如し。如來は爾らず。所有の正法具足して缺くること無く、人をして覩見せしむ。云何ぞ當に「如來祕藏す」と言ふべき。善男子、譬へば貧人、多く人の財を負ひ、債主を怖畏し、隱れて現ることを欲せず。故に名けて藏と爲すが如し。如來は爾らず。一切衆生の世法を負はず。衆生の出世の法を負ふと雖も、而も亦藏せず。何を以ての故に。恆に衆生に於て一子の想を生じて、爲に無上法を演說するが故なり。善男子、譬へば長者、多くの財寶有りて唯一子有り。心甚だ愛重し、情捨離すること無く、所有の珍寶悉く用ひて之を示すが如し。如來も亦爾なり。諸の衆生を視ること一子に同じうす。善男子、世間の人、男女の根の醜陋鄙惡なるを以て衣を以て覆蔽す。故に名けて藏と爲すが如し。如來は爾らず。永く此の根を斷ず。無根を以ての故に覆藏する所無し。善男子、婆羅門所有の語論の如きは、終に刹利、毘舍、首陀等をして聞かしむることを欲せず。何を以ての故に。此の論の中には過惡有るを以ての故なり。如來の正法は則ち是の如くならず。初、中、後善なり。是の故に名けて祕藏と爲すことを得ず。善男子、譬へば長者に唯一子有り。心に常に憶念し憐愛して已むこと無く、將ゐて師の所に詣りて、受學せしめんと欲す。速かに成らざることを懼れ、尋で便ち將ゐて還り、愛念を以ての故に、晝夜殷勤に其に半字を教へ而も毘伽羅論を教へず。何を以ての故に。其の幼穉にして力未だ堪へざるを以ての故なる

【毘伽羅論】ギャカラナ(Vyākaraṇa)聲明論と譯す語學に關する俗書の總書なり。

が如し。善男子、假使長者、半字を教へ已りて、是の兒即時に能く毘伽羅論を了知することを得んや、否や。』『不なり世尊。』『是の如きの長者、是の子所に於て祕藏有りや、不や。』『不なり世尊、何を以ての故に。子年幼を以ての故に爲に說かず。祕吝を以て顯示せざるにあらず。所以は何ん。若嫉妬、祕吝の心有らば、乃ち名けて藏と爲す。如來は爾らず。云何ぞ當に如來祕藏と言ふべき。』佛の言はく『善い哉善い哉善男子、汝が言ふ所の如し。若瞋心、嫉妬、慳吝有らば、乃ち名けて藏と爲す。如來は瞋心、嫉妬有ること無し、云何ぞ藏と名けん。善男子、彼の大長者は如來を謂ふなり。一子と言ふは一切衆生を謂ふ。如來等しく一切衆生を視ること猶し一子の如し。敎一子とは聲聞の弟子を謂ひ、半字とは九部經を謂ひ、毘伽羅論とは所謂方等大乘經典なり。諸の聲聞、慧力有ること無きを以て、是の故に如來、爲に半字九部經典を說く。而も爲に毘伽羅論、方等大乘を說かず。善男子彼の長者の子、既に長大して讀學に堪任せんに、若爲に毘伽羅論を說かずば、名けて藏と爲すべきが如し。若諸の聲聞、力能く大乘毘伽羅論を受くるに堪任する有らんに、如來祕惜して爲に說かざれば、如來、祕密藏有りと言ふべし。如來は爾らず。是の故に如來、祕藏すること有ること無し。彼の長者、半字を教へ已りて、次に爲に毘伽羅論を演說するが如し。我も亦是の如し。諸の弟子の爲に、半字九部經を說き已りて、次に爲に毘伽羅論を演說す。所謂如來常存不變なり。

復次に善男子、譬へば夏月に大雲雷を興し、大雨を降澍して諸の農夫の種子を下す者を

して、多く果實を獲しむるが如し。種を下さざる者は收獲する所無し。獲る所無きは龍王の咎に非ず。而も此の龍王も亦藏する所無きが如し。我も亦是の如し。大法雨なる大涅槃經を降す。若諸の衆生の善子を種うる者は慧の牙果を得、善子無き者は則ち獲る所無し。獲る所無きは如來の咎に非ず。然るに佛如來、實は藏する所無し。」迦葉復言さく「、我今、定んで如來世尊の祕藏したまふ所無きを知る。佛の所說の如く「毗伽羅論は佛如來の常存不變を謂ふ」とは是の義然らず。何を以ての故に。佛昔偈を說きたまひ、

諸佛及び緣覺、聲聞の弟子衆
猶無常身を捨つ、何に況や諸〻の凡夫をや

と。今者乃ち常存無變と說く。是の義云何。」佛の言はく「善男子、我一切の聲聞の弟子の爲に、半字を敎ふるが故に、是の偈を說く。善男子、波斯匿王其の母命終し、悲號戀慕自ら勝ふこと能はず。我が所に來至す。我卽ち問ひて言はく「、大王、何が故ぞ悲苦懊惱し、乃ち此に至るや。」王の言さく「世尊、國の大夫人某日命終す。假使能く我が母をして、命還つて本の如くならしむる者有らば、我當に國、象馬、七珍、及以身命を捨て、悉く以て之を報ずべし。」我復語りて言はく「大王、且く愁惱、憂悲、啼哭すること莫れ。一切衆生の壽命盡くる者、之を名けて死と爲す。諸佛、緣覺、聲聞の弟子尚此の身を捨つ。況や復凡夫をや。」善男子、我波斯匿王の爲に、半字を敎ふるが故に是の偈を說く。我今、諸〻の聲聞の弟子の爲に毗伽羅論を說き、如來常存無有變易と謂ふ。若人有りて如來無常と言は

ば、云何ぞ是の人、舌墮落せざらん。」迦葉復言さく、「佛の所說の如く、

　積聚する所無し、食に於て足ることを知る
　鳥の空を飛ぶに、跡尋ぬべからざるが如し

是の義云何。世尊、此の衆中に於て、誰か名けて無所積聚と爲すことを得ん。誰か復、食知足と名くることを得ん。誰か空を行きて、跡尋ぬべからず。而も此の去る者、何れの方に至ると爲ん。」佛の言はく、「迦葉、夫積聚とは、名けて財寶と曰ふ。善男子、積聚に二種有り。一つには有爲、二つには無爲なり。有爲積聚とは卽ち聲聞行、無爲積聚とは卽ち如來行なり。善男子、僧も亦二種あり。有爲、無爲なり。有爲僧とは名けて聲聞と曰ふ。聲聞僧は積聚有ること無し。所謂奴婢非法の物、庫藏穀米、鹽豉胡麻、大小諸豆なり。若說きて「如來、奴婢、僕使、是の如きの物を畜ふることを聽す」と言ふこと有らば、舌則ち卷縮せん。我が諸の所有の聲聞の弟子を無積聚と名く。亦名けて食知足と爲すことを得。若食を貪る有らば、不知足と名く。食を貪らざる者、是を知足と名く。跡尋ね難しとは、則ち無上菩提の道に近し。我說く「是の人去ると雖も、至ること無し。」」迦葉、復言さく「若有爲僧、尙積聚無し、況や無爲僧をや。無爲僧とは卽ち是如來なり。如來云何ぞ當に積聚有るべき。夫積聚とは、名けて藏匿と爲す。是の故に如來、凡そ說く所有りて吝惜する所無し。云何ぞ藏と名けん。跡不可尋とは、所謂涅槃なり。涅槃の中、日月、星辰諸宿、寒熱風雨、生老病死、二十五有有ること無く、諸の憂苦、及び諸の煩惱を離る。是の如き

の涅槃、如來の住處常に變易せず。是の因緣を以て、如來是の娑羅樹間に至り、大涅槃に於て般涅槃す。』佛迦葉に告げたまはく、『言ふ所の大とは、其の性廣博、猶し人有りて、壽命無量なれば大丈夫と名くるが如し。是の人若能く正法に安住すれば、人中の勝と名く。我が所說の八大人覺の如く、一人有と爲らば多人有と爲さん。若一人八を具すれば則ち最勝と爲す。言ふ所の涅槃とは、諸の瘡疣無きなり。善男子、譬へば人有りて毒箭に射られ多く苦痛を受けんに、良醫に毒箭を拔かれ、塗るに妙藥を以てし、其をして苦を離れ、安樂を受くることを得しむるに値遇せん。是の醫即便城邑、及び諸の聚落に遊び、患苦瘡疣の處に隨ひて、即ち其の所に往いて爲に衆苦を療ずるが如し。善男子、如來も亦爾なり。等正覺を成じて大醫王と爲れり。閻浮提の苦惱の衆生の、無量劫の中に淫、怒、癡の煩惱の毒箭を被り、大苦切を受くるを見、是の如き等の爲に、大乘經の甘露の法藥を說きて、此を療治し已りて、復他方諸の煩惱の毒箭有るの處に至り、佛を示現して其が爲に療治す。是の故に名けて大般涅槃と曰ふ。大般涅槃とは解脫處と名く。衆生を調伏する有るの處に隨ひて、如來、中に於て示現を作す。是の眞實甚深の義を以ての故に大涅槃と名く。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、世間の醫師は、悉く能く一切衆生の瘡疣の病を療治するや、不や。』『善男子、世間の瘡疣は凡そ二種有り。一つには可治、二つには不可治なり。凡そ治すべき者は、醫則ち能く治す。治すべからざる者は、則ち治すること能はず。』迦葉、復言さく、『佛の言ふ如くならば、如來則ち閻浮提に於て衆生を治し已ると爲す。

【非想非非想天】無色界の第四天にして三界の最上位にあり、有頂天とも稱す。

【二】廣く解脫を明す。

若治し已ると言はば、是の諸の衆生、其の中云何ぞ、復未だ涅槃を得る能はざる者有らんや。若未だ悉く得ずば、云何ぞ如來、說きて「治し竟りて他方に至らんと欲す」と言はん。」「善男子、閻浮提内の衆生に二つ有り。一つには有信、二つには無信なり。有信の人は則ち可治と名く。何を以ての故に。定んで涅槃瘡疣無きを得るが故に。是の故に我「閻浮提の諸の衆生を治し已る」と說く。無信の人は一闡提と名く。一闡提とは不可治と名く。一闡提を除きて餘は悉く治し已る。是の故に涅槃を無瘡疣と名く。」「世尊、何等をか涅槃と名く。」「善男子、夫涅槃とは名けて解脫と爲す。」迦葉復言さく、「言ふ所の解脫は、是色と爲んや、非色と爲んや」佛の言はく、「善男子、或は是色有り、或は是色に非ず。非色と言ふは、卽ち是聲聞、緣覺の解脫、是色と言ふは卽ち是諸佛如來の解脫なり。善男子、是の故に解脫も亦色亦非色なり。如來、諸の聲聞の弟子の爲に說きて非色と爲す。」「世尊、聲聞、緣覺若非色ならば、云何が住することを得ん。」「善男子、非想非非想天も亦色、非色なり、我も亦說きて非色と爲す。若人難じて、「非想非非想天若非色ならば、云何が住し去來進止を得」と言はん。是の如きの義、諸佛の境界にして諸の聲聞、緣覺の知る所に非ざるが如し。解脫も亦爾なり。亦色、非色、說きて非色と爲す。亦想、非想、說きて非想と爲す。是の如きの義、諸佛の境界にして諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。」

（二）爾の時に迦葉菩薩、復佛に白して言さく、「世尊、唯願はくば哀憫して、重て廣く大般涅槃の行解脫の義を說くことを垂れたまへ。」佛、迦葉を讚じたまはく、「善い哉善い哉善男子、

眞の解脱とは名けて遠離一切繋縛と曰ふ。若眞の解脱、諸の繋縛を離るれば則ち生有ることと無く、亦和合無し。譬へば父母和合して子を生ずるが如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。是の故に解脱を名けて不生と曰ふ。迦葉、譬へば醍醐の其性清淨なるが如し。如來も亦爾なり。父母の和合に因りて生ずるに非ず、其の性清淨なり。父母有るを示現する所以は諸の衆生を化度せんと欲するが爲の故なり。眞の解脱は即ち是如來なり。如來解脱は二無く別無し。譬へば春秋、諸の種子を下すに、煖潤氣を得れば、尋いで便ち出生するが如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。又解脱とは名けて虚無と曰ふ。虚無即ち是解脱、解脱即ち是如來、如來即ち是虚無なり。作の作す所に非ず。凡そ是の作は、城郭樓觀の如し。眞の解脱とは、則ち是の如くならず。是の故に解脱即ち是如來なり。又解脱とは即ち無爲法なり。譬へば陶師の作り已りて還つて破するが如し。解脱は爾らず。眞の解脱とは不生不滅なり。是の故に解脱即ち是如來なり。如來も亦爾なり。不生不滅、不老不死、不破不壞なり、有爲法に非ず。是の義を以ての故に、名けて「如來大涅槃に入る」と曰ふ。不老不死何等の義か有る。老とは名けて遷變と爲す。髮白く面皺む。死とは身壞れ命終る。是の如き等の法、解脱の中に無し。是の事無きを以ての故に解脱と名く。如來も亦髮白面皺有爲の法無し。是の故に如來老有ること無きなり。老有ること無きが故に則ち死有ること無し。又解脱とは、名けて無病と曰ふ。所謂病とは、四百四病、及び餘の外より來りて身を侵損する者。是の處に無きが故に、故に解脱と名く。疾病無き者即ち眞の解

【分陀利】フンダリーカ（Puṇḍarīka）の音譯。白蓮華。

脫、眞の解脫とは卽ち是如來なり。如來は無病なり、是の故に法身も亦病有ること無し。卽ち是の如きの無病、卽ち是如來なり。死とは名けて身壞命終と曰ふ。是の處、死無し、卽ち是甘露なり。甘露とは卽ち眞の解脫、眞の解脫とは卽ち是如來なり。如來は是の如きの功德を成就す。云何ぞ當に如來無常と言ふべき。若し無常と言はば、是の處有ること無し。是金剛身なり、云何ぞ無常ならん。是の故に如來は命終と名けず。如來は清淨垢穢有ること無し。如來の身は胎に汚されざること、分陀利の本性清淨なるが如し。如來解脫も亦復是の如し。是の如きの解脫、卽ち是如來なり。是の故に如來は清淨無垢なり。又解脫とは諸漏、瘡疣永く遺餘無し。如來も亦爾なり。一切の諸漏、瘡疣有ること無し。又解脫とは鬪諍有ること無し。譬へば饑人の他の飮食を見て、貪奪の想を生ずるが如し。解脫は爾らず。又解脫とは、名けて安靜と曰ふ。凡夫の人言ふ「夫安靜とは、摩醯首羅を謂ふ」と。是の如きの言は、卽ち是虛妄なり。眞の安靜とは、畢竟解脫なり。畢竟解脫は卽ち是如來なり。又解脫とは、名けて安隱と曰ふ。多賊の處を安隱と名けず。淸夷の處を乃ち安隱と名くるが如し。是の解脫の中、怖畏有ること無きが故に安隱と名く。是の故に安隱は卽ち眞の解脫なり。眞の解脫とは、卽ち是如來なり。如來は卽ち是法なり。又解脫は等侶有ること無し。有等侶とは、諸の國王隣國の等しき有るが如し。眞の解脫は則ち是の如くならず。無等侶とは、轉輪聖王の能く與に等しき無きを謂ふ。解脫も亦爾なり、等侶有ること無し。無等侶は卽ち眞の解脫なり。眞の解脫とは、卽ち是如來轉法輪王なり。是の故に如

來等侶有ること無し。等侶有るは是の處有ること無し。又解脱とは無憂愁と名く。憂愁有るは、譬へば國王の彊隣を畏難して、憂愁を生ずるが如し。夫解脱は則ち是の事無し。譬へば怨を壞すれば、則ち憂慮無きが如し。解脱も亦爾なり。是憂畏無し。無憂畏は即ち是如來なり。又解脱とは、無憂喜と名く。譬へば女人の唯一子有り、役に從ひて遠行す。卒に凶問を得、之を聞きて愁苦す。後復活を聞きて、便ち歡喜を生ずるが如し。夫解脱の中には是の如きの事無し。憂喜無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、塵垢有ること無し。譬へば春月日沒の後、風塵霧を起すが如し。夫解脱の中、是の如きの事無し。塵霧無きは眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。譬へば聖王の髻中の明珠に、垢穢有ること無きが如し。夫解脱の性も亦復是の如く、垢穢有ること無し。垢穢無きは眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。眞の金性は沙石を雜へず、乃ち眞寶と名く。人の之を得る有らば、財想を生ずるが如し。夫解脱性も亦復是の如く、彼の眞寶の如し。彼の眞寶は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。譬へば瓦缾破れて聲嘶る。金剛寶缾は則ち是の如からざるが如し。夫解脱は亦嘶破無し。金剛寶缾は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。是の故に如來身は壞すべからず。其の聲嘶るとは蓖麻子を盛熱の中に置かば、爆烈して聲を出すが如し。夫解脱は是の如きの事無し。彼の金剛眞寶の缾は嘶破の聲無し。假使無量百千人衆、悉く共に之を射るとも能く壞する者無きが如し。嘶破の聲無きは眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。貧窮の人の他物

を負ふが故に他に繫がれ、枷鎖、杖罰、諸の苦毒を受くるが如し。夫解脫の中、是の如きの事無く、負債有ること無し。猶し長者の、多く財寶無量億數有りて、勢力自在にして他物を負はざるが如し。夫解脫は亦復是の如し。多く無量の法財、珍寶有り、勢力自在にして負ふ所有ること無し。所負無きは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは無逼切と名く。春熱に涉り、夏日甜を食し、冬日冷に觸るるが如し。眞の解脫の中是の如きの不適意の事有ること無し。逼切無きは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又無逼切とは、譬へば人有りて魚肉を飽食し、而も復乳を飲む。是の人則ち、死に近きこと久しからずと爲すが如し。眞の解脫の中、是の如きの事無し。是の人若し甘露、良藥を得ば、所患除くことを得。眞の解脫は亦復是の如し。甘露、良藥は眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。云何が逼切、不逼切なる。譬へば凡夫の、我慢自高にして是の念を作さく「一切物の中、誰か能く我を害せん」と。即便蛇虎、毒蟲を捉持す。當に知るべし、是の人壽命盡きず、則便橫死するが如し。眞の解脫の中、是の如きの事無し。不逼切とは、轉輪王の所有の神珠の、能く蛣蜣、九十六種の諸の毒蟲等を伏す。若し是の神珠の香を聞ぐこと有らば、諸毒消滅するが如し。眞の解脫は亦復是の如し。皆悉く二十五有を遠離す。毒消滅するは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫とは即ち是如來なり。又不逼切とは、譬へば虛空の如し、解脫も亦爾なり。彼の虛空とは眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又逼切とは、乾草に近きて諸の燈火を然し、近くれば則ち熾然なるが如し。眞の

【婆師】ヷールシユキー(Vārṣikī)雨時或は夏生と譯す。藥草の名。

解脱の中、是の如きの事無し。又不逼切とは、譬へば日月衆生に逼らざるが如し。解脱も亦爾なり。諸の衆生に於て逼切有ること無し。逼切有ること無きは眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無動法を名く、猶し怨親の如し。眞の解脱の中、是の如きの事無し。又不動とは、轉輪王の更に聖王の、以て親友と爲る無きが如し。若更に親有らば則ち是の處無し。解脱も亦爾なり。更に親有ること無し。若親有らば亦是の處無し。彼の王の無親は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。如來とは即ち是法なり。又無動とは、譬へば素衣の染色を受け易きが如し。解脱は爾らず。又無動とは、婆師華の臭及び青色有らしめんと欲すれば、是の處有ること無きが如し。解脱も亦爾なり。臭及び諸色有らしめんと欲するも亦是の處無し。是の故に解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて希有と爲す。譬へば水中に蓮華を生ずるは希有と爲すに非ず。火中に生ぜば是乃ち希有なり。人の之を見る有らば便ち歡喜を生ずるが如し。眞の解脱は亦復是の如し。其の見る者有らば心歡喜を生ず。彼の希有は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。其の如來は即ち是法身なり。又希有とは、譬へば嬰兒の、其の齒未だ生ぜず。漸漸長大して、然して後乃ち生ずるが如し。解脱は爾らず。生、不生無し。又解脱とは、名けて虛寂と曰ふ、不定有ること無し。不定とは一闡提究竟じて移らず、重禁を犯す者は佛道を成ぜず。是の處有ること無きが如し。何を以ての故に。是の人若佛の正法の中に於て、心淨信を得ば、爾の時に即便一闡提を滅す。若復優婆塞と作ることを得れば、是亦能く一闡提を滅す

ることを得。重禁を犯す者、此の罪を滅し已らば則ち成佛を得。是の故に若畢定して移らず、佛道を成ぜずと言はば、是の處有ること無し。眞の解脱の中、都て是の如きの滅盡の事無し。又虛寂とは、法界に墮す、法界性の如き即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又一闡提若盡滅せば、則ち一闡提と稱することを得ざるなり。何等をか名けて一闡提と爲すや。一闡提とは、一切の諸善の根本を斷滅し、心一切の善法を攀緣せず。乃至一念の善を生ぜず。眞の解脱の中、都て是の事無し。是の事無きが故に即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可量と名く。譬へは穀聚の其の量知るべきが如し。眞の解脱は則ち是の如くならず。譬へば大海の度量すべからざるが如し。解脱も亦爾なり、度量すべからず。不可量は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無量法と名く。一りの衆生に多の業報有るが如し。解脱も亦爾なり、無量の報有り。無量の報は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて廣大と爲す。譬へば大海の與に等しき者無きが如し。解脱も亦爾なり、能く與に等しき無し。與等無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて最上と曰ふ。譬へば虛空の最高にして比無きが如し。解脱も亦爾なり、最高にして比無し。高無比の者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無能過と名く。譬へば師子の所住の處は、一切の百獸能く過ぐる者無きが如し。解脱も亦爾なり、能く過ぐる有ること無し。能過無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて

【佉陀羅】カディラ(Khadira)紫檀と譯す。
【栴檀】チャンダナ(Candana)香木。
【沈水】アガル(Agaru)又沈香とも云ふ。

無上と爲す。譬へば北方は、諸方の中の上なるが如し。解脫も亦爾なり、上有ること無しと爲す。無有上の者は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは無上上と名く。譬へば北方の、東方に於て上上無しと爲すが如し。解脫も亦爾なり、上上有ること無し。無上上の者は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて恆法と曰ふ。譬へば人天の身壞し命終る、是を名けて恆と曰ふ、不恆に非ざるが如きなり。解脫も亦爾なり、是不恆に非ず。不恆に非ざる者は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて堅住と曰ふ。佉陀羅栴檀沈水の、其の性堅實なるが如し。解脫も亦爾なり、其の性堅實なり。堅實なる者は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて不虛と曰ふ。譬へば竹葦の其の體空疎なるが如し。解脫は爾らず。當に知るべし、解脫は即ち是如來なり。又解脫とは不可汚と名く。譬へば牆壁の、未だ塗治を被らざれば、蟁蝱の上に在りて止住遊戲す。若已に塗治し、彩畫彫飾すれば、蟲彩香を聞ぎて即便住せざるが如し。是の如きの不住に眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて無邊と曰ふ。譬へば聚落の、皆邊表有るが如し。解脫は爾らず。譬へば虛空の邊際有ること無きが如し。解脫も亦爾なり、邊際有ること無し。是の如きの解脫は即ち是如來なり。又解脫とは不可見と名く。譬へば空中の鳥迹見難きが如し。是の如きの難見は眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて甚深と曰ふ。何を以ての故に、聲聞、緣覺の入ること能はざる所なり。入ること能はざ

【阿摩勒果】アーマラカ(Amalaka)果實の名。

る者、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又甚深とは、諸佛菩薩の恭敬する所なり。譬へば孝子の父母を供養する功德甚だ深きが如し。功德甚深は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可見と名く。譬へば人有りて自ら頂を見ざるが如し。解脱も亦爾なり。聲聞、緣覺の見ること能はざる所なり。見ること能はざる者は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは無舍宅と名く。譬へば虚空の舍宅有ること無きが如し。解脱も亦爾なり。舍宅と言ふは、二十五有を譬ふ。無有舍宅は眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可取と名く。阿摩勒果は人の取持すべきが如し。解脱は爾らず、取持すべからず。不可取持即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは不可執と名く。譬へば幻物の執持すべからざるが如し。解脱も亦爾なり、執持すべからず。不可執持即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。

又解脱とは身體有ること無し。譬へば人有りて、體に瘡癩及び諸の癰疽、顚狂、乾枯を生ずるが如し。眞の解脱の中、是の如きの病無し。是の如きの病無きは、眞の解脱を譬ふ。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて一味と爲す。乳の一味の如し。解脱も亦爾なり、唯一味有り。是の如きの一味即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて清淨と曰ふ。水の泥無く、澄停清淨なるが如し。解脱も亦爾なり、澄停清淨なり。澄停清淨は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは

【到彼岸】パーラミタ（波羅蜜Pāramita）の譯。迷界より悟界の岸に到ること。

名けて一味と曰ふ。空中の雨一味清淨なるが如し。一味清淨は、眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは名けて除卻と曰ふ。譬へば滿月の諸の雲翳無きが如し。解脫も亦爾なり、諸の雲翳無し。諸の雲翳無きは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは名けて寂靜と曰ふ。譬へば人有りて熱病除愈すれば身に寂靜を得るが如し。解脫も亦爾なり、身に寂靜を得。身に寂靜を得るは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり、又解脫とは即ち是平等なり。譬へば野田の毒蛇、鼠狼の倶に殺心有るが如し。解脫は爾らず、殺心有ること無し。殺心無きは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又平等とは、譬へば父母心を子に等しうするが如し。解脫も亦爾なり、其の心平等なり。心平等の者は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは無異處と名く。譬へば人有りて、唯上妙清淨の屋宅に居して更に異處無きが如し。解脫も亦爾なり、異處有ること無し。異處無き者即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは名けて知足と曰ふ。譬へば饑人の甘饌に値遇して之を食するに厭くこと無きが如し。解脫は爾らず、乳糜を食すれば更に須ふる所無きが如し。更に所須無きは、眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは名けて斷絕と曰ふ。人縛せられんに、縛を斷ちて脫を得るが如し。解脫も亦爾なり、一切の疑心結縛を斷絕す。是の如きの斷疑即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは到彼岸と名く。譬へば大河に此の彼岸有るが如し。解脫は爾らず、此岸無しと雖も而も彼岸有り。彼岸有るは即ち眞の解

脫なり。眞の解脫は卽ち是如來なり。又解脫とは名けて默然と曰ふ。譬へば大海の其の水汎長すれば諸の音聲多きが如し。解脫は爾らず。是の如きの解脫卽ち是如來なり。又解脫とは名けて美妙と曰ふ。譬へば衆藥に訶梨勒を雜ふれば其の味則ち苦きが如し。解脫は爾らず味甘露の如し。味甘露の如きは、眞の解脫を譬ふ。眞の解脫は卽ち是如來なり。又解脫とは諸の煩惱を除く。譬へば良醫の諸藥を和合して善く衆病を療すが如し。解脫も亦爾なり。能く煩惱を除く。煩惱を除くは卽ち眞の解脫なり。眞の解脫は卽ち是如來なり。又解脫とは名けて無迮と曰ふ。譬へば小舍の多人を容れざるが如し。解脫は爾らず容受する所多し。容受する所多きは卽ち眞の解脫なり。眞の解脫は卽ち是如來なり。又解脫とは諸愛を滅し淫欲を雜へざるに名く。譬へば女人の諸の愛欲多きが如し。解脫は爾らず。是の如きの解脫卽ち是如來なり。如來是の如きの貪欲、瞋恚、愚癡、憍慢等の結有ること無し。又解脫とは、名けて無愛と曰ふ。愛に二種有り。一つには餓鬼愛、二つには法愛なり。眞の解脫は餓鬼愛を離る。衆生を憐愍するが故に法愛有り。是の如きの法愛、卽ち眞の解脫なり。眞の解脫は卽ち是如來なり。又解脫とは我我所を離る、是の如きの解脫は、卽ち是如來なり。如來は卽ち是法なり。又解脫とは卽ち是滅盡なり。諸行の貪を離る。是の如きの解脫は、卽ち是如來なり。如來は卽ち是法なり。又解脫とは卽ち是救護なり。能く一切の諸の怖畏の者を救ふ。是の如きの解脫は、卽ち是如來なり。如來は卽ち是法なり。

又解脫とは卽ち是歸處なり。若是の如きの解脫に歸依する有らば、餘依を求めず。譬へ

ば人有りて、王に依恃すれば餘依を求めず。復王に依ると雖も、則ち動轉有るが如し。解脱に依る者は動轉有ること無し。無動轉の者、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。又解脱とは、名けて屋宅と爲す。譬へば人有りて曠野を行くに、則ち險難有るが如し。解脱は爾らず。險難有ること無し。無險難は、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは是無所畏なり。師子王の、諸の百獸に於て怖畏を生ぜざるが如し。解脱も亦爾なり、諸の魔衆に於て怖畏を生ぜず。無怖畏の者即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは迮隘有ること無し。譬へば隘路の乃至二人竝び行くを受けざるが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又不迮有り。譬へば、人有りて虎を畏れ井に墮つるが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又不迮有りて、大海の中、壞れたる小船を捨てて堅牢の船を得、堅牢の船を得て之に乘じて海を渡り、安隱の處に至りて心快樂を得るが如し。解脱も亦爾なり、心快樂を得。得快樂は、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは諸の因緣を拔く。譬へば、乳に因りて酪を得、酪に因りて酥を得、酥に因りて醍醐を得るが如し。眞の解脱の中、都て是の因無し。是の因無きは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは能く憍慢を伏す。譬へば、大王の小王を慢るが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。如來は即ち是法なり。又解脱とは諸の放逸を伏す。謂はく放逸の者は多く貪欲有り。眞の解脱の中、是の名有ること無きは即ち眞の解脱なり。眞の

【水大】一切の物質を構成する地水火風の四大の一。

解脱は即ち是如來なり。又解脱とは能く無明を除く。上妙の酥諸の滓穢を除き、乃ち醍醐と名くるが如し。解脱も亦爾なり。無明の滓を除きて眞明を出す。是の如きの眞明即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて寂靜純一無二と爲す。空野の象、獨一にして侶無きが如し。解脱も亦爾なり、獨一無二なり。獨一無二は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて堅實と爲す。竹葦、蓖麻の莖幹空虚にして子堅實なるが如し。佛如來を除きて、其の餘の人天は皆不堅實なり。眞の解脱は一切の諸の有流等を遠離す。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、能く覺了して我を增益すと名く。眞の解脱は亦復是の如し。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは諸有を捨つと名く。譬へば、人有りて食し已りて吐くが如し。解脱も亦爾なり、諸有を捨つ。諸有を捨つるは即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて決定と曰ふ。婆師華の香の、七葉の中に無きが如し。解脱も亦爾なり。是の如きの解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて水大と曰ふ。譬へば、水大の諸大に於て勝り、能く一切の草木種子を潤すが如し。解脱も亦爾なり、能く一切の有生の類を潤す。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、名けて曰って入と爲す。門戸有らば則ち通入の路なり。金性の處、金則ち得可きが如し。解脱も亦爾なり、彼の門戸の如し。無我を修する者則ち中に入ることを得。是の如きの解脱は即ち是如來なり。又解脱とは名けて曰って善と爲す。譬へば、弟子の師に隨逐して善く敎勅を奉すれば、名けて善と爲すことを得るが如し。解

脱も亦爾なり。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは出世法と名く。一切法に於て最も出過と爲す。衆味の中、酥乳最勝なるが如し。解脱も亦爾なり。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、名けて不動と曰ふ。譬へば、門閫、風動すこと能はざるが如し。眞の解脱は亦復是の如し。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは無濤波と名く。彼の大海の、其の水濤波うつが如し。解脱は爾らず。是の如きの解脱即ち是如來なり。又解脱とは、譬へば宮殿の如し。解脱も亦爾なり。當に知るべし、解脱即ち是如來なり。又解脱とは名けて所用と曰ふ。閻浮檀金の多く任ぬる所有りて、能く是の金の過惡を説く有ること無きが如し。解脱も亦爾なり、過惡有ること無し。過惡有ること無き、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは嬰兒行を捨つ。譬へば、大人の小兒行を捨つるが如し。解脱も亦爾なり、五陰を除捨す。五陰を除捨する、即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは、名けて究竟と曰ふ。繋を被る者、繋より脱ることを得、洗浴清淨にして、然して後家に還るが如し。解脱も亦爾なり、畢竟清淨なり。畢竟清淨即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。

又解脱とは無作樂と名く。無作樂とは、已に貪欲、瞋恚、癡を吐くが故に。譬へば、人有りて誤ちて毒藥を飲み、毒を除くが爲の故に即ち吐藥を服せん。既に吐くを得已りて、毒即ち除愈し身安樂を得るが如し。解脱も亦爾なり。諸の煩惱、結縛の毒を吐き身安樂を得、無作樂と名く。無作樂は即ち眞の解脱なり。眞の解脱は即ち是如來なり。又解脱とは

【四種の毒蛇】貪瞋癡慢の四煩惱をさす。

【尼犍子】ニルグラントハプトラ(Nirgrantha-putra)離繋子、無慚子等と譯す。苦行を以て涅槃の因とし露形を常とするを以て露形外道と稱せらる。

四種の毒蛇煩惱を斷ずと名く。煩惱を斷ずるは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは諸有を離れ、一切の苦を滅し一切の樂を得、永く貪欲、瞋恚、愚癡を斷じ、一切の煩惱の根本を拔斷すと名く。根本を拔するは即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは一切の有爲の法を斷じ、一切の無漏の善法を出生す。塞ぐ諸道を斷つ、所謂若は我、無我、非我、非無我なり。唯取著を斷じて我見を斷せずと名く。我見とは名けて佛性と爲す。佛性とは即ち眞の解脫なり。眞の解脫とは即ち是如來なり。又解脫とは不空空と名く。空空は無所有と名く。無所有とは、即ち是外道、尼犍子等の計する所の解脫なり。而も是の尼犍實に解脫無し、故に空空と名く。眞の解脫は即ち是の如くならず、故に不空空なり。不空空は即ち眞の解脫なり。眞の解脫は即ち是如來なり。又解脫とは、名けて不空と曰ふ。水、酒、乳、酪、酥、蜜等の缾の、水、酒、酪、酥、蜜無き時と雖も、猶故名けて水等の缾と爲すことを得、而も是の缾等の、空及以不空と說くべからず。若空と言はば、則ち色、香、味、觸有ることを得ず。若不空と言はば、而も復水酒等の實有ること無きが如し。解脫も亦爾なり。色及以非色と說くべからず、空及以不空と說くべからず。若空と言はば、則ち常、樂、我、淨有ることを得ず。若不空と言はば、誰か是の常、樂、我、淨を受くる者ぞ。是の義を以ての故に、空及以不空と說くべからず。空とは二十五有及び諸の煩惱、一切の苦、一切の相、一切の有爲行無きを謂ふ。缾に酪無きが如き、則ち名けて空と爲す。不空とは眞實、善色、常樂、我淨、不動、不變を謂ふ。猶

【釋提桓因】帝釋天のこと。シャクラ、デーヴーナーン、インドラ(Śakra-devānām-Indra)

【三】三歸依に就て問答す。

し彼の餅の色、香、味、觸の如し、故に不空と名く。是の故に解脱は、譬へば、彼の餅の如し。彼の餅は、緣に遇はば則ち破壞すること有り。解脱は爾らず、破壞すべからず。不可破壞卽ち眞の解脱なり。眞の解脱は卽ち是如來なり。又解脱とは、名けて離愛と曰ふ。譬へば人有りて、愛心に釋提桓因、大梵天王、自在天王を希望するが如し。解脱は爾らず。若阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得已らば、愛無く疑無し、愛無く疑無き、卽ち眞の解脱なり。眞の解脱は卽ち是如來なり。若解脱に愛、疑有りと言はば、是の處有ること無し。又解脱とは諸有の貪を斷じ、一切の相、一切の繫縛、一切の煩惱、一切の生死、一切の因緣、一切の果報を斷ず。是の如きの解脱卽ち是如來なり。如來卽ち是涅槃なり。一切の衆生生死の諸の煩惱を怖畏するが故に。故に三歸を受く。譬へば、羣鹿の獵師を怖畏し既に免離を得るが如し。若一跳を得れば則ち一歸を譬ふ。是の如きの三跳、則ち三歸を譬ふ。三たび跳るを以ての故に則ち安樂を受く。衆生も亦爾なり。四魔、惡獵師を怖畏するが故に。三歸依を受く。三歸依の故に則ち安樂を得。安樂を受くるは卽ち眞の解脱なり。眞の解脱は卽ち是如來なり。如來は卽ち是涅槃なり。涅槃は卽ち是無盡なり。無盡は卽ち是佛性なり。佛性は卽ち是決定なり。決定は卽ち是阿耨多羅三藐三菩提なり。」

(三)迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、若涅槃、佛性、決定如來、是一義ならば、云何が說きて三歸依有りと言ふ。」佛、迦葉に告げたまはく「善男子、一切衆生生死を怖畏す、故に三歸を求む。三歸を以ての故に則ち佛性、決定、涅槃を知る。善男子、法名一義異なる

【摩訶波闍波提】釋尊の姨母。マハープラジャーパティー(Mahāprajāpati) 大生主と譯す。
【憍曇彌】摩訶波闍波提の諱。ガウタミー(Gautami)

有り、法名義倶異なる有り。名一義異とは、佛常、法常、比丘僧常なり。涅槃虚空皆亦是常、是を名一義異と名く。名義倶異とは、佛名けて覺と爲し、法不覺と名け、僧を和合と名く。涅槃を解脫と名く。虚空を非善と名け、亦無閡と名け、是を名義倶異と爲す。善男子、三歸依は亦復是の如し。名義倶異なり、云何ぞ一と爲ん。是の故に我摩訶波闍波提に告ぐらく、「憍曇彌、我を供養すること莫れ、當に僧を供養すべし。若僧を供養すれば、則ち具足して三歸を供養することを得。」摩訶波闍波提即ち我に答へて言はく、「衆僧の中、佛無く法無し。云何ぞ說きて衆僧を供養すれば、則ち具足して三歸を供養することを得と言はん。」我復告げて言はく、「汝、我が語に隨へば則ち佛を供養す。解脫の爲の故に卽ち法を供養す。衆僧受者則ち僧を供養す。」善男子、是の故に三歸は一と爲すことを得ず。善男子如來或時一を說きて二三と爲し三を說きて一と爲す。是の如きの義は諸佛の境界にして、是聲聞、緣覺の知る所に非ず。』迦葉、復言さく、「佛の所說の如きは、『畢竟安樂を涅槃と名く』と、是の義云何。夫涅槃とは身を捨て智を捨つ。若身、智を捨つれば誰か當に樂を受くべき。」佛の言はく、「『善男子、譬へば人有り、食し已りて心悶え、外に出でて吐かんと欲す。既に吐くことを得已りて而も復回還る。同伴之に問ふ、「汝今患ふる所、竟に差ゆと爲んや否や。而も復來還す。」答へて「已に差身安樂を得」と言ふが如し。如來も亦爾なり。畢竟じて二十五有を遠離し、永く涅槃安樂の處を得。動轉すべからず、盡滅有ること無し。一切の受を斷ず、無受樂と名く。是の如きの無受を名けて常樂と爲す。若如來受樂有りと

【四】不生不滅を問ふ。

【迦蘭伽】迦陵頻迦とも云ふ。カラギンカ（Kalaviṅka）妙聲、好聲等と譯す。鳥の名。

【命命鳥】共命鳥とも云ふ。ジーヷンジーヷカ（Jīvañjīvaka）の譯。

言はば、是の處有ること無し。是の故に畢竟樂とは卽ち是涅槃なり。涅槃とは卽ち眞の解脫なり。眞の解脫とは卽ち是如來なり。」

（四）迦葉、復言さく「不生不滅是解脫なりや。」「是の如く是の如し。善男子、不生不滅、卽ち是解脫なり。是の如きの解脫、卽ち是如來なり。」迦葉、復言さく「若不生滅是解脫ならば、虛空の性も亦生滅無し、是如來なり。如來の性卽ち是解脫なるべし。」佛、迦葉に告げたまはく「善男子、是の事然らず。」「世尊、何が故ぞ然らざる。」「善男子、迦蘭伽及び命命鳥の其の聲淸妙なるが如き、寧ろ烏鵲の音に同ずべきや不や。」「不なり世尊、烏鵲の聲は命命等に比すれば百千萬倍、比を爲すべからず。」迦葉、復言さく「迦蘭伽等、其の聲微妙にして身も亦同じからず。如來云何ぞ之を烏鵲に比せん。芥子を須彌山に比するに異なること無し。佛と虛空とも亦復是の如し。迦蘭伽の聲は佛聲を譬ふべし、以て烏鵲の音を譬ふべからず。」爾の時に佛、迦葉を讚じたまはく「善い哉善い哉善男子、汝今善く甚深難解を解す。如來時有りて、因緣を以ての故に彼の虛空を引いて以て解脫を譬ふ。是の如きの解脫卽ち是如來なり。眞の解脫は一切の人天能く匹を爲す無し。而して此の虛空、實は其の譬に非ず。衆生を化せんが爲の故に虛空を以て非喩を喩と爲す。當に知るべし、解脫卽ち是如來なり。如來の性卽ち是解脫なり。解脫、如來二無く別無し。善男子、非喩とは無比の物の如き引いて喩ふべからず。因緣有るが故に、引いて喩を得べし。經の中に「面貌の端正月の盛滿の如く、白象の鮮潔猶し雪山の如し」と說くが如し。滿月は卽ち面に同ずること

を得ず、雪山は卽ち是白象なることを得ず。善男子、喩を以て眞の解脫を喩ふべからず。衆生を化せんが爲の故に喩を作すのみ。諸の譬喩を以て諸法の性を知る、皆亦是の如し。」迦葉、復言さく「云何が如來二種の說を作したまふ。」佛の言はく「善男子、譬へば人有りて刀劍を執持し、瞋恚心を以て如來を害せんと欲せんに、如來和悅して恚恨の色無きが如し。是の人當に如來身を壞し逆罪を得べきや不や。」「不なり世尊。何を以ての故に。如來身界壞すべからざるが故に。所以は何ん。身聚無く、唯法性有り。法性の性理壞すべからざるを以て、是の人云何ぞ能く佛身を壞せん。直ちに惡心を以ての故に無間を成ず。是の因緣を以て諸の譬喩を引いて實法を知ることを得。」爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく「善い哉善い哉善男子、我の說かんと欲する所汝已に之を說けり。又善男子、譬へば惡人の其の母を害せんと欲し、野田に住みて穀積の下に在り。母爲に食を送る。其の人見已りて尋いで害心を生じ、便ち前んで刀を磨す。母時に知り已り、逃れて積中に入る。其の人刀を持ちて積を繞りて徧く斫る。斫り已りて歡喜し已害の想を生ず。其の母尋いで出で、家の中に還り至るが如し。意に於て云何。是の人無間罪を成就するや不や。」「世尊、定說すべからず。何を以ての故に。若罪有りと說かば、母身壞すべし。身若壞せざれば云何ぞ有と言はん。若無罪と說かば已害の想を生じ心歡喜を懷かん、云何ぞ無と言はん。是の人逆罪を具足せずと雖も、而も亦是逆なり。是の因緣を以て諸の譬喩を引いて實法を知ることを得。」佛、迦葉を讚じたまはく「善い哉善い哉善男子、是の因緣を以て我種種の方便、

譬喩を說きて以て解脫を譬ふ。無量阿僧祇の譬を以てすと雖も、而も實は譬を以て比を爲すべからず。或は因緣有らば亦譬說すべし、或は因緣有らば引譬すべからず。是の故に解脫、是の如きの無量の功德を成就し、涅槃に趣かば、涅槃如來も亦是の如く無量の功德有り、是の如き等の無量の功德成就し滿つるを以ての故に、大般涅槃と名く。』迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、我今始めて如來の至處盡くること有ること無しと爲すことを知る。處若無盡ならば、當に知るべし、壽命も亦無盡なるべし。』佛の言はく『善い哉善い哉善男子、汝今善能く正法を護持す。若善男子、善女人の煩惱、諸の結縛を斷ぜんと欲する者有らば、當に是の如きの護持正法を作すべし。』

【四依品】此品は如來の使者となりて末世に經を弘め衆生の依止となる四種の人を開說するの章なり。

【一】初に四依を明す。

【大般涅槃微妙經】涅槃經の別稱。

【四種の人】本章にとく四依なり。

【須陀洹】スローターパンナ(Srotāpanna)入流、預流と譯す。凡夫の位を去りて初めて聖位の法流に入るを云ひ、三界の見惑を斷ぜる聖者なり。

【斯陀含】サクッリッド、アーガミ(Sakṛdāgāmi)一來と譯す。欲界九地の思惑中、前の六品を斷じ、後の三品殘存するの聖者なり。後の三品を斷ずるが爲めに今一度人天に來るを要

大般涅槃經　巻第六

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

四依品第八

(一)佛、復迦葉に告げたまはく、「善男子、是の大般涅槃微妙經の中、四種の人有り。能く正法を護り、正法を建立し、正法を憶念す。能く多く利益し、世間を憐愍す。世間の依と爲りて人天を安樂にす。何等をか四つと爲す。人有り、世に出でて煩惱性を具す、是を第一と名く。須陀洹の人、斯陀含の人、是を第二と名く。阿那含の人、是を第三と名く。阿羅漢の人、是を第四と名く。是の四種の人世に出現して能く多く利益し、世間を憐愍す。世間の依と爲りて人天を安樂にす。云何が名けて具煩惱性と爲す。若し人有りて能く禁戒を奉持し、威儀具足して正法を建立す。佛に從ひて聞く所の其の文義を解し、轉じて他人の爲に分別宣說す。所謂少欲、多欲、非道なり。廣く是の如きの八大人覺を說き、犯罪の者有らば、敎へて發露懺悔して滅除せしめ、善く菩薩の方便所行祕密の法を知る。是を凡夫と名く、第八人に非ず。第八人は凡夫と名けず。名けて菩薩と爲し、名けて佛と爲さず。第二人は須陀洹、斯陀含と名く。若し正法を得れば正法を受持す。佛に從ひて法を聞き其の所

あるの義なり。【阿那含】アナーガーミ(Anāgāmi)不還又は不來と譯す。欲惑後三品を斷じ盡して再び欲界に來還せざるの聖者なり。【阿羅漢】アルハット(Arhat)應供殺賊等と譯す。一切の見思の惑を斷じ盡したる極果なり。以上の須陀洹斯陀含、阿那含、阿羅漢の四聖者は普通小乘の四果と稱すれども、玆には大乘の四依に約して說くべしと云はる。故に安慧の註には第二依たる須陀洹、斯陀含は別教の初地より六地に至り圓教の初住より第六住に當り、第三依たる阿那含は別教の七八九地、圓教の九住位に當り、第四依たる阿羅漢は別教の第十地等覺、圓教の第九地

聞の如くす。聞き已りて書寫し、受持、讀誦し、轉じて他の爲に說く。若法を聞き已りて寫さず、受けず、持せず、說かず。奴婢不淨の物を佛畜ふことを聽すと言はば、是の處有ること無し。是を第二人と名く。是の如きの人、未だ第二、第三の住處を得ず。名けて菩薩と爲す。已に受記を得たり。第三人は阿那含と名く。阿那含とは正法を誹謗し、若は奴婢、僕使、不淨の物を畜ふることを聽すと言ふ。外道の典籍、書論を受持し、及び客塵煩惱に障へられ、諸業の煩惱に覆蓋せらる。若は如來の眞實舍利を藏し、及び外病に惱害せられ、或は四大毒蛇に侵さる。我を論說せば悉く是の處無し。若無我を說かば斯是の處有り。世法を說著せば是の處有ること無し。若大乘を說き、相續して絕えざれば斯是の處有り。若所受の身八萬戶蟲有らば亦是の處無く、永く淫欲を離れ、乃至夢中に不淨を失はず。斯是の處有り。臨終の日怖畏を生ぜば亦是の處無し。阿那含とは何の謂と爲すや。是の人不還、上に說く所の如く、所有の過患永く汚すこと能はずして往反周旋す。名けて菩薩と爲す。已に受記を得れば、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。是則ち名けて第三人と爲すなり。第四人は阿羅漢と名く。阿羅漢とは諸の煩惱を斷じ、重擔を捨て已利を逮得し、所作已に辦じ、第十地に住す。自在智を得て人の所樂に隨ひ、種種の色像悉く能く示現す。莊嚴する所の如く佛道を成ぜんと欲すれば、卽ち能く成ずることを得。能く是の如きの無量の功德を成ずるを阿羅漢と名く。是を四人世に出現して能く多く利益し、世間を憐愍し、世間依と爲りて人天を安樂にす。人天の中に於て最尊最勝なりと名く。

猶し如來を人中勝と名け、歸依處と爲すが如し。」迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今是の四種の人に依らず。何を以ての故に。瞿師羅經の中、佛、瞿師羅が爲に說くが如し。若天、魔、梵、破壞を欲するが爲に變じて佛形と爲り、具足莊嚴し、三十二の相、八十種の好、圓光一尋、面部圓滿、猶し月の盛明なるがごとく、眉間の毫相白きこと珂雪に逾ゆ。是の如く莊嚴し來りて汝に向はば、汝當に檢校して其の虛實を定むべし。既に覺知し已らず、應當に降伏すべし。世尊、魔等尙能く變じて佛形と作る。況や變じて羅漢等四種の身と作り、空中に坐臥し、左脅水を出し、右脅火を出し、身煙炎を出すこと、猶し火聚の如くなること能はざらんや。是の因緣を以て、我是の中に於て心信を生ぜず。或は所說有れども稟受すること能はず。亦敬念して依止と作ること無けん。」佛の言はく、『善男子、我が所說に於て若疑を生ぜば、向受くべからず。況や是の如き等をや。是の故に應當に善く分別して、是の善、不善、作す可く作す可からざるを知る。是の如く作し已りて長夜に樂を受く。善男子、譬へば偷狗の夜人舍に入るに、其の家の婢使若覺知せば、卽ち驅罵すべし。「汝疾く出で去れよ。若出でざれば當に汝が命を斷つべし。」偷狗之を聞き、卽ち去りて還らざるが如し。汝等今より亦、是の如く波旬を降伏すべく、是の言を作すべし、「波旬、汝今、是の如きの像を作すべからず。若故作さば、當に五繫を以て汝を繫縛すべし。」魔是を聞き已りて、便ち當に還去すべし。彼の偷狗の更に復還らざるが如し。」迦葉、佛に白して言さく、『世尊、佛、瞿師羅長者の爲に說くが如し。若能く是の如く魔を降伏する者は、亦

已上に當ると云ひ最初の第一依たる具煩惱の人は別教の十住十行十回向の菩薩、圓教の十信位に當ると云ふ。

【八大人覺】菩薩修道の階位中十地に於ける第三の八人地の菩薩を云ふ少欲知足遠離精進正念正定正慧不戲論を體得せるものなり。

【受記】記別即ち佛より豫言を受くることを云ふ。

【四大毒蛇】地水火風の四大が增損して人身を害するを以て毒蛇に譬ふ。

【瞿師羅經】經名瞿師羅は長者の名。

【五繫】死人死蛇等の五屍を以て天魔波旬に繫けて離れしめざること。又天魔の兩手兩足及び頸の五處を繫縛すること。

大般涅槃に近くことを得べし。如來、何ぞ必ず是の四人を説きて依止處と爲す。是の如きの四人、言説すべき所、未だ必ずしも信ずべからず。「佛、迦葉に告げたまはく、「善男子、我が所説の如きも亦復是の如し、爾らずと爲すに非ず。善男子、我、聲聞の肉眼有る者の爲に説きて降魔と言ふ。大乘を修學する人の爲に説かず。聲聞の人は、天眼有りと雖も故肉眼と名く。大乘を學する者は、肉眼有りと雖も乃ち佛眼と名く。何を以ての故に。是の大乘經を名けて佛乘と爲す。此の如きの佛乘は最上最勝なり。善男子、譬へば人有りて勇健威猛なるに、怯弱の者有り、常に來りて依附す。其の勇健の人、常に怯者に教へて「汝當に是の如く弓を持し、箭を執り、矟道、長鉤、罥索を修學すべし。」又復告げて言はく、「夫鬪戰する者は、刀を履むが如しと雖も自ら怖畏の念を生ずべからず。當に人天を視て輕弱の想を生ずべし。自ら心を生じて勇健の意を作すべし。或時人有りて、膽勇有ること無く、詐りて健相を作し、弓刀種種の器杖を執持して以て自ら莊嚴し、陣中に來至して聲を厲まし大いに呼ばふ。「汝是の人に於て亦復憂怖を生ずべからず。是の如きの輩人、若汝等の怖畏せざるを見ば、當に知るべし、是の人久しからずして散壞せんこと彼の偷狗の如し。」善男子、如來も亦爾なり。諸の聲聞に告げたまはく「汝等、魔波旬を畏るべからず若魔、波旬、佛身を化作して汝が所に至らば、汝當に精勤し、其の心を堅固にして、彼をして降伏せしむべし。時に魔即ち當に愁憂して樂まず、道を復して去るべし。」

善男子、彼の健人の他に從ひて習はざるが如し。大乘を學する者も亦復是の如し。種種

【阿竭陀藥】アガダ(Agada)無病、無價と譯す。藥の名。或は不死藥、丸藥とも云ふ。

の深密經典を聞くことを得、其の心欣樂して驚怖を生ぜず。何を以ての故に。是の如く大乘を修學するの人、已に曾て過去の無量萬億の佛を供養し、恭敬し、禮拜するが故に、無量億千の魔衆の、來りて侵嬈せんと欲する有りと雖も、是の事の中に於て終に驚畏せず。善男子、譬へば人有りて阿竭陀藥を得ば、一切の毒蛇等の畏を畏れず。是の藥力の故に、亦能く一切の諸毒を消除するが如し。是の大乘經も亦復是の如し。彼の藥力の如く一切の諸魔惡毒を畏れず。亦能く降伏して復起たざらしむ。復次に善男子、譬へば龍有りて性甚だ弊惡なり。人を害せんと欲するの時、或は眼を以て視、或は氣を以て噓す。此の故に一切の師子、虎豹、豺狼、狗犬皆怖畏を生ず。是等の惡獸、聲を聞き形を見、或は其の身に觸るれば命を亡はざる無し。善呪者有りて、呪力を以ての故に、能く是の如きの諸の惡毒龍、金翅鳥等、惡象、師子、虎豹、豺狼をして、柔善調順して悉く乘御に任す。是の如き等の獸、彼の善呪を見て、卽ち調伏するが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。魔波旬を見て、皆恐怖を生ず。而も魔波旬も亦復畏懼の心を生ぜず、猶魔業を行ず。大乘を學する者も亦復是の如し。諸の聲聞の魔事を怖畏し、此の大乘に於て信樂を生ぜざるを見る。先方便を以て諸魔を降伏し、悉く調善にして乘と爲るに堪任せしむ。因つて爲に廣く種種の妙法を說く。聲聞、緣覺、魔を調ずるを見已りて乃ち怖畏を生じ、此の大乘無上の正法に於て、方に信樂を生ず。是の如きの言を作さく、「我等今より此の正法の中に於て障閡を作すべからず。」復次に善男子、聲聞、緣覺、諸の煩惱に於て而も怖畏を生ず。大乘を學する者

【優曇華】ウドムバラ(Udumbara)靈瑞、靈應と譯す。芽出でて一千年、苔みて一千年、開きて一千年合せて三千年に一度開く花なり。此花開けば世に輪王出で、又天下に佛ある時花開くと云ふ。靈瑞の華なり。

【二】佛大涅槃經について時を說き給ふ。

は都て恐懼無く、大乘を修學すれば是の如きの力有り。是の因緣を以て、上に說く所の者は彼の聲聞、緣覺をして諸魔を調伏せしめんと欲するが爲にし、大乘の爲に非ず。是の大涅槃微妙の經典は、消伏すべからず、甚奇甚特なり。若聞者有りて、聞き已りて信受し、能く如來是常住法と信ぜん。是の如きの人は、甚だ希有と爲す、優曇華の如し。我涅槃の後、若是の如きの大乘微妙の經典を聞くことを得て、信敬の心を生ずる有らん。當に知るべし、是等は未來世百千億劫に於て惡道に墮せず。』

(二)爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく『善男子、我涅槃の後當に百千無量の衆生、是の大涅槃微妙の經典を誹謗して信ぜざる有るべし。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、是の諸の衆生、佛の滅後に於て久近便ち當に是經を誹謗すべし。世尊、復何等の純善の業生有りて、當に能く是の謗法の者を拔濟すべき。』佛、迦葉に告げたまはく『善男子、我般涅槃して後四十年の中、閻浮提に於て廣行流布し、然して後乃ち當に地に隱沒すべし。善男子、譬へば甘蔗、稻米、石蜜、酥酪、醍醐の之有る處に隨ひて、其の土の人民、皆「是の味、味中の第一」と言はんが如し。或は復人有りて、純ら粟米及び稗子を食せん。是の人も亦「我が食する所の者、最も第一と爲す」と言はん。是薄福の人、業報を受くるが故なり。若是福人は、耳初て粟稗の名を聞かず、食する所は唯是粳粮、甘蔗、石蜜、醍醐なり。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。鈍根薄福は聽聞を樂はず。彼の薄福の、粳粮及び石蜜等を憎惡するが如し。二乘の人も亦復是の如し。無上の大涅槃經を憎惡す。或

は衆生有りて、其の心欣樂して是の經を聽受し、聞き已りて歡喜し誹謗を生ぜず。彼の福人の糠粮を食するが如し。善男子、譬へば王有りて深山の險難惡處に居在し、甘蔗、糠粮石蜜有りと雖も、得難きを以ての故に、貪惜積聚して敢て啖食せず。其の盡くること有らんことを懼れて、唯粟稗を食す。異國の王有り、聞きて之を愍み、即ち車を以て糠粮、甘蔗を載せて之を送與す。其の王、得已りて即便分布し、擧國共に食す。民既に食し已りて皆歡喜を生じ、咸く是の言を作さく「彼の王に因るが故に、我をして是の希有の味を得しむ」と。善男子、是の四種の人も亦復是の如し。此の無上大法の將と爲り、是の四種の中或は一人有りて他方無量の菩薩の、是の如きの大乘經典を學して、若は自ら書寫し、若は他をして書せしむと雖も、利養の爲の故に、稱譽の爲の故に、解法の爲の故に、依止の爲めの故に、用ひて共に餘經に貿易するが爲の故にして、廣く他人の爲に宣說する能はざるを見る。是の故に是の微妙の經典を持して彼方に送至し、彼の菩薩に與へて無上菩提の心を發し、菩提に安住せしむ。是の菩薩、是の經を得已りて即便廣く他人の爲に演說し、無量の衆をして是の如きの大乘の法味を受くることを得しむ。皆悉く是此の一菩薩の力なり未だ聞かざる所の經を悉く聞くことを得しむ。彼の人民の王力に因るが故に希有の食を得るが如し。

又善男子、是の大涅槃微妙の經典の流布せらるる處、當に知るべし。其の地即ち是金剛なり。是の中の諸人も亦金剛の如し。若能く是の如きの經を聽く者有らば、即ち阿耨多羅

【正法の餘八十年前四十年】正法は佛滅後五百年の間を云ふ。この期間を過ぎて八十年とその以前四十年とを云ふ。

【菩提心】菩薩が上は菩提を求め、下は衆生を化せんと發願することを云ふ。

【三】發菩提心の功力をとき、四依の人を明す。

【熈連河】金河、佛この河の畔にて涅槃に入り給ふ。前に註す。

三藐三菩提を退かず。其の所願に隨ひて悉く成就を得。我が今日宣說すべき所の如く、汝等比丘、善く受持すべし。若衆生の是の如きの經典を聽聞すること能はざる有らば、當に知るべし、是の人は甚だ哀愍すべし。何を以ての故に。是の人は是の如きの大乘經典の甚深の義を受持すること能はざるが故なり。』迦葉、佛に白して言さく『世尊、如來の滅後四十年の中、是の大乘典大涅槃經、閻浮提に於て廣行流布し、是を過ぎて已後地に沒せば、卻後久如にして復當に還つて出づべきや。』佛の言はく『善男子、若我が正法の餘八十年、前四十年、是の經復當に閻浮提に於て大法雨を雨すべし。』迦葉、復佛に白して言さく『世尊、是の如きの經典、正法滅するの時、正戒破るるの時、非法增長するの時、如法の衆生無きの時、誰か能く聽受し、奉持讀誦して、其をして通利せしめ、供養恭敬し、書寫解說せん。唯願はくば如來、衆生を哀愍して分別し廣說し、諸の菩薩をして聞き已りて受持し、持し已りて卽ち阿耨多羅三藐三菩提心を退かざることを得しめよ。』

(三)爾の時に佛、迦葉を讚じたまはく『善い哉善い哉善男子、汝今善能く是の如きの義を問ふ。善男子、若衆生、熈連河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、乃ち能く是の惡世に於て、是の如きの經典を受持して誹謗を生ぜず。善男子、若衆生、一恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗せず是の典を愛樂す。人の爲に分別し廣く說くこと能はず。善男子、若衆生、二恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を誹ぜず

正解、信樂し、受持、讀誦す。亦復人の爲めに廣く說くこと能はず。若衆生、三恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗ぜず。受持、讀誦し、經卷を書寫す。他の爲に說くと雖も、未だ深義を解せず。若衆生四恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗ぜず、受持、讀誦し、經卷を書寫し、他の爲に廣く十六分の中の一分の義を說く。復演說すと雖も、亦具足せず。若衆生、五恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗ぜず、受持、讀誦し、經卷を書寫し、廣く人の爲に十六分の中の八分の義を說く。若衆生、六恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗ぜず、受持、讀誦し經卷を書寫し、他の爲に廣く十六分の中の十二分の義を說く。若衆生、七恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗ぜず受持、讀誦し、經卷を書寫し、他の爲に廣く十六分の中の十四分の義を說く。若衆生、八恆河沙の諸の如來の所に於て菩提心を發す有らば、然して後、乃ち能く惡世の中に於て是の法を謗ぜず、受持、讀誦し、經卷を書寫し、亦他人を勸めて書寫を得しめ自ら能く聽受し、復他人を勸めて聽受を得しめ、讀誦通利し、擁護堅持す。世間の諸の衆生を憐愍するが故に、是經を供養し、亦他人を勸めて其をして供養せしめ、恭敬尊重し、讀誦禮拜し、亦復是の如く具足して能く解し、其の義味を盡す。所謂如來常住不變、畢竟安樂にして、

廣く衆生に悉く佛性有るを說く。善く如來の所有の法藏を知り、是の如きの諸佛等を供養し已りて、是の如き無上の正法を建立して受持擁護す。若始めて阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らば、當に知るべし。是の人は未來の世に、必ず能く是の如きの正法を建立し、受持擁護せん。是の故に汝今、未來世の中の護法の人を知らざるべからず。何を以ての故に。是の發心の者は、未來世に於て必ず能く無上の正法を護持せん。

善男子、惡比丘有りて我が涅槃を聞きて憂愁を生ぜず。「今日如來、般涅槃に入りたまふ何ぞ其れ快い哉。如來在世に我等が利を遮す、今涅槃に入りたまふ。誰か復當に我を遮奪する者有るべき。若遮奪するもの無ければ、我則ち還つて本の如きの利養を得ん。如來在世に禁戒嚴峻なりき。今涅槃に入りたまひ、悉く當に放捨すべし。受くる所の袈裟は本法式の爲なり。今當に廢壞すべし、木頭の旛の如くに。」是の如き等の人は、是の大乘經を誹謗し拒逆す。善男子、汝今應當に是の如く憶持すべし、「若衆生、無量の功德を成就し具足する有らば、乃ち能く是の大乘經典を信じ、信じ已りて受持せん。其の餘の衆生、樂法の者有らんに、若能く廣く爲に此の經を解說せば、其の人聞き已りて、過去無量阿僧祇劫に作る所の惡業皆悉く除滅せん。若是の經典を信ぜざる者有らば、現身當に無量の病苦に惱害せられ、多く衆人に罵辱せらるる所と爲るべく、命終の後は人に輕賤せられ、顏貌醜陋、資生艱難にして常に供足せず。復少しく得と雖も、麤澁弊惡、生生常に貧窮下賤にして、誹謗正法邪見の家に處せん。若臨終の時、或は荒亂、刀兵競起に値ひ、帝王暴虐、怨

【沙彌の十戒】男子の出家して未だ修行熟せず比丘にだ至るまでのものを云ふ。シュラマネーラ(Śramaṇera)勤息男と譯す。十戒を持つもの。十戒は不殺戒、不盗戒、不婬戒、不妄語戒、不飲酒戒、離高廣大牀戒、離花鬘等戒、離歌舞等戒、離金寶物戒、離非食時戒。但しこれには異說あり今略す。

【十住】菩薩五十二位の階次中第十一位より第二十位迄を云ふ。

家讎隙に侵逼せられ、善友有りと雖も遭遇せず。資生の所須求むるに得ること能はず。少しく利を得と雖も、常に饑渇を患ふ。唯凡下に顧識せられ、國王、大臣悉く齒錄せず。設ひ復其の宣說する所有るを聞き、正使是理なるも終に信受せず。是の如きの人は善處に至らず。折翼鳥の飛行すること能はざるが如し。是の人も亦爾なり。未來世に於て人天の善處に至ることを得ること能はず。若復、人能く是の如きの大乘經典を信ずる有らば、本受くる所の形、復麤陋なりと雖も、經の功德を以て即便端正なり。威顏、色力日更に增多し常に人天に樂見せられ、恭敬し愛念して情に捨離無し。國王、大臣及び家の親屬、其の所說を聞きて悉く皆敬信せん。若我が聲聞の弟子の中、第一希有の事を行ぜんと欲せば、當に世間の爲に廣く是の如きの大乘經典を宣ぶべし。善男子、譬へば霧露の勢、住せんと欲すと雖も、日出を過ぎず。日既に出で已らば、消滅して餘無きが如し。善男子、是の諸の衆生の所有の惡業も亦復是の如し。住世の勢力、大涅槃の日を見ることを得るに過ぎず。是の日既に出づれば、悉く能く一切の惡業を除滅す。復次に善男子、譬へば人有り、出家剃髮して袈裟を服すと雖も、故未だ沙彌の十戒を受くることを得ず。或は長者來りて衆僧を請ずる有らんに、未受戒の者、即ち大衆と俱共に請を受く。未だ受戒せずと雖も、已に僧數に墮するが如し。善男子、若衆生發心して、始めて是の大乘典大涅槃經を學し、書持讀誦する有らば、亦復是の如し。未だ具足して、位十住に階せずと雖も、則ち已に十住數の中に墮す。或は衆生の是佛弟子、或は非弟子、若は貪怖に因り、或は利養に因りて是の

經の乃至一偈を聽受し、聞き已りて謗ぜざる有らん。當に知るべし、是の人は則ち已に阿耨多羅三藐三菩提に近しと。善男子、是の因緣を以て、我四人世間の依と爲ると說く。善男子、是の如きの四人、若佛說を以て佛說に非ずと言はば、是の處有ること無けん。是の故に我、是の如きの四人、世間の依と爲ると說く。善男子、汝是の如きの四人を供養すべし。』世尊、我當に云何が是の人を識知して、而も供養を爲すべき。』佛、迦葉に告げたまはく『若正法を建立し護持する有らば、是の如きの人、從ひて啓請し、當に身命を捨て、而も之を供養すべし。我是の大乘經に於て說くが如し。』

知法の者有らば、若は老若は少
故に供養、恭敬し禮拜すること
猶し火に事ふる、婆羅門等の如くすべし
知法の者有らば、若は老若は少
故に供養し、恭敬し禮拜すること
亦諸天の、帝釋に奉事するが如くす

(四)迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、佛の所說の如く師長を供養すること、正に是の如くなるべし。今疑ふ所有り、唯願はくば廣く說きたまへ。若長宿の禁戒を護持する有りて、諸の年少に從ひて未聞を咨受せば云何。是の人當に禮敬すべきや不や。若當に禮敬すべくば、是則ち名けて持戒と爲さざるなり。若是年少の禁戒を護持する、諸の宿舊の破戒

【四】持戒破戒等につきて廣く論義す。

【長宿】長老に等し。老人なり。

【波羅夷】　四波羅夷なり。

の人に從ひて未聞を咨受せば、復當に禮すべきや不や。若出家の人、在家の人に從ひて未聞を咨受せば、復當に禮すべきや不や。然るに出家の人、在家の人を禮敬すべからず。然るに佛法の中、年少、幼小、應當に耆舊、長宿を恭敬すべし。是の長宿先に具戒を受け、威儀を成就するを以て、是の故に應當に供養、恭敬すべし。佛言に曰へるが如く、「其破戒は是佛法の中、容受せざる所、猶し良田に多く稊稗有るが如し。」又佛說の如く「知法の者有り。若は老、若は少、故に供養すること帝釋に事ふるが如くすべし。」是の如きの二句、其の義云何。將如來の虛妄の說に非ずや。佛言に曰へるが如く、「持戒の比丘も亦犯す所有り」と。何が故ぞ如來是の說を作したまへる。世尊も亦餘經の中に於て、說きて破戒を治することを聽す。是の如きの所說、其の義未だ了せず。」佛、迦葉に告げたまはく「善男子、我未來の諸の菩薩等の大乘を學する者の爲に、是の如きの偈を說く。聲聞の弟子の爲に說かざるなり。善男子、我上に說くが如く、正法滅し已りて正戒を毀る時、增長破戒、非法盛なる時、一切の聖人隱れて現ぜざる時、奴婢不淨の物を受け畜ふる時、是の四人の中、當に一人有りて世に出現し、鬚髮を剃除し出家修道すべし。諸の比丘の各各奴婢、僕使不淨の物を受畜し、淨と不淨と一切知らず。是れ律、非律も亦復識らざるを見る。是の人是の如きの諸の比丘を調伏せんと欲するが爲の故に、與共に光を和ぎて其の惡に同じうせず、自の所行の處及び佛の行處、善能く別知す。諸人の波羅夷を犯すを見ると雖も默然として擧せず。何を以ての故に。我世に出で、正法を建立し護持せんと欲するが爲に、是の故に默

【旃陀羅】チャンダーラ（Caṇḍāla）屠者殺者等と譯す。印度四姓中の最下級にして屠殺、守獄等を業となす。
【灌頂師】古代印度にては四大海の水を取りて之を太子の頂に灌ぎ王位を進むる儀あり。その灌頂を司るものを灌頂師と云ふ。
【三十三天】忉利天の譯。須彌山の頂に在り帝釋天の君臨する天なり。

然として糾治せず。善男子、是の如きの人、護法の爲の故に所犯有りと雖も破戒と名けず。

善男子、譬へば國王病に遇ひて崩亡し、儲君稚小にして未だ紹繼に任へず。旃陀羅有り、財寶に豐饒にして巨富無量、多く眷屬有り。遂に强力を以て國の虚弱に乘じ王位に簒居す。治化未だ久しからず、國人、居士、婆羅門等亡叛逃走して遠く他國に投ず。在者有りと雖も乃至眼是の王を見ることを欲せず。或は長者、婆羅門等の本土を離れざる有り。譬へば諸樹の其の生處に隨ひ、即ち是の中死するが如し。旃陀羅王、其の國人の逃叛する者衆きを知り、尋で即ち還つて諸の旃陀羅を遣して諸道を守邏す。復七日に於て、鼓を撃ちて諸の婆羅門に唱令す「能く我が爲に灌頂師と作る者有らば、當に半國を分ちて以て封賞を爲すべし。」諸の婆羅門是の語を聞くと雖も、悉く來る者無し。各是の言を作さく「云何ぞ當に婆羅門種の、是の如きの事を作す有るべき。」旃陀羅王、復是の言を作さく「婆羅門の中若一人の我が師と爲る者無くば、我要ず當に諸の婆羅門をして、旃陀羅と共に住し食し宿し、其の事業を同じうせしむべし。若能く來りて我が頂に灌ぐ者有らば、半國の封、此の言虚しからず。呪術の致す所の三十三天の上妙甘露不死の藥も、亦當に共分して之を服食すべし。」爾の時に一りの婆羅門子有りて、年弱冠に在り。淨行を修治し、長髮を相と爲し善く呪術を知る。王所に往き至りて白して言さく「大王、王の敕使する所は我悉く能く爲さん。」爾の時に大王、心に歡喜を生じ、此の童子を受けて灌頂師と作す。諸の婆羅門、是の事を聞き已りて皆瞋恚を生じ、此の童子を責めて「汝婆羅門、云何ぞ乃ち旃陀羅の師

と作る。」爾の時に其の王、卽ち半國を分ちて是の童子に與ふ。因つて共に國を治めて多時を經歷す。爾の時に童子、彼の王に語りて言さく、「我家法を捨て、來りて王の師と作り、悉く大王に微密の呪術を敎ふ。而も今大王猶親しまず。」時に王答へて言はく、「我今云何ぞ汝を親まざらんや。」童子答へて言さく、「先王所有の不死の藥、猶未だ共に食せず。」王の言はく、「善い哉大師、我實に知らず。師若須ひば願はくば便ち持ち去れ。」是の時に童子、王の語を聞き已りて卽ち持ちて家に歸り、諸の大臣を請じて共に之を食す。諸臣、食し已りて卽ち共に王に白さく、「快い哉大師、是の甘露不死の藥有り。」王既に知り已りて、其の師に語りて言はく、「云何ぞ大師、獨諸臣と甘露を服食して、而も分を見ざる。」爾の時に童子、卽ち更に餘の雜毒の藥を以て、王に與へて服せしむ。王既に服し已りて須臾に藥發し悶亂して地に躄る。覺知する所無きこと猶し死人の如し。」爾の時に童子、本の儲君を立て還つて以て王と爲し、是の如きの言を作さく、「師子御座の法、旃陀羅をして昇らしむべからず。我昔より來た、未だ曾て旃陀羅種の王者と爲るを聞かず。若旃陀羅、國を治し民を理せば、是の處有ること無し。大王、今紹いで先王に還り、正法もて國を治すべし。」爾の時に童子、是を經理し已りて、復解藥を以て旃陀羅に與へて、其をして醒寤せしめ、旣に醒寤し已りて驅つて國を出でしむ。是の時に童子、是の事を爲すと雖も、猶故婆羅門の法を失はず、其の餘の居士、婆羅門等、其の所作を聞きて未曾有を歎じ、讃じて「善い哉善い哉仁者、善能く旃陀羅王を驅遣す」と言はんが如し。善男子、我涅槃の後、正法を護持す

【四事の供養】衣服、飲食、臥具、湯藥の四種の供養を云ふ。
【八種の不淨】比丘の蓄ふべからざる八種の不淨物。金銀奴婢牛羊倉庫

る諸の菩薩等も亦復是の如し。方便力を以て、彼の破戒、假名、一切不淨物を受畜する僧と其の事業を同じうす。爾の時に菩薩、若人有りて多く戒を犯すと雖も、能く毀禁の諸の惡比丘を治するを見る。卽ち其の所に往きて恭敬禮拜し、四事の供養、經書、什物、悉く以て奉上せよ。如其自ら無くば、要ず當に方便して諸の檀越に從ひ、求め乞ひて之を與ふべし。是の事を爲すの故に八種の不淨の物を畜ふべし。何を以ての故に。是の人諸の惡比丘を治せんが爲に。彼の童子旃陀羅を驅るが如くなるが故なり。爾の時に菩薩復是の人を恭敬禮拜し、八種の不淨物を受畜すと雖も、悉く罪有ること無し。何を以ての故に。是の菩薩、諸の惡比丘を擯治して、淸淨僧をして安隱に住することを得しめ、方等大乘經典を流布して、一切の諸の天人を利益せんと欲するが故なり。善男子、是の因緣を以て我經の中に於て是の二偈を說き、諸の菩薩をして皆共に護法の人を讃歎せしむ。彼の居士、婆羅門等、童子を「善い哉善い哉」と稱讃するが如く、護法の菩薩正に是の如くなるべし。若人有りて護法の人の、破戒者と其の事業を同じうするを見て罪有りと說かば、當に知るべし、是の人は自ら其の殃を受け、是の護法者は實に罪有ること無し。善男子、若比丘、禁戒を犯し已りて、憍慢心の故に覆藏して悔いざる有らば、當に知るべし、是の人は眞の破戒と名く。菩薩は護法の爲の故に、所犯有りと雖も破戒と名けず。何を以ての故に。憍慢無く發露悔するを以ての故なり。善男子、是の故に我、經中に於て覆相して是の如きの偈を說く、

【五】是より持戒破戒について眞僞を簡ぶ。

知法の者有らば、若は老若は少
故らに供養、恭敬禮拜すべし
猶し火に事ふる、婆羅門等の如く
第二天の、帝釋に奉事するが如し

是の因縁を以て、我も亦聲聞を學する人の爲にせず。但菩薩の爲にして、而も是の偈を説く。』

（五）迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、是の如き等の菩薩摩訶薩、戒に於て緩ならば、本所受の戒具さに在りと爲んや不や。』佛の言はく『善男子、汝今是の如きの説を作すべからず。何を以ての故に。本所受の戒、本の如くにして失はず。設し所犯有らば、即ち懺悔すべし。悔し已らば淸淨なり。善男子、故き隄塘の穿決して孔有らば、水則ち淋漏す。何を以ての故に。人の治するもの無きが故に。若し人の治する有らば、水則ち出でざるが如し。菩薩も亦爾なり。破戒と共に布薩、受戒、自恣を作す。其の僧事を同じうすと雖も、所有の戒律、隄塘の穿決して淋漏するが如くならず。何を以ての故に。若し淸淨持戒の人無ければ、僧、則ち損減し、縱緩懈怠、日に增上すること有らん。若淸淨持戒の人有らば即ち能く具足して本戒を失はじ。善男子、乘に於て緩なる者は、乃ち名けて緩と爲し、戒に於て緩なる者は、名けて緩と爲さず。菩薩摩訶薩、此の大乘に於て心懈慢ならず、是を奉戒と名く。正法を護るが爲に、大乘の水を以て自ら澡浴す。是の故に菩薩、破戒を現ずと雖

【菴羅果】 菴摩羅アームラ(Amra)果とも云ふ。樹果。葉は小棗に似て花白く小し。果は胡桃の如く其味酸くして甜し。藥分に入るべし。

【迦羅迦】 カーラカ(Kalaka)黒と譯す。樹名。有害の果を結ぶ。

【鎮頭迦】 チンヅカ(Tinduka)柿と譯す。樹名。無害の果を結ぶ。一般に破戒持戒の二を喩ふるに迦羅鎮頭と稱す。

も、名けて緩と爲さず。』迦葉菩薩、佛に白して言さく『衆僧の中四種の人有りて、菴羅果の生熟知り難きが如し。破戒、持戒云何が識る可き。』佛の言はく『善男子、大涅槃微妙の經典に因るときは、則ち知るべきこと易し。云何が是の大涅槃經に因れば、知ることを得べきや。譬へば田夫の、稻穀を種植して莠稗を耕除す。肉眼を以て、觀て名けて淨田と爲す。其の實を成ずるに至りて、草穀各異るが如し。是の如く八事能く僧を汚染す。若能く除卻せば、肉眼を以て觀るに則ち清淨を知る。若持戒、破戒惡を作さざる時、肉眼を以て觀れば分別すべきこと難し。若惡彰露るれば則ち知るべきこと易し。彼の莠稗の分別すべきこと易きが如し。僧の中も亦爾なり。若能く八種の不淨毒蛇の法を遠離せば、是を清淨聖衆福田と名く。人天に供養せらるべし。清淨の果報、是肉眼の能く分別する所に非ず。復次に善男子、迦羅迦林の其の樹衆多なる、是の林中に於て唯一樹有りて鎮頭迦と名く。是の迦羅迦、鎮頭迦樹の二果は相似て分別すべからず。其の果熟する時に一りの女人有りて悉く皆拾取す。鎮頭迦の果は纔かに一分有りて、迦羅迦の果は乃ち十分有り。是の女識らずして持來し、市に詣りて之を衒賣す。凡愚、小兒復別たざるが故に迦羅迦を買ひ、喫ひ已りて命終す。有智の人輩是の事を聞き已りて、即ち女人に問ふに、『姉、何の處に於てか是の果を得來れる。』是の時に女人即ち方所を示す。諸人即ち言はく、『是の如きの方所、多く無量の迦羅迦樹有りて、唯一根鎮頭迦樹有り。』諸人知り已りて笑ひて捨て去るが如し。善男子、大衆の中、八不淨法も亦復是の如し。是の衆中に於て、多く是の如きの八法を受

【自恣】プラヷーラナ（Pravarana）の譯。一夏安居の終りたる時、各自縱に己が罪過を宣べて人に直され、惡をあらため善に進む懺悔の儀式なり。普通七月十六日に行はる。

用する有り。唯一人の清淨持戒、是の如きの八不淨法を受けざる、善く諸人の受畜非法を知りて、而も與に事を同じうして相捨離せざる有り。彼の林中の一つの鎮頭迦の如く、優婆塞有りて是の諸人の多く非法有るを見て、倂せて恭敬し供養せず。是の人若供養せんと欲せば、先に問ひて言ふべし、「大德、是の如きの八事、受畜すべきや不や。佛の聽したまふ所なりや不や。」若佛聽したまふと言はば、是の如きの人は、共に布薩し羯磨し自恣することを得るや不や。」是の優婆塞、是の如く問ひ已るに、衆皆答へて「是の如きの八事、如來憐愍して皆悉く畜ふることを聽すと言はば、優婆塞言へ、祇園精舍に諸の比丘有りて、或は金銀佛の畜ふるを聽す所と言ひ、或は聽さずと言ふ。聽すと言ふ者有らば、是の不聽の者與共に住して說戒、自恣せず、乃至一河を共して水を飮まず。利養の物悉く之を共せず。汝等云何ぞ佛聽許す」と言ふ。佛天中天、復之を受くと雖も、汝等衆僧も亦畜ふべからず。若受者有らば、乃至與共に說戒、自恣、羯磨して其の僧事を同じうすべからず。若共に說戒、自恣、羯磨して僧事を同じうすれば、命終して卽ち當に地獄に墮すべし。彼の諸人、迦羅迦果を食し已りて、便ち命終るが如し。復次に善男子、譬へば城市に賣藥人有りて、妙甘藥有り、雪山より出づ。亦復多く其の餘の雜藥を賣る。味甘くして相似たり。時に諸人有りて咸く皆買はんと欲すれども、而も識別せず。賣藥所に至りて問うて言はく、「汝、雪山の藥有りや否や。」其の賣藥人卽ち答へて言はく、「有り。」是の人欺詐して餘の雜藥を以て買者に語りて言はく、「此は是雪山の甘好妙藥なり」と。時に買藥者、肉眼を以ての故に

【四法】之を法四依と稱し、此品最初に說く四依を人四依と稱して兩者を區別す。

【了義經】眞實の理を明了に詮顯したる究竟の教を說ける經典を云ふ。不了義經は之に反す。

【六八】法四依、人四依の相關を宣說す。

善く別つこと能はず。卽ち買ひて持ち歸り、便ち是の念を作さく、『我今已に雪山の甘藥を得』といはんが如し。迦葉、若聲聞僧の中、假名僧有り、眞實僧有り、和合僧有り、若は持戒、若は破戒、是の衆中に於て等しく供養、恭敬、禮拜すべし。是の優婆塞、肉眼を以ての故に分別すること能はず。譬へば彼の人、雪山の甘藥を分別すること能はざるが如し。誰か是持戒、誰か是破戒、誰か是眞僧、誰か是假僧ならん。天眼有る者は乃ち能く分別す。迦葉、若優婆塞是の比丘是破戒人なるを知らば、給施し禮拜、供養すべからず。若是の人八法を受畜するを知らば、亦復所須を給施し禮拜、供養すべからず。若僧中に於て破戒の者有らば、袈裟を被るの因緣を以て恭敬、禮拜すべからず。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、善い哉善い哉、如來の所說眞實にして虛ならず。我當に頂受すること、譬へば金剛の珍寶異物の如くすべし。佛の所說の如く、是の諸の比丘、當に四法に依るべし。何等をか四つと爲す。法に依りて人に依らず、義に依りて語に依らず、智に依りて識に依らず、了義經に依りて不了義經に依らず。是の如きの四法、應當に證知すべし、四種の人に非ず。』

(六八)佛の言はく、『善男子、依法とは卽ち是如來の大般涅槃、一切の佛法、卽ち是法性なり。是の法性、卽ち是如來なり。是の故に如來は常住不變なり。若復如來無常と言ふ有らば是の人は法性を知らず見ず。若是の法性を知見せざる者は依止すべからず。上に說く所の四人、世に出でて法を護持する者の如く、應當に證知して而も依止と爲るべし。何を以ての

故に。是の人善く如來の微密深奧の藏を解するが故に、能く如來の常住不變を知る。若し如來無常變易と言はば、是の處有ること無し。是の如きの四人を即ち如來と名く。何を以ての故に。是の人能く如來の密語を解し、及び能く說くが故なり。若し人有りて能く如來の甚深密藏を了知し及び如來常住不變を知る。是の如きの人、若し利養の爲に說きて「如來是無常」と言はば、是の處有ること無し。是の如きの人、尙依止すべし。何に況や是の四種の人に依らざらんや。法に依るとは即ち是法性、人に依らずとは即ち是聲聞なり。法性とは即ち是如來、聲聞とは即ち是有爲、如來とは即ち是常住、有爲とは即ち是無常なり。善男子、若し人破戒し利養の爲の故に說きて「如來無常變易」と言はん。是の如きの人は依るべからざる所。善男子、是を定義と名く。義に依つて語に依らずとは、義とは名けて覺了と曰ふ。覺了義とは不羸劣と名く。不羸劣とは名けて滿足と曰ふ。滿足義とは名けて如來常住不變と曰ふ。如來常住不變義とは即ち是法常、法常義とは即ち是僧常、是を依義と名く。語に依らざれ。何等の語言か依るべからざる所。所謂諸論綺飾の文辭なり。佛所說の無量の諸經の如く、貪求して厭ふこと無し。姦巧諛諂、詐りて親附を現じ、相を現じて利を求め、白衣を經理して其が爲に役を執る。又復唱へて言はく「佛、比丘に諸の奴婢不淨の物を畜へ、金銀珍寶、穀米倉庫、牛羊象馬を販賣して利を求むるを聽す。饑饉の世に於て子を憐愍するが故に、復諸の比丘に儲貯陳宿し、手自ら食を作し、受けずして噉ふを聽す」と。是の如き等の語依るべからざる所なり。智に依つて識に依らずとは、言ふ所の智と

【陰界諸入】五蘊十八界十二處を云ふ。

は、卽ち是如來なり。若聲聞、善く如來の功德を知ること能はざる有らば、是の如きの識依止すべからず。若如來卽ち是法身と知らば、是の如きの眞智は依止すべき所なり。若如來の方便の身を見て「是陰界諸入の所攝、食の長養する所」と言はば、亦依るべからず。是の故に識を知りて依止すべからず。若復人有りて是の說を作さば、其の經書に及びて亦依るべからず。了義經に依りて不了義經に依らずとは、不了義經とは謂はく聲聞乘なり。佛如來の深密藏の處を聞きて、悉く疑怪を生じ、是の藏大智海を出すことを知らず。猶し嬰兒の別知する所無きが如し。是則ち名けて不了義と爲すなり。了義とは、名けて菩薩の眞實智慧と爲す。其の自心の無閡の大智に隨ひて、猶し大人の知らざる所無きが如し。是を了義と名く。又聲聞乘は不了義と名け、無上の大乘を乃ち了義と名く。若如來無常變易と言ふは不了義と名け、若如來常住不變と言ふは是を了義と名く。聲聞の所說證知すべしとは不了義と名け、菩薩の所說證知すべしとは了義と爲す。若如來食の長養する所と言ふは、是不了義なり。若常住不變易と言ふは是を了義と名く。若如來涅槃に入る、薪盡きて火の滅するが如しと言ふは不了義と名く。若如來法性に入ると言ふは是を了義と名く。聲聞乘の法は則ち依るべからず。何を以ての故に。如來衆生を度せんと欲するが爲の故に方便力を以て聲聞乘を說く。猶し長者、子に半字を敎ふるが如し。善男子、聲聞乘とは猶し初耕して未だ果實を得ざるが如し。是の如きを名けて不了義と爲す。是の故に聲聞乘に依るべからず。大乘の法は則ち依止すべし。何を以ての故に。如來衆生を度せんと欲するが

【阿鼻獄】　阿鼻地獄と云ふ。阿鼻(アギーチAvici)は無間と譯す。

爲の故に、方便力を以て大乘を說く、是の故に依るべし、是を了義と名く。是の如き四依應當に證知すべし。

復次に義に依るとは、義質直と名く。質直とは名けて光明と曰ふ。光明とは不羸劣と名く。不羸劣とは名けて如來と曰ふ。又光明とは名けて智慧と爲す。質直とは名けて常住と爲す。如來常とは名けて依法と爲す。法とは常と名け、亦無邊と名く。思議すべからず、執持すべからず、繫縛すべからず。而も亦見るべし。若說きて不可見と言ふ有らば、是の如きの人依るべからざる所なり。是の故に法に依りて人に依らず。若復人有りて微妙語を以て無常を宣說せば、是の如きの言依るべからざる所なり。是の故に義に依りて語に依らず。依智とは衆僧是常、無爲不變。八種不淨の物を畜へず。是の故に智に依りて識に依らず。若說きて識作り、識受くと言ふ有らば、和合僧無し。何を以ての故に。夫和合とは無所有と名く。無所有ならば云何ぞ常と言はん。是の故に此の識依止すべからず。了義に依るとは、了義とは名けて知足と爲す。終に現じて威儀淸白を詐り、憍慢自ら高うして利養を貪求せず。亦如來の隨宜方便所說の法の中に於て執著を生ぜず、是を了義と名く。若能く是の如き等の中に住する有らば、當に知るべし、是の人は則ち已に第一義に住することを得と爲す。是の故に名けて、了義經に依りて不了義に依らずと爲す。不了義とは、經中に一切燒然、一切無常、一切皆苦、一切皆空、一切無我と說くが如し。是を不了義と名く。何を以ての故に。是の如きの義を了すること能はざるを以ての故に諸の衆生をして阿鼻獄に墮せしむ。所以は何

【戒律】三藏中の律藏をさす。
【阿毘曇】アビダルマ(Abhidharma)對法と譯す。三藏中の論藏なり。
【修多羅】スートラ(Sūtra)契經と譯す。三藏中の經藏なり。

ん。取著を以ての故に義に於て了せず。一切燒とは、如來涅槃も亦燒くと說くと謂ふ。一切無常とは、涅槃も亦無常、苦、空、無我も亦復是の如し。是の故に名けて不了義經と爲す、依止すべからず。善男子、若人有りて、如來一切衆生を憐愍し、善く時宜を知る。時を知るを以ての故に輕を說きて重と爲し、重を說きて輕と爲す。如來、所有の弟子、諸の檀越の所須を供給して乏しき所無からしむる有るを觀知し、是の如きの人には、佛卽ち奴婢、金銀、財寶を受畜し、不淨物等を販賣し市易することを聽さず。若諸の弟子、檀越の所須を供給する有ること無し。時世饑饉にして飲食得難し。正法を建立し護持せんと欲するが爲には、我、弟子の奴婢、金銀、車乘、田宅、穀米を受畜し、所須を貿易するを聽す。「是の如き等の物を受畜するを聽すと雖も、要ず當に篤信の檀越に淨施すべし」と言はば、是の如きの四法依止すべき所なり、若戒律、阿毘曇、修多羅の是の四つに違はざる有らば、亦依止すべし。若說きて「時、非時有り、能護法、不能護法有り。如來悉く一切の比丘に、是の如きの不淨物を受畜することを聽す」と言ふ有らば、是の如きの言依止すべからず。若戒律、阿毘曇、修多羅の中、是の說に同じき有る有らば、是の如きの三分も亦依るべからず。我肉眼の諸の衆生等の爲に是の四依を說き、終に慧眼有る者の爲にせず。是の故に我今是の四依を說く。法とは卽ち是法性、義とは卽ち是如來常住不變、智とは一切の衆生悉く佛性有るを知り、了義とは一切の大乘經典を了達す。」

【邪正品】此品は前品に於て「云何が天魔衆の爲めに留難を作し、如來波旬説を云何んが分別して知るや」との迦葉の問に答へて、佛説魔説をとき、教の正と邪とを簡擇するの章なり。

【一】佛説魔説を簡擇す。

【四魔】陰魔、死魔、天魔、煩惱魔の四。

【波旬】パーピーヤン(Papiyan)惡、殺者等と譯す。魔王の名。常に惡意を懷き惡法を成就し、僧を擾し、人の慧命を斷つといふ。

【兜率天】都率天兜術天等とも書く。佛のこの世に出現する前には必ずこの天に住すと云へり。

大般涅槃經 卷第七

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

邪正品第九

(一)爾の時に迦葉、佛に白して言さく、「世尊、上に說く所の四種の人等の如きは、應當に依るべきや。」佛の言はく『是の如く是の如し。善男子、我が說く所の如きは、應當に依止すべし。何を以ての故に。四魔有るが故に。何等をか四つと爲す。魔の所說の諸餘の經律、能く受持する者の如し。』「迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛の所說の如きは四種の魔有りと。若魔の所說及び佛の所說は、我當に云何が而も分別することを得べき。諸の衆生の魔に隨逐して行ずる有り。復佛の所教に隨順する者有り。是の如き等の輩、復云何が知る。』「佛、迦葉に告げたまはく、『我般涅槃七百歲の後、是の魔波旬漸く當に我が正法を壞亂すべし。譬へば獵師の身に法衣を服するが如し。魔王波旬も亦復是の如し。比丘の像、比丘尼の像、優婆塞の像、優婆夷の像と作り、亦復須陀洹の身を化作し、乃至阿羅漢の身及び佛の色身を化作す。魔王此の有漏の形を以て無漏の身を作して我が正法を壞す。是の魔波旬の正法を壞する時、當に是の言を作すべし、『菩薩、昔兜率天上に於て沒し來りて、

此の迦毘羅城、白淨王の宮に在り。父母の愛欲和合に依因りて是の身を生育す」と。若人の人中に生じて、諸の世間、天人大衆に恭敬せらるる者有らば、是の處有ること無し。又復說きて言はく、「往昔苦行し、種種頭目、髓腦、國城、妻子を布施す。是の故に今者佛道を成することを得。是の因緣を以て、諸の人天、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽に恭敬せらる。」若經律の是の說を作す者有らば、當に知るべし、悉く是魔の所說なり。善男子、若經律、是の如きの言を作す有らん、「如來正覺久しく已に成佛す。今方に佛道を成ずるを示現する者、諸の衆生を度脫せんと欲するが爲の故に。父母、愛欲和合に依因りて生ずること有ることを示す。世間に隨順して是の示現を作す」と。是の如きの經律當に知るべし、眞に是如來の所說なり。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所說に隨順する者は、卽ち是菩薩なり。若說きて「如來生じたまふ時、十方面に於て各〻行くこと七步は信ずべからず」と言ふ者有らば、是魔の所說なり。若復如來の出世十方面に於て各〻七步、此は是如來の方便示現と說く有らば、是を如來所說の經律と名く。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所說に隨順する者は、卽ち是菩薩なり。若說きて「菩薩生じ已りて、父王人をして將ゐて天祠に詣でしむ。諸天見已りて、悉く下りて禮敬す。是の故に佛と名く」と言ふ有り。復難じて言ふ有らん、「天は先に出で、佛其の後に在り。云何ぞ諸天佛を禮敬せん」と。是の難を作さば、當に知るべし、卽ち是波旬の所說なり。若經に「佛、天祠に到り、是の諸天等、摩醯首羅、大梵

【摩醯首羅】マヘーシュバラ（Maheśvara）大自在天と譯す。三目八臂ありて白牛に騎り、白拂をとり、大威力を有し、四禪天を司る神なり。【大梵天王】マハーブラマン（Mahābrahman）初禪天を司る神にして娑婆世界を領す。【釋提桓因】シャクラデーエーンドラ（Śakradevendra）帝釋天のこと。忉利天王にして善見城に住し、佛法保護の神なり。【舍衛】シュラーヴスティー（Śrāvastī）舍衛城なり。【祇園精舍】ジェータヴァナ、ヴハーラ（Jetavanavihāra）祇樹給孤獨園に建てられたる精舍。釋尊の爲めに須達長者の寄進せし道場なり。【祇陀精舍】祇園精舍に同じ。

天王、釋提桓因、皆悉く合掌し、其の足を敬禮す」と言ふ有らば、是の如きの經律、是佛の所說なり。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所說に隨順する者は、卽ち是菩薩なり。若經律の、說きて「菩薩、太子爲りし時、欲心を以ての故に、四方に妻を聘し、深宮に處在して五欲自ら娛み、歡悅受樂す」と言ふ有らば、是の如きの經律は、波旬の所說なり。若說きて「菩薩久しく已に欲心、妻息の屬を捨離し、乃至三十三天の上妙五欲を受けず。涕唾を棄つるが如くす、何に況んや人欲をや。鬚髮を剃除し、出家修道す」と言ふ有らば、是の如きの經律、是佛の所說なり。若魔の經律に隨順する者有らば、是魔の眷屬、若佛の經律に隨順する者有らば、卽ち是菩薩なり。若說きて、「佛、舍衛の祇園精舍に在りて諸の比丘に奴婢、僕使、牛羊、象馬、驢騾、雞豬、貓狗、金銀、瑠璃、眞珠、頗梨、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、珂貝、璧玉、銅鐵の釜鑊、大小の銅盤、所須の物を受畜することを聽す。耕田種植、販賣市易、穀米を儲積す。是の如きの衆事、佛大慈の故に衆生を憐愍して、皆之を畜ふることを聽す」と言ふ有らば、是の如きの經律は、悉く是の魔說なり。若說きて言ふ有らん「佛、舍衛の祇陀精舍、那梨樓鬼所住の處に在りて、爾の時に如來、婆羅門、字は羖羝德、及び波斯匿王に因りて說きて言はく、「比丘、金銀、瑠璃、頗梨、眞珠、硨磲、碼碯、珊瑚、琥珀、珂貝、璧玉、奴婢、僕使、童男、童女、牛羊、象馬、驢騾、雞豬、貓狗等の獸、銅鐵の釜鑊、大小の銅盤、種種の雜色牀敷、臥具を受くべからず。資生の所須、所謂屋宅、耕田種植、販賣市場、自手作食、自磨自舂、

【六十四能】外道は佛の三十二相に對して六十四能ありと主張するもの。

【韋陀天】ヱーダ(Veda)婆羅門の神にして靈威と譯す。

【迦旃延天】カーティヤーヤナ(Kātyāyana)剪剃種と譯す。神の名。

治身の呪術、調鷹の方法、星宿を仰觀し、盈虛を推步し、男女を占相し、夢の吉凶を解す。是男是女、非男非女、六十四能、復十八の人を惑はす呪術有り。種種の工巧、或は世間の無量の俗事を說き、散香、抹香、塗香、熏香、種種の華鬘、治髮の方術、姦僞諂曲、貪利厭くこと無く、慣鬧を愛樂し、戲笑談說す。魚肉を貪嗜し、毒藥を和合し、香油を治壓す。寶蓋及以革屣を捉持し、扇箱篋の種種の畫像を造り、穀米、大小の麥豆、及び諸の果蓏を積聚し、國王、王子、大臣及び諸の女人を親近し、高聲に大笑し、或は復默然す。諸法の中に於て多く疑惑を生じ、多語妄說、長短好醜、或は善不善、好んで好衣を著す。是の如きの種種の不淨の物、施主の前に於て躬自ら讚歎し、不淨の處に出入し遊行す、所謂沽酒、淫女、博奕、是の如きの人、我今比丘の中に在るを聽さず。應當に道を休め俗に還りて役使すべし。譬へば莠稗の悉く滅して餘無きが如し。當に知るべし、是等の經律の所制、悉く是如來の所說なり。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若佛の所說に隨順する者有らば、卽ち是菩薩なり。若說きて言ふ有らん。「菩薩、天神を供養せんと欲するが爲の故に。天祠に入る。所謂梵天、大自在天、韋陀天、迦旃延天なり。入る所以は諸の天人を調伏せんと欲するが爲の故なり。若爾らずと言はば、是の處有ること無し。若菩薩、外道の邪論に入り、其の威儀、文章、技藝を知ること能はず。僕使の鬪爭和合すること能はず。男女、國王、大臣に恭敬せられざれ。又亦諸藥を和合するを知らざれ。不知を以ての故に、乃ち如來と名く。其知は是邪見の輩なり。又復如來、怨親中に於て其

【偸蘭遮】スツーラティヤヤス(梵 thūlatyayas)大障善道と譯す。僧殘罪に次ぐ罪にして、重罪の前方便にして善根を絕つものなり。

【九部】九部經をさす。

【方等經典】大乘經の總稱。大乘方等經典と稱す。普遍平等なる眞如實相の妙理を方等と云ふ。

の心平等なり。若刀を以て割き及び香を身に塗る、此の二人に於て增損減の心を生ぜず。唯能く中に處す、故に如來と名くと言ふは、是の如きの經律、當に知るべし、是魔の所說なり。若說きて言ふ有らん「菩薩是の如し、天祠に入り、外學の法の中、出家、修道するを示し、其の威儀、禮節を知り、能く一切の文章、技藝を解くことを示し、書堂、技巧の處に入るを示し、善能く僕使の鬪爭を和合す。諸の大衆、童男、童女、後宮、妃后、人民、長者、婆羅門等の王及び大臣、貧窮等の中に於て最尊最上たり。復是等に恭敬せられ、亦能く是の如き等の事を示現す。諸見に處すと雖も、愛心を生ぜず。猶し蓮華の塵垢を受けざるが如し。一切諸の衆生を度せんが爲の故に、善く是の如く種種の方便を行じて世法に隨順す」と。是の如きの經律、當に知るべし、卽ち是如來の所說なり。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所說に隨順する者は、是大菩薩なり。若說きて言ふ有らん「如來、我が爲に經律を解說す。若惡法の中、輕重の罪、及び偸蘭遮、其の性皆重く、我等の律の中、終に之を爲さず。我久しく是の如きの法を忍受するも、汝等信ぜず。我當に云何ぞ自ら己律を捨てて汝が律に就くべきや。汝が所有の律は是魔の所說なり、我等の經律は、是佛の所制なり。如來先に九部の法印を說く。是の如きの九印我が經律を印す。初て方等經典の一句一字有ることを聞かず。如來の所說無量の經律、何の處にか方等經を說くこと有らんや。是の如き等の中、未だ曾て十部經の名有るを聞かず。若共有らば、當に知るべし、必定調達が所作なり。調達は惡人、善法を滅するを以て方等

【調達】デーヴダッタ（Devadatta）提婆達多とも書く。天授と譯す。釋尊の從弟にして、斛飯王の子。初め釋尊の弟子となりしが、後に五百の弟子を率ゐて別立し阿闍世王と結び釋尊及びその教團を滅さんとはかれり。

經を造る。我等是の如き等の經を信ぜず、是魔の所說なり。何を以ての故に。佛法を破壞して相是非するが故に。是の如きの言、汝が經中には有り、我が經中には無し。我が經律の中、如來說きて言ふ「我、涅槃の後、惡世に當に不正の經律有るべし。所謂大乘方等經典なり。未來の世、當に是の如きの諸の惡比丘有るべし。」我又說きて「九部經を過ぎて方等典有り」と言ふ。若人能く其の義を了知する有らば、當に知るべし、是の人は正しく經律を了し、一切不淨の物を遠離し、微妙淸淨なる、猶し滿月の如くならん。若說きて「如來、一一の經律に義味を演說すること、恆沙等の如しと爲すと雖も、我が律中に無し。將に無と爲すと知り、如其有らば、如來何が故ぞ我が律中に於て而も解說せざる。是の故に我今信受すること能はず」と言ふ有らば當に知るべし、是の人は即ち罪を得と爲す。是の人復言はん「是の如きの經律、我當に受持すべし。何を以ての故に。當に我が爲に知足少欲、斷除煩惱、智慧涅槃の善法の因と作すべきが故なり」と。是の如く說く者は我が弟子に非ず。若說きて「如來衆生を度せんと欲すが爲の故に、方等經を說く」と言ふ有らば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。若方等經を受けざる者有らば、當に知るべし、是の人は我が弟子に非ず。佛法の爲に出家するにあらざるなり。即ち是邪見外道の弟子なり。是の如きの經律は是佛の所說なり。若是の如くならざれば、是魔の所說なり。若魔の所說に隨順する者有らば是魔の眷屬なり。若佛の所說に隨順する者有らば、即ち是菩薩なり。復次に善男子、若說きて「如來、無量功德に成就せられざれば、無常變異す。空法を

【阿僧祇】アサンケーヤ(Asaṁkhyeya)無數と譯す。

【多羅】ターラ(Tāla)岸樹と譯す。

【空閑處】阿蘭若(Araṇya)の譯。村落を去りたる寂靜の地にして比丘の修行に適する場所をいふ。

得るを以て無我を宣說す。世間に順ぜず」と言ふ有らば、是の如きの經律は魔の所說と名く。若人、「如來正覺思議すべからず、亦無量阿僧祇等の功德に成ぜらる。是の故に常住にして變異有ること無し」と言ふ有らば、是の如きの經律は是佛の所說なり。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若佛の所說に隨順する者有らば、卽ち是菩薩なり。復人の言ふ有らん「或は比丘有りて、實に波羅夷罪を毀犯せざるに、衆人皆波羅夷を犯すこと多羅樹を斷つが如しと謂ふ。而も此の比丘、實は犯す所無し。何を以ての故に。我常に說きて言ふ「四波羅夷若一つを犯す者は、猶し石を析きて還つて合すべからざるが如し。」若自ら過人法を得と說く有らば、「是卽ち名けて犯波羅夷と爲す。何を以ての故に。實は所得無くして詐つて得相を現ずるが故なり。是の如きの人、人法を退失す。是を波羅夷と名く。所謂若比丘有りて、少欲知足、持戒清淨にして空閑處に住す。若王、大臣、是の比丘を見、心念を生じて言ひて羅漢を得と謂ひ、卽ち前みて讃歎し、恭敬、禮拜す。復是の言を作さく、「是の如きの大師、是の身を捨て已りて、當に、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。」比丘聞き已りて、卽ち王に白して言さく、「我實に未だ沙門の道果を得ず。王、我已に道果を得と稱すること莫れ。唯願はくば大王、我が爲に不知足の法を說くこと勿れ。不知足とは、乃至阿耨多羅三藐三菩提を得と謂ふを、皆默然として受く。我今、若當に默然として受くべくば、當に諸佛に訶責せらるべし。知足の行は諸佛に讃ぜらる。是の故に我、終身歡樂して知足を奉修せんと欲す。又知足とは、我定んで自ら未だ道果を得ずと知る。王、

我得と稱す。我今受けず、故に知足と名く。」時に王答へて言はく、「大師實に阿羅漢果を得、佛の如く異る無し。」

爾の時に其の王、普く皆內外の人民、中宮、妃后に宣告して、悉く皆沙門果を得と知らしむ。是の故に咸く一切聞者をして、心に敬信を生じて供養尊重せしむ。是の如きの比丘は眞に是梵行清淨の人なり。是の因緣を以て普く諸人をして大福德を得しめ、而して是の比丘は實に波羅夷罪を毀たず。何を以ての故に。前人自ら歡喜の心を生じて讚歎、供養するが故に。是の如きの比丘は當に何の罪か有るべき。若說きて「是の人罪を得」と言ふ有らば、當に知るべし、是の經は是魔の所說なり。復比丘有りて、佛の祕藏甚深の經典を說き、一切衆生皆佛性有り。是の性を以ての故に、無量億の諸の煩惱結を斷じ、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。一闡提を除く。若王、大臣、是の如きの言を作さく「比丘、汝當に作佛すべきや、作佛せずや。佛性有りや不や。」比丘、答へて言さく、「我今、身中定んで佛性有らん。成と不成とは未だ之を審かにすること能はず。」王の言はく、「大德、如其一闡提と作らずば、必ず成ずること疑無し。」比丘の言さく、「爾なり、實に王の言の如し」と。是の人、定んで「佛性有らん」と言ふと雖も、亦復波羅夷罪を犯さず。復比丘有りて、卽ち出家の時、是の思惟を作さく、「我今必定、阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん」と。是の如きの人、未だ無上に道果を成ずることを得ずと雖も、已に福を得ること無量無邊にして、稱計すべからずと爲す。假使人有りて、「當に是の人、波羅夷を犯す」と言ふべ

【四波羅夷】以下小乘律の罪名をあぐ。前に註す。

【五逆】五逆罪。又五無間業とも云ふ。五種の極惡罪なり。殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血の五。

【突吉羅】ツシクリタ（Duskrta）惡作と譯す。小罪なり。

くば、一切の比丘犯さざる者無けん。何を以ての故に。我往昔八十億劫に於て、常に一切不淨の物を離れ、少欲知足にして威儀成就し、善く如來の無上法藏を修し、亦自ら定んで、身に佛性有るを知らん。是の故に我今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、名けて佛と爲すことを得。大慈悲有りて、是の如きの經律は是佛の所說なり。若是に隨順すること能はざる者有らば、是魔の眷屬なり。若能く隨順せば、是大菩薩なり。復說き言ふ有らん、「四波羅夷、十三僧殘、二不定、三十捨墮、九十一墮法、四懺悔法、衆多の學法、七滅諍等無く、偸蘭遮、五逆等の罪、及び一闡提無し。若比丘、是の如き等を犯して、地獄に墮する者有らば、外道の人、悉く天に生ずべし。何を以ての故に。諸の外道等、戒の犯すべき無し。此は是、如來人を怖るるを示現す、故に斯の戒を說く。若佛、我が諸の比丘、若婬を行ぜんと欲せば、法服を捨て、俗の衣裳を著して、然して後婬を行ずべし」と。復念を生ずべし、「婬欲の因緣我が過咎に非ず。如來の在世も、亦比丘の婬欲を習行して、正解脫を得る有り。或は命終の後天上に生ず。古今之有り、獨我作すに非ず。或は四重を犯し、或は五戒を犯し、或は一切不淨の律儀を行ずるも、猶故眞正の解脫を具することを得。如來突吉羅を犯せば、忉利天の日月歲數の如く、八百萬歲地獄に墮在す」と說くと雖も、是亦如來、人を怖れしむるを示現す。「波羅夷より突吉羅に至りて輕重差無し」と言ふ。是諸の律師、妄りに此の言を作して、是佛制と言ふ。必定して當に知るべし「佛の所說に非ず」と。是の如きの言說は是魔の經律なり。若復說きて言はん、「諸戒の中に於て、若小戒乃至

【二】一切衆生有佛性について論ず。

細微を犯すも、當に苦報を受くべく、齊限有ること無し。」是の如く知り已りて自身を防護すること、龜の六を藏するが如くす。若律師有りて、復是の言を作さく、「凡そ所犯の戒、都て罪報無し」と。是の如きの人は親近すべからざること佛の所說の如し。

若一法を過れば、是を妄語と名く
後世を見ざれば、惡の造らざる無し

是の故に、是の人に親近すべからず。我が佛法の中清淨なる是の如し。況や復偷蘭遮罪を犯し、或は僧殘及び波羅夷を犯して、而も罪に非ざる有らんや。是の故に應當に、深く自ら是の如き等の法を防護すべし。若守護せずば、更に何の法を以て、名けて禁戒と爲ん。我經中に於て亦說きて「四波羅夷、乃至微細の突吉羅等を犯す有らば、應當に苦治すべし。衆生若禁戒を護持せざれば、云何ぞ當に佛性を見ることを得べき。一切衆生佛性有りと雖も、要ず持戒に因りて、然して後乃ち見る。佛性を見るに因りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。九部經の中方等經無し、是の故に有佛性を說かざるのみ。經に說かずと雖も、當に知るべし實に有り」と。若是の說を作さば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。」

(二)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、上に說きたまふ所の如く、一切衆生佛性有りとは、九部經の中、未だ曾て聞かざる所。如し其れ有りと說かば、云何ぞ波羅夷を犯さざるや。」佛の言はく、「善男子、汝が說く所の如く、實に波羅夷罪を毀犯せず。善男子、譬へば

人、說きて「大海唯七寶有りて八種無し」と言ふ者有らば、是の人罪無きが如し。若說きて「九部經の中佛性無し」と言ふ者有らば、亦復罪無し。何を以ての故に。我大乘大智海の中に於て、佛性有りと說く。二乘の人の知見せざる所なれば、佛故らに無と說くも罪有ること無きなり。是の如きの境界は諸佛の知る所にして、是聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。善男子、若人如來の甚深祕密藏を聞かざる者、云何ぞ當に佛性有るを知るべきや。何等をか名けて祕密の藏と爲す。所謂方等大乘經典なり。善男子、諸の外道有りて、或は我常と說き、或は我斷と說く。如來は爾らず。亦有我と說き、亦無我と說く。是を中道と名く。若說きて言ふ有らん「佛、中道を說く。一切衆生悉く佛性有り、煩惱覆ふが故に知らず見ず。是の故に、應當に方便を勤修して煩惱を斷壞すべし。」若能く是の如きの說を作す者有らば、當に知るべし、是の人四重を犯さず。若是の如きの說を爲す者有らば、是則ち名けて波羅夷を犯すと爲す。若說きて「我已に阿耨多羅三藐三菩提を成就す。何を以ての故に。佛性有るを以ての故に。佛性有る者は、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。是の因緣を以て、我今已に菩提を成就することを得」と言ふ有らば、當に知るべし、是の人は則ち名けて波羅夷罪を犯すと爲す。何を以ての故に。佛性有りと雖も、未だ諸の善方便を修習せざるを以て、是の故に未だ見ず。未見を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ること能はず。善男子、是の義を以ての故に、佛法は甚深思議すべからず。」

【三】過人について論ず。

【四沙門果】沙門の四種の果にして、預流、一來、不還、阿羅漢の四果なり。

(三)迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、王有りて問うて言はく、「云何が比丘過人法に墮す。」』佛、迦葉に告げたまはく、「若比丘有りて、利養の爲の故に、飲食の爲の故に、諸の諛諂、邪僞、欺詐を作す。云何が當に諸の世間の人をして、定實に我眞實の乞士と知る。是の因緣を以て、我をして大いに利養、名譽を得しむべし。是の如きの比丘多くは愚癡の故に、長夜常に念ず「我實に未だ四沙門果を得ず。云何が當に諸の世間の人をして我已に得と謂ふ。復當に云何が諸の優婆塞、優婆夷等をして、咸く共に我を指して是の如く是の人、福德眞に是聖人と言ふことを作さしむべき。」是の如く思惟し、專ら利を求むるが爲にして、法を求むるが爲に非ず。行來出入進止安庠たり。衣鉢を執持して威儀を失はず。獨空處に坐して阿羅漢の如くし、世間の人をして咸く是の言を作さしむ「是の如きの比丘善好第一なり。精勤苦行して寂滅の法を修す。」と。是の因緣を以て、我當に大いに門徒弟子を得べし。諸人も亦當に大いに衣服、飲食、臥具、醫藥を供養することを致すべし。多くの女人をして敬念、愛重せしむ。若比丘及び比丘尼、是の如きの事を作す有らば、過人法に墮す。

復比丘有りて、無上正法を建立せんと欲するが爲に空閑處に住す。阿羅漢に非ずして、而も人をして是羅漢、是好比丘、是善比丘、寂靜比丘と謂はしめんと欲す。無量の人をして信心を生ぜしむ。此因緣を以て、我無量の諸の比丘等、以て眷屬と爲すことを得。是に因りて破戒の比丘及び優婆塞を教へて、悉く戒を持たしむることを得。是の因緣を以て

正法を建立し、如來無上の大義を光揚し、方等大乘の法化を開顯し、一切の無量の衆生を度脱し、善く如來所說の經律輕重の義を解せん。復言はく「我今亦佛性有り。經有りて名を如來祕藏と曰ふ。是の經中に於て、我當に必定して佛道を成ずることを得、能く無量億の煩惱結を盡すべし。廣く無量の諸の優婆塞の爲に說き言はく「汝等盡く佛性有り。我と汝等と倶に當に如來の道地に安住して、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、無量億の諸の煩惱結を盡すべし。」是の說を作す者、是の人過人法に墮すと名けず。名けて菩薩と爲す。

「若突吉羅を犯す者有らば、忉利天上の日月歲數八百萬歲、地獄の中に墮して諸の罪報を受く。何に況んや、故らに偷蘭遮罪を犯すをや」と言ふ。此の大乘の中、若比丘有りて、偷蘭遮を犯さば、親近すべからず。何等をか名けて大乘經中の偷蘭遮罪と爲す。若長者の佛寺を造立する有りて、諸の華鬘を以て、用ひて佛に供養す。比丘有りて華貫中の縷を見、問はずして輒く取るを偷蘭遮と名く。若は知、不知も亦是の如く犯す。若貪心を以て佛塔を破壞すれば、偷蘭遮を犯す。是の如きの人は親近すべからず。若王、大臣、塔の朽故を見、修補して舍利を供養せんと欲するが爲に。是の塔中に於て、或は珍寶を得て即ち比丘に寄す。比丘得已りて自在にして用ふ。是の如きの比丘を名けて不淨と爲し、多く鬪諍を起す。善優婆塞親近し、供養、恭敬すべからず。是の如きの比丘を名けて無根と爲す。名けて二根と爲し、不定根と名く。不定根とは、女を欲貪する時身卽ち女と爲り、男を欲貪する時身卽ち男と爲る。是の如きの比丘を、名けて惡根と爲す、名けて男と爲さず、名

けて女と爲さず。出家と名けず、在家と名けず。是の如きの比丘は親近し、供養、恭敬すべからず。佛法の中に於て沙門法の者は、悲心を生じて衆生を覆育すべし、乃至螘子に無畏を施すべし、是沙門法なり。飲酒乃至嗅香を遠離す、是沙門法なり。妄語することを得ず、乃至夢中に妄語を念ぜず、是沙門法なり。欲心を生ぜず、乃至夢中も亦復是の如し、是沙門法なり。」

(四)迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、若比丘有りて、淫欲を行ずるを夢みば、是犯戒なりや否や。」佛の言はく「不なり。淫欲に於て臭穢の想を生ずべし。乃至一念の淨想を生ぜずば、女人の煩惱、愛想を遠離せよ。若行淫を夢みば、寤めて悔を生ずべし。比丘、乞食して供養を受くるの時、饑世に子の肉を食する想の如くすべし。若淫欲を生ぜば、疾く捨離すべし。是の如きの法門は、當に知るべし、是佛所說の經律なり。若魔の所說に隨順する者有らば、是魔の眷屬なり。若能く佛の所說の隨順する者は、是を菩薩と名く。若說きて言ふ有らん「常に一脚を翹げ、寂默して言はず。淵に投じ火に赴き、自ら高巖より墜ちて險難を避けず、毒を服し食を斷ず。灰土の上に臥し、自ら手足を縛す。衆生を殺害して方道呪術す。旃陀羅子、無根、二根、及び不定根、身根不具、是の如き等の事、如來悉く出家して道を爲すを聽す」と。是を魔說と名く。佛先に五種の牛味、及以油蜜を食することを聽す。憍奢耶衣、革屣等の物、是を除くの外、若說きて言ふ有らん「摩訶稜伽を著くることを聽し、一切の種子悉く貯畜することを聽す。草木の屬皆壽命有り。佛、是を說

【四】夢覺を論ず。

【摩訶稜迦】マハーランガ(Mahārāṅga)大價衣と譯す。衣服の名。

【五熱】五體を火に熱する外道の苦行。

【五】魔說佛說の差別を領解す。

【四諦品】此品は前品に「云何が諸の調御心喜眞諦を說くや」の問に答へ、苦集滅道の四諦を開說する章なり。

き已りて便ち涅槃に入る。若經律の是の說を作す者有らば、當に知るべし、卽ち是魔の所說なり。我も亦常に一脚を翹ぐるを聽さず。若法の爲の故に行、住、坐、臥を聽す。又亦毒を服し食を斷じ、五熱身を炙り、手足を繫縛し、衆生を殺害して方道呪術し、珂貝象牙、以て革屣を爲す。種子を儲畜し、草木命有り。摩訶稜伽を著するを聽す。」若世尊、是の如きの說を作すと言はば、當に知るべし、是を外道の眷屬と爲す。我が弟子に非ず。我唯五種の牛味、及び油蜜等を食することを聽し、革屣、憍奢耶衣を著くることを聽す。我「四大に壽命有ること無し」と說く。若經律、是の說を作す者有らば、是を佛說と名く。若佛の所說に隨順する者有らば、當に知るべし、是等は眞に我が弟子なり。若佛の所說に隨はざる者有らば、是魔の眷屬なり。若佛の經律に隨順する者あらば、當に知るべし、是の人は是大菩薩なり。善男子、魔說、佛說差別の相は、今已に汝が爲に廣宣分別す。」

(五)迦葉、佛に白して言さく「世尊、我今始めて魔說、佛說差別の相を知る。是に因つて佛法の深義に入ることを得ん。」

佛、迦葉を讃じたまはく『善い哉善い哉善男子、汝能く是の如く曉了分別す。是を黠慧と名く。』

四諦品第十

【一】初めに苦諦を明す。

【苦】ドフカ(Duhkha)生死の苦にして迷の果なり。

【二】集諦を明す。

【苦集諦】略して集諦と云ふ。集はサムダヤ(Samudaya)迷の因にして煩惱なり。

(一)佛、復迦葉に告げたまはく、「言ふ所の苦とは、苦聖諦と名けず。何を以ての故に。若苦是苦聖諦と言はば、一切の畜生及び地獄の衆生、聖諦有るべし。善男子、若復人有りて、如來の甚深の境界、常住不變微密法身を知らずして「是食身、是法身に非ず」と謂ふ。如來の道德、威力を知らず。是を名けて苦と爲す。何を以ての故に。不知を以ての故に。法を非法と見、非法を法と見る。當に知べし、是の人は必ず惡趣に墮し、生死に輪轉し、諸結を增長し、多く苦惱を受けん。若能く、如來常住變異有ること無きを知り、或は常住の二字音聲を聞く有りて、若一たび耳を經ば卽ち天上に生ぜん。後解脫の時、乃ち能く如來常住にして變易有ること無きを證知す。旣に證知し已りて是の言を作さく「我往昔に於て曾て是の義を聞く。今解脫を得て方に乃ち證知す。我本際に於て不知を以ての故に、生死に輪轉して周回窮り無し。今日に始めて乃ち眞智を得」と。若是の如く知らば、眞に是苦を修す、利益する所多し。若知らざる者は復勤修すと雖も、利益する所無し。是を苦を知ると名け、苦聖諦と名く。若人是の如く修習すること能はざれば、是を名けて苦と爲す、苦聖諦に非ず。

(二)苦集諦とは眞法の中に於て眞知を生ぜずして不淨物を受く、所謂奴婢、能く非法を以て是正法と云ふ。正法を斷滅して久住せしめず、是の因緣を以て法性を知らず。知らざるを以ての故に生死に輪轉して多く苦惱を受く、天に生じ及び正解脫を得ず。若深智有りて正法を壞せざれば、是の因緣を以て天上に生じ、及び正解脫を得。若苦集諦の處を知らずして而も正法、常住有ること無く、悉く是滅法と言ふ有らば、是の因緣を以て、無量劫に於い

【三】滅諦を明す。

【苦滅諦】略して滅諦と云ふ。滅はニローダ(Nirodha)苦集の滅したる悟の果にして涅槃を云ふ。

【四】道諦を明す。

【道聖諦】略して道諦と云ふ。道はマールガ(Mārga)悟境に達する因にして修行なり。

【三有】欲界色界無色界の三界のこと。有は因果空しからずして存在するものゝ謂。

て生死に流轉して諸の苦惱を受く。若能く法、常住にして異らずと知らば、是を集を知ると名け、集聖諦と名く。若人是の如く修習すること能はざれば、是を名けて集と爲す、集聖諦に非ず。

(三)苦滅諦とは、若多く修して空法を習學する有らば、是を不善と爲す。何を以ての故に。一切法を滅するが故に、如來の眞法藏を壞するが故に。是の修學を作す、是を修空と名く。苦滅を修する者は一切の諸の外道等に逆ふ。若空を修する、是滅諦と言はば、一切の外道も亦空法を修すれば滅諦有るべし。若說きて「如來藏有りて、見るべからずと雖も、若能く一切の煩惱を滅除せば、爾らば乃ち入ることを得」と云ふ有らん。若此の心を發す一念の因緣、諸法の中に於て而も自在を得。若如來の密藏無我空寂を修習する有らば、是の如きの人無量の世に於て、生死の中に在りて流轉して苦を受く。若是の如きの修を作さざる者有らば、煩惱有りと雖も、疾く能く滅除せん。何を以ての故に。如來の秘密藏を知るに因るが故なり。是を苦滅聖諦と名く。若能く是の如く滅を修習する者は是我が弟子なり。若是の如きの修を作すこと能はざる有らば、是を空を修すと名く、滅聖諦に非ず。

(四)道聖諦とは、所謂佛法僧寶及び正解脫なり。諸の衆生有りて、顚倒心をもつて言はく、「佛法僧及び正解脫無し。生死流轉、猶し幻化の如し。」是の見を修習す。此の因緣を以て、三有に輪轉して久しく大苦を受く。若能く發心して、如來常住にして變無く、法僧解脫も亦復是の如くなるを見ば、此の一念に乘じて、無量世に於て自在の果報、意に隨つて得。

【四倒】四顛倒想なり。

【五】迦葉の領解。

【四倒品】此品は四顛倒を開説するの章なり。

【一】初に苦倒を明す。

何を以ての故に。我往昔に於て四倒を以ての故に、非法を法と計し、無量の惡業の果報を受く。我今是の如きの見を滅するを以ての故に、佛正覺を成ず。是を道聖諦と名く。若人有りて、三寶無常と言ひて是の見を修習せば、是虛妄修にして道聖諦に非ず。若是の法を修して常住と爲さば、是我が弟子なり。眞見に四聖諦の法を修習するなり。是を四聖諦と名く。」

（五）迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、我今始めて甚深の四聖諦法を修習するを知る。」

四倒品第十一

（一）佛、復迦葉に告げたまはく、「四倒と謂ふは、非苦の中に於て苦想を生ずるを名けて顛倒と曰ふ。非苦とは、名けて如來と爲す。苦想を生ずとは、諸の如來無常變異と謂ふ。若如來是無常と說かば、大罪苦と名く。若「如來此の苦身を捨てて涅槃に入る。薪盡きて火滅するが如し」と言はば、是を非苦に苦想を生ずと名け、是を顛倒と名く。我若說きて「如來常と言ふは、即ち是我見なり。我見を以ての故に無量の罪有り。是の故に如來無常と說くべし。」是の如く說かば、我則ち樂を受く。如來無常、即ち是苦と爲す。若是苦ならば云何ぞ樂を生ぜん。苦の中に於て樂想を生ずるを以ての故に、名けて顛倒と爲し、樂に苦想を生ずるを名けて顛倒と爲す。樂とは即ち是如來、苦とは如來無常なり。若如來是無常と

說かば、是を樂の中苦想を生ずと名く。如來常住、是を名けて樂と爲す。若我說きて如來是常と言はば、云何ぞ復涅槃に入ることを得ん。若如來是苦に非ずと言はば、云何ぞ身を捨てて滅度を取る。樂の中に於て苦想を生ずるを以ての故に、名けて顚倒と爲し、是を初倒と名く。

(二)無常に常想、常に無常想、是を顚倒と名く。無常とは不修空を名く。空を修せざるが故に壽命短促す。若說きて「空寂を修せずして常壽を得」と言ふ有らば、是を顚倒と名け、是を第二の顚倒と名く。

(三)無我に我想、我に無我想、是を顚倒と名く。世間の人も亦我有りと說き、佛法の中も亦我有りと說く。世間の人有我と說くと雖も、佛性有ること無し。是即ち名けて無我中に於て我想を生ずと爲す。是を顚倒と名く。佛法有我は則ち是佛性なり、世間の人佛法無我と說く。是を我の中に無我想を生ずと名く。若「佛法必定無我なり、是の故に如來、諸の弟子に敕して無我を修習せしむ」と言はば、名けて顚倒と爲し、是を第三の顚倒と名く。

(四)淨に不淨想、不淨に淨想、是を顚倒と名く。淨とは即ち是如來常住、雜食身に非ず。煩惱身に非ず。是肉身に非ず、是筋骨繫縛の身に非ず。若說きて「如來無常是雜食身、乃至筋骨繫縛の身、法僧解脫是滅盡」と言ふ者有らば、是顚倒と名く。不淨淨想顚と名くとは、若說きて「我が此の心中、一法の是不淨なる者有ること無し。不淨無きを以て、定んで當に淸淨の處に入ることを得べし。如來所說の不淨觀を修す。是の如きの言、是虛妄の說」

【二】無常倒を明す。

【三】無我倒を明す。

【四】不淨倒を明す。

と言ふ有らば、是を顛倒と名く。是則ち名けて第四顛倒と爲す。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、我今日より始めて正見を得。世尊、是より前の我等、悉く邪見の人と名く。』

大般涅槃經　卷第八

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

如來性品第十二

【如來性品】此品は本經の骨子とする佛性を宣說する章なり。
【一】衆生佛性を有することを開說す。
【二十五有】有とは因果關係の歷然として存在するものにして因あれば必ず果あるもの丶謂にして迷界の存在なり。今之を別ちて二十五とす。四洲(四有)四惡趣(四有)六欲天(六有)梵天(一有)無想天(一有)五那含天(一有)四禪天(四有)四空處天(四有)の總稱。
【如來藏】眞如又は佛性のこと。如今は佛性をさす。

(一)迦葉、佛に白して言さく「世尊、二十五有に我有りや否や。」佛の言はく「善男子、我とは卽ち是如來藏の義、一切衆生悉く佛性有り、卽ち是我の義なり。是の如きの我の義、本より已來、常に無量の煩惱に覆はる。是の故に衆生見ることを得ること能はず。善男子、貧女人、舍內に多く眞金の藏有りて、家人大小、知者有ること無し。時に異人有りて善く方便を知り、貧女に語りて言はく「我今汝を雇ふ、汝我が爲に草穢を耘除すべし。」女人答へて言はく「我今能はず。汝若能く我が子に金藏を示さば、然して後乃ち當に速かに汝の爲に作すべし」是の人答へて言はく「我方便を知る、能く汝が子に示さん。」女人復言はく、「我が家大小、尙自ら知らず、況や汝能く知らんや。」是の人答へて言はく「我今能を審かにす。」女人復言はく「我も亦見んと欲す、並に我に示すべし。」是の人卽ち其の家に於て、金藏を掘出す。女人見已りて心歡喜を生じ、奇特の想を起して是の人を宗仰するが如し。善男子、衆生の佛性も亦復是の如し。一切衆生見るを得ること能はず。彼の寶藏を貧人の

來は佛の異名、藏は含攝、出生、隱覆の義。眞如佛性はよく如來の功德を含攝し、出生し、且つ衆生の煩惱によりて隱覆せらるるを以てこの名あり。

【家人大小】之に多解あり。人天を小とし二乘を大とするもの、但空の聲聞を小とし、但空の菩薩を大とするもの、但空の菩薩を小とし、出假の菩薩を大とするもの等あり。

【金藏】佛性を譬ふ。

知らざるが如し。善男子、我今普く一切衆生に所有の佛性、諸の煩惱に覆蔽せらるるを示す。彼の貧人の眞金藏有れども、見るを得ること能はざるが如し。如來今日、普く衆生の諸の覺寶藏を示す、所謂佛性なり。一切衆生是の事を見已らば、心歡喜を生じて如來を歸仰す。善方便とは卽ち是如來、貧女とは卽ち是一切無量の衆生、眞金藏とは卽ち佛性なり。

復次に善男子、譬へば女人の一子を生育するに、嬰孩にして病を得、是の女愁惱して良醫を求覓す。良醫旣に至りて三種の藥を合す、酥、乳、石蜜なり。之を與へて服せしむ。因つて女人に告ぐ「兒藥を服し已らば、且く乳を與ふること莫れ。藥消し已るを須ちて、爾して乃ち之を與へよ。」是の時に女人、卽ち苦味を以て用ひて其の乳に塗り、其の兒に語りて言はく「我が乳毒を塗れり、復觸るべからず。」其の兒渴乏して母の乳を得んと欲す。乳の毒氣を聞きて便ち遠く捨て去る。其の藥消するに至り、母乃ち乳を洗ひ、子を喚びて之を與ふ。是の時に小兒、復饑渴すと雖も、先に毒氣を聞く、是の故に來らず。母復語りて言はく「汝藥を服するが爲の故に、毒を以て塗る。汝藥已に消すれば、我已に洗ひ竟る。汝便ち來るべし、乳を飲むも苦きこと無し。」其の兒聞き已りて、漸漸に還りて飲むが如し。善男子、如來も亦爾なり。一切を度せんが爲に諸の衆生に無我の法を修するを敎ふ。是の如く修し已れば、永く我が心を斷じて涅槃に入る。世間の諸の妄見を除くが爲の故に、世間に出過するの法を示現するが故に、復世間の計我虛妄にして眞實に非ざるを

【二】我無我を論じ佛性を開說す。

示すが故に、無我法を修して身を清淨にするが故なり。譬へば女人、其の子の爲の故に苦味を以て乳に塗るが如し。如來も亦爾なり。空を修するが爲の故に、說きて「諸法悉く我有ること無し」と言ふ。彼の女人、乳を淨洗し已りて、而も其の子を喚び、還つて飮ましめんと欲するが如し。我今も亦爾なり、如來藏を說く。是の故に比丘、怖を生ずべからず。彼の小兒の母の喚ぶを聞き已りて、漸く還つて乳を飮むが如し。比丘も亦爾なり。自ら如來祕藏有らざることを得ざるを分別すべし。」

(二)迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、實に我有ること無し。何を以ての故に。嬰兒生ずるの時、知曉する所無し。若我有らば、卽ち生の日、尋いで知有るべし。是の義を以ての故に、定んで我無きを知る。若定んで我有らば、受生已後終沒無かるべし。若一切皆佛性の是常住なる有らしむれば、壞相無かるべし。若壞相無ければ、云何ぞ而も刹利、婆羅門、毗舍、首陀、及び旃陀羅、畜生の差別有らん。今業緣種種同じからず、諸趣各異るを見る。若定んで我有らば、一切衆生勝負無かるべし。是の義を以ての故に。定んで知んぬ、佛性是常法に非ず。若佛性定んで是常と言はば、何に緣りてか復殺、盜、淫、兩舌、惡口、妄言、綺語、貪恚、邪見有りと說く。若我性常ならば、何が故ぞ酒後荒醉迷亂する。若我性常ならば、盲色を見るべからず、聾聲を聞くべからず、瘂能く語るべく、拘躄能く行かん。若我性常ならば、火坑、大水、毒藥、刀劍、惡人、禽獸を避くべからず。若我常ならば、本更ふる所の事、妄失すべからず。若妄失せずば、何に緣りてか、復我曾て何の

處にか是の人を見ると言ふや。若我常ならば則ち老少盛衰有りて往事を憶念すべからず。若我常ならば、何の處にか止住す。涕唾、青、黃、赤、白、諸色の中に在りと爲すや。若我常ならば、身中に徧ずること胡麻油の間、空處無きが如くなるべし。若身を斷ずる時、我も亦斷ずべし。』

佛、迦葉に告げたまはく「善男子、譬へば王家に大力士有りて、其の人眉間に金剛珠有り。餘の力士と角力相撲す。而も彼の力士頭を以て之に觸るるに、其の額上の珠、尋いで膚中に沒し、都て自ら是の珠の在る所を知らず。其の處に瘡有り、卽ち良醫に命じて自ら療治せんと欲す。時に明醫有り、善く方藥を知る。卽ち是の瘡は珠の體に入るに因る。是の珠皮に入りて卽便停住するを知る。是の時に良醫、力士に尋問す「卿、額上の珠何れの所在と爲ん。」力士驚き答ふ「大師醫王、我が額上の珠、乃ち去ること無きや。是の珠今者何れの所在と爲ん。將幻化に非ずや。」憂愁啼哭す。是の時に良醫、力士を慰喩す「汝今大愁苦を生ずべからず。汝鬪ふ時に因りて寶珠體に入る。今皮裏に在りて影外に現ず。汝等鬪ふ時、瞋恚の毒盛にして珠體に陷入するが故に自ら知らず。」是の時に力士、醫の言を信ぜず、若皮裏に在らば膿血不淨、何に緣りてか出でざらん。若筋裏に在らば見るべからず。汝今云何ぞ我を欺誑する。」時に醫、鏡を執りて以て其の面を照すに、珠鏡の中に在りて明了に顯現す。力士、見已りて心に驚怪を懷き、奇特の想を生ずるが如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し。善知識に親近すること能はざるが故に、佛性有りと雖も、皆見る

こと能はず。而も貪淫、瞋恚、愚癡に覆蔽せらる。故に地獄、畜生、餓鬼、阿修羅、旃陀羅に墮し、刹利、婆羅門、毗舍、首陀、是の如き等の種種の家中に生ず。心に因りて起す所の種種の業縁、人身を受くと雖も、聾盲、瘖瘂、拘躄、癃跛、二十五有に於て諸の果報を受く。貪淫、瞋恚、愚癡心を覆ひて佛性を知らず。彼の力士、寶珠の體に在れども呼びて失去すと謂ふ。衆生も亦爾なり。善知識に親近することを知らざるが故に、如來の微密寶藏を識らずして無我を修學す。譬へば非聖の我有りと說くと雖も、亦復我の眞性を知らざるが如し。我が諸の弟子も亦復是の如し。善知識に親近することを知らざるが故に、無我を修學して亦復無我の處を知らず。尙自ら無我の眞性を知らず、況や復能く有我の眞性を知らんや。善男子、如來是の如く諸の衆生皆佛性有りと說く。譬へば良醫の彼の力士に金剛寶珠を示すが如し。是の諸の衆生、無量億の諸の煩惱等に覆蔽せられて佛性を識らず。若煩惱を盡さば、爾の時に乃ち證知明了を得、彼の力士の淨鏡の中に於て其の寶珠を見るが如し。善男子、如來の祕藏是の如く無量にして思議すべからず。

復次に善男子、譬へば雪山に一味藥有り、名けて樂味と曰ふ。其の味極めて甜し。深叢の下に在りて、人の能く見ること無し。人有りて、香を聞ぎて卽ち其の地に、當に是の藥有るべきを知る。過去世の中、轉輪王有りて、彼の雪山に於て、此の藥の爲の故に、在在所所に木筩を造作して、以て是の藥を接す。是の藥熟する時、地より流出して木筩の中に集る、其の味眞正なり。王既に沒し已りて、其の後是の藥、或は酢、或は鹹、或は甜、

或は苦、或は辛、或は淡、是の如きの一味、其の流處に隨ひて種種異ること有り。是の藥の眞味は停留して山に在り、猶し滿月の如し。凡人の薄福、以て掘鑿して功を加ふること苦ろに至ると雖も、而も得ること能はず。復聖王有りて世に出現し、福因緣を以て、卽ち是の藥眞性の味を得るが如し。善男子、如來の祕藏、其の味も亦爾なり。諸の煩惱の叢林に覆はれ、無明の衆生見るを得ること能はず。一味とは譬へば佛性の如し。煩惱を以ての故に種種の味を出す。所謂地獄、畜生、餓鬼、天人、男女、非男非女、刹利、婆羅門、毗舍、首陀なり。

佛性は雄猛にして毀壞すべきこと難し。是の故に能く殺害する者有ること無し。若殺す者有らば、則ち佛性を斷ぜん。是の如きの佛性は終に斷ずべからず。性若斷ずべくば是の處有ること無し。我性の如きは、卽ち是如來祕密の藏なり。是の如きの祕藏は、一切能く毀壞、燒滅すること無し。壞すべからずと雖も、然も見るべからず。若阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得ば、爾らば乃ち證知せん。是の因緣を以て能く殺す者無し。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、若殺す者無くば、應當に不善の業有ること無かるべし。』佛、迦葉に告げたまはく、『實に殺生有り。何を以ての故に。善男子、衆生の佛性五陰の中に住す。若五陰を壞すれば名けて殺生と曰ふ。若生を殺す有らば、卽ち惡趣に墮せん。業因緣を以て、而も刹利、婆羅門等、毗舍、首陀、及び旃陀羅、若は男、若は女、非男非女、二十五有差別の相有りて生死に流轉す。非聖の人橫に我を計す「大小の諸相猶し稗子

【甘露】アムリタ(Amṛta)の譯。不死とも譯す。味甘くして蜜の如きもの。天人の常食なりと云ふ。

の如し。或は米豆、乃至拇指の如し。『是の如く種種に妄りに憶想を生ず、妄想の相眞實有ること無し。出世の我相は、名けて佛性と爲す。是の如く我を計するは、是を最善と名く。

復次に善男子、譬へば人有りて善く伏藏を知り、即ち利钁を取り、地を掘りて直ちに下、磐石、沙礫、直ちに過ぎて難むこと無し。唯金剛に至りて穿徹すること能はざるが如し。夫金剛とは所有の刀斧も破壞すること能はず。善男子、衆生の佛性も亦復是の如し。一切の論者、天魔、波旬、及び諸の人天の壞する能はざる所なり。五陰の相は即ち是起作、起作の相は猶し石砂の穿つべく、壞すべきが如し。佛性眞我は、譬へば金剛の毀壞すべからざるが如し。是の義を以ての故に、五陰を壞するは名けて殺生と爲す。善男子、必定して當に知るべし、佛法は是の如く思議すべからざるを。善男子、方等經とは、猶し甘露の如く、亦毒藥の如し。』迦葉菩薩、復佛に白して言さく「如來何に縁りてか方等經は、譬へば甘露の如く亦毒藥の如しと說く。」佛の言はく「善男子、汝今如來の祕藏眞實の義を知らんと欲するや不や。」迦葉白して言さく「我今實に如來祕藏の義を知ることを得んと欲す。」

爾の時に世尊、偈を說きて言はく、

或は甘露を服して、命を傷けて早夭する有り
或は復甘露を服して、壽命長存を得
或は毒を服して生ずる有り、毒を服するに縁りて死する有り

無閡智の甘露、所謂大乘典なり
是の如きの大乘典も、亦雜毒藥と名く
酥醍醐等、及以諸の石蜜
服して消すれば則ち藥と爲り、消せざれば則ち毒と爲るが如し
方等も亦是の如し、智者は甘露と爲し
愚は佛性を知らず、之を服すれば則ち毒と成る
聲聞及び緣覺、大乘を甘露と爲す
猶し諸味の中、乳最も第一爲るが如し
是の如く勤進する者、大乘に依因して
涅槃に至ることを得て、人中の象王と成る
衆生佛性を知る、猶し迦葉等の如し
無上の甘露味、不生にして亦不死
迦葉汝今當に、善く三歸を分別すべし
是の如きの三歸の性、則ち是我の性
若能く諦かに、我性佛性有るを觀察すれば
當に知るべし是の如きの人、祕密藏に入ることを得
我及び我所を知る、是の人已に世を出で

佛法三寶性、無上第一尊
我が所說の偈の如く、其の性義是の如し
爾の時に迦葉、復偈を說きて言さく、
我今都て、歸依三寶の處を知らず
云何が當に、無上無所畏に歸趣すべき
三寶の處を知らずば、云何が無我を作らん
云何が佛に歸する者、而も安慰を得
云何が歸依法、唯願はくば我が爲に說きたまへ
云何が自在を得、云何が不自在
云何が歸依僧、轉じて無上の利を得ん
云何が眞實說、未來に佛道を成ぜん
未來若成ぜずば、云何が三寶に歸せん
我今預知無し、當に次第依を行ずべし
云何ぞ未だ懷妊せざるに、而も子を生ずるの想を作さん
若必ず胎中に在らば、則ち名けて子有りと爲す
子若胎中に在らば、定んで當に生ずべきこと久しからじ
是を名けて子の義と爲す、衆生の業も亦然なり

佛の所說の如きは、愚者は知ること能はじ
其の不知を以ての故に、生死の獄に輪回す
假名優婆塞、眞實義を知らず
唯願はくば廣く分別して、我が疑網を除斷したまへ
如來大智慧、唯哀を垂れて分別し
願はくば如來の、祕密の寶藏を說きたまへ
迦葉汝當に知るべし、我今當に汝が爲に
善く微密藏を開きて、汝が疑をして斷つことを得しむべし
今當に至心に聽くべし、汝諸の菩薩に於て
則ち第七佛と、其の一名號を同じうす
佛に歸依する者、眞に優婆塞と名く
終に更に、其の餘の諸の天神に歸依せず
法に歸依する者、則ち殺害を離れ
聖僧に歸依する者、外道を求めず
是の如く三寶に歸すれば、則ち無所畏を得
迦葉佛に白して言さく、我も亦三寶に歸す
是を名けて正路と爲す、諸佛の境界なり

【三】三歸依を明す。

【法身舍利】如來法身の遺骨にして經卷等を意味す。或は曰く法身は本地舍利は應身なりと。

二寶平等の相、常に大智の性有り
我性及び佛性、二無く差別無し
是の道佛の讃じたまふ所、正進安止の處なり
亦正徧知と名く、故に佛に稱せらる
我も亦善逝、所讃の無上道に趣く
是最も甘露と爲す、諸有有ること無き所なり

(三)爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく、「善男子、汝今諸の聲聞、凡夫人の如く、三寶を分別すべからず。此の大乘に於て、三歸分別の相有ること無し。所以は何ん。佛性の中に於て卽ち法僧有り。聲聞、凡夫を化度せんと欲するが爲の故に、分別して三寶の異相を說く、善男子、若世間法に隨順せんと欲せば、則ち三歸依有るを分別すべし。善男子、菩薩是の如きの思惟を作すべし、「我今此の身佛に歸依す。若卽ち此の身佛道を成ずることを得ば、旣に成佛し已らば、當に諸の世尊を恭敬、禮拜、供養すべからず。何を以ての故に。諸佛平等、等しく衆生の爲に歸依と作るが故なり。若法身舍利を尊重せんと欲せば、便ち諸佛の塔廟を禮敬すべし。所以は何ん。諸の衆生を化度せんと欲するが爲の故なり。亦衆生をして我が身中に於て塔廟の想を起して、禮拜、供養せしむ。是の如きの衆生、我が法身を以て歸依處と爲す。一切衆生皆非眞邪僞の法に依る。我當に次第して、爲に眞法を說くべし。又非眞僧に歸依する者有らば、我當に爲に依眞僧處と作るべし。若三歸依を分別す

る者有らば、我當に爲に一歸依處と作り、三差別無かるべし。生盲の衆に於て爲に眼目と作り、復當に諸の聲聞、緣覺の爲に眞歸處と作るべし。善男子、譬へば人有りて、陣に臨みて戰ふ時、卽ち心念を生ずるが如し「我是の中に於て最も第一と爲す。一切の兵衆悉く我に依恃す」と。亦太子、是の如く思惟するが如し「我當に其の餘の王子を調伏し、大王の、帝王の業を紹繼して自在を得、諸王の子をして悉く歸依せられしむべし。是の故に下劣心を生ずべからず」と。王の如く、王子、大臣も亦爾なり。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。是を思惟と作す。云何が三事我と一體なる。善男子、我三事卽ち是涅槃と示す。如來とは無上士と名く。譬へば人身は頭を最も上と爲す。餘の肢節、手足等に非ざるなり。佛も亦是の如し。最も尊上爲り、法僧に非ざるなり。諸の世間を化度せんと欲するが爲の故に、種種に差別の相を示現す。彼の梯橙の如し。是の故に汝今、凡愚の人の知る所の、三歸差別の相の如きを受持すべからず。汝大乘に於て、猛利決斷すること剛刀の如くすべし」

迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、我知りて故らに問ふ、知らずと爲すに非ず。我、菩薩大勇猛者の爲に、無垢清淨の行處を問ひ、如來をして、諸の菩薩の爲に奇特の事を廣宣し分別し、大乘方等經典を稱揚せしめんと欲す。如來大悲、今已に善說す。我も亦是の如く其の中に安住せん。說く所の菩薩清淨の行處は、卽ち是大涅槃經を宣說す。世尊、我今亦當に、廣く衆生の爲に是の如きの如來祕藏を顯揚すべし。亦當に眞の三歸處を證知

【四】中道圓觀を明す。

すべし。若し衆生の、能く是の如きの大涅槃經を信ずる有らば、其の人則ち能く自然に三歸依處を了達せん。何を以ての故に。如來祕藏、佛性有るが故に、其是の經典を宣說する者有らば、皆身中に盡く佛性有りと言ふ。是の如きの人は、則ち遠く三歸依處を求めず。何を以ての故に。未來世に於て我が身則ち當に三寶を成就すべし。是の故に聲聞、緣覺の人及び餘の衆生、皆我に依り恭敬、禮拜せん。善男子、是の義を以ての故に、應當に正しく大乘經典を學すべし。」迦葉、復言さく、「佛性是の如く思議すべからず。三十二の相、八十種の好も亦不可思議なり。」

(四)爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、「善い哉善い哉善男子、汝已に深利の智慧を成就す。我今當に、更に善く汝が爲に如來藏に入るを說くべし。若し我住せば、卽ち是常法、苦を離れず。若し我無ければ、淨行を修行するに利益する所無けん。若し諸法皆我有ること無しと言はば、是卽ち斷見なり。若し我住すと言はば、卽ち是常見なり。若し一切行無常と言はば、卽ち是斷見なり。諸行常とは復是常見なり。若し苦と言はば、卽ち是斷見なり。若し樂と言はば復是常見なり。一切法常を修する者は、斷見に墮し、一切法斷を修する者は、常見に墮す。步屈蟲の、要ず前脚に因りて後足を移すことを得るが如し。常斷を修する者も亦復是の如し、要ず斷常に因る。是の義を以ての故に。餘法の苦を修する者、皆不善と名く。餘法の樂を修する者は、則ち名けて善と爲す。餘法無我を修する者は、是諸の煩惱分なり。餘法の常を修する者は、是則ち名けて如來祕藏と曰ふ。所謂涅槃は窟宅有るこ

【二邊】二見とも云ふ。中道を離れて一方に傾くこと、普通斷常有無等の二見とす。

と無し。餘の無常法を修する者は即ち是財物、餘の常法を修する者は、佛法僧及び正解脱を謂ふ。當に知るべし、是の如きの佛法中道は、二邊を遠離して眞法を説く。凡夫愚人も中に於て疑無し。羸病の人の酥を服食し已らば、氣力輕便なるが如し。

有無の法體性定まらず。譬へば四大の、其の性同じからず、各自ら違反するを、良醫は善く知り、其の偏發に隨ひて而も之を消息するが如し。善男子、如來も亦爾なり。諸の衆生に於ける、猶し良醫の如し。諸の煩惱の體相差別を知りて、而も爲に除斷し、如來祕密の藏は、清淨佛性常住にして變らざるを開示す。若有と言はば、智染すべからず。若無と言はば即ち是妄語なり。若有と言はば、默然すべからず。亦復戲論、諍訟すべからず。但諸法の眞性を了知せんことを求めよ。凡夫の人、戲論、諍訟す。如來の微密藏を解せざるが故なり。若苦を説かば、愚人便ち、身是無常と謂ひ、一切苦と説く。復身、樂性有るを知ること能はず。無常を説かば、凡夫の人は、一切の身、皆是無常なること、譬へば瓦坏の如しと計す。有智の人は、應當に分別すべし、盡く一切無常と言ふべからず。何を以ての故に。我が身即ち佛性種子有ればなりと。若無我を説かば、凡夫は當に一切佛法、悉く我有ること無しと謂ふべし。智者應當に無我の假名不實を分別すべし。是の如く知り已りて疑を生ずべからず。若如來祕藏空寂と言はば、凡夫は之を聞きて斷滅の見を生ず。有智の人は、應當に如來是常、變易有ること無きを分別すべし。若解脱、譬へば幻化の如しと言はば、凡夫は當に解脱を得る者即ち是磨滅と謂ふべし。有智の人は、應當に人

【五】不二不異に約して中道を宣說し五味を說く。

【無明】茲には十二因緣の無明をさす。

【摩訶般若波羅蜜經】マハープラジニヤーパラミタースートラ(Mahāprajñāpāramitāsūtra)略して大般若經と云ふ。

【乳に因りて云々】以下五味を明す。天台大師教判の所依にして最も有名なり。牛乳より醍醐に至る麁密をあらはす。

中の師子、去來有りと雖も、常住にして變無きを分別すべし。(五)若無明、諸行に因緣たりと言はば、凡夫の人は聞き已りて、分別して二法想を生ず。明と無明となり。智者は其の性無二、無二の性卽ち是實性を了達す。若諸行、識に因緣たりと言はば、凡夫は二と謂ふ、行と識となり。智者は其の性無二、無二の性卽ち是實性を了達す。若、十善十惡、可作、不可作、善道惡道、白法黑法と言はば、凡夫は二と謂ふ。智者は其の性無二、無二の性卽ち是實性を了達す。若一切法苦を修すべしと言はば、凡夫は二と謂ふ。智者は其の性無二、無二の性卽ち是實性を了達す。若一切行無常、如來祕藏も亦是無常と言はば、凡夫は二と謂ふ。智者は其の性無二、無二の性則ち是實性を了達す。若一切法無我、如來祕藏も亦我有ること無しと言はば、凡夫は二と謂ふ。智者は其の性無二、無二の性卽ち是實性を了達す。我と無我と性二有ること無し。如來祕藏、其の義是の如し。稱計すべからざる無量無邊の諸佛の讃ずる所なり。我今是の一切功德成就經の中に於て、皆悉く說き已りぬ。善男子、我と無我と性相二無し。汝是の如く受持頂戴すべし。善男子、汝も亦應當に是の如きの經典を堅持し憶念すべし。我先に摩訶般若波羅蜜經の中に於て、我、無我の二相有ること無きを說くが如し。乳に因りて酪を生じ、酪に因りて生酥を得、生酥に因りて熟酥を得、熟酥に因りて醍醐を得るが如し。是の如きの酪の性は乳より生ずと爲ん、自より生ずと爲ん、他より生ずるや。乃至醍醐も亦復是の如し。若他より生ぜば卽ち是他作にして、是乳生に非ず。若乳生に非ざれば乳爲す所無し。若自ら

【六八】五味に就いて論議す。

生ぜば、相似相續して生ずべからず。若相續して生ぜば、則ち倶に生ずべからず。若倶生ならざれば、五種の味は卽ち一時ならず。一時ならずと雖も、定んで復餘處より來らざるなり。當に知るべし、乳の中に先の酪の相有り。甘味多きが故に、自ら變ずること能はず。乃至醍醐も亦復是の如し。是牛の水草を食噉するの因縁、血脈轉變して而も乳と成ることを得。若甘草を食せば、其の乳則ち甜く、若苦草を食せば、乳則ち苦味なり。雪山に草有りて名を肥膩と曰ふ。牛若食すれば純ら醍醐を得、青、黃、赤、白、黑の色有ること無し。穀草の因縁、其の乳則ち色味の異有り。是の諸の衆生、明、無明の業因縁を以ての故に二相を生ず。若無明轉ずれば則ち變じて明と爲る、一切諸法善、不善等も亦復是の如し。二相有ること無し。』

(六八)迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、佛の所說の如き、乳中に酪有りとは、是の義云何。世尊、若乳の中に、定んで酪相有り。微細を以ての故に見るべからずと言はば、云何ぞ說きて「乳の因縁よりして酪を生ず」と言はん。法若本無ければ、則ち名けて生と爲す。如其已に有らば云何が生と言はん。若乳の中に定んで酪相有りと言はば、百草の中にも亦乳有るべし。是の如く乳の中にも亦草有るべし。若乳の中に定んで酪無しと言はば、云何ぞ乳に因りて而も酪を生ずることを得ん。若法本無くして後生ぜば、何が故ぞ乳の中に草を生ぜざらん。』『善男子、定んで乳の中に酪有り、乳の中に酪無しと言ふべからず。亦他よりして生ずと說くべからず。若乳の中に定んで酪有りと言はば、云何ぞ而も體味各異る

ことを得ん。是の故に說きて「乳の中に定んで酪性有り」と言ふべからず、若し乳の中に、酪定んで酪無しと言はば、乳の中に何が故に兎角を生ぜざる。毒を乳の中に置くときは、酪則ち人を殺す。是の故に說きて「乳の中に、定んで酪性無し」と言ふべからず。若し是の酪他より生ずと言はば、何が故ぞ水中に酪を生ぜざる。是の故に說きて「酪他より生ず」と言ふべからず。善男子、是の牛草を食噉する因緣の故に、血則ち白に變ず。草血滅し已りて、衆生の福力變じて乳と成る。是の乳草血よりして出づと雖も、二を言ふことを得ず。唯名けて「因緣よりして生ず」と爲すことを得。酪より醍醐に至る。亦復是の如し。是の義を以ての故に、牛味と名くることを得。是の乳滅し已りて因緣酪と成る。何等か因緣なる。若は醪若は煖なり。是の故に因緣よりして有りと名くることを得。乃至醍醐も亦復是の如し。是の故に、定んで、乳の中に酪相有ること無しと言ふことを得ず。他より生ぜば、乳を離れて有らん、是の處有ること無し。善男子、明と無明とも亦復是の如し。若し煩惱諸結と俱ならば、名けて無明と爲す。若し一切の善法と俱ならば、之を名けて明と爲す。是の故に我に二相有ること無しと言ふ。是の因緣を以て我上に說きて言ふ「雪山に草有りて名を肥膩と曰ふ。牛若し食すれば卽ち醍醐を成ず。佛性も亦爾なり」と。

善男子、衆生薄福にして是の草を見ず。佛性も亦爾なり、煩惱覆ふが故に衆生は見ず。譬へば大海は同一に鹹しと雖も、其の中亦上妙の水味乳に同じき有るが如し。譬へば雪山は、復種種の功德を成就し、多く諸藥を生ずと雖も、亦毒草有るが如し。諸の衆生の身も

【七】佛性の能見難見性を明す。

亦復是の如し。四大毒蛇の種有りと雖も、其の中亦妙藥大王有り。所謂佛性是作法に非ず。但煩惱客塵に覆はる。若し刹利、婆羅門、毗舍、首陀、能く斷除する者、即ち佛性を見、無上道を成ず。譬へば虛空雷を震ひ雲を起せば、一切の象牙の上に皆華を生ず。若し雷震無ければ、華則ち生ぜず、亦名字無きが如し。衆生の佛性も亦復是の如し。常に一切の煩惱に覆はれて見ることを得べからず。是の故に我「衆生無我」と說く。若し是の大般涅槃微妙の經典を聞くことを得ば、則ち佛性を見る、象牙の華の如し。契經一切の三昧を聞くと雖も、是の經を聞かずば如來微妙の相を知らず。雷無き時象牙上の華は見ることを得べからざるが如し。是の經を聞き已らば、即ち一切如來所說の祕藏佛性を知る。譬へば天雷に象牙の華を見るが如し。是の經を聞き已らば、即ち一切無量の衆生皆佛性有るを知る。是の義を以ての故に、大涅槃を說きて、名けて如來祕密の藏法身を增長すと爲す。猶し雷時象牙上に華くが如し。能く是の如きの大義を長養するを以ての故に、名けて大般涅槃と爲すことを得。若し善男子、善女人有りて、能く是の大涅槃微妙の經典を習學する有らば、當に知るべし、是の人は能く佛恩を報ず、眞の佛弟子なり。』

(七)迦葉菩薩、佛に白して言さく、『甚だ奇なり世尊、言ふ所の佛性は甚深甚深にして見難く入り難し。聲聞、緣覺は服すること能はざる所なり。』佛の言はく、『善男子、是の如く是の如し。汝が歎ずる所の如し、我が說に違はじ。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、佛性は云何が甚深にして見難く入り難き。』佛の言

はく、善男子、百の盲人目を治するが爲の故に、良醫に造詣す。是の時に良醫、即ち金錍を以て其の眼膜を決し、一指を以て示し問ひて言はく、「見るや不や。」盲人答へて言はく、「我猶未だ見ず。」復一指二指三指を以て之を示す。乃ち「少しく見る。」と言ふが如し。善男子、是の大涅槃微妙の經典は、如來未だ說かざれば亦復是の如し。無量の菩薩具足して諸波羅蜜を行ずと雖も、乃至十住猶未だ所有の佛性を見ること能はず。如來既に說かば即便少しく見る。是の菩薩摩訶薩既に見ることを得已らば、咸く是の言を作さく、「甚だ奇なり世尊、我等無量の生死に流轉し、常に無我に惑亂せらる」と。善男子、是の如きの菩薩、位十地に階るも、尙明了に佛性を知見せず。何に況や聲聞、緣覺の人の能く見ることを得んや。復次に善男子、譬へば遠く虛空に鵝鴈を觀て、是虛空と爲ん、是鵝鴈と爲んや。諦觀して已まず、彷彿に之を見るが如し。十住の菩薩如來性に於て、少分を知見することも亦復是の如し。況や復聲聞、緣覺の人、而も能く知見せんや。善男子、譬へば醉人の遠路を涉らんと欲するに、矇朧に道を見るが如し。十住の菩薩如來性に於て、少分を知見することも亦復是の如し。善男子、譬へば渴人の曠野を行くに、是の人渴逼り徧く行きて水を求めしに、叢樹有りて樹に白鶴有るを見る。是の人迷悶して是樹、是水なるを分別すること能はず。諦觀して已まず、乃ち白鶴及以叢樹を見るが如し。善男子、十住の菩薩如來性に於て、少分を知見することも亦復是の如し。善男子、譬へば人有りて大海の中に在り。乃至無量百千由旬、遠く大船、樓櫓、堂閣を望み、即ち是の念を作さく、「彼は是樓櫓なりや、是虛

空と爲んや。」久しく視て乃ち必定の心を生じ、是樓櫓と知るが如し。十住の菩薩自身の中に於て、如來性を見るも亦復是の如し。善男子、譬へば王子の身極めて輭弱なる通夜遊戯して明淸旦に至る。目一切を視るに悉く明了ならざるが如し。十住の菩薩已身に於て如來性を見ると雖も、亦復是の如く大いに明了ならず。復次に善男子、譬へば臣吏の王事に拘せられ、夜に逼りて家に還るに、電明暫く發し、因りて牛聚を見る。即ち是の念を作さく、「是牛羣と爲し、雲と爲し舍と爲さんや。」是の人久しく視て牛想を生ずと雖も猶審定せざるが如し。十住の菩薩已身に於て如來性を見ると雖も、未だ審定すること能はざること亦復是の如し。復次に善男子、持戒の比丘無蟲水を觀るに、而も蟲相を見て即ち是の念を作さく、「此の中に動く者是蟲と爲すや、是塵土なりや。」久しく視て已まず、是塵と知ると雖も、亦明了ならざるが如し。十住の菩薩已身の中に於て如來性を見ることも亦復是の如し、大いに明了ならず。復次に善男子、譬へば人有りて陰闇の中に於て遠く小兒を見、即ち是の念を作さく、「彼は是牛と爲し、人と爲し鳥と爲さんや。」久しく視て已まず。小兒を見ると雖も猶明了ならざるが如し。十住の菩薩已身の中に於て如來性を見ることも亦復是の如し、大いに明了ならず。復次に善男子、譬へば人有りて夜闇の中に於て、畫菩薩を見て即ち是の念を作さく、「是菩薩の像、自在天の像、大梵天の像染衣と成さんや。」是の人久しく觀て復意に是菩薩像と謂ふと雖も、亦明了ならざるが如し。十住の菩薩、已身の中に於て如來性を見ることも亦復是の如し、大いに明了ならざるが如し。善男子、所有の佛

【八】聞見淺行を明す。

【非聖の凡夫】外道をさす。

性は是の如く甚深にして知見を得難く、唯佛のみ能く知れり、聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。善男子、知者は是の如きの分別を作して如來性を知るべし。』

(八)迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、佛性は是の如く微細にして知り難し。云何が肉眼にて而も能く見ることを得ん。』佛、迦葉に告げたまはく『善男子、非想非非想天も、亦二乘の能く知ることを得る所に非ず。契經に隨順し、信を以ての故に知るが如し。善男子、聲聞、緣覺の、是の如きの大涅槃經を信順して、自ら己身に如來性の有るを知ることも亦復是の如し。善男子、是の故に應當に精勤して、大涅槃經を修習すべし。善男子、是の如きの佛性は、唯佛のみ能く知りて、諸の聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、非聖の凡夫衆生性有り、皆我有りと說く。』佛の言はく『譬へば二人共に親友爲り。一りは是王子、一りは是貧賤なり。是の如きの二人互に相往反す。是の時に貧人、是の王子に一つの好刀の淨明第一なる有るを見て、心中に貪著す。王子、後時に是の刀を執持して他國に逃至す。貧人後に於て他家に寄宿す。卽ち眠中に於て「刀刀」と寱言す。傍人之を聞き收めて王の所に至る。時に王問ひて言はく「汝刀と言ふは、以て我に示すべし。」是の人具さに上の事を以て王に答ふ「王、今設使臣が身を屠割し、手足を分裂して刀を得んと欲する者も、實に得べからず。臣、王子と素親厚を爲す。先に一處を共して曾て眼見すと雖も、乃至敢て手を以て振觸せず、況や當に故らに取るべきや。」王、復問ひて言はく「卿が見る所の刀、相貌何にか類す。」答へて言さく「大

王、我が見る所の者、羖羊角の如し。」王、是を聞き已りて欣然として笑ひ、語りて言はく、「汝今意の所至に隨ひ、憂怖を生ずること莫れ。我が庫藏の中、都て是の刀無し。況や汝乃ち、王子の邊に於て見んや。」時に王、卽ち諸の羣臣に問ひて言はく「汝等、曾て是の如きの刀を見るや不や。」言ひ已りて便ち崩ず。尋で餘子を立てて王位を紹繼す。復羣臣に問はく「汝等曾て、官の庫藏の中に於て是の刀を見るや不や。」諸臣答へて言さく「臣等曾て見る。」又復問ひて言はく「其の狀何にか似たる。」答へて言さく「大王、羖羊角の如し。」王の言はく「我が庫藏の中、何に緣りてか、當に是の如き相の刀有るべし。」次第して四王、皆悉く檢校して求索するに得ず。卻後數時、先逃の王子他國より還り、其の本土に歸りて復王と爲ることを得。既に王位に登りて復諸臣に問はく「汝、刀を見るや不や。」答へて言さく「大王、臣等皆見る。」又復問ひて言はく「其の狀何にか似たる。」答へて言さく「大王、其の色清淨にして優鉢羅華の如し。」復答へて「形羊角の如し」と言ふ有り。復答へて「其の色紅赤にして、猶し火聚の如し」と言ふ有り。復答へて「猶し黑蛇の如し」と言ふ有り。時に王、大いに笑ひて「卿等皆悉く、我が刀の眞實の相を見ず」といはんが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。世に出現して我が眞相を說く。說き已りて捨て去る。譬へば王子の、淨妙刀を持ちて他國に逃れ至るが如し。凡夫愚人說きて「一切我有り我有り」と言ふ。彼の貧人の他舍に止宿して、刀刀と寱言するが如し。聲聞、緣覺、諸の衆生に問はく「我何の相有る。」答へて言はく「我、我の相を見るに、大いさ拇指の

【文字品】此品は悉曇五十音について、一々の音を出して、その音を誦唱することによりて功德を生ずることを明すの章なり。
【一】字の意義を明す。
【字本】字の根本にして母音を云ふ。
【十四音】母音に十四あるを云ふ。

如し。」或は言ふ「米の如し。」或は「稗子の如し。」「我の相心中に住在して、熾然なること日の如し」と言ふ有り。是の如きの衆生我相を知らず。譬へば諸臣の刀相を知らざるが如し。菩薩、是の如きの我法を說く。凡夫知らずして、種種分別して妄りに我相を作す。刀相を問ふに、羊角に似たりと答ふるが如し。是の諸の凡夫、次第相續して邪見を起す。是の如きの諸の邪見を斷ずるが爲の故に、如來示現して無我を說く。譬へば王子の諸臣に語りて「我が庫藏の中、是の如きの刀無し」と言ふが如し。善男子、今日如來所說の眞我は、名けて佛性と曰ふ。是の如きの佛性は、我が佛法の中、譬へば淨刀の如し。善男子、若凡夫の、能善く說く者有らば、即ち是無上の佛法に隨順す。若善能く分別し隨順して是を宣說する者有らば、當に知るべし、即ち是菩薩の相貌なり。』

文字品第十三

(一)佛、復迦葉に告げたまはく「有らゆる種種の異論、呪術、言語、文字、皆是佛說にして外道の說に非ず。」迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、云何が如來、字の根本を說きたまへる。」佛の言はく「善男子、初半字を說きて、以て根本と爲す。諸の記論、呪術、文章、諸陰實法を持す。凡夫の人は是の字本を學びて、然して後能く是法非法を知る。」

迦葉菩薩、復佛に白して言さく「世尊、言ふ所の字とは其の義云何。」「善男子、十四音

【二】以下五十音について各その功德をあぐ。五十音は次の如し。
阿(アa)阿(アーā)伊(イi)伊(イーī)憂(ウu)憂(ウーū)哩(エe)黳(アイai)烏(オーo)炮(アウau)菴(アムaṃ)痾(アフaḥ)迦(カka)呿(クワkha)伽(ガga)伽(グワgha)俄(ナṅa)遮(チヤca)車(チヤcha)闍(ジヤja)闍(ジヤjha)若(ニヤña)吒(タṭa)侘(タṭha)茶(ダḍa)茶(ドハḍha)拏(ナṇa)多(タta)他(トハtha)陀(ダda)陀(ドハdha)那(ナna)波(パpa)頗(プハpha)婆(バba)婆(バbha)摩(マma)耶(ヤya)羅(ラra)羅(ラla)和(ウva)賒(シヤśa)沙(シヤṣa)娑(サsa)訶(ハha)羅(ラムllaṃ)流(リṛ)盧(リーṝ)樓

有り、名けて字義と爲す。言ふ所の字とは、名けて涅槃と曰ふ。常の故に流れず。若し不流なる者は則ち盡くること無しと爲す。夫れ無盡なる者は卽ち是如來の金剛の身なり。是の十四音、名けて字本と曰ふ。

(二)阿短とは破壞せざるが故に。不破壞の者は名けて三寶と曰ふ、譬へば金剛の如し。又復阿とは不流の故に。不流の者は卽ち是如來なり、如來の九孔は所流無きが故に、是の故に不流なり。又九孔無し。是の故に不流なり。不流は卽ち常なり、常は卽ち如來なり。如來無作、是の故に不流なり。又復阿とは名けて功德と爲す。功德の者は卽ち是三寶なり。是の故に阿と名く。

次に阿長とは阿闍梨と名く。阿闍梨とは、義何の謂ぞや。世間の中に於て聖者と名くることを得。何をか謂つて聖と爲す。聖は無著と名く。少欲知足なり、亦清淨と名く。能く衆生を三有流生死の大海に度す。是を名けて聖と爲す。又復阿とは名けて制度と曰ふ。淨戒を修持し威儀に隨順す。又復阿とは依聖人と名く。威儀、進止、擧動を學すべし。三尊を供養、恭敬し、禮拜す。父母に孝養し、及び大乘を學す。善男女等、具さに禁戒を持し、及び諸の菩薩摩訶薩等、是を聖人と名く。又復阿とは名けて敎誨と曰ふ。汝、來りて是の如きは作すべし、是の如きは作すこと莫れと言はんが如し。若能く非威儀法を遮する有らば、是を聖人と名く。是の故に阿と名く。

伊短とは卽ち是佛法梵行廣大なり、清淨無垢なり。譬へば滿月の如し。汝等是の如く

(リー)

【阿(短)】原本には「短阿」とあり。今便宜上、上の如くす。以下之に準ず。

【阿闍梨】修道の師範、教導師を云ふ。アーチャーリヤ(Acārya)の音譯。規範師と譯す。

【北鬱單越】北洲のこと。須彌山の北にある四大洲の一。ウッタラクル(Uttarakuru)北俱盧洲とも書く。

應作不作、是義非義、此は是佛說、此は是魔說なり。是の故に伊と名く。

伊長とは佛法微妙甚深にして得難し。自在天、大梵天王の法、自在と名くるが如し。若能く持する者は則ち護法と名く。又自在とは四護世と名く。是の四自在なれば、則ち能く大涅槃經を攝護し。亦能く自在に敷揚宣說す。又復伊とは能く衆生の爲に自在に法を說く。復次に伊とは自在を爲すの故に、何等を說きて是なるや。所謂方等經典を修習す。復次に伊とは、嫉妬を斷ずと爲す。稗穢を除くが如く、皆悉く能く變じて吉祥と成らしむ。是の故に伊と名く。

憂短とは、諸經の中に於て最上最勝、增長上上なる大涅槃を謂ふ。復次に憂とは、如來の性、聲聞、緣覺の未だ曾て聞かざる所、一切處に、北鬱單越最も殊勝爲るが如し。菩薩若能く是の經を聽受すれば、最上最勝と名くることを得。是の故に憂と名く。

憂長とは、譬へば牛乳は諸味の中上なるが如し。如來の性も亦復是の如し。諸經の中に於て最尊最上なり。若誹謗する有らば、當に知るべし、是の人は牛と別無し。復次に憂とは、是の人は名けて無慧と爲す、正念に如來微密祕藏を誹謗す。當に知るべし、是の人甚だ憐愍すべきものなるを。如來祕密の藏を遠離して無我の理を說く、是の故に憂と名く。

咽とは即ち是れ諸佛の法性涅槃なり、是の故に咽と名く。

翳とは謂く如來の義なり。復次ぎに翳とは如來の進止、屈伸、擧動の一切衆生を利益せざるなきをいふ。是の故に翳と名く。

烏とは煩惱の義と名く。煩惱とは名けて諸漏と曰ふ。如來は永く一切煩惱を斷ず、是の故に烏と名く。

炮とは謂く大乘の義なり。十四音に於て是れ究竟の義、大乘經典も亦復是の如し。諸經論に於て最も究竟と爲す、是の故に炮と名く。

菴とは能く一切の諸不淨物を遮するをいふ。佛法の中に於て能く一切の金銀、寶物を捨つ、是の故に菴と名く。

痾とは勝乘の義と名く。何を以ての故に。此の大乘典大涅槃經は諸經の中に於て最も殊勝と爲す。是の故に痾と名く。

迦とは諸の衆生に於て大慈悲を起す。子想を生ずること羅睺羅の如く、妙善の義を作す、是の故に迦と名く。

呿とは非善友と名く。非善友とは名けて雜穢と爲す。如來祕密の藏を信ぜず、是の故に呿と名く。

伽とは藏と名く。藏とは卽ち是れ如來の祕藏なり。一切衆生、皆佛性あり。是の故に伽と名く。

伽重音とは如來常音なり。何等をか如來常音と爲す。所謂如來は常住にして變ぜず、是の故に伽と名く。

俄とは一切の諸行破壞の相なり。是の故に俄と名く。

遮とは卽ち是れ修の義なり。一切の諸の衆生を調伏するが故に名けて修の義と爲す、是の故に遮と名く。

車とは如來、一切衆生を覆蔭すること譬へば大蓋の如し、是の故に車と名く。

闍とは是れ正解脫なり。老相あること無し、是の故に闍と名く。

闍（重音）とは煩惱繁茂すること、譬へば稠林の如きをいふ、是の故に闍と名く。

若とは是れ智慧の義なり。眞法性を知る、是の故に若と名く。

吒とは閻浮提に於て半身を示現して法を演說す。譬へば半月の如し。是の故に吒と名く。

侘とは法身具足なり。譬へば滿月の如し、是の故に侘（土家反）と名く。

茶とは是愚癡僧なり。常と無常とを知らず、譬へば小兒の如し。是の故に茶と名く。

茶（重音）とは師恩を知らず、譬へば羝羊の如し。是の故に茶と名く。

拏とは是聖義に非ず、譬へば外道の如し。是の故に拏と名く。

多とは如來、彼に於て諸の比丘に告げたまはく、「驚畏を離るべし。當に汝等が爲に微妙の法を說くべし」と。是の故に多と名く。

他とは愚癡の義と名く。衆生生死に流轉して自ら纏ふこと蠶蛣蟯の如し。是の故に他と名く。

陀とは名けて大施と曰ふ、所謂大乘なり。是の故に陀と名く。

陀（重音）とは功德を稱讚す。所謂三寶の、須彌山の高峻廣大傾倒有ること無きが如し。是

の故に陀と名く。

那とは三寶安住して傾動有ること無し。譬へば門閫の如し。是の故に那と名く。

波とは顚倒の義と名く。若三寶悉く皆滅盡すと言はば、當に知るべし、是の人自ら疑惑すと爲す。是の故に波と名く。

頗とは是世間災なり。若世間災起るの時、三寶も亦盡くと言はば、當に知るべし、是の人は愚癡無智にして聖旨を違失す。是の故に頗と名く。

婆とは佛十力と名く。是の故に婆と名く。

婆重音とは名けて重擔と爲す。無上の正法を荷負するに堪任す。當に知るべし、是の人は是大菩薩なり。是の故に婆と名く。

摩とは是の諸の菩薩制度を嚴峻にす。所謂大乘大般涅槃なり。是の故に摩と名く。

耶とは是の諸の菩薩、在在處處に諸の衆生の爲に大乘法を説く。是の故に耶と名く。

囉とは能く貪欲、瞋恚、愚癡を壞し、眞實法を説く。是の故に囉と説く。

羅輕とは聲聞乘と名く、動轉不住なり。大乘は安固にして傾動有ること無し。聲聞乘を捨て、精勤して無上の大乘を修習す。是の故に羅と名く。

和とは如來世尊、諸の衆生の爲に大法雨を雨す。所謂世間の呪術經書なり、是の故に和と名く。

賖とは三箭を遠離す、是の故に賖と名く。

沙とは具足の義と名く。若能く是の大涅槃經を聽くときは、則ち已に一切の大乘經典を聞持することを得と爲す。是の故に沙と名く。

娑とは諸の衆生の爲に正法を演說して、心をして歡喜せしむ。是の故に娑と名く。

訶とは心歡喜を名く。「奇なる哉世尊、一切行を離れ、怪なる哉如來、般涅槃に入る。」是の故に訶と名く。

羅とは名けて魔の義と曰ふ。無量の諸魔、如來の祕藏を毀壞すること能はず。是の故に羅來家と名く。復次に羅とは、乃至世間に隨順して父母、妻子有るを示現す。是の故に羅と名く。

魯、流、盧、樓、是の如きの四字は、說きて四義有り。佛、法、僧、及以對法と謂ふ。對法とは世間に隨順す。提婆達、僧を壞するを示現し、種種の形貌、色像を化作するが如し。戒を制するが爲の故なり。智者了達して、此に於て而も畏怖を生ずべからず。是を隨順世間の行と名く。是を以ての故に、魯、流、盧、樓と名く。

吸氣は舌根鼻に隨ふの聲、長短超聲音に隨ひて義を解す。皆舌齒に因りて而も差別有り。

(三)是の如きの字義は、能く衆生をして口業清淨ならしむ。衆生の佛性は、則ち是の如く文字を假りて然して後清淨ならず。何を以ての故に。性本淨の故に。復陰界入の中に處在すと雖も而も亦、陰界入に同じからざるなり。是の故に衆生、悉く諸の菩薩等に歸依すべし。佛性を以ての故に、等しく衆生を視て差別有ること爲し。是の故に半字、諸の經書、

【三】音字の利益を明す。

【半字】梵語の悉曇章の生字の根本を半字とす。摩多（母音）の十二字、體文（子音）の三十五字是なり。餘章の文字義理共に具足するを滿字と云ふ。半字は文字義理共に具足せざるによりてこの名あり。

記論、文章に於て而も根本と爲す。

又半字の義は、皆是煩惱言説の本なり、故に半字と名く。滿字とは、乃ち是一切の善法言説の根本なり。譬へば世間の惡行を爲す者を、名けて半人と爲し、善行を修する者を、名けて滿人と爲すが如し。是の如きの一切の經書、記論、皆半字に因りて而も根本と爲す。若如來及び正解脱半字に入ると言はば、是の事然らず。何を以ての故に。文字を離るるが故なり。是の故に如來、一切法に於て無閡無著にして眞に解脱を得。何等をか名けて字義を解了すと爲す。

如來世に出現して能く半字を滅すと知ること有らば、是の故に名けて解了字義と爲す。若半字の義に隨逐する者有らば、是の人如來の性を知らず。何等をか名けて無字の義と爲すや。不善の法を修習する者に親近す、是を無字と名く。又無字とは、能く善法を修習するに親近すと雖も、如來の常と無常と、恆と非恆と、及び法僧二寶、律と非律と、經と非經と、魔説と佛説とを知らず。若是の如く分別すること能はざる有らば、是を無字の義に隨逐すと名くるなり。我今已に是の如きの隨逐無字の義を説く。善男子、是の故に汝今半字を離れ善く滿字を解すべし。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、我等應當に善く字數を學すべし。今我無上の師に値遇し、已に如來殷勤の誨敕を受けたてまつる。』佛、迦葉を讚じたまはく『善い哉善い哉正法を樂ふ者は、是の如く學すべし。』

【鳥喩品】此品は鳥に喩へて常無常我無我を簡別し、涅槃を宣説するの章なり。

【二】常無常を簡擇す。

【迦隣提】カーチヤリンデイカーカ (Kācalindikāka) 實可愛と譯す。

【劫壞】世界の破壞する時を云ふ。

鳥喩品第十四

(二)佛、復迦葉に告げたまはく『善男子、鳥に二種有り。一つには迦隣提と名け、二つには鴛鴦と名く。遊止共俱、相捨離せず。是の苦、無常、無我等の法も亦復是の如し、相離ることを得ず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、云何が是の苦、無常、無我は彼の鴛鴦、迦隣提鳥の如くなる。』佛の言はく『善男子、異法は是苦、異法は是樂。異法は是常、異法は無常、異法は是我、異法は無我なり。譬へば稻米の麻麥に異り、麻麥の復豆粟、甘蔗に異るが如し。是の如きの諸種其の萌芽より、乃至華葉、皆是無常なり。果實成熟して人受用する時、乃ち名けて常と爲す。何を以ての故に。性眞實なるが故なり。』

迦葉、佛に白して言さく『世尊、是の如き等の物、若是常ならば、如來に同じきや。』佛の言はく『善男子、汝今是の如きの說を作すべからず。何を以ての故に。若如來須彌山の如しと言はば、劫壞の時須彌崩倒す。如來爾の時に豈同じく壞せんや。善男子、汝今是の義を受持すべからず。善男子、一切の諸法は唯涅槃を除きて、更に一法の而も是常なる者無し。直世諦を以て果實常と言ふ。』迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、善い哉善い哉佛の所說の如し。』佛、迦葉に告げたまはく『是の如く是の如し。善男子、一切の契經、諸定

を修すと雖も、乃至未だ大般涅槃を聞かざれば、皆一切悉く是無常と言ふ。是の經を聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無きが如し。卽ち能く一切の人天を利益す。何を以ての故に。己身に佛性有るを曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、菴羅樹の如く其の華始めて敷くを無常相と名け、若果實を成じて利益する所多ければ、乃ち名けて常と爲す。是の如く善男子、一切の契經、諸定を修すと雖も、未だ是の如きの大涅槃を聞かざる時は、咸一切悉く是無常と言ふ。是の經を聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無きが如し。卽ち能く一切の人天を利益す。何を以ての故に。己身に佛性有るを曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、譬へば金礦消鎔の時、是無常相なり。鎔け已りて金と成り、利益する所多きを、乃ち名けて常と爲すが如し。是の如く善男子、一切の契經、諸定を修すと雖も、未だ是の如きの大涅槃を聞かざる時は、咸一切悉く是無常と言ふ。是の經を聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無きが如し、卽ち能く一切の人天を利益す。何を以ての故に。己身に佛性有るを曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、譬へば胡麻の未だ壓を被らざる時、名けて無常と曰ふ。既に壓して油と成らば、多く利益する有り、乃ち名けて常と爲すが如し。善男子、一切の契經、諸定を修すと雖も、未だ是の如きの大涅槃を聞かざる時は、咸一切悉く是無常と言ふ。是の經を聞き已らば、煩惱有りと雖も煩惱無きが如し。卽ち能く一切の人天を利益す。何を何ての故に己身に佛性有るを曉了するが故なり。是を名けて常と爲す。復次に善男子、譬へば衆流の皆海に歸するが

【二】涅槃について我無我を明す。

【無想天】色界十八天の第十三。四禪天の第四。この天に生るれば一期の間心想起らざるが故にこの名あり。

如し。一切の契經、諸定三昧も皆大乘大涅槃經に歸す。何を以ての故に。究竟じて善く有佛性を說くが故なり。善男子、是の故に我、「異法是常、異法無常、乃至無我も亦復是の如し」と言ふ。」

〔二〕迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、如來已に憂悲の毒箭を離る。憂悲とは名けて天と爲す、如來は天に非ず。憂悲とは名けて人と爲す、如來は人に非ず。憂悲とは二十五有なり、如來は二十五有に非ず。是の故に如來憂悲有ること無し。何が故ぞ如來憂悲と稱言せん。」『善男子、無想天とは、名けて無想と爲す。若無想ならば則ち壽命無けん。若壽命無ければ云何ぞ陰界諸入有らん。是の義を以ての故に、無想天の壽說きて所住の處有りと言ふべからず。善男子、譬へば樹神の樹に依つて住するに、定んで枝に依り、節に依り、莖に依り、葉に依ると言ふことを得ず。定所無しと雖も無と言ふことを得ざるが如し。無想天の壽も亦復是の如し。善男子、佛法も亦爾なり、甚深にして解し難し。如來は實は憂悲苦惱無し。而も衆生に於て大慈悲を起し、憂悲有りて諸の衆生を視ること羅睺羅の如くなるを現ず。

復次に善男子、無想天の中の所有の壽命、唯佛のみ能く知しめし、餘の及ぶ所に非ず。乃至非想非非想處も亦復是の如し。迦葉、如來の性は清淨無染にして猶し化身の如し。云何が當に憂悲、苦惱有るべき。若如來憂悲無しと言はば、云何ぞ能く一切衆生を利し、佛法を弘廣せん。若無と云はば、云何ぞ而も等しく衆生を視ること羅睺羅の如しと言はん。

若等しく観ること羅睺羅の如くならざれば、是の如きの言は、則ち虚妄と爲す。是の義を以ての故に、善男子、佛不可思議、法不可思議、衆生性不可思議、無想天の壽不可思議なり、如來憂有り。及以憂無き、是佛境界なり。諸の聲聞、縁覺の知る所に非ず。

善男子、譬へば空中の舍宅は微塵も住立すべからざるが如し。若舍宅空に因りて住せずと言はば是の處有ること無し。是の義を以ての故に、「舍虚空に住す虚空に住せず」と説くべからず。凡夫の人復説きて「舍虚空に住す」と言ふと雖も、而も是の虚空實は住する所無し。何を以ての故に。性無住の故なり。善男子、心も亦是の如し。説きて「陰界入に住し、及以住せず」と云ふべからず。無想天の壽も亦復是の如し、如來の憂悲も亦復是の如し。若憂悲無ければ、云何ぞ説きて「衆生を等視すること羅睺羅の如し」と言はん。若有りと言ふ者も、復云何ぞ性虚空に同じと言はん。

善男子、譬へば幻師の、復種種の宮殿、殺生、長養、繋縛、放捨を化作し、及び金銀、瑠璃、寶物、叢林、樹木を作すと雖も、都て實性無きが如し。如來も亦爾なり。世間に隨順して憂悲を示現す、眞實有ること無し。善男子、如來已に大般涅槃に入る、云何ぞ當に憂悲苦惱有るべき。若如來の涅槃に入るを、是無常と謂はば、當に知るべし、是の人は則ち憂悲有り。若如來涅槃に入らず、常住にして變ぜずと謂はば、當に知るべし、是の人は憂悲有ること無し。如來憂有り及以憂無きを能く知る者無し。

復次に善男子、譬へば下人の能く下法を知りて中上を知らず、中者の中を知りて上を知

らず、上者の上を知りて中下を知らざるが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。齊しく自地を知る。如來は爾らず、悉く自地及以他地を知る。是の故に如來を無閡智と名く。幻化を示現し世間に隨順す。凡夫の肉眼是眞實と謂ふ。盡く如來の無閡無上の智を知らんと欲すれば、是の處有ること無し。有憂無憂、唯佛のみ能く知しめす。是の因緣を以て異法は有我、異法は無我なり。是を鴛鴦、迦隣提鳥と名く。

復次に善男子、佛法は猶し鴛鴦の共行の如し。是の迦隣提及び鴛鴦鳥は、盛夏水長するに高原を選擇して其の子を安處す、長養の爲の故なり。然して後本に隨ひて安隱にして遊ぶ。如來の出世も亦復是の如し。無量の衆を化して正法に住せしむ。彼の鴛鴦、迦隣提鳥の高原を選擇して其の子を安置するが如し。如來も亦爾なり。諸の衆生をして所作辦じ已りて即便大般涅槃に入らしむ。善男子、是を異法是苦、異法是樂と名く。諸行は是苦、涅槃は是樂なり。第一微妙にして諸行を壞するが故なり。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、云何が衆生涅槃を得れば第一樂と名く。」佛の言はく「善男子、我が所說の如く諸行和合を名けて老死と爲す。

謹愼して放逸無ければ、是の處甘露と名く
放逸にして謹愼せざれば、是を名けて死句と爲す
若不放逸は、則ち不死處を得
若其放逸は、常に死路に趣く

若放逸は有爲法と名く。是の有爲法を第一の苦と爲す。不放逸は則ち涅槃と名く。彼の涅槃は名けて甘露第一の最樂と爲す。若諸行に趣かば是を死處と名く、第一の苦を受く。若涅槃に至らば則ち不死と名く、最妙樂を受く。若不放逸は諸行を習ふと雖も、是亦名けて常樂不死、不破壞身と爲す。云何が放逸、云何が不放逸なる。非聖の凡夫、是を放逸常死の法と名く。出世の聖人、是不放逸にして老死有ること無し。何を以ての故に。第一常樂涅槃に入る。是の義を以ての故に、異法是苦、異法是樂、異法是我、異法無我なり。

人地に在りて虚空を仰ぎ觀るに、鳥迹を見ざるが如し。善男子、衆生も亦爾なり、天眼有ること無し。煩惱の中に在りて、而も自ら如來性有るを見ず。是の故に我、無我密教を説く。所以は何ん。天眼無き者は眞我を知らず。横に我を計するが故に。諸の煩惱に因りて造る所の有爲、即ち是無常なり。是の故に我、異法是常、異法無常と説く。

精勤勇健の者、若山頂に處すれば
平地及び曠野、常に諸の凡夫を見
大智慧殿、無上微妙の臺に昇れば
既に自ら憂患を除き、亦衆生の憂を見る

如來悉く無量の煩惱を斷じ、智慧山に住して、諸の衆生の、常に無量億の煩惱の中に在るを見る。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、偈の所説の如き、是の義然らず。何を以ての故に。

涅槃に入る者は憂無く喜無し。云何ぞ智慧臺殿に昇ることを得ん。復當に云何ぞ山頂に住在して、而も衆生を見るべけん。』

佛の言はく、『善男子、智慧殿とは卽ち涅槃を名く。憂患無き者を如來と謂ふなり。憂患有る者を凡夫人と名く。凡夫憂ふるを以ての故に、如來には憂無し。須彌山頂とは正解脫を謂ふ。勤精進の者は須彌山の動轉有ること無きに譬ふ。地は有爲行を謂ふなり。是の諸の凡夫、是の地に安住して諸行を造作す。其の智慧は則ち正覺を名く。離有常住、故に如來と名く。如來無量の衆生の、常に諸有の毒箭に中てらるるを憫念す。是の故に名けて如來憂有りと爲す。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、若し如來憂悲有らしめば、則ち稱して等正覺と爲すことを得ざらん。』佛、迦葉に告げたまはく『皆因緣有りて、衆生の化を受くべき處有るに隨ひて、如來中に於て受生を示現す。受生を現ずと雖も、而も實は生無し。是の故に如來を常住法と名く。迦隣提、鴛鴦等の鳥の如し。』

【月喩品】此品は月の常在と隱沒とに喩へて、如來性の生滅なく唯衆生の教化の爲に生滅の相を現すことを宣説する章なり。
【一】月の出沒を以て如來の生滅に比す。

大般涅槃經　卷第九

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

月喩品第十五

(一)佛、迦葉に告げたまはく、『譬へば人有りて、月の現ぜざるを見て、皆「月沒す」と言ひて沒想を作す。而も此の月性實は沒すること無きなり。他方に轉現すれば、彼處の衆生「復月出づ」と謂ふ。而も此の月性實は出づること無きなり。何を以ての故に。須彌山障ふるを以ての故に現ぜず。其の月常に生じて性出沒無きが如し。如來、應供、正徧知も亦復是の如し。三千大千世界に出現し、或は閻浮提に父母有るを示す。衆生皆「閻浮提に生ず」と謂ふ。或は閻浮提に涅槃を示現す。如來の性、實は涅槃無し。而も諸の衆生皆「如來實に般涅槃す」と謂ふ。譬へば月沒の如し。善男子、如來の性、實は生滅無く、衆生を化せんが爲に生滅有るを示す。

善男子、此の滿月の、餘方には半を見、此方には半月、餘方には滿を見る。閻浮提の人、若月初を見ば皆一日と謂ひて初月の想を起す。月の盛滿を見れば十五日と謂ひて盛滿の想を生ず。而も此の月性實は虧盈無し。須彌山に因りて增減有るが如し。善男子、如來も亦

【二】月の大小を以て教に比す。

【鍑口】釜の口。

爾なり。閻浮提に於て或は初生を現じ、或は涅槃を示す。始生を現ずる時、猶し初月の如し。一切皆「童子初生」と謂ふ。七歩を行く、二日の月の如し。或は復示現して書堂に入る、三日の月の如し。出家を示現す、八日の月の如し。大智慧微妙の光明を放ちて能く無量の衆生魔衆を破す。十五日盛滿の月の如し。或は復三十二の相、八十種の好を示現し、以て自ら莊嚴して、而も涅槃を現ず。譬へば月の蝕の如し。是の如く衆生見る所同じからず。或は半月を見、或は滿月を見、或は月蝕を見る。而も此の月性、實は增減、侵蝕の者無く、常に是滿月なり。如來の身も亦復是の如し。是の故に名けて常住不變と爲す。

(二)復次に善男子、譬へば滿月の一切悉く現じ、在在處處、城邑、聚落、山澤、水中、若は井、若は池、及び諸の水器、一切皆現ず。諸の衆生有りて百由旬、百千由旬を行くに、月常に隨ふを見る。凡夫愚人妄りに憶想を生じて言はく「我本城邑、屋宅に於て是の如きの月を見、今復此の空澤に於て之を見る。是本月と爲ん、本に異なりと爲んや」。各是の念を作さく、月形の大小、或は言はく「鍑口の如し、」或は言はく「車輪の如し、」或は言はく「四十九由旬の如し。」一切皆月の光明を見る。或は團圓猶し金槃の如しと見る。是の月性一にして、種種の衆生各異相を見るが如し。善男子、如來も亦爾なり、世に出現す。或は人天有りて是の念を作さく「如來今者我が前に在りて住す」と。復、畜生も亦是の念を生ずる有り、「如來今者我が前に住す」と。或は聾瘂有りて、亦如來聾瘂の相有るを見る。衆生種類、言音各異り、皆「如來悉く己が語に同じ」と謂ふ。亦各念を生ず「我が舍宅に在

【三】月に比して善惡輕重等を說く。
【羅睺羅阿修羅王】四阿修羅王の一。

りて我が供養を受く」と。或は衆生有りて、如來身の廣大無量なるを見る、或は微少と見る、或は佛是聲聞の像と見る有り。或は復緣覺の像と爲る有り。諸の外道有りて復各念言すらく、「如來今者、我が法の中に在りて出家學道す」と。或は衆生有りて復是の念を作さく「如來今者、獨我が爲の故に世に出現す」と。如來の實性は、譬へば彼の月の如し。即ち是法身、是無生身、方便の身なり。世に隨順して示現無量なり。本業の因緣在在處處に有生を示現すること、猶し彼の月の如し。是の義を以ての故に、如來常住にして變異有ること無し。

（三）復次に善男子、羅睺羅阿修羅王手を以て月を遮ふ。世間の人咸く月蝕すと謂ふ。阿修羅王は實は蝕すること能はず。阿修羅其の明を障ふるを以ての故なり。是の月團圓にして虧損有ること無し。但手を以て障ふるが故に現ぜざらしむ。若手を攝むる時は世間咸く月復還生すと謂ひ、皆是の月多く苦惱を受くと言ふ。假使百千の阿修羅王も之を惱ますこと能はざるが如し。如來も亦爾なり。衆生如來の所に於て「麤惡心を生じて佛身の血を出し、五逆罪を起し、一闡提に至ること有るを示す。未來世の諸の衆生の爲の故に、是の如く僧を壞し法を斷じて留難を作すを示現す。假使無量百千億の魔も如來の身血を侵し出すこと能はず。所以は何ん。如來の身は血肉、筋脈、骨髓有ること無し。如來眞實にして實に惱壞無し。衆生皆「法僧毀壞し、如來滅盡す」と謂ふ。而も如來性眞實にして變無く、破壞有ること無し。世間に隨順して是の如く示現す。

【契經】修多羅(Sūtra)の譯にして三藏中の經藏を云ふ。
【戒律】戒は尸羅(シーラSīla)身口意の惡を制すること。律は毗奈耶(ギナヤVinaya)の譯。身口意の三業を治め調へて過罪を制伏することと今茲には共に三藏中の律藏を云ふ。
【阿毘曇】アビダルマ(Abhidharma)無比法、對法と譯す。三藏中の論藏なり。
【上の諸天】四天王を指す。

復次に善男子、二人闘ふに若し刀杖を以て身を傷けて血を出し、死に至ると雖も殺想を起さずば、是の如きの業相輕にして重ならざるが如し。如來の所に於て本殺心無ければ、身血を出すと雖も是の業も亦爾なり、輕にして重ならず。如來是の如し。未來世に於て衆生を化するが爲に業報を示現す。

復次に善男子、猶し良醫の勸めて其の子に醫方の根本を敎へ、「此は是根藥、此は是味藥此は是色藥なり。種種の相貌、汝當に善く知るべし。」其の子父の敎する所を敬奉し、精勤習學して善く諸藥を解す。是の醫後時に壽盡きて命終す。其の子號慕して是の言を作さく、「父本我に根藥是の如く、莖藥是の如く、華藥是の如く、色相是の如しと敎ふ」といふが如し。如來も亦爾なり。衆生を化するが爲に制戒を示現す。應當に是の如く受持して犯すこと莫かるべし。五逆罪を作し、正法を誹謗し、及び一闡提、未來世是の事を起す者の爲に、是の故に示現す。比丘をして佛滅後に於て、是の如く此は是契經甚深の義、此は是戒律輕重の相、此は是阿毗曇分別法句と知ることを作す。彼の醫子の如くならしめんと欲す。

復次に善男子、人は月六月に一たび食するを見。而も上の諸天は須臾の間、已に月蝕を見る。何を以ての故に。彼の天は日長く、人間は短き故なるが如し。善男子、如來も亦爾なり。天人咸く「如來は短壽」と謂ふ。彼の天人の須臾の間頻りに月蝕を見るが如し。如來又須臾の間に於て百千萬億の涅槃、煩惱魔、陰魔、死魔を斷ずるを示現す。是の故に百千萬億の天魔、悉く如來般涅槃に入るを知る。又復無量百千の先業の因緣を示現す。世間

【四】日出に喩へて如來性を論ず。

の種種性に隨順するが故なり。示現是の如く無量無邊不可思議なり。是の故に如來常住にして變無し。

復次に善男子、譬へば明月は衆生見ることを樂ふ。是の故に月を稱して、號して樂見と爲す。衆生若貪恚、愚癡有るときは、則ち稱して樂見と爲すことを得ざるが如きなり。如來も是の如し。其の性、純善清淨無垢なり。是最も稱して樂見と爲すべきなり。樂法の衆生、視て之を厭ふこと無く、惡心の人は瞻覩することを喜ばず。是の義を以ての故に、「故に如來は譬へば明月の如し」と言ふ。

(四)復次に善男子、譬へば日出に三時の異有り、春、夏、冬を謂ふ。冬日は則ち短く、春日は中に處し、夏日は極めて長きが如し。如來も亦爾なり。此の三千大千世界に於て短壽の者、及び諸の聲聞の爲に短壽を示現す。斯等見已りて、咸く「如來は壽命短促なり」と謂ふ。譬へば冬日の如し。諸の菩薩の爲に中壽を示現す。若は一劫に至り、若は一劫を減ず。譬へば春日の如し。唯佛のみ佛の其の壽無量を觀る、譬へば夏日の如し。善男子、如來の所說の方等大乘微密の敎は、世間に示現して大法雨を雨す。未來世に於て若人有りて能く是の典を護持し、開示分別して衆生を利益せば、當に知るべし、是の輩は是眞の菩薩なり。譬へば盛夏に天甘雨を降すが如し、若聲聞、緣覺の人、佛如來の微密の敎を聞く有らば、譬へば冬日多く冷患に遇ふが如し。菩薩の人、若是の如きの微密敎誨、如來常住性變易無きを聞かば、譬へば春日萌芽の開敷するが如し。而も如來性、實は長短無し。世間の爲

【五】日月の陰闇彗星に喩へて如來性を論ず。

の故に示現すること是の如し。卽ち是諸佛の眞實法性なり。

復次に善男子、譬へば衆星の晝は則ち現ぜず。而るを人皆「晝星滅沒す」と謂ふ、其實は沒せず。現ぜざる所以は、日光映ずるが故なるが如し。如來も亦爾なり。聲聞、緣覺は見ることを得ること能はず。猶し世人の晝星を見ざるが如し。

(五)復次に善男子、譬へば陰闇に日月現ぜざるを、愚人は謂つて「日月失沒す」と言ふ。而も是の日月實は失沒無きが如し。如來の正法滅盡の時に、三寶沒を現ずるも亦復是の如し。永滅の爲に非ず。是の故に當に知るべし、如來は常住にして變易有ること無し。何を以ての故に。三寶の眞性は諸垢に染められざるが故なり。

復次に善男子、譬へば黑月、彗星の夜現ずるに、其の明炎熾にして漸く出でて還つて沒す。衆生見已りて不祥の想を生ずるが如し。諸の辟支佛も亦復是の如し。無佛の世に出づれば、衆生見已りて皆「如來眞實に滅度す」と謂ひて憂悲の想を生ず。而も如來身實に滅度せず。彼の日月に滅沒有ること無きが如し。

復次に善男子、譬へば日出づれば衆霧悉く除かるるが如し。此の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。世に出興して、若衆生一たび耳に經る者有らば、悉く能く一切の諸惡、無間の罪業を除滅す。是の大涅槃甚深の境界は思議すべからず。善く如來微密の性を說く。是の義を以ての故に、諸の善男子、善女人等は、如來に於て常住の心を生じ、變易有ること無し。正法斷ぜず、僧寶滅せざるべし。是の故に應當に多く方便を修し、是の典を勤學すべ

【菩薩品】此品は大般涅槃經の功德甚深、三乘無性、一切衆生の有佛性を宣說するの章なり。

【一】大般涅槃經の功德を開說す。

【四重禁】四種の重罪の意、殺、盗、淫、妄語の四波羅夷罪なり。

【五逆】五種の極罪にして、殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧の五。

し。是の人久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。是の故に此の經を名けて無量功德所成と爲す。亦菩提不可窮盡と名く。不盡を以ての故に、稱して大般涅槃と爲すことを得。善光有るが故に、猶し夏日の如し。身無邊の故に大涅槃と名く。』

菩薩品第十六

（一）『復次に善男子、日月の光は諸名の中の最なり。一切の諸明及ぶこと能はざる所なるが如し。大涅槃の光も亦復是の如し。諸の契經三昧の光明に於て最も殊勝と爲す。諸經三昧所有の光明、及ぶこと能はざる所なり。何を以ての故に。大涅槃の光は能く衆生の諸の毛孔に入るが故に。衆生菩提の心無しと雖も、而も能く爲に菩提の因緣を作す。是の故に復大般涅槃と名く。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、佛の所說の大涅槃の光、一切衆生の毛孔に入らば、衆生菩提の心無しと雖も、而も能く爲に菩提の因を作すとの如きは、是の義然らず、何を以ての故に。世尊、四重禁を犯し、五逆を作すの人及び一闡提、光明身に入りて菩提の因を作さば、是の如き等の輩、淨戒を持し諸善を修習すると何の差別か有る。若差別無ければ、如來何が故ぞ四依の義を說きたまふ。世尊、又佛の言ふが如く、「若衆生大涅槃を聞きて一たび耳に經る有らば、則ち諸の煩惱を斷除することを得」とは、「如來云何ぞ、上に

【一闡提】イッチャーンテカ(Icchantika)の音譯。斷善根、信不具足等と譯す。

【羅刹】ラークシャ(Rakṣasa)の音譯にして惡鬼の總名なり。

人恒沙の佛所に菩提心を發すも、大涅槃を聞きて其の義を解せざる有る」と說く。若し義を解せざれば、云何ぞ能く一切の煩惱を斷ぜん。」

佛の言はく「善男子、一闡提を除き、其の餘の衆生は是の經を聞き已らば、悉く皆能く菩提の因緣を作る。法聲光明毛孔に入らば、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。何を以ての故に。若し人能く無量の諸佛を供養、恭敬する有らば、方に乃ち大涅槃經を聞くことを得。薄福の人は則ち聞くことを得ず。所以は何ん。大德の人は乃ち能く是の如きの大事を聞くことを得、凡夫下劣は則ち聞くことを得ず。何等をか大と爲す。所謂諸佛の甚深祕藏、如來性是なり。是の義を以ての故に、名けて大事と爲す。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、云何が未だ菩提心を發さざる者、菩提の因を得るや。」

佛、迦葉に告げたまはく「若し是の大涅槃經を聞きて、『我用ひて菩提心を發さず』と言ひて正法を誹謗する有らば、是の人卽ち夢中に於て羅刹の像を見て心中に怖懼す。羅刹語つて言はく、『咄善男子、汝今若し菩提心を發さざれば、當に汝が命を斷ずべし。』是の人惶怖し、寤め已りて卽ち菩提の心を發す。是の人命終して若しは三趣に在り、及び人天に在りて、續いて復菩提の心を憶念せん。當に知るべし、是の人は是大菩薩摩訶薩なり。是の義を以ての故に、是の大涅槃威神の力、能く未だ菩提心を發さざる者をして、菩提の因を作らしむ。善男子、是を菩薩の發心因緣と名く、因緣無きに非ず。是の義を以ての故に、大乘妙典は

【五無間罪】前註の五逆罪に同じ。五逆を犯すものは必ず無間地獄に墮するを以て此の名あり。

眞に佛の所說なり。

復次に善男子、虛空の中に大雲雨を興して大地に注ぐに、枯木、石山、高原、堆阜は水の住せざる所、下田に流注して陂池悉く滿ち、無量の一切衆生を利するが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。大法雨を雨して普く衆生を潤す。唯一闡提の菩提心を發すとは是の處有ること無し。

復次に善男子、譬へば焦種の甘雨に遇ふこと百千萬劫と雖も、終に芽を生ぜず。芽若し生ぜば是の處有ること無きが如し。一闡提の輩も亦復是の如し。是の如きの大般涅槃微妙の經典を聞くと雖も、終に菩提心の芽を發すること能はず。若し能く發せば是の處有ること無し。何を以ての故に。是の人一切の善根を斷滅す。彼の焦種の如く、復菩提の根芽を生ずること能はず。

復次に善男子、譬へば明珠を濁水の中に置くに、珠の威德を以て水卽ち淸らかと爲る。之を淤泥に投ずれば淸からしむること能はざるが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。餘の衆生の五無間罪、四重禁法の濁水の中に置かば、猶澄淸の菩提心を發すべし。一闡提の淤泥の中に投ずれば、百千萬歲にも淸みて菩提心を起さしむること能はず。何を以ての故に。是の一闡提は諸の善根を滅して其の器に非ざるが故なり。假使是の人、百千萬歲是の如きの大涅槃經を聽受すとも、終に菩提の心を發すこと能はず。所以は何ん。善心無きが故なり。

復次に善男子、譬へば藥樹ありて名を藥王と曰ひ、諸藥の中に於て最も殊勝爲り。若は乳酪、若は蜜、若は酥、若は水、若は漿に和し、若は末、若は丸、若は以て創に塗り身を熏じ日に塗り、若は見、若は嗅がば、能く衆生の一切の諸病を滅す。是の如きの藥樹是の念を作さず。「一切の衆生、若我が根を取らば葉を取るべからず、若葉を取らば根を取るべからず、若身を取らば皮を取るべからず、若皮を取らば身を取るべからず」。是の樹復是の念を生ぜずと雖も、而も能く一切の病苦を除滅するが如し。善男子、是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。能く一切衆生の惡業、四波羅夷、五無間罪、若は內、若は外、所有の諸惡を除く。所有未だ菩提心を發さざれば、是に因りて則ち菩提心を發すことを得。何を以ての故に。是の妙經典は諸經中の王、彼の藥樹の諸藥中の王なるが如し。若は是大涅槃を修習し、及び修せざる者有り。若は是經典の名字有るを聞き、聞き已りて敬信せん。所有の一切煩惱の重病皆悉く除滅す。唯一闡提の輩をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむる能はず。彼の妙藥能く種種の重病を療愈すと雖も、而も必死の人を治する能はざるが如し。

復次に善男子、人手に瘡ありて毒藥を捉持すれば、毒則ち隨つて入る。若瘡無き者は毒則ち入らざるが如し。一闡提の輩も亦復是の如し、菩提の因無し。瘡無き者毒入ることを得ざるが如し。所謂瘡とは卽ち是無上菩提の因緣、毒とは卽ち是第一の妙藥なり。全く瘡無き者は一闡提を謂ふ。

復次に善男子、譬へば金剛の能く壞する者無く、悉く能く一切の物を破壞し、唯龜甲及

【佉陀羅】カディラ(Khadira)毒樹と譯す。
【鎭頭迦】無毒の果を結ぶ樹の名。

び白羊角を除くが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。悉く能く無量の衆生を菩提の道に安止す。唯一闡提の輩をして菩提の因を立てしむること能はず。

復次に善男子、馬齒草、娑羅翅樹、尼迦羅樹の、枝莖を斷ずと雖も、續生すること故の如く、多羅の斷じ已らば生ぜざるが如くならざるが如し。是の諸の衆生も亦復是の如し。若是の大涅槃經を聞くことを得ば、四禁を犯し、及び五無間と雖も、猶故能く菩提の因縁を生ず。一闡提の輩は則ち是の如くならず。是の妙經典を聽受することを得と雖も、而も菩提の道因を生ずること能はず。復次に善男子、佉陀羅樹、鎭頭迦樹の斷じ已れば生ぜざるが如し。一闡提の輩も亦復是の如し。是の大涅槃經を聞くことを得と雖も、而も菩提の因縁を發すこと能はず。復次に善男子、譬へば大雨の終に空に住せざるが如し。是の大涅槃微妙の經典も亦復是の如し。普く法雨を雨す、一闡提に於ては則ち住すること能はず。是一闡提は周體密緻にして、猶し金剛の外物を容れざるが如し。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、佛の說偈の如く、

善を見ず作さず、唯惡の作すべきを見る
是の處怖畏すべし、猶し險惡道の如し

世尊、是の如きの所說何等の義有りや。』佛の言はく『善男子、下見とは佛性を見ざるを謂ふ。善とは則ち是阿耨多羅三藐三菩提なり。不作とは所謂善友に親近すること能はず。唯見とは因果無しと見る。惡とは方等大乘經典を謗るを謂ふ。可作とは一闡提の方等無

【獼猴】猿猴に等し。

しと說くを謂ふ。是の義を以ての故に、一闡提の輩は心の清淨善法に趣向する無し。何等か善法なる。涅槃を謂ふなり。涅槃に趣く者は、能く賢善の行を修習するを謂ふ。一闡提は賢善の行無し。是の故に涅槃に趣向すること能はず。是處可畏とは正法を謗ずるを謂ふ。誰か怖畏すべき。所謂智者なり。何を以ての故に。謗法の者は善心及び方便有ること無きを以ての故なり。險惡道とは諸行を謂ふなり。』

迦葉、復言さく『佛の所說の如く、

　云何が所作を見、云何が善法を得
　何れの處か怖畏せざる、王の夷坦道の如し

是の義何の謂ぞ。』

佛の言はく『善男子、見所作とは諸惡を發露す。生死際より作す所の諸惡、悉く皆發露して無至處に至る。是の義を以ての故に、是の處無畏なり。譬へば人王の遊ぶ所の正路、其の中の盜賊悉く皆逃走するが如し。是の如く發露すれば、一切の諸惡悉く滅して餘無し。復次に不見所作とは、一闡提所作の衆惡、而も自ら見ざるを謂ふ。是の一闡提は憍慢心の故に、多く惡を作すと雖も、是の事の中に於て初て怖畏無し。是の義を以ての故に涅槃を得ず。譬へば獼猴の水中の月を捉るが如し。善男子、假使一切無量の衆生、一時に阿耨多羅三藐三菩提を成就し已れども、是の諸の如來も、亦復彼の一闡提の菩提を成ずることを得るを見ず。此の義を以ての故に、不見所作と名く。又復誰の所作を見ず。所謂如來の所

作を見ず。佛、衆生の爲に佛性有りと說く。一闡提の輩生死に流轉して知見すること能はず。是の義を以ての故に、名けて如來の所作を見ずと爲す。又一闡提の如來畢竟涅槃すと見る。眞に無常なること猶し燈滅するとき膏油俱に盡くるが如しと謂ふ。何を以ての故に。是の人の惡業損滅せざるが故なり。若菩薩有りて、所作の善業阿耨多羅三藐三菩提に回向する時、一闡提の輩復毀呰し破壞して信ぜずと雖も、然も諸の菩薩、猶故施與して共に無上の道を成就せんと欲す。何を以ての故に。諸佛の法爾なり。

　作惡卽ち受くること、乳卽ち酪と成るが如くならず
　猶し灰を火上に覆ふに、愚者輕んじて之を蹈むがごとし

一闡提とは名けて無目と爲す。是の故に阿羅漢道を見ず。阿羅漢の如く生死險惡の道を行ぜず。目無きを以ての故に、方等を誹謗して修習を欲せず。阿羅漢の如く慈心を勤修す。一闡提の輩方等を修せざるも亦復是の如し。若人說きて「我今聲聞の經典を信ぜず、大乘を信受し、讀誦し、解說す。是の故に我今卽ち是菩薩なり。一切の衆生悉く佛性有り。佛性を以ての故に、衆生の身中卽ち十力、三十二相、八十種好有り。我の所說は佛說に異らず。汝今我と俱に無量の諸惡煩惱を破すること、水餅を破るが如し。結を破るを以ての故に、卽ち能く阿耨多羅三藐三菩提を見ることを得」と言はん。是の人是の如く演說を作すと雖も、心實は如來性有るを信ぜず。利養を以ての故に文に隨ひて說く。是の如く說く者を、名けて惡人と爲す。是の如きの惡人は、速かに果を受くること乳の酪と成るが如くな

らず。譬へば王の使、善能く談論し、方便に巧みにして命を他國に奉す。寧ろ身命を喪ふとも、終に王所說の言教を匿さざるが如し。智者も亦爾なり。凡夫の中に於て身命を惜まず。要必ず大乘方等如來の祕藏、一切衆生皆佛性有るを宣說す。善男子、一闡提有りて羅漢の像と作り、空處に住して方等大乘經典を誹謗す。諸の凡夫人、見已りて皆眞の阿羅漢是大菩薩摩訶薩と謂ふ。是の一闡提惡比丘の輩、阿蘭若處に住して阿蘭若法を壞す。他の利を得るを見て心嫉妬を生じ、是の如きの言を作さく「所有の方等大乘經典は、悉く是天魔波旬の說く所」と。亦「如來是無常の法」と說く。正法を毀滅し衆僧を破壞す。復是の言を作さく「波旬の所說は善順の說に非ず。」是の宣說を作す邪惡の法なり。是の人惡を作して卽ち報を受くること乳の酪と成るが如くならず。灰の火上に覆ふを、愚輕んじて之を蹈む。是の如きの人は一闡提と謂ふ。是の故に當に知るべし、大乘方等微妙の經典は必定淸淨なり。摩尼珠、之を濁水に投ずれば水卽ち爲に淸むが如し。大乘經典も亦復是の如し。

復次に善男子、譬へば蓮華の日に照されて開敷せざる無きが如し。一切衆生も亦復是の如し。若大涅槃日を見聞することを得ば、未發心の者、皆悉く發心して菩提の因を爲す。是の故に我說く。「大涅槃光の毛孔に入る所必ず妙因と爲す」と。彼の一闡提は佛性有りと雖も、而も無量の罪垢に纏はれ、出づることを得ること能はざる、蠶の繭に處るが如し。是の業緣を以て、菩提の妙因を生ずることを得ること能はず。生死に流轉して、窮り已む

【優鉢羅華】ウトパラ(Utpala)青蓮華と譯す。
【鉢頭摩華】パドマ(Padma)紅蓮華と譯す。
【拘物頭華】クムダ(Kumuda)赤蓮華と譯す。
【芬陀利華】フンダリカ(Pundarika)白蓮華と譯す。
【八種の藥】八正道に喩ふ。又五門禪と因緣と慈悲と不淨觀とに譬ふとも云ふ。

こと有ること無し。

復次に善男子、優鉢羅華、鉢頭摩華、拘物頭華、芬陀利華の淤泥の中に生じて、而も彼の淤泥に汚されざるが如し。若衆生の大涅槃微妙の經典を修する有らば、亦復是の如し。煩惱有りと雖も、終に彼の煩惱に汚されず。何を以ての故に。如來の性相を知るの力を以ての故なり。善男子、譬へば國有りて清涼の風多く、若衆生の身諸の毛孔に觸るれば、能く一切の鬱蒸の惱を除くが如し。此の大乘經典大涅槃經も亦復是の如し。徧く一切衆生の毛孔に入りて、爲に菩提微妙の因緣を作す。一闡提を除く。何を以ての故に。法器に非ざるが故なり。

復次に善男子、譬へば良醫、八種の藥を解して一切の病を滅し、唯阿薩闍病を除くこと能はざるが如し。一切の契經禪定三昧も亦復是の如し。能く一切の貪恚、愚癡の諸の煩惱病を治し、能く煩惱の毒刺等の箭を拔き、而も犯四重禁、五無間罪を治すること能はず。善男子、復良醫の八種の術に過ぐる有り。能く衆生の所有の疾苦を除く。唯必死の病を治すること能はず。是の大涅槃大乘經典も亦復是の如し。能く衆生の一切煩惱を除き、如來の清淨妙因に安住せしめ、未發心の者に發心を得しむ。唯必死の一闡提の輩を除く。

復次に善男子、譬へば良醫の、能く妙藥を以て諸の盲人を治して、日月、星宿の諸明一切色像を見しむ。唯生盲の人を治すること能はざるが如し。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。能く聲聞、緣覺の人の爲に慧眼を開發し、其をして無量無邊の大乘經典に安住せ

【闍樓】ジャル(Jarā)兒衣と譯す。臍緒のこと。

【二】諸譬をあげて涅槃經の功德を論ず。

しむ。未發心の者の犯四禁、五無間罪を謂ふ。悉く能く菩提の心を發さしむ。唯生盲の一闡提の輩を除く。

復次に善男子、譬へば良醫の善く八術を解し、爲に衆生の一切病苦を治す。種種の方藥、病に隨ひて之を與ふ。所謂吐下には、身に塗り鼻に灌ぎ、若は熏、若は洗、若は丸、若は散、一切の諸藥なり。而も貧愚の人之を服することを欲せず。良醫憫念して、卽ち是の人を將ゐて其の舍宅に還り、强ひて與へて服せしむ。藥力を以ての故に所患除くことを得。女人の產者闍樓出でざるに、若此の藥を服すれば闍樓卽ち出づ。亦嬰兒をして安樂にして患無からしむるが如し。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。所至の處、若は舍宅に至り、能く衆生の無量の煩惱を除く。犯四重禁、五無間罪、未發心の者を悉く發心せしむ。一闡提を除く。」

(二)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、犯四重禁及び五無間を極重惡と名く。譬へば多羅樹頭を斷截すれば、更に復生ぜざるが如し。是等の未發菩提の心、云何が能く與に菩提因を作す。」佛の言はく、「善男子、是の諸の衆生、若夢中に於て、地獄に墮ちて諸の苦惱を受くるを夢み、卽ち悔心を生ず、「哀なる哉我等、自ら此の罪を招く。若我今是の罪を脫することを得ば、必定當に菩提の心を發すべし。我今見る所最も是極惡」と。是より寤め已りて卽ち正法の大果報有るを知る。彼の嬰兒の漸漸に長大して、常に是の念を作すが如し。「是の醫最良にして善く方藥を解す。我、本胎に處するに我が母に藥を與ふ。母、藥を以

ての故に身安隱を得。是の因緣を以て我が命全きことを得たり。奇なる哉我が母大苦惱を受く。十月を滿足して我が身を懷抱し、既に生るるの後、乾を推し濕を去りて不淨の大小便利を除去し、乳哺長養して我が身を將護す。是の義を以ての故に、我當に恩を報じ、色養侍衞し隨順供養すべし」と。

犯四重禁及び無間罪は臨命終の時、是の大乘大涅槃經を念ぜば、地獄、畜生、餓鬼、天上、人中に墮すと雖も、是の如きの經典、亦是の人の爲に菩提の因を作る。一闡提を除く。

復次に善男子、譬へば良醫及び良醫の子、知る所深奧にして諸醫に出過す。善く毒を除く無上の呪術を知り、若は惡毒蛇、若は龍、若は蝮、諸の呪術を以て藥を呪して良ならしむ。此の良藥を以て用ひて革屣に塗り、此の革屣を以て諸の毒蟲に觸るるに、毒之に消せらる。唯一毒の名を大龍と曰ふを除くが如し。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。若衆生の四重禁を犯し、五無間罪なる有らんに、悉く能く消滅して菩提に住せしむ。藥革屣の能く衆毒を消するが如し。未發心の者能く發心し、無上菩提の道に安住せしむ。是彼の大乘大涅槃經の威神藥の故に。諸の衆生をして安樂を生ぜしむ。唯大龍、一闡提の輩を除く。

復次に善男子、譬へば人有りて、新毒藥を以て用ひて太鼓に塗り、衆生の中に於て擊ちて聲を發さしむ。心の聞かんと欲する無しと雖も、之を聞かば皆死す。唯一人不横死の者を除くが如し。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。在在處處の諸行の衆生、聲を聞くこと有る者は、有らゆる貪欲、瞋恚、愚癡悉く皆滅盡す。其の中、心の思念する無き有りと

【記莂】佛の豫言を云ふ。修行者の未來の證果を々區別して豫め說示すること。

雖も、是の大涅槃因緣力の故に、能く煩惱を滅して而も結自ら滅す。犯四重禁及び五無間是の經を聞き已らば、亦無上菩提の因緣を作り、漸く煩惱を斷ず。不横死の一闡提の輩を除く。

復次に善男子、譬へば闇夜に諸の營作する所一切皆息む。若未だ訖らざる者は、要ず日明を待つが如し。大乘を學する者、契經一切の諸定を修すと雖も、要ず大乘大涅槃日を待つ。是の如來微密の教を聞き、然して後乃ち當に菩提業を造り、正法に安住すべし。猶し天雨の一切の諸種を潤益、增長し、果實を成就して悉く饑饉を除き、多く豐樂を受くるが如し。如來祕藏無量の法雨も亦復是の如し。悉く能く八種の熱病を除滅す。是の經の世に出づる、彼の果實の一切を利益し安樂にする所多きが如し。能く衆生をして如來性を見しめ、法華の中、八千の聲聞記莂を受くることを得、大果實を成ずるが如く、秋收め冬藏めて更に所作無きが如し。一闡提の輩も亦復是の如し。諸の善法に於て營作する所無し。

復次に善男子、譬へば良醫の他人の子非人に持つ所を聞きて、尋で妙藥を以て幷に一使を遣し、使に敕語して言ふが如し。「卿、此の藥を持ちて速かに彼の人に與へよ。彼の人若諸の惡鬼神に遇はば、藥力を以ての故に悉く當に遠く去るべし。卿、若遲晚せば、吾當に自ら往くべし。」終に彼をして枉げて横死せしめざるなり。若彼の病人、使者及び吾が威德を見ることを得ば、衆苦當に除かれ、安隱樂を得べし。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。若比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び諸の外道、能く是の如きの經典を受持し、

讀誦通利し、復他人の爲に分別して廣く說き、若は自ら書寫し、他をして書寫せしむる有らば、斯等皆菩提の因緣と爲る。若は犯四禁、及び五逆罪、若は邪鬼毒惡に持せられ、是の經典を聞かば、有らゆる諸惡悉く皆消滅せんこと、良醫を見れば惡鬼遠く去るが如し。當に知るべし、是の人は是眞の菩薩摩訶薩なり。何を以ての故に。暫く是の大涅槃を聞くことを得るが故に。亦念を如來常に生ずるを以ての故なり。暫く聞くことを得る者、尙是の如きを得。何に況んや書寫し、受持、讀誦せんをや。一闡提を除きて其の餘は、皆是菩薩摩訶薩なり。

復次に善男子、譬へば聾人の音聲を聞かざるが如し。一闡提の輩も復亦是の如し。復是の妙經典を聽かんと欲すと雖も、而も聞くことを得ず、所以は何ん。因緣無きが故なり。

復次に善男子、譬へば良醫の一切の醫方に通達せざる無く、兼て復廣く無量の呪術を知る。是の醫、王に見えて是の如きの言を作さく「大王、今者必ず死病有り。」其の王答へて言はく「卿、我が腹內の事を見ず。云何ぞ而も必死の病有りと言ふ。」醫、復白して言さく「若信を見ざれば、下藥を服すべし。」既に下すの後、王自ら之を驗し、王肎て服せず。爾の時に良醫、呪術力を以て、王の隱處に徧く瘡皰を生じ、兼て復滯下し、蟲血雜り出づ。王、是を見已りて大怖懼を生じ、彼の良醫を讚ずらく「善い哉善い哉、汝先に白す所吾之を用ひず。今乃ち、汝吾が此の身に於て、大利益を作すことを知る」と。是の醫を恭敬すること猶し父母の如し。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。諸の衆生、有欲、無欲に於

て悉く能く彼をして煩惱崩落せしむ。是の諸の衆生、乃至夢中に是の經を夢見して恭敬、供養す。譬へば大王の良醫を恭敬するが如し。是の大良醫、必死の者を知れば、終に之を治せず。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。終に一闡提の輩を治すること能はず。

復次に善男子、譬へば良醫の善く八種を知り、悉く能く一切の諸病を療治す。唯必死の人を治すること能はざるが如し。諸佛菩薩も亦復是の如し。悉く能く一切の有罪を救療す。唯必死の人の一闡提の輩を治すること能はず。

復次に善男子、譬へば良醫の善く八種の微妙經術を知り、復能く博く達して八種に過ぐ。已が知る所を以て先其の子を教ふ。若は水、若は陸、山谷の藥草悉く識知せしむ。是の如く漸漸に八事を教へ已りて、次に復餘の最上妙術を教ふるが如し。如來、應供、正徧知も亦復是の如し。先其の子、諸の比丘等を教へて、方便して一切の煩惱を除滅し、淨身不堅固想を修學せしむ。水陸、山谷と謂ふは、水は身受苦水上の泡の如きを譬へ、陸は身不堅芭蕉樹の如きを譬ふ。山谷は煩惱の中無我想を修するを譬ふ。是の義を以ての故に身を無我と名く。如來は是の如く諸の弟子に於て、漸漸に九部經法を教學して善く通利せしむ。然して後、如來の祕藏を教學す。其の子の爲の故に如來常を說く。如來、是の如く大乘典大涅槃經を說きたまふ。諸の衆生の已發心者、及び未發心の爲に菩提の因を作し、一闡提を除く。是の如く善男子、是の大乘典大涅槃經は、無量無邊不可思議未曾有なり。當に知るべし、卽ち是無上の良醫、最尊最勝、衆經中の王なることを。

復次に善男子、譬へば大船の、海の此岸より彼岸に至り、復彼岸より還つて此岸に至るが如し。如來の正覺も亦復是の如し。大涅槃大乘寶船に乘じ、周旋往反して衆生を濟度す。在在處處に應度者有らば、悉く如來の身を見ることを得しむ。是の義を以ての故に、如來を名けて無上船師と曰ふ。譬へば船あれば則ち船師有り。船師有れば則ち衆生の大海を度る有るが如し。如來常住にして衆生を化度することも亦復是の如し。

復次に善男子、譬へば人有りて、大海の中に在りて船に乘りて度らんと欲するに、若順風を得れば、須臾の間に則ち能く無量由旬を過ぐることを得。若得ざる者は、復久しく住して無量歳を經と雖も本處を離れず。時有りて船壞し、水に沒して死するが如し。衆生是の如く彼の愚癡の生死の大海に在りて、若諸行の船、若大般涅槃猛利の風に値遇することを得れば、則ち能く疾く無上道の岸に至る。若値遇せざれば、當に久しく無量の生死に流轉し、或時は破壞して地獄、畜生、餓鬼に墮すべし。

復次に善男子、譬へば人有りて風王に遇はず、久しく大海に住す。是の思惟を作さく、「我等今者必ず此に在りて死せん。」是の如く念ずる時、忽ち利風に遇ひ隨順して海を度る。復是の言を作すが如し「快い哉是の風未曾有なり。我等輩をして、安隱に大海の難を過ぐることを得しむ」と。衆生是の如く、久しく愚癡の生死大海に處して困苦窮碎し、未だ是の如きの大涅槃の風に遇はず、則ち念を生ずべし「我等必定して地獄、畜生、餓鬼に墮せん」と。是の諸の衆生是を思惟する時、忽ち大乘大涅槃の風に遇ひ、隨順吹向して阿耨多羅三

藐三菩提に入り、方に眞實を知りて奇特の想を生じ、歎じて言さく、「快い哉我昔より來た未だ曾て是の如きの如來の微密の藏を見聞せず」と。爾して乃ち是の大涅槃經に於て淸淨信を生ず。

復次に善男子、「蛇の皮を脫するが如く、死滅と爲んや不や。」「不なり世尊。」「善男子、如來も亦爾なり。方便示現して毒身を棄捨す。如來無常滅と言ふべきや。」「不なり世尊、如來此の閻浮提の中に於て方便して身を捨つ。彼の毒蛇の故皮を捨つるが如し。是の故に如來名づけて常住と爲す。」

復次に善男子、譬へば金師の好眞金を得、意に隨つて種種の諸器を造作するが如し。如來も亦爾なり。二十五有に於て悉く能く種種の色身を示現す。衆生を化し、生死を拔かんが爲の故なり。是の故に如來を無邊身と名く。復種種の諸身を示すと雖も、亦常住にして變易有ること無しと名く。

復次に善男子、庵羅樹及び閻浮樹は一年に三變す。時有り華を生じて光色敷榮し、時有り葉を生じて滋茂蓊鬱し、時有り凋落して狀枯死に似るが如し。善男子、意に於て云何。「是の樹實に枯と爲んや不や。」「不なり世尊。」「善男子、如來も亦爾なり。三界の中に於て三種の身を示す。時有りて初生、時有りて長大、時有りて涅槃す。而も如來の身實は無常に非ず。」

迦葉菩薩、讚じて言さく、「善い哉誠に聖言の如し。如來常住にして變易有ること無し。「善

男子、如來の密語は甚深にして解し難し。譬へば大王の、諸の羣臣に先陀婆を來せと告ぐるが如し。先陀婆とは一名四實なり。一つには鹽、二つには器、三つには水、四つには馬なり。是の如き四物は一名を共同す。有智の臣は善く此の名を知る。若王洗ふ時先陀婆を索むれば、即便水を奉る。若王食時に先陀婆を求むれば、即便鹽を奉る。若王食し已りて漿を飲まんと欲する時、先陀婆を索むれば即便器を奉る。若王遊ばんと欲して先陀婆を索むれば、即便馬を奉る。是の如く智臣善く大王の四種の密語を解す。是の大乘經も亦復是の如し。四無常有り。大乘の智臣應當に善く知るべし、若佛世に出でて衆生の爲に如來涅槃すと說く。智臣當に知るべし、此は是如來、計常者の爲に無常相を說き、比丘をして無常想を修せしめんと欲す。或は復說きて言はく「正法當に滅すべし」と。智臣應に知るべし、此は是如來、計樂者の爲に苦相を說き、比丘をして多く苦想を修せしめんと欲す。或は復說きて言はく「我今病苦、衆僧破壞す」と。智臣當に知るべし、此は是如來、計我者の爲に無我想を說き、比丘をして無我想を修せしめんと欲す。或は復說きて言はく「所謂空とは是正解脫なり」と。智臣當に知るべし、此は是如來正解脫、二十五有無し。比丘をして空相を修學せしめんと欲す。是の義を以ての故に、是の正解脫は即ち名けて空と爲し、亦不動と名く。不動と謂ふは、是の解脫中苦有ること無きが故に、是の故に不動なり。是の正解脫を無有相と爲す。無相と謂ふは、色、聲、香、味、觸等有ること無し、故に無相と名く。是の正解脫は常にして變易せず。是の解脫の中、無常、熱惱、變易有ること無

【波羅奢】パラシャ(Palāśa) 赤華と譯す。
【迦尼迦】カニカ(Kaṇika) 金色の華を開く。
【阿叔迦】アショーカ(Aśoka) 無憂と譯す。

し。是の故に解脱を名けて常住不變清涼と曰ふ。或は復說きて「一切衆生如來性有り」と言ふ。智臣當に知るべし、此は是如來常法を說き、比丘をして正常法を修せしめんと欲す。是の諸の比丘、若能く是の如く隨つて修學せば、當に知るべし、是の人は眞に我が弟子なり。善く如來の微密の藏を知ること、彼の大王の智慧の臣の、善く王の意を知るが如し。善男子、是の如く大王も亦是の如きの密語の法有り。何に況や如來、而も當に無かるべきや。善男子、是の故に如來の微密の教は、知ることを得べきこと難し。唯智者のみ有りて乃ち能く我が甚深の佛法を解せん。是世間の凡夫品類の能く信ずる所に非ざるなり。

復次に善男子、波羅奢樹、迦尼迦樹、阿叔迦樹の、天の亢旱に値はば華實を生ぜず、及び餘の水陸所生の物、皆悉く枯悴し、潤澤有ること無く、增長すること能はず。一切の諸藥復勢力無きが如し。善男子、是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。我が滅後に於て諸の衆生有り。恭敬すること能はず、威德有ること無し。何を以ての故に。是の諸の衆生は如來の微密藏を知らざるが故に。所以は何ん。是の衆生福德に薄きを以ての故なり。

復次に善男子、如來の正法は將に滅盡せんと欲す。爾の時に多く惡を行ずるの比丘有り。如來の微密の藏を知らず、懶墮懈怠にして如來の正法を讀誦し、宣揚、分別すること能はず。譬へば癡賊の眞寶を棄捨して草木を擔負するが如し。如來の微密藏を解せざるが故に。是の經の中に於て懈怠して勤めず。哀なる哉大險、當來の世甚だ怖畏すべし。苦なる哉衆生、勤めて是の大乘典大涅槃經を聽受せず。唯諸の菩薩摩訶薩のみ、能く是の經に於て眞

實義を取りて文字に著せず。隨順して逆はず、衆生の爲に說かん。

復次に善男子、牧牛女の乳を賣りて多利を貪らんと欲するが爲の故に。二分の水を加へ、轉賣して餘の牧牛の女人に與ふ。彼の女得已りて復二分を加へ、轉じて復近城の女人に賣與す。彼の女得已りて復二分を加へ、轉じて復城中の女人に賣與す。彼の女得已りて復二分を加へ、市に詣りて之を賣る。時に一人有りて子の爲に婦を納る。急に好乳を須ひて以て賓客に供す。市に至りて買はんと欲するに、是の賣乳の者多く價直を索む。是の人語りて言はく「此の乳多水實は是に直せず。我今日賓客を瞻待するに値ふ。是の故に當に取るべし。」取り已りて家に還り、用ひ煮て糜を作るに復乳味無し。乳味無しと雖も苦味中に於て猶勝ること千倍なり。何を以ての故に。乳の味たる諸味中の最なればなりの如し。

善男子、我涅槃の後、正法未滅の餘八十年、爾の時に是の經、閻浮提に於て當に廣く流布すべし。是の時に當に諸の惡比丘有らん。是の經を鈔略し分つて多分と作し、能く正法の色香美味を滅すべし。是の諸の惡人、復是の如きの經典を誦讀すと雖も、如來の深密要義を滅除して世間の莊嚴文飾無義の語を安置す。前を鈔して後に著け後を鈔して前に著け、前後を中に著け中を前後に著く。當に知るべし。是の如きの諸の惡比丘は是魔の伴侶なり。一切不淨の物を受畜して、而も如來悉く我に畜ふることを聽すと言ふ。牧牛女の多く水を乳に加ふるが如し。諸の惡比丘も亦復是の如し。雜ふるに世語を以てし定是の經を錯り、多くの衆生をして正說、正寫、正取、尊重、讚歎、供養、恭敬を得ざらしむ。是の惡比丘、

【波吒羅樹】パータラ（Pāṭala）重華と譯す。

利養の爲の故に、是の經を廣宣流布すること能はず。分流すべき所少くして言ふに足らず、彼の牧牛の貧窮の女人の展轉して乳を賣り、乃至糜を作るに乳味無きが如し。是の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。展轉薄淡にして氣味有ること無し。氣味無しと雖も猶餘經に勝り、超逾すること千倍なり。彼の乳味の諸の苦味に於て其の勝ること千倍なるが如し。何を以ての故に。是の大乘典大涅槃經は聲聞經に於て最も上首と爲す。譬へば牛乳の味中に最勝なるが如し。是の義を以ての故に大涅槃と名く。

復次に善男子、若善男子、善女人等、男子の身を求めざる者有ること無し。何を以ての故に。一切の女人は皆是衆惡の所住の處なり。復次に善男子、蚊蝄水の、此の大地をして潤洽せしむること能はざるが如し。其女人は淫欲の滿たし難きことも亦復是の如し。譬へば大地の一切を丸と作して芥子の如くならしむるが如し。是の如き等の男、一女人と共に欲事を爲すに、猶足ること能はず。假使男子の數恒沙の如き、一女人と共に欲事を爲すも亦復足らず。善男子、譬へば大海の、一切の天雨、百川の衆流皆悉く歸注すれども、而も大海未だ曾て滿足せざるが如し。女人の法も亦復是の如し。假使一切悉く男子と爲りて一女人と共に欲事を爲すに、而も亦足らず。復次に善男子、阿輸迦樹、波吒羅樹、迦尼迦樹の春華開敷するに、群蜂色香細味を唼取して厭足を知らざるが如し。女人の男を欲するも亦復是の如く、厭足を知らず。善男子、是の義を以ての故に諸の善男子、善女人等、是の大乘大涅槃經を聽かば、常に女人の相を訶責し男子を求むべし。何を以ての故に。是の大乘典

【三】迦葉の領解を明す。

は丈夫の相有り、所謂佛性なり。若人是の佛性を知らざれば、則ち男相無し。所以は何ん。自ら佛性有るを知ること能はざるが故なり。若佛性を知ること能はざる者有らば、我說く「是等を名けて女人と爲す。」若能く自ら佛有るを知らば、我說く「是の人大丈夫と爲す。」若女人の能く、自身は定んで佛性有るを知る有らば、當に知るべし、是等は即ち男子と爲す。善男子、是の大乘典大涅槃經は無量無邊不可思議の功德の聚なり。何を以ての故に。如來の祕密藏を說くを以ての故なり。是の故に善男子、善女人、若速かに如來の密藏を知らんと欲せば、應當に方便して此の經を勤修すべし。」

(三)迦葉、佛に白して言さく「世尊、是の如く是の如し、佛の所說の如し。我今已に丈夫の相有り。如來の微密藏に入ることを得るが故に。如來今日始めて我を覺悟す。是に因つて即ち決定通達を得。」佛の言はく「善い哉善い哉善男子、汝今世間の法に隨順して是の說を作す。」迦葉、復言さく「我世間法に隨順せざるなり。」佛、迦葉を讚じたまはく「善い哉善い哉。汝今知る所の無上の法味は甚深難知、而も能く知ることを得。蜂の味を采るが如く汝も亦是の如し。復次に善男子、蟁子の澤此の大地をして沾洽せしむること能はざるが如し。當來の世に是の經の流布するも亦復是の如し。彼の蟁澤の如く正法滅せんと欲するに、是の經は先に當に此の地に沒すべし。當に知るべし。即ち是正法の衰相なり。復次に善男子、譬へば夏を過ぎて初月を秋と名け、秋雨連霔するが如し。此の大乘典大涅槃經も亦復是の如し。彼の南方の諸の菩薩の爲の故に、當に廣く流布し、法雨を降霔して其の處に彌

【罽賓】カシュミーラ(Kaśmira)北印度健陀羅國の東北ヒマラヤ山麓の山間に在りし大國なり。

【四】三乘無性を論じ、一切衆生の有佛性を明す。

滿すべし。正法滅せんと欲するに、當に罽賓に至りて具足して缺くること無く、地中に潛沒すべし。或は信者有り、或は不信者有り。是の如きの大乘方等經典甘露の法味、悉く地に沒す。是の經沒し已りて一切諸餘の大乘經典皆悉く滅沒す。若し是の經具足して缺くること無きことを得ば、人中の象王諸の菩薩等、當に知るべし、如來の無上正法、將に滅せんとするに久しからざることを。」

(四)爾の時に文殊師利、佛に白して言さく「世尊、今此の純陀猶疑心有り。唯願はくば如來重ねて爲に分別して除斷を得しめよ。」佛の言はく「善男子、云何が疑心、汝當に之を說くべし。當に爲に除斷すべし。」文殊師利の言さく「純陀、如來常住を心疑す。佛性を知見することを得るの力を以ての故に。若し佛性を見るを而も常と爲す者は、本未見の時は是無常なるべし。若し本無常ならば後亦爾るべし。何を以ての故に。世間の物本無今有、已有還無なり。是の如き等の物、悉く是無常なるが如し。是の義を以ての故に、諸佛、菩薩、聲聞緣覺差別有ること無し。」爾の時に世尊、即ち偈を說きて言はく、

本有今無、本無今有
三世法有る、是の處有る無し

「善男子、是の義を以ての故に、諸佛、菩薩、聲聞、緣覺も亦差別有り亦差別無し。」文殊師利、讚じて言さく「善い哉誠に聖言の如し。我今始めて諸佛、菩薩、聲聞、緣覺も亦差別有り亦差別無きを解す。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛の所說の如く、諸佛、菩薩、聲聞、緣覺は性差別無しとは、唯願はくば如來、分別、廣說して一切衆生を利益し安樂ならしめたまへ。」佛の言はく、「善男子、諦かに聽け諦かに聽け。當に汝が爲に說くべし。譬へば長者の多く乳牛を畜へて種種の色有り、常に一人をして守護、將養せしむ。是の人時有りて、祠祀の爲の故に、盡く諸牛を穀りて一器の中に著く。諸の牛乳を見るに同一白色なり。尋で便ち驚怪すらく、「牛の色各異り、其の乳云何ぞ皆同一色なる。」是の人思惟して、此の一切皆是衆生の業報、因緣、乳色をして一ならしむと知るが如し。善男子、聲聞、緣覺、菩薩も亦爾なり。同一佛性なること猶し彼の乳の如し。所以は何ん。同じく漏を盡すが故なり。而して諸の衆生、佛、菩薩、聲聞、緣覺、而も差別有りと言ふ。諸の聲聞、凡夫の人、三乘云何ぞ別無けんと疑ふ。是の諸の衆生、久しうして後自ら一切三乘同一佛性なるを解す。猶し彼の人の乳相、業因緣に由るを解悟するが如し。復次に善男子、譬へば金礦の滓穢を陶鍊し、然して後銷融して金と成すの後、價直無量なるが如し。善男子、聲聞、緣覺、菩薩も亦爾なり。皆同一の佛性を成就することを得。何を以ての故に。煩惱を除くが故なり。彼の金礦の諸の滓穢を除くが如し。是の義を以ての故に。一切衆生同一佛性にして差別有ること無し。其先に如來の密藏を聞くを以て、後成佛する時、自然に知ることを得。彼の長者の乳の一相を知るが如し。何を以ての故に。無量億の煩惱を斷ずるを以ての故なり。」

【舍利弗】シャーリプトラ(Sāriputra)佛の十大弟子の一。智慧第一の稱あり。

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、若し一切衆生に佛性有らば、佛と衆生と何の差別か有る。是の如く說かば、多く過咎有らん。若し諸の衆生に皆佛性有らば、何の因緣の故に、舍利弗等は小涅槃を以て、而も般涅槃し、緣覺の人は中涅槃に於て、而も般涅槃し、菩薩の人は大涅槃に於て、而も般涅槃する。是の如き等の人若し佛性を同じうせば、何が故ぞ如來の涅槃に同じうして、而も般涅槃せざる。』『善男子、諸佛世尊の所得の涅槃は、諸の聲聞、緣覺の所得に非ず。是の義を以ての故に。大般涅槃を名けて善有と爲す。世若し佛無くば、二乘の二涅槃を得る無きに非ず。』

迦葉、復言さく『是の義云何ん。』佛の言はく『無量無邊阿僧祇劫に乃ち一佛有り、世に出現して三乘を開示す。善男子、汝が所言の如く菩薩、二乘無差別とは、我先に此の如來密藏大涅槃の中に於て、已に其の義を說く。諸の阿羅漢は善有ること無し。何を以ての故に。諸の阿羅漢は、悉く當に是の大涅槃を得べきが故に。是の義を以ての故に、大般涅槃畢竟樂有り。是の故に名けて大般涅槃と爲す。』

迦葉の言さく『佛說の如きは、我今始めて差別の義、無差別の義を知る。何を以ての故に。一切の菩薩、聲聞、緣覺は、未來の世に、皆當に大般涅槃に歸すべし。譬へば衆流の大海に歸するが如し。是の故に聲聞、緣覺の人は悉く名けて、常にして是無常に非ずと爲す。是の義を以ての故に、亦差別有り亦差別無し。』

迦葉の言さく『云何が性差別なる。』佛の言はく『善男子、聲聞は乳の如く、緣覺は酪の

【目犍連】マハーマウドカルヤーヤナ(Mahā-Maudgalyāyana)佛の十大弟子の一人、神通第一の稱あり。

【頗梨】水晶を云ふ。

如く、菩薩の人は生熟酥の如く、諸佛世尊は猶し醍醐の如し。是の義を以ての故に、大涅槃の中、四種の性は而も差別有りと說く。」

迦葉、復言さく『一切衆生の性相云何。』佛の言はく『善男子、牛新生して乳血未だ別たざるが如し。凡夫の性の諸の煩惱を雜ふるも亦復是の如し。』

迦葉、復言さく『拘尸那城に旃陀羅有りて名を歡喜と曰ふ。佛、是の人一たび發心するに由りて、當に此の界千佛數の中に於て、速かに無上正眞の道を成ずべしと記す。何等を以ての故に、如來、尊者、舍利弗、目犍連等速かに佛道を成ずと記せざる。』佛の言はく、『善男子、或は聲聞、緣覺、菩薩、誓願を作して言ふ有り「我當に久久正法を護持して、然して後乃ち無上佛道を成ずべし」と。速願を發すを以ての故に速記を與ふ。復次に善男子、譬へば商人に無價の寶有り、市に詣りて之を賣るに、愚人見已り識らずして輕笑す。寶主唱へて言はく「我が此の寶珠價直無數」と。聞き已りて復笑ふ。各此眞寶に非ずして是頗梨珠と相謂はんが如し。善男子、聲聞、緣覺も亦復是の如し。若速記を聞かば則便懈怠し輕笑、薄賤せん。彼の愚人の眞寶を識らざるが如し。未來世に於て諸の比丘有り。精勤して善法を修習すること能はず。貧窮、困苦して饑渴に逼らる。是に因りて出家して其の身を長養す。心志輕躁に邪命、諂曲なり。若如來、諸の聲聞に速疾の記を授くるを聞かば、便ち當に大いに笑ひて輕慢、毀呰すべし。當に知るべし、是等は卽ち是破戒なり。自ら已に過人の法を得と言ふ。是の義を以ての故に、速願を發すに隨ひて故らに速記を與へ

【五】不壞衆を明す。

【二足四足多足無足】二足は人類、四足は獸類、多足は蟲類、無足は魚類一切の動物を表言す。

護正法者には爲に遠記を授く。」

(五)迦葉菩薩、復佛に白して言さく「世尊、菩薩云何が當に不壞眷屬を得べき。」佛、迦葉に告げたまはく「若し諸の菩薩、勤めて精進を加へて正法を護らんと欲す。是の因緣を以て、所得の眷屬沮壞すべからず。」

迦葉菩薩、復佛に白して言さく「世尊、何の因緣の故に、衆生此の脣口乾焦を得る。」佛迦葉に告げたまはく「若し三寶の常に存するを識らざる有らば、是の因緣を以て脣口乾焦す。人口爽ひて甜、苦、辛、酢、鹹、淡の六味の差別を知らざるが如し。一切衆生愚癡無智にして、三寶の是長へに存するの法を識らず。是の故に名けて脣口乾焦と爲す。復次に善男子、若し衆生、如來是常住を知らざる者有らば、當に知るべし、是の人は則ち生盲と爲す。若し如來是常住を知らば、是の如きの人は肉眼有りと雖も、我說きて、是等を名けて天眼と爲す。復次に善男子、若し能く如來是常を知る有らば當に知るべし、是の人は久しく已に是の如きの經典を修習す。我說きて、是等も亦天眼と名く。天眼有りと雖も、而も如來是常を知ること能はざれば、我說きて、斯等を名けて肉眼と爲す。是の人乃至自身の手足、支節を識らざるも亦復他をして識知せしむること能はず。是の義を以ての故に、名けて肉眼と爲す。

復次に善男子、如來常に一切衆生の爲に、而も父母と作る。所以は何ん。一切衆生種種の形類は二足、四足、多足、無足なり。佛、一音を以て而も爲に法を說くに、彼彼の異類

各各解を得、悉く共歎じて言さく、「如來、今日我が爲に法を說きたまふ」と。是の義を以ての故に、名けて父母と爲す。

復次に善男子、人子を生じ、始めて十六月にして復語言すと雖も、未だ解了すべからず。而も彼の父母共に語を敎へんと欲するに、先共の音を同じうして漸漸に之を敎ふるが如し。是の父母の語不正なるべきや。』『不なり世尊。』『善男子、諸佛如來も亦復是の如し。諸の衆生の種種の音聲に隨ひて、而も爲に法を說く。佛の正法に安住せしむるが爲の故に、見るべき所に隨ひて、而も爲に種種の形像を示現す。如來是の如く彼の語言を同じうす、不正なるべきや。』『不なり世尊。』『何を以ての故に。如來の所說は師子吼の如し。世間種種の音聲に隨順して、而も衆生の爲に妙法を歎說す。』

【一切大衆所問品】此品は釋尊純陀の供養をうけ一切大衆を調伏せんが爲めに病を示現し臥床し給ふの章なり。

【一】純陀の獻供を明す。

大般涅槃經　卷第十

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

一切大衆所問品第十七

(一)爾の時に世尊、其の面門より種種の色、靑、黃、赤、白、紅、紫の光明を放ちて純陀が身を照す。純陀遇ひ已りて、諸の眷屬と諸の肴饌を持ちて疾く佛所に往き、如來及び比丘僧に奉り、最後の供養を欲す。種種の器物充滿具足して、持ちて佛所に至る。爾の時に大威德天人有り。而も其の前に遮り、周帀圍繞して純陀に謂つて言はく『且く止めよ。純陀便ち奉施すること勿れ。』爾の時に如來、復無量無邊の種種の光明を放ちたまふ。諸天大衆斯の光に遇ひ已りて、尋で純陀の前みて佛所に至り、其の所施を奉るを聽す。爾の時に天人、及び諸の衆生、各自ら所齎の供養を持ちて佛前に至り、長跪して佛に白さく『唯願はくば如來、諸の比丘の此の供養を受くるを聽したまへ。』時に諸の比丘、是時なるを知るが故に、衣鉢を執持して一心安詳にす。

爾の時に純陀、佛及び僧の爲に種種の師子の寶座を布置し、繒幡蓋を懸け、香華、瓔珞(を供ふ)。爾の時に三千大千世界、莊嚴微妙なること猶し西方の安樂國土の如し。爾の時

【二】如來供を受け給ふ。

【摩伽陀國】マガタ(Magadha)中印度の國名にして其の首都を王舍城と云ふ。

に純陀、佛前に住して憂悲悵怏し、重ねて佛に白して言さく、『唯願はくば如來、猶哀憫せられて住壽一劫、若は減一劫したまへ。』佛、純陀に告げたまはく、『汝、我をして久しく世に住せしめんと欲せば、當に速かに最後具足の檀波羅蜜を奉すべし。』爾の時に一切の菩薩摩訶薩、天人、雜類、異口同音に是の如きの言を唱ふ、『奇なる哉純陀、大福德を成ず。能く如來をして其の最後無上の供養を受けしむ。我等無福にして所設の供具則ち唐捐と爲す。』

(二)爾の時に世尊、一切の衆望を滿足せしめんと欲して、自ら身上の一一の毛孔に於て無量の佛を化す。一一の諸佛各無量の諸の比丘僧有り。是の諸の世尊及び無量の衆、悉く皆其の供養を受くるを示現す。釋迦如來自ら純陀の奉設する所の者を受けたまふ。爾の時に純陀、持する所の粳糧成熟の食、摩伽陀國滿足の八斛、佛の神力を以て皆悉く一切の大會に充足す。爾の時に純陀、是の事を見已りて心に歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。一切大衆も亦復是の如し。

爾の時に大衆、佛の聖旨を承けて各是の念を作さく、『如來、今已に我等の施を受けたまふ。久しからずして必ず當に涅槃に入りたまふべし。』是の念を作し已りて心に悲喜を生ず。爾の時に樹林、其の地隘小なり。佛神力を以て針鋒の如きの處に、皆無量の諸佛世尊及び其の眷屬有りて、等しく坐して食す。所食の物も亦差別無し。

是の時に天人、阿修羅等、啼泣悲歎して是の言を作さく、『如來、今日已に我等が最後の供養を受けたまひ、供養を受け已りて當に般涅槃したまふべし。我等當に復更に誰をか供

養すべき。我今永く無上調御を離れ、盲ひて眼目無し。』
爾の時に世尊、一切大衆を安慰せんと欲するが爲に偈を說きて言はく、
汝等悲歎すること莫れ、諸佛の法爾るべし
我涅槃に入る、已に無量劫を經たり
常に最勝樂を受け、永く安隱の處に處す
汝今至心に聽け、我當に涅槃を說くべし
我已に食想を離れ、終に飢渴の患無し
今當に汝等が爲に、其の隨順願を說きて
諸の一切衆生をして、咸く安隱樂を得しむべし
汝聞きて、諸佛の法常住を修行すべし
假使烏と梟と、同じく共に一樹に棲みて
猶親兄弟の如くせば、爾して乃ち永く涅槃せん
如來一切を視ること、猶し羅睺羅の如し
常に衆生の尊と爲る、云何ぞ永く涅槃せん
假使蛇鼠狼、同じく一穴に處して
相愛すること兄弟の如くんば、爾して乃ち永く涅槃せん
如來一切を視ること、猶し羅睺羅の如し

【七葉華】樹名。
【婆師】雨時、夏生等と譯す。香木の名。
【迦留鎭頭】迦留と鎭頭との二樹。迦留は毒樹にして鎭頭は甘果を結ぶ。

常に衆生の尊と爲る、云何ぞ永く涅槃せん
假使七葉華の、轉じて婆師香と爲り
迦留鎭頭と爲らば、爾して乃ち永く涅槃せん
如來一切を視ること、猶し羅睺羅の如し
云何ぞ慈悲を捨てて、永く涅槃に入らん
假使一闡提の、現身に佛道を成じ
永く第一樂に處せば、爾して乃ち涅槃に入らん
如來一切を視ること、皆羅睺羅の如し
云何ぞ慈悲を捨てて、永く涅槃に入らん
假使一切衆の、一時に佛道を成じ
諸の過患を遠離せば、爾して乃ち涅槃に入らん
如來一切を視ること、皆羅睺羅の如し
云何ぞ慈悲を捨てて、永く涅槃に入らん
假使蟁蚋水の、大地を浸壞し
川谷海に盈滿せば、爾して乃ち涅槃に入らん
悲心に一切を視ること、皆羅睺羅の如し
常に衆生の尊と爲る、云何ぞ永く涅槃せん

【三】大衆法樂を受く。

是を以ての故に汝等、深く正法を樂ふべし
憂惱を生じ、號泣して啼哭すべからず
若自ら正行せんと欲せば、如來常を修すべし
當に是の如きの法の、長存して變易せざるを觀ずべし
復是の念を生ずべし、三寶皆常住
是則ち大護を獲、枯を呪して果を生ずるが如し
是を名けて三寶と爲す、四衆善く聽くべし
聞き已らば歡喜して、卽ち菩提心を發す
若能く三寶、常住にして眞諦に同じきを計せば
此則ち是、諸佛の最上の誓願なり

『若比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の能く如來の最上誓願を以て、而も發願する者有らば、當に知るべし、是の人は愚癡有ること無く、供養を受くるに堪ふ。此の願力を以て、功德果報世に於て最勝なること阿羅漢の如く、若是の如く三寶常を觀了すること能はざる者有らば、是旃陀羅なり。若能く三法常住を知る有らば、實法の因緣苦を離れて安樂なり。嬈害して能く留難する者有ること無し。』

(三)爾の時に人天、大衆、阿修羅等、是の法を聞き已りて、心に歡喜を生じて踊躍すること無量なり。其の心調柔して善く諸蓋を滅し、心に高下無く、威德清淨なり。顏貌怡悅して

佛の常住を知る。是の故に諸天の供養を施設し、種種の華を散じ、末香、塗香、天の伎樂を鼓して、以て佛に供養したてまつる。

爾の時に佛、迦葉菩薩に告げて言はく、『善男子、汝是の衆の希有の事を見るや否や。』迦葉、答へて言さく、『已に見たてまつる。世尊、諸の如來無量無邊稱計すべからず。諸の大衆、人天の奉る所の飯食の供養を受けたまふを見たてまつる。又諸佛の大身莊嚴、所坐の處一針鋒の如きに、多衆圍繞して相障閡せざるを見、復大衆の悉く誓願を發して十三偈を說くを見、亦大衆各心に念じて「如來今者獨我が供を受けたまふ」と言ふを知る。假使純陀の奉る所の飯食を、碎きて微塵の如くにし、一塵一佛すとも、猶周徧せず。佛の神力を以て悉く皆一切大衆に充足す。唯諸の菩薩摩訶薩、文殊師利法王子等、能く如來の希有の事を知るのみ。悉く是如來の方便示現なり。聲聞大衆及び阿修羅等は皆如來は是常住法なるを知る。』

爾の時に世尊、純陀に告げて言はく、『汝今見る所、是希有奇特の事と爲んや不や。』『實に爾なり。世尊、我先に見る所の無量の諸佛は、三十二相、八十種好其の身を莊嚴す。今悉く菩薩摩訶薩爲り、亘身殊異にして顏貌無比なるを見る。唯佛身は、譬へば藥樹の如し。諸の菩薩摩訶薩等に圍繞せらるるを見たてまつる。』佛、純陀に告げたまはく、『汝先に見る所の無量の佛は、是我が化する所なり。一切衆生を利益して歡喜を得しめんと欲するが爲に、是の如きの菩薩摩訶薩等、修行すべき所思議すべからず。能く無量の諸佛の事を

【十住地の菩薩】佛道修行者の階位五十二位中第十一より第二十に至るまでのものを云ふ即ち既に信を得たるを以て進んで佛地に住するもの。發心住、治地住、修行住、方便具足住、正心住、不退住、童眞住、法王子住、灌頂住の十位。

【四】演説秘密及び遠離一切病、得近無上道の三問に答へ、廣く七偈を説く。

【毀戒】戒を毀つことにして破戒に等し。

作す。純陀、汝今皆已に菩薩摩訶薩の行を成就し、十住地の菩薩の所行具し成辨することを得。」迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、是の如く是の如し。佛の所説の如し。純陀の修成する所の菩薩の行は、我も亦隨喜す。今者如來、未來の無量の衆生の爲に大明を作さんと欲するが故に、是の大乘大涅槃經を説きたまふ。」

〔四〕「世尊、一切の契經は、説、餘義有りや餘義無きや。」『善男子、我が所説は亦餘義有り、亦餘義無し。』

純陀、佛に白して言さく『世尊、佛の所説の如く、

所有の物、一切に布施す

唯讃歎すべし、毀損すべきこと無し

世尊、是の義云何。持戒、毀戒何の差別有りや。」佛の言はく「唯一人を除きて、餘の一切に施す。皆讃歎すべし。」純陀、問ひて言さく「云何が名けて唯除一人と爲す。」佛の言はく「此の經の中、説く所の破戒の如し。」

純陀、復言さく「我今未だ解せず。唯願はくば之を説きたまへ。」佛、純陀に告げて言はく「破戒とは一闡提を謂ふ。其の餘の在所一切の布施は、皆讃歎すべし、大果報を獲。」純陀、復問はく「一闡提とは其の義云何。」

佛、純陀に告げたまはく「若し比丘及び比丘尼、優婆塞、優婆夷、麤惡言を發して正法を誹謗し、是の重業を造りて永く改悔せず、心に慚愧無き有らば是の如き等の人は、名けて

【五】三罪人を取る。初めに破戒を出す。

一闡提の道に趣向すと爲す。若し四重を犯し五逆罪を作り、自ら定んで是の如き重事を犯すを知りて、而も心初て怖畏、慚愧無く、肯て發露せず。佛の正法に於て永く護惜建立の心無し。毀呰輕賤して多くの過咎を言ふ。是の如き等の人も亦一闡提の道に趣向すと名く。若し復説きて、佛法衆無しと言ふ。是の如き等の人も亦一闡提の道に趣向すと名く。唯此の如きの一闡提の輩を除きて、其の餘の者に施すは一切讃歎す。」

(五)爾の時に純陀、復佛に白して言さく、「世尊、言ふ所の破戒、其の義云何。」佛、純陀に告げたまはく、「若し四重を犯し、及び五逆罪、正法を誹謗す。是の如き等の人を名けて破戒と爲す。」

純陀、復問はく、「是の如き破戒は拔濟すべきや不や。」佛、純陀に告げたまはく、「因緣有るが故に、則ち拔濟すべし。若し法服を被て猶未だ捨遠せず。其の心常に慚愧、恐怖を懷く。而も自ら考責す。咄い哉、何爲ぞ斯の重罪を犯せる。何ぞ其怪しい哉。斯の苦業を造り、深く自ら改悔す。護法の心を生じて正法を建てんと欲す。護法者有らば、我當に供養すべし。若し大乘典を讀誦する者有らば、我當に咨問して受持、讀誦すべし。旣に通利し已らば復當に他の爲に分別して廣く説くべし。我説く、「是の人は破戒と名けず。」何を以ての故に。善男子、譬へば日出づれば、能く一切の塵翳闇冥を除くが如し。是の大涅槃微妙の經典の世に出興するも亦復是の如し。能く衆生の無量劫の中に所作の衆罪を除く。是の故に、「此の經、正法を獲れば大果報を得、破戒を拔濟す」と説く。若し是の正法を毀謗する者は能く

自ら改悔し、還つて法に歸する有らば、自ら念ず、「所作一切の不善、人の自ら害するが如し。心恐怖を生じ、驚懼慚愧す。此の正法を除きて更に救護無けん。是の故に應當に正法に還歸すべし。」若能く是の如く如說に歸依せん。是の人に布施せば、福を得ること無量なり。亦世間に供養を受くべしと名く。若上の如きの惡業の罪を犯して、若は一月を經、或は十五日、歸依發露の心を生ぜざらん。若是の人に施さば果報甚だ少し。五逆を犯す者も亦復是の如し。能く悔心を生じ、內に慚愧を懷く。今我が所作不善の業、甚だ大苦爲り。我當に正法を建立し護持すべし。是則ち五逆罪と名けざるなり。若是の人に施さば、福を得ること無量なり。逆罪を犯し已りて、護法歸依の心を生ぜず。是に施す者有らば、福言ふに足らず。

又善男子、重罪を犯す者、汝今諦かに聽け。我當に汝が爲に分別して廣く說くべし。是の心を生ずべし、「正法と謂ふは即ち是如來微密の藏なり。是の故に我當に護持し建立すべし」と。是の人に施す者は勝果報を得。善男子、譬へば女人の懷妊し、產するに垂んとして國の荒亂に値ひ、遠く他土に至り、一天廟に在りて即便產育す。後舊邦の安隱豐熟を聞きて其の子を攜持して本土に還らんと欲す。路恆河を經るに水長暴急なり。是の兒を荷負して度ることを得ること能はず。即ち自ら念言すらく、「我寧ろ子と一處に命を幷すとも、終に捨棄して獨濟らざるなり。」是の念を作し已りて子と俱に沒す。命終の後尋で天中に生ず。子を慈念して度を得しめんと欲するを以てなり。而も是の女人本性弊惡、子を愛する

【六】一闡提を揀ぶを釋す。

【菴羅果】アームラ(Amra)菴沒羅とも書く。その果は桃に似たりと云ふ。

【辟支佛】緣覺の原音。プラチエーカブッダ(Pratyekabuddha)の譯。又獨覺とも云ふ。佛の說示をまたず獨り十二因緣を觀じて開悟するもの。

【七】偈の緣起を說く。

を以ての故に天中に生ずることを得るが如し。犯四重禁、五無間罪の護法心を生ずるも亦復是の如し。復先に不善の業を爲すと雖も、護法を以ての故に世間の無上福田と爲ることを得。是の護法者は、是の如き等の無量の果報有り。』

(六)純陀、復言さく『世尊、若一闡提の能く自ら改悔して三寶を恭敬、供養し讃歎せん。是の如きの人に施すは大果報を得んや不や。』佛の言はく『善男子、汝今是の如きの說を作すべからず。善男子、譬へば人有りて菴羅果を食し、核を吐きて地に置き、而も復念じて言はく「是の果核の中甘味有るべし。」即便還取りて破りて之を嘗むるに、其の味極めて苦く、心に悔恨を生ず。果種を失ふことを恐れて即ち還收拾して之を地に植ゑ、勤めて修治を加ふ。酥油乳を以て時に隨ひて漑灌するが如し。意に於て云何。寧ろ生ずべきや不や。』『不なり世尊、假使天、無上の甘雨を降すとも猶亦生ぜじ。』『善男子、彼の一闡提も亦復是の如し。善根を燒滅す。當に何の所に於てか而も罪を除くことを得べき。善男子、若善心を生ぜば、是則ち一闡提と名けざるなり。善男子、是の義を以ての故に、一切施す所の所得の果報差別無きに非ず。何を以ての故に。諸の聲聞に施す所得の報異、辟支佛に施す得報も亦異なり、唯如來に施すのみ無上の果を獲。是の故に說きて「一切の所施差別無きに非ず」と云ふ。』

(七)純陀、復言さく『何が故ぞ如來而も此の偈を說きたまふ。』佛、純陀に告げたまはく『因緣有るが故に我此の偈を說く。王舍城の中に優婆塞有り、心に淨信無くして尼揵に奉事す。

【王舍城】ラージャグリハ(Rājagṛha)中印度摩伽陀國の王城にして頻婆娑羅王の君臨せる處。
【尼揵】六大外道の一、ニルグランタ(Nirgrantha)の音譯。苦行派の一なり。
【拘耶尼】須彌四大洲の一。ゴーダーニーヤ(Godānīya)牛貨と譯す。西方に位す。

而も來りて我に布施の義を問ふ。是の因緣を以ての故に斯の偈を說く。亦菩薩摩訶薩等の爲に祕藏の義を說く。斯の偈の如きは其の義云何。一切とは少分の一切なり。當に知るべし、菩薩摩訶薩は人中の雄なり。持戒を攝取して其の所須を施し、破戒を捨棄して稊稗を除くが如くす。復次に善男子、我が昔日所說の偈に言へるが如し、

一切の江河、必ず回曲有り
一切の叢林、必ず樹木と名く
一切の女人、必ず諂曲を懷く
一切の自在、必ず安樂を受く

爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩、卽ち座より起ち、偏に右臂を袒ぎ、右膝を地に著け、前みて佛足を禮し偈を說きて言さく、

一切の河、必ず回曲有るに非ず
一切の林、悉く樹木と名くるに非ず
一切の女、必ず諂曲を懷くに非ず
一切の自在、必ずしも樂を受くるに非ず

佛、所說の偈其の義餘有り。唯哀愍を垂れて其の因緣を說きたまへ。何を以ての故に。世尊、此の三千大千世界に於て、洲有りて拘耶尼と名く。其の洲河有り、端直にして曲らず、婆婆耶と名く。猶し直繩の如くにして西海に入る。是の如きの河相、餘經の中に於て

【方等阿含經】方等は大乘經典の總名、阿含は小乘經典の總名。

【波斯匿王】釋尊當時に於ける舍衞國の王。プラセーナジット(Prasenajit)勝軍と譯す。

佛未だ曾て說きたまはず。唯願はくば如來、此の方等阿含經の中に因りて有餘義を說き、諸の菩薩をして深く信じて之を解せしめたまへ。世尊、譬へば人有り一先に金鑛を識り、後に金を識らしめざるが如し。如來も亦爾なり。盡く法を知り已りて、而も演說する所餘有りて盡きず。如來是の如きの餘說を作すと雖も應當に方便して其の意趣を解すべし。一切の叢林必ず是樹木、是亦餘有り。何を以ての故に。種種の金、銀、瑠璃、寶樹、是亦林と名く。一切の女人必懷諂曲とは是亦餘有り。何を以ての故に。亦女人善く禁戒を持し、功德成就し、大慈悲の有る有り。一切自在必受安樂とは是亦餘有り、何を以ての故に。有自在者は轉輪聖帝なり。如來法王は死魔に屬せず、滅盡すべからず。梵釋諸天は自在を得と雖も悉く是無常なり。若常住にして變易無きを得る者は、乃ち自在と名く。所謂大乘大般涅槃なり。」

佛の言はく、「善男子、汝今善く樂說の辯を得。且く止めて諦かに聽け。文殊師利、譬へば長者の身病苦に嬰るに、良醫之を診して爲に膏藥を合す。是の時病者貪欲にして多服す。醫之に語りて、「若能く消せば則ち意に隨ふべし。汝今體羸ふ。多服すべからず。當に知るべし、是の膏も亦甘露と名け、亦毒藥と名く。若多く服して消せざれば、則ち名けて毒と爲す」と言ふが如し。善男子、汝今是の醫の所說義理に違し、膏勢を損失すと謂ふこと勿れ。善男子、如來も亦爾なり。諸の國王、后妃、太子、王子、大臣の爲にす。波斯匿王の王子后妃、憍慢の心に因るが故に、調伏を欲するが爲に恐怖を示現す。彼の良醫の如きには

【九十五種】外道即ち佛教以外の外教邪宗に九十五種の異あるを云ふ。

故に此の偈を說く、

一切の江河、必ず回曲有り
一切の叢林、必ず樹木と名く
一切の女人、必ず諂曲を懷く
一切の自在、必ず安樂を受く

文殊師利、汝今當に知るべし、如來の所說は漏失有ること無し。此の大地の如きは反覆せしむべきも如來の言は終に漏失無し。是の義を以ての故に、如來の所說は一切有餘なり。』爾の時に佛、文殊師利を讃じたまはく、『善い哉善い哉善男子、汝已に久しく是の如きの義を知る。一切を哀愍し、衆生をして智慧を得しめんと欲するが故に、廣く如來に是の如きの偈義を問ふ。』

爾の時に文殊師利法王子復佛前に於て偈を說きて言さく、

他の語言に於て、隨順して逆はず
亦他の、作と及び不作とを觀ぜず
但自ら身の、善不善行を觀ず

『世尊、是の如く此の法藥を說くも正說と爲すに非ず。他の語言に於て隨順して逆はずとは、唯願はくば如來、哀みを垂れて正說したまへ。何を以ての故に。世尊、常に說きたまはく、「一切外學の九十五種は皆惡道に趣き聲聞の弟子皆正路に向ふ。若禁戒を護り、威儀

【阿闍世王】釋尊當時に於ける王舍城の治者。アジャータシャストル(Ajātaśastru)未生怨と譯す。

【調達】釋尊の從弟。普通提婆達多と書く。初め釋尊について入團したが、後に反逆して釋尊に拮抗し逆罪佛敵として有名なり。梵名デーヴダッタ(Devadatta)天授と譯す。

を攝持し、諸根を守愼す。是の如き等の人は深く大法を樂ひ、善道に趣向す。」如來何が故ぞ、九部の中に於て毀他有るを見れば則便訶責したまふ。是の如きの偈の義何の所趣と爲んや。」佛、文殊師利に告げたまはく「善男子、我此の偈を說く、亦盡く一切衆生の爲にせず。爾の時に唯阿闍世王の爲にす。諸佛世尊、若因緣無ければ終に逆ひ說かず。因緣有るが故に乃ち之を說くのみ。善男子、阿闍世王、其の父を害し已りて我が所に來至し、我を折伏せんと欲して是の如きの問を作さく「云何が世尊、是一切智なりや、一切智に非ずや。若一切智ならば、調達往昔無量世の中、常に惡心を懷き、如來に隨逐して逆害を爲さんと欲す。云何ぞ如來、其が出家を聽す」と。善男子、是の因緣を以て我是の王の爲に而も此の偈を說く、

他の語言に於て、隨順して逆はず
亦他の、作と以び不作とを觀ぜず
但だ自ら身の、善不善行を觀ず

佛、大王に告げたまはく「汝今父を害し、已に逆罪を作る、最重無間なり。應當に發露して以て淸淨を求むべし。何に緣りてか、乃ち更に他の過咎を見る。」善男子、是の義を以ての故に、我彼の王の爲に是の偈を說く。復次に善男子、亦禁戒を護持して毀たず、威儀を成就し、他の過を見る者の爲に是の偈を說く。若復人有りて、他の敎誨を受けて衆惡を遠離し、復他人を敎へて衆惡を遠けしむ。是の如きの人は、則ち我が弟子なり。」』

爾の時に世尊、文殊師利の爲に復偈を說きて言はく、

一切刀杖を畏れ、壽命を愛せざる無し
己を恕して譬を爲すべし、殺すこと勿れ杖を行ふこと勿れ

爾の時に文殊師利、復佛前に於て偈を說きて言さく、

一切杖を畏るるに非ず、一切命を愛するに非ず
己を恕して譬を爲すべし、勤めて善方便を作せ

『如來是の法句の義を說きたまふ、亦是未盡なり。何を以ての故に。阿羅漢、轉輪聖王、玉女、象馬、主藏、大臣の如き、若諸の天人及び阿修羅、利劍を執持して能く之を害する者、是の處有ること無し。勇士、烈女、馬王、獸王、持戒の比丘、復對ひ至ると雖も、而も恐怖せず。是の義を以ての故に、如來の說偈も亦是有餘なり。「若己を恕して譬を爲すべし」と言はば、是亦有餘なり。何を以ての故に。若羅漢をして、己を以て彼を譬へしめば、則ち我想及以命想有らん。若我想及以命想有らば、則ち擁護すべし。凡夫も亦、阿羅漢悉く是行人と見るべし、若是の如き者は卽ち是邪見なり。若邪見有らば、命終して阿鼻地獄に生ずべし。又阿羅漢の、設し衆生に於て害心を生ぜば、是の處有ること無し。無量の衆生も亦復能く羅漢を害する者無し。』

佛の言はく、『善男子、我想と言ふは、衆生に於て大悲心を生じて殺害の想無きを謂ふ。阿羅漢の平等の心を謂ふ。世尊、因緣有ること無きに、而も逆ひ說くと謂ふこと勿れ。昔

日此の王舍城の中に於て大獵師有り。多く麞鹿を殺し、我を請じて肉を食せしむ。我爾の時に於て、彼の請を受くと雖も、諸の衆生に於て慈悲心を生ずること羅睺羅の如く、而も偈を說きて言はく、

當に汝をして長壽久久、世に住せしむべし
不害法を受持せよ、猶し諸佛の壽の如くならん

是の故に我、此の偈を說く、

一切刀杖を畏れ、壽命を愛せざる無し
己を恕して譬を爲すべし、殺すこと勿れ杖を行ふこと勿れ

佛の言はく、「善い哉善い哉文殊師利、諸の菩薩摩訶薩の爲の故に、如來に是の如きの密敎を諮問す。」

(八)爾の時に文殊師利、復是の偈を說く、

云何が父母を敬し、隨順して尊重す
云何が此の法を修して、無間獄に墮す

是に於て如來、復偈を以て答へたまはく、

若貪愛を以て母とし、無明を以て父と爲し
是を隨順尊重せば、則ち無間獄に墮す

爾の時に如來、復文殊師利の爲に重ねて偈を說きて言はく、

【八】文殊偈を頌し、佛又偈を以て答へ給ふ。

【無間獄】無間地獄の略。

【賢善】スバドラ(Subhadra)の譯。

一切他に屬す、則ち名けて苦と爲す
一切己に由る、自在安樂なり
一切の憍慢は、勢極めて暴惡なり
賢善の人は、一切愛念す

爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、「世尊、如來の所說は是亦不盡なり。唯願はくば如來、復哀憫を垂れて其の因緣を說きたまへ。何を以ての故に。長者子の師に從ひて學するの時の如き、師に屬すと爲んや不や。若師に屬せば義成就せず。若屬せざれば、亦成就せず。若自在を得るも亦成就せず。是の故に如來の所說は有餘なり。復次に世尊、譬へば王子の綜習する所無く、事に觸れて成ぜざるが如し。是亦自在にして愚闇常苦なり。是の如きの王子、若自在と言はば、義亦成ぜず。若屬他と言はば、義も亦成ぜず。是の義を以ての故に、佛の所說の義を名けて有餘と爲す。是の故に一切屬他必ずしも苦を受けず。一切自在必ずしも樂を受けず。「一切の憍慢は勢極めて暴惡なり」とは、是亦有餘なり。世尊、諸の烈女憍慢心の故に出家學道し、禁戒を護持して威儀成就し、諸根を守攝して馳散せしめざるが如し。是の故に一切憍慢の結必ずしも暴惡ならず。賢善の人は一切愛念、是亦有餘なり。人內に四重禁を犯し已りて法服を捨てず、堅く威儀を持するが如し。護持法者見已りて愛せず。是の人命終せば必ず地獄に墮せん。若善人有りて重禁を犯し已らば、護持法者、見て卽ち驅出し、道を罷めて俗に還らん。是の義を以ての故に、一切賢善必ずし

も悉く愛せず。』

爾の時に佛、文殊師利に告げたまはく、『因緣有るが故に如來此に於て有餘義を說く。又因緣有りて諸佛如來、而も是の法を說く。時に王舍城に一りの女人有りて名を善賢と曰ふ。父母の家に還り因つて我が所に至り、我及び法衆僧に歸依し、而も是の言を作さく、『一切の女人勢自由ならず。一切の男子自在無閡なり。』我、爾の時に於て是の女心を知り、卽ち爲に是の如きの偈頌を宣說す。文殊師利、善い哉善い哉、汝今能く一切衆生の爲に、如來是の如きの密語を問ふ。』

文殊師利、復偈を說きて言さく、

一切諸の衆生、皆飯食に依りて存す
一切の大力有る、其の心嫉妬無し
一切飲食に因りて、而も諸の病苦を得
一切の淨行を修する、安樂を受くることを得

『是の如く世尊、今純陀が飲食供養を受く、將如來恐怖有ること無きや。』

爾の時に世尊、復文殊の爲に偈を說きて言はく、

一切の衆生、盡く飲食に依りて存するに非ず
一切の大力、心皆嫉妬無きに非ず
一切食に因りて、而も諸の病苦を致すに非ず

【憂禪尼國】西印度に在る國にしてウッジャン(Ujja-ini)なり。

一切の淨行、悉く安樂を受くることを得るに非ず
『文殊師利、汝若病を得ば、我も亦是の如く病苦を得べし。何を以ての故に。諸の阿羅漢及び辟支佛、菩薩、如來、實に食する所無し。彼を化せんと欲するが爲に受用を示現す。若無量の衆生施す所の物、其をして檀波羅蜜を具足せしめ、地獄、畜生、餓鬼を拔濟す。若如來六年苦行して身羸瘠すと言ふ者、是の處有ること無し。諸佛世尊、諸有に獨拔して凡夫に同じからず。云何ぞ而も身羸劣を得んや。諸佛世尊精勤修習して金剛心を獲。世人危脆の體に同じからず。我が諸の弟子も亦復是の如し。思議すべからず、食に依らず。一切大力無嫉妬とは、亦有餘義なり。世間の人終身永く嫉妬の心無く、而も大力無きが如し。一切病苦食に因りて得とは、亦有餘義なり。亦人の客病を得る者有るを見る。所謂棘刺、刀劍、矛矟なり。一切淨行安樂を受くとは、是亦有餘なり。世間にも亦外道の人、梵行を修して多く苦惱を受くる有り。是の義を以ての故に、如來の所說は一切有餘なり。是を如來因緣無きに是の偈を說くに非ず、因有るが故に說くと名く。昔日此の憂禪尼國に於て婆羅門有り。羖羝德と名く。我が所に來至して、第四八戒齋法を受けんと欲す。我爾の時に於て、爲に此の偈を說く。』

爾の時に迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、何等をか名けて無餘義と爲すや、云何が復一切の義と名くるや。』『善男子、一切とは唯助道常樂善法を除き、亦一切と名け亦無餘と名く。其の餘の諸法も亦有餘と名け、亦無餘と名く。樂法の諸の善男子をして、此の有

【九】大衆の歡喜領解を明す。

【摩竭主】摩竭陀國主の意。

餘及び無餘義を知らしめんと欲す。』

(九)迦葉菩薩、心大いに歡喜し踊躍すること無量なり。前みて佛に白して言さく、『甚だ奇なり世尊、衆生を等しく視ること羅睺羅の如し。』

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、『善い哉善い哉、汝今の所見微妙甚深なり。』迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、唯願くば如來、是の大乘大涅槃經所得の功德を說きたまへ。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、若是の經の名字を、聞くことを得ること有らば、得る所の功德、諸の聲聞、辟支佛等の能く宣說する所に非ず。唯佛のみ能く知る。何を以ての故に。不可思議は是佛境界なり。何に況や經卷を受持し、讀誦、通利し、書寫せんをや。』

爾の時に諸天世人、及び阿修羅、卽ち佛前に於て異口同音にして偈を說きて言さく、

諸佛は思議し難く、法僧も亦復然り
是の故に今勸請す、唯願はくば少しく停住したまへ
尊者大迦葉、及以阿難等
二衆の眷屬、久しからずして須臾に至らん
幷及摩竭主、阿闍世大王
至心に佛を敬信する、猶故未だ此に來らず
唯願はくば佛世尊、少しく哀愍を垂れて住し

【大迦葉】佛十大弟子の一人。頭陀第一の稱あり。マハーカシャパ(Mahākāśyapa)大飲光と譯す。

【阿難】佛十大弟子の一人。多聞第一の稱あり。アーナンダ(Ānanda)歡喜と譯す。

【四部】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆。普通四部衆と云ふ。

此の大衆の中に於て、我が諸の疑網を斷じたまへ

爾の時に如來、諸の大衆の爲に偈を說きて言はく、

我が法の最長子、是を大迦葉と名く
阿難勤めて精進し、能く一切の疑を斷ず
汝等當に諦觀すべし、阿難多聞の士
自然に當に、是の常及び無常を解了すべし
是を以ての故に、心に大憂惱を懷くべからず

爾の時に大衆、種種の物を以て如來に供養す。佛に供養し已りて、即ち阿耨多羅三藐三菩提心を發す。無量無邊恆河沙數の諸の菩薩等、初地に住することを得たり。

爾の時に世尊、文殊師利、迦葉菩薩及與純陀の爲に記莂を授く。記莂を授け已りて其の如きの言を說く、『諸の善男子、自ら其の心を修め、愼みて放逸すること莫れ。我今背疾み擧體皆痛む。我今臥せんと欲す』と、彼の小兒及び常患者の如くす。『文殊、汝等當に、四部の爲に廣く大法を說くべし。今此の法を以て汝に付囑す。乃至迦葉、阿難等至らば、復當に是の如きの正法を付囑すべし。』

爾の時に如來、是の語を說き已りて、諸の衆生を調伏せんと欲するが爲の故に、身に疾有るを現じ右脇にして臥する、彼の病人の如くにす。

【現病品】此品以下の五品は涅槃行を顯示す。五品中初めの四品は五行を明し、後の一品は十功德を明す。この現病品は最初に病行を明すの章なり。

【一】文殊釋尊の病を問ふ

【尸波羅蜜】尸羅波羅蜜 シーラパーラミター（Śīla-pāramitā）にして六波羅蜜の一。持戒波羅蜜なり。

【三摩跋提】サマーパッティ（Samāpatti）禪定に入らんとする狀態を云ふ。

現病品第十八

（一）爾の時に迦葉、佛に白して言さく、「世尊、如來已に一切の諸病を免る。患苦悉く除きて復怖畏無し。世尊、一切衆生に四毒箭有り、則ち病因と爲す。何等をか四と爲す。貪欲、瞋恚、愚癡、憍慢なり。若し病因有らば則ち病生ずる有り、所謂寒熱肺病、上氣吐逆、膚體𤻲𤻲、其の心悶亂、下痢噦咽、小便淋瀝、眼耳疼痛、腹背脹滿、顚狂乾消、鬼魅に著せらる。是の如きの種種身心の諸病、諸佛世尊悉く復有ること無し。今日如來何の縁ぞ、文殊師利に顧命して是の言を作さく、「我今背痛む。汝等當に大衆の爲に法を説くべし」と。二つの因縁有らば則ち病苦無し。何等をか二つと爲す。一つには一切衆生を憐愍し、二つには病者に醫藥を給施す。如來往昔已に無量萬億劫の中に於て菩薩の道を修し、常に愛語を行ず。衆生を利益して苦惱せしめず。諸の病者に種種の醫藥を施す。何の縁ぞ、今に於て自ら病有りと言ふ。世尊、世人病有らば、或は坐し或は臥して其の處に安ぜず。或は飲食を索め、家屬を敕誡して產業を修治せしむ。何が故ぞ、如來默然として臥す。弟子、聲聞人等に尸波羅蜜、諸禪解脫三摩跋提を教へて諸の正勤を修せしめざる。何に縁りてか是の如きの甚深の大乘經典を説かざる。何が故ぞ、無量の方便を以て大迦葉人中の象王、諸大人等を教へ、其をして阿耨多羅三藐三菩提を退かざらしめざる。何が故ぞ、諸の惡比丘

【煩惱障】煩惱は正道を障へ善心を害するを以て煩惱障と云ふ。
【業障】惡業は正道を碍ぐる故にこの名あり。
【報障】報は果報なり。煩惱惑業によつて惡趣の果報を得又は人天に生を得るも、生來不信の者之に依つて聖道を碍ぐる故に報障と云ふ。
【阿伽陀】アガタ(Agada)藥名。不死藥、無病等と譯す。

の一切不淨物を受け畜ふる者を治めざる。世尊、實に病有ること無し。云何ぞ默然として右脇にして臥したまふ。諸の菩薩等、凡そ病者に醫藥を給施する所、得る所の善根、悉く衆生に施して共に一切種智に回向す。衆生の諸の煩惱障、業障、報障を除くが爲に。煩惱障とは、貪欲、瞋恚、愚癡、忿怒、纏蓋、焦惱、嫉妬、慳吝、姦詐、諛諂、無慙、無愧、慢、慢慢、不如慢、增上慢、我慢、邪慢、憍慢、放逸、貢高、懟恨、諍訟、邪命、諂媚、異相を詐現し、利を以て利を求め、惡求、多求、恭敬有ること無く、敎誨に隨はず、惡友に親近す。利を貪りて厭ふこと無く、纏縛して解し難し。惡欲を欲し惡貪を貪す。身見、有見、及以無見、頻申喜睡、欠呿不樂、飮食を貪嗜し、其の心蒙瞢、心異相を緣じ、不善思惟し、身口多惡、好喜多語、諸根闇鈍、發言多虛、常に欲覺、恚覺、害覺に覆蓋せらる。是を煩惱障と名く。業障とは五無間罪、重惡の病なり。報障とは地獄、畜生、餓鬼に生在し、誹謗正法及び一闡提、是を報障と名く。是の如きの三障を名けて大病と爲す。而も諸の菩薩、無量劫に於て菩提を修する時、一切の疾病に醫藥を給與し、常に是の願を作して、諸の衆生をして永く是の如きの三障の重病を斷ぜしむ。

復次に世尊、菩薩摩訶薩菩提を修する時、一切の病者に醫藥を給施し、常に是の願を作さく、願はくば衆生をして永く諸病を斷じ、如來の金剛の身を成ずることを得しめよ。又願はくば一切無量の衆生、妙藥王と作りて一切の諸惡重病を斷除せん。願はくば諸の衆生阿伽陀藥を得、是の藥力を以て能く一切無量の惡毒を除かん。又願はくば衆生、阿耨多

【那由他】ナユタ(Nayuta)數量をあらはす。約一億なりと云ふ。

羅三藐三菩提に於て退轉有ること無く、疾く無上佛藥を成就することを得て一切煩惱の毒箭を消除せん。又願はくば衆生、勤修精進して如來金剛の心を成就し、微妙の藥と作りて衆病を療治し、人の諍訟の想を生ずる有らしめず。亦願ふ、衆生大藥樹と作りて一切の諸惡重病を療治せん。又願ふ、衆生の毒箭を拔出し如來無上の光明を成ずることを得ん。又願ふ、衆生如來の智慧大藥微密の法藏に入ることを得ん。世尊、菩薩是の如く已に無量百千萬億那由他劫に於て是の誓願を發して、諸の衆生をして悉く諸病無からしむ。何に縁りてか如來乃ち今日に於て唱へて疾有りと言ふ。

復次に世尊、世に病者有りて坐起俯仰進止すること能はず。食飮御せず、漿水下らず、亦復諸子を教誡し家業を修治すること能はず。爾の時に父母、妻子、兄弟、親屬、知識、皆是の人に於て必死の想を生ず。世尊、如來今日も亦復是の如し。右脇にして臥し、論說する所無し。此の閻浮提の一切愚人當に是の念を作すべし、「如來正覺必ず當に涅槃すべし」と。滅盡の想を生ずれども、而も如來性實は畢竟じて涅槃に入らず。何を以ての故に。如來常住にして變易無きが故に。是の因緣を以て、說きて「我今背痛む」と言ふべからず。

復次に世尊、世に病者有りて身體羸損し、若は偃、若は側、牀蓐に臥著す。爾の時に衆人心惡賤を生じ、必死の想を起す。如來今者亦復是の如し。當に外道九十五種に輕慢せられ、無常想を生ぜしむべし。彼の諸の外道、當に是の言を作すべし、「我等我性人自在時節微塵等の法を以て、常住にして變易有ること無しと爲すに如かず。沙門瞿曇無常に遷さる、是

變易法」と。是の義を以ての故に、世尊今日默然として右脇にして臥したまふべからず。復次に世尊、世に病者有りて四大增損して互に調適ならず、羸瘦乏極なり。是の故に意に隨ひて坐起すること能はずして牀蓐に臥著す。如來四大和適ならざる無し。身力具足し、亦羸損無し。世尊、十の小牛力の如きは一つの大牛力に如かず。十の大牛力は一つの青牛力に如かず。十の青牛力は一つの凡象力に如かず。十の凡象力は一つの野象力に如かず。十の野象力は一つの二牙象力に如かず。十の二牙象力は一つの四牙象力に如かず。十の四牙象力は雪山の一白象力に如かず。十の雪山の白象力は一つの香象力に如かず。十の香象力は一つの青象力に如かず。十の青象力は一つの黃象力に如かず。十の黃象力は一つの赤象力に如かず。十の赤象力は一つの白象力に如かず。十の白象力は一つの山象力に如かず。十の山象力は一つの優鉢羅象力に如かず。十の優鉢羅象力は一つの拘物頭象力に如かず。十の拘物頭象力は一つの芬陀利象力に如かず。十の芬陀利象力は人中の一つの力士力に如かず。十の人中の力士力は一つの鉢建提力に如かず。十の鉢建提力は一つの八臂那羅延力に如かず。十の那羅延力は十住の菩薩の一節の力に如かず。凡夫の身は中節相到せず。人中の力士は節頭相到し、鉢建提の身は諸節相接し、那羅延の身は節頭相鉤す。十住の菩薩は諸節骨解、蟠龍相結す。是の故に菩薩其の力最も大なり。世界成ずる時、金剛際より金剛座を起し、上道場菩提樹下に至る菩薩坐し已りて、其の心即時に十力を逮得す。如來今者彼の嬰孩、小兒の如くなるべからず。嬰孩、小兒、愚癡、無智の能く說く所無し。是の

【四大】物質を構成する地水火風の四要素を云ふ。茲には特に身體をさす。吾人の身體は四大の所造にして、その調和を持續すれば健全なれども、四大不調となり增損を生ずれば病となる。

【力士】マラー(Malla)族にして力極めて強き種族の名。

【鉢建提】力強き天神の名。

【那羅延】天上の力士の名。ナーラーヤナ(Nārāyaṇa)

【金剛際】金輪際とも云ふ。この世界の最底を風輪と云ひ、その厚さ十六億由旬。風輪の上に水輪あり深さ八億由旬、水輪の上に金輪あり。厚さ三億二萬由旬あり。三輪形の金剛より成れば金輪又は金剛際と云ふ。

【金剛座】釋迦成道の場所を云ふ。

義を以ての故に、隨意偃側するに人の譏訶する無し。如來世尊大智慧有りて一切を照明す。人の大龍、大威德を具し神通を成就す。無上の仙人、永く疑網を斷じ已に毒箭を拔く。進止安詳、威儀具足、無所畏を得。今者何が故ぞ右脇にして臥し、諸の人天をして悲愁苦惱せしめたまふ。』

爾の時に迦葉、卽ち佛前に於て而も偈を說きて言さく、

瞿曇大聖德、願はくば起ちて妙法を演べ
小兒、病者の如く牀蓐に臥したまふべからず
調御天人師、雙樹の間に倚臥す
下愚凡夫の見、當に必ず涅槃すと言ふべし
方等典、甚深の佛所行を知らず
微密藏を見ざる、猶し盲の道を見ざるがごとし
唯、諸の菩薩、文殊師利等有り
能く是の甚深を解す、譬へば善射人の如し
三世の諸の世尊、大悲を根本と爲す
是の如きの大慈悲、今何の所在と爲ん
若大悲無ければ、是則ち佛と名けず
佛若必ず涅槃せば、是則ち常と名けず

唯願はくば無上尊、哀んで我等が請を受け
衆生を利益し、諸の外道を摧伏したまへ

(一)爾の時に世尊、大悲心に熏じ、諸の衆生の各の所念を知り、將に隨順して畢竟利益せんと欲し、卽ち臥より起ちて結跏趺座す。顏貌熙怡、融金聚の如し。面目端嚴、猶し月の盛滿のごとし。形容清淨、諸の垢穢無し。大光明を放ちて虛空に充徧す。其の光大いに盛にして百千の日に過ぐ。東方、南西北方、四維、上下の諸佛世界を照す。衆生に大智の炬を惠施して悉く無明の黑闇を滅するを得しむ。百千億那由他の衆生をして、不退の菩提の心に安止せしむ。』

爾の時に世尊、心に疑慮無くして師子王の如し。三十二の大人の相、八十種の好を以て其の身を莊嚴す。其の身上の一切の毛孔に於て、一一の毛孔に一つの蓮華を出す。其の華微妙にして各千葉を具す。純眞金色にして瑠璃を莖と爲し、金剛を鬚と爲し、玫瑰を臺と爲す。形大團圓にして猶し車輪の如し。是の諸の蓮華、各種種雜色の光明を出す。青、黃、赤、白、紫、頗梨色なり。是の諸の光明皆悉く阿鼻地獄、想地獄、黑繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄に徧至す。是の八地獄の其の中の衆生は常に諸苦に逼切せらる。所謂燒煮、火炙、斫刺、㓟剝、斯の光に遇ひ已らば、是の如きの衆苦悉く滅して餘り無し。安隱清涼、快樂無極なり。是の光明の中に如來祕密の藏を宣說し、「諸の衆生皆佛性有り」と言ふ。衆生聞き已りて卽便命終して人天の中に生ず。

【二】佛無病の相を示現す。

【阿鼻地獄】以下八熱地獄をあぐ。阿鼻(Avici)は無間と譯す。苦惱間斷なきを以て此名あり。

【想地獄】等活地獄に同じ。罪人互に毒を懷ひ害を想

ひて毒爪を以て相攫し、又罪人斫刺摩擣せられて已に死すと想ふ。然るに冷風に吹かれて活起す。故に想地獄と云ふ。

【黑繩地獄】黑繩を以て支體を秤量して後に斬鋸せらるゝ故にこの名あり。

【衆合地獄】衆多の苦具俱に來りて身を逼め合黨して相害する故に衆合と云ふ。

【叫喚地獄】衆苦に逼められて叫喚するを以てこの名あり。

【大叫喚地獄】劇苦に逼られて大叫喚するの地獄なり

【焦熱地獄】火身に隨ひて起り、炎熾周圍して苦熱堪へ難じ故。にこの名あり。

【大焦熱地獄】熱の極なる故にこの名あり。

【八種の寒氷地獄】

乃至八種の寒氷地獄、所謂、阿波波地獄、阿吒吒地獄、阿羅羅地獄、阿婆婆地獄、優鉢羅地獄、波頭摩地獄、拘物頭地獄、芬陀利地獄なり。是の中の衆生常に寒苦に逼惱せらる。所謂皸裂身體碎壞、互相殘害。斯の光に遇ひ已らば、是の如き等の苦も亦滅して餘無し。即ち調和溫煗身に適することを得。是の光明の中に亦如來祕密の藏を說きて、「諸の衆生皆佛性有り」と言ふ。衆生聞き已りて即便命終して人天の中に生ず。爾の時に此の閻浮提界及び餘の世界に於て、有らゆる地獄皆悉く空虛にして罪を受くる者無し一闡提を除く。餓鬼の衆生飢渴に逼まられ、髮を以て身に纏ひ百千歲に於て未だ曾て漿水の名を聞くを得ざるも、斯の光に遇ひ已らば飢渴即ち除く。是の光明の中に亦如來微密祕藏を說き「諸の衆生皆佛性有り」と言ふ。衆生聞き已りて即便命終して天人の中に生ず。諸の餓鬼をして亦悉く空虛ならしむ。大乘方等正典を謗ずるを除く。畜生の衆生互に相殺害し共に相殘食す。斯の光に遇ひ已らば恚心悉く滅す。是の光明中に亦如來の祕密藏を說く、「諸の衆生皆佛性有り」と。衆生聞き已りて即便命終して人天の中に生ず。爾の時に當りて畜生も亦盡きん。正法を謗ずるを除く。

是の一一の華に各一佛有り。圓光一尋にして金色晃曜たり。微妙端嚴にして最上比無し。三十二相、八十種好其の身を莊嚴す。是の諸の世尊、或は坐する者有り、或は行く者有り、或は臥する者有り、或は住する者有り。或は雷音を震ひ、或は洪雨を注ぎ、或は電光を放ち、或は大風を扇ぎ、或は煙燄を出して身聚火の如く、或は七寶の諸山、池泉、河水、山

八寒地獄を云ふ。【阿吒吒地獄】寒に逼られてアタタと云ふ悲鳴をあぐる地獄。【阿羅羅地獄】極寒身に逼り身上皺を生ずる地獄。【阿婆婆地獄】アバゞの聲のみを出す地獄。【優鉢羅地獄】青蓮華の如く身の折裂する地獄。【婆頭摩地獄】紅蓮華の如く身の折裂する地獄。【拘物頭地獄】赤蓮華の如く身の折裂する地獄。【分陀利地獄】白蓮華の如く身の折裂する地獄。【四聖諦】苦集滅道の四諦。【六波羅蜜】波羅蜜とは原音パーラミター(Paramita)にして到彼岸、又は度と譯す。迷の此岸より悟の彼の岸に到らしむる菩薩の修行を云ふ。

林、樹木を示現する有り。或は復七寶の國土、城邑、聚落、宮殿、屋宅を示現す。或は復象馬、師子、虎狼、孔雀、鳳凰の諸鳥を示現す。或は復示現して閻浮提の所有の衆生をして、悉く地獄、畜生、餓鬼を見せしむ。或は復欲界の六天を示現す。復世尊有りて、或は陰界諸入の諸の過患多きを說き、或は復四聖諦の法を說く有り。或は復諸法の因緣を說く有り。或は復諸業煩惱皆因緣生なるを說く有り。或は復我と無我とを說く有り。或は復苦樂二法を說く有り。或は復常、無常等を說く有り。或は復淨と不淨とを說く有り。復世尊有りて、諸の菩薩の爲に所行の六波羅蜜を演說す。或は復諸大菩薩所得の功德を說く有り。或は復諸佛世尊の所得の功德を說く有り。或は復聲聞の人の所得の功德を說く有り。或は復一乘に隨順するを說く有り。或は復三乘の成道を說く有り。或は世尊有りて左脇に水を出し右脇に火を出す。或は初生の出家道場の菩提樹下に坐し、妙法輪を轉じ、涅槃に入るを示す有り。或は世尊有りて師子吼を作し、此の會中をして一果、二果、三果より第四果に至るを得る有らしむ。或は復生死を出離する無量の因緣を說く有り。爾の時に此の閻浮提中に於て、所有の衆生斯光に遇ひ已りて、盲者は色を見、聾者は聲を聞き、瘂者は能く言ひ、拘躄は能く行き、貧者は財を得、慳者は能く施し、恚者は慈心に、不信者は信ず。是の如く世界に一衆生の惡法を修行する無し。一闡提を除く。

(三三)爾の時に一切の天、龍、鬼神、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、羅刹、揵陀、憂摩陀、阿婆摩羅、人、非人等、悉く共に聲を同じうして是の如きの言を唱ふ「善い

哉善い哉無上天尊、利益する所多し。」是の語を說き已りて踊躍歡喜し、或は歌ひ、或は舞ひ、或は身動轉す。種種の華を以て佛及び僧に散ず。所謂天の優鉢羅華、拘物頭華、波頭摩華、芬陀利華、曼陀羅華、摩訶曼陀羅華、曼殊沙華、摩訶曼殊沙華、散陀那華、摩訶散陀那華、盧脂那華、摩訶盧脂那華、香華、大香華、適意華、大適意華、愛見華、大愛見華、端嚴華、第一端嚴華なり。復諸香を散ず。所謂沈水、多伽樓香、栴檀欝金、和合雜香、海岸聚香なり。復天上の寶幢、旛蓋、諸天の伎樂、等、笛、笙、瑟、箜篌、鼓吹を以て佛に供養したてまつる。

而も偈を說きて言さく、

我今稽首したてまつる大精進、無上正覺兩足尊
天人大衆の知らざる所、唯瞿曇有りて乃ち能く了ず
世尊往昔我が爲の故に、無量劫に於て苦行を修す
如何ぞ一日本誓を棄てて、而も便ち命を捨てて涅槃せんと欲す
一切衆生、諸佛世尊の祕密藏を見たてまつること能はず
是の因緣を以て出づるを得ること難く、生死に輪轉して惡道に墜つ
佛の所說の如く阿羅漢、一切皆當に涅槃に至るべし
是の如く甚深なる佛の行處、凡夫下愚誰か能く知らん
諸の衆生に甘露法を施す、彼の諸の煩惱を斷除せんが爲なり

之に六種あり。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を六波羅蜜と稱す。

【一乘】エーカヤーナ(Ekayāna)一佛乘とも云ひ成佛する唯一の教を云ふ。乘は運乘の義佛の教法を云ふ。

【三乘】トリヤーナ(Triyāna)成佛する三種の教を云ふ。

【三】大衆の供養を明す。

【乾闥婆】ガンダルヴァ(Gandharva)香神、香陰等と譯す。樂神の名。

【迦樓羅】カルダ(Karuḍa)金翅鳥と譯す。

【緊那羅】キンナラ(Kinnara)疑神と譯す。歌人の名。

【摩睺羅伽】マホーラガ(Mahoraga)大腹行と譯す。大蟒神なり。

【羅刹】ラークシャサ(Rakṣasa)鬼神なり。

若此の甘露を服し已ること有らば、復生老病死を受けず
如來世尊用ひて、百千無量の諸の衆生を療治し
其の有らゆる諸の重病をして、一切消滅して遺餘無からしむ
世尊久しく已に病苦を捨つ、故に名けて第七佛と爲すことを得
唯願はくば今日法雨を雨して、我等が功德の種を潤漬したまへ
是の諸の大衆及び人天、是の如く請じ已りて默然として住す

是の偈を說く時、蓮華臺中の一切諸佛、閻浮提より淨居に徧至して悉く皆之を聞きたまへり。

(四)爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく『善い哉善い哉善男子、汝已に是の如きの甚深微妙の智慧を具足し、一切の諸魔外道に破壞せられず。善男子、汝已に安住して一切諸邪惡風に傾動せられず。善男子、汝已に樂說辯才を成就し、已に曾て過去無量恆河沙等の諸佛世尊を供養す。是故に能く如來正覺に是の如きの義を問ふ。善男子、我往昔無量無邊億那由他百千萬劫に於て、已に病根を除き、永く倚臥を離る。迦葉、過去無量阿僧祇劫に佛有りて世に出づ。無上勝如來、應供正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號す。諸の聲聞の爲に是の大乘大涅槃經を解き、開示分別して其の義を解說す。我、爾の時に於て亦彼の佛の爲に而も聲聞と作り、是の如き大涅槃典を受持し讀誦通利し、經卷を書寫し、廣く他人の爲に開示分別して其の義を解說す。是の善根を以て

【建陀】乾闥婆の事ならん。
【憂摩陀】ウマダ(Umada)鬼の名。
【阿婆摩羅】アパスマーラ(Apasmāra)顚倒魔と譯す人を狂せしむる鬼。
【大精進無上正覺雨足尊】釋尊を呼べる敬稱。
【第七佛】過去七佛の第七番目の佛と云ふ意にして釋尊をさす。過去七佛とは第一毘婆尸佛(Vipaśyin)第二尸棄佛(Sikhin)第三毘舍浮佛(Viśvabhū)第四拘留孫佛(Krakucchanda)第五拘那含牟尼佛(Kanakamuni)第六迦葉佛(Kāśyapa)第七釋迦牟尼佛(Śākyamuni)
【淨居】淨居天にして色界第四禪の最頂なり。
【四】廣く無病有病を明す。

阿耨多羅三藐三菩提に回向す。善男子、我是より來た、未だ曾て惡煩惱、業緣の惡道に墮し、正法を誹謗し、一闡提と作り、黃門の身、無根、二根を受け、父母に反逆し、阿羅漢を殺し、塔を破し、僧を壞し、佛身の血を出し、四重禁を犯す有らず。是より以來身心安隱にして諸の苦惱無し。迦葉、我今實に一切の疾病無し。所以は何ん。諸佛世尊久しく已に一切の病を遠離するが故なり。迦葉、是の諸の衆生大乘方等の密語を知らずして、便ち如來眞實に疾有りと謂ふ。迦葉、如來は人中の師子と云ふが如し、而も如來は實に師子に非ず。是の如きの言、卽ち是如來の祕密の敎なり。迦葉、如來は人中の大龍と言ふが如し、而も我已に無量劫の中に於て是の業を捨離す。迦葉、如來は是人是天と言ふが如し、而も我眞實に人に非ず天に非ず。亦鬼神、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽に非ず。我に非ず、命に非ず、可養育に非ず。人士夫に非ず。作に非ず、不作に非ず。受に非ず、不受に非ず。世尊に非ず、聲聞に非ず。說に非ず、不說に非ず。是の如き等の語、皆是如來祕密の敎なり。迦葉、「如來は猶し大海須彌山王の如し」と言ふが如し、而も如來は實に鹹味の石山に同じきに非ず。當に知るべし、是の語も亦是如來祕密の敎なり。迦葉、「如來は芬陀利の如し」と言ふが如し、而も我實に芬陀利に非ざるなり。是の如きの言、卽ち是如來の祕密の敎なり。迦葉、「如來は猶し父母の如し」と言ふが如し、而も如來は實に父母に非ず。是の如きの言も亦是如來祕密の敎なり。迦葉、「如來は是大船師」と言ふが如し、而も如來は實に船師に非ず。是の如きの言も亦是如來祕密の敎なり。迦葉、「如來は

猶し商主の如し」と言ふが如し、而も如來は實に商主に非ず。是の如きの言も亦是如來の祕密の教なり。迦葉、「如來は能く魔を摧伏す」と言ふが如し、而も如來は實に惡心の他をして伏せしめんと欲する無し。是の如きの言も、皆是如來の祕密の教なり。迦葉、「如來は能く癰瘡を治す」と言ふが如し、而も我實に治癰瘡師に非ず、是の如きの言も亦是如來祕密の教なり。迦葉、我先に說くが如し。若し善男子、善女人の能く身、口、意業を修治する有らん。捨命の時、親族有りて其の尸骸を取りて或は火を以て燒き、或は大水に投じ、或は塚間に棄て、狐狼禽獸競うて共に食噉すと雖も、然も心意識卽ち善道に生ず。而して是の心法、實は去來無く亦至る所無し。直ちに是前後相似相續して相貌異らず。是の如きの言、卽ち是如來祕密の教なり。

迦葉、我今病と云ふも亦復是の如し、亦是如來祕密の教なり。是の故に文殊師利に顧命す、「吾今背痛む、汝等當に四衆の爲に說法すべし」と。迦葉、如來正覺、實に病に右脇にして臥する有る無し。亦畢竟じて涅槃に入らず。迦葉、是の大涅槃は卽ち是諸佛の甚深禪定なり。是の如きの禪定は是聲聞、緣覺の行處に非ず。迦葉、汝上に問ふ所の如來、何が故ぞ倚臥して起たず、飯食を索め家屬を誡敕し、產業を修治せずとは、迦葉、虛空の性も亦坐起し、飲食を求索し、家屬を誡敕し、產業を修治する無し。亦去來、生滅老壯、出沒傷破、解脫繫縛無し。亦自說せず、亦他を說かず。亦自解せず、亦他を解せず。安に非ず、病に非ず。善男子、諸佛世尊も亦復是の如く、猶し虛空の如し。云何ぞ當に諸の病苦有る

べきや。

迦葉、世に三人の其の病治し難き有り。一つには大乘を謗り、二つには五逆罪、三つには一闡提なり。是の如きの三病は世の中の極重なり。悉く聲聞、緣覺の能く治する所に非ず。善男子、譬へば病有り、必死にして治すること無し、若は瞻病隨意の醫藥有り、若は瞻病隨意の醫藥無し。是の如きの病定んで治すべからず。當に知るべし、是の人必死疑無きが如し。是の三種の人も亦復是の如し。若聲聞、緣覺、菩薩有りて、或は說法する有り、或は說法せず。其をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむること能はず。迦葉、譬へば病人の若瞻病隨意の醫藥有らば、則ち差えしむべし。若此の三無ければ則ち差ゆべからざるが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。佛菩薩に從ひて聞法を得已りて、卽便能く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。法を聞かずして能く心を發すに非ざるなり。迦葉、譬へば病人の、若は瞻病隨意の醫藥有り、若は瞻病隨意の醫藥無し。皆悉く差ゆべきが如し。一種の人も亦復是の如くなる有り。或は聲聞に値ひ聲聞に値はず。或は緣覺に値ひ緣覺に値はず。或は菩薩に値ひ菩薩に値はず。或は如來に値ひ如來に値はず。或は聞法を得聞法を得ず。自然に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。所謂有人は或は自身の爲に、或は他身の爲に、或は怖畏の爲に、或は利養の爲に、或は諛諂の爲に、或は誑他の爲に、是の如きの大涅槃經を書寫して受持、讀誦し、供養、恭敬し、他の爲に說く者なり。

迦葉、五種の人有りて是の大乘大涅槃典に於て有病行處は如來に非ざるなり。何等をか

【三結】三種の煩惱。見結、戒取結、疑結を云ふ。

【麒麟獨一の行】緣覺即ち辟支佛の行を云ふ。

五つと爲す。一つには三結を斷じて須陀洹果を得、地獄、畜生、餓鬼に墮せず、人天に七反して永く諸苦を斷じて涅槃に入る。迦葉、是を第一の有病行處と名く。是の人未來八萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第二人は三結を斷じ、貪、恚、癡を薄うして斯陀含果を得、一往來して永く諸苦を斷じて涅槃に入る。迦葉、是を第二の有病行處と名く。是の人未來六萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第三人は五下結を斷じて阿那含果を得、更に此に來らずして永く諸苦を斷じて涅槃に入る。是を第三の有病行處と名く。是の人未來四萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第四人は永く貪欲、瞋恚、愚癡を斷じて阿羅漢果を得、煩惱餘無くして涅槃に入る。亦麒麟獨一の行に非ず。是を第四人有病行處と名く。是の人二萬劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、第五人は永く貪欲、瞋恚、愚癡を斷じて辟支佛道を得、煩惱餘無くして涅槃に入る。眞に是麒麟獨一の行なり。是を第五人有病行處と名く。是の人未來十千劫を過ぎて便ち當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。迦葉、是を第五人有病行處と名く、如來に非ざるなり。(二)

【聖行品上】此品は涅槃五行の中第二に聖行を明すの章なり。
【一】初に總じて五行を擧げ、次に聖行を開説す。

大般涅槃經　巻第十一

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

聖行品第十九之上

（一）爾の時に佛、迦葉菩薩に告げたまはく、「善男子、菩薩摩訶薩應當に是の大般涅槃經に於て、專心に五種の行を思惟すべし。何等をか五つと爲す。一つには聖行、二つには梵行、三つには天行、四つには嬰兒行、五つには病行なり。善男子、菩薩摩訶薩常に當に是の五種の行を修習すべし。復一行有り、是如來行なり、所謂大乘大涅槃經なり。迦葉、云何が菩薩摩訶薩所修の聖行なる。菩薩摩訶薩は若は聲聞に從ひ、若は如來に從ひて是の如きの大涅槃經を聞くことを得、聞き已りて信を生じ、信じ已りて是の如きの思惟を作すべし、「諸佛世尊には無上道有り、大正法、大衆正行有り、復方等大乘經典有り。我今當に大乘經を愛樂し貪求するが爲の故に、所愛の妻子眷屬、所居の舍宅、金銀珍寶、微妙の瓔珞、香華妓樂、奴婢給使、男女大小、象馬車乘、牛羊鷄犬、猪豕の屬を捨離すべし。」復是の念を作さく「居家逼迫猶し牢獄の如し、一切の煩惱之に由りて生ず。出家閑曠猶し虛空の如し、一切の善法之に因りて增長す。若家居在らば盡壽淨く梵行を修することを得ず。

【三法衣】略して三衣とも云ふ。三種の袈裟なり。一に僧伽梨。(サンガーティ Saṃghāṭi)衆聚時衣と譯す。二に欝多羅僧(ウッタラーサンガ Uttarāsaṅga)上衣と譯す。三に安陀會(アンタルヴーサカ Antarvāsa-ka)中着衣と譯す。

我今應當に鬚髮を剃除し出家して道を學すべし。」復是の念を作さく、「我今定んで當に出家して無上正眞菩提の道を修學すべし。菩薩是の如く出家せんと欲する時、天魔波旬大苦惱を生じて、是の菩薩復當に我と大戰爭を興すべし。善男子、是の如きの菩薩、云何が當に復人と戰爭すべき。」是の時菩薩即ち僧坊に至り、若は如來及び佛弟子の、威儀具足し、諸根寂靜、其の心柔和にして清淨寂滅なるを見、即ち其の所に至りて出家を求め、鬚髮を剃除して三法衣を服す。既に出家し已りて、禁戒を奉持して威儀缺けず。進止安庠にして觸犯する所無く、乃至小罪に心怖畏を生じ、護戒の心猶し金剛の如し。

善男子、譬へば人有りて浮囊を帶持して大海を度らんと欲す。爾の時に海中に一つの羅刹有り。即ち此の人に從ひて浮囊を乞索す。其の人聞き已りて即ち是の念を作さく、「我今若與へば必定沒死せん。」答へて言はく、「羅刹、汝寧ろ我を殺すとも浮囊は得叵し。」羅刹復言はく、「汝若全く我に與ふること能はずば、其の半を惠まれよ。」是の人猶故ほ之を與へず。羅刹復言はく、「汝若我に半を惠むこと能はずば、幸願はくば我に三分の一を與へよ。」是の人肯ぜず。羅刹復言はく、「若能はずば、我に手許を施せ。」是の人肯ぜず、羅刹復言はく、「汝今若復我に手許の如きを與ふること能はずば、我今饑窮衆苦に逼られん。願はくば當に我に微塵許の如きを濟すべし。」是の人復、「汝今索むる所誠に復多からず。然るに我今日方に當に海を度るべきに、前途近遠云何を知らず。若汝に與ふれば氣當に漸く出づべし。大海の難何に由りてか過ぐることを得ん。脫し能せば中路水に沒して死せん」と言

【四禁】四波羅夷罪なり。
【僧殘】十三僧殘法を云ふ。

ふが如し。

善男子、菩薩の禁戒を護持するも亦復是の如し、彼の度人の浮嚢を護り惜むが如し。菩薩是の如く戒を守護する時、常に煩惱諸惡の羅刹有りて、菩薩に語りて言はく「汝當に我を信ずべし、終に相欺かず。但四禁を破して餘戒を護持せよ。是の因緣を以て、汝をして安隱にして涅槃に入ることを得しむ。」菩薩、爾の時に是の言を作すべし「我今寧ろ是の如きの禁戒を持ちて阿鼻獄に墮すとも、終に毀犯して天上に生ぜじ。」煩惱の羅刹復是の言を作さく「汝若四禁を破すること能はずば、僧殘を破すべし。是の因緣を以て、汝をして安隱に涅槃に入ることを得しむ」と。菩薩も亦其の語に隨はざるべし。羅刹復言はく「汝若僧殘を犯すこと能はずば、亦故らに偸蘭遮罪を犯すべし。是の因緣を以て汝をして安隱に涅槃に入ることを得しむ」と。菩薩、爾の時に亦復隨はず。羅刹復言はく「汝若、偸蘭遮を犯すこと能はずば捨墮を犯すべし。是の因緣を以て安隱に涅槃に入ることを得べし」と。菩薩、爾の時に亦復隨はず。羅刹復言はく「汝若捨墮を犯すこと能はずば、波夜提を破すべし。是の因緣を以て汝をして安隱に涅槃に入ることを得しむ。」菩薩、爾の時に亦復隨はず。羅刹復言はく「汝若、波夜提を犯すこと能はずば、幸はくば突吉羅戒を毀破すべし。是の因緣を以て安隱に涅槃に入ることを得べし」と。菩薩、爾の時に心に自ら念言すらく、「我今、若突吉羅罪を犯して發露せずば、則ち生死の彼岸に度りて涅槃を得ること能はざるが如し。菩薩摩訶薩、是の微小の諸戒律の中に於て護持堅固にして心金剛の如し。菩薩

【白四羯磨】受戒の儀式。受戒の際僧衆に向つて先づその事由を告白するを白と云ひ、次に三度その可否を問ひて其事を決するを三羯磨と云ふ。この一白と三羯磨とを合して白四羯磨といふ。

【共命】鳥の名、ジーヴンジーヴカ(Jivañjivaka)生生と譯す。

【拘枳羅】鳥の名コーキラ(Kokila)好眼鳥と譯す。

【五辛葷物】五種の辛き野菜。蒜、葱、興渠、韮、薤の五種。

摩訶薩の四重禁及び突吉羅を持する、敬重堅固等しうして差別無し。菩薩、若能く是の如く堅持すれば、則ち五支の諸戒を具足すと爲す。所謂菩薩根本業淸淨戒、前後眷屬餘淸淨戒、非諸惡覺覺淸淨戒、護持正念念淸淨戒、回向阿耨多羅三藐三菩提戒を具足す。

迦葉、是の菩薩摩訶薩に復二種の戒有り。一つには受世敎戒、二つには得正法戒なり。菩薩若正法戒を得ば終に惡を爲さず。受世戒とは白四羯磨して然して後乃ち得。復次に善男子、二種の戒有り。一つには性重戒、二つには息世譏嫌戒なり。性重戒とは四禁を謂ふなり。息世譏嫌戒とは販賣するに輕稱小斗人を欺誑し、他の形勢に因りて人の財物を取り、害心をもつて繫縛し、成功を破壞し、明を然して臥し、田宅種植し、家業肆に坐るを作さず。象馬、車乘、牛羊、駝驢、鷄犬、獼猴、孔雀、鸚鵡、共命及び拘枳羅、豺狼、貓狸、豬家及び餘の惡獸、童男、童女、大男、大女、奴婢、僮僕、金銀、瑠璃、頗梨、眞珠、硨磲、碼碯、珊瑚、璧玉、珂貝の諸寶、赤銅、白鑞、鍮石の盂器、氍毹毾㲪の拘執耶衣、一切の穀米、大小麥豆、黍粟、稻麻、生熟の食具を畜へず。常に一食を受けて未だ曾て再食せず。若は行乞食及び僧中の食なり。常に止足を知りて別請を受けず。肉を食せず酒を飲まず。五辛葷物悉く之を食せず。是の故に其の身臭穢有ること無し。常に諸天一切世人に恭敬、供養、尊重、讃歎せられ、趣かに足りて食し、終に長じ受けず。受くる所の衣服纔かに身を覆ふに足る。進止常に三衣鉢と俱にして終に捨離せざること鳥の二翼の如し。根子、莖子、節子、接子、子子を畜へず。庫藏若は金、若は銀、飮食廚庫、衣裳服飾を畜へず。高廣の

【波羅塞】戯伎の名。西域の兵戯の法なりと云ふ。プラーサカ（Prāsaka）

大牀、象牙の金牀、雜色の編織、悉く坐臥せず、一切の細耎の諸席を畜へず。一切の象薦馬薦に坐せず、細耎上妙の衣裳を以て用ひて牀に敷きて臥せず。其の止息の牀に二枕を置かず。亦妙好の丹枕を受畜し黄木枕を安ぜず。終に象鬪、馬鬪、車鬪、兵鬪、若は男若は女、牛羊、鷄雉、鸚鵡等の鬪を觀視せず。亦故らに往いて軍陣を觀視せず。亦故らに吹貝、鼓角、琴瑟、箏笛、箜篌、歌叫妓樂の聲を聽かず。佛に供養するを除く。樗蒲、圍棊、波羅塞の戯、師子、象の鬪、彈棊、六簙、拍毱、擲石、投壺、牽道、八道行成、一切の戯笑悉く觀作せず。終に手足、面目を占相せず。爪鏡、蓍草、楊枝、鉢盂、髑髏を以て卜筮を作さず。亦虚空星宿を仰觀せず。睡を解かんと欲するを除く。王家の往反使命と作り、此を以て彼に語り、彼を以て此に語らず。終に諛諂、邪命自活せず。亦王臣、盜賊、鬪諍、飲食、國土、饑饉、恐怖、豐樂、安隱の事を宣説せず。善男子、是を菩薩摩訶薩の息世譏嫌戒と名く。善男子、菩薩摩訶薩堅く是の如きの遮制の戒を持つこと性重戒と等しうして差別無し。

善男子、菩薩摩訶薩、是の如きの諸の禁戒を受持し已りて、是の願を作して言さく、「寧ろ此の身を以て熾然たる猛火の深阬に投ずるとも、終に過去、未來、現在の諸佛所制の禁戒を毀犯して、刹利、婆羅門、居士等の女と不淨を行ぜじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく「寧ろ熱鐵を以て周帀して身に纒ふとも、終に敢て破戒の身を以て信心檀越の衣服を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく「寧ろ此の口を以て

熱鐵丸を呑むとも、終に敢て毀戒の口を以て信心檀越の飲食を食せじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ此の身大熱鐵の上に臥すとも、終に敢て破戒の身を以て信心檀越の牀臥敷具を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ此の身を以て三百の矛を受くとも、終に取て毀戒の身を以て信心檀越の醫藥を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ此の身を以て熱鐵の鑊に投ずるとも、終に敢て破戒の身を以て信心檀越の房舍屋宅を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ鐵椎を以て此の身を打碎し、頭より足に至りて微塵の如くならしむとも、破戒の身を以て諸の刹利、婆羅門、居士の恭敬、禮拜を受けじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ熱鐵を以て其の兩目を挑るとも、染心を以て他の好色を視じ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ鐵錐を以て周徧して耳を刺すとも、染心を以て好音聲を聽かじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ利刀を以て其の鼻を割去すとも、染心を以て諸香を貪嗅せじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ利刀を以て其の舌を割裂すとも、染心を以て美味に貪著せじ。」復次に善男子、菩薩摩訶薩復是の願を作さく、「寧ろ利斧を以て其の身を斬破すとも、染心を以て諸觸に貪著せじ。」何を以ての故に。是の因緣を以て、能く行者をして、地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。

迦葉、是を菩薩摩訶薩の護持禁戒と名く。

菩薩摩訶薩、是の如きの諸の禁戒を護持し已りて、悉く以て一切衆生に施與す。是の因

【不動地】菩薩修行の一階位にして十地中の第八位なり。

【二】聖行の名を釋す。

【七聖財】見道以後の聖者を七種に分ちその護持する精神的財寶に名けしものなり。

【七聖覺】又七覺支、七覺分とも云ふ。慧定を調べて聖道に至る修行を七種に分てるものなり。

縁を以て、願はくば衆生をして禁戒を護持して清淨戒、善戒、不缺戒、不析戒、大乘戒、不退戒、隨順戒、畢竟戒、具足成就波羅蜜戒を得しめん。

善男子、菩薩摩訶薩是の如く清淨戒を修持する時、即ち初不動地に住することを得。云何が名けて不動地と爲す。菩薩是の不動地の中に住すれば、不動、不墮、不退、不散なり。善男子、譬へば須彌山の、隨藍猛風の動かし墮落、退散せしむること能はざるが如し。菩薩摩訶薩の是の地中に住することも亦復是の如し。色、聲、香、味に動かされず。地獄、畜生、餓鬼に墮せず。聲聞、辟支佛地に退かず、異見、邪風に散ぜられて邪命を作さず。復次に善男子、又不動とは、貪欲、恚癡に動かされず。又不墮とは、四重に墮せず。又不退とは、戒を退して家に還らず。又不散とは、大乘經に違逆する者に散壞せられず。復次に菩薩摩訶薩も亦復諸の煩惱魔に傾動せられず。陰魔に墮せられず。乃至道場菩提樹下に坐する天魔有りと雖も、其をして阿耨多羅三藐三菩提を退かしむること能はず。亦復死魔に散ぜられず。善男子、是を菩薩聖行を修習すと名く。

(二)善男子、云何が名けて聖行と爲す。聖行とは、佛及び菩薩の行ずる所なるが故に聖行と名く。何等を以ての故に佛菩薩を名けて聖人と爲すや。是の如き等の人は聖法有るが故に、常に諸の法性空寂を觀ずるが故に。是の義を以ての故に、故に聖人と名く。聖戒有るが故に、故に聖人と名く。聖定慧有るが故に、故に聖人と名く。七聖財、所謂信、戒、慙、愧、多聞、智慧、捨、離有るが故に、故に聖人と名く。七聖覺有るが故に、故に聖人と名

く。是の義を以ての故に、復聖行と名く。復次に善男子、菩薩摩訶薩の聖行とは、是の身を觀察して頭より足に至る。其の中に唯髮毛、爪齒、不淨、垢穢、皮肉、筋骨、脾腎、心肺、肝膽、腸胃、生熟二臓、大小便利、涕唾、目涙、肪膏、腦膜、骨髓、膿血、腦胲、諸脈有り。菩薩是の如く念を專らにして觀ずる時、誰か是我有らん。我誰に屬すと爲ん。何の處にか住在し、誰か我に屬する。復是の念を作さく「骨是我なりや、骨を離れて是なるや。」菩薩、爾の時に皮肉を除去し、唯白骨を觀ず。復是の念を作さく「骨色相異なり、所謂青、黃、白色、鴿色なり。是の如く骨相も亦復我に非ず。何を以ての故に。我は亦青黃、白色、乃以鴿色に非ず。」菩薩心を繫けて是の觀を作す時、卽ち一切の色欲を斷除することを得。復是の念を作さく「是の如き骨は因緣より生ず。足骨に依因りて以て踝骨を拄へ、踝骨に依因りて以て膞骨を拄へ、膞骨に依因りて以て膝骨を拄へ、膝骨に依因りて以て髀骨を拄へ、髀骨に依因りて以て臗骨を拄へ、臗骨に依因りて以て腰骨を拄へ、腰骨に依因りて以て脊骨を拄へ、脊骨に依因りて以て肋骨を拄ふ。復脊骨に依因りて上項骨を拄へ、項骨に依因りて以て頷骨を拄へ、頷骨に依因りて以て牙齒を拄へ、上に髑髏有り。復項骨に依因りて以て肩骨を拄へ、肩骨に依因りて以て臂骨を拄へ、臂骨に依因りて以て腕骨を拄へ腕骨に依因りて以て掌骨を拄へ、掌骨に依因りて以て指骨を拄ふ。」菩薩摩訶薩、是の如く觀ずる時、身の有らゆる骨一切分離す。是の觀を得已りて卽ち三欲を斷ず。一つに形貌欲、二つに姿態欲、三つに細觸欲なり。

【三十六物】人身に三十六種の不淨物あるを云ふ。一に外相の十二。髮、毛、爪、齒、涙、涎、唾、屎、溺、垢、汗、二に身器の十二、皮、膚、血、肉、筋、脈、骨、髓、肪、膏、腦、膜、三に內含の十二、肝、膽、腸、胃、脾、腎、心、肺、生藏、熟藏、赤痰。

菩薩摩訶薩、青骨を觀ずる時此の大地東、西、南、北、四維、上、下、悉く皆青相を見る。青色觀の如く黃、白、鴿色も亦復是の如し。菩薩摩訶薩、是の觀を作す時、眉間卽ち青、黃、赤、白、鴿等の色を出す。菩薩是の一一の諸の光明の中に於て佛像有るを見る。見已りて卽ち問はく「此の身の如きは不淨の因緣和合して共成す。云何ぞ坐起、行住、屈伸、俯仰、視瞬、喘息、悲泣、喜笑を得ん。此の中に主無し、誰か之をして爾らしむ。」是の問を作し已るに、光中の諸佛忽然として現ぜず。復是の念を作さく「或は識是我、故に諸佛をして、我が爲に說かざらしむ。」復此の識を觀ずるに、次第生滅して猶し流水の如くなれば、亦復我に非ず。復是の念を作さく「此の出入息は直是風性なり。是の風性乃ち是四大なり。四大の中何者か是我なる。地性我に非ず。水、火、風性も亦復我に非ず。」復是の念を作さく「此の身一切悉く我有ること無し。唯心風因緣和合する有りて種種の所作、事業を示現す。譬へば呪力、幻術の所作の如く、亦箜篌の意に隨ひて聲を出すが如し。是の故に此の身是の如く不淨なり。諸の因緣を假りて和合して共成す。當に何れの處に於てか貪欲を生ずべき。若彼罵辱せば、復何れの處に於てか瞋恚を生ぜん。我が此の身三十六物不淨臭穢の如し。何れの處にか當に罵辱を受くる者有るべき。若其の罵を聞かば卽便思惟せよ。何の音聲を以て罵らるるや。一一の音聲罵らるること能はず。若一たび能はずば、衆多も亦爾なり。是の義を以ての故に瞋を生ずべからず。」若他より來りて打たば。亦思惟すべし。「是の如く打つ者何れよりして生ず。」復是の念を作さく「手、刀杖、及

一

【四念處】佛道修行者の行ずべき觀法なり。一身念處、二受念處、三心念處、四法念處。

【堪忍地】菩薩の修行の一階位にして十地中の初地なり。

【三】定行に就て問答す。

び我が身に因るが故に打と名くることを得。我今何によりてか橫に他に瞋らん。乃ち是我が身自ら此の咎を招く。我、是の五陰の身を受くるを以ての故なり。譬へば的に因りて則ち箭中ること有るが如し。我が身も亦爾なり、身有らば打有り。我若忍ばずば心即ち散亂せん。心若散亂せば則ち正念を失せん。若正念を失せば則ち善、不善の義を觀ずること能はじ。若善、不善の義を觀ずること能はずば、則ち惡法を行ぜん。惡法の因緣は則ち地獄、畜生、餓鬼に墮せん。」

菩薩、爾の時に是の觀を作し已りて四念處を得。四念處を得已れば、則ち堪忍地の中に住することを得。菩薩摩訶薩、是の地に住し已らば、則ち能く貪欲、恚癡を堪忍し、亦能く寒熱、饑渴、蚊蝱、蚤蝨、暴風、惡觸、種種の疾疫、惡口、罵詈、撾打、楚撻を堪忍す。身心の苦惱一切能く忍ぶ。是の故に名けて堪忍地に住すと爲す。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、菩薩未だ不動地に住することを得ず、淨く戒を持する時は、頗し因緣有りて戒を破することを得んや不や。』『善男子、菩薩未だ不動地に住することを得ずして、因緣有るが故に戒を破することを得べし。』

(三)迦葉の言さく『唯然なり、世尊、何者か是なるや。』佛、迦葉に告げたまはく『若菩薩有りて破戒の因緣を以て、則ち能く人をして大乘經典を受持し、愛樂せしめ、又能く其をして讀誦し、通利し、經卷を書寫し、廣く人の爲に說き、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしむるを知る。是の如きの爲の故に、故に戒を破ることを得。菩薩、爾の時に是の念を作

【四】慧行を釋す
初めに四諦慧を明す。

すべし、「我寧ろ一劫若は滅一劫阿鼻地獄に墮して此の罪報を受くとも、要ず是の人をして阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざらしめん。」迦葉、是の因緣を以て菩薩摩訶薩淨戒を毀つことを得。」

爾の時に文殊師利菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若菩薩有りて是の如きの人を攝取し護持して菩提の心を退轉せざらしむ。是が爲に戒を毀るに、若阿鼻地獄に墮せば是の處有ること無し。」爾の時に佛、文殊師利を讃じたまはく、「善い哉善い哉、汝が所說の如し。我念ずらく、「往昔閻浮提に於て大國王と作り、名を仙豫と曰ふ。大乘經典を愛念し敬重す。其の心純善にして麤惡、嫉妬、慳吝有ること無し。口常に愛語、善語を宣說し、身常に貧窮、孤獨を攝護す。布施、精進、休廢有ること無し。時に世に佛、聲聞、緣覺無し。我、爾の時に於て大乘方等經典を愛樂す。十二年の中婆羅門に事へて所須を供給し、十二年を過ぎて施安已に訖りて卽ち是の言を作さく、「師等今阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。」婆羅門の言はく、「大王、菩提の性是所有無く、大乘經典も亦復是の如し。大王、云何ぞ乃ち人をして虛空に同ぜしめんと欲する。」善男子、我爾の時に於て心大乘を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞く。聞き已りて卽時に其の命根を斷ず。善男子、是の因緣を以て是より已來地獄に墮せず。善男子、大乘經典を擁護し攝持する、乃ち是の如く無量の勢力有り。

(四)復次に迦葉、又聖行有り、所謂四聖諦、苦、集、滅、道なり。迦葉、苦とは逼迫の相、

【五】苦諦を明す
初に八苦を明す。

集とは能生長の相、滅とは寂滅の相、道とは大乘の相なり。復次に善男子、苦とは現相、集とは轉相、滅とは除相、道とは能除相なり。復次に善男子、苦とは三相有り。苦苦相、行苦相、壞苦相なり。集とは二十五有なり。滅とは二十五有を滅す。道とは戒、定、慧を修す。復次に善男子、有漏法とは二種有り、因有り果有り。無漏法とは亦二種有り、因有り果有り。有漏の果とは是則ち苦と名け、有漏の因とは則ち名けて集と爲す。無漏の果とは則ち名けて滅と爲し、無漏の因とは則ち名けて道と爲す。

復次に善男子、八相を苦と名く。所謂生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五盛陰苦なり。能く是の如きの八苦法を生ずる者、是を名けて集と爲す。是の如きの八苦有ること無きの處、是を名けて滅と爲す。十力、四無所畏、三念處、大悲、是を名けて道と爲す。

(五)善男子、生とは出相、所謂五種なり。一つには初出、二つには至終、三つには增長、四つには出胎、五つには種類生なり。

何等をか老と爲す。老に二種有り。一つには念念老、二つには終身老なり。復二種有り。一つには增長老、二つには滅壞老なり。是を名けて老と爲す。

云何が病と爲す。病は四大毒蛇互に調適せざるを謂ふ。亦二種有り。一つには身病、二つには心病なり。身病に五つあり。一つには因水、二つには因風、三つには因熱、四つには雜病、五つには客病なり。客病に四つ有り。一つには非分彊作、二つには忘誤墮落、三

【五陰身】五陰は又五蘊とも書く。色受想行識の五。心身の成素及び機能等を總括せるものなれば、吾人の心身を五陰身と云ふ。

つには刀杖瓦石、四つには鬼魅所著なり。心病にも亦四種有り。一つには踊躍、二つには恐怖、三つには憂愁、四つには愚癡なり。復次に善男子、身心の病に凡そ三種有り。何等をか三と爲す。一つには業報、二つには惡對を遠離することを得ず、三つには時節代謝なり。是の如き等の因緣、名字、受分別病を生ず。因緣とは風等の諸病なり。名字とは心悶肺脹、上氣嗽逆、心驚下痢なり。受分別とは頭痛、目痛、手足等の痛なり。是を名けて病と爲す。

何等をか死と爲す。死とは受くる所の身を捨つ。所受の身を捨つるに亦二種有り。一つには命盡死、二つには外緣死なり。命盡死とは亦三種有り。一つには命盡是福盡に非ず、二つには福盡是命盡に非ず、三つには福命倶盡なり。外緣死とは亦三種有り。一つには非分自害死、二つには横爲他死、三つには倶死なり。又三種の死有り。一つには放逸死、二つには破戒死、三つには壞命根死なり。何等をか名けて放逸死と爲す。若大乘方等般若波羅蜜を誹謗する有らば、是を放逸死と名く。何等をか名けて破戒死と爲す。去來現在の諸佛所制の禁戒を毀犯す、是を破戒死と爲す。何等をか名けて壞命根死と爲す。五陰身を捨つ、是を壞命根死と名く。是の如きを名けて死を大苦と爲すと曰ふ。

何等をか名けて愛別離苦と爲す。所愛の物は破壞離散す。所愛の物の破壞離散に亦二種有り。一つには人中の五陰壞、二つには天中の五陰壞なり。是の如きの人天所受の五陰、分別校計するに無量種有り。是を愛別離苦と名く。

何等をか名けて怨憎會苦と爲す。愛せざる所の者共に聚集す。所不愛の者の共に聚集するに三種有り。所謂地獄、餓鬼、畜生なり。是の如きの三趣、分別校計するに無量種有り。是の如きを則ち怨憎會苦と名く。

何等をか名けて求不得苦と爲す。求不得苦に亦二種有り。一つには所希望の處、求むるに得ること能はず。二つには多く功力を用ふるに果報を得ず。是の如きを則ち求不得苦と名く。

何等をか名けて五盛陰苦と爲す、五盛陰苦とは生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦なり。是の故に名けて五盛陰苦と爲す。

迦葉、生の根本は凡て是の如きの七種の苦有り。老苦、乃至五盛陰苦なり。迦葉、夫衰老は一切有に非ず。佛及び諸天は一向定んで無、人中は不定、或は有、或は無なり。迦葉三界受身生有らざる無く、老は必定ならず。是の故に一切生を根本と爲す。迦葉、世間の衆生顚倒して心を覆ふ。生相に貪著し、老死を厭患す。菩薩は爾らず。初生を觀じて已に過患を見る。

迦葉、女人有りて他舍に入る。是の女端正にして顏貌美麗なり。好瓔珞を以て其の身を莊嚴す。主人見已りて卽便問ひて言はく、「汝何等と字し誰に繫屬す。」女人答へて言さく、「我が身卽ち是功德大天なり。」主人問ひて言はく、「汝、所至の處何の所作と爲す。」女天答へて言さく、「我所至の處、能く種種の金、銀、瑠璃、頗梨、眞珠、珊瑚、琥珀、硨磲、碼

碯、象馬、車乘、奴婢、僕使を與ふ。」主人聞き已りて心歡喜を生じ、踊躍無量なり。「我今福德、故に汝をして我が舍宅に來至せしむ。」即便燒香、散華、供養し恭敬禮拜す。復、門外に於て更に一女を見る。其の形醜陋、衣裳弊壞、諸の垢膩多し。皮膚皴裂、其の色艾白なり。見已りて問ひて言はく、「汝何等と字し、誰に繫屬す。」女人答へて言さく、「我黑闇と字す。」復問ふ、「何が故ぞ名けて黑闇と爲す。」女人答へて言さく、「我、所行の處、能く其の家をして有らゆる財寶を一切衰耗せしむ。」主人聞き已りて即ち利刀を持ちて是の如きの言を作さく、「汝若去らざれば當に汝が命を斷つべし。」女人答へて言さく、「汝甚だ愚癡にして智慧有ること無し。」主人問ひて言はく、「何が故ぞ我を癡にして智慧無しと名く。」女人答へて言さく、「汝が家中の者即ち是我が姉、我常に姉と進止共俱なり。汝若我を驅らば亦當に彼を驅るべし。」主人還り入りて功德天に問はく、「外に一女有りて是汝の妹と云ふ、實に是と爲すや不や。」功德天の言はく、「實に是我が妹、我此の妹と行住共俱なり、未だ曾て相離れず。所住の處に隨ひて我常に好を作し、彼常に惡を作す。我利益を作し、彼衰損を作す。若我を愛せば亦彼をも愛すべし。若恭敬せらるれば亦彼をも敬すべし。」主人即ち言はく、「若是の如き好惡の事有らば我皆用ひじ、各意に隨ひて去れ。」是の時に二女便ち共に相將ゐて其の所止に還る。爾の時に主人、其の還去を見て心に歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。是の時二女復共に相隨ひて一つの貧家に至る。貧人見已りて心に歡喜を生じ、即ち之を請じて言はく、「今より已往、願はくば汝二人常に我が家に住せよ。」功德天の言は

く、「我等先に已に他に驅せらる。汝復何に緣りてか俱に我が住を請ず。」貧人答へて、「汝今我を念ず、我汝を以ての故に復當に彼を敬すべし。是の故に俱に請じて我が家に住せしめん。」と言はんが如し。迦葉、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。天に生ずることを願はず、生當に老、病、死有るべきを以ての故に。是を以て俱に棄てて曾て受心無し。凡夫愚人は老、病、死等の過患を知らず。是の故に生死に二法を貪受す。

復次に迦葉、婆羅門の幼稚の童子饑に逼られ、人糞の中に菴羅果有るを見て卽便之を取る。有智見已りて之を訶責して言はく、「汝婆羅門、種姓清淨にして何が故に是の糞中の穢果を取る。」童子聞き已りて赧然として愧づること有り。卽ち之に答へて言はく、「我實は食せず。洗淨して還つて之を棄捨せんと欲するが爲なり。」智者語りて、「汝大に愚癡なり。若還つて棄つれば本取るべからず」と言はんが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。此の生分に於て不受不捨、彼の智者の童子を訶責するが如し。凡夫の人の生を欣ひ死を惡むは、彼の童子の果を取りて還つて棄つるが如し。

復次に迦葉、譬へば人有りて四衢道頭に器に食を盛滿し、色香味具はる、而して之を賣らんと欲す。人有り遠く來りて饑虛羸乏す。其の飯食の色香味の具はるを見、卽ち指し問ひて言はく、「此は是何物ぞ。」食主答へて言はく、「此は是上食、色香味具はる。若此の食を食すれば色を得力を得、能く饑渴を除き諸天を見ることを得ん。唯一つの患有り、所謂命終なり。」是の人聞き已りて卽ち是の念を作さく、「我今色力天を見るを用ひじ、亦死を用ひ

じ。」卽ち是の言を作さく「是の食を食し已りて若命終せば、汝今何爲ぞ此に於て之を賣る。」食主答へて「有智の人は終に肎て買はず。唯愚人有りて是の事を知らず。多く我に價を與へ、貪りて之を食す」と言はんが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復斯の如し。天に生じ、色を得力を得、諸天を見るを願はず。何を以ての故に。其の諸の苦惱を免れざるを以ての故に。凡夫愚癡は生處有るに隨ひて皆悉く貪受す。其の老病死を見ざるを以ての故なり。

復次に迦葉、譬へば毒樹の根能く人を殺し、枝幹、莖節、皮葉、華實悉く亦能く殺すが如し。善男子、二十五有受生の處、受くる所の五陰も亦復是の如し、一切能く殺す。

復次に迦葉、譬へば糞穢の多小倶に臭きが如し。善男子、生も亦是の如し。設ひ八萬を受け下十年に至るも、倶に亦苦を受く。

復次に迦葉、譬へば險岸の上に草履有りて、彼の岸邊に於て多く甘露有らん。若食する者有らば壽命千年、永く諸病を除き、安隱快樂ならん。凡夫愚人其の味を貪るが故に、其の下に大深坑有るを知らず。卽ち前んで取らんと欲し、覺えず脚跌し坑に墮ちて死せんも、智者は知り已り、捨離して遠く去るが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。尚天上の妙食を受くることを欲せず、況や復人中をや。凡夫の人は乃ち地獄に於て鐵丸を呑噉す、況や復人天上妙の餚饌、能く食せざらんや。迦葉、是の如きの譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、是の生實に大苦爲ることを。迦葉、是を菩薩、大乘大涅槃經に住

して生苦を觀ずと名く。

迦葉、云何が菩薩是の大乘大涅槃經に於て老苦を觀ず。老とは能く嗽逆上氣を爲す。能く勇力、憶念、進持、盛年、快樂、憍慢、貢高、安隱、自恣を壞し、能く背僂、懈怠、嬾惰を作し、他に輕んぜらる。迦葉、譬へば池水に、蓮華中に滿ちて開敷鮮榮甚だ愛樂すべきに天の雹を降すに値はば悉く皆破壞するが如し。善男子。老も亦是の如し。悉く能く盛壯好色を破壞す。復次に迦葉、譬へば國王の一りの智臣有りて善く兵法を知らんに、敵國王の拒逆して順はざる有り。王、此の臣を遣して往いて之を討伐せしめ、卽便擒獲し、將ひ來りて王に詣るが如し。老も亦是の如し、壯色を擒獲して將ゐて死王に付す。復次に迦葉、譬へば折軸の復用ふる所無きが如し、老も亦是の如し、復用ふる所無し。復次に迦葉、大富家、多く財寶、金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、碼碯有らんに、諸の怨賊有りて、若其の家に入らば、卽ち能く劫奪して悉く空盡せしむるが如し。善男子、盛年好色も亦復是の如し、常に老賊に劫奪せらる。復次に迦葉、譬へば貧人の上膳、細㲲の衣裳に貪著して、復希望すと雖も、而も得ること能はざるが如し。善男子、老も亦是の如し。貪心の富樂を受け、五欲自恣せんと欲する有りと雖も、而も得ること能はじ。復次に迦葉、陸地の龜、心常に水を念ずるが如し。善男子、人も亦是の如し。既に衰老に乾枯せられて、心常に壯時受くる所の五欲の樂を憶念す。復次に迦葉、猶し秋月の有らゆる蓮華、皆一切に樂見せられ、其の萎黃に及びて人に惡賤せらるるが如し。善男子、盛年壯色も亦復是の如し。

悉く一切に愛樂せられ、其の老至に及びて衆に惡賤せらる。復次に迦葉、譬へば甘蔗の既に壓せられ已らば滓復味無きが如し。壯年盛色も亦復是の如し、既に老の壓を被れば三種の味爲し。一つには出家味、二つには讀誦味、三つには坐禪味なり。復次に迦葉、譬へば滿月の夜に光明多く、晝は則ち爾らざるが如し。善男子、人も亦是の如し。壯は則ち端嚴、形貌瓌偉、老は則ち衰羸、形神枯悴す。復次に迦葉、譬へば王有りて常に正法を以て國を治め民を理む。直實にして曲ること無く、慈憫にして施を好む、時に敵國に破壞せられて流離逃迸し、遠く他土に至る。他土の人民見て之を憫み、咸く是の言を作さく、「大王、往日正法國を治めて萬姓を枉げず。如何ぞ一旦流離して此に至る」といはんが如し。善男子、人も亦是の如し、既に衰老に壞敗せられ已らば、常に壯時所行の事業を讃ず。復次に迦葉、譬へば燈炷の唯膏油に賴り、膏油既に盡くれば勢久しく停まらざるが如し。善男子、人も亦是の如し、唯壯膏に賴る。壯膏既に盡くれば衰老の炷何ぞ久しく停まることを得ん。復次に迦葉、譬へば枯河の人及び非人、飛鳥、走獸を利益すること能はざるが如し。善男子、人も亦是の如し。老に枯れられて一切の作業を利益すること能はず。復次に迦葉、譬へば河岸臨險の樹の、若し暴風に遇はば必ず當に顚墜すべきが如し。善男子、人も亦是の如し、老の險岸に臨みて、死風既に至れば勢住まることを得ず。復次に迦葉、車軸折れて重載に任へざるが如し、善男子、老も亦是の如し、一切の善法を咨受すること能はず。復次に迦葉、譬へば嬰兒の人に輕んぜらるるが如し。善男子、老も亦是の如し、常に一切に輕

毀せらる。迦葉、是等の譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、是の老は實に大苦爲ることを。迦葉、是を菩薩の大乘大涅槃經を修行して老苦を觀ずと名く。

迦葉、云何が菩薩摩訶薩の、大乘大涅槃經を修行して病苦を觀ずる。所謂病とは能く一切の安隱樂事を壞す。譬へば雹雨の穀苗を傷壞するが如し。復次に迦葉、人怨有らば、心常に憂愁して恐怖を懷くが如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し。常に病苦を畏れ心に憂慼を懷く。復次に迦葉、譬へば人有りて形貌端正なり。王の夫人に欲心より愛せられ、信を遣し逼り呼んで與共に交通す。時に王、收め得て其の一目を挑り、其の一耳を截り、一手足を斷つ。是の人爾の時に形容改異し、人に惡賤せらるるが如し。善男子、人も亦是の如し。先に端嚴の耳目具足すと雖も、既に病苦に纒逼せられ已らば、則ち衆人に惡賤せらる。復次に迦葉、譬へば芭蕉、竹葦及び騾の子有るときは則ち死するが如し。善男子、人も亦是の如し。病有らば則ち死す。復次に迦葉、轉輪王は主兵、大臣常に前に在りて導き、王後に隨ひて行くが如く、亦魚王、螘王、螺王、牛王、商主前に在りて行く時、是の如きの諸衆悉く皆隨從して捨離する者無きが如し。善男子、死轉輪王も亦復是の如し、常に病臣に隨ひて相捨離せず、魚螘、螺牛、商主の病王も亦復是の如し、常に死衆に隨逐せらる。迦葉、病因緣とは所謂苦惱、愁憂、悲歎、身心不安なり。或は怨賊に逼害せられ、浮囊を破壞し橋梁を發撤し、亦能く正命根本を劫奪す。復能く盛壯好色、力勢安樂、除捨慙愧を破壞し、能く身心の焦熱燋然の爲に是等の譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に

知るべし、病苦是大苦爲ることを。迦葉、是の菩薩摩訶薩、大乘大涅槃經を修行して病苦を觀ずと名く。

迦葉、云何が菩薩、大乘大涅槃經を修行して死苦を觀ずる。所謂死とは能く燒滅するが故に。迦葉、火災起りて能く一切を燒き、唯二禪を除くの力至らざるが故の如し。善男子、死火も亦爾なり、能く一切を燒く。唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く、勢及ばざるが故なり。復次に迦葉、水災起れば一切漂沒す、唯三禪を除くの力至らざるが故の如し。善男子、死水も亦爾なり、一切を漂沒す。唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く。

復次に迦葉、風災起れば能く一切を吹きて悉く散滅せしめ、唯四禪を除くの力至らざるが故の如し。善男子、死風も亦爾なり。悉く能く一切所有を吹滅す、唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く。』迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、彼の第四禪は何の因緣を以て、風吹くこと能はず、水漂はすこと能はず、火燒くこと能はざる。』佛、迦葉に告げたまはく、『善男子、彼の第四禪は內外の過患一切無きが故なり。善男子、初禪は過患、內に覺觀有り外に火災有り。二禪は過患、內に歡喜有り外に水災有り。三禪は過患、內に喘息有り外に風災有り。善男子、彼の第四禪は內外の過患一切、悉く無し。是の故に諸災之に及ぶこと能はず。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し、大乘大般涅槃に安住して內外の過患一切皆盡く。是の故に死王之に及ぶこと能はず。復次に善男子、金翅鳥は一切の龍魚、金銀等の寶を能く啖ひ能く消し、唯金剛の消せしむること能はざるを除くが如し。善男子、死金

翅鳥も亦復是の如し。一切衆生を能く啖ひ能く消し、唯大乘大般涅槃に住する菩薩摩訶薩を消すこと能はず。復次に迦葉、譬へば河岸の有らゆる草木、大水暴長すれば悉く隨つて漂流して大海に入る。唯楊柳を除く、其の耎を以ての故の如し。善男子、一切衆生も亦復是の如し、悉く皆隨流して死海に入る。唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く。復次に迦葉、那羅延の悉く能く一切の力士を摧伏し、唯大風を除く。何を以ての故に。無礙を以ての故の如し。善男子、死那羅延も亦復是の如し、悉く能く一切衆生を摧伏し、唯菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く。何を以ての故に。無礙を以ての故なり。復次に迦葉、譬へば人有りて怨憎の中に於て詐りて親善を現じ、常に相追逐すること影の形に隨ふが如く、其の便を伺ひ求めて之を殺さんと欲す。彼の怨謹愼堅牢にして自ら備ふ。故に是の人をして殺すことを得ること能はざらしむるが如し。善男子、死怨も亦爾なり。常に衆生を伺ひて之を殺さんと欲し、唯大乘大般涅槃に住する菩薩摩訶薩を殺すこと能はず。何を以ての故に。是の菩薩放逸せざるを以ての故なり。復次に迦葉、譬へば卒に金剛の暴雨を降さんに、悉く藥木、諸樹、山林、土砂、瓦石、金銀、瑠璃、一切の物を壞し唯金剛眞寶を壞すること能はざるが如し。善男子、金剛死雨も亦復是の如し。悉く能く一切衆生を破壞し、唯金剛菩薩の大乘大般涅槃に住するを除く。復次に迦葉、金翅鳥の能く諸龍を啖ひ、唯三歸を受くる者を啖ふこと能はざるが如し。善男子、死金翅鳥も亦復是の如し。能く一切無量の衆生を啖ひ、唯菩薩の三定に住する者を除く。何をか三定と謂ふ。空無相願なり。復

【磨羅毒蛇】摩羅は障礙破壞等の意にして毒蛇はその一種なり。
【阿竭陀】アガスティ(Agasti)星の名。

次に迦葉、摩羅毒蛇の、凡そ螫す所有らば良呪、上妙の好藥有りと雖も、之を如何ともすること無く、唯阿竭陀星呪の能く除愈せしむるが如し。善男子、死毒に螫さるるも亦復是の如し。一切醫方之を如何ともすること無く、唯菩薩の大乘大涅槃呪に住するを除く。復次に迦葉、譬へば人有りて王に瞋られ、其の人若能く耎善の語を以て財寶を貢上せば、便ち脫することを得べきが如し。善男子、死王は爾らず。耎語を以て錢財、珍寶、之を貢上すと雖も亦脫することを得ず。

善男子、夫死とは險難處に於て資糧有ること無し。去處懸遠にして伴侶無く、晝夜常に行いて邊際を知らず。深邃幽闇にして燈明有ること無く、入るに門戶無くして而も處所有り。痛處無しと雖も療治すべからず。往くに遮止する無く、到るに脫することを得ず。破壞する所無けれども見る者愁毒す。是惡色に非ざれども、而も人をして怖れしむ。身邊に敷在すれども、覺知すべからず。迦葉、是等の譬及び餘の無量無邊の譬喩を以て、當に知るべし、生死は眞に大苦爲るを。迦葉、是を菩薩の大乘大涅槃經を修行して死苦を觀ずと名く。

迦葉、云何が菩薩、大乘大涅槃經に住して愛別離苦を觀ずる。愛別離苦は能く一切衆苦の根本爲ること說の如し、

愛に因りて憂を生じ、愛に因りて畏を生ず
若貪愛を離るれば、何ぞ憂ひ何ぞ畏れんと

愛因縁の故に則ち憂苦を生ず。憂苦を以ての故に則ち衆生をして衰老を生ぜしむ。愛別離苦は所謂命終なり。善男子、別離を以ての故に能く種種の微細の諸苦を生ず。今當に汝の爲に分別顯示すべし。

善男子、過去の世人壽無量なりき。時に世に王有りて名を善住と曰ふ。其の王、爾の時に童子の身と爲り、太子にして事を治し、及び王位に登り、各八萬四千歲なり。時に王の頂上に一つの肉皰を生ず。其の皰柔耎にして、兜羅綿、細耎の劫貝の如し。漸漸增長し、以て患と爲さず。十月を足滿して皰即ち開剖して一りの童子を生ず。其の形端正にして奇異少雙なり。色像分明にして人中の第一なり。父王歡喜し字けて頂生と曰ふ。時に善住王、即ち國事を以て頂生に委付し、宮殿、妻子、眷屬を棄捨し、山に入りて道を學し八萬四千歲を滿ず。爾の時に頂生、十五日に於て高樓に處在し、沐浴して齋を受く。即ち東方に於て金輪寶有り、其の輪千輻、轂輞具足す。工匠に由らず、自然に成就し、來りて之に應ず。頂生大王即ち是の念を作さく、「我昔曾て五通仙の說を聞く。若し刹利王十五日に於て高樓に處在して沐浴受齋せんに、若金輪の千輻減ぜず、轂輞具足し、工匠に由らずして自然に成就し、來り應ずる有らば、當に知るべし、是の王、即ち當に轉輪聖帝と作ることを得べし」と。復是の念を作さく、「我今當に試むべし。」即ち左手を以て此の輪寶を擎げ、右に香爐を執り、右膝を地に著け、發誓して言さく、「是の金輪寶、若實にして虛ならざれば、應に過去の轉輪聖王の所行道法の如くなるべし。」此の誓を作し已るに、是の金輪寶虛空に飛

【兜羅綿】ツーラ(Tūla)綿の名。
【劫貝】カルパーサ(Karpāsa)時分樹と譯す。白氎の名に用ふ。即ち劫貝樹の絮を以て織りしもの。

升し、十方に徧うし已り、還り來りて頂生の左手に住在す。爾の時に頂生、心に歡喜を生じ、踊躍すること無量なり。復是の言を作さく「我今定んで轉輪聖王と作らん。」其の後久しからずして復象寶有り。狀貌端嚴なる白蓮華の如く、七支字を拄ふ。頂生見已りて復是の念を作さく「我昔曾て五通仙の說を聞く。若轉輪王十五日に於て高樓に處在して沐浴受齋せんに、若し象寶の狀貌端嚴なる白蓮華の如く、七支地に拄ふる、來り應ずる有らば、當に知るべし、是の王は卽ち是聖帝なり」と。復是の念を作さく「我今當に試むべし。」卽ち香爐を擎げ、右膝を地に著け發誓して言はく「是の白象寶若實にして虛ならざれば、應に過去の轉輪聖王の所行道法の如くなるべし。」是の誓を作し已るに、是の白象寶旦より夕に至り、八方に周徧して大海際を盡し還つて本處に住す。爾の時に頂生心大に歡喜し、踊躍すること無量なり。復是の言を作さく「我今定んで是轉輪聖王なり。」其の後久しからずして次に馬寶有り、其の色紺豔、髦尾金色なり。頂生見已りて復是の念を作さく、「我昔曾て五通仙の說を聞く。若轉輪王、十五日に於て高樓に處在して沐浴受齋せんに、若馬寶の其の色紺豔、髦尾金色なる、來り應ずる有らば、當に知るべし、是の王は卽ち是聖帝なり」と。復是の念を作さく「我今當に試むべし。」卽ち香爐を執り、右膝を地に著け發誓して言はく「此の紺馬寶、若實にして虛ならざれば、應に過去の轉輪聖王の所行道法の如くなるべし。」是の誓を作し已るに、是の紺馬寶、旦より夕に至りて八方に周徧し、大海際を盡して還つて本處に住す。爾の時に頂生心大に歡喜し、踊躍すること無量な

り。復是の言を作さく、「我今定んで是轉輪聖王なり。」其の後久しからずして復女寶有り。形容端正微妙第一なり。不長、不短、不白、不黑なり。身の諸毛孔旃檀香を出し、口氣香潔青蓮華の如く、其の目遠く視ること一由旬を見、耳聞鼻嗅も亦復是の如し。其の舌廣大出せば能く面を覆ひ、形色細薄赤銅葉の如し。心識聰哲大智慧有り、諸の衆生に於て常に軟語有り、是の女手を以て王の衣に觸る時、卽ち王身の安樂病患を知り、亦王心所緣の處を知る。

爾の時に頂生復是の念を作さく、「若女人の能く王心を知る有らば、卽ち是女寶なり。」其の後久しからずして、王宮の內に於て自然に寶摩尼珠有り。純青の瑠璃にして大さ車轂の如く、能く闇中に於て一由旬を照す。若天雨を降し滴車軸の如くならん。是の珠の勢力能く大蓋と作りて一由旬を覆ふ。此の大雨を遮りて下過せしめず。爾の時に頂生復是の念を作さく、「若轉輪王、是の寶珠を得ば必ず是聖帝なり」と。其の後久しからずして主藏臣有り、自然にして出づ。財寶多饒にして巨富無量なり。庫藏盈溢し乏少する所無し。報得の眼根、力能く一切地中の有らゆる伏藏を徹見す。王の所念に隨ひて皆能く之を辦ず。爾の時に頂生復之を試みんと欲し、卽ち共に船に乘りて大海に入り、藏臣に告げて言はく、「我今珍異の寶を得んと欲す。」藏臣聞き已りて卽ち兩手を以て大海の水を撓む。時に十指頭十寶藏を出し、以て聖王に奉りて王に白して言はく、「大王の須ふる所意に隨ひて之を用ふ。其の餘の在者當に大海に投ずべし。」爾の時に頂生心大に歡喜し踊躍すること無量なり。

復作念して言はく、「我今定んで是轉輪聖王ならん。」其の後久しからずして主兵臣有り、自然にして出づ。勇健猛略策謀第一なり、善く四兵を知る。若し闘に任ふる者は則ち聖王を現じ、若し任へざる者は退きて現ぜしめず。未だ摧伏せざる者は能く摧伏せしめ、已に摧伏する者は力能く守護す。

爾の時に頂生復是の念を作さく、「若し轉輪王是の兵寶を得ば、當に知るべし、定んで是轉輪聖王ならん。」爾の時に頂生轉輪聖帝、諸の大臣に告ぐ、「汝等當に知るべし、此の閻浮提は安隱豐樂なり。我今已に七寶成就し、千子具足する有り、更に何の爲す所ぞ。」諸臣答へて言さく、「唯然なり大王、東弗婆提は猶未だ德に歸せず。王今往くべし。」爾の時に聖王、卽ち七寶の一切の營從と空を飛びて東弗婆提に往く。彼の土の人民歡喜して化に歸す。復大臣に告ぐ、「我が閻浮提及び弗婆提、安隱豐樂、人民熾盛なり。悉く來りて化に歸し、七寶成就し千子具足す、復何の爲す所ぞ。」諸臣答へて言さく、「唯然なり大王、西瞿陀尼は猶未だ德に歸せず。」爾の時に聖王、復七寶の一切の營從と空を飛びて西瞿陀尼に往く。王既に彼に至れば、彼の土の人民も亦復歸伏す。復大臣に告ぐ、「我が閻浮提及び弗婆提、此の瞿陀尼は安隱豐樂、人民熾盛なり。咸く已に化に歸し、七寶成就し千子具足す、復何の爲す所ぞ。」諸臣答へて言さく、「唯然なり大王、北鬱單越は猶未だ化に歸せず。」爾の時に聖王、復七寶の一切營從と空を飛びて北鬱單越に往く。王既に彼に至れば、彼の土の人民歡喜して德に歸す。復大臣に告ぐ、「我が四天下は安隱豐樂、人民熾盛なり。咸く已に德に歸

【東弗婆提】須彌四大洲の一。東勝身洲なり。

【西瞿陀尼】須彌四洲の一、西牛貨洲なり。

【北欝單越】須彌四洲の一。北倶盧洲なり。

【波利質多羅】パリチトラ（Parictra）香遍樹又は天樹王と譯す。忉利天上に存する樹の名。

し、七寶成就し千子具足す、更に何の爲す所ぞ。」諸臣答へて言さく、「唯然なり聖王、三十三天壽命極めて長く、安隱快樂なり。彼の天身形端嚴比無し。所居の宮殿、牀榻、臥具悉く七寶なり。自ら天福を恃み、未だ來りて化に歸せず。今往き討ちて其をして摧伏せしむべし。」爾の時に聖王、復七寶の一切の營從と虛空を飛騰して忉利天に上り、一樹有るを見る、其の色青綠なり。聖王見已りて卽ち大臣に問はく、「此は是何の色ぞ。」大臣答へて言さく、「此は是波利質多羅樹なり。忉利の諸天夏三月の時、常に其の下に於て娛樂受樂す。」又白色の猶し白雲の如くなるを見る、復大臣に問はく、「彼は是何の色ぞ。」大臣答へて言さく、「是善法堂なり。忉利の諸天常に其の中に集り、人天の事を論ず。」是に於て天主釋提桓因、頂生王の已に來りて外に在るを知り、卽ち出でて迎逆し、見已りて手を執り善法堂に升りて分座して坐せしむ。彼の時二王、形容相貌等しうして差別無く、唯だ視眴有りて別異と爲すのみ。是の時聖王、卽ち念言を生ず、「我今寧ろ彼の王位を退き、卽ち其の中に住して天王と爲るべきや不や。」善男子、爾の時に帝釋、大乘經典を受持讀誦し、開示分別して他の爲に演說す。唯深義に於て未だ盡く通達せず。是の讀誦、受持、分別し、他の爲に廣說する因緣力を以ての故に、大威德有り。善男子、是の頂生王、此の帝釋に於て惡心を生じ已り、卽便墮落して閻浮提に還り、愛念する所の人天と離別して大苦惱を生ず。復惡病に遇ひて卽便命終す。爾の時の帝釋は迦葉佛是なり、轉輪聖王は則ち我が身是なり。善男子、當に知るべし、是の如く愛別離苦は極めて大苦と爲す。善男子、菩薩摩訶薩、尙

過去の是の如き等輩の愛別離苦を憶す。何に況や菩薩大乘大涅槃經に住して、當に現在の世の愛別離苦を觀ぜざるべきや。

善男子、云何が菩薩大乘大涅槃經を修行して怨憎會苦を觀ず。善男子、是の菩薩摩訶薩、地獄、畜生、餓鬼、人中、天上、皆是の如き怨憎會苦有るを觀ず。譬へば人、牢獄繋閉、枷鎖杻械を觀て以て大苦と爲すが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。五道一切の受生悉く是怨憎合會大苦と觀ず。復次に善男子、譬へば人有りて常に怨家の枷鎖杻械を畏れ、父母、妻子、眷屬、珍寶、產業を捨離して遠く逃避するが如し。善男子、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死を畏怖し、具足して六波羅蜜を修行して涅槃に入る。迦葉、是を菩薩、大乘大般涅槃を修行して怨憎會苦を觀ずと名く。

善男子、云何が菩薩、大乘大般涅槃を修行して求不得苦を觀ずる。求とは一切盡く求なり。盡求する者二種有り。一つには善法を求め、二つには不善法を求む。善法未得苦、惡法未得苦なり。是を略して五盛陰苦を說くと爲す。迦葉、是を苦諦と名く。」

爾の時に迦葉菩薩摩訶薩、佛に白して言さく「世尊、佛の所說の如く五盛陰苦は是の義然らず。何を以ての故に。佛、往昔釋魔男に告げたまふが如く、若色苦ならば一切衆生色を求むべからず。色若求むること有らば則ち苦と名けず。佛、諸の比丘に告げたまふが如く、三種の受有り。苦受、樂受、不苦不樂受なり。佛、先に諸の比丘の爲に說きたまふが如く、若人有りて能く善法を修行せば、則ち樂を受くることを得。又佛說の如く、善道

の中に於て六觸樂を受く。眼好色を見る、是則ち樂と爲す。耳、鼻、舌、身、意に好法を思ふも亦復是の如し。佛の說偈の如く、

持戒則ち樂と爲す、身衆苦を受けず
睡眠安隱を得、寤むれば則ち心歡喜す
若衣食を受くる時、誦習して經行す
獨山林に處す、是の如きを最樂と爲す
若能く衆生に於て、晝夜常に慈を修す
是に因りて常樂を得、他を惱さざるを以ての故なり
少欲知足樂、多聞分別樂
無著阿羅漢も、亦名けて受樂と爲す
菩薩摩訶薩、畢竟じて彼岸に到り
所作の衆事辨ず、是を名けて最樂と爲す

世尊、諸經の中の所說の樂相の如き、其の義是の如し。佛の今說の如き、云何ぞ當に此の義と相應すべき。』佛、迦葉に告げたまはく、『善い哉善い哉善男子、善能く如來に是の義を諮問す。善男子、一切衆生下苦の中に於て横に樂想を生ず。是の故に我が今の所說の苦相本と異ならず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『佛の所說の如く下苦の中に於て樂想を生ずとは、下生下

老、下病下死、下愛別離、下求不得、下怨憎會、下五盛陰、是の如き等の苦も亦樂有るべし。世尊、下生とは所謂三惡趣、中生とは所謂人中、上生とは所謂天上なり。若復人有りて是の如きの問を作さく、「若下樂に於て苦想を生じ、中樂の中に於て無苦樂想を生じ、上樂の中に於て樂想を生ぜん。當に云何が答ふべき。」世尊、若下苦の中樂想を生ぜば、未だ人有りて當に千罰を受くべきに、初一下の時、已に樂想を生ぜるを見ず。若生ぜざれば、云何ぞ說きて下苦の中に於て樂想を生ずと言はん。』佛、迦葉に告げたまはく、『是の如く是の如し。汝が說く所の如し。是の義を以ての故に樂想有ること無し。何を以ての故に。猶し彼の人當に千罰を受くべきに、一下を受け已りて卽ち脫ることを得ば、是の人、爾の時に便ち樂想を生ずるが如し。是の故に當に知るべし。無樂の中に於て妄りに樂想を生ずと。』

迦葉の言さく、『世尊、彼の人一下を以て樂想を生ぜず、脫を得るを以ての故に樂想を生ず。』『迦葉、是の故に我昔釋摩男の爲に五陰中の樂を說き、實にして虛ならざるなり。迦葉、三受三苦有り。三受とは所謂樂受、苦受、不苦不樂受なり。三苦とは所謂苦苦、行苦、壞苦なり。善男子、苦受とは名けて三苦と爲す。所謂苦苦、行苦、壞苦なり。餘の二受は所謂行苦、壞苦なり。善男子、是の因緣を以て生死の中實に樂受有り。菩薩摩訶薩は、苦樂の性相捨離せざるを以て、是の故に說きて一切皆苦と言ふ。善男子、生死の中實に樂有ること無し。但諸佛菩薩世間に隨順し、說きて樂有りと言ふ。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、諸佛菩薩若俗に隨ひて說く、是虛妄なりや不や。佛の諸說の如く「善を修行する者則ち樂報を受け、持戒安樂の身苦を受けず。乃至樂事已に辨ず、是を最樂と爲す」と。是の如き等の經所說の樂受、是虛妄なりや不や。若是虛妄ならば、諸佛世尊久しく無量百千萬億阿僧祇劫に於て、菩提道を修して已に妄語を離る。今是の說を作す、其の義云何。」佛の言はく「善男子、上に說く所の諸の受樂偈の如き、即ち是菩提道の根本なり。亦能く阿耨多羅三藐三菩提を長養す。是の義を以ての故に、先に經中に於て是の樂相を說く。善男子、譬へば世間に須ふる所の資生、能く樂因を爲す、故に名けて樂と爲すが如し。所謂女色、耽湎飲酒、上饌甘味なり。渴時に水を得、寒時に火に遇ふ。衣服瓔珞、象馬車乘、奴婢僮僕、金銀瑠璃、珊瑚眞珠、倉庫穀米、是の如き等の物世間の所須能く樂因を爲す。是を名けて樂と爲す。善男子是の如き等の物も亦能く苦を生ず。女人に因りて男子の苦を生ず。憂愁悲泣、乃至斷命、酒、甘味、乃至倉庫に因り、亦能く人をして大憂惱を生ぜしむ。是の義を以ての故に、一切皆苦にして樂相有ること無し。善男子、菩薩摩訶薩是の八苦に於て苦に苦無しと解す。善男子、一切の聲聞、辟支佛等は樂因を知らず。是の如き人の爲に下苦の中に於て樂相有りと說く。唯菩薩の大乘大般涅槃に住する有りて、乃ち能く是の苦因、樂因を知る。」

大般涅槃經　卷第十二

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

聖行品第十九之中

(一)『善男子、云何が菩薩摩訶薩、大乘大般涅槃に住して集諦を觀察す。善男子、菩薩摩訶薩此の集諦是陰の因緣と觀ず。所謂集とは還つて有を愛す。愛に二種有り。一つには己身を愛し、二つには所須を愛す。復二種有り。未得の五欲心を繫けて專ら求む。既に求得し已らば堪忍專著す。復三種有り。欲愛、色愛、無色愛なり。復三種有り。業因緣愛、煩惱因緣愛、苦因緣愛なり。出家の人四種の愛有り。何等をか四つと爲す。衣服、飲食、臥具、湯藥なり。復五種有り。五陰に貪著し、諸の所須に隨ひて一切愛著す。分別校計するに無量無邊なり。善男子、愛に二種有り。一つには善愛、二つには不善愛なり。不善愛とは凡愚の求、善法愛とは諸の菩薩の求なり。善法愛とは復二種有り。不善と善となり。(二)二乘を求むる者、名けて不善と爲す。大乘を求むる者、是を名けて善と爲す。善男子、凡夫の愛は之を名けて集と爲し、名けて諦と爲さず。菩薩の愛は之を集諦と名け、名けて集と爲さず。何を以ての故に。衆生を度せんが爲に、所以に生を受く。愛を以ての故に生を受けざ

【聖行品中】此品は前品に續きて四諦慧の中集滅道を明し、更に無量の四諦慧及び二諦慧一諦慧等を宣說するの章なり。

【一】集諦を明す。

【二乘】聲聞乘緣覺乘卽ち小乘の敎なり。

【六觸】六識が六境に對して觸受すること。

【摩樓迦子】藤の一種蔓樹なり。

るなり。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、佛世尊餘經の中に於て、諸の衆生の爲に業を說きて因緣と爲す。或は憍慢を說き、或は六觸を說き、或は無明を說きて五盛陰の爲に因緣と作すが如し。今何の義を以て四聖諦を說くに、獨愛性を以て五陰の因と爲す。」佛、迦葉を讃じたまはく、「善い哉善い哉善男子、汝が說く所の諸の因緣の如きは、非因と爲すに非ず。但是五陰は要ず愛に因る。善男子、譬へば大王、若出でて遊巡すれば、大臣、眷屬悉く皆隨從するが如し。愛も亦是の如し。愛の行處に隨ひて是の諸結等も亦復隨つて行く。譬へば膩衣の塵有るに隨つて著し、著は則ち隨つて住するが如し。愛も亦是の如し。所愛の處に隨つて業結も亦住す。復次に善男子、譬へば濕地は則ち能く牙を生ずるが如し。愛も亦是の如し。能く一切の業煩惱の牙を生ず。

善男子、菩薩摩訶薩、是の大乘大般涅槃に住して深く此の愛を觀ずるに、凡て九種有り。一つには責の餘有るが如く、二つには羅刹女婦の如く、三つには妙華莖の毒蛇有るが如く、四つには惡食性の便ならざる所、强ひて之を食ふが如く、五つには淫女の如く、六つには摩樓迦子の如く、七つには瘡中の瘜肉の如く、八つには暴風の如く、九つには彗星の如し。

云何が名けて責の餘有るが如しと爲す。善男子、譬へば窮人の他の錢財を負ひ、償畢らんと欲すと雖も、餘未だ畢らざるが故に、猶繫がれて獄に在り脫るることを得ざるが如し。聲聞、緣覺も亦復是の如し。愛習の餘氣有るを以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる

ことを得ること能はず。善男子、是を責の餘有るが如しと名く。

善男子、云何が羅刹女婦の如くなる。善男子、譬へば人有りて羅刹女を得、納れて以て婦と爲す。是の羅刹女、子を生ずる所に隨ひて、生じ已れば便ち食す。子を食すること既に盡きて復其の夫を食するが如し。善男子、愛の羅刹女も亦復是の如し。諸の衆生、善根の子を生ずるに、生ずるに隨ひ隨つて食す。善子既に盡くれば復衆生を食して地獄、畜生、餓鬼に墮せしむ。唯菩薩を除く。是を羅刹女婦の如しと名く。

善男子、云何が妙華莖の毒蛇之に纒ふが如くなる。譬へば人有りて性、好華を愛して華莖毒蛇の過患を見ず。即便前んで捉へ、捉へ已りて蛇に螫され、螫され已りて命終るが如し。一切の凡夫も亦復是の如し。五欲の華を貪る。是の愛毒蛇の過患を見ずして便ち受取す。即ち愛蛇に毒螫せられ、命終して即ち三惡道の中に墮す。唯菩薩を除く。是を妙華莖の毒蛇之に纒ふが如しと名く。

善男子、云何が便ならざる所の食、強ひて之を食する。譬へば人有りて便ならざる所の食、強ひて之を食し、食し已りて腹痛し、下を患ひて死するが如し。愛の食も是の如し、五道の衆生、強食貪著す。是の因緣を以て三惡道に墮す。唯菩薩を除く。是を便ならざる所の食、強ひて之を食すと名く。

善男子、云何が淫女の如くなる。譬へば愚人淫女と通じ、彼の淫女巧みに種種の諂媚を作して親を現じ、悉く是の人の所有の錢財を奪ふ。錢財既に盡きて便ち復驅逐するが如し。

愛の淫女も亦復是の如し、愚人無智之と交通す。是の愛女、其の有らゆる一切善法を奪ふ。善法既に盡くれば驅逐して三惡道の中に墮せしむ。唯菩薩を除く。是を淫女の如しと名く。

善男子、云何が摩樓迦子の如くなる。譬へば摩樓迦子の、若は鳥の食し已り、糞に隨ひて地に墮し、或は風吹に因り來りて樹下に在り。即便生長し、尼拘羅樹を纒繞縛束して增長せざらしめ、遂に枯死に至るが如し。愛の摩樓迦子も亦復是の如し。凡夫の有らゆる善法を纒縛して增長せしめず、遂に枯滅に至る。既に枯滅し已りて命終の後、三惡道に墮す。唯菩薩を除く。是を摩樓迦子の如しと名く。

善男子、云何が瘡中の瘜肉の如くなる。人の久瘡中に瘜肉を生ず。其の人要ず當に勤心に療治すべきに、捨心を生ずること莫し、若捨心を生ぜば瘜肉增長し、蟲疽復生ず。是の因緣を以て、即便命終するが如し。凡夫愚人五陰の瘡痍も亦復是の如し、愛其の中に於て瘜肉と爲る。應當に勤心に愛の瘜肉を治すべし。若治せざれば、命終して即ち三惡道の中に墮す。唯菩薩を除く。是を瘡中の瘜肉の如しと名く。

善男子、云何が暴風の如くなる。譬へば暴風の能く山を偃し嶽を夷げ、深根を拔くが如し。愛欲の暴風も亦復是の如し。父母の所に於て惡心を生じ、能く大智舍利弗等の無上深固の菩提根本を拔く。唯菩薩を除く。是を暴風の如しと名く。

善男子、云何が彗星の如くなる。譬へば彗星の天下に出現すれば、一切の人民饑饉、病瘦、諸の苦惱に嬰るが如し。愛の彗星も亦復是の如し。能く一切の善根種子を斷じ、凡夫

【二】滅諦を明す。

【三】道諦を明す。

人をして孤窮、饑饉、煩惱の病を生じ、生死に流轉して種種の苦を受けしむ。唯菩薩を除く。是を如彗星と名く。善男子、菩薩摩訶薩の大乘大般涅槃に住して愛結を觀察すること是の如き九種なり。

善男子、是の義を以ての故に、諸の凡夫の人苦有りて諦無し。聲聞、緣覺は苦有り苦諦有りて而も眞實無し。諸の菩薩等は苦に苦無きを解す。是の故に苦無くして而も眞諦有り。諸の凡夫の人は集有りて諦無し。聲聞、緣覺は集有り集諦有り。諸の菩薩等は集に集無きを解す。是の故に集無くして而も眞諦有り。聲聞、緣覺は滅有り眞に非ず。菩薩摩訶薩は滅有り眞諦有り。聲聞、緣覺は道有り眞に非ず。菩薩摩訶薩は道有り眞諦有り。

(二)善男子、云何が菩薩摩訶薩の大乘大般涅槃に住して滅を見滅諦を見る。所謂一切の煩惱を斷除す。若煩惱斷ずれば則ち名けて常と爲す。煩惱の火を滅すれば則ち寂滅と名く。煩惱滅するが故に則ち樂を受くることを得。諸佛菩薩因緣を求むるが故に、故に名けて淨と爲す。更に復二十五有を受く。故に出世と名く。出世を以ての故に、故に名けて我と爲す。常に色、聲、香、味、觸等、若は男、若は女、若は生住滅、若は苦、若は樂、不苦不樂に於て相貌を取らず。故に畢竟寂滅眞諦と名く。善男子、菩薩是の如く大乘大般涅槃に住して滅聖諦を觀ず。

(三)善男子、云何が菩薩摩訶薩の大乘大般涅槃に住して道聖諦を觀ず。善男子、譬へば闇中燈に因りて麤細の物を見ることを得るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。大乘大般涅

【陀羅驃】ドラヴヤ（Dravya）實と譯す。勝論六句義の一にして地水火風空時方神意の九種の實體を云ふ。

【求那】グナ（Guṇa）德と譯す。勝論六句義中の一。地水火風空等の實體に依止せる色聲香味等の屬性を云ふ。

【阿蘭若】アーラニヤ（Aranya）閑寂、無諍聲、遠離處等と譯す。人里を離れたる寂靜の處にして、比丘の住處寺院等の名に用ゐらる。

槃に住し、八聖道に因りて一切法を見る。所謂常無常、有爲無爲、有衆生非衆生、物非物、苦樂、我無我、淨不淨、煩惱非煩惱、業非業、實不實、乘非乘、知無知、陀羅驃非陀羅驃、求那非求那、見非見、色非色、道非道、解非解なり。善男子、菩薩是の如く大乘大般涅槃に住して道聖諦を觀ず。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、若八聖道是道聖諦ならば、義相應せず。何を以ての故に。如來或は說信心を道と爲し、能く諸漏を度す。或時道を說きて、「不放逸是なり。諸佛世尊不放逸の故に阿耨多羅三藐三菩提を得。亦是菩薩助道の法なり。」或時說きて「精進是道と言ふ、阿難に告ぐるが如し、若人有りて能く勤めて精進を修せば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得。」と。或時說きて言はく、「身念處を觀ぜよ。若心を繫けて精勤に是の身念處を修習する有らば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得。」或時說きて言はく、「正定を道と爲す、大德摩訶迦葉に告ぐるが如し、夫正定とは眞實是道なり。不正定にして是道なるに非ざるなり。若禪定に入らば乃ち能く五陰の生滅を思惟す。定に入らずして能く思惟するに非ざるなり。」或は一法を說き、若人修習すれば能く衆生を淨うす。一切の憂愁苦惱を滅除し、正法を逮得す。所謂念佛三昧なり」と。或は復說きて言はく、「無常想を修する。是を名けて道と爲す。比丘に告ぐるが如く、能く多く無常想を修する者有らば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。或は說空寂阿蘭若處に獨坐思惟せば、能く速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」と。或時說きて言はく、「人の爲に法を演ぶ。是

【波闍波提】マハーパジャーパテイ（摩訶波闍波提 Mahaprajapati）の略稱にして釋尊の姨母なり。大生主と譯す。

を名けて道と爲す。若法を聞き已らば疑網即ち斷ず。疑網斷じ已らば則ち阿耨多羅三藐三菩提を得」と。或時說きて言はく「持戒是道なり、阿難に告ぐるが如し。若精勤に禁戒を修持する有らば、是の人則ち生死の大苦を度す」と。或時說きて言はく「善友に親近す。是を名けて道と爲す。阿難に告ぐるが如し。若善知識に親近する者有らば、則ち淨戒を具す。若衆生の能く我に親近する有らば、則ち阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを得」と。或時說きて言はく「慈を修す是道なり。慈を修學する者は諸の煩惱を斷じ、不動の處を得」と。或時說きて言はく「智慧是道なり。佛昔、波闍波提比丘尼の爲に說くが如し。姉妹、諸の聲聞の如く、智慧刀を以て能く諸流諸漏煩惱を斷ず」と。或時如來「施是道」と說く。佛、往昔波斯匿王に告ぐるが如し。大王當に知るべし、我往昔に於て多く惠施を行ず。是の因緣を以て、今日阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。」と世尊、若八聖道是道諦ならば、是の如き等の經豈虛妄に非ずや。若彼の諸經虛妄に非ずんば、彼の中、何の緣ぞ八道を說きて道聖諦と爲さず。若彼說かずんば、如來往昔何が故ぞ錯謬す。然るに我定んで知る、諸佛如來久しく錯謬を離ると。』

爾の時に世尊、迦葉菩薩を讃じたまはく『善い哉善い哉善男子、汝今菩薩の大乘微妙の經典の所有の祕密を知らんと欲す、故に是の問を作す。善男子、是の如き諸經悉く道諦に入る。善男子、我が先說の如く若道を信ずる有らば、是の如きの信道は是信の根本なり、是能く菩提の道を佐助す。是の故に我が說錯謬有ること無し。善男子、如來善く無量の方

便を知り、衆生を化せんと欲す。故に是の如き種種の說法を作す。

善男子、譬へば良醫の諸の衆生の種種の病源を識り、其の所患に隨ひ爲に藥を合す。幷に藥の禁ずる所、唯水の一種禁例に在らず。或は薑水を服し、或は甘草水、或は細辛水、或は黑石蜜水、或は阿摩勒水、或は尼婆羅水、或は鉢晝羅水、或は冷水を服し、或は熱水を服し、或は蒲萄水、或は安石榴水なり。善男子、是の如きの良醫、善く衆生の所患を知り、種種の藥、禁多しと雖も水は例に在らざるが如し。如來も亦爾なり。善く方便を知る。一法相に於て諸の衆生に隨ひ、分別して廣く種種の名相を說く。彼の諸の衆生所說に隨ひて受く。受け已りて修習して煩惱を除斷す、彼の病人の良醫の教に隨ひて所患を除くことを得るが如し。

復次に善男子、一人有りて善く衆語を解する、大衆の中に在り。是の諸の大衆、熱渴に逼められて咸く聲を發して言はく、「我水を飲まんと欲す。我水を飲まんと欲す。」是の人卽時に、清冷水を以て其の種類に隨ひ、說きて「是水」と言ひ、或は「波尼」と言ひ、或は「鬱持」と言ひ、或は「娑利藍」と言ひ、或は「婆利」と言ひ、或は「波耶」と言ひ、或は「甘露」と言ひ、或は「牛乳」と言ふ。是の如き等の無量の水の名を以て大衆の爲に說くが如し。善男子、如來も亦爾なり。一つの聖道を以て諸の聲聞の爲に種種に演說す。信根等より八聖道に至る。

復次に善男子、譬へば金師の一種の金を以て、意に隨ひて種種の瓔珞を造作す。所謂鉗

【阿摩勒】アーマラカ(Amalaka)又菴摩羅ともかく果實の名。其葉は小棗に似て花は白く小し。果は胡桃に似てその味酸く且つ甜し。

【尼婆羅】雪山に存する尼婆羅樹ならんと。

【鉢晝羅】パートーラ(Pathola)煮樹湯と譯す。水藥の名。

鎖、環釧、釵鐺、天冠、臂印なり。是の如きの差別不同有りと雖も、然も金を離れざるが如し。善男子、如來も亦爾なり。一つの佛道を以て諸の衆生に隨ひて種種分別して爲に之を說く。或は一種を說く、所謂諸佛一道にして二無し、復二種を說く、所謂定、慧なり。復三種を說く、見、慧、智を謂ふ。復四種を說く。所謂見道、修道、無學道、佛道なり。復五種を說く。所謂信行道、法行道、信解脫道、見到道、身證道なり。復六種を說く、所謂須陀洹道、斯陀含道、阿那含道、阿羅漢道、辟支佛道、佛道なり。復七種を說く、所謂念覺分、擇法覺分、精進覺分、喜覺分、除覺分、定覺分、捨覺分なり。復八種を說く、所謂正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定なり。復九種を說く、所謂八道及び信なり。復十種を說く、所謂十力なり。復十一種を說く、所謂十力、大慈なり。復十二種を說く、所謂十力、大慈、大悲なり。復十三種を說く、所謂十力、大慈、大悲、念佛三昧なり。復十六種を說く、所謂十力、大慈、大悲、念佛三昧、及び佛所得の三正念處なり。復二十道を說く、所謂十力、四無所畏、大慈、大悲、念佛三昧、三正念處なり。善男子、是の道一體なり、如來昔日衆生の爲の故に種種に分別す。

復次に善男子、譬へば一火の所然に因るが故に、種種の名を得るが如し。所謂木火、草火、糠火、麩火、牛馬糞火なり。善男子、佛道も亦爾なり、一つにして二つ無し。衆生の爲の故に種種に分別す。

復次に善男子、譬へば一識分別して六を說く。若眼に至れば則ち眼識と名く。乃至意識

【四】無量の四諦慧を明す。

も亦復是の如くなるが如し。善男子、道も亦是の如し、一つにして二つ無し。如來、諸の衆生を化せんが爲の故に種種に分別す。

復次に善男子、譬へば一色の眼所見の者は則ち名けて色と爲し、耳所聞の者は則ち名けて聲と爲し、鼻所嗅の者は則ち名けて香と爲し、舌所甞の者は則ち名けて味と爲し、身所覺の者は則ち名けて觸と爲すが如し。善男子、道も亦是の如く、一つにして二つ無し。如來衆生を化せんと欲するが爲の故に種種分別す。善男子、是の義を以ての故に。八聖道分を以て道聖諦と名く。善男子、是の四聖諦は諸佛世尊次第に之を說く。是の因緣を以て無量の衆生生死を度することを得。」

(四)迦葉、佛に白して言さく「世尊、昔佛、一時恆河の岸尸首林の中に在り。爾の時に如來、少樹葉を取りて諸の比丘に告げたまはく「我今手中に捉る所の葉多きや、一切地に因る草木の葉多きや。」諸の比丘言さく「世尊、一切地に因る草木の葉多く稱計すべからず。如來の捉りたまふ所少くして言ふに足らず。」「諸の比丘、我覺了する所の一切諸法、大地に因りて生ずる草木等の如く、諸の衆生の爲に宣說する所は手中の葉の如し。」世尊、爾の時に是の如きの言を說きたまはく「如來所了の無量の諸法、若四諦に入らば則ち已說と爲ん。若入らざれば應に五諦有るべし。」」佛、迦葉を讚じたまはく「善い哉善い哉善男子、汝が今の所問は則ち能く無量の衆生を利益し安隱快樂にす。善男子、是の如きの諸法は悉く已に攝して四聖諦の中に在り。」

【五】四諦の相を明す。初めに苦諦を明し、陰入界に約す。

迦葉菩薩、復佛に白して言さく「是の如き等の法、若し四諦に在らば、如來何が故ぞ不說と唱言したまふ。」佛の言はく「善男子、復中に入ると雖も猶說と名けず。何を以ての故に。善男子、聖諦を知るに二種の智有り。一つには中、二つには上なり。中とは聲聞、緣覺、上とは諸佛、菩薩なり。

(五)善男子、諸陰苦と知るを名けて中智と爲す。諸陰を分別するに無量の相有り、悉く是諸苦なり。是聲聞、緣覺の知る所に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於て竟に之を說かず。善男子、諸入とは之を名けて門と爲し、亦名けて苦と爲すを知る。是を中智と名く。諸入を分別するに無量の相有り、悉く是諸苦なり。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、諸界とは之を名けて分と爲し、亦名けて性と爲し、亦名けて苦と爲すを知る。是を中智と名く。諸界を分別するに無量の相有り、悉く是諸苦なり。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、色の壞相を知る、是を中智と名く。諸色を分別するに無量の壞相有り、悉く是諸苦なり。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、受は覺相と知る、是を中智と名く。諸受を分別するに無量の覺相有り。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、想は取相と知る、是を中智と名く。是の想を分別する

に無量の取相有り。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、行は作相と知る、是を中智と名く。是の行を分別するに無量の作相あり、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、識は分別相と知る、是を中智と名く。是の識を分別するに無量の知相あり、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。善男子、是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。

善男子、愛の因緣能く五陰を生ずと知る、是を中智と名く。一人の起愛無量無邊なる、聲聞、緣覺の知ること能はざる所なり。能く一切衆生、起す所の是の如き等の愛を知る。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、煩惱を滅すと知る、是を中智と名く。煩惱を分別するに稱計すべからず。滅も亦是の如し、稱計すべからず、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、是の道相は能く煩惱を離ると知る。是を中智と名く。道相を分別するに無量無邊なり。所離の煩惱も亦無量無邊なり、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。

善男子、世諦を知る者、是を中智と名く。世諦を分別するに無量無邊にして稱計すべからず、諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。善男子、一切の行は無常、諸法は無我、涅槃は寂滅なり、是第一義と知

【六】廣く二諦慧を明す。

る。是を中智と名く。第一義は無量無邊にして稱計すべからざるを知る。諸の聲聞、緣覺の所知に非ず。是を上智と名く。是の如き等の義、我彼の經に於ても亦之を說かず。

(六)爾の時に文殊師利菩薩、佛に白して言さく、『世尊、所說の世諦第一義諦は其の義云何。世尊、第一義の中に世諦有りや不や。世諦の中に第一義有りや不や。如其有らば、則ち是一諦なり。如其無ければ、將如來虛妄の說に非ずや。』『善男子、世諦とは即ち第一義諦なり。』『世尊、若爾らば則ち二諦無し。』佛の言はく、『善男子、善方便有り、衆生に隨順して二諦有りと說く。善男子、若言說に隨ふときは則ち二種有り。一つには世法、二つには出世法なり。善男子、出世人の所知の者の如き、名けて第一義諦と爲し、世人の知る者を名けて世諦と爲す。善男子、五陰和合を稱して某甲と言ふ。凡夫衆生其の所稱に隨ふ、是を世諦と名く。陰を解するに某甲名字有ること無く、陰を離れて亦某甲名字無し。出世の人、其の性相の如くにして能く之を知るを第一義諦と名く。復次に善男子、或は法、名有り實有る有り。或は復法、名有りて實無き有り。善男子、有名無實は即ち是世諦、有名有實は是第一義諦なり。善男子、我、衆生の壽命知見、養育丈夫、作者受者、熱時の燄、乾闥婆城、龜毛兎角、旋火の輪、諸陰界入の如き、是を世諦と名け、苦集滅道を第一義諦と名く。善男子、世法に五種有り。一つには名世、二つには句世、三つには縛世、四つには法世、五つには執著世なり。善男子、云何が名世なる。男女、餅衣、車乘、屋舍、是の如き等の物、是を名世と名く。云何が句世なる。四句一偈、是の如き等の偈、是を句世と名く。云何が縛世なる。捲

【七】一諦慧を明す。

合繫結、束縛合掌、是を縛世と名く。云何が法世なる。椎を鳴して僧を集め、鼓を嚴りて兵を誡め、貝を吹きて時を知らしむるが如き、是を法世と名く。云何が執著世なる。遠人を望む染衣の者有り、想を生じ執著して是沙門にして婆羅門に非ずと云ふ。結繩を身上に横へ佩ぶる有るを見れば、便ち念を生じて、是婆羅門にして沙門に非ずと云ふが如きなり。是を執著世と名く。善男子、是の如きを名けて五種の世法と爲す。善男子、若衆生、是の如き等の五種の世法に於て、心顚倒無く、實の如くにして知る有らば、是を第一義諦と名く。復次に善男子、若は燒、若は割、若は死、若は壞、是を世諦と名く。燒無く、割無く、死無く、壞無し、是を第一義諦と名く。復次に善男子、八苦相有るを名けて世諦と爲す。生無く、老無く、病無く、死無く、愛別離無く、怨憎會無く、求不得無く、五盛陰無し、是を第一義諦と名く。復次に善男子、譬へば一人の多く能くする所有り。若其走る時は則ち走者と名け、若收め刈る時は復刈者と名け、若飮食を作さば作食者と名け、若材木を治すれば則ち工匠と名け、金銀を鍛ふる時は金銀師と言ふ。是の如く一人に多くの名字有るが如く、法も亦是の如し。其の實は是一つにして多名有り。父母の和合に依因りて生ずるを名けて世諦と爲し、十二因緣の和合して生ずる者を第一義諦と名く。」

〔七〕文殊師利菩薩、佛に白して言さく、「世尊、言ふ所の實諦は其の義云何。」佛の言はく、「善男子、實諦と言ふは、名けて眞法と曰ふ。善男子、若法、眞に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは顚倒無し。顚倒無ければ乃ち實諦と名く。善男子、實諦とは虛妄有ること

【八】實諦に就て論義す。

無し。若虛妄有らば實諦と名けず。善男子、實諦とは名けて大乘と曰ふ。大乘に非ざれば實諦と名けず。善男子、實諦とは是佛の所說にして魔の所說に非ず。若是魔說にして佛說に非ざれば、實諦と名けず。善男子、實諦とは一道淸淨にして二つ有ること無きなり。善男子、常有り、樂有り、我有り、淨有り。是則ち名けて實諦の義と爲す。」

(八)文殊師利、佛に白して言さく、「世尊、若眞實を以て實諦と爲さば、眞實の法は卽ち是如來、虛空、佛性なり。若是の如き者は、如來、虛空、及與佛性と差別有ること無けん。」佛、文殊師利に告げたまはく、「苦有り諦有り實有り、集有り諦有り實有り、滅有り諦有り實有り、道有り諦有り實有り。善男子、如來苦に非ず、諦に非ず、是實なり。虛空苦に非ず、諦に非ず、是實なり。佛性苦に非ず、諦に非ず、是實なり。文殊師利、言ふ所の苦とは無常相と爲す。是可斷相なり、是を實諦と爲す。如來の性は、苦に非ず、無常に非ず、可斷相に非ず。是の故に實と爲す。虛空、佛性も亦復是の如し。復次に善男子、言ふ所の集とは、能く五陰をして和合して生ぜしむ。亦名けて苦と爲し、亦無常と名く。是可斷相なり、是を實諦と名く。善男子、如來是集性に非ず、是陰因に非ず、可斷相に非ず。是の故に實と爲す。虛空、佛性も亦復是の如し。善男子、言ふ所の滅とは煩惱滅を名く。亦常、無常なり。二乘の所得を名けて無常と曰ふ。諸佛の所得は是則ち常と名け、亦證法と名く。是を實諦と爲す。善男子、如來の性は、名けて滅にして能く煩惱を滅すと爲さず。常、無常に非ず、證法と名けず。常住にして無變なり。是の故に實と爲す。虛空、佛性も亦復是の

如し。善男子、道とは能く煩惱を斷ず。亦常、無常、是可修の法なり。是を實諦と爲す。如來道にして能く煩惱を斷ずるに非ず、常、無常に非ず、可修の法に非ず。常住にして不變なり、是の故に實と爲す。虛空、佛性も亦復是の如し。復次に善男子、眞實と言ふは卽ち是如來なり。如來とは卽ち是眞實、眞實とは卽ち是虛空、虛空とは卽ち是眞實、眞實とは卽ち是佛性、佛性とは卽ち是眞實なり。文殊師利、苦有り、苦因有り、苦盡有り、苦對有り。如來は苦に非ず、乃至對に非ず。是の故に實と爲し名けて諦と爲さず。虛空、佛性も亦復是の如し。苦とは有爲、有漏、無樂なり。如來は有爲に非ず、有漏に非ず、湛然安樂なり。是實にして諦に非ず。」

文殊師利、佛に白して言さく「世尊、佛の所說の如き「不顚倒の者を、名けて實諦と爲す」と。若爾らば四諦の中四倒有りや不や。如其有らば、云何ぞ說きて顚倒有ること無きを名けて實諦と爲し、一切の顚倒を名けて實と爲さずと言ふや。」佛、文殊師利に告げたまはく「一切の顚倒は皆苦諦に入る。諸の衆生顚倒心有り、名けて顚倒と爲すが如し。善男子、譬へば人有りて父母、尊長の教敕を受けず。受くと雖も隨順、修行すること能はず。是の如きの人等を名けて顚倒と爲すが如し。是の如きの顚倒は是苦ならざるに非ず。卽ち是苦なり。」

文殊師利の言さく「佛の「不虛妄の者卽ち是實諦」と說きたまふ所の如く、若爾らば當に知るべし、虛妄は則ち實諦に非ず。」佛の言はく「善男子、一切の虛妄は皆苦諦に入る。

衆生他を欺誑する有らば、是の因縁を以て地獄、畜生、餓鬼に墮するが如し。是の如き等の法を名けて虛妄と爲す。是の如きの虛妄は是苦ならざるに非ず、卽ち是苦なり。聲聞、緣覺、諸佛世尊を遠離して行ぜず、故に虛妄と名く。是の如き虛妄は、諸佛二乘の斷除する所なるが故に、故に實諦と名く。』

文殊師利の言さく『佛の「大乘是實諦」と說きたまふ所の如きは、當に知るべし、聲聞辟支佛乘は則ち不實と爲ん。』佛の言はく『文殊師利、彼の二乘は亦實、不實なり。聲聞、緣覺、諸の煩惱を斷ずれば、卽ち名けて實と爲す。無常、不住は是變易の法なれば、名けて不實と爲す。』

文殊師利の言さく『佛の所說の如く、若佛の所說は名けて實と爲さば、當に知るべし、魔說は則ち不實と爲ん。世尊、魔の所說の如き聖諦に攝するや不や。』佛の言はく『文殊師利、魔の所說は二諦に攝せらる、所謂苦、集なり。凡そ是の一切は非法、非律なり、人をして利益を得しむること能はず。終日宣說すとも亦人の苦を見、集を斷じ、滅を證し、道を修する有ること無し。是を虛妄と名く。是の如き虛妄を名けて魔說と爲す。』

文殊師利の言さく『佛の所說の如く、「一道清淨二者有ること無し」と。諸の外道等も亦復說きて言はく、「我一道清淨無二有り」と。若一道是實諦と言はば、彼の外道と何の差別か有る。若差別無ければ、說きて一道清淨と言ふべからず。』佛の言はく『善男子、諸の外道等、苦集諦有りて滅道諦無し。非滅の中に於て滅想を生じ、非道の中に於て道想を生じ、

非果の中に於て果想を生じ、非因の中に於て因想を生ず。是の義を以ての故に、彼一道清淨無二無し。』

文殊師利の言さく、『佛の所說の如く、「有常、有我、有樂、有淨、是實義」とは、諸の外道等には實諦有るべし、佛法の中には無からん。何を以ての故に。諸の外道輩も亦復說きて言はく、「諸行は是常。云何が是常。可意、不可意の諸業報等受けて失はざるが故に。可意とは十善報と名け、不可意とは十不善報なり。若諸行皆悉く無常と言はば、而も作業の者、此に於て已に滅すれば誰か復彼に於て果報を受けんや。是の義を以ての故に、諸行は是常なり。殺生の因緣、故に名けて常と爲す。世尊、若諸行悉く無常と言はば、能殺可殺の二俱に無常ならん。若無常ならば誰か地獄に於て罪報を受けん。若定んで地獄の受報有りと言はば、當に知るべし、諸行は實に無常に非じ。世尊、繫心專念も亦名けて常と爲す。所謂十年所念乃至百年も亦忘失せず。是の故に常と爲す。若無常ならば、本所見の事誰か憶し誰か念ぜん。是の因緣を以て一切諸行無常に非ざるなり。世尊一切の憶想も亦名けて常と爲す。人有りて先に他人の手足、頭項等の相を見、後時に若見れば便ち還つて之を識る。若無常ならば本相滅すべし。世尊、諸の所作の業久しく修習するを以て、若初學より或は三年を經、或は五年を經て然して後善く知る。故に名けて常と爲す。世尊、算數の法一より二に至り、二より三に至り、乃ち百千に至る。若無常ならば初の一滅すべし。初の一若滅せば誰か復二に至らん。是の如く常一にして終に二有ること無し。一滅せざる

を以ての故に、二に至り乃ち百千に至ることを得ん。是の故に常と爲す。世尊、讀誦の法の如く、一阿含を誦して二阿含に至り、乃ち三四阿含に至る。如其無常ならば讀誦すべき所終に四に至らず。是の讀誦增長の因緣を以ての故に名けて常と爲す。世尊、耕衣、車乘人の負責の如し。大地の形相、山河樹林、藥木草葉、衆生治病、皆悉く是常にして亦復是の如し。世尊、一切外道皆是の說を作す、諸行は是常と。若是常ならば、卽ち是實諦なり。

世尊、諸の外道有りて復言はく、「樂有り、云何が知るや。受者定んで可意報を得るが故に。」世尊、凡そ樂を受くる者、必定之を得ん。所謂大梵天王、大自在天、釋提桓因、毗紐天、及び諸の人天なり。是の義を以ての故に必定樂有らん。世尊、諸の外道有りて復言はく、「樂有り、能く衆生をして求望を生ぜしむるが故に、飢者食を求め、渴者飮を求め、寒者溫を求め、熱者涼を求め、極者息を求め、病者差を求め、欲者色を求む。若樂無くんば、彼何に緣りてか求めん。求有るを以ての故に、故に樂有るを知る。」世尊、諸の外道有りて復是の言を作さく、「施能く樂を得。世間の人好んで沙門、諸の婆羅門、貧窮困苦に衣服、飮食、臥具、醫藥、象馬、車乘、末香、塗香、衆華、屋宅、依止燈明を施す。是の如き等の種種の惠施を作す。我後世可意の報を受くるが爲にす。是の故に當に知るべし、決定して樂有り」と。世尊、諸の外道有りて復是の言を作さく、「因緣を以ての故に、當に知るべし樂有り。所謂受樂者、因緣有るが故に名けて樂觸と爲す。若樂無き者何ぞ因緣を得ん。兎角無ければ則ち因緣無きが如し。樂因緣有れば則ち樂有ることを知る。」世尊、諸の外道

有りて復是の言を作さく「上中下の故に當に知るべし樂有りと。下受樂者は釋提桓因、中受樂者は大梵天王、上受樂者は大自在天なり。是の如きの上中下有るを以ての故に、當に知るべし樂有りと」。

世尊、諸の外道有りて復言はく「淨有り、何を以ての故に。若淨無ければ欲を起すべからず。若欲を起さば當に知るべし淨あり」と。又復說きて言はく「金銀、珍寶、瑠璃、頗梨、硨磲、碼碯、珊瑚、眞珠、璧玉、珂貝、流泉、浴池、飲食、衣服、華香、末香、塗香、燈燭の明、是の如き等の物悉く是淨法なり。復次に淨有り、謂はく五陰とは卽ち是淨器、諸の淨物を盛る。所謂人天、諸仙、阿羅漢、辟支佛、菩薩、諸佛なり。是の義を以ての故に、之を名けて淨と爲す」と。

世尊、諸の外道有りて復言はく「我有りて覩見する所有り、能く造作するが故に。譬へば人有りて陶師の家に入り、復陶師の身を見ずと雖も輪繩を見るを以て、定んで其の家必ず是陶師と知るが如し。我も亦是の如し。眼色を見已らば、必ず我有ることを知る。若我無くんば誰か能く色を見ん。聲を聞き乃至觸法も亦復是の如し。復次に我有り、云何が知ることを得。相に因るが故に知る。何等をか相と爲す。喘息視眴、壽命役心、諸の苦樂を受く。貪求瞋恚是の如き等の法、悉く是我の相なり。是の故に當に知るべし。必定して我有ることを。復次に我有り、能く味を別するが故に。人の果を食する有り、見已りて味を知る。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。

業を執作するが故に。鎌を執りて能く刈り、斧を執りて能く斫り、缻を執りて水を盛り、車を執りて能く御す。是の如き等の事、我執して能く作す。是の故に當に知るべし。必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。生時に卽して乳哺を得んと欲し、宿習に乘ずるが故に。是を以て當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。他の衆生を和合利益するが故に。譬へば缻衣、車乘、田宅、山林、樹木、象馬、牛羊、是の如き等の物、若和合すれば則ち利益有るが如し。此の內の五陰も亦復是の如し。眼等の諸根和合有るが故に則ち我を利益す。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り、云何が知るや。遮法有るが故に。物有るが故に則ち遮閡有り。物若無ければ則ち遮有ること無きが如し。若遮有らば則ち我有ることを知る。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。復次に我有り。云何が知るや。伴、非伴の故に。親と非親とは是伴侶に非ず。正法、邪法も亦伴侶に非ず。智と非智とも亦伴侶に非ず。沙門、非沙門、婆羅門、非婆羅門、子、非子、晝、非晝、夜、非夜、我、非我、是の如き等の法伴、非伴と爲す。是の故に當に知るべし、必定して我有ることを。」世尊、諸の外道等種種に常樂我淨有りと說く。當に知るべし、定んで常樂我淨有らん。世尊、是の義を以ての故に、諸の外道等も亦說きて「我眞諦に有り」と言ふことを得。」

佛の言はく「善男子、若沙門、婆羅門有りて、常有り、樂有り、淨有り、我有らば、是沙門に非ず、婆羅門に非ず。何を以ての故に。生死に迷ひ、一切智の大導師を離るるが故

に。是の如きの沙門、婆羅門等、諸欲に沈沒し善法羸損するが故に。是の諸の外道繫がれて貪欲、瞋恚、癡の獄に在りて堪忍愛樂するが故に。是の諸の外道業果自作、自受と知ると雖も、而も猶惡法を遠離すること能はず。是の諸の外道、是正法、正命、自活に非ず。何を以ての故に。智慧の火無ければ消すること能はざるが故に。是の諸の外道、上妙の五欲に貪著せんと欲すと雖も、善法に貪し、勤修せざるが故に。是の諸の外道正解脫の中に往至せんと欲すと雖も、而も持戒足成就せざるが故に。是の諸の外道樂を求めんと欲すと雖も、而も樂因緣を求むること能はざるが故に。是の諸の外道、復一切諸苦を憎惡すと雖も、然も其の所行未だ諸苦の因緣を遠離すること能はず。是の諸の外道、四大毒蛇に纏はるると雖も、猶放逸を行じて謹愼すること能はず。是の諸の外道無明に覆はれ、善友を遠離し、樂んで三界無常熾然大火の中に有りて、而も出づること能はず。是の諸の外道、諸の煩惱難愈の病に遇ふとも、而も復大智良醫を求めず。是の諸の外道、未來に方りて當に無邊の險遠の路を涉るべし。而も善法の資糧を以て自ら莊嚴することを知らず。是の諸の外道常に淫欲、災毒に害せられて、反つて五欲の霜毒を抱持す。是の諸の外道瞋恚熾盛にして、而も復反つて更に惡友に親近す。是の諸の外道、常に無明に覆蔽せられて、而も反つて邪惡の法を推求す。是の諸の外道常に邪見に誑惑せられて、而も反つて中に於て親善想を生ず。是の諸の外道、甘果を食せんことを希ひて、而も苦子を種う。是の諸の外道已に煩惱の闇室の中に處して、反つて大智の炬明を遠離す。是の諸の外道、煩惱の渴を患ひ

是の諸の外道生死の無邊の大河に漂沒して、而も復無上の船師を遠離す。是の諸の外道、諸倒に迷惑して諸行常と言ふ。諸行若常ならば是の處有ることと無けん。』

て、而も復又諸欲の鹹水を飲む。

【聖行品下】此品は前品に續きて聖行を開說し、我に執するを破するの章なり。

【一】諸行の無常を明す。

【陰界入】陰は五陰即ち色受想行識の五蘊。界は十八界即ち六根六境六識の總數に名け、六入は十二入即ち六根六境を云ふ。普通これを三科と稱し、新譯には蘊處界と稱す。凡夫が實我に執せん爲に施設せしものなり

大般涅槃經　卷第十三

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

聖行品第十九之下

〔一〕善男子、我諸行悉く皆無常と觀ず。云何が知るや。因緣を以ての故なり。若し諸法緣より生ずる者有らば、則ち無常と知る。是の諸の外道、一法の緣より生ぜざる有ること無し。善男子、佛性は無生無滅、無去無來なり。過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、因の所作に非ず、無因の作に非ず、作に非ず作者に非ず、相に非ず無相に非ず、有名に非ず無名に非ず、名に非ず色に非ず、長に非ず短に非ず、陰界入の攝持する所に非ず。是の故に常と名く。善男子、佛性は即ち是如來、如來は即ち是法、法は即ち是常なり。善男子、常とは即ち是如來、如來は即ち是僧、僧は即ち是常なり。是の義を以ての故に、因より生ずる法は、名けて常と爲さず。是の諸の外道は、一法の因より生ぜざる有ること無し。善男子、是の諸の外道は、佛性、如來、及び法を見ず。是の故に外道の言說すべき所は、悉く是れ妄語にして眞諦有ること無し。諸の凡夫人、先に缾衣、車乘、舍宅、城郭、河水、山林、男女、象馬、牛羊を見、後相似るを見れば便ち是常と言ふ。當に知るべし、其の實は是常

【二】色心兩門を辨ず。初に心の無常を明す。

【色法】色ルーパ(Rūpa)とは、質礙の義にして形質ありて互に障礙する性質を有するもの。極微(元子)より成れる物質を云ふ。

【非色法】色法に對するものにして心法に等し。精神及び精神的諸現象を云ふ。

【心心數法】心心所法と云ふに等し。心と心の作用に名づく。

に非ざるなり。善男子、一切の有爲は皆是無常なり。虛空は無爲なり、是の故に常と爲す。佛性は無爲なり、是の故に常と爲す。虛空とは即ち是佛性、佛性とは即ち是如來、如來とは即ち是無爲、無爲とは即ち是常、常とは即ち是法、法とは即ち是僧、僧とは即ち是無爲、無爲とは即ち是常なり。

(二)善男子、有爲の法は凡そ二種有り、色法、非色法なり。非色法とは心心數法、色法とは地水火風なり。善男子、心を無常と名く。何を以ての故に。性は是攀緣相應分別の故なり。善男子、眼識性異、乃至意識性異、是の故に無常なり。善男子、色境界異、乃至法境界異、是の故に無常なり。善男子、眼識相應異、乃至意識相應異、是の故に無常なり。善男子、心若常ならば、眼識獨一切法を緣ずべし。善男子、若眼識異ならば、乃至意識異ならば、則ち無常を知る。法相似て念念に生滅するを以て、凡夫見已りて之を計して常と爲す。善男子、諸の因緣相破壞すべきが故に、亦無常と名く。所謂眼に因り、色に因り、明に因り、思惟に因りて眼識を生ず。耳識生ずる時所因各異なり、眼識の因緣に非ず。乃至意識異も亦是の如し。復次に善男子、諸行を壞する因緣の故に、心を無常と名く。所謂無常心を修する異なり。苦空無我心を修する異なり、心若常ならば常に無常を修すべし。尙苦空無我を觀ずることを得ず。況や復常樂我淨を觀ずることを得んや。是の義を以ての故に、外道法の中、常樂我淨を攝取すること能はず。善男子、當に知るべし、心法必定無常なり。復次に善男子、心性異なるが故に名けて無常と爲す。所謂聲聞心性異、緣覺心性異、諸佛心

性異なり。一切外道心に三種有り。一つには出家心、二つには在家心、三つには在家遠離心なり。樂相應心異、苦相應心異、不苦不樂相應心異、貪欲相應心異、瞋恚相應心異、愚癡相應心異、一切外道心相亦異、所謂愚癡相應心異、疑惑相應心異、邪見相應心異、進止威儀其の心も亦異なり。善男子、心若常ならば亦復諸色を分別すること能はず。所謂青、黄、赤、白、紫色なり。善男子、心若常ならば諸の憶念法忘失すべからず。善男子、心若常ならば、凡そ諸の讀誦增長すべからず。復次に善男子、心若常ならば、說きて已作、今作、當作と言ふべからず。若已作、今作、當作有らば、當に知るべし、是の心必定無常なり。善男子、心若常ならば則ち怨、親、非怨、非親無けん。心若常ならば、則ち我物、他物若は死、若は生と言ふべからず。心若常ならば所作有りと雖も、增長すべからず。善男子、是の義を以ての故に、當に知るべし、心性各各別異なり。別異有るが故に、當に知るべし、無常なり。

(三)善男子、我今此の非色法の中に於て、無常を演說して、其の義已に顯はる。復當に汝が爲に色無常を說くべし。是の色常無く、本生有ること無し、生じ已りて滅するが故に。內身胎に處す。歌羅邏の時、本生有ること無し、生じ已りて變ずるが故に。外の芽莖本も亦生無し、生じ已りて變ずるが故に。是の故に當に知るべし、一切の色法悉く皆無常なり。善男子、有らゆる內色は時に隨ひて變ず。歌羅邏の時異、阿浮陀の時異、伽那の時異、閉手の時異、諸皰の時異、初生の時異、嬰孩の時異、童子の時異、乃至老の時各各變異なり。

【三】色の無常を明す。

【歌羅邏】カララ(Kalala)凝骨と譯す。胎內五位の第一位にして、託胎より七日間を云ふ。

【阿浮陀】アルブダ(Arbuda)皰と譯す。託胎第二の七日間を云ふ。

【伽那】カナ(Ghana)厚と譯す。胎內五位の一。

【閉手】ペーシー(Peśi)胎內五位の一。

【四】我に執するを破す。

所謂外色も亦復是の如し、牙異莖異、枝異葉異、華異果異なり、復次に善男子、内味も亦異なり。歌羅邏の時、乃至老の時各變異す、外味も亦爾なり。牙、莖、枝、葉、華、果味異なり。歌羅邏の時力異、乃至老の時力異なり。歌羅邏の時狀貌異、乃至老の時狀貌も亦異なり。歌羅邏の時果報異、乃至老の時果報も亦異なり。歌羅邏の時名字異、乃至老の時名字も亦異なり。所謂內色壞し已りて還つて合す、故に知る無常なり。外の樹木も亦壞し已りて還つて合す、故に知る無常なり。次第に漸く生ず、故に無常を知る。次第に歌羅邏を生ずる時、乃至老の時次第に牙を生じ、乃至果子、故に無常を知る。諸色滅すべし、故に無常を知る。歌羅邏滅の時異、乃至老滅の時異、牙滅の時異、乃至果滅の時異なり。故に無常を知る。凡夫知ること無く、相似生を見て計し以て常と爲す。是の義を以ての故に名けて無常と曰ふ。若無常なれば卽ち是苦、若苦なれば、卽ち是不淨なり。善男子、我、迦葉の上に是の事を問ふに因りて彼に於て已に答ふ。

(四)復次に善男子、諸行は無我なり。善男子、一切の法を總じて色、非色と謂ふ。色は我に非ざるなり。何を以ての故に。破すべく、壞すべく、打すべく、裂すべし。生增長の故に我とは破壞、打裂、生長すべからず。是の義を以ての故に、色の我に非ざるを知る。非色の法も亦復我に非ず。何を以ての故に。因緣生の故なり。善男子、若諸の外道專念を以ての故に、我有るを知るといはば、專念の性實に我に非ざるなり。若專念を以て我性と爲さば、過去の事則ち忘失有り。忘失有るが故に定んで我無きを知る。善男子、若諸の外道

憶想を以ての故に、我有るを知るといはば、憶想無きが故に、定んで我無きを知る。説くが如く人手六指有るを見、即ち復問ひて「我先何の處に共に相見るやと言ふ」と。若我有らば、復問ふべからず。相問ふを以ての故に、定んで我無きを知らん。善男子、若諸の外道遮を以ての故に我有るを知るといはば、善男子、遮有るを以ての故に、定んで我無きを知らん。言ふが如く調達、終に言調達に非ずと發せずと。我も亦是の如し。若定んで是我ならば、終に我を遮らず。我を遮るを以ての故に、定んで我無きを知らん。若遮るを以ての故に我有るを知らば、汝今遮らず、定んで我無かるべし。善男子、若諸の外道伴、非伴を以て我有るを知るといはば、伴無きを以ての故に、我有ること無かるべし。法の伴無き有り、所謂如來は虛空佛性なり。我も亦是の如く、實は伴有ること無し。是の義を以ての故に定んで我無きを知らん。復次に善男子、若諸の外道、名字を以ての故に我有るを知るといはば、無我法の中亦我の名有り。貧賤の人富貴と名字するが如し。我死と言ふが如き、若我死せば我則ち我を殺さん。而も我實に殺すべからず、假に殺我と名く。亦奴人を名けて長者と爲すが如し。是の義を以ての故に、定んで我無きを知らん。復次に善男子、若諸の外道、生じ已りて乳を求むるを以て我有るを知るといはば、善男子若我有らば一切の嬰兒、不淨火、蛇毒藥を執持すべからず。是の義を以ての故に、定んで我無きを知らん。復次に善男子、一切の衆生、三法の中に於て悉く等智有り、所謂淫欲、飲食、恐怖なり。是の故に我無し。復次に善男子、若諸の外道相貌を以ての故に我有るを知るといはば、善男

子、相の故に我無し。相無きが故に亦我無し。若人睡る時進止、俯仰、視眴すること能はず、苦樂を覺えず、我有るべからず、若進止、俯仰、視眴を以て我有るを知らば、機關、木人も亦我有るべし。善男子、如來も亦爾なり。進まず止まらず、俯せず仰がず、視ず眴せず。不苦不樂、不貪不恚、不癡不行なり。如來是の如く眞實に我有り。復次に善男子、若諸の外道、他の果を食するを見て、口中涎を生ずるを以て我有るを知るといはゞ、善男子、憶念を以ての故に、見れば則ち涎を生ず。涎我に非ざるなり、我も亦涎に非ず。非喜非悲、非哭非笑、非墮非起、非飢非飽なり。是の義を以ての故に、定んで我無きを知らん。

善男子、是の諸の外道癡にして小兒の如く、慧の方便なし。常無常、苦樂、淨不淨、我無我、壽命非壽命、衆生非衆生、實非實、有非有を了達すること能はず。佛法の中に於て少許分を取る。虛妄に常、樂、我、淨有りと計す、而も實は常、樂、我、淨を知らず。生盲の人乳色を識らず。便ち他に問ひて言はく、「乳色何にか似る。」他人答へて言はく、「色白くして貝の如し」と。盲人復問ふ、「是の乳色は貝聲の如くなりや。」答へて言はく、「不なり。」復問ふ「貝色何に似ると爲すや。」答へて云はく、「稻米粖の如し。」盲人復問ふ、「乳色柔耎にして稻米粖の如くなりや。稻米粖は復何の似る所ぞ。」答へて言はく、「雪の如し。」盲人復言はく、「彼の稻米粖冷なる雪の如くなりや。雪復何にか似る。」答へて言はく、「猶し白鶴の如し。」是の生盲の人、是の如き四種の譬喩を聞くと雖も、終に乳の眞色を識ることを得

【五】圓の慧行を明す。

【檀波羅蜜】以下六波羅蜜を明す。檀波羅蜜は布施到彼岸と譯す。尸波羅蜜は持戒到彼岸、羼提波羅蜜は忍辱到彼岸、毗梨耶波羅蜜は精進到彼岸、禪波羅蜜は靜慮到彼岸、般若波羅蜜は智慧到彼岸と譯す。

【四念處】無我觀を修すべき修行上の四項目。一に身念處、身は不淨なりと觀ず。二に受念處、受即ち苦樂の感受は苦なりと觀ず。三に心念處、心は無常なりと觀ず。四に法念處、法は無我なりと觀ず。

【四正勤】四念處觀について修する行法にして一に已

ること能はず。是の諸の外道も亦復是の如し。終に常、樂、我淨、を識ること能はざるが如し。善男子、是の義を以ての故に、我が佛法の中眞實諦有り、外道に非ず。」

(五)文殊師利、佛に白して言さく『希有世尊、如來今に於て般涅槃に臨み、方に復更に無上の法輪を轉ず。乃ち是の如く眞諦を分別することを作す。』佛、文殊師利に告げたまはく、『汝今、云何ぞ故如來に於て涅槃の想を生ずる。善男子、如來實に是常住不變にして般涅槃せず。善男子、若我は是佛、我は阿耨多羅三藐三菩提を成ず。我は即ち是法、法は是我所、我は即ち是道、道は是我所、我は即ち世尊、世尊は即ち是我所、我は即ち聲聞、聲聞は即ち是我所、我は能く法を説きて他をして聽受せしむ。我は法輪を轉ず、餘人は能はずと計する有らば、如來終に是の如きの計を作さず。是の故に如來法輪を轉ぜず。善男子、若人是の如きの妄計を作す有らん。我は即ち是眼、眼は即ち是我所、耳、鼻、舌、身、意も亦復是の如し。我は即ち是色、色は是我所、乃至法も亦復是の如し。我は即ち是地、地は即ち我所なり。水、火、風も亦是の如し。

善男子、若人計して言はん『我は即ち是信、信は是我所なり。我は是多聞、多聞は即ち是我所なり。我は是檀波羅蜜、檀波羅蜜は即ち是我所なり。我は是尸波羅蜜、尸波羅蜜は即ち是我所なり。我は是羼提波羅蜜、羼提波羅蜜は即ち是我所なり。我は是毗梨耶波羅蜜、毗梨耶波羅蜜は即ち是我所なり。我は是禪波羅蜜、禪波羅蜜は即ち是我所なり。我は是般若波羅蜜、般若波羅蜜は即ち是我所なり。我は是四念處、四念處は即ち是我所なり。四正

生の惡に對しては除斷の爲めに勤めて精進し、二に未生の惡に對しては更に生ぜざらしめん爲めに勤めて精進し、三に未生の善に對しては生ぜんが爲に勤めて精進し、四に已生の善に對しては增長せしめんが爲めに勤めて精進すること。

【四如意足】四正勤の次に修する行法にして四修の禪定なり。この行法によりて如意足即ち神通を得るを以てこの名あり。一に欲如意足、二に勤如意足、三に心如意足、四に觀如意足。

【五根】菩提に至る機關についての五種の德法。信、精進、念、定、慧の五根。

【五力】五根によりて機關が整調增長して五種の能力

勤、四如意足、五根五力、七覺分、八聖道分も亦復是の如し。善男子、如來終に是の如きの計を作さず。是の故に如來法輪を轉ぜず。善男子、若「常住にして變易有ること無し」と言はば、云何ぞ說きて「佛法輪を轉ず」と言はん。是の故に汝今說きて「如來方に更に上法輪を轉ず」と言ふべからず。

善男子、譬へば眼に因り、色に緣り、明に緣り、思惟に緣り、因緣和合して眼識を生ずることを得るが如し。善男子、眼念じて「我能く識を生ず」と言はず。色乃至思惟、終に「我眼識を生ず」と念はず。眼識も亦復念を作して「我能く自ら生ず」と言はず。善男子、是の如き等の法因緣の和合を名けて見と爲すことを得。善男子、如來も亦爾なり。六波羅蜜の和合に因りて名けて見と爲すことを得。善男子、如來も亦爾なり。六波羅蜜三十七の助菩提法に因りて諸法を覺了す。復咽喉、舌齒、脣口に因りて言語、音聲、憍陳如の爲に初始めて法を說くを轉法輪と名く。是の義を以ての故に、如來轉法輪と名けざるなり。善男子、若不轉とは即ち名けて法と爲す、法は即ち如來なり。善男子、譬へば燧に因り、鑽に因り、手に因り、乾秋草に因りて火を生ずることを得。燧も亦「我能く火を生ず」と言はず。鑽、手、乾草各「我能く火を生ず」と念はず。火も亦「我能く自ら生ず」と言はざるが如し。如來も亦爾なり。六波羅蜜に因り、乃至憍陳如、法輪を轉ずと名く。如來も亦復念を生じて「我法輪を轉ず」と言はず。善男子、若不生とは、是則ち名けて正法輪を轉ずと爲す。是の轉法輪を即ち如來と名く。

を生ずるを云ふ。信、精進、念、定慧の五力。

【七覺分】七種の道法にして定慧を調ふるもの。擇法精進、喜、輕安、念、定、行捨の七。

【八正道】正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進正念、正定の八法。

【三十七の助菩提法】三十七科道品をさす。四正勤以下の三十七の修道の德目なり。

【憍陳如】五比丘の一。カウンディニヤ（Kauṇḍinya）了本際と譯す。

善男子、譬へば酪に因り、水に因り、鑽に因り、絣に因り、繩に因り、人の手提に因りて酥を出すことを得。酪念じて「我能く酥を出す」と言はず。乃至人手も亦「我能く酥を出す」と念言せず。酥も亦「我能く自ら出づ」と言はず。衆緣和合の故に酥を出すことを得るが如し。如來も亦爾なり。終に「我法輪を轉ず」と念言せず。善男子、若不出とは是則ち名けて正法輪を轉ずと爲す。是の轉法輪は則ち是如來なり。

善男子、譬へば身及び地、水、火、風、沃壤、時節に因り、人の作業に因りて芽生ずることを得るが如し。善男子、子も亦「我能く芽を生ず」と言はず。乃至作業も亦「我能く芽を生ず」と念言せず。芽も亦「我能く自ら生ず」と言はず。如來も亦爾なり。終に「我法輪を轉ず」と念言せず。善男子、若不作とは是則ち名けて轉正法輪と爲す。是の轉法輪は卽ち是如來なり。

善男子、譬へば鼓に因り、空に因り、皮に因り、人に因り、桴に因り、和合して聲を出す。鼓「我能く聲を出す」と念言せず。乃至桴も亦是の如し。聲も亦「我能く自ら生ず」と言はざるが如し。善男子、如來も亦爾なり。終に念じて「我法輪を轉ず」と言はず。善男子、轉法輪とは名けて不作と爲す。不作とは卽ち轉法輪なり、轉法輪とは卽ち是如來なり。

善男子、轉法輪とは乃ち是諸佛世尊の境界なり。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。善男子、虛空は生に非ず、出に非ず、作に非ず、造に非ず、有爲法に非ず。如來も亦爾なり。

【六】不更に約して圓慧を明す。

【大乘】マハーヤナ(Mahāyāna)の譯。乘は運載の義にして乘せ運ぶこと。佛が教により衆生を迷の岸より悟の岸に乘せ運ぶりことにして教法をさす。そしてその教法が眞實にして大なれば大乘と云ふ。之に反して未究竟にして小なるものを小乘と云ふ。

非生、非出、非作、非造、非有爲法なり。如來性の如く佛性も亦爾なり。非生、非出、非作、非造、非有爲法なり。

(六)善男子、諸佛世尊の語に二種有り。一つには世語、二つには出世語なり。善男子、如來諸の聲聞、緣覺の爲に世語を說き、諸の菩薩の爲に出世語を說く。善男子、是の諸の大衆に復二種有り。一つには小乘を求め、二つには大乘を求む。我昔日に於て波羅奈城に諸の聲聞の爲に法輪を轉じ、今始めて此の拘尸那城に於て、諸の菩薩の爲に大法輪を轉ず。復次に善男子、復二人有り。中根上根なり。中根の人の爲に波羅奈に於て法輪を轉じ、上根の人、人中の象王迦葉菩薩等の爲に、今此の間に拘尸那城に於て大法輪を轉ず。善男子、極下根の者には如來終に爲に法輪を轉ぜず。極下根とは卽ち一闡提なり。復次に善男子、佛道を求むる者に復二種有り。一つには中精進、二つには上精進なり。波羅奈に於て中精進の爲に法輪を轉じ、今此の城に於て上精進の爲に大法輪を轉ず。復次に善男子、我昔彼の波羅奈城に於て初めて法輪を轉ずるに、八萬の天人須陀洹果を得、今此の城に於て八十萬億の人阿耨多羅三藐三菩提を退轉せず。復次に善男子、波羅奈城には、大梵天王稽首して我に法輪を轉ずるを請ふ。今此の城に於て迦葉菩薩、稽首して我に大法輪を轉ずるを請ふ。復次に善男子、我昔彼の波羅奈城に於て法輪を轉ずる時、無常、苦空、無我を演說す。今此の城に於て法輪を轉ずる時實の如く常樂我淨を演暢す。復次に善男子、我昔彼の波羅奈城に於て法輪を轉ずる時、出す所の音聲梵天に聞ゆ。如來今拘尸那城に於て法輪を轉ずる

【七】慧行の名を釋す。

時、出す所の音聲東方二十恆河沙等の諸佛世界に徧ず。南西北方、四維上下も亦復是の如し。

復次に善男子、諸佛世尊に凡そ所説有り、皆悉く名けて轉法輪と爲すなり。善男子、譬へば聖王所有の輪寶の、未だ降伏せざる者は能く降伏せしめ、已に降伏せる者は能く安隱ならしむるが如し。善男子、諸佛世尊の凡そ説法する所も亦復是の如し。無量の煩惱未だ調伏せざる者を能く調伏せしめ、已に調伏せる者は善根を生ぜしむ。善男子、譬へば聖王の所有の輪寶は、則ち能く一切の怨賊を消滅するが如し、如來の説法も亦復是の如し、能く一切の諸の煩惱賊をして皆悉く寂靜ならしむ。復次に善男子、譬へば聖王所有の輪寶の下上回轉するが如し。如來の説法も亦復是の如し、能く下趣の諸の惡衆生をして人天、乃至佛道に上生せしむ。善男子、是の故に汝今讚じて「如來此に於て更に法輪を轉ず」と言ふべからず。』

爾の時に文殊師利、佛に白して言さく、『世尊、我此の義に於て知らずと爲すに非ず。問ふ所以は、諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故なり。世尊、我已に久しく知る、轉法輪とは實に是諸佛如來の境界にして、是聲聞、緣覺の及ぶ所に非ざることを。』

(七)爾の時に世尊、迦葉菩薩に告げたまはく、『善男子、是を菩薩、大乘大涅槃經に住して行ずる所の聖行と名く。』迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、復何の義を以て名けて聖行と爲す。』『善男子、聖は諸佛世尊を名く。是の義を以ての故に、名けて聖行と爲す。』『世

【八】慧行の果を明す。

【餤摩天】ヤーマ(Yāma)天。欲界六天の第三、この天は時々口に快樂を唱ふと。

【兜衛天】兜率天に同じ。欲界六天の第四。

尊、若是諸佛の所行ならば、則ち聲聞、緣覺、菩薩の能く修行する所に非ざらん。』『善男子、是の諸佛世尊は、此の大般涅槃に安住して、是の如く開示分別を作して其の義を演說す。是の義を以ての故に、名けて聖行と曰ふ。聲聞、緣覺及び諸の菩薩、是の如く聞き已らば則ち能く奉行す。故に聖行と名く。

(八)善男子、是の菩薩摩訶薩、是の行を得已らば、則ち無所畏地に住することを得ん。善男子、若菩薩有りて是の如き無所畏地に住することを得ば、則ち復貪恚、愚癡、生老病死を畏れず。亦復惡道、地獄、畜生、餓鬼を畏れず。善男子、惡に二種有り。一つには阿修羅、二つには人中なり。人中に三種の惡有り。一つには一闡提、二つには誹謗方等經典、三つには犯四重禁なり。善男子、是の地中に住する諸の菩薩等、終に是の如き惡の中に墮することを畏れず。亦復沙門、婆羅門、外道、邪見、天魔、波旬を畏れず、亦復二十五有を受くるを畏れず。是の故に此の地を無所畏と名く。

善男子、菩薩摩訶薩の無畏地に住して二十五の三昧を得て二十五の有を壞す。善男子、無垢三昧を得て能く地獄の有を壞す。無退三昧を得て能く畜生有を壞す。心樂三昧を得て能く餓鬼有を壞す。歡喜三昧を得て能く阿修羅有を壞す。日光三昧を得て能く弗婆提有を斷ず。月光三昧を得て能く瞿耶尼有を斷ず。熱餤三昧を得て能く鬱單越有を斷ず。如幻三昧を得て能く閻浮提有を斷ず。一切法不動三昧を得て能く四天處有を斷ず。難伏三昧を得て能く三十三天處有を斷ず。悅意三昧を得て能く餤摩天有を斷ず。青色三昧を得て能く兜

【化樂天】樂變化天に同じ。欲界六天の第五。
【他化自在天】欲界六天の第六。
【初禪】以下二禪、三禪、四禪、無想、淨居の諸天は色界に在る天の名。
【空處】以下識處、不用處、非想非非想處は無色界に在る諸天。

術天有を斷ず。黄色三昧を得て能く化樂天有を斷ず。赤色三昧を得て能く他化自在天有を斷ず。白色三昧を得て能く初禪有を斷ず。種種三昧を得て能く大梵王有を斷ず。雙三昧を得て能く二禪有を斷ず。雷音三昧を得て能く三禪有を斷ず。注雨三昧を得て能く四禪を斷ず。如虛空三昧を得て能く無想有を斷ず。照鏡三昧を得て能く淨居阿那含有を斷ず。無閡三昧を得て能く空處有を斷ず。常三昧を得て能く識處有を斷ず。樂三昧を得て能く不用處有を斷ず。我三昧を得て能く非想非非想處有を斷ず。善男子、是を菩薩の二十五三昧を得て二十五有と斷ずと名く。善男子、是の如き二十五三昧を諸三昧王と名く。

善男子、菩薩摩訶薩是の如き等の諸三昧王に入り、若須彌山王を吹壞せんと欲すれば意に隨ひて即ち能くし、三千大千世界の所有の衆生心の所念を知らんと欲すれば亦悉く能く知り、三千大千世界の所有の衆生をして己身の一毛孔の中に內れんと欲すれば、意に隨ひて即ち能くす。亦衆生をして迫迮の想無からしむ。若無量の衆生を化作して、悉く三千大千世界の中に充滿せしめんと欲すれば、亦能く意に隨ふ。能く一身を分ちて以て多身と爲し、復多身を合して以て一身と爲す。作すこと是の如しと雖も、心著する所無き、猶し蓮華の如し。

善男子、菩薩摩訶薩是の如く三昧王に入ることを得已らば、即ち自在の地に住することを得、菩薩、是の自在地に住する者、自在力を得て生れんと欲する處に隨ひて即ち往生を得。善男子、譬へば聖王の四天下を領すれば、意に隨ひて行ずる所能く障閡する無きが如

【九】經典を讚歎す。この章に五時教判の典據として有名なる文あり。

【牛より乳】以下五味の譬、五時教判の依據なり。

し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。一切の生處若生ぜんと欲すれば意に隨ひて往生す。善男子、菩薩摩訶薩、若地獄の一切衆生の化して善根に住せしむべき者有るを見ば、菩薩卽時に其の中に往生す。菩薩本業果に非ず。菩薩摩訶薩自在地に住する力因緣の故に其の中に生ず。善男子、菩薩摩訶薩地獄に在りと雖も、熾然碎身等の苦を受けず。善男子、菩薩摩訶薩の成就すべき所の是の如きの功德、無量無邊百千萬億に尙說くべからず。何に況や諸佛の有らゆる功德、而も當に說くべけんや。』

(九)爾の時に衆中に一りの菩薩有り、住無垢藏王と名く。大威德有りて神通を成就し、大總持を得、三昧具足し、無所畏を得たり。卽ち座より起ち、偏に右肩を袒き、右膝を地に著け、長跪合掌して佛に白して言さく『世尊、佛の所說の如く、諸佛菩薩の成就すべき所の功德智慧、無量無邊百千萬億、實に說くべからずとは、我が意猶謂ふ、故是の大乘經典に如かず。何を以ての故に。是の大乘方等經の力に因る。故に能く諸佛世尊、阿耨多羅三藐三菩提を出生す。』

時に佛、讚じて言はく『善い哉善い哉善男子、是の如く是の如し。汝が說く所の如し。是の諸の大乘方等經典は復無量の功德を成就すと雖も、是の經に比せんと欲せば、喩を爲すことを得ず。百倍、千倍、百千萬倍、乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。善男子、譬へば牛より乳を出し、乳より酪を出し、酪より生酥を出し、生酥より熟酥を出し、熟酥より醍醐を出す。醍醐は最上なり。若服する者有らば衆病皆除く。有らゆる諸藥の

悉く其中に入るが如く、善男子、佛も亦是の如し。佛より十二部經を出し、十二部經より修多羅を出し、修多羅より方等經を出し、方等經より般若波羅蜜を出し、般若波羅蜜より大涅槃を出す。猶し醍醐の如し。醍醐と言ふは佛性を喩ふ、佛性とは即ち是如來なり。善男子、是の義を以ての故に、說きて、如來の有らゆる功德は無量無邊、稱げて計ふべからずと言ふ。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、佛の讚じたまふ所の如く「大涅槃經は猶し醍醐の如く最上最妙なり。若能く服する有らば衆病悉く除く。一切諸藥悉く其の中に入る」と。我是を聞き已りて竊かに亦思念す「若是の經を聽受すること能はざる有らば、當に知るべし、是の人は大愚癡にして善心有ること無しと爲す。」世尊、我今に於ては、實に能く皮を剝ぎて紙と爲し、血を刺して墨と爲し、髓を以て水と爲し、骨を折りて筆と爲して、是の如き大涅槃經を書寫し、書し已りて讀誦し、其をして通利ならしめ、然して後、人の爲に廣く其の義を說くに堪忍す。世尊、若衆生財物に貪著する有らば、我當に財を施し、然して後是の大涅槃經を以て、之を勸めて讀ましむべし。若尊貴の者には先愛語を以て其の意に隨順し、然して後、漸く當に是の大乘大涅槃經を以て、之を勸めて讀ましむべし。若凡庶の者には、當に威勢を以て之を逼めて讀ましむべし。若憍慢者には爲に僕使と作り、其の意に隨順して、其をして歡喜せしめ、然して後復大涅槃經を以て之を教導せん。若方等經を誹謗する者有らば、當に勢力を以て之を摧きて伏せしめ、既に摧伏し已らば、然して

後勸めて大涅槃經を讀ましむべし。若大乘經を愛樂する者有らば、我當に躬ら往いて恭敬供養、尊重、讃歎すべし。』

爾の時に佛、迦葉菩薩を讃じたまはく『善い哉善い哉、汝甚だ大乘經典を愛樂す。大乘經を貪り、大乘經を愛し、大乘經を味ひ、大乘を信敬し、尊重し、供養す。善男子、汝今此の善心の因緣を以て、當に無量無邊恆河沙等の大菩薩の前に超越して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。汝も亦久しからずして復當に我が如く廣く大衆の爲に、是の如きの大般涅槃如來佛性諸佛所說の祕密の藏を演說すべし。善男子、乃昔過去佛日未だ出でず。我、爾の時に於て婆羅門と作りて菩薩の行を修し、悉く能く一切外道の有らゆる經論に通達し、寂滅行を修して威儀を具足す。其の心淸淨にして、外より來りて能く欲想を生ぜしむるも破壞せられず。瞋恚の火を滅して常樂我淨の法を受持す。周徧して大乘經典を求索するに、乃至方等の名字を聞かず。我、爾の時に於て雪山に住す。其の山淸淨にして、流泉、浴池、樹林、藥木其の地に充滿す。處處の石間に淸流水有り、諸の香華多くして周徧嚴飾す。衆鳥羣獸稱計すべからず、甘果滋繁にして種別計り難し。復無量の藕根、甘根、靑木、香根有り。我、爾の時に於て獨其の中に處し唯諸果を食す。食し已りて心を繫けて思惟坐禪す。無量歲を經るに、亦如來の出世大乘經の名有るを聞かず。善男子我是の如きの難行苦行を修するの時、彼の帝釋、諸天人等心大いに驚怪して、卽ち共に集會し、各相謂つて偈を說きて言さく、

【憍尸迦】カウシカ(Kausika)帝釋天の姓。

各相指示す、淸淨雪山の山
寂靜離欲の主、功德莊嚴王
已に貪瞋慢を離れ、永く諂愚癡を斷ず
口初て未だ曾て、麤惡等の語言を說かず

爾の時に衆中に一りの天子有り、名を歡喜と曰ふ。復偈を說きて言さく、「

是の如き離欲の人、淸淨に勤めて精進す
將帝釋、及以諸天を求めずや
若是道を求むる者ならば、諸の苦行を修行せん
是の人多くは、帝釋所坐の處を求めんと欲す

爾の時に復一りの仙天子有り。卽ち帝釋の爲に偈を說きて言さく、

天主憍尸迦、是の處を生ずべからず
外道苦行を修す、何ぞ必ず帝處を求めん

是の偈を說き已りて復是の言を作さく、「憍尸迦、世に大士有り。衆生の爲の故に己の身を貪らず。諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に、種種無量の苦行を修す。是の如きの人、生死中の諸の過咎を見るが故に、設ひ珍寶の、此の大地、諸山、大海に滿つるを見るとも貪著を生ぜず。涕唾を視るが如し。是の如きの大士、財寶、所愛の妻子、頭目髓腦、手足支節、所居の舍宅、象馬車乘、奴婢童僕を棄捨し、亦天上に生ずることを願求せず、

唯一切快樂を受くるを得んことを願ふ。我が解する所の如きは、是の如きの大士清淨にして染無く、衆結永く盡く。唯阿耨多羅三藐三菩提を志求せんと欲するならん。」

釋提桓因、復是の言を作さく「汝が言の如きは、是の人則ち一切世間の衆生を攝取せんが爲なり。大仙、若此の世間に佛樹有らば能く一切の梵天、世人及び阿修羅の煩惱の毒蛇を除く。若諸の衆生、是の佛樹の陰涼の中に住すれば、煩惱の諸毒悉く消滅することを得。大仙、是の人若當に未來世の中善逝と作らば、我等悉く當に無量の熾然煩惱を滅することを得べし。是の如きの事實に信じ難しと爲す。何を以ての故に。無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發せども、少微緣を見れば阿耨多羅三藐三菩提に於て即便動轉す。水中の月の、水動ずれば則ち動くが如く、猶し畫像の成じ難く壞し易きが如し。菩提の心も亦復是の如く、發し難く壞し易し。大仙、多人有りて諸の鎧仗を以て牢く自ら莊嚴し、前んで賊を討たんと欲するに陣に臨みて恐怖すれば則便退散するが如し。無量の衆生も亦復是の如し。菩提心を發して牢く自ら莊嚴すれども、生死の過を見て心恐怖を生じ、即便退散す。大仙、我是の如く無量の衆生發心の後、皆動轉を生ずるを見る。是の故に我今、是の人專ら苦行を修して惱無く熱無く、道檢に住して其の行淸淨なるを見ると雖も、未だ信ずること能はざるなり。我今要ず當に自ら往いて之を試みて、其實に能く阿耨多羅三藐三菩提の大重擔を荷負するに堪忍するや不やを知るべし。大仙、猶し車二輪有らば則ち載用有り、鳥二翼有らば飛行に堪忍するが如し。是の苦行者も亦復是の如し。我其の禁戒を堅持するを見る

【釋提桓因】シャクラ、デーヷーナーンインドラ (Śakra-devānām Indra) 能天主と譯す。帝釋天に同じ。

【善逝】スガタ (Sugata) 佛の別號佛は眞理の彼岸に逝きて、迷界に還らざる事を以て善逝と稱す。

と雖も、未だ其の人に深智有りや不やを知らず。若し深智有らば當に知るべし、則ち能く阿耨多羅三藐三菩提の重擔を荷負するに堪忍せん。大仙、譬へば魚母の多く胎子有れど、成就する者は鮮きが如く、菴羅樹の華多く、果少きが如く、衆生心を發すは乃ち無量有れども、其の成就に及びては少くして言ふに足らず。大仙、我當に汝と倶に往いて之を試むべし。大仙、譬へば眞金の三種試み已りて乃ち其の眞を知るが如し、燒、打、磨を謂ふ。彼の苦行を試むるも亦當に是の如くなるべし。」

爾の時に釋提桓因、自ら其の身を變じて羅刹の像と作る。形甚だ畏るべし。雪山に下り至り、其を去ること遠からずして、便ち立住す。是の時に羅刹、心に畏るる所無く、勇健當り難し。辯才次第し、其の聲清雅なり。過去佛所說の半偈を宣ぶ。

諸行は無常なり、是生滅の法なり

是の半偈を說き已りて便ち其の前に住す。所現の形貌甚だ怖畏すべし。顧眄して徧く視て四方を觀る。是の苦行者、是の半偈を聞きて心に歡喜を生ず。譬へば賈客の險難の處に於て夜行して伴を失ひ。恐怖推索して還た同侶に遇ふ。心に歡喜を生じて踊躍量無きが如し。亦久病の未だ良醫、瞻病、好藥に遇はず、後卒に之を得るが如く、人の海に沒して卒に船舫に遇ふが如く、渴乏人の清涼水に遇ふが如く、怨に逐はれ、忽然として脫することを得るが如く、久しく獄に繫がれ、卒に出づることを得るを聞くが如し。亦農夫の炎旱に雨を得るが如く、亦行人の還た家に歸ることを得、家人見已りて大歡喜を生ずるが如

し。善男子、我、爾の時に於て是の半偈を聞き、心中に歡喜することも亦復是の如し。即ち座より起ち、手を以て髮を擧げ、四方を顧視して是の語を作さく「向に聞く所の偈、誰の說く所ぞ。」

爾の時に四顧するに餘人を見ず、唯羅刹を見る。即ち是の言を說かく「誰か是の如きの解脫の門を開き、誰か能く諸佛の音聲を雷震す。誰か生死睡眠の中に於て、獨覺寤して是の如きの言を唱ふ。誰か能く此に生死饑饉の衆生に無上の道味を示導す。無量の衆生生死の海に沈む、誰か能く中に於て大船師と作る。是の諸の衆生、常に煩惱の重病に纒はる。誰か能く中に於て爲に良醫と作る。」此の半偈を說き、我が心を啓悟す、猶し半月の漸く蓮華を開くが如し。善男子、我爾の時に於て更に見る所無く、唯羅刹を見る。復是の念を作さく「將是の羅刹是の偈を說くや。」覆ねて復疑を生ず「或は其の說に非じ。何を以ての故に。是の人形容甚だ怖畏すべし。若是の偈句を聞くことを得る者有らば、一切の恐怖、醜陋即ち除かん。何ぞ此の人形貌是の如くにして、能く此の偈を說くこと有らんや。火中蓮華を出生すべからず、日光の中冷水を出生するに非ず。」

善男子、我爾の時に於て復是の念を作さく「我今無智、而も此の羅刹、或は能く過去の諸佛を見、諸佛の所に從ひて是の半偈を聞くことを得、我今當に問ふべし。」即便前んで是の羅刹の所に至り、是の如きの言を作さく「善い哉大士、汝何れの處に於てか是の過去の離怖畏者の說く所の半偈を得。大士、汝何れの處に於てか是の如きの半如意珠を得、大士

是の半偈の義、乃ち是過去、未來、現在の諸佛世尊の正道なり。一切世間の無量の衆生、常に諸見の羅網に覆はれて、終身此の外道の法中に於て初て是の如きの出世十力世雄所説の空義を聞くことを得ず。」善男子、我是を問ひ已るに、卽ち我に答へて言はく、「大婆羅門、汝今我に是の義を問ふべからず。何を以ての故に。我食せざるより來た、已に多日を經たり。處處を求索するに了に得ること能はず。飢渴苦惱、心亂謬語す。我が本心の知る所に非ざるなり。我今力能く虛空に飛行して鬱單越に至り乃至天上、處處に食を求むるに、而も得ること能はず。是を以ての故に、我是の語を說く。」善男子、我時に卽ち復羅刹に語りて言はく、「大士、若能く我が爲に是の偈を說き竟らば、我當に身を終るまで汝の弟子と爲るべし。大士、汝の說く所の者は名字終らず、義も亦盡さず、何の因緣を以てか說くことを欲せざるや。夫財施は竭盡有り、法施の因緣盡すべからざるなり。法施は盡ること無く、利益する所多し。我今此の半偈の法を聞き已りて心驚疑を生ず。汝今幸くば我が爲に除斷すべし。此の偈を說き竟らば、我當に終身汝の弟子と爲るべし。」羅刹、答へて言はく、「汝、智太だ過ぐ。但自ら身を憂ひて卻て念を見ず。今我定んで飢苦に逼められ、實に說くこと能はず。」我卽ち問ひて言はく、「汝食する所の者、是何物と爲す。」羅刹、答へて言はく、「汝問ふに足らず。我若說かば人をして多く怖れしむ。」我復語りて言はく、「此の中獨處して更に人有ること無し。我汝を畏れず、何が故ぞ說かざる。」羅刹答へて言はく、「我食する所は唯人の煗肉、其の飮む所は、唯人の熱血、自ら我が薄祐、唯此の食を食ふ。周徧して求索

するに、因りて得ること能はず。世、多人と雖も皆福德有り、兼て諸天に守護せらる。而も我、力無くして殺すことを得ること能はず。」善男子、我復語りて言はく「汝但、具足して是の半偈を說け、我偈を聞き已りて、當に此の身を以て奉施供養すべし。大士、我設ひ命終すとも、此の如きの身復用ふる所無し。當に虎狼、鵄梟、鵰鷲に啖食せられ、而も復一毫の福を得ざるべし。我今阿耨多羅三藐三菩提を求むるが爲に、不堅身を捨てて以て堅身に易ふ。」羅刹答へて言はく「誰か當に汝が是の如きの言、八字の爲の故に所愛の身を棄つるを信ずべき。」善男子、我卽ち答へて言はく「汝眞に無智なり。譬へば人有りて、他に瓦器を施して七寶の器を得んが如し。我も亦是の如し。不堅身を捨てて金剛身を得。汝、誰か當に信ずべきと言ふ。我今證有り。大梵天王、釋提桓因及び四天王、能く是の事を證せん。復天眼有る諸菩薩等、無量の衆生を利益せんと欲するが爲に、大乘を修行して六度を具する者も亦能く證知せん。復十方の諸佛世尊の衆生を利する者有り。亦能く我が八字の爲の故に是の身命を捨つるを證せん。」羅刹復言はく「汝若し是の如く能く身を捨つれば、諦かに聽き諦かに聽け。當に汝が爲に其の餘の半偈を說くべし。」善男子、我爾の時に於て是の語を聞き已りて心中歡喜し、卽ち己身所著の鹿皮を解きて、此の羅刹の爲に法座を敷置して白して言さく「和上、願はくば此座に坐せ。」我卽ち前に於て叉手長跪して是の言を作さん、唯願はくば和上、善く我が爲に其の餘の半偈を說きて具足を得しめよ」と。羅刹、卽ち說きて、

生滅滅し已りて、寂滅を樂と爲す

爾の時に羅刹、是の偈を說き已りて復是の言を作さく「菩薩摩訶薩、汝今已に具足の偈義を聞き、汝の所願悉く滿足すと爲す。若し必ず諸の衆生を利せんと欲せば、時に我に身を施せ。」善男子、我爾の時に於て深く此の義を思ひ、然して後處處、若は石、若は壁、若は樹、若は道に此の偈を書寫し即便更に所著の衣裳を繫く。恐らくは死後に於て身體露現せん。」卽ち高樹に上る。爾の時に樹神、復我に問ひて言はく「善い哉仁者、何の事を作さんと欲す。」善男子、我時に答へて言はく「我身を捨てて以て偈價を報いんと欲す。」樹神又言はく「是の如きの偈は何の利益する所ぞ。」我時に答へて言はく「是の如きの偈何、乃ち是過去、未來、現在の諸佛所說の開空法道なり。我此の法の爲に身命を棄捨す。利養、名聞、財寶、轉輪聖王、四大天王、釋提桓因、大梵天王、人天中の樂の爲にせず。一切衆生を利益せんと欲するが爲の故に此の身を捨つ。」善男子、我捨身の時復是の願を作さく、「願はくば一切の慳惜の人、悉く來りて我の此の身を捨離するを見しめよ。若し少施貢高を起す者有らば、亦我一偈の爲に此の身命を捨つること、草木を棄つるが如くなるを見ることを得しめん。」

我爾の時に於て是の語を說き已りて、尋で卽ち身を放ちて自ら樹下に投ず。下未だ地に至らず。時に虛空の中種種の聲を出す。其の聲乃ち阿迦尼吒に至る。爾の時に羅刹釋の形を還復し、卽ち空中に於て我が身を接取して平地に安置す。爾の時に釋提桓因及び諸の

【阿迦尼吒】アカニシュタ(Akaniṣṭa)色究竟天のこと。色界十八天の最上天なり。

天人、大梵天王、我が足下を稽首し頂禮し讃じて言はく「善い哉善い哉、眞に是菩薩、能く大いに無量の衆生を利益し、無明黑闇の中に於て大法炬を然さんと欲す。我如來の大法を愛惜するに由るが故に相嬈惱す。唯願はくば我が罪咎を懺悔するを聞け。汝未來に於て必定して阿耨多羅三藐三菩提を成就せん。願はくば濟度せられよ。」

爾の時に釋提桓因及び諸の天衆我が足を頂禮す。是に於て辭し去りて忽然として見えず。善男子、我が往昔半偈の爲の故に此の身を捨棄するが如く、是の因緣を以て便ち超越十二劫に足ることを得、彌勒の前に在りて阿耨多羅三藐三菩提を成ず。善男子、我是の如きの無量の功德を得たり。皆如來の正法を供養するに由る。

善男子、汝今も亦爾なり。阿耨多羅三藐三菩提心を發さば、則ち已に無量無邊恒河沙等の諸の菩薩の上に超過す。善男子、是を菩薩、大乘大般涅槃に住して聖行を修すと名く。」

【梵行品】此品は梵行を明す。梵行の中特に七善法四無量心を開說する章なり。

【一】七善法を明す。

【修多羅】以下十二部經。修多羅(スートラ Sūtra)契經と譯す。祇夜(ゲーヤ Geya)重頌と譯す。受記(ギヤーカラナ Vyākarana)豫言なり。伽陀(ガーター Gāthā)諷頌と譯す。優陀那(ウダーナ Udāna)自說と譯す。尼陀那(ニダーナ Nidāna)因緣と譯す。阿波陀那(アヷダーナ Avadāna)譬喩と譯す。伊帝目多伽(Itivṛtaka)本事と譯す。闍陀伽(ジャータ

大般涅槃經 巻第十四

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

梵行品第二十之一

(一)善男子、云何が菩薩摩訶薩の梵行なる。善男子、菩薩摩訶薩大乘大般涅槃に住し、七善法に住して梵行を具することを得。何等をか七つと爲す。一つには知法、二つには知義、三つには知時、四つには知足、五つには自知、六つには知衆、七つには知尊卑なり。

善男子、云何が菩薩摩訶薩の知法なる。善男子、是の菩薩摩訶薩十二部經を知る。所謂修多羅、祇夜、受記、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝目多伽、闍陀伽、毗佛略、阿浮陀達磨、優波提舍なり。善男子、何等をか名けて修多羅經と爲す。如是我聞より乃至歡喜奉行に至る。是の如き一切を修多羅と名く。何等をか名けて祇夜經と爲す。佛、諸の比丘に告げたまはく、「昔我、汝と愚にして智慧無く、實の如く四眞諦を見ること能はず。是の故に流轉して久しく生死に處し大苦海に沒す。何等をか四つと爲す。苦、集、滅、道なり。」佛、昔日諸の比丘の爲に契經を說き竟る。爾の時に復利根の衆生有り、法を聽かんが爲の故に後佛所に至る。卽便人に問はく、「如來向者何の事をか說くと爲ん」佛、時に

カJātaka)本生と譯す。毗佛略（ヴイプリヤ Vaipul-ya)優婆提舍（ウパデーシヤ Upad-eśa)論義と譯す。

知り已りて卽ち本經に因りて偈を以て頌して曰ふが如し、

　我昔汝等と、四眞諦を見ず
　是の故に久しく、生死の大苦海に流轉す
　若能く四諦を見ば、則ち生死を斷ずることを得
　生死既に已に盡くれば、更に諸有を受けず

是を祇夜と名く。何等をか名けて受記經と爲す。經律有り、如來說く時、諸の天人の爲に佛の記莂を受けしむるが如し「汝阿逸多、未來に王有りて名を儴佉と曰ふ。當に是の世に於て佛道を成じ、號して彌勒と曰ふべし」と。是を受記と名く。

何等をか名けて伽陀經と爲す。修多羅及び諸の戒律を除きて、其の餘の四句の偈を說くこと有り。所謂

　諸惡は作すこと莫かれ、衆善は奉行せよ
　自ら其の意を淨うす、是諸佛の敎なり

是を伽陀と名く。何等をか名けて優陀那經と爲す。佛晡時禪定に入り、諸の天衆の爲に廣く法要を說く。時に諸の比丘、各是の念を作さく「如來今者何の所作をか爲したまふ。」如來明旦禪定より起ちたまひ、人の問ふこと有ること無きに、他心智を以て卽ち自ら說きて「比丘當に知るべし、一切諸天の壽命は極長なり。汝諸の比丘、善い哉他の爲にして已利を求めず。善い哉少欲、善い哉知足、善い哉寂靜」と言ふが如し。是の如きの諸經

問ふこと無きに自ら說く。是を優陀那と名く。何等をか名けて尼陀那經と爲す。諸經の偈、所因の根本他の爲に演說するが如し。舍衛國に一りの丈夫有りて羅網もて鳥を捕ふ。得已りて籠繫し、隨ひて水穀を與へ復還つて放つ。世尊、其の本末因緣を知りて偈を說きて言ふが如し、

　小惡を輕んじて、以て殃無しと爲すこと莫れ
　水渧微なりと雖も、漸く大器に盈つ

是を尼陀那と名く。何等をか名けて阿波陀那經と爲す。戒律中の所說の譬喩の如し。是を阿波陀那と名く。何等をか名けて伊帝目多伽經と爲す。佛の所說の如く「比丘當に知るべし、我出世の時說くべき所の者、名けて契經と曰ふ。鳩留秦佛出世の時、甘露鼓と名け、拘那含牟尼佛の時、名けて法鏡と曰ひ、迦葉佛の時、分別空と名く。」是を伊帝目多伽と名く。何等をか名けて闍陀伽經と爲す。佛世尊、本菩薩と爲り、諸の苦行を修するが如し。所謂「比丘當に知るべし、我過去に於て鹿と作り、羆と作り、麞と作り、兎と作り、粟散王、轉輪聖王、龍、金翅鳥と作る。諸の是の如き等、菩薩道を行ずるの時受くべき所の身なり。」是を闍陀伽と名く。何等をか名けて毗佛略經と爲す。所謂大乘方等經典なり。其の義廣大にして猶し虛空の如し。是を毗佛略と名く。何等をか名けて未曾有經と爲す。彼の菩薩初めて出生の時、人の扶持する無きに、即ち行くこと七步、大光明を放ちて徧く十方を照すが如く、亦獼猴の手に蜜器を捧げて以て如來に獻つるが如く、白頂の狗、佛邊に

【鳩留秦佛】クラクチュチュハンダ(Krakucchanda)過去七佛の第四佛。

【拘那含牟尼佛】カナカムニ(Kanakamuni)過去七佛の第五佛。

【迦葉佛】カーシヤパ(Kāsyapa)過去七佛の第六佛。

【粟散王】粟をちらせる如き小國の王。

【金翅鳥】ガルダ(迦樓羅、Garuḍa)の譯、龍をとりて食とする大鳥。

法を聽くが如く、魔、波旬變じて青牛と爲りて瓦鉢の間を行き、諸の瓦鉢をして互に相振觸せしむるに傷損する無きが如く、佛初めて生じて天廟に入るの時、彼の天像をして起下して禮敬せしむるが如し。是の如き等の經を未曾有と名く。何等をか名けて優波提舍經と爲す。佛世尊所說の諸經、若義論を作して分別廣說して其の相貌を辨ずるが如し。是を優波提舍と名く。菩薩若能く是の如く十二部經を了知せば、名けて知法と爲す。

云何が菩薩摩訶薩の知義なる。菩薩摩訶薩、若一切の文字語言に於て廣く其の義を知る。是を知義と名く。

云何が菩薩摩訶薩の知時なる。善男子、菩薩善く是の如き時中、寂靜を修するに任ふ。是の如きの時中、精進を修するに任ふ。是の如きの時中、捨定を修するに任ふ。是の如きの時中、佛を供養するに任ふ。是の如きの時中、師を供養するに任ふ。是の如きの時中、布施、持戒、忍辱、精進、禪定を修し、般若波羅蜜を具足するに任ふるを知る。是を知時と名く。

云何が菩薩摩訶薩の知足なる。善男子、菩薩の知足は所謂飲食、衣藥、行住坐臥、睡寤語默なり。是を知足と名く。

善男子、云何が菩薩摩訶薩の自知なる。是の菩薩自ら我是の如きの信、是の如きの戒、是の如きの多聞、是の如きの捨、是の如きの慧、是の如きの去來、是の如きの正念、是の如きの善行、是の如きの問、是の如きの答有りと知る。是を自知と名く。

云何が菩薩摩訶薩の知衆なる。善男子、是の菩薩、「是の如き等は是刹利衆、婆羅門衆、居士衆、沙門衆なり。是の衆に於て是の如く行來し、是の如く坐起し、是の如く說法し、是の如く問答すべし」と知る。是を知衆と名く。

善男子、云何が菩薩摩訶薩人の尊卑を知る。善男子、人に二種有り。一つには信、二つには不信なり。菩薩當に知るべし、信者は是善、不信者は名けて善と爲さず。復次に信に二種有り。一つには常に僧坊に往き、二つには往かず。菩薩當に知るべし、其の往者は善、其の不往者は名けて善と爲さず。僧坊に往く者に復二者有り。一つには禮拜し、二つには禮拜せず。菩薩當に知るべし、禮拜者は善、不禮拜者は名けて善と爲さず。其の禮拜者に復二種有り。一つには法を聽き、二つには聽かず。菩薩當に知るべし、聽法の者は善、不聽法の者は名けて善と爲さず。其の聽法の者に復二種有り。一つには至心に聽き、二つには至心ならず。菩薩當に知るべし、至心に聽く者は是則ち善と名け、不至心の者は名けて善と爲さず。至心聽法に復二種有り。一つには義を思ひ、二つには義を思はず。菩薩當に知るべし、義を思ふ者は善、義を思はざる者は名けて善と爲さず。其の思義者に復二種有り。一つには說の如く行じ、二つには說の如く行ぜず。說の如く行ずる者は是則ち善と爲し、說の如く行ぜざるは名けて善と爲さず。如說行者に復二種有り。一つには聲聞を求めて一切苦惱の衆生を利安し饒益すること能はず、二つには無上大乘に回向し、多人を利益して安樂を得しむ。菩薩應に知るべし、能く多人を利し安樂を得しむる者は最上最善なり。

善男子、諸寶の中に如意寶珠最も勝妙爲るが如く、諸味の中に甘露最上なるが如し。是の如き菩薩人天の中に於て最勝最上にして譬喩すべからず。善男子、是を菩薩摩訶薩大乘大涅槃經に住し、七善法に住すと名く。菩薩是の七善法に住し已りて梵行を具することを得。

【二】四無量心を明す。

復次に善男子、復梵行有り。慈、悲、喜、捨を謂ふ。」

(二)迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、若多く慈を修して能く瞋恚を斷じ、悲心を修する者も亦瞋恚を斷ず。云何ぞ而も四無量心と言ふ。義を推して言はば則ち三有るべし。世尊、慈に三縁有り。一つには衆生を縁じ、二つには法を縁じ、三つには則ち無縁なり。悲喜捨心も亦復是の如し。若是の義に從はば、唯一有るべく四有るべからず。衆生縁とは五陰を縁じて其に樂を與へんと願ず、是を衆生縁と名く。法縁とは諸の衆生の所須の物を縁じて之を施與す、是を法縁と名く。無縁とは如來を縁ず、是を無縁と名く。慈とは多く貧窮の衆生を縁ず。如來大師永く貧窮を離れて第一の樂を受く。若衆生を縁ずれば則ち佛を縁ぜず、法も亦是の如し。是の義を以ての故に、如來を縁ずる者を名けて無縁と曰ふ。世尊、慈の一切衆生を縁ずる所、父母、妻子、親屬を縁ずるが如し。是の義を以ての故に衆生縁と名く。法縁とは父母、妻子、親屬を見ず、一切の法皆縁より生ずるを見る、是を法縁と名く。無縁とは法相及び衆生相に住せず、是を無縁と名く。悲、喜、捨心も亦復是の如し。是の故に三なるべく四有るべからず。世尊、人に二種有り。一つには見行、二つには愛行

【薩遮尼揵子】薩遮卽ち梵志を父とし、尼揵外道を母として生れたる子の義。

なり。見行の人は多く慈悲を修し、愛行の人は多く喜捨を修す。是の故に二なるべく四有るべからず。世尊、夫無量とは名けて無邊と曰ふ。邊は得べからず、故に無量と名く。若無量ならば則ち是一なるべく四と言ふべからず。若四と言はば何ぞ無量を得ん。是の故に一なるべく四なるべからざるなり。

佛、迦葉に告げたまはく、「善男子、諸佛如來、諸の衆生の爲に宣ぶる所の法要は、其の言祕密にして了知すべきこと難し。或は衆生の爲に一因緣と說く。何等をか一因緣と爲す。所謂一切有爲の法と說くが如し。或は二種と說く、因緣及び果なり。或は三種と說く、煩惱業苦なり。或は四種と說く、無明と諸行、生と老死となり。或は五種と說く、所謂受、愛、取、有、及び生なり。或は六種と說く、三世の因果なり。或は七種と說く、識、名色、六入、觸、受、及以愛、取を謂ふ。或は八種と說く、無明、行、及び生、老死を除きて其の餘の八事なり。或は九種と說く、城經の中の如し。無明、行、識を除きて其の餘の九事なり。或は十一と說く。薩遮尼揵子の爲に說くが如し。生の一法を除きて其の餘の十一なり。或時具さに十二因緣を說き、王舍城に迦葉等の爲に具さに十二の無明、乃至生老病死を說くが如し。善男子、一つの因緣、衆生の爲の故に種種に分別するが如く、無量の心法も亦復是の如し。善男子、是の義を以ての故に、諸の如來の深祕行處に於て疑を生ずべからず。

善男子、如來世尊大方便有り。無常を常と說き、常を無常と說く。樂を說きて苦と爲し、

苦を說きて樂と爲す。不淨を淨と說き、淨を不淨と說く。我を無我と說き、無我を我と說く。非衆生に於て說きて衆生と爲し、實衆生に於て非衆生と說く。非物を物と說き、物を非物と說く。非實を實と說き、實を非實と說き、非境を境と說き、境を非境と說く。非生を生と說き、生を非生と說く。乃至無明を明と說き、明を無明と說く。色を非色と說き、非色を色と說く。非道を道と說き、道を非道と說く。善男子、如來是の無量の方便を以て爲に衆生を調ふ。豈虛妄ならんや。

善男子、或は衆生の財貨を貪る有り。我其の人に於て自ら其の身を化して轉輪王と作り、無量歲に於て其の所須に隨ひて種種供給し、然して後敎化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。若衆生五欲に貪著する有らば、無量歲に於て妙五欲を以て其の願を充滿し、然して後に勸化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。若衆生、榮豪にして自ら貴ぶ有らば、我其の人に於て、無量歲の中爲に僕使と作りて趨走給侍し、其の心を得已りて卽ち復勸化して、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。若衆生の性戾りて自ら是とし、人の訶諫を須ふる有らば、我無量百千歲の中に於て、敎訶諫喩して心をして調順せしむ。然して後復勸めて、其をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。善男子、如來是の如く無量歲に於て種種の方便を以て諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提に安住せしむ。豈虛妄ならんや。諸佛如來は衆惡に處すと雖も、染汚せらるること無きこと猶し蓮華の如し。善男子、是の如く四無量の義を知るべし。

善男子、是の無量心體性に四有り。若修行する有らば大梵の處に生ず。善男子、是の如く無量伴類に四有り。是の故に四と名く。夫慈を修する者は能く貪欲を斷じ、悲心を修する者は能く瞋恚を斷じ、喜心を修する者は能く不樂を斷じ、捨心を修する者は能く衆生を貪欲し瞋恚するを斷ず。善男子、是の義を以ての故に、名けて四と爲すことを得。一、二、三に非ず。

善男子、汝が言ふ所の如く、慈能く瞋を斷ず。悲も亦是の如くなれば三と說くべし、汝今是の如きの難を作すべからず。何を以ての故に。善男子、恚に二種有り。一つには能く命を奪ひ、二つには能く鞭撻す。慈を修すれば則ち能く彼の奪命を斷じ、悲を修すれば則ち能く彼の鞭撻を除く。善男子、是の義を以ての故に。豈四に非ずや。復次に瞋に二種有り。一つには衆生を瞋り、二つには非衆生を瞋る。慈心を修する者は瞋衆生を斷じ、悲心を修する者は非衆生を斷ず。亦次に瞋に二種有り。一つには因緣有り、二つには因緣無し。慈心を修する者は有因緣を斷じ、悲心を修する者は無因緣を斷ず。復次に瞋に二種有り。一つには過去に於て久しく已に積習し、二つには現在に於て今始めて積習す。慈心を修する者は能く過去を斷じ、悲心を修する者は現在を斷ず。復次に瞋に二種有り。一つには聖人を瞋り、二つには凡夫を瞋る。慈心を修する者は瞋聖人を斷じ、悲心を修する者は瞋凡夫を斷ず。復次に瞋に二種有り。一つには上、二つには中なり。修慈は上を斷じ、修悲は中を斷ず。善男子、是の義を以ての故に則ち名けて四と爲す。何ぞ難じて「三なるべし、

【三】大無量心を論述す。

四に非ず」と言ふことを得ん。是の故に迦葉、是の無量心は伴類相對し、分別して四と爲す。復器を以ての故に名けて四と爲すべし。器若慈有らば則ち悲、喜、捨心有ることを得ず。是の義を以ての故に四にして減ずること無かるべし。善男子、行を以て分別す。故に四有るべし。若慈を行ずる時悲、喜、捨無し。是の故に四有り。善男子、無量を以ての故、に亦四と名くることを得。夫無量とは則ち四種有り。無量心の緣有りて自在に非ざる有り、無量心の自在にして緣に非ざる有り、無量心の亦緣、亦自在なる有り、無量心の緣に非ず自在に非ざる有り。何等か無量有緣非自在なる。無量無邊の衆生を緣じて、而も自在の三昧を得ること能はず。得と雖も定らず、或は得、或は失ふ。何等か無量自在非緣なる。父母、兄弟、姉妹を緣じて安樂ならしめんと欲するが如し、無量緣に非ず。何等か無量亦緣亦自在なる。諸佛菩薩を謂ふ。何等か無量非緣非自在なる。聲聞、緣覺は廣く無量の衆生を緣ずること能はず、亦自在に非ず。善男子、是の義を以ての故に四無量と名く。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。乃ち是諸佛如來の境界なり。善男子、是の如きの四事、聲聞、緣覺無量と名くと雖も、少くして言ふに足らず。諸佛菩薩乃ち名けて無量無邊と爲すことを得。」

(三)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、是の如く是の如し。實に聖言の如し。諸佛如來の有らゆる境界は諸の聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。世尊、頗菩薩大乘大般涅槃に住して慈悲心を得、是大慈大悲心に非ざる有るや不や。」佛の言はく、「有り。善男子、菩薩若諸の衆生の中に於て三品分別す。一つには親人、二つには怨憎、三つには中人なり。親人の中に

於て復三品と作す。上、中、下を謂ふ。怨憎も亦爾なり。是の菩薩摩訶薩、上親の所に於て増上の樂を與へ、中下親に於ても亦復平等に増上の樂を與へ、上怨の所に於て少分の樂を與へ、中怨の所に於て中品の樂を與へ、下怨の所に於て増上の樂を與ふ。菩薩是の如く轉た増す修習して上怨の所に於て中品の樂を與へ、中下怨に於て等しく上樂を與へ、轉た復修習して上、中、下に於て等しく上樂を與ふ。若し上怨の所に上樂を與ふる者は、爾の時に慈心成就と名くることを得。菩薩爾の時に其の父母及び上怨の所に於て平等心を得、差別有ること無し。善男子、是を慈を得て大慈に非ずと名くるなり。』

『世尊、何に縁りてか菩薩、是の如きの慈を得て、猶故名けて大慈と爲すことを得ざる。』

『善男子、成ずること難きを以ての故に、大慈と名けず。何を以ての故に。久しく過去無量劫の中に於て、多く煩惱を集めて未だ善法を修せず。是の故に一日の中に於て其の心を調伏すること能はず。善男子、譬へば豌豆乾ける時、錐もて刺すに終に著くべからざるが如く、諸の煩惱の堅きも亦復是の如し。一日夜心を繋けて散ぜずと雖も、調伏すべきこと難し。又家犬の人を畏れず、山林の野鹿人を見ば怖れ走るが如し。瞋恚去り難きこと家を守る狗の如く、慈心失ひ易きこと彼の野鹿の如し。是の故に此の心調伏すべきこと難し。是の義を以ての故に、大慈と名けず。復次に善男子、譬へば石に畫けば、其の文常に在り、水に畫けば速に滅して、勢久しく住せざるが如し。瞋恚の除き難きこと、譬へば石に畫くが如く、善根の滅し易きこと猶し水に畫くが如し。是の故に此の心調伏を得難し。大火

【四】虛實利樂を簡別す。

聚は其の明久しく住し、電光の明は暫くも停ることを得ざるが如し。瞋は火聚の如く慈は電明の如し。是の故に此の心調伏を得難し。是の義を以ての故に大慈と名けず。

善男子、菩薩摩訶薩初地に住するを名けて大慈と曰ふ。何を以ての故に。善男子、最極惡の者を一闡提と名く。初住の菩薩大慈を修する時、一闡提に於て心差別無し。其の過を見ざるが故に瞋を生ぜず。是の義を以ての故に大慈と名くることを得。善男子、諸の衆生の爲に無利益を除く、是を大慈と名く。衆生に無量の利樂を與へんと欲す、是を大悲と名く。諸の衆生に於て心に歡喜を生ず、之を大喜と名く。擁護する所無し、名けて大捨と爲す。若我が法相己身を見ず。一切法平等無二を見る、是を大捨と名く。自ら己樂を捨てて他人に施與す、是を大捨と名く。

善男子、唯四無量は能く菩薩をして六波羅蜜を増長し具足せしむ。其の餘の諸行は必ずしも能く爾ならず。善男子、菩薩摩訶薩先に世間の四無量心を得。然して後乃ち阿耨多羅三藐三菩提心を發し、次第して方に出世間の者を得。善男子、世の無量に因りて出世の無量を得。是の義を以ての故に、大無量と名く。」

(四)迦葉菩薩、佛に白して言さく、「世尊、無利益を除きて利樂を與ふとは實は爲す所無くして是の如く思惟す、「即ち是虛觀にして實利有ること無し。」世尊、譬へば比丘不淨を觀ずる時、著する所の衣を見て悉く是皮なりと想すれども、而も實は皮に非ず。食噉すべき所皆蟲想を作せども而も實は蟲に非ず。好美の羹を觀じて穢汁の想を作せども而も實は穢に非

【光音天】色界十八天の第六。二禪天の第三、この天は光明を以て語音となすが故に名く。

【聖種性】十地の菩薩を云ふ。この階位の菩薩は中道の妙觀を修し、無明の惑を破して聖地に證入するが故に名く。

ず。食する所の酪を觀じて猶し髓腦の如くすれども而も實は腦に非ず。骨の碎末を觀じて猶し麨想の如くすれども、而も實は麨に非ざるが如く、四無量心も亦復是の如し。眞實に衆生を利益し、其をして樂を得しむること能はず。口に言を發し、衆生に樂を與ふと雖も、而も實は得ず。是の如きの觀は虚妄に非ずや。世尊、若し虚妄に非ず、實に樂を與ふれば、彼の諸の衆生、何が故ぞ諸佛菩薩の威德力を以ての故に、一切樂を受けざる。若し當に眞實に樂を得ざるべくば、佛の所說の如し。「我念ず、往昔唯慈心を修して此の劫世七反成壞を經て、此に來りて生ぜず。世界成ずる時は梵天の中に生じ、世界壞する時は光音天に生ず。若し梵天に生ずれば力勢自在にして能く摧伏する無し。千梵の中に於て最勝最上、大梵王と名く。諸の衆生有りて皆我が所に於て最上の想を生ず。三十六反忉利王釋提桓因と作り、無量百千轉輪王と作る。唯慈心を修して乃ち是の如きの人天の果報を得」と。若し不實ならば云何ぞ此の義と相應することを得ん。」

佛の言はく「善い哉善い哉善男子、汝眞に勇猛畏懼する所無し。」卽ち迦葉の爲に偈を說きて言はく、

若し一衆生に於て、瞋恚心を生ぜず
而も願ひて彼に樂を與ふ、是を名けて慈善と爲す
一切衆生の中、若し悲心を起さば
是を聖種性と名く、福報を得ること無量なり

【五通仙】五神通を體得せる仙人。

【五】慈は善本なることを明す。

設使五通仙、悉く此の大地に滿てらんに
大自在主有りて、其に所安の
象馬種種の物を奉施せん、得る所の福報の果
一慈を修する、十六分中の一つに及ばじ

善男子、夫慈を修するは實にして妄想に非ず、諦かに是眞實なり。若是聲聞、緣覺の慈は是を虛妄と名く。諸佛、菩薩は眞實にして虛ならず。云何が知るや。善男子、菩薩摩訶薩是の如く大涅槃を修行する者、土を觀じて金と爲し、金を觀じて土と爲し、地を水相と作し、水を地相と作し、水を火相と作し、火を水相と作し、地を風相と作し、風を地相と作す。意に隨ひて成就し、虛妄有ること無し。實衆生を觀じて非衆生と爲し、非衆生を觀じて實衆生と爲す。悉く意に隨ひて成じ、虛妄有ること無し。善男子、當に知るべし、菩薩の四無量心は是實の思惟にして不眞實に非ず。

復次に善男子、云何が名けて眞實の思惟と爲す。謂はく、能く諸の煩惱を斷除するが故なり。善男子、夫慈を修する者は能く貪欲を斷じ、悲心を修する者は能く瞋恚を斷じ、喜心を修する者は能く不樂を斷じ、捨心を修する者は能く貪恚及び衆生相を斷ず。是の義を以ての故に眞實の思惟と名く。

(五)復次に善男子、菩薩摩訶薩の四無量心は能く一切諸善の根本と爲す。善男子、菩薩摩訶薩若貧窮の衆生を見ることを得ざれば、緣じて慈を生ずる無し。若慈を生ぜざれば、則ち

惠施の心を起すこと能はず。施の因緣を以て諸の衆生をして安隱樂を得しむ。所謂飲、食、車乘、衣服、華香、牀臥、舍宅、燈明なり。是の如く施す時、心に繫縛無く、貪著を生ぜず。必定して阿耨多羅三藐三菩提に回向せん。其の心爾の時に依止する所無く、妄想永く斷じ、怖畏、名稱、利養の爲にせず、人天を求めず、受くる所の快樂憍慢を生ぜず、反報を望まず、他を誑すが爲の故に布施を行せず、富貴を求めず。凡そ施を行ずる時、受者の持戒、破戒、是田、非田、此は是知識、此は非知識を見ず。施す時是器、非器を見ず。日時、是處、非處を擇ばず。亦復饑饉、豐樂を計らず。因果、此は是衆生、此は非衆生、是福、非福を見ず。復施者、受者、及以財物を見ず。乃至斷及び果報を見ずと雖も、而も常に施を行じて斷絕有ること無し。

善男子、菩薩若持戒、破戒、乃至果報を見ば、終に施すこと能はず。若布施ならざれば則ち檀波羅蜜を具足せず。若檀波羅蜜を具足せざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずること能はず。

善男子、譬へば人有りて身に毒箭を被らんに、其の人の眷屬安隱ならしめんと欲して、毒を除かんが爲の故に、卽ち良醫に命じて爲に箭を拔く。彼の人方に言はく、「且く待て觸るること莫れ。我今當に觀ずべし」「是の如きの毒箭何の方よりか來れる。誰の射る所ぞ。是利利、婆羅門、毗舍、首陀と爲んや。」復更に念を作さく、「是何の木か、竹か柳か、其の鏃鐵は何冶の出す所ぞ、剛か柔か。其の毛羽は是何の鳥翼ぞ、烏、鵄、鷲なりや。所有の

毒は作より生ずと爲ん、自然にして有るや。是人毒と爲ん、惡蛇毒なりや。」是の如きの癡人竟に未だ知ること能はず、尋で便ち命終するが如し。善男子、菩薩も亦爾なり。若施を行ずる時、受者の持戒、破戒、乃至果報を分別して終に施すこと能はず。若能く施さざれば則ち檀波羅蜜を具足せず。若檀波羅蜜を具足せざれば、則ち阿耨多羅三藐三菩提を成ずること能はず。

復次に善男子、菩薩摩訶薩布施を行ずる時、諸の衆生に於て、慈心平等猶し子想の如し。又施を行ずる時、諸の衆生に於て悲愍心を起すこと、譬へば父母の病子を瞻視するが如し。施を行ずるの時其の心歡喜すること猶し父母の、子の病愈ゆるを見るが如し。既に施すの後、其の心放捨すること猶し父母の、子の長大して能く自ら存活するを見るが如し。

是の菩薩摩訶薩、慈心の中に於て食を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て、諸の衆生をして大智の食を得、勤進して無上大乘に回向せしむ。願はくば諸の衆生善智の食を得て聲聞、緣覺の食を求めず。願はくば諸の衆生、法喜の食を得て愛食を求めず。願はくば諸の衆生、悉く般若波羅蜜の食を得、皆充滿せしめ、無閡增上の善根を攝取せしめよ。願はくば諸の衆生、空相を解達し無閡身を得ること、猶し虛空の如くならん。願はくば諸の衆生、常に受者の爲に一切を憐愍して衆の福田と爲らん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心を修するの時、凡そ所施の食、應當に堅く是の如き等の願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心中に於て漿を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所、悉く一切衆生と之を共にす。是の因緣を以て、諸の衆生をして大乘の河に趣きて八味の水を飲み、速かに無上菩提の道を履ましめ、聲聞、緣覺の枯竭を離れて無上の佛乘を渇仰志求す。煩惱の渇を斷じて法味を渇仰し、生死の愛を離れて大乘大般涅槃を愛樂し、法身を具足し、諸の三昧を得、甚深の智慧大海に入らしめん。願はくば諸の衆生、甘露味、菩提出世、離欲寂靜、是の如きの諸味を得ん。願はくば諸の衆生、無量百千の法味を具足せん。法味を具し已りて佛性を見ることを得、佛性を見已りて能く法雨を雨し、法雨を雨し已りて佛性偏く覆ふこと猶し虛空の如し。復其の餘の無量の衆生をして一法味所謂大乘を得しめん。諸の聲聞、辟支佛の味に非ず。願はくば諸の衆生、一甜味を得て六種差別の味有ること無からん。願はくば諸の衆生、唯法味、無閡の佛法所行の味を求めて餘味を求めず。」善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て漿を布施する時、應當に堅く是の如き等の願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て車乘を施す時、常に是の願を作さく、「我今施す所、悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て普く衆生をして大乘を成じ、大乘に住することを得、乘を退かず。不動轉乘、金剛座乘ならしむ。聲聞、辟支佛乘を求めず、佛乘、無能伏乘、無羸乏乘、不退沒乘、無上乘、十力乘、大功德乘、未曾有乘、希有乘、難得乘、無邊乘、知一切乘に向はん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て車乘を施す時、常

に是の如く堅く誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て衣を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所、悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て諸の衆生をして慚愧の衣を得、法界身を覆ひて諸見の衣を裂く。衣服身を離ること一尺六寸、金色身を得て、受くる所の諸觸柔軟無閡、光色潤澤、皮膚細軟、常光無量、無色離色ならしめん。願はくば諸の衆生皆悉く普く無色の身を得、一切色を過ぎて無色の大般涅槃に入ることを得ん。」善男子、菩薩摩訶薩衣を布施する時、應當に是の如く堅く誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈を修する中に於て華香、塗香、粖香、諸の雜香を布施する時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て、諸の衆生をして一切皆佛華三昧を得、七覺の妙鬘其の首頂に繫けしめん。願はくば諸の衆生形滿月の如く、所見の諸色微妙第一ならん。願はくば諸の衆生、皆一相百福莊嚴を成ぜん。願はくば諸の衆生、意に隨ひて可意の色を見ることを得ん。願はくば諸の衆生、常に善友に遇ひ、無閡香を得て諸の臭穢を離れん。願はくば諸の衆生、諸の善根、無上珍寶を具せん。願はくば諸の衆生、相視て和悅し憂苦有ること無けん。咸く衆善を備へて相憂念せざらん。願はくば諸の衆生、戒香具足せん。願はくば諸の衆生、無閡戒を持ち、香氣芬馥十方に充滿せん。願はくば諸の衆生、堅牢戒、無悔の戒、一切智戒を得ん。諸の破戒を離れ、悉く無戒、未曾有戒、無師戒、無作戒、無穢戒、無汙染戒、竟已戒、究竟戒、

平等戒を得ん。塗割善惡等しうして憎愛無けん。願はくば諸の衆生、無上戒、大乘の戒、小乘戒に非ざるを得ん。願はくば諸の衆生、悉く尸波羅蜜を具足して猶し諸佛成就する所の戒の如くなることを得ん。願はくば諸の衆生、悉く布施、持戒、忍辱、精進、禪、智に熏修せられん。願はくば諸の衆生、悉く大般涅槃微妙の蓮華、其の華の香氣十方に充滿するを成就することを得ん。願はくば衆生をして、純ら大乘大般涅槃無上香膳を食し、蜂の華を采るに、但香味を取るが如くならしめよ。願はくば諸の衆生、悉く無量の功德所熏の身を成就することを得ん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て華香を施す時、常に當に堅く是の如きの誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て牀敷を施す時、常に是の願を作さく、「我今施す所、悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て、諸の衆生をして天中天の臥する所の牀を得、大智慧四禪處に坐することを得、菩薩の臥する所の牀に臥して、聲聞、辟支佛の牀に臥せざらしめん。願はくば諸の衆生、安樂臥を得て生死の牀を離れ、大涅槃の師子臥牀を成ぜん。願はくば諸の衆生、此の牀に坐し已りて、復其の餘の無量の衆生の爲に神通師子遊戲を示現せん。願はくば諸の衆生、此の大乘大宮殿の中に住して、諸の衆生の爲に佛性を演說せん。願はくば諸の衆生、無上牀に坐して世法に降伏せられざらん。願はくば諸の衆生、忍辱の牀を得て生死、饑饉、凍餓を離れん。願はくば諸の衆生、無畏牀を得て永く一切の煩惱の怨賊を離れん。願はくば諸の衆生、清淨牀を得て專ら無上正眞の道

を求めん。願はくば諸の衆生、善法牀を得、常に善友に擁護せられん。願はくば諸の衆生右脇に牀に臥するを得て、諸佛所行の法に依因せん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て牀敷を施す時、應當に堅く是の如きの誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て舍宅を施す時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て、諸の衆生をして大乘の舍に處して善友所行の行を修行し、大悲行、六波羅蜜行、大正覺行、一切菩薩所行の道行、無邊廣大如虛空行を修せしめん。願はくば諸の衆生、皆正念を得て惡念を遠離せん。願はくば諸の衆生、悉く常樂我淨に安住して永く四倒を離るることを得ん。願はくば諸の衆生、悉く皆出世の文字を受持せん。願はくば諸の衆生、必ず無上一切智の器と爲らん。願はくば諸の衆生、悉く皆甘露法舍に入ることを得ん。願はくば諸の衆生、初中後心、常に大乘涅槃の宅に入らん。願はくば諸の衆生、未來世に於て常に菩薩の居する所の宮殿に處せん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て舍宅を施す時、常に當に堅く是の如きの誓願を發すべし。

復次に善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て燈明を施す時、常に是の願を作さく、「我今施す所悉く一切衆生と之を共にし、是の因緣を以て、諸の衆生をして光明無量にして佛法に安住せしめん。願はくば諸の衆生、常に照明を得ん。願はくば諸の衆生、色微妙光澤第一を得ん。願はくば諸の衆生、其の目清淨にして諸の翳網無けん。願はくば諸の衆生、大

【六】慈は能く三乘の善本となすことを明す。

智炬を得、善く我無く、衆生相無く、人無く、命無きを解せん。願はくば諸の衆生、皆清淨佛性猶し虛空の如くなるを觀見することを得ん。願はくば諸の衆生、肉眼清淨にして十方恆沙の世界を徹見せん。願はくば諸の衆生、佛の光明を得て普く十方を照さん。願はくば諸の衆生、無閡明を得て皆悉く清淨佛性を見ることを得ん。願はくば諸の衆生、大智の明を得て、一切の闇及び一闡提を破せん。願はくば諸の衆生、無量の光普く無量の諸佛の世界を照すを得ん。願はくば諸の衆生、大乘の燈を然して二乘の錠を離れん。願はくば諸の衆生、得る所の光明、無明の闇を滅すること千日に過逾せん。願はくば諸の衆生、火珠明を得て、悉く三千大千世界の所有の黑闇を滅せん。願はくば諸の衆生、五眼を具足して諸法の相を悟り、無師覺を成ぜん。願はくば諸の衆生、見無く明無けん。願はくば諸の衆生、悉く大乘大般涅槃の微妙光明を得て、衆生に眞實佛性を示悟せん。」善男子、菩薩摩訶薩慈心の中に於て燈明を施す時、常に堅く是の如きの誓願を發すべし。

(六)善男子、一切の聲聞、緣覺、菩薩、諸佛如來の有らゆる善根は慈を根本と爲す。善男子、菩薩摩訶薩慈心を修習すれば、能く是の如きの無量の善根を生ず。所謂不淨、出息入息、無常生滅、四念處、七方便、三觀處、十二因緣、無常等觀、煖法、頂法、忍法、世第一法、見道、修道、正勤如意、諸根諸力、七菩提分、八道、四禪、四無量心、八解脫、八勝處、十一切入、空無相願、無諍三昧、知他心智、及び諸の神通、知本際智、聲聞智、緣覺智、菩薩智、佛智なり。善男子、是の如き等の法は慈を根本と爲す。善男子、是の義を以ての故

【七】慈は一切善法に徧ずることを明す。

に、慈は是眞實にして虛妄に非ざるなり。若人、誰か是一切諸善の根本と問ふ有らば、當に慈是なりと言ふべし。是の義を以ての故に、實にして虛妄に非ず。

（七）善男子、能く善を爲す者を實思惟と名く。實思惟とは即ち名けて慈と爲す。慈は即ち如來なり。慈は即ち大乘、大乘は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち菩提道、菩提道は即ち如來、如來は即ち慈なり。善男子、慈は即ち大梵、大梵は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは能く一切衆生の爲に父母と作る。父母は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは乃ち是不可思議諸佛の境界なり。不可思議諸佛の境界は即ち是慈なり。當に知るべし、慈とは即ち是如來なり。善男子、慈とは即ち是衆生の佛性なり。是の如きの佛性は久しく煩惱に覆蔽せらる。故に衆生をして覩見することを得ざらしむ。佛性は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち大空、大空は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち虛空、虛空は即ち慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是常、常は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是樂、樂は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是淨、淨は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち是我、我は即ち是法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈は即ち甘露、甘露は即ち慈なり。慈は即ち佛性、佛性は即ち法、法は即ち是僧なり。僧は即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは即ち是一切菩薩の無上の道なり。道は

即ち是慈、慈は即ち如來なり。善男子、慈とは即ち是諸佛世尊の無量の境界なり。無量の境界は即ち是慈なり。當に知るべし、慈は即ち是如來なり。

善男子、慈若無常ならば、無常は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

善男子、慈若是苦ならば、苦は即ち是慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

善男子、慈若不淨ならば、不淨は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

善男子、慈若無我ならば、無我は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

善男子、慈若妄想ならば、妄想は即ち慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

善男子、慈若檀波羅蜜と名けざれば、非檀の慈なり。當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。乃至般若波羅蜜も亦復是の如し。善男子、慈若衆生を利益すること能はざれば、是の如きの慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若一相の道に入らざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若諸法を覺了すること能はざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若如來性を見ること能はざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若法悉く是有相と見れば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若有漏ならば、有漏の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若有爲ならば、有爲の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若初住に住すること能はざれば、初住に非ざるの慈は當に知るべし、即ち是聲聞の慈なり。善男子、慈若佛の十力、四無所畏を得ること能はざれば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。善男子、慈若能く四沙門果を

【八】慈の不可思議を明す。

【九】慈について論義し、慈の功德を明す。

得ば、當に知るべし、是の慈は是聲聞の慈なり。

(八)善男子、慈若有無、非有非無ならば、是の如きの慈、諸の聲聞、辟支佛等の能く思議する所に非ず。善男子、慈若不可思議ならば、法は不可思議なり、佛性は不可思議なり、如來も亦不可思議なり。善男子、菩薩摩訶薩大乘大般涅槃に住して、是の如きの慈を修すれば、復睡眠の中に安んずと雖も、而も睡眠せず、勤めて精進するが故に。常に覺寤すと雖も亦覺寤無し、眠ること無きを以ての故に。睡眠の中に於て諸天護ると雖も、亦護者無し、惡を行ぜざるが故に。眠惡夢せず、不善有ること無し、睡眠を離るるが故に。命終の後梵天に生ずと雖も、亦所生無し、自在を得るが故なり。善男子、夫慈を修する者は、能く是の如きの無量無邊の功德を成就することを得。善男子、是の大涅槃微妙の經典も、亦能く是の如きの無量無邊の功德を成就す。諸佛如來も亦是の如きの無量無邊の功德を成就することを得。』

(九)迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の有らゆる思惟は悉く是眞實にして、聲聞、緣覺は眞實に非ざる者なり。一切衆生何が故ぞ、菩薩の威力を以て等しく快樂を受けざる。若諸の衆生實に樂を得ざれば、當に知るべし、菩薩所修の慈心利益無しと爲す。』佛の言はく、『善男子、菩薩の慈利益せざるに非ず。善男子、諸の衆生有りて或は必ず苦を受け、或は受けざる有り。若衆生必ず苦を受くる者有らば、菩薩の慈利益無しと爲す。一闡提を謂ふ。若受苦必定ならざる者有らば、菩薩の慈則ち利益を爲し、彼の衆生をして

悉く快樂を受けしむ。善男子、譬へば人有りて遙に師子、虎豹、豺狼、羅刹鬼等を見れば、自然に怖を生じ、夜行杌を見て亦恐畏を生ずるが如し。善男子、是の如きの諸人自然に怖畏す。衆生是の如く慈を修する者を見れば、自然に樂を受く。善男子、是の義を以ての故に、菩薩の修慈は是實の思惟にして利益無きに非ず。

善男子、我が說く是の慈は無量の門有り、所謂神通なり。善男子、提婆達の阿闍世を敎へて如來を害せんと欲するが如し。是の時我、王舍大城に入りて次第に乞食す。阿闍世王卽ち護財の狂醉の象を放ちて我及び諸弟子を害せしめんと欲す。其の象、爾の時無量百千の衆生を蹈殺す。衆生死し已りて多く血氣有り。是の象嗅ぎ已りて狂醉常に倍す。我が翼從の被服の赤色を見て、呼んで是を血と謂ふ、而も復我が弟子の中に趣るを見る。未離欲の者、四散して馳走す。唯阿難を除く。爾の時に王舍城の中の一切の人民、同時に聲を擧げて號哭流涙し、是の如きの言を作さく、「怪しい哉如來、今日終沒せん。如何ぞ正覺一旦散壞す。」是の時に調達、心に歡喜を生ず、「瞿曇沙門の滅沒甚だ善し。今より已往眞に是現せず。快い哉此の計、我が願遂ぐることを得たり」と。善男子、我爾の時に於て護財象を降伏せんと欲するが爲の故に、卽ち慈定に入り手を舒べて之に示す。卽ち五指に於て五師子を出す。是の象見已りて其の心怖畏して大小便を失し、身を擧げ地に投じて我が足を敬禮す。善男子、我時に手指實に師子無し。乃ち是慈を修する善根力の故に、彼をして調伏せしむ。

【首波羅】シュラーヴスティー(Śrāvasti) 舎衛とも書く。舎衛城のこと。

復次に善男子、我涅槃せんと欲して始初めて發足して拘尸那城に向ふ。五百の力士有り、其の中路に於て平治掃灑す。中に一石有り、衆擧げ移さんと欲して力を盡せども能はず。我時に憐憫して即ち慈心を起す。彼の諸の力士、尋で即ち我が足の拇指を以て此の大石を擧げ、擲ちて虚空に置き、還つて手を以て接して右の掌に安置し、吹きて碎抹せしめ、復還つて之を合するを見る。彼の力士をして貢高の心を息めしめ、即ち爲に略して種種の法要を說き、其をして倶に阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。善男子、如來爾の時に實に指を以て此の大石を擧げて虚空の中に在き、還つて右掌に置き、吹きて碎抹せしめ、復合して本の如くせり。善男子、當に知るべし、即ち是慈善根の力、諸の力士をして是の如きの事を見しむ。

復次に善男子、此の南天竺に一大城有り、首波羅と名く。是の城中に於て一りの長者有りて名を盧至と曰ふ、衆の導主爲り。已に過去の無量佛の所に於て諸の善本を植う。善男子、彼の大城の中の一切の人民、邪道に信伏し、尼揵に奉事す。我時に彼の長者を度せんと欲するが故に、王舎城より彼の城邑に至る、其の間相去ること六十五由旬なり。佛大衆と歩行して往く。彼の諸人を化度せんと欲するが爲の故なり。尼揵、我れ彼の城に至らんと欲するを聞きて是の念を作さく「沙門瞿曇若此に至らば、此の諸の人民便ち當に我を捨てて復供給せざるべし。我等窮悴如何ぞ存活せん。」諸の尼揵輩各各分散して彼の城人に告ぐ「沙門瞿曇今此に來らんと欲す。然るに諸の沙門父母を委棄して東西に馳騁す。所至の

處能く土地五穀登らず、人民饑饉し、死亡の者衆く、羸瘦相尋いで救濟すべきこと無し。瞿曇無賴、純ら諸の惡羅刹鬼神を將ゐ、以て侍從と爲す。父無く母無き孤窮の人、而も就て咨啓して爲に門徒と作る。教詔すべき所純ら虛空を說く。其の至處に隨ひて初て安樂無し。彼の人聞き已りて卽ち怖畏を懷き、頭面に尼揵子の足を敬禮して白して言さく、「大師、我等今者當に何の計を設くべき。」尼揵答へて言はく、「沙門瞿曇、性叢林、流泉、清水を好み。外に設有らば毀壞すべし。汝等便ち相與に城を出で、林木を斬伐して遺す有らしむること勿れ。流泉、井池塡むるに臭穢を以てすべし。堅く城門を閉ぢて各器仗を嚴にし、壁に當りて防護し勤めて自ら固く守れ。彼設ひ來るも前むことを得しむること莫れ。若前まざれば汝當に安隱なるべし。我等も亦當に種種の術を作して、彼の瞿曇をして道を復して還り去らしむべし。」彼の諸の人民是の語を聞き已りて敬奉して施行す。樹木を斬伐し、諸の水を汙辱し、器仗を莊嚴して牢く自ら防護す。善男子、我爾の時に於て、彼の城に至り已りて一切の樹木、叢林を見ず。唯諸人器仗を莊嚴し、壁に當りて自ら守るを見る。是の事を見已りて、尋で憐愍を生じて慈心之に向ふに、有らゆる樹木還つて生じて本の如し。復更に是の餘の諸樹を生長する稱計すべからず。河、池、井、泉、其の水清淨にして其の中に盈滿して靑瑠璃の如し。衆の雜華を生じて其の上に彌覆す。其の城壁を變じて紺瑠璃と爲す。城內の人民悉く我及び大衆を徹見することを得、門自ら開闢して能く制する者無し。所嚴の器仗變じて雜華と成る。盧至長者を上首と爲し、其の人民と俱共に相隨ひて我

が所に來至す。我即ち爲に種種の法要を說き、彼の諸人をして一切皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。善男子、我爾の時に於て實に種種の樹木を化作し、清淨の流水河池に盈滿し、其の本城を變じて紺瑠璃と爲して、彼の人民をして我が身を徹見し、其の城門を開き、器仗を華と爲す。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、能く彼の人をして是の如きの事を見しむ。

復次に善男子、舍衛城に婆羅門女、婆私吒と名くる有り。唯一子有りて之を愛すること甚だ重く、病に遇ひて命終す。爾の時に女人愁毒心に入り、狂亂して性を失し、裸身にして恥づる無く、四衢に遊行して啼哭して聲を失す。唱へて言ふ「子子、汝何の處にか去る」と。城邑に周徧して休已有ること無し。而も是の女人、已に先佛に於て衆の德本を植う。善男子、我是の女に於て慈愍の心を起す。是の時女人即ち我を見ることを得て便ち子想を生じ、還つて本心を得、前んで我が身を抱き子を愛するの法の如くす。我時に即ち侍者阿難に告ぐ「汝衣を持して是の女人に與ふべし。」既に衣を與へ已りて、便ち爲に種種に諸の法要を說く。是の女法を聞き、歡喜踊躍して阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我爾の時に於て實は彼の子に非ず、彼は我が母に非ず、亦抱持すること無し。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、彼の女人をして是の如きの事を見しむ。

復次に善男子、波羅奈城に優婆夷の摩訶斯那達多と名くる有り。已に過去無量の先佛に於て諸の善根を種う。是の優婆夷、夏九十日衆僧を屈請して醫藥を奉施す。是の時衆中に

一比丘有りて身重病に嬰る。良醫之を診するに當に肉藥を須ふべし。若肉を得れば病則ち除くべく、若肉を得ざれば命將に全からざらんとす。時に優婆夷、醫の此の言を聞き、尋いで黃金を持して徧く市里に至り是の如きの言を唱ふ「誰か肉を賣る有らん、吾之を買はんと欲す。若肉有らば當に等しく金を與ふべし。」城市に周徧して悉く得ること能はず。是の優婆夷、尋いで自ら刀を取りて其の股肉を割き、切りて以て羹を爲り、種種の香を下して病比丘に施す。比丘服し已りて、病即ち差ゆることを得たり。是の優婆夷瘡を患ひて苦惱し、堪忍すること能はず。即ち聲を發して言はく「南無佛陀南無佛陀」と。我爾の時に於て舍衛城に在りて其の音聲を聞き、是の女人に於て大慈心を起す。是の女尋いで我が良藥を持して其の瘡上に塗るを見て、還復して本の如し。我即ち爲に種種の妙法を說く。法を聞きて歡喜し、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我爾の時に於て實に波羅奈城に往至して、藥を持して彼の優婆夷の身に塗らず。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力彼の女人をして是の如きの事を見しむ。

復次に善男子、調達惡人貪にして足ることを知らず。多く酥を服するが故に、頭痛、腹滿、大苦惱を受けて堪忍すること能はず。是の如きの言を發す「南無佛陀南無佛陀」と。我時に優禪尼城に住在す。其の音聲を聞きて即ち慈心を生ず。爾の時に調達、尋いで便ち我其の所に往至して手づから頭腹を摩し、鹽湯を授與して之を服せしむるを見る。服し已りて平復す。善男子、我實に提婆達が所に往いて其の頭腹を摩で、湯を授けて服せしめず。

善男子、當に知るべし。皆是慈善根の力、提婆達をして是の如きの事を見しむ。

復次に善男子、憍薩羅國に諸の羣賊有り、其の數五百なり。羣黨鈔劫して害を爲すこと滋甚だし。波斯匿王其の縱暴を患ひ、兵を遣して伺ひ捕ふ。得已りて眼を挑り、黒闇叢林の下に逐著す。是の諸の羣賊、已に先佛に於て衆の德本を植う。既に目を失ひ已りて大苦惱を受け、各是の言を作さく「南無佛陀南無佛陀、我等今救護有ること無し」と。啼哭號咷す。我時に祇洹精舍に住在す。其の音聲を聞きて即ち慈心を生ず。時に涼風有り、香山中の種種の香藥を吹きて其の眼匡に滿つ。尋いで還つて眼を得、本の如く異ならず。諸賊眼を開き、即ち如來其の前に住立して爲に法を説くを見る。賊法を聞き已りて阿耨多羅三藐三菩提心を發す。善男子、我爾の時に於て、實に風香山中の種種の香藥を吹くことを作し、其の人の前に住して爲に説法せず。善男子、當に知るべし。皆是慈善根の力、彼の羣賊をして是の如きの事を見しむ。

復次に善男子、瑠璃太子愚癡を以ての故に、其の父王を廢し自ら立ちて主と爲り、復宿嫌を念じて多く釋種を害す。萬二千の釋種の諸女を取り、耳鼻を刵劓し、手足を斷截して之を阬塹に推す。時に諸の女人身苦惱を受け、是の如きの言を作さく「南無佛陀南無佛陀、我等今者救護有ること無し」と。復大いに號咷す。是の諸の女人、已に先佛に於て諸の善根を種う。我爾の時に於て竹林の中に在り。其の音聲を聞きて即ち慈心を起す。諸女爾の時に、我迦毘羅城に來至して、水を以て創を洗ひ藥を以て之に塗るを見、苦痛尋いで除き、

【大愛道比丘尼】マハープラジャーパティ(Mahāprajāpati)釋尊の姨母、摩耶夫人の姉、後出家して比丘尼となる。

耳鼻、手足還復して本の如し。我時に即ち爲に略して法要を説き、悉く倶に阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむ。即ち大愛道比丘尼の所に於て法の如く出家し、具足戒を受けしむ。善男子、如來爾の時實に迦毘羅城に往至して水を以て創を洗ひ、薬を塗りて苦を止めず。善男子、當に知るべし、皆是慈善根の力、彼の女人をして是の如きの事を見しむ。

悲喜の心も亦復是の如し、善男子、是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩の修慈思惟は即ち是眞實にして虚妄に非ざるなり。善男子、夫無量とは思議すべからず。菩薩の所行は思議すべからず。諸佛の所行も亦思議すべからず。是の大乘典大涅槃經も亦思議すべからず。」

【梵行品二】此品は前品に續き四無量心、入知見、四無閡等の梵行を明すの章なり。
【一】四無量心の果を明す。初に有名なる極愛一子の義を説く。

大般涅槃經　巻第十五

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

梵行品第二十之二

（一）『復次に善男子、菩薩摩訶薩慈悲喜を修し已りて極愛一子の地に住することを得。善男子、云何が此の地を名けて極愛と曰ひ、復一子と名く。善男子、譬へば父母、子の安隱を見ば心大いに歡喜するが如く、菩薩摩訶薩是の地中に住するも亦復是の如し。諸の衆生を視ること一子に同じ。善を修する者を見ば大歡喜を生ず。是の故に此の地を名けて極愛と曰ふ。

善男子、譬へば父母、子の患に遇ふを見て心に苦惱を生じ、之を憫みて愁毒し、初て捨離すること無きが如く、菩薩摩訶薩の是の地中に住するも亦復是の如し。諸の衆生の煩惱の病に纒切せらるるを見て心に愁惱を生じ、憂念すること子の如く、身の諸の毛孔より血皆流出す。是の故に此の地を名けて一子と爲す。

善男子、人小さき時、土塊、穢物、瓦石、枯骨、木枝を拾ひ取りて口中に置くに、父母見已りて其の患を爲さんことを恐れて左手に頭を捉へ、右手に挑り出すが如く、菩薩摩訶

【二】慈につきて論義す。

薩是の地中に住するも亦復是の如し。諸の衆生法身未だ增せず。或は身、口、意業の不善を行ずるを見る。菩薩見已りて則ち智手を以て之を拔き出でしめ、彼をして生死に流轉して諸の苦惱を受けしむることを欲せず。是の故に此の地を復一子と名く。

善男子、譬へば父母所愛の子、舍てて終亡すれば父母愁惱して與に命を幷てんと願ふが如く、菩薩も亦爾なり。一闡提の地獄に墮するを見ば、亦與倶に地獄の中に生ぜんと願ふ。何を以ての故に。是の一闡提、若受苦の時、或は一念の改悔の心を生せば、我卽ち當に爲に種種の法を說き、彼をして一念の善根を生ずることを得しむべし。是の故に此の地を復一子と名く。」

善男子、譬へば父母に唯一子有り。其子の睡寤、行住坐臥、心常に之を念ず、若罪咎有らば、善言誘喩して其に惡を加へざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。諸の衆生の、若は地獄、畜生、餓鬼に墮し、或は人天中に善惡を造作するを見、心常に之を念じて初て放捨せず、若諸惡を行ずれども、終に瞋を生じて惡を以て之に加へず。是の故に此の地復一子と名く。」

（二）迦葉菩薩佛に白して言さく「世尊、佛の所說の如きは其の言祕密なり。我今智淺くして云何ぞ能く解せん。若諸の菩薩一子地に住して是の如きを能せば、云何ぞ如來昔國王と爲りて菩薩道を行ぜる時、爾の所の婆羅門の命を斷絕せる。若此の地を得ば則ち護念すべし。若得ざる者は復何の因緣にて地獄に墮せざる。若等しく一切衆生を視ること、子想に同じ

【須菩提】スブーテ(Subhūti)佛の十大弟子の一人。解空第一の稱あり。

く羅睺羅の如くならしめば、何が故ぞ復提婆達多に向ひて是の如きの言を説く「癡人無羞人の涕唾を食す」と。彼をして聞き已りて瞋恨を生じ、不善心を起して佛身の血を出さしむ。提婆達多是の惡を造り已りて如來復記す「當に地獄に墮して一劫罪を受くべし」と。世尊、是の如きの言云何ぞ義に於て相違背せざらんや。世尊、須菩提は虛空地に住し、凡そ城に入りて飮食を求乞せんと欲すれば、要ず先人を觀ず。若已に於て嫌嫉の心を生ずる有らば、則ち止めて行ぜず。乃至極めて饑うとも猶行いて乞はず。何を以ての故に。是の須菩提常に是の念を作さく「我憶す、往昔、福田の所に於て一の惡念を生じ、是の因緣に由りて大地獄に墮して種種の苦を受く。我今寧ろ饑ゑて終日食せずとも、終に彼をして我に於て嫌を起し、地獄に墮して諸の苦惱を受けしめじ」。復是の念を作さく「若衆生、我が立つを嫌ふ者有らば、我當に終日端坐して起たじ、若衆生、我が坐するを嫌ふ者有らば、我當に終日立ちて處を移さざるべし。行臥も亦爾なり。是の須菩提、衆生を護るが故に尙是の心を起す。何に況や菩薩をや。菩薩若一子地を得る者、何に緣りてか如來、是の麤言を出して諸の衆生をして重惡心を起さしむ。」

佛、迦葉に告げたまはく「汝今是の如きの難を作して佛如來、諸の衆生の爲に煩惱の因緣を作すと言ふべからず。善男子、假使蚊蚋の能く海底を盡すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因緣を作らず。善男子、假令大地悉く非色と爲り、水堅相と爲り、火冷相と爲り、風住相と爲り、三寶佛性及以虛空無常相を作すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の

因縁を作さず。善男子、假使四重禁罪を毀犯し及び一闡提正法を謗ずる者、現身に十力、無畏、三十二相、八十種好を成ずるを得れども、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。善男子、假使聲聞、辟支佛等常に住して變ぜしむとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。善男子、假使十住の諸の菩薩等、四重禁を犯し一闡提と作り正法を誹謗すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。善男子、假使一切の無量の衆生佛性を斷滅し、如來究竟じて般涅槃に入れども、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。善男子、假使羂を擲ちて能く風を繫縛し、齒能く鐵を破し爪須彌を壞すとも、如來終に諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作さず。寧ろ毒蛇と一處に同共し、其の兩手を餓師子の口に內れ、佉陀羅炭を用ひて身を洗浴すとも、如來世尊諸の衆生の爲に煩惱の因縁を作すと發言すべからず。善男子、如來眞實に能く衆生の爲に煩惱を斷除し、終に爲に煩惱の因縁を作さず。

善男子、汝の言ふ所の如く、如來往昔婆羅門を殺すとは、善男子、菩薩摩訶薩は乃至蟻子尙故らに殺さず、況や婆羅門をや。菩薩常に種種の方便を作して衆生に無量の壽命を惠施す。善男子、夫食を施す者は則ち命を施すと爲す。菩薩摩訶薩檀波羅蜜を行ずる時、常に衆生に無量の壽命を施す。善男子、不殺戒を修して壽命長きことを得。菩薩摩訶薩尸波羅蜜を行ずる時、則ち一切衆生に無量の壽命を施與すと爲す。善男子、口を愼みて過無ければ壽命長きことを得。菩薩摩訶薩羼提波羅蜜を行ずる時、常に衆生を勸めて怨想を生ず

ること莫れ。直を人に推し曲を引きて己に向ひ、爭訟する所無ければ壽命長きことを得。是の故に菩薩羼提波羅蜜を行ずる時、已に衆生に無量の壽命を施す。善男子、精勤して善を修すれば壽命長きことを得。菩薩摩訶薩毗梨耶波羅蜜を行ずる時、常に衆生を勸めて善法を勤修せしむ。衆生行じ已りて無量の壽を得。是の故に菩薩毗梨耶波羅蜜を行ずる時、已に衆生に無量の壽命を施す。善男子、攝心を修する者壽命長きことを得。菩薩摩訶薩禪波羅蜜を行ずる時、諸の衆生に平等心を修するを勸む。衆生行じ已りて壽命長きことを得。是の故に菩薩禪波羅蜜を行ずる時、已に衆生に無量の壽命を施す。善男子、諸の善法に於て放逸せざる者壽命長きことを得。菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時、諸の衆生を勸めて諸々の善法に於て放逸を生ぜず。衆生行じ已りて是の因緣を以て壽命長きことを得。是の故に菩薩般若波羅蜜を行ずる時、已に衆生に無量の壽命を施す。善男子、是の義を以ての故に。菩薩摩訶薩諸の衆生に於て終に命を奪ふこと無し。

善男子、汝向に問ふ所の婆羅門を殺す時是の地を得るや不やとは、善男子、我時に已に得。愛念を以ての故に其の命根を斷ず、惡心に非ざるなり。善男子、譬へば父母唯一子有りて之を愛すること甚重、官の憲制を犯す。是の時父母、怖畏を以ての故に若は擯け若は殺す。復擯殺すと雖も、惡心有ること無きが如く、菩薩摩訶薩正法を護るが爲にも亦復是の如し。若衆生の大乘を謗ずる者有らば、即ち鞭撻を以て苦ろに之を加治す。或は其の命を奪ひ往を改めて善法を遵修せしめんと欲す。菩薩の意常に是の思惟を作さく、何の因緣

を以てか、能く衆生をして信心を發起せしむ。其の方便に隨ひて要ず當に之を爲すべし。諸の婆羅門命終の後阿鼻地獄に生ず。卽ち三念有り。一つには自ら念ず「我何の處より此に來生す」卽ち自ら人道の中より來るを知る。二つには自ら念ず「我今生ずる所是何の處と爲ん」卽便自ら是阿鼻地獄と知る。三つには自ら念ず「何の業緣に乘りて此に來生す」卽便自ら方等大乘經典を誘し、信ぜざるの因緣に乘りて國主に殺されて此に來生するを知る。」是の事を念じ已りて、卽ち大乘方等經典に於て信敬の心を生ず。尋時命終して甘露鼓如來の世界に生じ、彼に於て壽命十劫を具足す。善男子、是の義を以ての故に我往昔より乃ち是の人に十劫の壽命を與ふ。云何ぞ殺と名けん。

善男子、若人地を掘り、草を刈り、樹を斫り、死尸を斬截し、罵詈鞭撻せん。是の業緣を以て地獄に墮せんや不や。」迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、我佛所說の義を解するが如きは、地獄に墮すべし。何を以ての故に。佛昔聲聞の爲に法を說きたまふが如し、「汝諸の比丘、諸の草木に於て惡心を生ずること莫れ。何を以ての故に。一切衆生惡心に因るが故に地獄に墮す」と。」

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく「善い哉善い哉汝が說く所の如し、善く受持すべし。善男子、若惡心に因りて地獄に墮すれば、菩薩、爾の時に實に惡心無し。何を以ての故に。菩薩摩訶薩一切衆生、乃至蟲蟻に於て悉く憐愍利益の心を生ずるが故に。所以は何ん。善く因緣諸の方便を知るが故に。方便力を以て、衆生をして諸の善根を種ゑしめんと

【拘槃荼】クムバーンダ(Kumbhāṇḍa)厭眉鬼と譯す鬼の名。
【加羅富單那】カーラ、プータナ(Kala-Pūtana)黒臭餓鬼と譯す。

欲す。善男子、是の義を以ての故に、我爾の時に於て善方便を以て其の命を奪ふと雖も、而も悪心に非ず。善男子、婆羅門の法若蟻子を殺して十車に滿足すとも罪報有ること無し。蚊蚋、蚤蝨、貓子、師子、虎狼、熊羆の諸悪蟲獸、及び餘の能く衆生の爲に害となる者、殺して十車に滿つ、鬼神、羅刹、拘槃荼、迦羅富單那、顛狂乾枯、諸の鬼神等、能く衆生の爲に嬈害を作す者、其の命を斬奪すとも悉く罪報無し。若惡人を殺さば即ち罪報有り。殺し已りて悔いざれば即ち餓鬼に墮す。若能く懺悔して三日斷食すれば、其の罪消滅して遺餘有ること無し。若和尚及び其の父母、女人、及び牛を害せば、無數千年地獄の中に在り。

善男子、佛及び菩薩は、殺に三有るを知る。下、中、上を謂ふ。下とは蟻子、乃至一切の畜生なり。唯菩薩の示現生の者を除く。善男子、菩薩摩訶薩願因緣を以て畜生を受くるを示す、是を下殺と名く。下殺の因緣を以て地獄、畜生、餓鬼に墮して具さに下苦を受く。何を以ての故に。是の諸の畜生微善根有り、是の故に殺者具さに罪報を受く。是を下殺と名く。中殺とは凡夫人より阿那含に至る、是を名けて中と爲す。是の業因を以て地獄、畜生、餓鬼に墮して具さに中苦を受く。是を中殺と名く。上殺とは父母、乃至阿羅漢、辟支佛、畢定の菩薩、是を名けて上と爲す。是の業因を以て阿鼻大地獄中に墮して具さに上苦を受く。是を上殺と名く。善男子、若能く一闡提を殺す者有らば、即ち此の三種の殺中に墮せず。善男子、彼の諸の婆羅門等、一切皆是一闡提なり。譬へば掘地、刈草、斫樹、斬

殺、死尸、罵詈、鞭撻は罪報有ること無きが如く、一闡提を殺すも亦復是の如し。罪報有ること無し。何を以ての故に、諸の婆羅門、乃至信等の五法有ること無し。是の故に殺すと雖も地獄に墮せず。

善男子、汝上に言ふ所の、如來何が故ぞ提婆達多を癡人唾を食すと罵るとは、汝も亦是の如きの難を作すべからず。何を以ての故に、諸佛世尊凡そ發言する所思議すべからず。善男子、或は實語の世に愛せられ、非時非法利益を爲さざる有り。是の如きの言、我終に説かず。善男子、或は復言の麤獷、虛妄、非時非法、聞く者愛せず。利益すること能はざる有り。我も亦説かず。善男子、若語言復麤獷と雖も、眞實にして虛ならず。是の時是の法、能く一切衆生の利益を爲す有らば、聞きて悅ばずと雖も、我要ず之を説く。何を以ての故に。諸佛世尊、應正徧知、方便を知るが故なり。

善男子、我一時彼の曠野、聚落の叢樹に遊ぶが如く、其の林下に在りて一つの鬼神有り、即ち曠野と名く。純ら肉血を食し、多く衆生を殺す。復其の聚に於て日に一人を食す。善男子、我爾の時に於て、彼の鬼神の爲に廣く法要を說く。然るに彼、暴惡、愚癡、無智にして教法を受けず。我即ち身を化して大力鬼と爲り、其の宮殿を動じて所を安んぜざらしむ。彼の鬼時に其の眷屬を將ゐて其の宮殿を出で、來りて距て逆はんと欲す。鬼我を見る時、即ち心念を失ふ。惶怖して地に躃れ、迷悶斷絕して猶し死人の如し。我慈憫を以て手もて其身を摩す。即ち還つて起坐して是の如きの言を作さく、快い哉今日還つて身命を得、

是の大神王大威德を具す。慈愍の心有りて我が愆咎を赦す。」即ち我が所に於て善信の心を生ず。我即ち如來の身を還復して復更に爲に種種の要法を說き、彼の鬼神をして不殺戒を受けしむ。即ち是の日に於て曠野村中に一りの長者有り、次に當に死すべし。村人已に送りて彼の鬼神に付す。鬼神得已りて即ち以て我に施す。我既に受け已りて、便ち長者の爲に更に名字を立て手長者と名く。爾の時に彼の鬼、即ち我に白して言さく、「世尊、我及び眷屬、唯血肉を仰ぎて以て自ら存活す、今已に戒を受く、當に何んが資立すべき。」我即ち答へて言はく、「今より當に聲聞の弟子に敕すべし。佛法を修行すること有るの處に隨ひて、悉く當に其をして汝の飮食を施さしむべし。」善男子、是の因緣を以て諸の比丘の爲に是の如きの戒を制す。汝等今より常に當に彼の曠野鬼に食を施すべし。若住處の施すこと能はざる者有らば、當に知るべし、是の輩我が弟子に非ず。即ち是天魔の徒黨眷屬なり。善男子、如來衆生を調伏せんと欲するが爲の故に、是の如き種種の方便を示す。故に彼をして怖畏を生ぜしめざるに非ざるなり。善男子、我も亦木を以て護法鬼を打つ。又一時に於て一つの山上に在り。羊頭鬼を推して山下に墮せしめ、復樹頭に於て護獼猴鬼を撲ち、護財象をして五師子を見しめ、金剛神をして薩遮尼揵を怖れしめ、亦針を以て箭毛鬼の身を刺す。是の如きを作すと雖も、亦彼の諸の鬼神等をして殘滅者有らしめず。直彼をして正法に安住せしめんと欲す。故に是の如きの種種の方便を示す。

善男子、我爾の時に於て實に提婆達多を罵辱せず。提婆達多も亦愚癡にして人の涕唾を

【三】捨心空平等の果を明す。

食せず。亦復惡趣の中に生じて阿鼻地獄に受罪一劫ならず。亦僧を壞し佛身の血を出さず。亦四重の罪を違犯し、正法の大乘經典を誹謗せず。一闡提に非ず、亦聲聞、辟支佛に非ざるなり。善男子、提婆達多は實に聲聞、緣覺の境界に非ず。唯是諸佛の知見する所なり。善男子、是の故に汝今難じて『如來何の緣ぞ、提婆達を訶責し罵辱す。』と言ふべからざるなり。汝諸佛の有らゆる境界に於て、是の如きの疑網を生ずべからず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、譬へば甘蔗數數煎煮して種種の味を得るが如く、我も亦是の如し。佛に從ひて數聞きて多く法味を得。所謂出家味、離欲味、寂滅味、道味なり。世尊、譬へば眞金數數燒打、融消、錬冶すれば、轉た更に明淨、調和柔軟、光色微妙、其の價量り難し。然して後乃ち人天に寶とし重んぜらるるが如く、世尊、如來も亦爾なり。鄭重に諸問すれば卽ち甚深の義を聞見することを得、深行の者をして受持奉修せしめ、無量の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發し、然して後諸の人天に恭敬供養せらる。』

爾の時に佛、迦葉菩薩を讚じたまはく、『善い哉善い哉菩薩摩訶薩、諸の衆生を利益せんと欲するが爲の故に、如來に是の如きの深義を咨啓す。善男子、是の義を以ての故に、我汝が意に隨つて大乘方等の甚深祕法を說く。所謂極愛如一子地なり。』

(三)迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、若諸の菩薩、慈悲喜を修して一子地を得れば、捨心を修する時復何の地を得るや。』佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、汝善く時を知る。我が說かんと欲するを知りて汝卽ち諸問す。菩薩摩訶薩捨心を修する時、則ち空平等地に住

【空】シューニャター(Śūnyatā)の譯、眞理を了知する眞實の智慧。今十一空を說く。

し、須菩提の如くなることを得。善男子、菩薩摩訶薩空平等地に住すれば、則ち父母、兄弟、姉妹、兒息、親族、知識、怨親、中人有るを見ず。乃至陰界諸入衆生壽命を見ず。善男子、譬へば虛空の、父母、兄弟、妻子有ること無く、乃至衆生、壽命有ること無きが如し。一切諸法も亦復是の如し。父母乃至壽命有ること無し。菩薩摩訶薩一切法を見ることも亦復是の如し。其の心平等なること彼の虛空の如し。何を以ての故に。善能く諸の空法を修習するが故なり。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、云何が空と名くる。」「善男子、空とは所謂內空、外空、內外空、有爲空、無爲空、無始空、性空、無所有空、第一義空、空空、大空なり。菩薩摩訶薩云何が內空を觀ず。是の菩薩摩訶薩內法空を觀ず。是內法空なり。謂はく父母、怨親中人、衆生壽命、常樂我淨、如來法僧、有らゆる財物無し。是の內法の中佛性有りと雖も、而も是の佛性內に非ず外に非ず。所以は何ん。佛性常住にして變易無きが故に。是を菩薩摩訶薩內空を觀ずと名く。外空とは、亦復是の如し、內法有ること無し。內外空とは、亦復是の如し。善男子、唯如來法僧佛性有り、二空に在らず。何を以ての故に。是の如きの四法、常、樂、我、淨なり。是の故に四法を名けて空と爲さず。是を內外俱空と名く。善男子、有爲空とは、有爲の法悉く皆是空なり。所謂內空、外空、內外空、常樂我淨空、衆生壽命如來法僧第一義空なり。是の中佛性は有爲法に非ず。是の故に佛性は有爲法空に非ず。是を有爲空と名く。善男子、云何が菩薩摩訶薩無爲空を觀ず。是の無爲法悉く

皆是空なり。所謂無常、苦、不淨、無我、陰界入衆生壽命相、有爲、有漏、內法、外法なり。無爲法の中佛等の四法は、有爲に非ず無爲に非ず。性是善の故に非無爲、性常住の故に非有爲なり。是を菩薩無爲空を觀ずと名く。云何が菩薩摩訶薩無始空を觀ず。是の菩薩摩訶薩、生死無始皆悉く空寂を見る。所謂空とは常樂我淨皆悉く空寂にして變易有ること無し。衆生壽命、三寶佛性及び無爲法、是を菩薩無始空を觀ずと名く。云何が菩薩性空を觀ず。是の菩薩摩訶薩一切法本性皆空と觀ず。陰界入、常無常、苦樂、淨不淨、我無我を謂ふ。是の如き等の一切諸法を觀ずるに本性を見ず。是を菩薩摩訶薩性空を觀ずと名く。云何が菩薩摩訶薩無所有空を觀ず。人子無くして舍宅空と言ふが如し。畢竟じて空を觀ず、親愛有ること無し。愚癡の人諸方安と言ひ、貧窮の人一切空と言ふ。是の如きの所計、或は空、或は非空なり。菩薩觀ずる時、貧窮の人一切皆空なるが如し。是を菩薩摩訶薩無所有空を觀ずと名く。云何が菩薩摩訶薩第一義空を觀ず。善男子、菩薩摩訶薩第一義を觀ずる時、是の眼生ずる時從來する所無く、及び其の滅する時去りて至る所無し。本無今有、已有還無、其の實性を推すに無眼無主なり。眼の如く一切の諸法も亦復是の如し。何等をか名けて第一義空と爲す。業有り報有り作者を見ず。是の如きの空法を第一義空と名く。是を菩薩摩訶薩第一義空を觀ずと名く。云何が菩薩摩訶薩空空を觀ず。是の空空の中、乃ち是聲聞、辟支佛等の所迷沒の處なり。善男子、是有是無、是を空空と名け、是是非是、是を空空と名く。善男子、十住の菩薩尚是の中に於て少分に通達すること、猶し微

【四】廣く八種の知見を辨ず。

塵の如し。況や復餘人をや。善男子、是の如く空空も亦聲聞所得の空空三昧に同じからず。是を菩薩空空を觀ずと名く。善男子、云何が菩薩摩訶薩大空を觀ず。善男子、大空と言ふは般若波羅蜜を謂ふ、是を大空と名く。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの空門を得ば、則ち虚空等地に住することを得ん。

善男子、我今是の大衆の中に於て是の如き等の諸の空義を説く時、十恆河沙の菩薩摩訶薩有り、卽ち虚空等地に住することを得。善男子、菩薩摩訶薩是の地に住し已らば、一切法の中に於て滯閡有ること無く、繫縛拘執して心迷悶すること無し。是の義を以ての故に虚空等地と名く。善男子、譬へば虚空の可愛色に於て貪著を生ぜず、不愛色の中に瞋恚を生ぜざるが如し。菩薩摩訶薩の是の地中に住するも亦復是の如し、好惡色に於て心に貪恚無し。善男子、譬へば虚空の廣大にして對無く、悉く能く一切の諸物を容受するが如し。菩薩摩訶薩の是の地中に住するも亦復是の如し。廣大にして對無く、悉く能く一切の諸法を容受す。是の義を以ての故に、復名けて虚空等地と爲すことを得。善男子、菩薩摩訶薩是の地中に住すれば、一切法に於て亦見亦知なり。若は行、若は緣、若は性、若は相、若は因、若は緣、若は衆生心、若は根、若は禪定、若は乘、若は善知識、若は持禁戒、若は所施、是の如き等の法一切知見す。

(四)復次に善男子、菩薩摩訶薩是の地中に住し、知りて而も見ず。云何が知ると爲す。自餓の法は、淵に投じ火に赴き、自ら高巖より墜ち、常に一脚を翹げ、五熱身を炙り、常に灰

【欽婆羅衣】麁衣を云ふ。外道の用ゐしものなりと。

上、棘刺、編椽、樹葉、悪草、牛糞の上に臥し、麤麻衣、塚間所棄の糞掃の氀毼、欽婆羅衣、麞鹿の皮革、芻草の衣裳を衣、菜を茹ひ、果を噉ひ、藕根油滓、牛糞根果、若行いて食を乞ふに限りて一家に從ふ。主若無しと言はば即便捨て去る。設ひ復還つて喚べども、終に回顧せず。鹽肉五種の牛味を食せず、常に飲服する所糠汁沸湯なり。牛戒、雞狗雉戒を受持し、灰を以て身に塗り、長髮を相と爲し、羊を以て天を祠り、先呪して後殺す。四月火に事へ、七日風を服す。百千億の華を諸天に供養し、諸の欲願する所、此に因りて成就す。是の如き等の法、能く無上解脫の因と爲る者、是の處有ること無きを知る。是を名けて知ると爲す。云何が不見なる。菩薩摩訶薩、一人の是の如き法を行じて正解脫を得るを見ず。是を不見と名く。

復次に善男子、菩薩摩訶薩も亦見亦知なり。何等をか見と爲す。諸の衆生、是の邪法を行ずれば必ず地獄に墮するを見る。是を名けて見と爲す。云何が知と爲す。諸の衆生、地獄より出でて人中に生じ、若能く檀波羅蜜を修行し、乃至諸の波羅蜜を具足す。是の人必ず正解脫に入ることを得るを知る。是を名けて知と爲す。

復次に善男子、菩薩摩訶薩復亦見亦知有り。云何が見と爲す。常無常、苦樂、淨不淨、我無我を見る。是を名けて見と爲す。云何が知と爲す。諸の如來、定んで畢竟じて涅槃に入らずと知る。如來身は金剛無壞なり、是煩惱の成就する所の身に非ず。又臭穢、腐敗の身に非ずと知る。亦復能く一切衆生悉く佛性有るを知る。是を名けて知と爲す。

復次に善男子、菩薩摩訶薩復亦知亦見有り。云何が知と爲す。是の衆生心信成就を知る。是の衆生大乘を求む。是の人順流、是の人逆流、是の人正住と知る。是の衆生已に彼岸に到るを知る。順流とは凡夫人を謂ひ、逆流とは須陀洹從り、乃至緣覺なり。正住とは諸の菩薩等、到彼岸とは所謂如來、應供、正徧知なり。是を名けて知と爲す。云何が見と爲す。菩薩摩訶薩大乘大涅槃典に住して梵行心を修し、淨天眼を以て諸の衆生の身、口、意三業の不善を造りて、地獄、畜生、餓鬼に墮するを見る、諸の衆生、善業を修する者、命終して當に天上、人中に生ずべきを見る。諸の衆生の闇より闇に入り、諸の衆生の闇より明に入る有り、諸の衆生の明より闇に入る有り、諸の衆生の明より明に入る有るを見る。是を名けて見と爲す。

復次に善男子、菩薩摩訶薩亦知亦見有り。菩薩摩訶薩、諸の衆生身を修し、戒を修し、心を修し、慧を修す。是の人今世に惡業成就し、或は貪欲、瞋恚、愚癡に因りて、是の業必ず應に地獄に報を受くべし。是の人直に修身、修戒、修心、修慧を以て現世に輕く受けて地獄に墮せず。云何が是の業能く現報を得。有らゆる諸惡を懺悔發露し、既に悔ゆるの後更に敢て作らず。慚愧成就の故に、三寶を供養するが故に、常に自ら訶責するが故に。是の人是の善業の因緣を以て地獄に墮せず、現世に報を受く。所謂頭痛、目痛、腹痛、背痛なり。横に死殃に罹り、訶責罵辱、鞭杖閉繫、饑餓困苦す。是の如き等の現世の輕報を受くるを知る。是を名けて知と爲す。云何が見と爲す。菩薩摩訶薩、是の如きの人身、戒

【五】四無碍智を明す。

心、慧を修習する能はず、少悪業を造る。此の業の因緣、現に報を受くべし。是の人少悪懺悔すること能はず。自ら訶責せず、慙愧を生ぜず、怖懼有ること無し。是の業增長し、地獄に報を受くるを見る。是を名けて見と爲す。

復知りて而も見ざる有り、云何が知而不見なる。諸の衆生皆佛性有るを知るも、諸の煩惱に覆蔽せられて見ることを得ること能はず。是を知而不見と名く。復知りて而も少しく見る有り。十住の菩薩摩訶薩等、諸の衆生皆佛性有るを知るを見ること明了ならず、猶し闇夜に見る所了かならざるが如し。復亦見亦知有り。所謂諸佛如來亦見亦知なり。

復亦見亦知不見不知有り。亦見亦知とは所謂世間の文字、言語、男女、車乘、缾盆、舍宅、城邑、衣裳、飮食、山河、園林、衆生、壽命なり。是を亦見亦知と名く。云何が不見不知なる。聖人の所有微密の語、男女、乃至園林有ること無し。是を不見不知と名く。

復知りて而も見ざる有り。惠施する所を知り、供する所の處を知り、受者を知り、因果報を知る。是を名けて知と爲す。云何が不見なる。所施、供處、受者、及以果報を見ず。是を不見と名く。菩薩摩訶薩、知に八種有り、卽ち是如來五眼の所知なり。」

(五)迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩能く是の如きの知は何等の利をか得る。』佛の言はく、『善男子、菩薩摩訶薩能く是の如きの知は四無閡を得、法無閡、義無閡、詞無閡、樂說無閡なり。法無閡とは一切法及び法の名字を知る。義無閡とは一切法の有らゆる諸義を知り、能く諸法の所立名字に隨ひて爲に義を作す。詞無閡とは隨字論、正音論、

闡陀論、世辯論なり。樂說無閡とは所謂菩薩摩訶薩、凡そ演說する所障閡有ること無く、動轉すべからず。畏懼する所無く、摧伏すべきこと難し。善男子、是を菩薩能く是の如く見知すれば、卽ち是の如きの四無閡智を得と名く。復次に善男子、法無閡とは菩薩摩訶薩徧く聲聞、緣覺、菩薩、諸佛の法を知る。義無閡とは乘に三有りと雖も、其一に歸するを知り、終に差別の相有りと謂はず。詞無閡とは菩薩摩訶薩一法の中に於て種種の名を作り、無量劫を經て說くも盡すべからず。聲聞、緣覺能く是の說を作すは、是の處有ること無し。樂說無閡とは、菩薩摩訶薩無量劫に於て諸の衆生の爲に諸法を演說するに、若は名、若は義、種種の異說窮盡すべからず。復次に善男子、法無閡とは、菩薩摩訶薩諸法を知ると雖も、而も取著せず。義無閡とは、菩薩摩訶薩諸義を知ると雖も、而も取著せず、詞無閡とは、菩薩摩訶薩名字を知ると雖も、而も亦著せず。樂說無閡とは、菩薩摩訶薩樂說是の如く最上と知ると雖も、而も亦著せず。何を以ての故に。善男子、若取著せば菩薩と名けず。』

迦葉菩薩、復佛に白して言さく、『世尊、若取著せざれば則ち法を知らず。若法を知らば則ち是取著なり。若知りて著せざれば則ち知る所無し。云何ぞ如來說きて法を知り、而も取著せずと言ふ。』佛の言はく、『善男子、夫取著とは無閡と名けず。取著する所無き、乃ち無閡と名く。善男子、是の故に一切の諸菩薩等取著有る者は則ち無閡無し。若無閡無ければ菩薩と名けず。當に知るべし、是の人を名けて凡夫と爲す。何が故ぞ取著を名けて凡夫

と爲す。一切の凡夫色に取著し、乃至識に著す。色に著するを以ての故に則ち貪心を生ず。貪心を生ずるが故に色に繫縛せらる、乃至識に繫縛せらる。繫縛を以ての故に則ち生、老、病、死、憂悲の大苦一切の煩惱を免るることを得ず。是の故に取著を名けて凡夫と爲す。是の義を以ての故に、一切の凡夫四無閡無し。善男子、菩薩摩訶薩已に無量阿僧祇劫に於て法相を知見し、知見を以ての故に則ち其の義を知る。法相を見、及び義を知るを以ての故に、而も色の中に於て繫著を生ぜず。乃至識の中も亦復是の如し。不著を以ての故に、菩薩色に於て貪心を生ぜず、乃至識の中も亦貪を生ぜず。貪無きを以ての故に、則ち色に繫縛せられず、乃至識に縛せられず、不縛を以ての故に、則ち能く生老病死、憂悲の大苦、一切の煩惱を脫することを得。是の義を以ての故に、一切の菩薩四無閡を得。善男子、是の因緣を以て、我弟子の爲に十二部の中に繫著の者を說き、名けて魔縛と爲す。若不著の者は則ち魔縛を脫す。譬へば世間有罪の人は王に縛せられ、無罪の人は王縛すること能はざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。繫著有る者は魔に縛せられ、繫著無き者は魔も縛すること能はず。是の義を以ての故に、菩薩摩訶薩而も著する所無し。

復次に善男子、法無閡とは菩薩摩訶薩、善く字持を知りて而も忘失せず。所謂持とは地の如く、山の如く、眼の如く、雲の如く、人の如く、母の如し。一切諸法も亦復是の如し。義無閡とは菩薩諸法の名字を知ると雖も、而も義を知らず。義無閡を得るときは則ち其の義を知る。云何が義を知る。謂はく地持とは、地の普く一切衆生、及び非衆生を持するが

如し。是の義を以ての故に、地を名けて持と爲す。善男子、謂はく山持とは、菩薩摩訶薩是の思惟を作さく、「何の義を以ての故に、山を名けて持と爲す。山能く持して傾動無からしむ、是の故に持と名く。何をか眼持と名くる。眼能く光を持す、故に名けて持と爲す。何をか雲持と名くる。雲を龍氣と名く、龍氣は水を持す、故に名けて持と爲す。何をか人持と名くる。人能く法及以非法を持す、故に名けて持と爲す。何をか母持と名くる。母能く子を持す。故に名けて持と爲す。」菩薩摩訶薩、一切法の名字句義を知るも亦復是の如し。詞無閡とは、菩薩摩訶薩種種の詞を以て一義を演說するも亦義有ること無し。猶し男女、舍宅、車乘、衆生等の名の如し。何が故ぞ義無き。善男子、夫義とは乃ち是菩薩、諸佛の境界、詞とは凡夫の境界なり。義を知るを以ての故に、詞無閡を得。樂說無閡とは、菩薩摩訶薩詞を知り義を知るなり。故に無量阿僧祇劫に於て詞を說き義を說くに盡すべからず。是を樂說無閡と名く。

善男子、菩薩の無量無邊阿僧祇劫に於て世諦を修行す。修行を以ての故に法無閡を知る。復無量阿僧祇劫に於て第一義諦を修するが故に、義無閡を得。亦無量阿僧祇劫に於て毗伽羅論を習ふが故に、詞無閡を得。亦無量阿僧祇劫に於て說世辯論を修習するが故に、樂說無閡を得。

善男子、聲聞、緣覺若是の四無閡を得る有らば、是の處有ること無し。善男子、九部經の中に、我聲聞、緣覺の人四無閡有りと說く。聲聞、緣覺眞實には有ること無し。何を以

ての故に。菩薩摩訶薩衆生を度せんが爲に、故に是の如きの四無閡智を修す。縁覺の人寂滅法を修し獨處を志樂す。若衆生を化するに但神通を現じ、終日默然として宣說する所無し。云何が當に四無閡智有るべき。何が故ぞ默然として而も說く所無き。縁覺法を說き人を度して煗法、頂法、世第一法、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩を得しむること能はず。人をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむること能はず。何を以ての故に。善男子、縁覺世に出づるに、世間に九部經典有ること無し。是の故に縁覺、詞無閡、樂說無閡無し。善男子、縁覺の人諸法を知ると雖も法無閡無し。何を以ての故に。法無閡とは名けて知字と爲す。縁覺の人文字を知ると雖も、字無閡無し。何を以ての故に。常住の二字を知らざるが故に。是の故に縁覺法無閡を得ず。義を知ると雖も、義無閡無し。眞に義を知らば、諸の衆生悉く佛性有るを知らん。佛性義とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。是の義を以ての故に、縁覺の人義無閡を得ず。是の故に縁覺は一切四無閡智有ること無し。云何が聲聞に四無閡無き。聲聞の人は三種の善巧方便有ること無し。何等をか三と爲す。一つには必ず軟語を須て然して後法を受け、二つには必ず麤語を須て然して後化を受け、三つには不軟、不麤、然して後化を受く。聲聞の人は此の三無きが故に四無閡無し。復次に聲聞、縁覺、畢竟じて詞を知り義を知ること能はず。自在智の境界を知ること無く、十力、四無所畏有ること無し。畢竟じて彼の十二因緣の大海を度ること能はず、善く衆生の諸根の利鈍、差別を知ること能はず、未だ永く二諦の疑心を斷ずること能はず、

【摩訶拘絺羅】マハーカウシユテイラ（Mahākausthila）佛弟子の名。舍利弗の舅たる長爪梵志なり。

【六】無所得の知見を明す。

衆生の種種の諸の心所緣の境界を知らず、善く第一義空を說くこと能はず。是の故に二乘に四無閡無し、

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、若諸の聲聞、緣覺の人一切四無閡有ること無くんば、云何ぞ世尊、舍利弗は智慧第一、大目揵連は神通第一、摩訶拘絺羅は四無閡第一と說く。若其無ければ、如來何が故ぞ是の如きの說を作す。』爾の時に世尊、迦葉を讃じて言はく『善い哉善い哉善男子、譬へば恆河に無量の水有り。辛頭大河の水も亦無量、博叉大河の水も亦無量、阿耨達池の水も亦無量、大海の中の水も亦無量なり。是の如きの諸水同じく無量と雖も、然も其の多少、其の實は等しからざるが如し。聲聞、緣覺及び諸の菩薩の四無閡智も亦復是の如し、善男子、若等しと說かば是の處有ること無し。善男子、我凡夫の爲に摩訶拘絺羅は四無閡智を最も第一と爲すと說く。汝が問ふ所の者、其の義是の如し。善男子、聲聞の人、或は一つを得る有り、或は二つを得る有り。若四つを具足せば、是の處有ること無し。』

(六)迦葉、佛に白して言さく『世尊、佛の上に說きたまへる梵行品の中の如き、菩薩の知見四無閡を得とは、菩薩の知見は則ち所得無く、亦心に無所得と言ふこと有ること無し。世尊、是の菩薩摩訶薩は實に所得無し。若菩薩をして心に得る有らしめば、則ち菩薩に非ず、名けて凡夫と爲す。云何ぞ如來、說きて菩薩所得有りと言ふ。』佛の言はく『善男子、善い哉善い哉、我將に說かんと欲するに汝復問ふ。善男子、菩薩摩訶薩は實に所得無し。無所

得とは四無閡と名く。善男子、何の義を以ての故に、無所得とは名けて無閡と爲す。若し有得の者は、則ち名けて閡と爲す。障閡有る者は、四顚倒と名く。善男子、菩薩摩訶薩は四倒無きが故に、故に無閡を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは則ち名けて慧と爲す。菩薩摩訶薩、是の慧を得るが故に無所得と名く。有所得とは名けて無明と爲す。菩薩永く無明の闇を斷ずるが故に、故に所得無し。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは大涅槃と名く。菩薩摩訶薩、是の如きの大涅槃の中に安住して、一切諸法の性相を見ず。是の故に菩薩を無所得と名く、有所得とは二十五有と名く。菩薩永く二十五有を斷じて大涅槃を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは名けて大乘と爲す。菩薩摩訶薩は諸法に住せず、故に大乘を得。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは名けて聲聞、辟支佛の道と爲す。菩薩は永く二乘の道を斷ず、故に佛道を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは方等經と名く。菩薩是の如きの經を讀誦するが故に、大涅槃を得。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは十一部經と名く。菩薩修せず、純ら方等大乘經典を說く。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所有とは名けて虛空と爲す。世間に物無きを名けて虛空と爲す。菩薩是の虛空三昧を得、所見無きが故に。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは生死輪と名く。一切の凡夫生死に輪囘するが故に所見有り。菩薩永く一切の生死を斷ず。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは常樂我淨と名く。菩薩摩訶薩佛性を

見るが故に常樂我淨を得。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは無常無樂無我無淨と名く。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは第一義空と名く。菩薩摩訶薩第一義空を觀じて悉く見る所無し。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは名けて五見と爲す。菩薩は永く是の五見を斷ずるが故に第一義空を得。是の故に菩薩を無所得と名く。復次に善男子、無所得とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時悉く所見無し。是の故に菩薩を無所得と名く。有所得とは聲聞、緣覺の菩提と名く。菩薩は永く二乘の菩提を斷ず。是の故に菩薩を無所得と名く。善男子、汝が所問も亦無所得、我が所說も亦無所得なり。若得有りと說かば、是魔の眷屬にして我が弟子に非ず。』

迦葉、佛に白して言さく、『世尊、我が爲に是の菩薩の無所得を說きたまふ時、無量の衆生有相心を斷ず。是の事を以ての故に、我敢て無所得の義を諮啓して、是の如き等の無量の衆生をして魔の眷屬を離れて佛の弟子と爲らしむ。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく、『世尊、如來上に純陀の爲に偈を說きたまふ、

本有今無、本無今有
三世有法、是の處有ること無し

と。世尊、是の義云何ん。』佛の言はく、『善男子、我諸の衆生を化度するが爲の故に、而も是の說を作し、亦聲聞、辟支佛の爲の故に、而も是の說を作し、亦文殊師利法王子の爲の

故に、而も是の說を作す。但正しく純陀一人の爲に是の偈を說くにあらざるなり。時に文殊師利、將に我に問はんと欲す。我其の心を知りて爲に之を說く。我既に說き已りて、文殊師利即ち解了を得たり。』

迦葉菩薩の言さく、『世尊、文殊等の如き詎ぞ幾人有りてか能く是義を了せん。唯願はくば如來、更に大衆の爲に廣く分別して說きたまへ。』『善男子、諦かに聽き諦かに聽け。今當に汝が爲に重ねて之を敷演すべし。本有と言ふは、我昔本無量の煩惱有り。煩惱を以ての故に現在大般涅槃有ること無し。本無と言ふは、本般若波羅蜜無し。般若波羅蜜無きを以ての故に、現在具さに諸の煩惱結有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在煩惱有り」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本、父母和合の身有り。是の故に現在、金剛微妙の法身有ること無し。本無と言ふは、我身本三十二相、八十種好無し。本三十二相、八十種好有ること無きを以ての故に、現在具さに四百四病有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在病苦有り」と言はば、是の處有ることと無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本無常、無樂、無我、無淨有り、無常、無我、無樂、無淨有るを以ての故に、現在阿耨多羅三藐三菩提有ること無し。本無と言ふは、本佛性を見ず。見ざるを以ての故に、常樂我淨無し。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若

は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在常樂我淨無し」と言はば是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、本凡夫苦行の心を修し、阿耨多羅三藐三菩提を得と謂ふ有り。是の事を以ての故に、現在四魔を破壞すること能はず。本無と言ふは、本六波羅蜜無し。六波羅蜜無きを以ての故に、凡夫苦行の心を修行して阿耨多羅三藐三菩提を得と謂ふ。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在苦行有り」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本雜食の身有り。食身有るを以ての故に、現在無邊の身有ること無し。本無と言ふは、本三十七の助道の法無し。三十七の助道の法無きを以ての故に、現在具さに雜食の身有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在食身有り」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我昔本一切法中取著の心有り。是の事を以ての故に、現在畢竟空定有ること無し。本無と言ふは、我本中道實義有ること無し。中道眞實義無きを以ての故に、一切法に於て則ち著心有り。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在一切法是有相」と說かば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我初めて阿耨多羅三藐三菩提を得し時、諸の鈍根の聲聞の弟子有り。鈍根の聲聞の弟子有るを以ての故に、一乘の實を演說することを得ず。本無と言はば、本利根人中の象王迦葉菩薩等無し。利根の迦葉等無きを以ての故に、宜しきに

隨ひて方便して三乘を開示す。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在畢竟三乘法を演說す」と言はば、是の處有ること無し。

復次に善男子、本有と言ふは、我本說きて「卻後三月、婆羅雙樹に於て當に般涅槃すべし」と言ふ。是の故に現在、大方等典大般涅槃を演說することを得ず。本無と言ふは、本昔文殊師利の大菩薩等有ること無し。有ること無きを以ての故に、現在說きて「如來無常」と言ふ。若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人、說きて「如來、去來、現在是無常」と言はば、是の處有ること無し。

善男子、如來普く諸の衆生の爲の故に、諸法を知ると雖も、說きて「不知」と言ふ。諸法を見ると雖も、說きて「不見」と言ひ、有相の法を說きて「無相」と言ひ、無相の法を說きて「有相」と言ふ。實に無常有るを說きて「有常」と言ひ、實に有常有るを說きて「無常」と言ふ。我樂淨等も亦復是の如し。三乘の法を說きて一乘と言ひ、一乘の法を宜しきに隨ひて三と說く。略相を廣と說き、廣相を略と說き、四重の法を偸蘭遮と說き、偸蘭遮の法を說きて四重と爲す。犯を非犯と說き、非犯を犯と說き、輕罪を重と說き、重罪を輕と說く。何を以ての故に。如來明かに衆生の根を見るが故なり。善男子、如來是の說を作すと雖も、終に虛妄無し。何を以ての故に。虛妄の語は卽ち是罪過なり。如來悉く一切の罪過を斷ず。云何ぞ當に虛妄の語有るべきや。善男子、如來虛妄の語無しと雖も、若し衆生、虛妄の說に由りて法利を得るを知らば、隨宜方便して則ち爲に之を說く。善男子、

一切の世諦若如來に於ては卽ち是第一義諦なり。何を以ての故に。諸佛世尊第一義の爲の故に世諦を說く。亦衆生をして第一義諦を得しむ。若衆生をして是の如き第一義を得ざらしめば、諸佛終に世諦を宣說せじ。善男子、如來時有りて世諦を演說するに、衆生、佛第一義諦を說くと謂ふ。時有りて第一義諦を演說するに、衆生、佛世諦を說くと謂ふ。是則ち諸佛の甚深の境界、是聲聞、緣覺の所知に非ず。善男子、是の故に汝先に難じて、菩薩摩訶薩所得無しと言ふべからざるなり。菩薩常に第一義諦を得。云何ぞ難じて所得無しと言はんや。」

迦葉、復言さく、「世尊、第一義諦も亦名けて道と爲し、亦菩提と名け、亦涅槃と名く。若菩薩、道菩提涅槃を得る有りと言ふ有らば、卽ち是無常なり。何を以ての故に。法若常ならば則ち得べからず。猶し虛空の如し、誰か得る者有らん。世尊、世間の物、本無今有は、名けて無常と爲すが如く、道も亦是の如し。道若得べくんば則ち無常と名く。法若常ならば得無く生無く、猶し佛性の得無く生無きが如し。世尊、夫道とは非色非不色、不長不短、非高非下、非生非滅、非赤非白、非靑非黃、非有非無なり。云何ぞ如來說きて「可得」と言ふ。菩提涅槃も亦復是の如し。」

佛の言はく、「是の如く是の如し。善男子、道に二種有り。一つには常、二つには無常なり。菩提の相も亦二種有り。一つには常、二つには無常なり。涅槃も亦爾なり。外道の道とは名けて無常と爲し、內道の道とは之を名けて常と爲す。聲聞、緣覺の所有の菩提は名

けて無常と爲し、菩薩、諸佛の所有の菩提は之を名けて常と爲す。外の解脱は名けて無常と爲し、内の解脱は之を名けて常と爲す。善男子、道と菩提と及以涅槃とは悉く名けて常と爲す。一切衆生常に無量の煩惱に覆はれ、慧眼無きが故に見ることを得ること能はず。而も諸の衆生、見んと欲するが爲の故に戒定慧を修す。修行を以ての故に道菩提及以涅槃を見る。是を菩薩道菩提涅槃を得と名く。道の性相は實に生滅せず。是の義を以ての故に捉持すべからず。

善男子、道とは色像の見るべく、稱量の知るべき無しと雖も、而も實に用有り。善男子、衆生の心是色に非ず、長に非ず、短に非ず、麁に非ず、細に非ず、縛に非ず、解に非ず、是見法に非ずと雖も、而も亦是有るが如し。是の義を以ての故に我須達の爲に說きて言はく、「長者、心を城主と爲す。若心を護らざれば則ち身口を護らず。若心を護れば則ち身口を護る。善く是の身口を護らざるを以ての故に、諸の衆生をして三惡趣に到らしむ。身口を護らば則ち衆生をして人天の涅槃を得しむ。得とは眞實と名け、不得とは不眞實と名く善男子、道と菩提と及以涅槃とも亦復是の如く、亦有亦常なり。若其れ無ならば、云何ぞ能く一切の煩惱を斷ぜん。其れ有を以ての故に、一切の菩薩了了に見知す。

善男子、見に二種有り。一つには相貌見、二つには了了見なり。云何が相貌見なる。遠く烟を見て名けて火を見ると爲す、實は火を見ず。火を見ずと雖も亦虛妄に非ざるが如し。空中の鶴を見て便ち水を見ると言ふ。水を見ずと雖も亦虛妄に非ず。華葉を見て便ち根を

見ると言ふ。根を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。人遙かに籬間の牛角を見て便ち牛を見ると言ふ。牛を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。女人の懷妊を見て便ち欲を見ると言ふ。欲を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。又樹の生葉を見て便ち水を見ると言ふ。水を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。又雲を見て便ち雨を見ると言ふ。雨を見ずと雖も、亦虚妄ならざるが如し。身業及以口業を見て便ち心を見ると言ふ。心を見ずと雖も亦虚妄に非ざるが如し。是を相貌見と名く。云何が了了見なる。眼色を見るが如し。善男子、人眼根淸淨にして壞せず。自ら掌中の阿摩勒果を觀るが如し。菩薩了了に道菩提涅槃を見るも亦復是の如し。是の如く見ると雖も初て見相無し。善男子、是の因緣を以て我往昔に於て舍利弗に告ぐ「舍利弗、一切世間に若は沙門、若は婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は人有りて、知らず、見ず、覺らざる所、唯如來のみ有りて悉く知見覺す。及び諸の菩薩も亦復是の如し。舍利弗、若し諸の世間の知見覺する所、我と菩薩とも亦知見覺す。世間の衆生の知らず見ず覺らざる所、亦自ら知りて知見覺せずんばあらず。世間の衆生知見覺する所あれば、便ち自ら說きて、我知見覺すと言ふ。舍利弗、如來は一切悉く知見覺して亦自ら我知見覺すと言はず。一切の菩薩も亦復是の如し。何を以ての故に。若如來をして知、見、覺の相を作さしめば、當に知るべし、是則ち佛世尊に非ず、名けて凡夫と爲す。菩薩も亦爾なり。」と」

【梵行品三】此品は前品に繼ぎ、廣く梵行に就て論議する章なり。中に六念を明し、如來の十號を開說する文あり。

【一】廣く世間法非世間法を簡擇す。

【梵天】以下外道に於ける造物主及び萬物創造の本體をあぐ。

【八臂天】那羅延天(Nārāyaṇa)に同じ。

大般涅槃經 巻第十六

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

梵行品第二十之三

(一)迦葉菩薩の言さく、『佛世尊、舍利弗の爲に「世間の知れる、我亦知ることを得、世間の知らざる、我亦悉く知る」と說くが如き、其の義云何。』『善男子、一切の世間佛性を知らず、見ず、覺らず。若佛性を知見覺する者有らば、世間と名けず、名けて菩薩と爲す。世間の人も亦復十二部經、十二因緣、四倒四諦、三十七道品、阿耨多羅三藐三菩提、大般涅槃を知らず、見ず、覺らず。若知見覺せば世間とは名けず。當に菩薩と名くべし。善男子、是を世間知見覺せずと名く。云何が世間の知見覺する所なる。所謂梵天、自在天、八臂天、性、時、微塵、法及び非法、是造化の主なり。世界の終始、斷常の二見、說きて「初禪より非非想に至るを名けて涅槃と爲す」と言ふ。善男子、是を世間の知見覺する所と名く。菩薩摩訶薩是の如きの事に於ても亦知見覺す。菩薩是の如く知見覺し已るに、若知らず、見ず、覺らずと言ふは是を虛妄と爲す。虛妄の法は則ち是罪と爲す。是の罪を以ての故に地獄に墮す。善男子、若は男、若は女、若は沙門、若は婆羅門、說きて、「道菩提涅槃無し」

と言はば、當に知るべし、是の輩を一闡提、魔の眷屬と名け、名けて謗法と爲す。是の如き謗法は諸佛を謗ずと名く。是の如きの人は世間と名けず、非世間と名けず。」

爾の時に迦葉、是の事を聞き已りて卽ち偈頌を以て佛を讃歎す、

大慈衆生を憫み、故に我をして歸依せしむ
善く衆の毒箭を拔く、故に大醫王と稱す
世醫の療治する所は、差ゆと雖も還つて復生ず
如來の治したまふ所は、畢竟じて復發らず
世尊甘露の藥、以て諸の衆生に施す
衆生既に服し已らば、死せず亦生ぜず
如來今我が爲に、大涅槃を演說す
衆生祕藏を聞かば、卽ち不生滅を得

迦葉菩薩、是の偈を說き已りて、卽ち佛に白して言さく「世尊、佛の所說の「一切世間の知見覺せざるを菩薩悉く能く知見覺す」の如きは、若菩薩をして是世間ならしめば、說きて「世間は不知、不見、不覺なり。是の菩薩能く知見覺す」と言ふことを得ず。若世間に非ざれば何の異相有りや。」

佛の言はく「善男子、菩薩と言ふは、亦是世間、亦世間に非ず。知見覺せざるをば名けて世間と爲し、知見覺するをば世間と名けず。汝「何の異有り」と言はば、我今當に說く

べし。善男子、若は男、若は女、若初て是の涅槃經を聞きて卽ち敬信を生じて、阿耨多羅三藐三菩提心を發す有らば、是を則ち名けて世間の菩薩と爲す。一切世間、知見覺せず。是の如きの菩薩も亦世間に同じく知見覺せず。菩薩是の涅槃經を聞き已りて世間の知見覺せざる有り。是菩薩の知見覺する所なるべきを知る。是の事を知り已りて卽ち自ら思惟す、我當に云何が方便修習して知見覺することを得べきと。復ねて復念言すらく、唯當に深心に淨戒を修持すべしと。善男子、菩薩爾の時に是の因緣を以て、未來世に於て在在生處戒常に淸淨なり。善男子、菩薩摩訶薩戒淨を以ての故に在在生處常に憍慢、邪見、疑網無く、終に說きて如來畢竟じて涅槃に入ると言はず。是を菩薩淨戒を修持すと名く。戒既に淸淨、次に禪定を修す。定を修するを以ての故に、在在生處正念にして忘れず。所謂一切衆生悉く佛性有り。十二部經、諸佛世尊常樂我淨なり。一切菩薩方等大涅槃經に安住して悉く佛性を見る。是の如き等の事憶して忘れず。定を修するに因るが故に十一空を得。是を菩薩淸淨定を修すと名く。戒定已に備はりて次に淨慧を修す。慧を修するを以ての故に、初て身中に我有り、我中に身有り、是身是我非身非我に繋著せず。是を菩薩淨慧を修習すと名く。慧を修するを以ての故に、受持する所の戒牢固にして動ぜず。善男子、譬へば須彌の四風に傾動せられざるが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。四倒に傾動せられず。善男子、菩薩爾の時に自ら知見覺して受持する所の戒傾動有ること無し。是を菩薩の知見覺する所世間に非ずと名くるなり。善男子、菩薩所持の戒牢固にして動ぜざるを見て心に悔

【二】菩薩の淨戒を明す。

恨無し。悔恨無きが故に心に歡喜を得。歡喜を得るが故に心に悦樂を得。悦樂を得るが故に心則ち安隱なり。心安隱の故に無動定を得。無動定を得るが故に實知見を得。實知見を得るが故に生死を厭離す。生死を厭離するが故に便ち解脱を得。解脱を得るが故に明かに佛性を見る。是を菩薩知見覺する所世間に非ずと名くるなり。善男子、是を世間知見覺せず、而も是の菩薩知見覺する所と名く。』

(二)迦葉、復言さく『云何が菩薩淨戒を修持して心に悔恨無く、乃至明了に佛性を見るや。』佛の言はく『善男子、世間の戒は清淨と名けず。何を以ての故に。世間の戒は有の爲の故に、性不定の故に、畢竟に非ざるが故に。廣く一切衆生の爲にすること能はず。是の義を以ての故に、名けて不淨と爲す。不淨を以ての故に悔恨心有り。悔恨を以ての故に心に歡喜無し。歡喜無きが故に卽ち悦樂無し。悦樂無きが故に則ち安隱無し。安隱無きが故に不動定無し。不動定無きが故に實知見無し。實知見無きが故に則ち厭離無し。厭離無きが故に則ち解脱無し。解脱無きが故に佛性を見ず。佛性を見ざるが故に終に大般涅槃を得ること能はず。是を世間戒不清淨と名く。善男子、菩薩摩訶薩の清淨戒とは、戒戒に非ざるが故に、有の爲に非ざるが故に、定畢竟の故に、衆生の爲の故に。是を菩薩の戒清淨と名くるなり。善男子、菩薩摩訶薩淨戒の中に於て、無悔恨心を生ぜんと欲せずと雖も、無悔恨心は自然にして生ず。善男子、譬へば人有りて明鏡を執持すれば、面を見ることを期せずとも、面像自ら現ずるが如し。亦農夫の種を良田に散ずれば、芽を生ずるを期せざれ

ども、而も芽自ら生ずるが如し。亦燈を然せば、闇を滅するを期せざれども、而も闇自ら滅するが如し。善男子、菩薩摩訶薩堅く淨戒を持すれば、無悔恨心自然にして生ずることも亦復是の如し。淨戒を以ての故に心歡喜を得。善男子、端正の人自ら面貌を見て心に歡喜を生ずるが如し。淨戒を持する者も亦復是の如し。

善男子、破戒の人戒の不淨を見て心歡喜せず、形殘の者自ら面貌を見て喜悅を生ぜざるが如し。破戒の人も亦復是の如し。善男子、譬へば牧牛二女人有り。一りは酪餅を持し、一りは漿餅を持す。倶共に城に至りて之を賣らんと欲す。路に脚跌して二餅倶に破す。一りは則ち歡喜し、一りは則ち愁惱するが如し。持戒、破戒も亦復是の如し。淨戒を持する者は心則ち歡喜す。心歡喜するが故に則便思惟す。諸佛如來涅槃の中に於て能く清淨戒を持する者有らば、則ち涅槃を得と說く。我今是の如きの淨戒を修習すれば、亦之を得べし。是の因緣を以て心則ち悅樂す。」

迦葉、復言さく、『喜と樂と何の差別か有る。』『善男子菩薩摩訶薩惡を作さざるの時、名けて歡喜と爲す。心淨く戒を持す、之を名けて樂と爲す。善男子、菩薩摩訶薩生死を觀ずる、則ち名けて喜と爲す。大涅槃を見る、之を名けて樂と爲す。下を名けて喜と爲し、上を名けて樂と爲す。世共法を離る、之を名けて喜と爲す。不共法を得る、之を名けて樂と爲す。戒淨を以ての故に、身體輕柔口に麤過無し。菩薩爾の時に若は見、若は聞き、若は嗅ぎ、若は甞め、若は觸れ、若は知り悉く諸惡無し。惡無きを以ての故に心安隱を得。

【三】護法を明す。

安隱を以ての故に則ち靜定を得。靜定を得るが故に實知見を得。實知見の故に生死を厭離す。生死を厭ふが故に則ち解脫を得、解脫を得るが故に佛性を見ることを得。佛性を見るが故に大涅槃を得。是を菩薩の清淨持戒と名く、世間戒に非ず。何を以ての故に。善男子、菩薩摩訶薩の所受の淨戒五法佐助す。云何が五を爲す。一つには信、二つには慙、三つには愧、四つには善知識、五つには增歎戒なり。五蓋を離るるが故なり。所見清淨、五見を離るるが故に。心に疑網無し、五疑を離るるが故に。一つには佛を疑ひ、二つには法を疑ひ、三つには僧を疑ひ、四つには戒を疑ひ、五つには不放逸を疑ふ。菩薩爾の時に即ち五根を得。所謂信、念、精進、定、慧なり。五根を得るが故に五種の涅槃を得、色解脫、乃至識解脫を謂ふ。是を菩薩の清淨持戒と名く、世間に非ざるなり。善男子、是世間の知らず、見ず、覺らざる所にして、而も是菩薩の知見覺する所と名く。

(三)善男子、若我が弟子、大涅槃經を受持、讀誦、書寫、演說して戒を破する者有らば、人有りて呵責し輕賤毀辱して是の言を作さく「若佛の祕藏の大涅槃經に威力有らば、云何ぞ汝をして受くる所の戒を毀たしむ。若人是の涅槃經を受持して禁戒を毀たば、當に知るべし、是の經威力無しと爲す。若威力無ければ、復讀誦すと雖も別益無しと爲す」と。是の涅槃經を輕毀するに緣るが故に、復無量無邊の衆生をして地獄に墮せしむ。是の經を受持して戒を毀る者は則ち是衆生の大惡知識なり。我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。是の如きの人には、我亦是の典を受持するを聽さず。寧ろ受けず、持たず、修せざらしむとも、

戒を毀ちて受持修習するを以てせず。

善男子、若我が弟子涅槃經を受持、讀誦、書寫、演說せば、當に身心を正しくし、愼みて掉戲輕躁擧動すること莫るべし。身を掉戲と爲し、心を輕動と爲す。有を求むるの心、名けて輕動と爲し、身諸業を造る、名けて掉戲と爲す。若我が弟子、有を求めて業を造らば、是の大乘典大涅槃經を受持すべからず。若是の如く經を受持する者有らば、人當に輕呵して是の言を作すべし「若佛の祕藏の大涅槃經に威力有らば、云何ぞ汝をして有を求めて業を造らしむる。若經を持する者、有を求めて業を造らば、當に知るべし、是の經威力無しと爲す。若威力無ければ、復受持すと雖も利益無しと爲す」と。是涅槃經を輕毀するに緣るが故に、復無量無邊の衆生をして地獄に墮せしむ。是の經を受持して有を求め業を造らば、則ち是衆生の大惡知識なり。我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。

復次に善男子、若我が弟子、是の涅槃經を受持、讀誦、書寫、演說せば、非時に說くこと莫れ、非國に說くこと莫れ、不請に說くこと莫れ、輕心に說くこと莫れ、處處に說くこと莫れ、自ら歎じて說くこと莫れ、他を輕して說くこと莫れ、佛法を滅して說くこと莫れ、世法を熾然にして說くこと莫れ。善男子、若我が弟子、是の經を受持して非時にして說き、乃至熾然世法に說かば、人當に輕呵して是の言を作さん「若佛の祕藏の大涅槃經に威力有らば、云何ぞ汝をして非時にして說き、乃至世法を熾然にして說かしむ、若持經者是の如きの說を作さば、當に知るべし、是の經は威力無しと爲す。若威力無ければ、復受持すと

【四】六念を明す。

雖も利益無しと爲す」と。是の涅槃經を輕毀するに緣るが故に、無量の衆生をして地獄に墮せしむ、是の經を受持して非時にして說き、乃至熾然世法にして說かば、則ち是衆生の大惡知識なり。我が弟子に非ず、是魔の眷屬なり。

善男子、若受持を欲する者、大涅槃を說く者、佛性を說く者、如來の祕藏を說く者、大乘を說く者、方等經を說く者、聲聞乘を說く者、辟支佛乘を說く者、解脫を說く者、佛性を見る者、先當に其の身を清淨にすべし。身淨を以ての故に則ち呵責無し。呵責無きが故に、無量の人をして大涅槃に於て清淨心を生ぜしむ。信心生ずるが故に是の經を恭敬す。若一偈、一句、一字及び說法者を聞くときは、則便阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを得。當に知るべし、是の人は則ち是衆生の眞の善知識なり、惡知識に非ず。是我が弟子なり、魔の眷屬に非ず。是を菩薩世間に非ずと名く。善男子、是を世間の知らず、見ず、覺らざる所にして、而も是菩薩知見覺する所と名く。

(四)復次に善男子、云何が復一切世間の知見覺せざる所にして、而も是菩薩の知見覺する所と名くる。所謂六念處なり。何等をか六と爲す。念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天なり。善男子、云何が念佛なる。如來、應、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊は常にして變易せず、十力、四無所畏を具足して大師子吼し、大沙門大婆羅門と名く。大淨畢竟じて彼岸に到る、能く勝る者無く頂を見る者無し。怖畏有ること無く、驚かず動かず。獨一にして侶無く、師無くして自ら悟る。疾智、大智、利智、

【五】念佛を明す就中如來の十號を釋す。
【如來】タターガタ(Tathāgata)の譯。如去とも譯す。
【應】アルハーン(Arhān)の音譯。殺賊、應供、不生の三義あり。

深智、解脱智、不共智、廣普智、畢竟智の智寶成就す。人中の象王、人中の牛王、人中の龍王、人中の丈夫、人中の蓮華分陀利華なり。調御人師なり。大施主と爲し、大法師と爲す。法を知るを以ての故に大法師と名け、義を知るを以ての故に大法師と名け、時を知るを以ての故に大法師と名け、足るを知るを以ての故に大法師と名け、我を知るを以ての故に大法師と名け、大衆を知るが故に大法師と名け、衆生の種種性を知るを以ての故に大法師と名け、諸根の利鈍中を知るを以ての故と大法師と名け、中道を説くが故に大法師と名く。

(五)云何が如來と名く。過去の諸佛所説の如く變ぜず。云何が不變なる。過去の諸佛衆生を度するが爲に十二部經を説く。如來も亦爾なり、故に如來と名く。諸佛世尊、六波羅蜜、三十七品、十一空より來りて大涅槃に至る。如來も亦爾なり。是の故に佛を號けて如來と爲すなり。諸佛世尊衆生の爲の故に隨宜方便して三乘を開示し、壽命無量稱計すべからず。如來も亦爾なり、是の故に佛を號けて如來と爲すなり。

云何が應と爲す。世間の法は悉く名けて怨と爲す。佛害すべきが故に、故に名けて應と爲す。夫四魔とは是菩薩の怨なり。諸佛如來菩薩爲る時、能く智慧を以て四魔を破壞す。是の故に應と名く。復次に應とは名けて遠離と爲す。菩薩爲りし時、應當に無量の煩惱を遠離すべし。故に名けて應と爲す。復次に應とは樂と名く。過去の諸佛菩薩爲りし時、無量阿僧祇劫に於て、衆生の爲の故に諸の苦惱を受くと雖も、終に不樂無く常に之を樂む。

【正徧知】サンヤクサンブツダ(Samyaksambuddha)の譯。

【明行足】ギドヤーチャラナ、サンパンナ(Vidyacarana-Sampanna)の譯。

如來も亦爾なり、是の故に應と名く。又復應とは、一切の人天種種の香華、瓔珞、幢旛、伎樂を以て之を供養すべし、故に名けて應と爲す。

云何が正徧知なる。正とは不顚倒を名け、徧知とは四顚倒に於て通達せざる無し。又復、正とは名けて苦行と爲し、徧知とは苦行に因りて定んで苦果有るを知る。又復正とは世間中と名け、徧知とは畢竟定んで中道を修習すれば、阿耨多羅三藐三菩提を得るを知る。又復正とは名けて數ふ可く、量る可く、稱す可しと爲し、徧知とは數ふべからず、量るべからず、稱すべからず。是の故に佛を號けて正徧知と爲す。善男子、聲聞、緣覺も亦徧知有り亦徧知にあらず。何を以ての故に。徧とは五陰、十二入、十八界と名け、聲聞、緣覺も亦徧知を得。是を徧知と名く。云何が不徧知なる。善男子、假使二乘は無量劫に於て一つの色陰を觀ずとも、盡く知ること能はず。是の義を以ての故に、聲聞、緣覺は徧知有ること無し。

云何が明行足なる。明とは無量の善果を得るを名け、行とは名けて脚足と爲す。善果とは阿耨多羅三藐三菩提を名け、脚足とは名けて戒慧と爲す。戒慧の足に乘じて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に名けて明行足と爲す。又復明とは呪と名け、行とは吉と名け、足とは果と名く。善男子、是を世間の義と名く。呪とは名けて解脫と爲し、吉とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲し、果とは名けて大般涅槃と爲す。是の故に名けて明行足と爲す。又復明とは光と名け、行とは業と名け、足とは果と名く。善男子、是を世間義と名く。光

【善逝】スガタ（修伽陀Sugata）の譯。

【世間解】ローカギッド（Lokavid）の譯。

とは不放逸と名け、業とは六波羅蜜と名け、果とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す。又復明とは名けて三明と爲す。一つには菩薩明、二つには諸佛明、三つには無明明なり。菩薩明とは卽ち是般若波羅蜜、諸佛明とは卽ち是佛眼、無明明とは卽ち是畢竟空なり。行とは無量劫に於て、衆生の爲の故に諸の善業を修し、足とは明かに佛性を見る。是の義を以ての故に明行足と名く。

云何が善逝なる。善とは高と名け、逝とは不高と名く。善男子、是を世間の義と名く。高とは名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲し、不高とは卽ち如來心なり。善男子、心若高なる者は如來と名けず。是の故に如來を名けて善逝と爲す。又復善とは名けて善知識と爲し、逝とは善知識の果なり。善男子、是を世間の義と名く。善知識とは卽ち初發心、果とは名けて大般涅槃と爲す。如來最初の發心を捨てずして大涅槃を得。是の故に如來を名けて善逝と爲す。又復善とは好と名け、逝とは有と名く。善男子、是を世間の義と名く。好とは佛性を見るを名け、有とは大涅槃と名く。善男子、涅槃の性、實は有に非ざるなり。諸佛世尊、世間に因るが故に說きて是有と言ふ。善男子、譬へば世人、實は子有ること無きに、說きて子有りと言ひ、實は道有ること無きに、說きて道有りと言ふが如し。涅槃も亦爾なり。世間に因るが故に說きて是有と言ふ。諸佛世尊大涅槃を成ず。故に善逝と名く。

云何が世間解なる。世間とは名けて五陰と爲し、解とは知と名く。諸佛世尊善く五陰を知る、故に世間解と名く。又世間とは名けて五欲と爲し、解とは不著を名く。五欲に著せ

【無上士】アヌッタラ(Anuttara)の譯。

ず、故に世間解と名く。又世間とは東方無量阿僧祇世界の一切の聲聞緣覺、知らず、見ず、解せず。諸佛は悉く知り、悉く見、悉く解す。南西北方、四維、上下も亦復是の如し。是の故に佛を號けて世間解となす。又世間とは一切の凡夫、解とは諸の凡夫の善惡因果を知る。是聲聞、緣覺の知る所に非ず、唯佛のみ能く知る。是の故に佛を號けて世間解と爲す。又世間とは名けて蓮華と曰ひ、解とは不汙と名く。善男子、是を世間の義と名く。蓮華とは卽ち是如來、不汙とは如來世間の八法に汙染せられず。是の故に佛を號けて世間解と爲す。又世間解とは諸佛菩薩を世間解と名く。何を以ての故に。諸佛、菩薩、世間を見るが故に、故に世間解と名く。善男子、食に因つて命を得れば食を名けて命と爲すが如く、諸佛、菩薩も亦復是の如し。世間を見るが故に、故に世間解と名く。

云何が無上士なる。上士とは之を名けて斷と爲し、所斷無き者を無上士と名く。諸佛世尊は煩惱有ること無きが故に所斷無し。是の故に佛を號けて無上士と爲す。又上士とは名けて諍訟と爲し、無上士とは諍訟有ること無し。如來は諍無し、是の故に佛を號けて無上士と爲す。又上士とは語壞すべしと名け、無上士とは語壞すべからず。如來の所言は一切衆生壞すること能はざる所なり。是の故に佛を號けて無上士と爲す。又上士とは名けて上座と爲し、無上士とは無上座と名く。三世諸佛は更に過ぐる者無し。是の故に佛を號けて無上士と爲す。上とは新と名け、士とは故と名く。諸佛世尊は大涅槃を體して新無く故無し。是の故に佛を號けて無上士と爲す。

【調御丈夫】プルシヤダミヤサーラテ(Purusadamyasārathi)の譯。

【天人師】シヤースターデーヴマヌシヤーナム(Śāstādevamanusyānaṃ)の譯。

云何が調御丈夫なる。自ら既に丈夫にして復丈夫を調ふ。善男子、如來とは實に丈夫に非ず、不丈夫に非ず。丈夫を調ふるに因るが故に、故に如來を名けて丈夫と爲すなり。善男子、一切の男女若し四法を具すれば則ち丈夫と名く。何等をか四つと爲す。一つには善知識、二つには能聽法、三つには思惟義、四つには如說修行なり。善男子、若は男、若は女、是の四法を具すれば、則ち丈夫と名く。善男子、若し男子有りて此の四法無きときは、則ち名けて丈夫と爲すことを得ざるなり。何を以ての故に。身丈夫と雖も行、畜生に同じ。如來若は男若は女を調伏す。是の故に佛を號けて調御丈夫と爲す。復次に善男子、馬を御する者に凡て四種有り。一つには毛に觸れ、二つには皮に觸れ、三つには肉に觸れ、四つには骨に觸る。其の觸るる所に隨ひて御者の意に稱ふが如く、如來も亦爾なり。四種の法を以て衆生を調伏す。一つには爲に生を說くに便ち佛語を受く、其の毛に觸れて御者の意に隨ふが如し。二つには生老を說くに便ち佛語を受く、毛、皮に觸れて御者の意に隨ふが如し。三つには生及以老病を說くに便ち佛語を受く、毛、皮、肉に觸れて御者の意に隨ふが如し。四つには生及び老病死を說くに便ち佛語を受く、毛皮、肉骨に觸れて御者の意に隨ふが如し。善男子、御者の馬を調ふるは決定有ること無し。如來世尊の衆生を調伏するは必定して虛ならず。是の故に佛を調御丈夫と號く。

云何が天人師なる。師に二種有り。一つには善教、二つには惡教なり。諸佛菩薩、常に善法を以て諸の衆生を教ふ。何等か善法なる。身、口、意の善を謂ふ。諸佛菩薩、諸の

衆生を敎へて是の如きの言を作さく、「善男子、汝當に身不善業を遠離すべし。何を以ての故に。身の惡業は是遠離して解脫を得べきを以ての故に。是の故に我此の法を以て汝を敎ふ。若此の惡業、遠離し解脫を得べからざれば、終に汝を敎へて遠離せしめざるなり。若諸の衆生、惡業を離れ已りて三惡に墮すれば、是の處有ること無し。遠離を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提を成じ、大涅槃を得。是の故に諸佛菩薩は常に此の法を以て衆生を敎化す。口、意も亦爾なり。是の故に佛を號けて無上の師と爲す。復次に昔未だ道を得ず、今已に之を得。所得の道を以て衆生の爲に說く。本より已來未だ梵行を修せず。今已に修し竟る。已の所修を以て衆生の爲に說く。自ら無明を破し、復衆生の爲に無明を破壞す。自ら淨目を得、復衆生の爲に盲瞑を破除して淨眼を得しむ。自ら二諦を知り、復衆生の爲に二諦を演說す。既に自ら解脫し、復衆生の爲に解脫の法を說く。自ら無邊の生死の大海を度し、復衆生をして皆悉く度を得しむ。自ら無畏を得、復衆生を敎へて怖畏無からしむ。自ら既に涅槃し、復衆生の爲に大涅槃を演ず。是の故に佛を號けて無上の師と爲す。天とは晝を名く。天上晝長く夜短し、是の故に天と名く。又復天とは無愁惱を名く。常に快樂を受く、是の故に天と名く。又復天とは名けて燈明と爲す。能く黑闇を破して而も大明と爲す、是の故に天と名く。亦能く惡業の黑闇を破し、善業を得て而も天上に生ずるを以て、是の故に天と名く。又復天とは吉を名く。吉祥を以ての故に名けて天と爲すことを得。又復天とは日を名く。日は光明有り、故に日を名けて天と爲す。是の義を以ての故に名けて天と爲

【佛】ブッダ(Buddha)の音譯。

【婆伽婆】バガヴァット(Bhagavat)の音譯。世尊と譯す。

すなり。人とは名けて能く恩義多しと爲す。又復人とは身口柔軟、又復人とは憍慢有りと名け、又復人とは能く憍慢を破す。善男子、諸佛は一切衆生の無上の大師と爲すと雖も、而も經中に說きて天人師と爲す。何を以ての故に。善男子、諸の衆生の中、唯天と人と能く阿耨多羅三藐三菩提心を發し、能く十善業道を修し、能く須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を得、阿耨多羅三藐三菩提を得。是の故に佛を號けて天人師と爲す。

云何が佛と爲す。佛とは覺と爲す。既に自ら覺悟し復能く他を覺らしむ。善男子、譬へば人有りて賊有るを覺知すれば、賊能く爲すこと無きが如く、菩薩摩訶薩能く一切の無量の煩惱を覺す。既に覺了し已りて、諸の煩惱をして能く爲す所無からしむ。是の故に佛と名く。是の覺を以ての故に不生、不老、不病、不死なり。是の故に佛と名く。

婆伽婆とは、婆伽は破と名け、婆は煩惱と名く。能く煩惱を破するが故に婆伽婆と名く。又能く諸の善法を成就するが故に、又能善く諸の法義を解するが故に、大功德有りて能く勝るが故に、大名聞有りて十方に徧ずるが故に、又能く種種に大惠施するが故に、又無量阿僧祇劫に於て女根を吐くが故なり。

善男子、若は男、若は女、是の如く佛を念ずる者は、若は行、若は住、若は坐、若は臥、若は晝、若は夜、若は明、若は闇、常に佛世尊を見るを離れざることを得。

善男子、何が故ぞ名けて、如來、應、正徧知、乃至婆伽婆、而も是の如き無量の功德大

【出世間心】以下五十四心をあぐ。

【六】念法を明す。

名稱有りと爲すや。善男子、菩薩昔無量阿僧祇劫に於て、父母、和上、諸師、上座、長老を恭敬し、無量劫に於て常に衆生の爲に、而も布施を行じ、堅く禁戒を持ち、忍辱を修習し、勤行精進し、禪定智慧、大慈大悲、大喜大捨す。是の故に今三十二相、八十種好金剛の身を得。又復菩薩昔無量阿僧祇劫に於て進、信、念、定、慧根を修習し、諸の師長に於て恭敬供養し、常に法利の爲にして食利の爲にせず。菩薩若は十二部經を持し、若は讀み、若は誦し、常に衆生の爲に解脫、安隱、快樂を得しめ、終に自の爲にせず。何を以ての故に。菩薩は常に出世間心、及び出家心、無爲の心、無諍訟心、無垢穢心、無繫縛心、無取著心、無覆蓋心、無無記心、無生死心、無疑網心、無貪欲心、無瞋恚心、無愚癡心、無憍慢心、無穢濁心、無煩惱心、無苦心、無量心、廣大心、虛空心、無心、無無心、不調心、不護心、無覆藏心、無世間心、常定心、常修心、常解脫心、無報心、無願心、善願心、無語心、柔軟心、不住心、自在心、無漏心、第一義心、不退心、無常心、正直心、無諂曲心、淳善心、無多少心、無堅心、無凡夫心、無聲聞心、無緣覺心、善知心、界知心、生界知心、住界知心、自在界心を修す。是の故に今十力、四無所畏、大悲、三念處、常樂我淨を得。是の故に如來、乃至婆伽婆と稱するを得。是を菩薩摩訶薩の念佛と名く。

(六)云何が菩薩摩訶薩の念法なる。善男子、菩薩摩訶薩思惟す「諸佛說くべき所の法は最妙最上なり。」是の法に因るが故に、能く衆生をして現在の果を得しむ。唯此の正法のみ時節有ること無し。法眼の所見、肉眼の見に非ず。然るに譬喩を以て比を爲すべからず。不生

不出、不住不滅、不始不終、無爲無數なり。舍無き者には爲に舍と作り、歸無きに歸と作り、明無きに明と作り、未だ彼岸に至らざれば彼岸に至らしめ、無香處の爲に無礙香と作り、覩見すべからず。不動不轉、不長不短なり。永く諸樂を斷じて安隱樂、畢竟微妙なり。非色斷色、而も亦是色、乃至非識斷識、而も亦是識、非業斷業、非結斷結、非物斷物、而も亦是物。非界斷界、而も亦是界。非有斷有、而も亦是有。非入斷入、而も亦是入。非因斷因、而も亦是因。非果斷果、而も亦是果。非虛非實、一切の實を斷じ、而も亦是實。非生非滅、永く生滅を斷じ、而も亦是滅。非相非非相、一切相を斷じ、而も亦是相。非教非不教、而も亦是師。非怖非安、一切怖を斷じ、而も亦是安。非忍非不忍、永く不忍を斷じ、而も亦是忍。非止非不止、一切止を斷じ、而も亦是止。一切法の頂、悉く能く永く一切の煩惱を斷ず。淸淨無相、永く諸相を脫す。無量の衆生の畢竟住處なり。能く一切の生死熾火を滅す。乃ち是諸佛所遊居の處、常にして變易せず。是を菩薩の念法と名く。

(七)云何が念僧なる。諸佛聖僧如法にして住し、正直の法を受けて隨順修行す。覩見すべからず、捉持すべからず、破壞すべからず、能く嬈害する無し。思議すべからず、一切衆生の良祐福田なり。福田と爲すと雖も受取する所無く、淸淨無穢、無漏無爲、廣普無邊なり。其の心調柔にして平等無二なり。擾濁有ること無く、常にして變易せず。是を念僧と名く。

(八)云何が念戒なる。菩薩思惟す、「戒有りて破らず、漏さず、壞せず、雜へず。形色無しと

【七】念僧を明す。

【八】念戒を明す。

【四九】念施を明す。

雖も護持すべし。觸對無しと雖も善く方便を修して具足を得べく、過咎有ること無き、諸佛菩薩の讃歎する所にして是大方等大涅槃の因なり。」善男子、譬へば大地、船舫、瓔珞、大姓、大海、灰汁、舍宅、刀劍、橋梁、良醫、妙藥、阿伽陀藥、如意寶珠、脚足眼目、父母陰涼の如く、能く劫盜する無く、燒害すべからず。火も焚くこと能はず、水も漂はすこと能はず。大山の梯隥、諸佛菩薩の妙寶勝幢なり。若是の戒に住すれば須陀洹果を得。我も亦分有れども、然も我須ひず。何を以ての故に。若我是の須陀洹果を得ば、廣く一切衆生を度すること能はず。若是の戒に住して阿耨多羅三藐三菩提を得ば我も亦分有り。是我が欲する所なり。何を以ての故に。若阿耨多羅三藐三菩提を得れば、當に衆生の爲に廣く妙法を說きて救護を作すべし。是を菩薩摩訶薩の念戒と名く。

(九)云何が念施なる。菩薩摩訶薩深く此の施を觀ず、乃ち是阿耨多羅三藐三菩提の因なり。諸佛菩薩是の如きの布施を親近修習す。我も亦是の如く親近修習す。若惠施せざれば四部の衆を莊嚴すること能はず。施畢竟じて結を斷ずること能はずと雖も、而も能く現在の煩惱を除破す。施の因緣を以て常に十方の無量無邊の恆河沙等の世界の衆生に稱歎せらる。菩薩摩訶薩衆生に食を施すとき則ち其の命を施す。是の果報を以て得佛の時常にして變易せず。樂を施すを以ての故に、成佛の時則ち安樂を得。菩薩施す時如法に財を求め、彼を侵して此に施さず。是の故に成佛して清淨涅槃を得。菩薩施す時諸の衆生をして求めずして而も得しむ、是の故に成佛して自在我を得。施の因緣を以て他をして力を得しむ、是

【一〇】念天を明す。

【一一】經の功德を歎ず。是より梵行品第四、第五に至る。初に弘經の人に就て十三不可思議を明す。

の故に成佛して十力を獲得す。施の因緣を以て他をして語を得しむ、是の故に成佛して四無閡を得。諸佛菩薩是の施を修習して涅槃の因と爲す。我も亦是の如く布施を修習して涅槃の因と爲す、廣說、雜華の中の如し。

(一〇)云何が念天なる。四天王處、乃至非想非非想處有り。若信心有らば四天王處を得、我も亦分有り。若我多聞、布施、智慧、四天王處を得、乃至非想非非想處を得。我も亦分有れども然も我欲するに非ず。何を以ての故に。四天王處、乃至非想非非想處皆是無常なり。無常を以ての故に生老病死す。是の義を以ての故に我が欲する所に非ず。譬へば幻化の愚夫を誑すも、智慧の人は惑著せざる所の如し。幻化の如しとは、卽ち是四天王處、乃至非想非非想處なり。愚者は卽ち是一切の凡夫なり、我は則ち凡夫愚人に同じからず。我曾て第一義天有るを聞く、諸佛菩薩常にして變易せざるを謂ふ。常住を以ての故に、不生、不老、不病、不死なり。我衆生の爲に精勤して第一義天を志求す。何を以ての故に。第一義天は能く衆生をして煩惱を除斷すること、猶し意樹の如くならしむ。若我信有り、乃至慧有らば、則ち能く是の第一義天を得。當に衆生の爲に廣く分別して第一義天を說くべし。是を菩薩摩訶薩の念天と名く。善男子、是を菩薩世間に非ずと名くるなり。是世間は知、見、覺せず。而も是菩薩知、見、覺する所と爲す。

(一一)善男子、若我が弟子、十二部經を受持、讀誦、書寫、演說すると、及以大涅槃經を受持讀誦、書寫、敷演、解說すると、等しうして差別無しと謂ふは、是の義然らず。何を以て

の故に。善男子、大涅槃とは即ち是一切の諸佛世尊の甚深祕藏なり。是諸佛の甚深祕藏なるを以て、是則勝と爲す。善男子、是の義を以ての故に大涅槃經は甚奇甚特にして思議すべからず。』

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、我も亦是の大涅槃經甚奇甚特不可思議、佛法衆僧不可思議、菩薩菩提大般涅槃亦不可思議を知る。世尊何の義を以ての故に復菩薩不可思議と言ふ。』

『善男子、菩薩摩訶薩は敎ふる者有ること無きに、而も能く自ら菩提の心を發す。既に發心し已りて勤修精進す。正使大火身首を焚燒すとも、終に救を求め念法の心を捨てず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩常に自ら思惟す「我無量阿僧祇劫に於て或は地獄、餓鬼、畜生、人中、天上に在りて諸結の火に燒然せられ、初て未だ曾て一決定法を得ず。決定法とは即ち是阿耨多羅三藐三菩提なり。我阿耨多羅三藐三菩提の爲に終に身心と命とを護惜せず。我阿耨多羅三藐三菩提の爲に、正に身を碎きて猶し微塵の如くならしむとも、終に勤精進を放捨せざるなり。何を以ての故に。勤精進の心は即ち是阿耨多羅三藐三菩提の因なればなり。」善男子、是の如きの菩薩は未だ阿耨多羅三藐三菩提を見ずして、乃ち能く是の如く身命を惜まず、況や復見已るをや。是の故に菩薩思議すべからず。

又復不可思議とは、菩薩摩訶薩生死の無量の過患を見る所、是聲聞、緣覺の及ぶ所に非ず。生死の無量の過患を知ると雖も、衆生の爲の故に、中に於て苦を受けて厭離を生ぜず。

是の故に復不可思議と名く。菩薩摩訶薩衆生の爲の故に、地獄に在りて諸の苦惱を受くと雖も三禪の樂の如し。是の故に復不可思議と名く。善男子、譬へば長者其の家火を失するに、長者見已りて舍より出で、諸子後に在りて未だ火難を脱せず。長者爾の時に定んで火害を知り、諸子の爲の故に旋り還りて赴救して其の難を顧みざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死諸の過惡多きを知ると雖も、衆生の爲の故に之に處して厭はず。是の故に復不可思議と名く。

善男子、無量の衆生菩提心を發すも、生死の中諸の過惡多きを見て心即ち退沒し、或は聲聞と爲り、或は緣覺と爲る。若菩薩是の經を聞く者有らば、終に菩提の心を退失して、而も聲聞、辟支佛と爲らざるなり。是の如く菩薩復未だ初不動地に階らずと雖も、而も心堅固にして退沒有ること無し。是の故に復不可思議と名く。善男子、若唱へて「我能く大海の水を浮度す」と言ふ有らん。是の如きの言思議すべきや不や。『世尊、是の如きの言或は思議すべく、或は思議すべからず。何を以ての故に。若人度るは則ち思議すべからず。阿修羅度るは則ち思議すべし。』『善男子、我も亦阿修羅を說かざるなり。正しく人を說くのみ。』『世尊、人中にも亦思議すべき者、思議すべからざる者有り。世尊、人に二種有り。一つには聖人、二つには凡夫なり。凡夫の人は卽ち思議すべからず、賢聖の人は則ち思議すべし。』『善男子、我凡夫を說きて聖人を說かず。』『世尊、若凡夫の人は實に思議すべからず。』『善男子、凡夫の人は實に大海水を度ること能はざるなり、而も是の菩

薩は實に能く彼の生死の大海を度す。是の故に復不可思議と名く。善男子、若人有りて能く藕根の絲を以て須彌山を懸けんに、思議すべきや不や。」「不なり世尊。」「善男子、菩薩摩訶薩は一念の頃に於て悉く能く一切の生死を稱量す。是の故に復不可思議と名く。

善男子、菩薩摩訶薩已に無量阿僧祇劫に於て、常に生死、無常、無我、無樂、無淨を觀ずれども、而も衆生の爲に分別して常樂我淨を演說す。是の如く說くと雖も、然も邪見に非ず。是の故に復不可思議と名く。善男子、人水に入るに水溺らすこと能はず、大猛火に入るに火燒くこと能はず。是の如きの事思議すべからざるが如く、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。生死に處すと雖も、生死に惱害せられず。是の故に復不可思議と名く。

善男子、人に三品有り。上、中、下を謂ふ。下品の人は初めて胎に入る時、是の念言を作さく、「我今廁、衆穢歸處、諸の死屍の間、棘刺叢林、大黑闇の中に處す」と。初めて出づる時、復是の念を作さく、「我今廁、諸穢惡處を出づ。乃至大黑闇の中を出づ」と。中品の人は是の念言を作さく、「我今衆樹林果淸淨の河中、房室、舍宅に入る」と。出づる時も、亦爾なり。上品の人は是の念言を作さく、「我殿堂に昇り華林の間に在り。馬に乘り、象に乘り、高山に登上す」と。出づる時も亦爾なり。菩薩摩訶薩、初めて入胎の時自ら胎に入るを知り、住時住するを知り、出時出づるを知る。貪欲、瞋恚の心を起さず。而も亦未だ初住の地を得ず。是の故に復不可思議と名く。善男子、阿耨多羅三藐三菩提は實に譬喩を以て比と爲すべからず。善男子、心も亦方喩を以て比と爲すべからず。而も皆說くべ

し。菩薩摩訶薩諸受學の處有ること無くして、而も能く是の阿耨多羅三藐三菩提を得。是の法を得已りて心に慳吝無く、常に衆生の爲に而も之を演說す。是の故に下可思議と名くることを得。善男子、菩薩摩訶薩身遠離して口に非ざる有り、口遠離して身に非ざる有り、身口に非ずして而も亦遠離する有り。身遠離すとは殺、盜、淫を離るるを謂ふ、是を身遠離して口に非ずと名く。口遠離とは妄語、兩舌、惡口、無義語を離るるを謂ふ、是を口遠離して身に非ずと名く。非身、非口も亦遠離とは所謂貪嫉、瞋恚、邪見を遠離す。善男子、是を非身、非口にして而も是遠離と名く。善男子、菩薩摩訶薩一法の是身是業、及與主を離れて而も亦離有るを見ず。是の故に復不可思議と名く、口も亦是の如し。善男子、身より身を離れ口より口を離れ、慧より非身、非口を遠離す。善男子、實に此の慧有れども、然も菩薩をして遠離せしむること能はず。何を以ての故に。善男子、一法の能く壞し能く作す有ること無し。有爲法性、異生異滅、是の故に此の慧遠離すること能はず。善男子、慧破すること能はず、火燒くこと能はず、水爛すること能はず、風動かすこと能はず、地持すること能はず、生生ずること能はず、老老すること能はず、住住すること能はず、壞壞すること能はず、貪貪ること能はず、瞋瞋ること能はず、癡癡にすること能はず。有爲性異生異滅を以ての故なり。菩薩摩訶薩終に、我此の慧を以て諸の煩惱を破するの念を生ぜず、而も自ら說きて「我煩惱を破す」と言ふ。是の說を作すと雖も是虛妄に非ず。是の故に復不可思議と名く。』

【六師】六師外道と云ふ。釋尊の當時、波羅門教の教團中勢力を有せし六人の教派を云ふ。

【二】迦葉佛の法を明す。

【迦葉佛】カーシヤパ、ブッダ(Kāśyapa-Buddha)過去七佛の第六佛にして釋尊の前佛なり。人壽二萬歳の時に出世し、婆羅門種にして姓を迦葉、父を梵德、母を財主と云ふ。

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、我今始めて菩薩摩訶薩の不可思議、佛法衆僧、大涅槃經、及び受持者、菩提涅槃の不可思議を知る。世尊、無上佛法の住すること當に久近なるべし。幾時にして滅するや。』『善男子、若大涅槃經、乃至是の五行有らん。所謂聖行、梵行、天行、病行、嬰兒行なり。若我が弟子、能く受持し、讀誦、書寫し、其の義を演說する有りて、諸の衆生に恭敬し、尊重、讚歎し、種種供養せらるれば、當に知るべし、爾の時に佛法未だ滅びじ。善男子、若大涅槃經具足流布せんに、爾の時に當りて、我が諸の弟子多く禁戒を犯し、衆惡を造作し、是の如きの經典を敬信すること能はず。不信を以ての故に、受持し、讀誦、書寫し、其の義を解說すること能はず、衆生に恭敬、乃至供養せられず、受持の者を見て「汝は是六師、佛の弟子に非ず」と輕毀し誹謗せん、當に知るべし、佛法將に滅せんとすること久しからじ。』

（二）迦葉菩薩、復佛に白して言さく『世尊、我親しく佛に從ひて是の如きの義を受く「迦葉佛の法世に住すること七日、然して後滅盡す」と。世尊、迦葉如來是の經有りや不や。若其有らば、云何ぞ滅と言ひ、若其無ければ云何ぞ說きて「大涅槃經は是諸の如來の祕密の藏」と言はん。』

佛の言はく『善男子、我上に說きて「唯文殊有りて乃ち是の義を解す」と言ふ。今當に重ねて說くべし。至心に諦かに聽け。善男子、諸佛世尊に二種の法有り。一つには世法、二つには第一義法なり。世法は滅すべく、第一義法は則ち壞滅せず。復二種有り。一つに

【外法】佛教以外の教法を云ふ。之に對して佛教を內法と云ふ。

は無常無我無樂無淨、二つには常樂我淨なり、無常無我無樂無淨は則ち壞滅有り、常樂我淨は則ち壞滅無し。復二種有り。一つには二乘の所持、二つには菩薩の所持なり。二乘の所持は則ち壞滅有り、菩薩の所持は則ち壞滅無し。復二種有り。一つには外、二つには內なり。外法は則ち壞滅有り、內法は則ち壞滅無し。復二種有り。一つには有爲、二つには無爲なり。有爲の法は卽ち壞滅有り、無爲の法は壞滅有ること無し。復二種有り。一つには可得、二つには不可得なり。可得の法は則ち壞滅有り、不可得の法は壞滅有ること無し。一つには共法、二つには不共なり。共法は壞滅、不共の法は壞滅有ること無し。復二種有り。一つには人中、二つには天中なり。人中は壞滅、天は壞滅無し。復二種有り。一つには十一部經、二つには方等經なり。十一部經は則ち壞滅有り、方等經典は壞滅有ること無し。善男子、若し我が弟子方等經典を受持、讀誦、書寫、解說し、恭敬、供養し、尊重、讚歎せば、當に知るべし、爾の時に佛法滅せず。

善男子、汝向に問ふ所の「迦葉如來に是の經有りや不や」とは、善男子、大涅槃經は悉く是一切諸佛の祕藏なり。何を以ての故に。諸佛に十一部經有りと雖も、佛性を說かず。「如來常樂我淨、諸佛世尊畢竟涅槃せず」と說かず。是の故に此の經を名けて如來の祕密の藏と爲す。十一部經に說かざる所なるが故に、故に名けて藏と爲す。人の七寶外に出し用ひざる、之を名けて藏と爲すが如し。善男子、是の人此の物を藏積する所以は、未來の事の爲の故なり。何等か未來の事なる。所謂穀貴、賊來りて國を侵し、惡王に値遇せん。

用ひて命を贖ふが爲に、道路遼難にして財得難き時、乃ち當に出し用ふべし。善男子、諸佛如來祕密の藏も亦復是の如し。未來世の諸の惡比丘不淨物を畜へ、四衆の爲に如來畢竟じて涅槃に入ると說く。世典を讀誦し佛經を敬せず。是の如き等の惡世に現るる時の爲、如來是の諸惡を滅し、邪命利養を遠離することを得しめんと欲するが爲に、如來則ち爲に是の經を演說す。若是の經典祕密の藏滅して現ぜざる時、當に知るべし、爾の時に佛法則ち滅せん。善男子、大涅槃經常にして變易せず、云何ぞ難じて「迦葉佛の時是の經有りや不や」と言はん。善男子、迦葉佛の時有らゆる衆生、貪欲微薄、智慧滋多なり。諸の菩薩摩訶薩等調柔にして化し易し。大威德有りて總持して忘れず、大象王の如し。世界淸淨にして一切衆生悉く、如來終に畢竟じて涅槃に入らず、常住にして變ぜざるを知る。是の典有りと雖も演說すべからず。

善男子、今世の衆生は諸の煩惱多く、愚癡、喜忘、智慧有ること無し。諸の疑網多く、信根立たず、世界不淨なり。一切衆生咸く如來無常變遷、畢竟じて大般涅槃に入ると謂ふ。是の故に如來是の典を演說す。善男子、迦葉佛の法實に亦不滅なり。何を以ての故に、常にして變ぜざるが故なり。善男子、若衆生有りて我を無我と見、無我を我と見、常を無常と見、無常を常と見、樂を無樂と見、無樂を樂と見、淨を不淨と見、不淨を淨と見、不滅を滅と見、滅を不滅と見、罪を非罪と見、非罪を罪と見、輕罪を重と見、重罪を輕と見、乘を非乘と見、非乘を乘と見、道を非道と見、非道を道と見、實に是菩提を非菩提と見、

【一三】一切佛の法を明す。

實に非菩提を是菩提と見、苦を非苦と見、集を非集と見、滅を非滅と見、實を非實と見、實に是世諦を第一義諦と見、第一義諦を是世諦と見、歸を非歸と見、非歸を歸と見、眞佛語を以て名けて魔語と爲し、實に是魔語を以て佛語と爲す。是の如きの時、諸佛乃ち大涅槃經を說きたまふ。

善男子、寧ろ蟁觜の大海の底を盡すと說くとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ索を以て猛風を繫縛すと言ふとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ口須彌を吹いて散壞すと說くとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ佉陀羅火の中蓮華を生ずと言ふとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ阿伽陀藥、而も毒藥と爲すと說くとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ月熱せしむべく日冷えしむべしと說くとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。寧ろ四大各己が性を捨つと說くとも、說きて如來法滅すと言ふべからず。

(一三)善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、未だ弟子甚深の義を解する有らざるを、而も佛世尊、便ち涅槃せば、當に知るべし、是法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子の甚深の義を解する有らば、佛涅槃すと雖も、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

復次に善男子、若佛初めて出で阿耨多羅三藐三菩提を得、弟子の甚深の義を解する有りと雖も、篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有る無きに、佛便ち涅槃せば、當に知るべし、

是の法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子の甚深の義を解する有り。多く篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有らば、佛涅槃すと雖も、當に知るべし、佛法久しく世に住せん。

復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子甚深の義を解する有り。篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りと雖も、而も諸の弟子經法を演說するは、貪つて利養の爲にし涅槃の爲にせずんば、佛滅度すとも、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、弟子の甚深の義を解する有り。復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りと雖も、而も諸の弟子多く諍訟を起して互に相是非し、佛復涅槃せば、當に知るべし、是の法久しく世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて諸の弟子甚深の義を解する有り。復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有り。彼の諸の弟子、和敬の法を修して相是非せず。互に相尊重せば、佛涅槃すと雖も、當に知るべし、是の法久しく住して滅せじ。

復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、弟子甚深の義を解する有り。復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りて、彼の諸の弟子、大涅槃の爲にして法を演說し、互に相恭敬して諍訟を起さずと雖も、然も一切の不淨の物を畜ふ。復自ら讃じて「我須陀洹果、乃至阿羅漢果を得」と言ふ。佛復涅槃せば、當に知るべし、是の法久し

く世に住せじ。復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子甚深の義を解する有り、復篤信の白衣檀越の佛法を敬重する有りて、彼の諸の弟子、大涅槃の爲に經法を演説し、善く和敬を修して互に相尊重し、一切不淨の物を畜へず。亦自ら須陀洹を得、乃至阿羅漢を得と言はざれば、彼の佛世尊、復滅度すと雖も、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

復次に善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得已りて、諸の弟子有り、乃至不淨の物を畜へず。又自ら須陀洹、乃至阿羅漢を得と言はざれども、各所見を執じて種種異説し、是の言を作さく「長老、諸佛所制の四重の法、乃至七滅諍の法、衆生の爲の故に、或は遮し或は開す。十二部經も亦復是の如し。何を以ての故に。佛、國土、時節の各異に衆生同じからず、利鈍の差別を知る。是の故に如來、或は遮し或は開して輕重の説有り。善男子、譬へば良醫の病の爲に乳を服し、病の爲に乳を遮し、熱病には服するを聽し、冷病には則ち遮するが如し。如來も亦爾なり、諸の衆生の煩惱の病根を觀じて亦開し亦遮す。長老、我親しく佛に從ひて是の如きの義を聞く、「唯我のみ義を知る、汝知ること能はじ。唯我のみ律を解す、汝解すること能はじ。我諸經を知る、汝知ること能はじ」と。彼の佛復滅せば、當に知るべし、是の法久しく世に住せじ。善男子、若佛初めて出で、阿耨多羅三藐三菩提を得。諸の弟子有り、乃至「我須陀洹果より阿羅漢果に至るを得」と言はず。亦説きて、「諸佛世尊、衆生の爲の故に或は遮し或は開す。長老、我親しく佛に從ひて是の如

きの義、是の如きの法、是の如きの律を聞く。長老、當に如來の十二部經に依るべし。此の義若是ならば我當に受持すべく、若其非ならば、我當に棄捨すべし」と言はず。彼の佛世尊、復涅槃すと雖も、當に知るべし、是の法久しく世に住せん。

善男子、我が法滅する時聲聞の弟子有りて、或は神有りと說き、或は神空しと說く。或は中陰有りと說き、或は中陰無しと說く。或は三世有りと說き、或は三世無しと說く。或は三乘有りと說き、或は三乘無しと說く。或は一切有と言ひ、或は一切無と言ふ。或は衆生有始有終と言ひ、或は衆生無始無終と言ふ。或は十二因緣是有爲法と言ひ、或は因緣是無爲法と言ふ。或は如來病苦行有りと言ひ、或は病苦行無しと言ふ。或は如來、比丘十種の肉を食するを聽さず。何等をか十と爲す。人、蛇、象、馬、驢、狗、師子、豬、狐、獼猴なり。其の餘は悉く聽すと言ひ、或は一切聽さずと言ふ。或は比丘五事を作さず。何等をか五と爲す、生口、刀、酒、洛沙、胡麻油を賣らず。其の餘は悉く聽すと言ふ。或は五種の家に入ることを聽さず。何等をか五つと爲す。屠兒、淫女、酒家、王宮、旃陀羅舍なり。餘家は悉く聽すと言ひ、或は憍舍耶衣を聽さず、餘の一切は聽すと言ひ、或は如來、諸の比丘に衣食、臥具の其價各十萬兩金に直るを畜ふることを聽すと言ひ、或は聽さずと言ふ。或は涅槃は常樂我淨と言ひ、或は涅槃は直ちに是結盡、更に別の法の名けて涅槃と爲す無く、譬へば織縷の之を名けて衣と爲し、衣既に壞れ已らば名けて無衣と爲す。實に別法の名けて無衣と爲す無きが如し、涅槃の體も亦復是の如しと言ふ。善男子、爾の

【一四】拘睒彌國の佛法を明す。

【拘睒彌】カウシャーンビー（Kau-śāmbi）不靜と譯す。ガンヂス河に沿へる古市。

時に當りて我が諸の弟子、正說の者は少く邪說の者は多し。正法を受くるは少く邪法を受くるは多し。佛語を受くるは少く魔法を受くるは多し。

（一四）善男子、爾の時に拘睒彌國に二りの弟子有り。一は阿羅漢、二は破戒なり。破戒の徒衆凡て五百有り、羅漢の徒衆共の數一百なり。破戒の者は「如來畢竟じて涅槃に入る。我親しく佛に從ひて是の如きの義を聞く、如來所制の四重の法、若持するも亦可、犯するも亦罪無しと。我今も亦阿羅漢果を得て四無閡智あり。而も阿羅漢も亦是の如きの四重の法を犯す。四重の法若是實罪ならば阿羅漢の者は終に犯すべからず。如來の在世制して堅く持すと言ふも、涅槃に臨む時皆悉く放捨す」と說く。阿羅漢比丘の言さく、「長老、汝如來畢竟じて、涅槃に入ると說くべからず。我知る如來は常にして變易せじ。如來の在世及び涅槃の後四重禁を犯す、罪差別無し。若羅漢四重禁を犯すと言はば、是の義然らず。何を以ての故に。須陀洹の人尙禁を犯さず、況や阿羅漢をや。長老の「我は是羅漢」と言ふが若き、阿羅漢の者は終に想を我羅漢を得るに生ぜず。阿羅漢の者は唯善法を說きて不善を說かず。長老の所說は皆是非法なり。若十二部經を見ることを得る有らば、定んで長老の阿羅漢に非ざるを知らん。」善男子、爾の時に破戒比丘の徒衆、卽ち共に是の阿羅漢の命を斷ず。善男子、是の時魔王、是の二衆忿恚の心に因りて悉く共に是の六百の比丘を害す。爾の時に凡夫各共に說きて言はく「哀しい哉佛法是に於て滅盡す」と。而も我が正法實は滅せざるなり。爾の時に其の國に十二萬の諸の大菩薩の善く我が法を持する有り。云

何ぞ當に我が法滅すと言ふべきや。爾の時に當りて閻浮提の內、一比丘の我が弟子爲る無し。爾の時に波旬悉く大火を以て一切所有の經典を焚燒す。其の中或は遺餘在る者有り。諸の婆羅門卽ち共に偸取し、處處に采拾して己が典に安置す。是の義を以ての故に諸の小菩薩、佛未出の時、率ね共に婆羅門の語を信受す。諸の婆羅門是の、我齋戒有りと說くことを作すと雖も、而も諸の外道眞實は無なり。諸の外道等の復說きて我樂淨有りと言ふと雖も而も實は我樂淨の義を解せず。直ちに佛法の一字、二字、一句、二句を以て、說きて「我が典に是の如きの義有り」と言ふ。』

爾の時に拘尸城、娑羅雙樹の間、無量無邊阿僧祇の衆、是の語を聞き已りて悉く共に唱へて言はく、『世間虛空、世間虛空』と。

迦葉菩薩諸の大衆に告ぐらく『汝等且く憂悲啼哭すること莫れ。世間不空なり、如來常住にして變易有ること無し。法僧も亦爾なり』と。

爾の時に大衆、是の語を聞き已りて啼哭卽ち止み、悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發せり。

【梵行品四】此品は前品に繼ぎ經の功德を歎ずるの中惡を滅するを明す品中阿闍世の惡業を明す。
【一】廣く阿闍世王惡逆の因緣を明す。
【阿闍世】アジヤタシャトル(Ajataśatru)未生怨と譯す。中印度摩揭陀國頻婆娑羅王の子。初め惡逆を極め父王を殺し、自立して中印度に覇權を振ふ。
【五欲樂】五官の欲を引き起す色聲香味觸の五境を五欲と云ひ、その樂しみを五欲樂と云ふ。
【父王】頻婆娑羅(Bimbisāra)影堅等と譯す。摩揭陀國の王にして佛に歸依し、竹林精舍を供養せり。
【韋提希】ヴイデーヒー(Vaidehi)思惟、勝身等と譯

大般涅槃經　卷第十七

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

梵行品第二十之四

(一)爾の時に王舍大城の阿闍世、其性弊惡にして喜んで殺戮を行じ、口の四過を具す。貪恚愚癡、其心熾盛なり。唯現在を見て未來を見ず、純ら惡人を以て眷屬と爲す。現世の五欲樂に貪著するが故に、父王辜無きに横に逆害を加ふ。父を害し已るに因りて心に悔熱を生じ、身の諸瓔珞、伎樂御せず。心悔熱の故に徧體瘡を生ず。其瘡臭穢、附近すべからず。尋で自ら念じて言はく、「我今此の身已に華報を受く。地獄の果報將に近かんとする遠からじ。」爾の時に其母韋提希后、種種の藥を以て爲に之を塗るに、其瘡遂に增して降損有ること無し。王卽ち母に白さく、「是の如きの瘡は心より生じて四大起に非ず。若衆生の能く治する者有りと言はば是處有る無けん。」(二)時に大臣に名を月稱と曰ふ有り。王の所に往至し、一面に在りて立ち白して言さく、「大王、何が故ぞ愁悴して顏容悦ばざる。身痛と爲んや心痛と爲んや。」王、臣に答へて言はく、「我今身心豈痛まざることを得んや。我、父辜無きに横に逆害を加ふ。我智者に從ひて

す。摩揭陀國頻婆娑羅王の后妃。
【二】滅惡の緣を明す。初めに月稱の緣を明す。
【月稱】チャンドラヤシャス(Candrayaśas)の譯。
【富蘭那】プールナ(Pūrṇa)の音譯
【三】藏德の緣を明す。

曾て是の義を聞けり、世に五人有りて地獄を脫れず、五逆罪を謂ふなりと。我今已に無量無邊阿僧祇の罪有り。云何ぞ身心痛まざるを得んや。又良醫の我が身心を治する無けん。』

臣の言さく、『大王、大いに愁苦すること莫れ。』卽ち偈を說きて言さく、

若し常に愁苦すれば、愁遂に增長す
人喜びて眠れば、眠則ち滋多有るが如く
貪淫嗜酒も、亦復是の如し

『王の言ふ所の「世に五人有りて地獄を脫れざるの如き、誰か往きて之を見、來りて王に語るや。地獄と言ふは卽ち是世間の多智の者の說なり。王の言ふ所の如き、「世に良醫の身心を治する無し」とは、今大醫有りて富蘭那と名く。一切知見し自在定を得、畢竟じて清淨梵行を修習し、常に無邊の衆生の爲に無上涅槃の道を演說す。諸の弟子の爲に是の如きの法を說く、「黑業有ること無く、黑業の報無し。白業有ること無く、白業の報無し。黑白業無く、黑白業の報無し。上業及以下業有ること無し。」是の師今王舍城の中に在り。唯願はくば大王、駕を屈して彼に往き、是の師をして身心を療治せしむべし。』時に王答へて言はく、『審かに能く是の如く滅除せば、我當に歸依すべし。』

(三)復一臣の名を藏德と曰ふ有り。復王の所に往きて是の言を作さく、『大王、何が故ぞ面貌憔悴し、脣口乾燥し、音聲微細なる。猶し怯人の大怨敵を見るが如く、顏色慘變するや。將何の苦む所ぞ、身痛と爲んや心痛と爲んや。』王卽ち答へて言はく、『我今身心云何ぞ痛まざ

らん。我の癡盲なる慧眼有ること無し。諸の惡友に近きて親善を爲し、提婆達の惡人の言に隨ひ、正法の王に横に逆害を加ふ。我昔曾て智人の說偈を聞く、

若父母、佛及び弟子に於て
不善心を生じ、惡業を起さば
是の如きの果報、阿鼻獄に在らん

是の事を以ての故に、我をして心怖れて大苦惱を生ぜしむ。良醫の救療を見る有ること無けん。』大臣復言さく『唯願はくば大王、且く愁怖すること莫れ。法に二種有り。一つには出家、二つには王法なり。王法とは謂く、其の父を害すれば則ち王の國土「是逆」と云ふと雖も、實は罪有ること無し。迦羅羅蟲の要ず母腹を壞りて然して後乃ち生ずるが如し。生法是の如くなれば母身を破すと雖も、實に亦罪無し。騾等の懷妊も亦復是の如し。治國の法、法は是の如くなるべし。父兄を害すと雖も亦罪有ること無し。出家法とは乃至蟁蟻をも殺さば亦罪有り。唯願はくば大王、意を寛うして愁ふること莫れ。何を以ての故に。若常に愁苦すれば愁遂に增長す。人喜んで眠れば眠則ち滋多きが如く、貪淫、嗜酒も亦復是の如し。王の言ふ所の如き、世に良醫の身心を治する無しとは、今大師有り、末伽梨拘舍離子と名く。一切知見す。衆生を憐愍すること猶し赤子の如し。已に煩惱を離る、能く衆生の三毒の利箭を拔く。一切衆生一切法に於て知見覺無し。唯是一人獨り知見覺す。是の如く大師常に弟子の爲に是の如きの法を說く。一切衆生身七分有り。何等をか七と爲

【提婆達】デーヴダッタ(Devadatta)天授又は天熱と譯す。釋尊の從弟。阿難の兄。初め出家して釋尊の弟子となつたが、後に反逆して和合僧を破り、佛身を傷け、その逆罪のために生き乍ら墮獄せりと傳ふ。

【末伽梨拘舍離子】マスカリー、ゴーシャーリプトラ(Maskari-Gośāliputra)拘舍離の子末伽梨の意。六師外道の一。

【伊師迦草】イーシーカ(Isika)矢を造る芦の一種。

【四】實得の緣を明す。

す。地、水、火、風、苦、樂、壽命なり。是の如きの七法は化に非ず、作に非ず。毀害すべからざる伊師迦草の如く、安住不動なる須彌山の如く、不捨不作なる猶し乳酪各諍訟せざるが如し。若は苦、若は樂、若は善、不善、之に利刀を投ずるに傷害する所無し。何を以ての故に。七分空の中妨閡無きが故に、命亦害すること無し。何を以ての故に。害者及び死者有ること無きが故に。無作無受、無說無聽、念者及以教者有ること無し。常に是の法を說きて、能く衆生をして一切の無量の重罪を滅除せしむ。是の師今王舍大城に在り。唯願はくば大王、其の所に往至せよ、王若見ば、衆罪消滅せん。』時に王答へて言はく『審かに能く是の如きの我が罪を除滅せば、我當に歸依すべし。』

(四)復一臣有り、名を實得と曰ふ。復王の所に到り、即ち偈を說きて言さく、

大王何が故ぞ、身瓔珞を脫し
首髮蓬亂、乃ち是の如きに至る
王身何が故ぞ、戰慄して安んぜざること
猶し猛風の、華樹を吹動するが如くなる

『王今何が故ぞ容色愁悴す、猶し農夫の種を下すの後、天雨を降さざれば愁苦すること是の如くなるが如し。是心痛と爲んや身痛と爲んや。』王即ち答へて言はく『我今身心豈痛まざることを得んや。我が父先王慈愛仁惻にして特に矜念を見る、實に過咎無し。往いて相師に問ふ。相師答へて言さく「是の兒生じ已りて定んで當に父を害すべし」と。是の語を聞く

【僧祇物】僧祇は又僧伽とも書く。比丘比丘尼の衆に名づく。これらのものの衆が所有するものを僧祇物と云ふ。

と雖も猶瞻養せらる。曾て智者の是の如きの言を作すを聞く、「若人母に通じ比丘尼を汚し、僧祇物を偷み無上菩提の心を發す人を害し、及び其の父を殺す。是の如きの人、必定して當に阿鼻地獄に墮すべし」と。我今身心豈痛まざることを得んや。」大臣復言さく、「唯願はくば大王、且く愁苦すること莫れ。若其父王解脱を修する者、害せば則ち罪有らん。若治國の法、殺せば則ち罪無けん。大王、非法とは名けて無法と爲し、無法とは名けて無法と爲す、譬へば子無ければ名けて無子と爲すが如し。又惡子亦無子と名くるが如し、無子と言ふと雖も實は子無きに非ず。食に鹽無ければ名けて無鹽と爲し、食若鹽少きも亦無鹽と名くるが如し。河に水無ければ名けて無水と爲す、若少水有るも亦無水と名く。念念滅を名けて無常と曰ふ、住ること一劫と雖も、亦無常と名くるが如し。人苦を受くるを名けて無樂と爲し、少樂を受くと雖も亦無樂と名くるが如し。不自在を名けて無我と爲し、少しく自在なりと雖も亦無我と名くるが如し、闇夜の時を名けて無日と爲し、雲霧の時も亦無日と言ふが如し。大王、少法を名けて無法と爲すと言ふと雖も、實は法無きに非ず。願はくば王、神を留めて臣が所說を聽きたまへ。一切の衆生皆餘業有り、業緣を以ての故に數生死を受く。若先王をして餘業有らしむれば、王今之を害する竟に何の罪か有らん。唯願はくば大王、意を寛うして愁ふること莫れ。何を何ての故に、

若常に愁苦すれば、愁遂に增長す
人喜びて眠れば、眠則ち滋 多きが如く

【珊闍耶毗羅抵子】毗羅抵の子珊闍耶の意。六師外道の一。

貪婬嗜酒も、亦復是の如し

王の言ふ所の如き「世に良醫の身心を治する無し」とは、今大師有りて、珊闍耶毗羅抵子と名く。一切知見す。其の智深廣にして猶し大海の如し。大威徳有りて大神通を具す。能く衆生をして諸の疑網を離れしむ。一切衆生知見覺せず、唯是一人獨り知見覺す。今者近く王舍城に在りて住し、諸の弟子の爲に是の如きの法を説く。一切衆中若是王ならば、自在隨意に善惡を造作す。衆惡を爲すと雖も悉く罪有ること無し、火の物を燒きて淨、不淨無きが如く、王も亦是の如し、火と性を同じうす。譬へば大地の淨穢普く載す。是の事を爲すと雖も初て瞋喜無きが如く、王も亦是の如し、地と性を同じうす。譬へば水性は淨穢俱に洗ふ。是の事を爲すと雖も亦憂喜無きが如く、王も亦是の如し、水と性を同じうす。譬へば風性の淨穢等しく吹く。是の事を爲すと雖も亦憂喜無きが如く、王も亦是の如し、風と性を同じうす。秋の杌樹春は則ち還つて生ず。復杌斫すと雖も實に罪有ること無きが如く、一切衆生も亦復是の如し。此の間に命終して此の間に還生す。還生を以ての故に當に何の罪か有るべき。一切衆生の苦樂の果報は、悉く皆現在世の業に由らず。因過去に在りて現在果を受け、現在因無ければ未來果無し。現果を以ての故に衆生戒を持す、勤修精進して現の惡果を遮す。持戒を以ての故に則ち無漏を得、無漏を得るが故に有漏業を盡す、業を盡すを以ての故に衆苦盡すことを得、衆苦盡くるが故に便ち解脫を得。唯願はくば大王、速に其の所に往き、其をして身心の苦痛を療治せしめよ。王若見ば衆罪除くことを得

【五】知悉義の緣を明す。

【毗瑠璃】ヸルーダカ（Virudhaka）波斯匿王の子、末利夫人の所生。

【優陀耶】ウダヤナ（Udayana）拘睒彌國の王名。

ん。」王即ち答へて言はく、「審かに是の師の能く我が罪を除く有らば、我當に歸依すべし」。

(五)復一臣の悉知義と名くる有り。復王所に至りて是の如きの言を作さく、「王今何が故ぞ形端嚴ならざる。國を失ふ者の如く、泉の枯涸、池の蓮華無き、樹の枝葉無き、破戒の比丘の身に威徳無きが如くなる。身痛と爲んや心痛と爲んや」。王即ち答へて言はく、「今我が身心豈痛無きことを得んや。我が父先王は慈愍流念なり。而るを我不孝にして報恩を知らず、常に安樂を以て我を安樂にす。而るを我恩に背いて反つて其の樂を斷ず。先王過無きに横に逆害を興す。我も亦嘗て智者の說きて言ふを聞く、「若父を害する有らば、當に無量阿僧祇劫に於て大苦惱を受くべし」と。我今久しからずして必ず地獄に墮せん、又良醫の我が罪を救療する無し」。大臣即ち言さく、「唯願はくば大王、愁苦を放捨せよ。王聞かずや、昔者王有りて名を羅摩と曰ふ。其の父を害し已りて王位を紹ぐことを得。跋提大王、毗樓眞王、那睺沙王、迦帝迦王、毗舍佉王、月光明王、日光明王、愛王、持多人王、是の如き等の王は、皆其の父を害して王位を紹ぐことを得たり。然も一王の地獄に入る者無し。今現在に於て毗瑠璃王、優陀耶王、惡性王、鼠王、蓮華王、是の如き等の王は皆其の父を害す。悉く一王の愁惱を生ずる者無し。地獄、餓鬼、天中を言ふと雖も誰か見る者有らん。大王、唯二有有り。一つには人道、二つには畜生なり。是の二つ有りと雖も、因緣生に非ず、因緣死に非ず。若因緣に非ざれば何ぞ善惡有らん。唯願はくば大王愁怖を懷くこと勿れ。何を以ての故に、

【阿耆多翅舍欽婆羅】アヂタケーシヤ、カムバラ(Ajita-kesa-Kambara)無勝髪衣と譯す。六師外道の一。苦行派なり。

【六】吉德の緣を明す。

若常に愁苦すれば、愁遂に增長す
人の喜びて眠れば、眠則ち滋多きが如く
貪淫嗜酒も、亦復是の如し

王の言ふ所の如く「世に良醫の身心を治する無し」とは、今大師有りて阿耆多翅舍欽婆羅と名く。一切知見す。金と土とを觀ずるに平等にして二つ無し。刀右脅を斫り、栴檀左に塗る。此の二人に於て心に差別無し。等しく怨親を視、心に異相無し。此の師眞に是世の良醫なり。若は行若は立、若は坐若は臥、常に三昧に在りて心に分散無し。諸の弟子に告げて是の如きの言を作さく「若は自作、若は敎他作、若は自斫、若は敎他斫、若は自炙、若は敎他炙、若は自害、若は敎他害、若は自偸、若は敎他偸、若は自淫、若は敎他淫、若は自妄語、若は敎他妄語、若は自飲酒、若は敎他飲酒、若は一村、一城、一國を殺し、若は刀輪を以て一切衆生を殺す。若は恆河以南の衆生に布施し、恆河以北の衆生を殺害す。悉く罪福無く、施戒定無し」と。今者近く王舍城に在りて住す。願はくば王速かに往きたまへ。王若見ば衆罪除滅せん。」王、大臣に語らく、『能く是の如き我が罪を除滅するを審かにせば、我當に歸依すべし。』

(六)復大臣の名を吉德と曰ふ有り。復王の所に往きて是の如きの言を作さく、「王今何が故ぞ面に光澤無くして、日中の燈の如く、晝時の月の如く、失國の君の如く、荒敗の土の如くなる。大王、今者四方清夷にして諸の怨敵無し。而も今何が故ぞ是の如く愁苦する。身苦と

爲んや心苦と爲んや。諸の王子有りて常に此の念を生ず、「我今何れの時か當に自在を得べき。」大王今者已に所願を果し、自在に摩伽陀國を王領し、先王の寶藏具足して得。唯當に意を快くし情を縱にして樂を受くべし。是の如きの愁苦何に用經てか懷くや。」王卽ち答へて言はく、「我今云何ぞ愁惱せざることを得ん。譬へば愚人の但其の味を貪りて利刀を見ざるが如く、雜毒を食して其の過を見ざるが如し。我も亦是の如し。鹿の草を見て深穽を見ざるが如く、鼠の食を貪りて猫狸を見ざるが如し。我も亦是の如し、現在の樂を見て未來の不善の苦果を見ず。曾て智者に從ひて是の如きの言を聞く、「寧ろ一日に於て三百矛を受くとも、父母に於て一念の惡を生ぜず。」我今已に地獄の熾火に近く、云何ぞ當に愁惱せざることを得べきや。」大臣復言さく、「誰か來りて王を誑かして地獄有りと言ふ。刺頭の尖の如き、誰が造る所ぞ。飛鳥の異色復誰が作る所ぞ。水性の潤澤、石性の堅硬、風の動性の如き、火の熱性の如き、一切萬物の自死自生、誰の作る所ならん。地獄と言ふは直ちに是智者の文詞造作、地獄と言ふは何の義有りと爲す。臣當に之を說くべし。地とは地と名け、獄とは破と名く。地獄を破す、罪報有ること無し、是を地獄と名く。又復地とは人と名け、獄とは天と名く。其の父を害するを以ての故に人天に至る。是の義を以ての故に、婆藪仙人唱へて羊を殺して人天の樂を得と言ふ。是を地獄と名く。又復地とは命と名け、獄とは長と名く。殺生を以ての故に壽命長きことを得。故に地獄と名く。大王、是の故に當に知るべし、實は地獄無し。大王、麥を種ゑて麥を得、稻を種ゑて稻を得るが如く、地獄を殺す者

【迦羅鳩駄迦旃延】クラクダカーティヤーヤナ(Krakudakātyāyana)迦羅鳩駄はその名、迦旃延はその姓なり。外道の一。

は還つて地獄を得、人を殺害せば還つて人を得べし。大王、今當に臣が所說を聽くべし。實に殺害無し。若我有らば實に亦害無し、若我無ければ復害する所無し。何を以ての故に。若我有らば常にして變易せず、常住を以ての故に殺害すべからず。不破、不壞、不繫、不縛、不瞋、不喜、猶し虛空の如し。云何ぞ當に殺害の罪有るべき。若我無ければ諸法は無常なり。無常を以ての故に念念に壞滅す。念念滅の故に殺者、死者皆念念に滅す。若念念に滅せば誰か當に罪有るべき。大王、火の木を燒くに、火則ち罪無きが如く、斧の樹を斫るに斧も亦罪無きが如く、鎌の草を刈るに鎌實に罪無きが如く、刀の人を殺すが如き、刀實に人に非ず。刀既に罪無し、人云何ぞ罪あらん。毒の人を殺すが如き、毒實に人に非ず、毒藥罪無し、人云何ぞ罪あらん。一切萬物皆亦是の如し。實に殺害無し、云之ぞ罪有らん。唯願はくば大王、愁苦を生ずること莫れ。何を以ての故に、

　若常に愁苦すれば、愁遂に增長す
　人喜びて眠れば、眠則ち滋多きが如く
　貪淫嗜酒も、亦復是の如し

王の言ふ所の如き、「世に良醫の惡業を治する無し」とは、今大師有りて迦羅鳩駄迦旃延と名く。一切知見す。三世を一念の頃に明了に、能く無量無邊の世界を見る。聲を聞くも亦爾なり。能く衆生をして過惡を遠離せしむる、猶し恆河の若は內、若は外、有らゆる諸罪を皆悉く淸淨ならしむるが如し。是の大良師も亦復是の如し、能く衆生內外の衆罪を除

【七】無所畏の緣を明す。

く。諸の弟子の爲に是の如きの法を説く、「若人一切衆生を殺害して心に慙愧無ければ、終に惡に墮せざる、猶し虛空の塵水を受けざるが如し。慙愧有らば卽ち地獄に入る、猶し大水の地を潤溼するが如し。一切衆生は悉く是自在天の作る所なり。自在天喜べば衆生安樂し、自在天瞋れば衆生苦惱す。一切衆生若は罪、若は福、乃ち是自在の爲作する所。云何ぞ當に人罪福有りと言ふべき。譬へば工匠の機關、木人の行住坐臥唯言ふこと能はざるを作すが如く、衆生も亦爾なり。自在天とは譬へば工匠の如く、木人とは衆生の身を譬ふ。是の如きの造化誰か當に罪有るべき。是の如きの大師今者近く王舍城に在りて住す。唯願はくば速かに往きたまへ。若見ることを得ば衆罪消滅せん。」王卽ち答へて言はく、「是の人能く我が罪を滅する有るを審かにせば、我當に歸依すべし。」

(七)復一臣に無所畏と名くる有り。王の所に往至して是の如きの言を説く、「大王、世に愚人有り、一日の中に百喜百愁、百眠百寤、百驚百哭す。有智の人悉く是の事無し。大王何が故ぞ憂愁是の如くなる。侶を失へる客の如く、深泥に墮して救拔する者無きが如く、人の渇乏して漿水を得ざるが如く、猶し迷人の導者有ること無きが如く、困病の人醫の救療無きが如く、海船破れて救接する者無きが如し。大王今者身痛と爲すや心痛と爲すや。」王卽ち答へて言はく、「我今身心豈痛まざることを得んや。我惡友に近き口過を觀ず。先王罪無きに横に逆害を興す。我今定んで知んぬ、當に地獄に入るべし。復良醫の救濟を見る無けん。」臣卽ち白して言さく、「唯願はくば大王、愁毒を生ずること莫れ。夫刹利とは名

【尼犍若提子】ニルグランタギヤーテイプトラ(Nirgranthajñātiputra)の音譯。六師外道の本師をいふ。

けて王種と爲す。若は國土の爲、若は沙門及び婆羅門の爲、人民を安んぜんが爲には復殺害すと雖も罪有ること無きなり。先王復沙門を恭敬すと雖も諸の婆羅門に承事すること能はず、心に平等無し。無平等の故に則ち刹利に非ず。大王今者、諸の婆羅門を供養せんと欲するが爲に先王を殺害す。當に何の罪か有るべき。大王、實は殺害無し。夫殺害とは壽命を殺害す。命は風氣を名く、風氣の性は斬害すべからず、云何ぞ命を害せん。當に罪有るべきや。唯願はくば大王、復愁苦すること莫れ。何を以ての故に、

若常に愁苦すれば、愁遂に增長す
人喜びて眠れば、眠則ち滋多きが如し
貪淫嗜酒も、亦復是の如し

王の言ふ所の如き「世に良醫の能く療治する無し」とは、今大師有つて尼犍若提子と名く。一切知見し衆生を憐愍す。善く衆生の諸根の利鈍を知り、一切の隨宜方便を達解し、世間の八法汙すこと能はず。寂靜にして淸淨梵行を修習す。諸の弟子の爲に是の如きの言を說く、「施無く善無く、父無く母無し。今世、後世無く、阿羅漢無く、修無く道無し。一切衆生八萬劫を經れば、生死輪に於て自然に脫することを得。有罪、無罪悉く亦是の如し。四大河の如く、所謂辛頭、恆河、博叉、私陀なり。悉く大海に入りて差別有ること無し。一切衆生も亦復是の如く、解脫を得る時悉く差別無し」と。是の師今王舍城に在りて住す。唯願はくば大王、速かに其の所に往きたまへ。若見ることを得ば衆罪消除せん。」王

【八】是より善人の緣を明す。初に耆婆の緣を明す。

【耆婆】(Jivaka)の音譯。ジーヴカ活、能活、固活等と譯す。頻婆娑羅王、釋尊等の病を療せしを以て有名なり。

即ち答へて言はく、『是の師能く我が罪を除く有るを審かにせば、我當に歸依すべし。』

(八)爾の時に大醫ありて名を耆婆と曰ふ。王の所に往至して白して言さく、『大王安眠を得るや否や。』王偈を以て答ふらく、

若能く永く、一切の諸の煩惱を斷じ
染三界を貪らざる有らば、乃ち安隱に眠ることを得ん
若大涅槃を得、甚深の義を演說せば
眞の婆羅門と名く、乃ち安隱に眠ることを得ん
身に諸の惡業無く、口に四過を離れ
心に疑網有ること無ければ、乃ち安隱に眠るを得ん
身心に熱惱無く、寂靜の處に安住し
無上の樂を獲致すれば、乃ち安隱に眠るを得ん
心に取著有ること無く、諸の怨讎を遠離し
常に和して諍訟無ければ、乃ち安隱に眠るを得ん
若惡業を造らず、心に常に慚愧を懷き
惡に果報有るを信ずれば、乃ち安隱に眠るを得ん
父母を敬養し、一生命を害せず
他の財物を盜まざれば、乃ち安隱に眠るを得ん

諸根を調伏し、善知識に親近し
四魔衆を破壞すれば、乃安隱に眠るを得ん
吉不吉、及以苦樂等を見ず
諸〳〵の衆生の爲の故に、生死に輪轉す
若能く是の如くならば、乃ち安隱に眠るを得ん
誰か安隱に眠ることを得る、所謂諸佛是れなり
深く空三昧を觀じて、身心安んじて動ぜず
誰か安隱に眠ることを得る、所謂慈悲者なり
常に不放逸を修し、衆を見ること一子の如し
衆生無明冥くして、煩惱の果を見ず
常に諸の惡業を造り、安隱に眠るを得ず
若自己、及以他人の身の爲に
十惡業を造作すれば、安隱に眠るを得ず
若樂の爲の故に、父を害する過咎無しと言はば
惡知識に隨順す、安隱に眠るを得ず
若食節度に過ぎ、冷飮して過差す
是の如くなれば則ち病苦、安隱に眠るを得ず

　若王に於て過有りて、他の婦女を邪念し
　及び曠路を行かば、安隱に眠るを得ず
　持戒果未だ熟せず、太子未だ位を紹がず
　盜者未だ財を獲ざれば、安隱に眠るを得ず

『耆婆、我今病重し。正法王に於て惡逆害を興す。一切の良醫、妙藥、呪術、善巧の瞻病も治すること能はざる所なり。何を以ての故に。我が父先王如法に國を治む。實に過咎無きに横に逆害を加ふ。魚の陸に處るが如く、當に何の樂か有るべき。鹿の弶に在りて初て歡心無きが如く、人自ら命日を終らざるを知るが如く、王の國を失ひて他土に逃迸するが如く、人の病瘵治すべからずと聞くが如く、破戒者の罪過を說くを聞くが如し。我昔曾て智者の說きて言ふを聞く、「身に意業若清淨ならざれば、當に知るべし、是の人は必ず地獄に墮せん。」我今是の如し、云何ぞ當に安隱に眠ることを得べきや。今我に又無上大醫の法藥を演說して、我が病苦を除く無し。』

耆婆答へて言さく、『善い哉善い哉、王罪を作ると雖も心に重悔を生じて慚愧を懷く。大王、諸佛世尊常に是の言を說きたまふ、「二つの白法有りて能く衆生を救ふ。一つには慚、二つには愧なり。慚とは自ら罪を作らず、愧とは他を敎へて作らしめず。慚とは內自ら羞恥し、愧とは發露して人に向ふ。慚とは人に羞ぢ、愧とは天に羞づ。是を慚愧と名く。慚愧無き者は名けて人と爲さず、名けて畜生と爲す。慚愧有るが故に則ち能く父母、師長を

恭敬し、慙愧有るが故に父母、兄弟、姉妹有り」と說きたまへり。善い哉大王、具さに慙愧あり。大王且く聽きたまへ。臣、佛說を聞くに、智者に二有り。一つには諸惡を造らず、二つには作り已りて懺悔す。愚者にも亦二。一つには作罪、二つには覆藏なり。先に惡を作ると雖も、後能く發露し悔し已りて慙愧して更に敢て作らず。猶し濁水、之に明珠を置かば、珠の威力を以て水卽ち清と爲るが如く、亦雲除れば月則ち清明なるが如く、作惡能く悔するも亦復是の如し。王若し懺悔し慙愧を懷かば、罪則ち除滅して清淨本の如し。大王、富に二種有り。一つには象馬種種の畜生、二つには金銀種種の珍寶なり。象馬多しと雖も一珠に敵せず。大王、衆生も亦爾なり。一つには惡富、二つには善富なり。多く諸惡を作るは一善に如かず。臣佛說を聞くに「一つの善心を修すれば百種の惡を破す」と。大王、少金剛の能く須彌を壞するが如く、亦少火の能く一切を燒くが如く、少毒藥の能く衆生を害するが如し、少善も亦爾なり、能く大惡を破す。少善と名くと雖も、其實は是大なり。何を以ての故に。大惡を破するが故なり。大王、佛の所說の如く、覆藏する者は漏、覆藏せざる者は則ち漏有ること無し。發露して過を悔す。是の故に漏ならず。若し衆罪を作り覆せず藏せざれば、不覆を以ての故に罪則ち微薄なり。若し悔して慙愧すれば罪則ち消滅す。大王、水渧微なりと雖も漸く大器に盈つるが如く、善心も亦爾なり。一一の善心能く大惡を破す。若し罪を覆すれば罪則ち增長し、發露慙愧すれば罪則ち消滅す。是の故に諸佛有智の者は罪を覆藏せずと說く。善い哉大王、能く因果を信じ、業を信じ、報を信ず。唯

【迦摩羅】カーマラ(Kāmala)黃目病と譯す。癩病のことなりと云ふ。

【迦羅毗】カピラヴスツ(Kapilavastu)釋尊誕生の古城、今のネポール國タライ地方。迦毘羅仙人の住地なるを以て此名ありと傳ふ。

【淨飯王】シュッドーダナ(Suddhodana)の譯。釋尊の父。迦毘羅城主獅子頰王の子。

【悉達多】シッダールタ(Siddhārtha)一切義成等と譯す釋尊の太子名。

願はくば大王、愁怖を懷くこと莫れ。

若衆生有りて諸罪を造作し、覆藏して悔せず。心に慚愧無く、因果及以業報を見ず。有知の人に咨啓すること能はず、善友に近かず。是の如きの人は一切良醫、乃至瞻病の治すること能はざる所なり、迦摩羅病の世醫手を拱くが如し。覆罪の人も亦復是の如し。云何が罪人一闡提と謂ふ。一闡提とは因果を信ぜず、慚愧有ること無く、業報を信ぜず、現在及び未來世を見ず、善友に親まず、諸佛所說の教戒に隨はず。是の如きの人を一闡提と名く。諸佛世尊の能く治せざる所。何を以ての故に。世の死屍、醫の治すること能はざるが如く、一闡提の者も亦復是の如し。諸佛世尊の治すること能はざる所なり。大王今一闡提に非ず、云何ぞ救療すべからずと言ふ。

王の言ふ所の如く、「能く治する無し」とは、大王當に知るべし、迦毗羅城の淨飯王の子、姓は瞿曇氏、悉達多と字す。師無くして覺悟し、自然にして阿耨多羅三藐三菩提を得、三十二相、八十種好其の身を莊嚴し、十力、四無所畏を具足し、一切知見す。大慈大悲一切を憐愍すること羅睺羅の如し。善く衆生に隨ふこと犢の母を逐ふが如し。時を知りて說き、時に非ざれば語らず。實語、淨語、妙語、義語、法語、一語、能く衆生をして永く煩惱を離れしむ。善く衆生の諸根心性を知り、隨宜方便して通達せざる無し。其の智高大なること須彌山の如く、深邃廣遠なること猶し大海の如し。是の佛世尊金剛智有りて能く衆生の一切の惡罪を破す。若不能と言はば是の處有ること無けん。今者此を去ること十二由旬、

【般遮尸】　パンチヤシキ(Pañcasikhi)五髻と譯す。
【憍尸迦】　カウシカ(Kausika)帝釋の姓。
【乾闥婆】　ガンダルヴ(Gandharva)香陰と譯す。樂神の名。
【須跋陀】　スバドラー(Subhadra)善賢と譯す。
【毗摩質多】　ヴマラチトラ(Vimalacitra)淨心と譯す阿修羅王の名。
【舍脂】　シヤチ(Saci)

拘尸城の娑羅雙樹の間に在りて、廣く無量阿僧祇等の諸菩薩僧の爲に種種の法を演ず。若は有、若は無。若は有爲、若は無爲。若は有漏、若は無漏。若は煩惱果、若は善法果、若は色法、若は非色法、若は非色非非色法。若は我、若は非我、若は非我非非我、若は常、若は非常、若は非常非非常。若は樂、若は非樂、若は非樂非非樂。若は相、若は非相、若は非相非非相。若は斷、若は非斷、若は非斷非非斷。若は世、若は出世、若は非世非出世。若は乘、若は非乘、若は非乘非非乘。若は自作自受、若は自作他受、若は無作無受なり。大王、若當に佛所に於て無作無受を聞くべし。有らゆる重罪は卽ち當に消滅すべし。
王今且く聽きたまへ。釋提桓因命將に終らんと欲して五相有りて現ず。一つには衣裳垢膩、二つには頭上華萎、三つには身體臭穢、四つには腋下汗出、五つには本座を樂まず。時に天帝釋或は靜處に於て、若は沙門、若は婆羅門を見ば卽ち其の所に至りて佛想を生ず。爾の時に沙門及び婆羅門、帝釋の來るを見て深く自ら慶幸して卽ち是の語を說かく、「天主我今汝に歸依す。」釋是を聞き已りて乃ち佛に非ざるを知り、復自ら念言すらく、「彼若佛に非ざれば我が五退沒の相を治すること能はず。」是の時御臣を般遮尸と名く。帝釋に語りて言さく、「憍尸迦、乾闥婆王を敦浮樓と名く。其の王女有りて須跋陀と字す。王若能く此の女を以て與へなば、臣當に王に衰相を除くの處を示すべし。」釋卽ち答へて言さく、「善男子、毗摩質多阿修羅王に女有り舍脂といふ。是我が所敬たり。卿若必ず能く吾に惡相を消滅する處を示さば、猶當に相與ふべし。況や須跋陀をや。」「憍尸迦、佛世尊有り釋迦牟尼と字

す。今者王舍大城に在り。若能く彼に往いて未聞を咨稟せば、衰沒の相必ず除滅を得ん。」善男子、若佛世尊、審かに能く滅せば、便ち駕を回らして其の住處に至るべし。」御臣命を奉して卽ち車乘を回らして王舍城の耆闍崛山に至る。佛所に至りて頭面に足を禮し卻つて一面に住す。釋提桓因佛に白して言さく「世尊、天人の中誰か繫縛を爲す。」答へて言はく「憍尸迦、慳貪嫉妬。」又言さく「慳貪嫉妬、何に因りてか生ず。」答へて言はく「無明に因りて生ず。」又言さく、「無明復何に因りてか生ず。」答へて言はく「放逸に因りて生ず。」又言さく「放逸復何に因りてか生ず。」答へて言はく「顚倒に因りて生ず。」又言さく「顚倒復何に因りてか生ず。」答へて言はく「疑心に因りて生ず。」「世尊、顚倒の法疑心に因りて生ずとは、實に佛敎の如し。何を以ての故に。我疑心有り。疑心を以ての故に則ち顚倒を生じ、非世尊に於て世尊の想を生ず。我今佛を見て疑網卽ち除く、疑網除くが故に顚倒も亦盡く。顚倒盡くるが故に慳心、乃至妬心有ること無し。」佛の言はく「汝慳妬の心有ること無しと言ふは、汝今已に阿那含を得るや。阿那含の者は貪心有ること無し。若貪心無ければ、云何ぞ命の爲に我が所に來至する。阿那含の如きは實に命を求めず。」「世尊顚倒有りとは則ち命を求むること有り。顚倒無ければ則ち命を求めず。然るに我今者實は命を求めず。求めんと欲する所の者は唯佛法身、及び佛智慧なり。」「憍尸迦、佛法身、及び佛智慧を求むれば、將來の世必ず當に之を得べし。」

爾の時に帝釋、佛說を聞き已りて五衰沒相卽時に消滅す。便ち起ちて禮を作し、佛を繞

【鴦崛魔】アングリマールヤ(Aṅgulimālya)指鬘と譯す。佛在世の時舍衞城に住せし外道。

【須毗羅】スギーラ(Suvīra)好男と譯す。

ること三帀し、恭敬合掌して佛に白して言さく、「世尊、我今卽死卽生し、命を失し命を得。佛に從ひて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べしと記するを聞く。是を更生と爲す、更に命を得と爲す。世尊、一切の人天云何が增益せん。復何の緣を以てか損減を致す。」「憍尸迦鬪諍の因緣、人天損減す。善く和敬を修すれば則ち增益を得。」「世尊、若鬪諍を以て損減せば、我今日より更に復阿修羅と戰はず。」佛の言はく「善い哉善い哉憍尸迦、諸佛世尊、忍辱法是阿耨多羅三藐三菩提の因と說く。」爾の時に釋提桓因卽ち前みて佛を禮し、是に於て還去す。

大王、如來能く、諸の惡相を除くを以て、是の故に佛を不可思議と稱す。王若往者有する所の重罪必ず當に除くことを得べし。

大王且く聽きたまへ、婆羅門の子有り、字を不害と曰ふ。無量の諸の衆生を殺すを以ての故に、鴦崛魔と名く。復母を害せんと欲し、惡心起る時身も亦隨ひて動ず。身心動ずる者、卽ち五逆の因なり。五逆の因の故に必ず地獄に墮す。後佛を見たてまつる時、身心俱に動じて復害を生ぜんと欲す。身心動ずる者卽ち五逆の因なり。五逆の因の故に當に地獄に入るべし。是の人如來大師に遇ふことを得て卽時に地獄の因緣を滅し、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得。是の故に佛を稱して無上の醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、復須毗羅王子有り。其の父之を瞋り其の手足を截りて之を深井に推す。其の母矜憫して人をして牽出せしめ、將ゐて佛所に至る。卽ち佛を見たてまつるの時手足還つて具

はる。便ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。大王、佛を見たてまつるを以ての故に現果報を得。是の故に佛を稱して無上醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、恆河の邊に諸の餓鬼有り、其の數五百なり。無量歳に於て初て水を見ず。河上に至ると雖も純ら流火を見、饑渴に逼られて發聲號哭す。爾の時に如來、河側の欝曇鉢林に在りて一樹の下に坐す。時に諸の餓鬼、佛所に來至して白して言さく、「世尊、我等饑渴して命將に久しからざらんとす。」佛の言はく、「恆河の流水何が故ぞ飮まざる。」諸鬼答へて言さく、「如來は水を見たまひ、我は則ち火を見る。」佛の言はく、「恆河の清流實に火に非ざるなり。汝が惡業の故に心自ら顚倒し、謂つて是火と爲す。我當に汝が爲に顚倒を除滅して、汝をして水を見しむべし。」爾の時に世尊、廣く諸鬼の爲に慳貪の過を說きたまふ。諸鬼復言さく、「我今渴乏して法言を聞くと雖も都て心に入らず。」佛の言はく、「汝若渴乏せば、先河に入りて意を恣にして之を飮むべし。」是の諸鬼等、佛力を以ての故に即ち水を飮むことを得。既に水を飮み已りて、如來復爲に種種に法を說きたまふ。既に法を聞き已りて悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、餓鬼の形を捨て天身を得るが如し。大王、是の故に佛を稱して無上醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、舍婆提國に羣賊五百あり。波斯匿王其の目を挑出す。前導有ること無ければ往いて佛所に至ることを得ること能はず。佛憐愍の故に即ち其の前に到り、之を慰喩して言はく、「善男子、善く身口を護り、更に惡を造ること勿れ。」諸賊、爾の時に如來の音の微妙清

【舍婆提】舍衞城に同じ。

【祇洹精舍】祇樹給孤獨園の略稱。舍衞城に孤兒を哀愍する長者須達多あり。世人彼を給孤獨と呼ぶ。佛に隨ひて優婆塞となり園林を供養す。之を祇洹精舍と云ふ。

徹なるを聞き、尋いで還つて眼を得。即ち佛前に於て合掌して佛を禮し、佛に白して言さく、「世尊、我今佛の慈心普く一切衆生を覆ひ、獨人天に非ざるを知りたてまつる。」爾の時に如來、即ち爲に法を說きたまひ、既に法を說き已りて悉く阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の故に如來は眞に是世間無上の良醫、六師に非ざるなり。

大王、舍婆提國に栴陀羅の名を氣噓と曰ふ有り。無量の人を殺す。佛の弟子大目揵連を見、即時に地獄の因縁を破ることを得、三十三天に上生することを得たり。是の如きの聖弟子有るを以ての故に、佛如來を稱して無上醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、婆羅奈城に長者子の阿逸多と名くる有り。其の母に通ずるが故に其の父を殺す。母更に外通し、尋いで復之を害す。阿羅漢有り是其の知識なり。此の知識に於て愧恥を生じて即便之を殺す。殺し已りて即ち祇洹精舍に到りて出家を求欲す。時に諸の比丘、具さに此の人に三逆罪有るを知り、敢て聽す者無し。聽さざるを以ての故に倍瞋恚を生じ、即ち其の夜に於て大いに猛火を放ちて僧坊を焚燒し、多く無辜を殺す。然して後復王舍城の中に往き、如來の所に至りて出家を求哀す。如來即ち聽し、與に法要を說きたまふ。其の重罪をして漸漸に輕微にし、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。是の故に佛を稱して世の良醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、本性暴惡にして惡人を信受し、提婆達多大醉象を放ちて佛を踐ましめんと欲す。象既に佛を見て即時に醒悟す。佛便ち手を伸べて其の頂上を摩で、復爲に法を說きて悉く

【蓮華比丘尼】蓮華色比丘尼のこと

阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得しむ。大王、畜生佛を見たてまつる、猶畜生の業界を破壞することを得。況や復人をや。大王當に知るべし、若佛を見たてまつる者は、有らゆる重罪必ず當に滅することを得べし。

大王、世尊未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざるの時、魔無量無邊の眷屬と菩薩の所に至る。菩薩、爾の時に忍辱力を以て魔の惡心を壞し、魔をして法を受け、尋いで阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。佛は是の如きの大功德力を有したまふ。

大王、曠野鬼有りて多く衆生を害す。如來、爾の時に善賢長者の爲に曠野村に至り、其の爲に法を說きたまふ。時に曠野鬼法を聞きて歡喜し、即ち長者を以て如來に授く。然して後便ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

大王、波羅奈國に屠兒の名を廣額と曰ふ有り、日日の中に於て無量の羊を殺す。舍利弗を見て即ち八戒を受け、一日夜を經。是の因緣を以て命終して北方天王毗沙門の子と爲ることを得たり。如來の弟子尚是の如きの大功德果有り。況や復佛をや。

大王、北天竺に城有りて名を細石と曰ひ、其の城に王有りて名を龍印と曰ふ。國を貪り位を重んじて其の父を殺す。其の父を殺し已りて心に悔恨を生ず。即ち國政を捨て、佛所に來至して出家を求哀す。佛善來と言ひ、即ち比丘と成す。重罪消滅して阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。大王、當に知るべし、佛是の如きの無量の大功德果有り。

大王、如來に弟提婆達多有りて衆僧を破壞し、佛身の血を出し、蓮華比丘尼を害し、三

【跋提迦】バドリカ(Bhadrika)小賢と譯す。
【優波離】ウパーリ(Upāli)持律第一の比丘。悉達太子の執事たりし人。
【須達多】スダッタ(Sudatta)給孤獨長者の本名。善與と譯す。
【須達多阿那邠抵】アナータピンダカ(Anāthapiṇḍaka)給孤獨と譯す。
【周利槃特】シュッディパンタカ(Suddhipanthaka)小路と譯す。
【優樓頻螺迦葉】木瓜飲光と譯す。初め五百人の弟子と共に佛を害せんとせしが成就せずして二弟及弟子と共に歸佛す。

つの逆罪を作す。如來爲に種種の法要を說き、其の重罪をして尋いで微薄を得しむ。是の故に如來を大良醫と爲す。六師に非ざるなり。

大王、若能く臣が語を信じたまはば、唯願はくば速かに往いて如來の所に至りたまへ。若信ぜられざれば願はくば善く之を思ひたまへ。大王、諸佛世尊は大悲普く覆ひて一人に限らず。正法弘廣して包まざる所無し。怨親平等にして心に憎愛無し。終に偏へに一人の爲に阿耨多羅三藐三菩提を得しめて、餘人は得ざるにあらず。如來獨四部の師なるに非ず。普く是一切天、人、龍、鬼、地獄、畜生、餓鬼等の師なり。一切衆生も亦當に佛を視たてまつること父母の想の如くすべし。大王當に知るべし、如來但獨豪貴の跋提迦王の爲に法を演說するにあらず、亦下賤の優波離等の爲にす。獨偏へに須達多阿那邠抵の奉する所の供養を受くるにあらず、亦貧人の須達多が食を受く。但獨舍利弗等の利根の爲に法を說くにあらず、亦鈍根の周利槃特の爲にす。但獨大迦葉等無貪の性出家して道を求むるを聽すにあらず。亦大貪の難陀の出家を聽す。但獨煩惱薄き者、優樓頻螺迦葉等の出家求道を聽すにあらず、亦煩惱深厚にして重罪を造る者波斯匿王の弟修陀耶が出家求道を聽す。莎草の恭敬供養するを以て其の瞋根を拔き、鴦崛魔羅の惡心を害せんと欲すれば捨てて救はざるにあらず。但獨有智の男子の爲に法を演說するにあらず。亦極愚判合婬者女人の爲に法を說く。但獨出家の人をして四道果を得しめず、亦在家をして三道果を得しむ。但獨富多羅等諸の忽務を捨て、閑寂にして思惟するが爲に法要を說かず、亦頻婆娑羅王等の國事を

【修陀耶】スダーヤ(Sudāya)善施と譯す。沙彌の名。
【郁伽】ウグラ(Ugra)功德又は威德と譯す。舍衞國の長者。
【離婆多】レーヴタ(Revata)星宿と譯す。
【婆斯吒】ヴシシタ(Vasiṣṭha)波羅門の名。此の母六子を喪て狂亂し露形馳走す。世尊に見えて本心に還り三歸戒をうく。
【末利】マッリカー(Mallikā)鬘と譯す。波斯匿王の后の名。
【尸利毱多】シュリーグプタ(Śrīgupta)吉護と譯す。王舍城の長者の名
【九】阿闍世罪の因果を知る。

統領して王務を理する者の爲に法要を說く。但獨斷酒の人の爲にせず、亦酒に耽る郁伽長者荒醉者の爲に說く。但獨禪定に入る者離婆多等の爲にせず、亦子を喪ひて亂心せる婆羅門の女婆斯吒が爲に說く。但獨己が弟子の爲にせず、亦外道、尼揵子の爲に說く。但獨盛壯の年二十五の者の爲にせず、亦衰老八十の者の爲に說く。但獨根熟の人の爲にせず、亦善根未熟者の爲に說く。但獨末利夫人の爲にせず、亦淫女蓮華女の爲に說く。但獨波斯匿王の上饌甘味を受けず、亦長者尸利毱多が雜毒の食を受く。大王當に知るべし、尸利毱多往昔亦逆罪の因を作り、佛に遇ひ法を聞くを以て卽ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。大王、假使一月常に衣食を以て一切衆生に供養し恭敬せんも、人有りて一念に佛を念ずる所得の功德の十六分の一に如かず。大王、假使金を鍛へて人を爲り、車馬に寶を載せ、其の數各百、以用て布施すとも、人有り發心して佛に向ひ、擧足一步するに如かず。大王、假使復象車百乘を以て大秦國の、種種の珍寶を載せ、及び其の女人、身に瓔珞を佩び、數亦百に滿つるを持用て布施せんも、猶故發心して佛に向ひ擧足一步するに如かず。復是の事を置き、若四事を以て三千大千世界の有らゆる衆生に供養せんも、猶亦發心して佛に向ひ擧足一步するに如かず。復是の事を置き、若大王をして恆河沙等の無量の衆生を供養し恭敬せしむとも、一たび娑羅雙樹に往き、如來の所に到りて誠心に法を聽かんに如かず。」

(九)爾の時に大王、耆婆に答へて言はく、「如來世尊、性已に調柔なり。故に調柔を得て以て

【一〇二】阿闍世父上の觀導をきく。

眷屬と爲す。栴檀林の純ら栴檀を以て圍繞を爲すが如く、如來淸淨にして有らゆる眷屬も亦復淸淨なり。猶し大龍の純ら諸龍を以て眷屬と爲すが如く、如來寂靜にして有らゆる眷屬も亦復寂靜なり。如來無貪にして有らゆる眷屬も亦復無貪なり。佛煩惱無く、有らゆる眷屬も亦煩惱無し。吾今既に是極惡の人、惡業纏裹し、其の身臭穢にして地獄に繫屬す。云何ぞ當に如來の所に至ることを得べき。吾設し往かば、必ず顧念し、接緖言說せじ。卿吾を勸めて佛所に往かしむと雖も、然も吾今日深く自ら鄙悼して都て去心無けん。」

(一〇三)爾の時に空中尋いで聲を出して言はく、「無上の佛法將に衰殄せんとし、甚深の法河今に於て涸れんと欲す。大法明燈將に滅せんとする久しからじ。法山頽れんと欲し、法船沒せんと欲す。法橋壞れんと欲し、法殿崩れんと欲す。法幢倒れんと欲し、法樹折れんと欲す。善友去らんと欲し、大怖將に至らんとす。法饑の衆生將に至らんとすること久しからじ。煩惱の疫病將に流行せんと欲す。大闇時至り、渴法時到る。魔王欣慶して甲冑を解釋し、佛日將に大涅槃の山に沒せんとす。大王、佛若世を去りたまはば王の重惡更に治する者無けん。大王、汝今已に阿鼻地獄極重の惡を造る。是の業緣を以て必ず受くること疑はじ。大王、阿とは無と言ひ、鼻とは間と名く。間に暫樂無きが故に無間と名く。大王、假使一人獨是の獄に墮すとも其の身長大にして八萬由旬なり。其の中に徧滿して間に空處無く、其の身周帀して種種の苦を受く。設ひ多人有るも身亦徧滿して相妨閡せず。大王、寒地獄中暫く熱風に遇はば、之を以て樂と爲し、熱地獄中暫く寒風に遇はば亦以て樂と爲す。地獄

の中設ひ命終し已るに、若活聲を聞かば卽便還活する有り、阿鼻地獄にて都て此の事無し。大王、阿鼻地獄の四面に門有り、一一の門外に各猛火有り。東、西、南、北交過通徹す。八萬由旬周帀して鐵牆あり。鐵網彌覆し、其の地亦鐵なり。上火下に徹し、下火上に徹す。大王、魚の鏊に在りて脂膏焦然するが若く、是の中の罪人も亦復是の如し。大王、一逆を作る者則便具さに是の如きの一罪を受く。若二逆を造らば罪則ち二倍し、五逆具する者は罪も亦五倍す。大王、我今定んで王の惡業必ず免るることを得ざるを知る。唯願はくば大王、速かに佛所に往きたまへ。佛世尊を除きて餘の能く救ふもの無し、我今汝を愍むが故に相勸導す。」

爾の時に大王、是の語を聞き已りて心に怖懼を懷き、身を擧げて戰慄し、五體掉動すること芭蕉樹の如し。仰いで問うて曰はく、「天は是誰とか爲す。色像を現ぜずして而も但聲有り。」「大王、吾は是汝が父頻婆娑羅なり。汝今當に耆婆が所說に隨ふべし。邪見の六臣の見に隨ふこと莫れ。」

時に王、聞き已りて悶絕して地に躄れ、身瘡增劇し、臭穢前に倍す。冷藥を以て塗治し將療すと雖も、瘡烝毒熱して但增して損ずること無し。

【梵行品五】此品は阿闍世王惡逆の因緣に托して正しく滅罪を明すの章なり。
【一】阿闍世の爲に法を說く。

大般涅槃經　卷第十八

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

梵行品第二十之五

(一)爾の時に世尊、雙樹の間に在りて阿闍世の悶絕して地に躃るるを見、卽ち大衆に告げたまはく「我今當に是の王の爲に世に住し、無量劫に至りて涅槃に入らざるべし。」迦葉菩薩、佛に白して言さく「世尊、如來當に無量の衆生の爲に涅槃に入らざるべし。何が故ぞ獨阿闍世王の爲にするや。」佛の言はく「善男子、是の大衆の中に、一人の「我必定して涅槃に入る」と謂ふ有ること無し。阿闍世王は定んで「我當に畢竟じて永く滅すべし」と謂はん。是の故に悶絕して自ら地に投ず。善男子、我が言ふ所の阿闍世の爲に涅槃に入らざるが如き、是の如きの密義汝未だ解すること能はじ。何を以ての故に。我が爲と言ふは一切凡夫なり。阿闍世とは普く一切の五逆を造る者に及ぶ。又復爲とは卽ち是一切の有爲衆生なり。我終に無爲衆生の爲に世に住せず。何を以ての故に。夫無爲とは衆生に非ざればなり。阿闍世とは卽ち是煩惱等を具足する者、又復爲とは卽ち是佛性を見ざるの衆生なり。若佛性を見ば、我終に爲に久しく世に住せず。何を以ての故に。佛性を見る者は衆

【二】正しく阿闍世の滅罪を明す。
【月愛三昧】三昧の名。月光のよく熱惱を除くが如く衆生の貪瞋を除くを以て此名あり。下の本文に解あり

生に非ざればなり。阿闍世とは、即ち是一切の未だ阿耨多羅三藐三菩提の心を發さざる者。又復爲とは即ち是阿難、迦葉の二衆、阿闍世とは即ち是阿闍世王の後宮妃后、及び王舍城の一切の婦女なり。又復爲とは名けて佛性と爲す。阿闍とは名けて不生と爲し、世とは怨と名く。佛性を生ぜざるを以ての故に、則ち煩惱の怨生ず。煩惱の怨生ずるが故に佛性を見ず。煩惱を生ぜざるを以ての故に則ち佛性を見る。佛性を見るを以て則ち大般涅槃に安住することを得。是を不生と名く。是の故に名けて爲阿闍世と爲す。善男子、阿闍とは不生と名け、不生とは涅槃に名く。世は世法と名け、爲とは不汙に名く。世の八法の汙さざる所なるを以ての故に、無量無邊阿僧祇劫涅槃に入らず。是の故に我阿闍世の爲に無量億劫涅槃に入らずと言ふ。善男子、如來の密語は思議すべからず。佛法、衆僧も亦思議すべからず。菩薩摩訶薩も亦不可思議、大涅槃經も亦不可思議なり。」

(二)爾の時に世尊大悲導師、阿闍世王の爲に月愛三昧に入り、三昧に入り已りて大光明を放つ。其の光、清涼にして、往いて王の身を照す。身瘡即ち愈え、鬱蒸除滅す。王、瘡愈え身體清涼を覺え、耆婆に語りて言はく、「曾て人の說を聞くに、劫將に盡きんと欲するに三月並び現ず。爾の時に當りて一切の衆生患苦悉く除く。時既に未だ至らず、此の光何れよりか來れる。吾が身を照觸して瘡苦除愈し、身安樂を得たり。」耆婆、答へて言さく、「此劫盡の三月並び照すに非ず、亦火、日、星宿、藥草、寶珠、天光に非ず。」王、又問ひて言はく、「此の光若三月並び照す寶珠の明に非ずば、是誰の光と爲ん。」「大

王當に知るべし、是天中天の放つ所の光明なり。是の光根無く、邊際有ること無し。非熱非冷、非常非滅、非色非無色、非相非無相、非青非黄、非赤非白なり。衆生を度せんと欲するが故に見るべし。相有り說くべし。根有り、邊有り、熱有り、冷有り、青、黄、赤白ならしむ。大王、是の光爾りと雖も實は說くべからず、覩見すべからず。乃至青、黄、赤、白有ること無し。』

王の言はく、『耆婆、彼の天中天、何の因緣を以てか斯の光明を放つ。』耆婆答へて言さく、『今是の端相將に大王の爲にせんとす。王先に「世に良醫の身心を療治する無し」と言ふを以て、故に此の光を放ちて先に王の身を治し、然して後に心に及ぶ。』

王の言はく、『耆婆、如來世尊も亦念ぜらるるや。』耆婆答へて言さく、『譬へば一人に七子有り。是の七子の中の一人病に遇はんに、父母の心平等ならざるに非ざれども、然も病子に於て心則ち偏へに重きが如く、大王、如來も亦爾なり。諸の衆生に於て不平等に非ず。然も罪者に於て心則ち偏へに重し。放逸者に於て則ち慈念を生じ、不放逸者には心則ち放捨す。何等をか名けて不放逸者と爲す。六住の菩薩を謂ふ。大王、諸佛世尊諸の衆生に於て種性、老少、中年、貧富、時節、日月、星宿、工巧、下賤、僮僕、婢使を觀ず、唯衆生の善心有る者を觀ず。若善心有らば則便慈念す。大王當に知るべし、是の如きの端相は、即ち是如來月愛三昧に入りて放つ所の光明なることを。』

王即ち問ひて言はく、『何等をか名けて月愛三昧と爲す。』耆婆答へて言さく、『譬へば月光

【三】耆婆心を治することを明す。

の能く一切の優鉢羅華をして開敷鮮明ならしむるが如く、月愛三昧も亦復是の如し。能く衆生をして善心を開敷せしむ。是の故に名けて月愛三昧と爲す。大王、譬へば月光の能く一切の行路の人をして、心に歡喜を生ぜしむるが如く、月愛三昧も亦復是の如し。能く涅槃道を修習する者をして心に歡喜を生ぜしむ。是の故に復月愛三昧と名く。大王、譬へば月光の初一日より十五日に至りて、形色、光明の漸漸に增長するが如く、月愛三昧も亦復是の如し。初發心の諸善の根本をして漸漸に增長し、乃至大般涅槃を具足せしむ。是の故に復月愛三昧と名く。大王、譬へば月光の十六日より三十日に至りて、形色、光明の漸漸に損減するが如く、月愛三昧も亦復是の如し。光の所照の處、有らゆる煩惱を能く漸く滅せしむ。是の故に復月愛三昧と名く。大王、盛熱の時、一切衆生常に月光を思ふ。月光既に照せば鬱熱卽ち除くが如く、月愛三昧も亦復是の如し。能く衆生をして貪惱熱を除かしむ。大王、譬へば滿月は衆星中の王にして甘露味と爲し、一切衆生の愛樂する所なるが如く、月愛三昧も亦復是の如し。諸善中の王にして甘露味と爲し、一切衆生の愛樂する所なり。是の故に復月愛三昧と名く。」

(三)王耆婆に語らく、「我聞く、如來は惡人と同じく止、坐、起し、語言、談論せざる、猶し大海の死屍を宿さざるが如し。鴛鴦鳥の圊廁に住せざるが如く、釋提桓因の鬼と住せず、鳩翅羅鳥の枯樹に棲まず。如來も亦爾なりと。我當に云何が往見することを得べき。設見しむれば、我が身將地に陷入すること無からんや。我如來を觀ずるに寧ろ醉象、師子、虎

狼、猛火、絶燄に近くとも、終に重惡の人に接近せじ。是の故に我今思惟すること是の如し。當に何の心有りてか往いて如來を見たてまつるべき。」耆婆答へて言さく、「大王、譬へば渇人の速かに淸泉に赴き、饑者の食を求め、怖者の救を求め、病者の醫を求め、熱者の凉を求め、寒者の衣を求むるが如く、王今佛を求むるも亦是の如くなるべし。大王、如來は尙一闡提等の爲に法要を演說す。何に況や大王一闡提に非ずして、而も當に慈悲の救濟を蒙らざるべけんや。」

王の言はく、「耆婆、我昔曾て聞けり、『一闡提とは信ぜず聞かず、觀察すること能はず、義理を得ず』と。何が故ぞ、如來而も爲に法を說きたまふや。」耆婆答へて言さく、「大王、譬へば人有りて身重病に遇ふが如き、是の人夜一柱の殿に昇り、酥油脂を服し及以身に塗り、灰に臥し灰を食し、枯樹に攀上し、或は獼猴と遊行坐臥し、水に沈み泥に沒す。樓殿、高山、樹木、象、馬、牛、羊より墮墜す。身靑、黃、赤、黑色の衣を著して喜笑歌舞す。或は烏鷲、狐狸の屬を見、齒髮墮落し、裸形にして狗を枕にし糞穢の中に臥す。復亡者と行、住、坐起し、手を攜へて食噉す。毒蛇路に滿ちて而も中よりして過ぐるを夢む。或は復髮を被る女人と共に相抱持し、多羅樹の葉、以て衣服と爲す。壞れたる驢車に乘り正面にして遊ぶを夢む。是の人夢み已りて心に愁惱を生ず。愁惱を以ての故に身病轉た增す。病增すを以ての故に、諸家親屬使を遣して醫を請ず。遣すべき所の使、形體缺短にして根具足せず。頭に塵土を蒙り、敝壞の衣を著、故壞車に載せ、彼の醫に語りて言はく、「速か

に疾く車に上れ。」

爾の時に良醫卽ち自ら思惟すらく、「今是の使を見るに相貌不吉なり。當に知るべし、病者病治すべきこと難し。」復是の念を作さく、「使不吉と雖も、當に復日を占ふべし。治すべしと爲すや不や。若四日、六日、八日、十二日、十四日、是の如きの日は病も亦治し難し。」復是の念を作さく、「日不吉と雖も、當に復星を占すべし。治すべしと爲すや不や。若是火星、奎星、昴星、閻羅王星、溼星、滿星、是の如きの星の時ならば、病も亦治し難し。」復是の念を作さく、「星不吉と雖も、復當に時を觀ずべし。若是秋時、冬時、及び日入時、夜半時、月入時ならば、當に知るべし、是の病も亦治すべきこと難し。」復是の念を作さく、「是の如きの衆相復不吉と雖も、或は定、不定なり。當に病人を觀ずべし、若福德有らば皆療治すべく、若福德無ければ吉と雖も何の益かあらん。」

是を思惟し已りて、尋いで使と倶にす。路に在りて復念ずらく、「若彼の病者長壽の相有らば則ち療治すべく、短壽の相ならば、則ち治すべからず。」卽ち前路に於て二小兒の相牽いて闘諍し、頭を捉へ髮を拔き、瓦石、刀杖共に相打擲するを見る。人の火を持し自然に盡滅するを見る。或は人有りて樹木を斫伐するを見る。或は復人手に皮革を曳き、路に隨ひて行くを見る。或は道路に遺落物有るを見る。或は人有りて空器を執持するを見る。或は沙門の獨行きて侶無きを見る。復虎狼、烏鷲、野狐を見る、是の事を見已りて復是の念を作さく、「所遣の使人乃至道路に見る。是の諸相悉く皆不祥なり。當に知るべし、病者

【舍利鳥】シャーリ(Śari)百舌鳥と譯す。

定んで療治し難し。」復是の念を作さく、「我若往かざれば則ち良醫に非じ、如其往かば救療すべからず。」復更に念言すらく、「是の如きの衆相、復不祥と雖も、且く當に捨置して病所に往至すべし。」是を思惟し已りて、復前路に於て是の如きの聲を聞く、「所謂亡失死喪、崩破壞拆、剝脫墮墜、焚燒不來、療治すべからず、拔濟すること能はず。」復南方に鳥獸の聲有るを聞く。所謂烏鷲、舍利鳥の聲、若は狗、若は鼠、野狐、豬兎なり。是の聲を聞き已りて復是の念を作さく「當に知るべし、病者療治すべきこと難し。」

爾の時に即ち病人の舍宅に入りて彼の病人を見るに、數寒數熱にして骨節疼痛し、目赤くして涙を流し、耳聲外に聞え、咽喉結痛し、舌上裂破す。其の色正黑にして頭自ら勝れず。體枯れて汗無く、大小便利閉塞して通ぜず。身卒に肥大にして紅赤常に異なり。語聲調はず、或は麤、或は細、體を擧げて斑駮、異色青黃なり。其の腹脹滿し、言語了かならず。醫是を見已りて瞻病人に問はく、「病者昨來意志如何。」答へて言はく、「大師、其の人本來三寶以及諸天を敬信す、今者變異して敬信の情息む。本喜んで惠施す、今者慳吝なり。本性少食、今は則ち過多なり。本性弊惡、今は則ち和善なり。本性慈孝にして父母を恭敬す、今は父母に於て恭敬の心無し。」

醫是を聞き已りて、即ち前んで之を嗅ぐ。優鉢羅香、沈水雜香、畢迦香、多伽羅香、多摩羅跋香、鬱金香、栴檀香、炙肉臭、蒲桃酒香、燒筋骨臭、魚臭、糞臭なり。香臭を知り已りて、即ち前んで身に觸れて身細軟なること猶し繒綿、劫貝娑華の如し。或は堅きこと

石の如く、或は冷かなること氷の如く、或は熱きこと火の如く、或は澀ること沙の如くなるを覺ゆ。爾の時に良醫是の如き等の種種の相を見已りて、定んで病者必ず死するを知りて疑はじ。然るに定んで是の人當に死すべしと言はず。瞻病の者に語らく、「吾今遽務、明當に更に來るべし。其の須ふる所に隨ひて意を恣にして禁ずること勿れ。」即便家に還る。明日使到り、復使に語りて言はく、「我事未だ訖らず。兼て未だ藥を合せず」と。智者當に知るべし、是の如きの病者は必ず死せんこと疑はじ。」

大王、世尊も亦爾なり。一闡提の輩に於て善く根性を知り、而も爲に法を說きたまふ。何を以ての故に。若爲に說かざれば、一切凡夫は當に「如來大慈悲無し。慈悲有らば一切智と名け、若慈悲無ければ云何ぞ說きて一切智人と言はん」と言ふべし。是の故に如來、一闡提の爲に而も法を演說す。大王、如來世尊諸の病者を見、常に法藥を施す。病者の服せざるは如來の咎に非ず。大王、一闡提の輩を分別するに二つ有り。一つには現在の善根を得、二つには後世の善根を得。如來善く一闡提の輩の能く現在に於て善根を得る者を知り、則ち爲に法を說きたまふ。後世に得る者も亦爲に法を說き、今益無しと雖も後世の因を作したまふ。是の故に如來、一闡提の爲に法要を演說す。一闡提の者復二種有り。一つには利根、二つには中根なり。利根の人は現在世に於て能く善根を得、中根の人は後世に則ち得。諸佛世尊は空しく法を說きたまはず。大王、譬へば淨人の圊廁に墜墮するを、善知識有り、見て之を憫み、尋いで前んで髮を捉へ、之を拔いて出でしむるが如く、諸佛如

【四】如來の稱讃を明す。

來も亦復是の如し。諸の衆生の三惡道に墮するを見て、方便救濟して出離を得しむ。是の故に如來、一闡提の爲に而も法を演說す。』

王、耆婆に語りたまはく、『若如來をして審かに是の如くならしめば、明當に良日、吉星を選擇して、然して後乃ち往くべし。』耆婆王に白さく、『如來法中に良日、吉星を選擇すること有ること無し。大王、重病人の良日、時節の吉凶を擇ばず、唯良醫を求むるが如く、王今病重くして佛の良醫を求む。良時好日を選擇すべからず。大王、栴檀の火及び伊蘭の火、二つ倶に燒相に異有ること無きが如きなり。吉日凶日も亦復是の如し、若佛所に至らば倶に滅罪を得。唯願はくば大王、今日速かに往きたまへ。』

爾の時に大王、卽ち一臣の、名を吉祥と曰ふを命じて之に告げて言はく、『大臣當に知るべし、吾今佛世尊の所に往かんと欲す。速かに供養所須の具を辦ぜよ。』臣の言さく、『大王、善い哉善い哉、所須の供具一切悉く有り。』阿闍世王其の夫人と嚴駕の輦乘一萬二千、巨力の大象其の數五萬、一一の象の上に各三人有りて旛蓋を齎持す、華香、伎樂、種種の供具具足せざる無し。導從馬騎十八萬有り、摩伽陀國に有る所の人民尋いで王に從ふ者五十八萬なり。爾の時に拘尸城に有る所の大衆十二由旬に滿たず。悉く皆遙かに阿闍世王、其の眷屬と路を尋ねて來るを見る。

(四)爾の時に佛、諸の大衆に告げて言はく、『一切衆生阿耨多羅三藐三菩提の爲の近因緣なるは善友より先なるは無し。何を以ての故に。阿闍世王若耆婆が語に隨順せざれば、來月七

【舍婆提】舍衛城に同じ。

【毗流離】ギルーダカ(Virudhaka)は具瑠璃と譯す。波斯匿王の子。

【瞿伽離】コーカーリカ(Kokalika)悪時者と譯す。提婆達多の弟子。

【須那刹多】スナクシャトラ(Suna-ksatra)好星と譯す。

【五】阿闍世王佛所に至る。

日必定命終して阿鼻獄に墮せん。是の故に近因善友に若くは莫し。』阿闍世王、復前路に於て『舍婆提の毗流離王、船に乘じて海に入り火に遇ひて死す。瞿伽離比丘生身地に入りて阿鼻獄に至る。須那刹多種種の惡を作し、佛所に至りて衆罪の滅することを得。』と聞く。是の語を聞き已りて耆婆に語りて言はく、『吾今是の如きの二語を聞くと雖も、猶未だ審定せず。汝來れ耆婆、吾汝と同じく一象に載らんと欲す。設我當に阿鼻地獄に入るべくば、冀はくば汝、捉持して我をして墮せしめざれ。何を以ての故に。吾昔曾て聞けり、得道の人は地獄に入らずと。』

爾の時に佛、諸の大衆に告げて言はく、『阿闍世王猶疑意有り。我今當に決定心を作すべし。』

爾の時に會中に一りの菩薩有りて持一切と名く。佛に白して言さく、『世尊、佛の先說の如く一切諸法は皆定相無し。所謂色に定相無く、乃至涅槃も亦定相無し。如來今者、云何ぞ而も阿闍世王の爲に決定心を作すと云ふ。』佛の言はく、『善い哉善い哉善男子、我今定んで阿闍世王の爲に決定心を作す。何を以ての故に。若王の疑心破壞すべくば、當に知るべし、諸法定相有ること無し。是の故に我阿闍世王の爲に決定心を作す。當に知るべし、是の心無定の定と爲す。善男子、若彼の王の心是決定せば、王の逆罪云何ぞ壞すべけん。定相無きを以て其の罪壞すべし。是の故に我阿闍世王の爲に決定心を作す。』

(五)爾の時に大王、卽ち娑羅雙樹の間を往き、佛所に至り、仰いで如來の三十二相、八十種

【六八】阿闍世王正しく罪を滅す。

好の猶し微妙眞金の山の如くなるを瞻る。爾の時に世尊、八種の聲を出して告げて『大王』と言ふ。時に阿闍世、左右を顧視し『此の大衆の中誰か是大王なる。我既に罪逆にして又福德無ければ、如來稱して大王と爲したまふべからず。』爾の時に如來、卽ち復喚びて『阿闍世大王』と言ふ。時に王、聞き已りて心大いに歡喜し、卽ち是の語を作さく『如來今日顧るに、愛言を以てす。眞に如來諸の衆生に於て、大悲憐愍等しうして差別の無きを知る。』卽ち佛に白して言さく『世尊、我今疑心永く遺餘無し。定んで如來は、眞に是衆生の無上大師なることを知る。』爾の時に迦葉菩薩、持一切菩薩に語りて言はく『如來已に阿闍世王の爲に決定心を作したまふ。』

阿闍世王復佛に白して言さく『世尊、假使我今、梵王、釋提桓因と坐起飮食することを得とも、猶欣悅せじ。如來の一言顧み命じたまふに遇ふことを得て、深く以て欣慶す。』卽ち持する所の旛蓋、香華、伎樂を以て供養し、前んで佛足を禮したてまつり、右に繞ること三帀す。禮敬畢已りて卻つて一面に坐す。

（六）爾の時に佛阿闍世王に告げて言はく『大王、今當に汝が爲に正法要を說くべし、汝當に心を一つにして諦かに聽き諦かに聽け。凡夫常に當に心を繫けて身に二十事有るを觀ずべし。一つには我が此の身中空にして無漏無し。二つには諸の善根無し。三つには我が此の生死未だ調順を得じ。四つには深坑に墮墜して處として畏れざる無し。五つには何の方便を以てか佛性を見ることを得ん。六つには云何が定を修してか佛性を見ることを得ん。七つに

は生死常に苦にして常樂我淨無し。八つには八難の難遠離を得難し。九つには恆に怨家に追逐せらる。十には一法の能く諸有を遮する有こと無し。十一には三惡趣に於て未だ解脫を得じ。十二には種種の諸惡邪見を具足す。十三には亦未だ五逆を度るの津を造らず。十四には生死際無くして未だ其の邊を得じ。十五には諸業を作らざれば果報を得じ。十六には我作りて他人果を受くる有ること無し。十七には樂因を作らざれば終に樂果無し。十八には若業を造る有らば果終に失はじ。十九には無明に因りて生じ、亦因りて死す。二十には去來、現在常に放逸を行ず。大王、凡夫の人、當に此の身に於て常に是の如きの二十種の觀を作すべし。是の觀を作し已らば生死を樂はじ、生死を樂はざれば則ち止觀を得ん。爾の時に次第に心の生相、住相、滅相を觀ず。定、慧、進戒も亦復是の如し。生住滅を觀じ已りて、心相、乃至、戒相を知る。終に惡を作さざれば死畏、三惡道畏有ること無し。若心を繫けて是の如きの二十事を觀察せざる者は、心則ち放逸にして、惡として造らざる無し。』

阿闍世の言さく『我、佛の所說の義を解するが如きは、我昔より來た未だ曾て是の二十事を觀ざるが故に、多く衆惡を造る。衆惡を造るが故に則ち死畏、三惡道畏有り。世尊、自ら我が殃を招き玆の重惡を造る、父王辜無きに橫に逆害を加ふ。是の二十事設ひ觀じ觀ぜざるも、必定して當に阿鼻地獄に墮すべし。』

佛大王に告げたまはく『一切の諸法性相常無く、決定有ること無し、王云何ぞ必定して

當に阿鼻地獄に墮すべしと言ふべけん。」阿闍世王佛に白して言さく、「世尊、若一切の法定相無ければ、我が殺罪も亦應に不定なるべし。若殺定ならば、一切の諸法則ち不定に非じ。」

佛の言はく、「大王、善い哉善い哉諸佛世尊「一切の法悉く定相無し」と說く。王復能く殺も亦不定なるを知る。是の故に當に知るべし、殺に定相無しと。大王、汝の言ふ所の如く、父王辜無きに横に逆害を加ふとは、何者か是父なる。但假名の衆生五陰に於て妄りに父の想を生ず。十二入、十八界の中に於て何者か是父なる。若色是父ならば四陰は非なるべし。若四是父ならば色は亦非なるべし。若色、非色合して父と爲さば此處有ること無し。何を以ての故に。色と非色と性合すること無きが故なり。大王、凡夫衆生是の色陰に於て妄りに父想を生ず。是の如きの色陰も亦害すべからず。何を以ての故に。色に十種有り。是の十種の中唯色の一種、見るべく、持すべく、稱ふべく、量るべく、牽くべく、縛すべし。見縛すべしと雖も、其の性住せず。不住を以ての故に、見ることを得べからず、捉持すべからず、稱量すべからず、牽縛すべからず。色相是の如し云何ぞ殺すべけん、若色是父にして殺すべく、害すべき罪報を獲れば、餘の九つは非なるべし。若九つ非ならば則ち罪無かるべし。大王、色に三種有り。過去、未來、現在なり。過去、現在は則ち害すべからず。何を以ての故に。過去は過去するが故に、現在は念念に滅するが故に、未來は遮するが故に。之を名けて殺と爲す。是の如く一色、或は可殺有り、或は不可殺なり。殺、

不殺有れば色則ち定らず。若色不定ならば殺も亦不定なり、殺不定の故に報も亦不定なり。云何ぞ說きて定んで地獄に入ると言はん。

大王、一切衆生の所作の罪業に凡そ二種有り。一つには輕、二つには重なり。若心、口の作は則ち名けて輕と爲し、身、口、心の作は則ち名けて重と爲す。大王、心念口說して身作さざる者は所得の報輕し。大王、昔日口殺を敎へず、唯刖足を言ふ。大王若侍臣に「立つとき王首を斷ぜよ」と敕せんに、坐する時乃ち斷ぜば猶罪を得じ。況や王敕せず、云何ぞ罪を得ん。王若罪を得ば諸佛世尊も亦罪を得べし。何を以ての故に。汝が父先王頻婆娑羅、曾て諸佛に於て諸の善根を種う。是の故に今日王位に居ることを得。若佛世尊其の供を受けざれば則ち王と爲さず。若王と爲さざれば汝則ち國の爲に害を興すことを得じ。汝若父を殺す、當に罪有るべくば、我等諸佛も亦罪有るべし。若諸佛世尊罪有ること無ければ、汝獨云何ぞ而も罪を得んや。

大王、頻婆娑羅往惡心有りて毗富羅山に於て遊行射獵するに、曠野に周徧して悉く得る所無し。唯一仙を見るに五通具足す。見已りて卽ち瞋恚惡心を生ず。我今遊獵して得ざる所以は、正しく此の人驅逐して去らしむるに坐す。卽ち左右に敕して而も之を殺さしむ。其の人臨終に瞋惡心を生じて、神通を退失し誓言を作さく、「我實に辜無く、汝心口を以て横に屠戮を加ふ。我來世に於ても亦當に是の如く、還心口を以て而も汝が命を害すべし」と。時に王、聞き已りて卽ち悔心を生じて死尸を供養す。先王是の如く、尙輕受を得て地

獄に墮せず。況や王爾らざるに而も當に地獄に果報を受くべけんや。先王自ら作し還自ら之を受く。云何ぞ王をして而も殺罪を得しめんや。王の言ふ所の如き、父王辜無しと言ふ所の如きは、云何が無しと言ふ。夫罪有る者は則ち罪報有り、惡業無き者は則ち罪報無し。汝が父先王若罪有ること無ければ云何ぞ報有らん。頻婆娑羅現世の中に於ても亦善果及以惡果を得。是の故に先王も亦復定まらず。不定を以ての故に殺も亦定まらず。殺不定の故に、云何ぞ而も定んで地獄に入ると言はん。

大王、衆生の狂惑に凡そ四種有り。一つには貪狂、二つには藥狂、三つには呪狂、四つには本業緣狂なり。大王、我が弟子の中に是の四狂有り。多く惡を作ると雖も我終に是の人戒を犯すと記せず。是の人の所作三趣に至らず。若還つて心を得るに亦犯と言はず。王本國を貪りて此の逆害を興す。貪狂心の作云何ぞ罪を得ん。大王、人の酒に醉ひて其の母を害し、既に醒悟し已りて心に悔恨を生ずるが如し。當に知るべし、此の業も亦報を得ず。王今貪醉は本心の作に非ず。若本心に非ざれば云何ぞ罪を得ん。大王、譬へば幻師四衢道に於て種種の男女、象馬、瓔珞、衣服を幻作す。愚癡の人は謂つて眞實と爲し有智の人は眞有に非ずと知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其眞に非ざるを知る。大王、譬へば山谷の響聲、愚癡の人は之を實聲と謂ひ、有智の人は其の眞に非ざるを知るが如し。殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。大王、人怨有り詐り來りて親附す。愚癡の人は謂つて眞實と爲し、智者は了達して乃ち虛詐

を知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。大王、人鏡を執りて自ら面像を見るに、愚癡の人は謂つて眞面と爲し、智者は了達して其の非眞を知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。大王、熱時の焰、愚癡の人は之を是水と謂ひ、智者は了達して其の水に非ざるを知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。大王、乾闥婆城を愚癡の人は謂つて眞實と爲し、智者は了達して其の眞に非ざるを知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の非眞を知る。大王、人夢中に五欲の樂を受け、愚癡の人は之を謂つて實と爲し、智者は了達して其の非眞を知るが如く、殺も亦是の如し。凡夫は實と謂ひ、諸佛世尊は其の眞に非ざるを知る。大王、殺法、殺業、殺者、殺果、及以解脫我皆之を了す、則ち罪有ること無し。王殺を知ると雖も、云何ぞ罪有らん。大王、譬へば人有りて典酒を主知し、如其飮まざれば則ち亦醉はず、復火を知ると雖も、亦燒然せざるが如く、王も亦是の如し。復殺を知ると雖も、云何ぞ罪有らん。大王、諸の衆生有りて日出の時に於て種種の罪を作り、月出の時に於て復劫盜を行ひ、日月出でざる時罪を作らず。日月に因りて其をして罪を作らしむと雖も、而も此の日月は實に罪を得ず。殺も亦是の如し。復王に因ると雖も、王は實に罪無し。

大王、王の宮中常に羊を屠るを敕す。心初て懼無きが如し。云何ぞ父に於て獨懼心を生ず。復人獸、尊卑差別すと雖も、命を保ち死を畏るは二つ倶に異なること無し、何が故

ぞ羊に於て心輕くして懼無く、父先王に於て重き憂苦を生ず。大王、世間の人は是愛の僮僕にして自在を得ず。愛に使はれて殺害を行ず。設ひ果報有るも、乃ち是愛の罪なり。王自在ならず。當に何の咎か有るべき。大王、譬へば涅槃の有に非ず無に非ず、而も亦是有なるが如く、殺も亦是の如し。非有非無と雖も、而も亦是有なり。慚愧の人は則ち是非有、無慚愧の者は則ち非無と爲す。果報を受くる者は、之を名けて有と爲し、空見の人は則ち非有と爲す。有見の人は則ち非無と爲し、有有見の者も亦名けて有と爲す。何を以ての故に。有有見の者は果報を得るが故に。無有見の者は則ち果報無し。常見の人は則ち非有と爲し、無常見の者は則ち非無と爲す。常常見の者は無と爲すことを得ず。何を以ての故に。常常見の者は惡業果有るが故に、是の故に常常見の者は無と爲すことを得ず。是の義を以ての故に、非有、非無と雖も而も亦是有なり。大王、夫衆生とは出入息を名く。出入息を斷ずるが故に名けて殺と爲す。諸佛俗に隨ひて亦說きて殺と爲す。

大王、色は是無常、色の因緣も亦是無常なり。無常の因より生ずる色云何ぞ常ならん。乃至識は無常、識の因緣も亦是無常なり。無常の因より生ずる識云何ぞ常ならん。無常を以ての故に苦、苦を以ての故に空、空を以ての故に無我なり。若是無常、苦、空、無我ならば何の殺す所と爲ん。無常を殺さば常涅槃を得ん。苦を殺さば樂を得、空を殺さば實を得、無我を殺さば眞我を得ん。大王、若無常、苦、空、無我を殺さば則ち我と同じからん。我も亦是の無常、苦、空、無我を殺すに地獄に入らず、汝云何ぞ入らん。」

【七】阿闍世王敎行を奉ず。

【八】阿闍世王及夫人眷屬並に無量の大衆の發心を明す。

(七)爾の時に阿闍世王、佛の所說の如く色を觀じ、乃至識を觀ず。是の觀を作し已りて卽ち佛に白して言さく、「世尊、我今始めて色は是無常、乃至識は是無常と知る。我本若能く是の如く觀ぜば則ち罪を作らず。世尊、我昔曾て聞く、『諸佛世尊は常に衆生の爲に父母と作る』と。是の語を聞くと雖も、猶未だ審かにすること能はず、今乃ち定んで知んぬ。世尊我も亦曾て聞く、『須彌山王は四寶の所成、所謂金、銀、瑠璃、頗梨なり。若衆鳥有りて集る所の處に隨ひて則ち其の色を同じうす』と。是の說を聞くと雖も、亦審定せず。我今佛須彌山に來至すれば、則ち與に色を同じうす。與に色を同じうすとは、則ち諸法の無常、苦、空、無我を知るなり。世尊、我世間に伊蘭子より伊蘭樹を生ずるを見、伊蘭の栴檀を生ずる者を見ず。我今始めて伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見る。伊蘭子とは我が身是なり、栴檀樹とは卽ち是我が心無根信なり。無根とは我が初、如來を恭敬することを知らず、法僧を信ぜず。是を無根と名く。世尊、我若如來世尊に遇ひたてまつらざれば、當に無量阿僧祇劫に於て、大地獄に在りて無量の苦を受く。我今幸有りて如來を見たてまつることを得たり。是の佛を見て得る所の功德を以て、悉く衆生の煩惱惡心を壞す。」佛の言はく、「大王、善い哉善い哉、我今、汝必ず能く衆生の惡心を破壞せんを知る。」「世尊若我審かに能く衆生の諸の惡心を破壞せば、我をして常に阿鼻地獄に在りて、無量劫の中諸の衆生の爲に大苦惱を受けしむとも、以て苦と爲さず。」

(八)爾の時に摩訶陀國の無量の人民、悉く阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是の如き等の無量

の人民大心を發すを以ての故に、阿闍世王の有らゆる重罪即ち微薄なるを得、王及び夫人後宮、婇女、悉く皆同じく阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。

爾の時に阿闍世王、耆婆に語りて言はく、「耆婆、我今未だ死せずして已に天身を得、短命を捨てて而も長命を得、無常身を捨てて而も常身を得、諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。即ち是天身、長命、常身、即ち是一切諸佛の弟子なり。」

是の語を說き已りて、即ち種種の寶幢、旛蓋、香華、瓔珞、微妙の伎樂を以て佛に供養し、復偈頌を以て讃歎して言さく、

實語甚だ微妙にして、句義に善巧なり
甚深祕密藏は、衆の爲の故に顯示す
有らゆる廣博の言は、衆の爲の故に略說す
是の如きの語を具足して、善能く衆生を療す
若し諸の衆生有りて、是の語を聞くことを得る者は
若は信じ及び信ぜざる、定んで是佛說なるを知らん
諸佛常に軟語もて、衆の爲の故に麤を說きたまふ
麤說及び軟言、皆第一義に歸す
是の故に我今者、世尊に歸依したてまつる
如來語の一味なる、猶し大海水の如し

是を第一義と名く、故に無義の言無し
如來今說きたまふ所の、種種無量の法
男女大小聞きたてまつりて、同じく第一義を獲
無因も亦無果も、無生も亦無滅も
是を大涅槃と名け、聞く者諸果を破す
如來一切の爲に、常に慈父母と作りたまふ
當に知るべし諸の衆生は、皆是如來の子なりと
世尊は大慈悲にして、衆の爲に苦行を修したまふ
人の鬼魅に著せられ、狂亂して爲す所多きが如し
我今佛を見たてまつることを得て、得る所の三業の善
願はくば此の功德を以て、無上道に回向せん
我今供養する所の、佛法及び衆僧
願はくば此の功德を以て、三寶常に世に存せん
我今獲べき所の、種種の諸の功德
願はくば以て一切、衆生四種の魔を破せん
我惡知識に遇ひて、三世の罪を造作る
今佛前に於て悔す、願はくば後更に作らざらん

【嬰兒行品】此品は嬰兒行を明す。【不能起】不能起不能住、不能來、不能語の四は常樂我淨の四德に譬ふと。

願はくば諸の衆生等、悉く菩提心を發し
心を繫けて常に、十方の一切佛を思念せん
復願はくば諸の衆生、永く諸の煩惱を破し
了了に佛性を見ること、猶し文殊等の如くならん

爾の時に世尊阿闍世王を讃じたまはく「善い哉善い哉、若人能く菩提心を發す有らば、當に知るべし、是の人は則ち諸佛大衆を莊嚴すと爲す。大王、汝昔已に毘婆尸佛に於て、初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是より以來我が出世に至りて、其の中間に於て未だ曾て復地獄に墮して苦を受けず。大王、當に知るべし、菩提の心は乃ち是の如きの無量の果報有り。大王、今より已往、常に當に菩提の心を勸修すべし。何を以ての故に。是の因緣に從ひ、當に無量の惡を消滅することを得べきが故なり。」

爾の時に阿闍世王、及び摩伽陀國の一切の人民、座よりして起ち、佛を繞ること三帀し、辭退して宮に還る。天行品とは雜華に說くが如し。

嬰兒行品第二十一

「善男子、云何が名けて嬰兒行と爲す。善男子、起、住、來去、語言すること能はざる、是を嬰兒と名く。如來も亦爾なり。不能起とは、如來終に諸の法相を起さず。不能住とは、

如來一切の諸法に著せず。不能來とは、如來身行に動搖有ること無し。不能去とは、如來已に大般涅槃に至る。不能語とは、如來一切衆生の爲に諸法を演說すと雖も、實は所說無し。何を以ての故に。說く所有らば有爲法と名く。如來世尊は是有爲に非ず、是の故に說く無し。又無語とは、猶し嬰兒の語言未了にして、復語有りと雖も實は亦語無きが如く、如來も亦爾なり。語未了とは卽ち是諸佛祕密の言なり。說く所有りと雖も衆生解せず、故に無語と名く。

又嬰兒とは、名物不一にして未だ正語を知らず。名物不一にして未だ正語を知らずと雖も、此に因つて物を識ることを得ざるに非ず。如來も亦爾なり。一切衆生方に類各異にして言ふ所同じからず。如來方便して、隨つて之を說く。亦一切をして因つて解を得しむ。

又嬰兒とは、能く大字を說く。如來も亦爾なり、大字を說く。所謂婆啝なり。啝とは有爲、婆とは無爲なり。是を嬰兒と名く。啝とは名けて無常と爲し、婆とは名けて有常と爲す。如來常を說きたまへば、衆生聞き已りて常法と爲すが故に無常を斷ず。是を嬰兒行と名く。

又嬰兒とは、苦樂、晝夜、父母を知らず。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。衆生の爲の故に苦樂を見ず、晝夜の相無し。諸の衆生に於て其の心平等なり、故に父母、親疎等の相無し。

又嬰兒とは、大小の諸事を造作すること能はず。菩薩摩訶薩も亦復是の如し。復生死の

作業を造作せず、是を不作と名く。大事とは卽ち五逆なり。菩薩摩訶薩終に五逆の重罪を造作せず、小事とは卽ち二乘心なり。菩薩終に菩提心を退して、而も聲聞、辟支佛乘を作らず。

又嬰兒行とは、彼の嬰兒啼哭の時、父母卽ち楊樹の黃葉を以て之に語りて言はく「啼く莫れ啼く莫れ。我汝に金を與ふ。」嬰兒見已りて眞金の想を生じ便ち止めて啼かず。然るに此の黃葉、實に金に非ざるが如し。木牛、木馬、木男、木女、嬰兒見已りて亦復男女等の想を生じて、卽ち止めて啼かざるも實は男女に非ず。是の如く男女の想を作すを以ての故に、名けて嬰兒と曰ふ。如來も亦爾なり。若衆生の衆惡を造らんと欲する有らば、如來爲に三十三天の常樂我淨、端正、自恣、妙宮殿に於て五欲を受け、六根の所對是樂に非ざる無きを說きたまふ。衆生是の如きの樂有るを聞くが故に、心に貪樂を生じて止みて惡を爲さず、三十三天の善業を勤作す。實は是生死無常、無樂、無我、無淨なり。衆生を度せんが爲に、方便して說きて常、樂、我、淨と言ふ。

又嬰兒とは、若衆生有りて生死を厭ふ時、如來則ち爲に二乘を說きたまふ。然るに實は二乘の實有ること無し。二乘を以ての故に、生死の過を知り涅槃の樂を見る。是の見を以ての故に、則ち能く自ら斷、不斷有り、眞、不眞有り、修、不修有り、得、不得有るを知る。

善男子、彼の嬰兒の非金の中に於て而も金想を生ずるが如く、如來も亦爾なり。不淨の

中に於て而も說きて淨と爲す。如來第一義を得るを以ての故に、則ち虛妄無し。彼の嬰兒の非牛馬に於て牛馬の想を作すが如し。若衆生非道の中に於て眞道の想を作す有らば、如來も亦非道を說きて道と爲したまふ。非道の中實に道有ること無し。能く道を生ずる微因緣なるを以ての故に、非道を說きて道を爲す。彼の嬰兒の木男女に於て男女の想を生ずるが如し。如來も亦爾なり、非衆生を知りて衆生想を說きたまふ。而も實は衆生想有ること無きなり。若佛如來衆生無しと說かば、一切衆生は則ち邪見に墮せん。是の故に如來衆生有りと說きたまふ。衆生の中に於て衆生想を作す者は、則ち衆生想を破すること能はざるなり。若衆生に於て衆生想を破する者は、是則ち能く大般涅槃を得。是の如く大涅槃を得るを以ての故に、止めて啼哭せず。是を嬰兒行と名く。善男子、若男女是の五行を受持し、讀誦し、書寫し、解說する者有らば、當に知るべし、是の人は必定して當に是の如く五行を得べし。」

迦葉菩薩、佛に白して言さく『世尊、我佛所說の義を解するが如きは、我も亦定んで當に是の五行を得べし。』佛の言はく『善男子、獨汝是の如く五行を得るにあらず、今此の會中の九十三萬人も亦皆汝に同じく是の五行を得ん。』

【高貴德王菩薩品】此品は大涅槃經を修するものの十種の功德を擧げ、中に就て第一の功德を明すの章なり。

【一】十種の功德を明す。初に第一の功德を明す。

【辟支佛】プラトエーカブッダ(Pratyekabuddha)獨覺と譯す。緣覺に同じ。

【二】第一の功德中不聞聞を明す。

大般涅槃經 卷第十九

宋代沙門慧嚴等泥洹經に依て之に加ふ

高貴德王菩薩品第二十二之一

(一)爾の時に世尊、光明偏照高貴德王菩薩摩訶薩に告げて言はく、「善男子、若菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を修行する有らば十事の功德を得、聲聞、辟支佛と共ならず。思議す可らず、聞く者驚怪せん。內に非ず外に非ず、難に非ず易に非ず、相に非ず非相に非ず、是れ世法に非ず。相貌有る無く、世間に無き所なり。何等をか十と爲す。一つには五と爲す。何等をか五と爲す。一つには聞かざる所の者而も能く聞くを得、二つには聞き已りて能く利益を爲す、三つには能く疑惑の心を斷ず、四つには慧心正直にして曲無し、五つには能く如來の密藏を知る。是を五事と爲す。

(二)何等か不聞にして而も能く聞くを得。所謂甚深微密の義なり。一切衆生悉く佛性有り、佛、法、衆僧差別有る無し。三寶性相常樂我淨なり。一切諸佛畢竟じて涅槃に入る者有る無し。常住不變、如來涅槃なり。非有、非無。非有爲、非無爲。非有漏、非無漏。非色、非不色。非名、非不名。非相、非不相。非有、非不有。非物、非不物。非因、非果。非待、

【四毗陀】四種の吠陀論。チャトルヴェーダ(Catur-veda)婆羅門哲學の根本聖典にして天啓書なり。一、梨俱毗陀(リグヴェーダ Ṛgveda)二、沙磨毗陀(サーマヴェーダ Sāmaveda)三、夜柔毗陀(Yajurveda)四、阿闥婆毗陀(Atharvaveda)

【毗伽羅】ギャーカラナ(Vyākaraṇa)五明中の聲名。

【衛世師】ヴイシエーシカ(Vaiśeṣika)六派哲學中の勝論宗の梵名。

【迦毗羅】カピラ(Kapila)六派哲學の一、數論の開祖の名。

【三】第一の功德中、聞已利益を明す。

非不待。非明、非闇。非出、非不出。非常、非不常。非斷、非不斷。非始、非終。非過去、非未來、非現在。非陰、非不陰。非入、非不入。非界、非不界。非十二因緣、非不十二因緣。是の如き等の法甚深微密なり。昔聞かざる所而も能く聞くを得。復不聞有り、所謂一切の外道の經書なり。四毗陀論、毗伽羅論、衛世師論、伽毗羅論、一切の呪術、醫方技藝、日月博食、星宿運變、圖書讖記。是の如き等の經初て未だ曾て祕密の義を聞かず。今此の經に於て而も之を知ることを得。復十一部經有り、毗佛略を除く。亦是の如きの深密の義無し。今此の經に因りて而も之を知ることを得。善男子、是を不聞にして而も能く聞くことを得と名く。

(三)聞き已りて利益すとは、若し能く是の大涅槃經を聽受すれば、悉く能く具さに一切の方等大乘經典の甚深の義味を知る。譬へば男女の明淨の鏡に於て、其の色像を見ること了了分明なるが如く、大涅槃經も亦復是の如し。菩薩之を執りて悉く明かに大乘經典の甚深の義を見ることを得。亦人有りて闇室の中に在り、大炬火を執りて悉く諸物を見るが如く、大涅槃炬も亦復是の如し。菩薩之を執りて大乘深奧の義を見ることを得。亦日出づれば千光明有りて悉く能く諸山幽闇を照了し、一切の人をして遠く諸物を見しむるが如く、是の大涅槃の清淨慧日も亦復是の如し。大乘深邃の處を照了し、二乘の人をして遠く佛道を見しむ。所以は何ん。能く是の大涅槃微妙の經を聽受するを以ての故なり。善男子、若菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を聽受する有らば、一切の諸法名字を知ることを得。若能く書

【四】第一の功德中斷疑心を明す。

寫し、讀誦通利し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち一切諸法の義理を知る。善男子、其の聽受の者、唯名字を知りて其の義を知らず。若し能く書寫し、受持、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち能く義を知る。復次に善男子、是の經を聽く者、佛性有るを聞きて未だ見ることを得ること能はず。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば則ち之を見ることを得。是の經を聽く者、檀の名有るを聞きて未だ檀波羅蜜を見るを得ること能はず。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち能く檀波羅蜜を見ることを得、乃至般若波羅蜜も亦復是の如し。善男子、菩薩摩訶薩若能く是の大涅槃經を聽かば、則ち法を知り義を知り、二無閡を具へて諸の沙門、婆羅門等、若は天、魔、梵一切世中に於て無所畏を得。十二部經を開示分別し、其の義を演說するに差違有ること無し。他に從うて聞かずして而も能く自ら知り、阿耨多羅三藐三菩提に近く。善男子、是を聞き已りて能く利益を爲すと名く。

(四)疑心を斷ずとは、疑に二種有り。一つには名を疑ひ、二つには義を疑ふ。是の經を聽く者は疑名の心を斷じ、義を思惟する者は疑義の心を斷ず。復次に善男子、疑に五種有り。一つには佛は定んで涅槃するや否やと疑ひ、二つには佛は是れ常住なりや否やと疑ひ、三つには佛は是眞樂なりや不やと疑ひ、四つには佛は是眞淨なりや不やと疑ひ、五つには佛は是眞我なりや不やと疑ふ。是の經を聽く者は佛の涅槃を疑ふこと、則ち永く斷ずるを得。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば四疑永く斷ず。復次に善男子、疑

に三種有り。一つには聲聞有と爲ん無と爲んと疑ひ、二つには緣覺有と爲ん無と爲んと疑ひ、三つには佛乘有と爲ん無と爲んと疑ふ。是の經を聽く者は是の如きの三疑永く滅して餘無し。書寫、讀誦し、他の爲に廣く說き、其の義を思惟すれば、則ち能く一切衆生悉く佛性有るを了知す。復次に善男子、若衆生の是の如きの大涅槃經を聞かざる有らば、疑心甚だ多し。所謂若は常、無常。若は樂、不樂。若は淨、不淨、若は我、無我。若は命、非命。若は衆生、非衆生。若は畢竟、不畢竟。若は他世、若は過世。若は有、若は無。若は苦、若は非苦。若は集、若は非集。若は道、若は非道。若は滅、若は非滅。若は法、若は非法。若は善、若は非善。若は空、若は非空なり。是の經を聽く者は是の如きの諸疑悉く永く斷ずることを得。復次に善男子、若是の如きの經を聞かざる者有らば、復種種衆多の疑心有り。所謂色是我なりや、受、想、行、識是我なりや。眼能く見るや、我能く見るや、乃至識能く知るや。我能く知るや、色報を受くるや。我報を受くるや。乃至識報を受くるや、我報を受くるや。色他世に至るや。我他世に至るや。乃至識も亦是の如し。生死の法始有り終有りや、始無く終無きや。是の經を聽く者是の如き等の疑も亦永く斷ずることを得。復人有りて一闡提、犯四重禁、作五逆罪、謗方等經の是の如き等の輩佛性有りや、佛性無きやと疑ふ。是の經を聽く者は是の如き等の疑悉く永く斷ずることを得。

復人有りて世間邊有りや、世間邊無きや。十方世界有りや、十方世界無きやと疑ふ。是の經を聽く者は、是の如き等の疑も亦永く斷ずることを得。是を能く疑惑の心を斷ずと名く。

【五】第一の功徳中慧心正直無邪曲を明す。

【難陀龍王】ナンダ(Nanda)は歡喜と譯す。婆難陀(ウパナンダUpanan-da)とは兄弟にして摩竭陀國の龍王なり。

【摩尼跋陀】マニバドラ(Maṇibha-dra)如意寶賢と譯す。夜叉八大將の一。

【阿私陀】アシタ(Asita)不白、無比等と譯す。婆羅門の學者、釋尊の降誕を相し、轉輪聖王たらんと豫言せし人。

(五)慧心正直にして邪曲無しとは、心若疑有らば則ち見る所正しからず、一切の凡夫、若是の大涅槃微妙の經典を聞くことを得ざれば、所見邪曲、乃至聲聞、辟支佛の人の所見も亦曲なり。云何が名けて一切凡夫所見邪曲と爲す。有漏の中に於て常、樂、我、淨を見、如來の所に於て無常、苦、不淨、無我を見、衆生壽命知見有りと見る。非有想、非無想處を計して以て涅槃と爲し、自在天に八聖道有りと見る。有見、斷見、是の如き等の見、名けて邪曲と爲す。菩薩摩訶薩若是の大涅槃經を聞きて聖行を修行することを得ば、則ち是の如きの邪曲を斷除することを得。云何が名けて聲聞、緣覺の邪曲見と爲すや。菩薩兜率より下り、白象に化乘して神を母胎に降す。父を淨飯と名け、母を摩耶と名く。迦毘羅城に胎に處ること十月を滿足して生ず。生れて未だ地に至らざるに、帝釋捧接し、難陀龍王及び婆難陀、水を吐きて之を浴す。摩尼跋陀大鬼神王、寶蓋を執持し後に隨ひて侍立し、地神華を化して以て其の足を承く。四方に各行くこと七歩を滿足す。天廟に至るに、諸の天像をして悉く起ちて承迎せしむ。阿私陀仙抱持して相を占ふ。既に占相し已りて大悲苦を生ず「自ら傷む當に終に佛興を覩ざることを」と。師に詣でて書、算計、射御、圖讖、技藝を學び、深宮に處在して六萬の婇女娛樂して樂を受く。城を出でて遊觀して迦毘羅園に至る。道に老人、乃至沙門の法服にして行くを見、宮中に還至して、諸の婇女の形體、狀貌の猶し枯骨の如く、所有の宮殿塚墓と異なること無きを見、厭惡して出家し、夜半に城を踰えて欝陀伽、阿羅羅等の大仙人の所に至り、識處及び非有想非無想處を說くを聞く。

【鬱陀伽】ウドラカラーマプトラ(Udrakarāmaputra)猛喜と譯す。釋尊に非想非非想定の教義を傳へたる仙人。

【阿羅羅】アーラーダーカーラーマ(Ārāḍakālāma)懈怠と譯す。釋尊に無所有定の教義を傳へたる仙人。

【六】第一の功德中知如來深密義を明す。

既に是を聞き已りて是の處を諦觀するに、是非常、苦、不淨、無我なり。捨てて樹下に至り、具さに苦行を修し、六年を滿足して是の苦行の阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ること能はざるを知る。爾の時に復阿夷羅跋提河の中に至りて洗浴し、牧牛女の奉る所の乳糜を受く。受け已りて轉じて菩提樹下に至り、魔波旬を破して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得、波羅奈に於て五比丘の爲に初めて法輪を轉じ、乃至此の拘尸城に於て般涅槃に入ると見る。是の如き等の見、是を聲聞、緣覺の曲見と名く。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を聽受すれば、悉く是の如き等の見を斷除することを得。若能く書寫、讀誦、通利し、他の爲に演說し其の義を思惟すれば、則ち正直にして邪曲の見無きことを得。善男子、菩薩摩訶薩是の如きの大涅槃經を修行すれば、諦かに菩薩無量劫來兜率より神を母胎に降し、乃至拘尸城に般涅槃に入らざるを知る。是を菩薩摩訶薩の正直の見と名く。

(六)能く如來の深密の義を知るとは、所謂卽ち是大般涅槃なり。一切衆生悉く佛性有り、四重禁を犢し謗法の心を除き、五逆罪を盡し、一闡提を滅す。然して後阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得。是を甚深祕密の義と名く。復次に善男子、云何が復甚深の義と名く。衆生實に我有ること無しと知ると雖も、而も未來に於て業果を失はず、五陰此に於て滅盡すと知ると雖も、善惡の業終に敗亡せず、諸業有りと雖も作者を得ず、至る處有りと雖も去る者有ること無し、繫縛有りと雖も縛を受くる者無し、涅槃有りと雖も亦滅する者無し。

【七】前の功德につきて論義す。

是を甚深祕密の義と名く。」

（七）爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩佛に白して言さく、「世尊、我佛所說の聞、不聞の義を解するが如きは、是の義然らず。何を以ての故に。法若有ならば便ち定んで有なるべく、法若無ならば便ち定んで無なるべし。無生ずべからず、有滅すべからず。如其聞かば是則ち聞と爲し、若聞かざれば則ち不聞と爲す。云何ぞ而も聞所不聞と言ふや。世尊、若聞くべからざれば是を不聞と爲し、若已に聞かば則ち更に聞かず。何を以ての故に。已に聞くことを得るが故なり。云何ぞ而も聞所不聞と言はん。譬へば去者至れば則ち去らず、去れば則ち至らざるが如し。亦生じ已らば生ぜず、不生を生ぜず。得し已らば得せず、不得を得せざるが如し。聞き已らば聞かず、不聞を聞かざるも、亦復是の如し。

世尊、若不聞聞とは、一切衆生未だ菩提有らざれば、卽ち之有るべし、未だ涅槃を得ざれば亦之を得べし、未だ佛性を見ざれば佛性を見るべし。云何ぞ復十住に菩薩佛性を見ると雖も、未だ明了を得ずと言ふ。世尊、若不聞聞とは、如來往昔誰に從ひて聞くことを得と。若聞くことを得と言はば、何が故ぞ如來、阿含の中に於て復師無しと言ふや。若不聞不聞、如來阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ば、一切衆生の不聞不聞も亦阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。如來若當に是の如きの大涅槃經を聞かずして佛性を見るべくば、一切衆生の是の經を聞かざるも亦見ることを得べけん。

世尊、凡そ是色とは、或は可見、或は不可見なり。聲も亦是の如し、或は是可聞、或は

【八】大光明につきて論義す。

不可聞なり。是の大涅槃は色に非ず聲に非じ。云何ぞ而も見聞すべからずと言はん。世尊、過去已に滅すれば則ち聞くべからず、未來未だ至らざれば亦聞くべからず。現在聽く時は則ち聞と名けず、聞き已りて聲滅すれば更に聞くべからず。是の大涅槃も亦過去、未來、現在に非じ。若三世に非ざれば則ち說くべからず、若不可說ならば則ち聞くべからず。云何ぞ而も菩薩是の大涅槃經を修し、聞かざる所を聞くと言はんや。」

爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩を讃じて言はく「善い哉善い哉善男子、汝今善く一切諸法、幻の如く、燄の如く、乾闥婆城、畫水の迹の如く、亦泡沫、芭蕉の樹の空にして實有ること無きが如し。命に非ず、我に非ず、苦樂有ること無きを知る。十住の菩薩の知見する所の如し。」

(八)時に大衆の中、忽然の頃に大光明有り、青に非ずして青を見、黃に非ずして黃を見、赤に非ずして赤を見、白に非ずして白を見、色に非ずして色を見、明に非ずして明を見、見るに非ずして而も見る。爾の時に大衆斯の光に遇ひ已りて、身心快樂なる、譬へば比丘の師子王定に入るが如し。

爾の時に文殊師利菩薩佛に白して言さく「世尊、今此の光明誰の放つ所ぞ。」爾の時に如來默然として說きたまはず。迦葉菩薩復文殊師利に問はく「何の因緣の故に、此の光明有りて大衆を照したまふ。」文殊師利默然として答へず。爾の時に無邊身菩薩復迦葉菩薩に問はく「今此の光明誰の所有ぞ。」迦葉菩薩默然として說かず。淨住王子菩薩復無邊身菩薩

に問はく、『何の因緣の故に、是の大衆の中此の光明有る。』無邊身菩薩默然として說かず。是の如くにして五百の菩薩皆亦是の如し。相諮問すと雖も然も答ふる者無し。

爾の時に世尊文殊師利に問ひたまはく、『何の因緣の故に是の大衆の中此の光明有る。』文殊師利の言さく、『世尊、是の如きの光明、名けて智慧と爲す。智慧とは即ち是常住の法、因緣有ること無し。云何ぞ佛、何の因緣の故に是の光明有ると問ひたまふ。是の光明は大涅槃と名く、大涅槃は則ち常住と名く、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ佛、何の因緣の故に是の光明有ると問ひたまふ。是の光明は即ち是如來なり、如來は即ち是常住なり、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ如來因緣を問ひたまふ。

光明は大慈大悲と名く、大慈大悲は名けて常住と爲す、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ如來因緣を問ひたまふ。光明は即ち是念佛、念佛は是を常住と名く、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ如來因緣を問ひたまふ。光明は即ち是一切の聲聞、緣覺不共の道なり。聲聞、緣覺不共の道は即ち常住と名く、常住の法は因緣に從はず。云何ぞ如來因緣を問ひたまふ。世尊、亦因緣有り。無明を滅するに因りて則ち熾然の阿耨多羅三藐三菩提の燈を得。』

佛の言はく、『文殊師利、汝今諸法甚深第一義諦に入ること莫れ。世諦を以て之を解說すべし。』文殊師利の言さく、『世尊、此の東方に於て、二十恒河沙等の世界を過ぎて佛世界有り、名けて不動と曰ふ。其の佛の住處は縱廣正等にして一萬二千由延に足滿す。其に地七

寶にして土石有ること無く、平正柔軟にして諸の溝坑無し。其の諸の樹木は四寶の所成なり。金、銀、瑠璃、及以頗棃なり。華果茂盛にして時として有らざる無し。若衆生其の華香を聞く有らば、身心安樂なること譬へば比丘の第三禪に入るが如し。周帀して復三千の大河有り、其の水微妙にして八味具足す。若衆生の中に在りて浴する者有らば、所得の喜樂譬へば比丘の第二禪に入るが如し。其の河多く種種の諸華有り。優鉢羅華、波頭摩華、拘物頭華、芬陀利華、香華、大香華、微妙香華、常華、一切衆生無遮護華なり。其の河の兩岸も亦衆華有り。所謂阿提目多伽華、占婆華、波吒羅華、婆師羅華、摩利迦華、大摩利迦華、新摩利迦華、須摩那華、由提迦華、檀究迦利華、常華、一切衆生不遮護華なり。底に金沙を布き、四つの梯陛有り。金、銀、瑠璃、雜色の頗棃なり。多く衆鳥有りて其の上に遊集す。復無量の虎狼、師子、諸の惡鳥獸有り、其の心相視ること猶し赤子の如し。彼の世界の中には、一切の犯重禁の者、誹謗正法、及び一闡提、五逆等の罪有ること無く、其の土調適にして寒熱、饑渇の苦惱有ること無く、貪欲、恚、放逸、嫉妬無く、日月、晝夜、時節有ること無し。猶し第二忉利天上の如し。其の土の人民等しく光明有りて、各各憍慢の心有ること無く、一切悉く是菩薩大士なり。皆神通を得、大功德を具し、其の心悉く皆正法を尊重す。大乘に乘じ、大乘を愛念し、大乘を貪樂し、大乘を護惜す。大慧成就し、大總持を得、心常に一切衆生を憐愍す。其の佛を號して滿月光明如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と曰ふ。所住の處

【大總持】マハーダーラニー(Mahādhāraṇī)の譯。又大咒とも云ふ。種種の善法を集め持ちて散失せしめざるを總持と云ひ、その勝れたるを大總持となす。

【瑠璃光】ヷイズーリヤプラバ(Vaiḍūryaprabha)の譯

【九】瑠璃光菩薩の因緣を明す。

に隨ひて講宣する所有り、其の土の衆生聞くことを得ざる無し。瑠璃光菩薩の爲に是の如きの大涅槃經を講宣して言はく「善男子、菩薩摩訶薩若能く大涅槃經を修行すれば、聞かざる所の者悉く皆聞くことを得。」彼の瑠璃光菩薩摩訶薩、滿月光明佛に問はく「亦此の間の光明徧照高貴徳王菩薩の問ふ所の如く、等しくして異なること有ること無し。」

(九)彼の滿月光明佛卽ち瑠璃光菩薩に告げて言はく「善男子、西方此を去ること二十恆河沙の佛土、彼に世界有りて名を娑婆と曰ふ。其の土は多く山陵、堆阜、土沙、礫石、荊棘、惡刺有りて周徧充滿す。常に饑渇、寒暑の苦惱有り。其の土の人民は沙門、婆羅門、父母、師長を恭敬すること能はず、非法に貪著し非法を欲し、邪法を習行して正法を信ぜず、壽命短促なり。姦詐を行ふ有らば王者之を治す。王國を有つと雖も滿足を知らず、他の所有に於て貪利の心を生じ、師を興し相伐ちて枉死の者衆し。王者是の如きの非法を習行すれば四天善神心に歡喜無し、故に災旱を降して五穀登らず、人民多病、苦惱無量なり。彼の中に佛有りて釋迦牟尼如來、應供、正徧知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊と號く。大悲淳厚にして衆生を愍むが故に拘尸城、娑羅雙樹の間に於て諸の大衆の爲に是の如きの大涅槃經を敷演す。彼に菩薩有りて光明徧照高貴徳王と名く。已に斯の事を問ふ、汝の如く異なること無し。佛今之を答へたまふ。汝速かに往くべし、自ら當に聞くことを得べし」と。世尊、彼の瑠璃光菩薩是の事を聞き已りて、八萬四千の菩薩摩訶薩と此に來至せんと欲して、故に先に瑞を現ず。是の因緣を以て此の光明

有り、是を因縁と名く、亦因縁に非ず。』

爾の時に瑠璃光菩薩、八萬四千の諸の菩薩と倶に諸の旛蓋、香華、瓔珞を持し、種種の伎樂前に倍勝す。倶に此の拘尸城の娑羅雙樹の間に來至し、己が所持の供養の具を以て佛に供養し、頭面に禮足し、合掌恭敬し、右に繞ること三帀す。敬を修すること已畢りて卻つて一面に坐す。

爾の時に世尊、彼の菩薩に問ひたまはく『善男子、汝至來と爲ん、不至來と爲んや。』瑠璃光菩薩の言さく『世尊、至も亦不來、不至も亦不來なり。我是の義を觀ずるに都て來有ること無し。世尊、諸行若常なるも亦復不來、若是無常なるも亦來有ること無し。若人衆生性有りと見る者は來、不來有り、我今衆生の定性を見ず。云何ぞ當に來、不來有りと言ふべき。憍慢有る者は去來有りと見、憍慢無き者は卽ち去來無し。取行有る者は去來有りと見、取行無き者は則ち去來無し。若如來畢竟じて涅槃すと見ば則ち去來有り、如來畢竟涅槃すと見ざれば則ち去來無し。佛性を聞かざれば則ち去來有り、佛性を聞く者は則ち去來無し。若聲聞、辟支佛の人に涅槃有りと見る者は則ち去來有り、聲聞、辟支佛の人に涅槃有りと見ざる者は則ち去來無し。若聲聞、辟支佛の人の常樂我淨を見ば則ち去來有り、若見ざる者は卽ち去來無し。若如來常樂我淨無しと見ば則ち去來有り、若如來の常樂我淨を見ば則ち去來無し。世尊、且く斯の事を置きたまへ。問ふ所有らんと欲す、唯哀愍を垂れて少しく聽許せられよ。』

佛の言はく『善男子、意の問はん所に隨へ、今正に是時なり。我當に汝が爲に分別、解說すべし。所以は何ん。諸佛は値ひ難くして優曇華の如し。法も亦是の如し、聞くことを得べきこと難し。十二部の中、方等も復難し。是の故に應當に心を專らにして聽受すべし。』

時に瑠璃光菩薩摩訶薩、既に聽許を蒙り、兼て誡敕を被る。即ち佛に白して言さく『世尊、云何が菩薩摩訶薩、能く大涅槃經を修行する、聞かざる所を聞かん。』

爾の時に如來讚じて言はく『善い哉善い哉善男子、汝今是の如きの大乘大涅槃海を盡さんと欲す。正に復我が能く解說するに値ふ。汝今所有の疑網の毒箭をば、我大醫と爲りて能く拔出せん。汝佛性に於て猶未だ明了ならず。我慧炬有り、能く爲に照明せん。汝今生死の大河を度らんと欲す、我能く汝が爲に大船師と作らん。汝我が所に於て父母の想を生ず、我も亦汝に於て赤子の心を生ず。汝が心今者正法寶を貪る、我多く有りて能く相惠施するに値ふ。諦かに聽き諦かに聽け、善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別宣釋すべし。善男子、法を聽かんと欲すれば今正に是時なり、若法を聞き已らば、當に敬信を生じ、至心に聽受し、恭敬尊重すべし。正法の所に於て其の過を求むること莫れ、貪欲、瞋恚、愚癡を念ずること莫れ、法師の種姓好惡を觀ること莫れ、既に法を聞き已らば憍慢を生ずること莫れ、恭敬、名譽、利養の爲にすること莫れ。當に度世甘露法利の爲にすべし、亦念を生ずること莫れ。我法を聽き已り、先に自ら身を度し、然して後人を度せん。

先に自ら身を解し、然して後人を解せしめん。先に自ら身を安んじ、然して後人を安んぜん。先に自ら涅槃し、然して後人をして而も涅槃を得しむと。佛、法、僧に於て等想を生ずべし、生死の中に於て大苦の想を生ぜん。大涅槃に於て常、樂、我、淨の想を生ずべし。先に他人の爲にし、然して後身の爲にす。當に大乘の爲にすべし、二乘の爲にすること莫れ。一切法に於て當に住する所無かるべし。亦專ら一切法相を執ずること莫れ、諸法の中に於て貪想を生ずること莫れ。常に法を知り法を見るの想を生ぜよ。善男子、汝能く是の如く至心に法を聽かば、是即ち名けて聞かざる所を聞くと爲す。

善男子、不聞聞有り、不聞不聞有り、聞不聞有り、聞聞有り。善男子、不生生、不生不生、生不生、生生の如く、不至至、不至不至、至不至、至至の如し。『世尊、云何が不生生なる。』『善男子、世諦に安住して初めて出胎の時、是を不生生と名く。』『云何が不生不生なる。』『善男子、是の大涅槃は生相有ること無し、是を不生不生と名く。』『云何が生不生なる。』『善男子、世諦死する時、是を生不生と名く。』『云何が生生なる。』『善男子、一切の凡夫是を生生と名く。何を以ての故に。生生不斷の故に、一切の有漏念念生ずるが故に。是を生生と名く。四住の菩薩を生不生と名く。何を以ての故に。生自在なるが故に。是を生不生と名く。善男子、是を內法と名く。』『云何が外法の未生生、未生未生、生未生、生生なる。』『善男子、譬へば種子の如き、未だ芽を生ぜざるの時、四大和合、人功作業を得て然して後乃ち生ず。是を未生生と名く。』『云何が未生未生なる。』『譬へば敗種及び未

遇緣の如き、是の如き等の輩を未生未生と名く。』『云何が生未生なる。』『芽生じ已りて而も未だ增長せざるが如し。是を生未生と名く。』『云何が生生なる。』『芽の增長の如し、若生生せざれば則ち增長無し。是の如きの一切有漏、是を外法の生生と名く。』

瑠璃光菩薩摩訶薩佛に白して言さく『世尊、有漏の法若生有らば、是常と爲すや、是無常なりや。生、若是常ならば、有漏の法則ち生有ること無けん。生若無常ならば則ち有漏是常ならん。世尊、若生能く自ら生ぜば、生自性無し。若能く他を生ぜば何の因緣を以てか無漏を生ぜざる。世尊、若未生の時生有らば、云何ぞ今に於て乃ち名けて生と爲ん。若未生の時生無ければ、何が故ぞ虛空を說きて生と爲ざる。』

佛の言はく『善い哉善い哉善男子、不生生不可說、生生亦不可說、生不生亦不可說、不生不生亦不可說、生亦不可說、不生亦不可說、因緣有るが故に亦說くを得べし。』『云何が不生生不可說なる。』『不生名けて生と爲す、云何ぞ說くべけん。何を以ての故に。其の生を以ての故なり。』『云何が生生不可說なる。』『生生の故に生、生生の故に不生なり。亦說くべからず。』『云何が生不生不可說なる。』『生を卽ち名けて生と爲す、生自ら生ぜず。故に說くべからず。』『云何が不生不生不可說なる。』『不生とは名けて涅槃と爲す。涅槃は不生の故に不可說なり。何を以ての故に。修道して得るを以ての故なり。』『云何が生亦不可說なる。』『生無を以ての故なり。』『云何が不生不可說なる。』『得ること有るを以ての故なり。』『云何が有因緣故亦可得說なる。』『十因緣法生の爲に因と爲る。是の義を以ての故

に、亦說くことを得べし。善男子、汝今甚深空定に入ること莫れ。何を以ての故に。大衆鈍なるが故なり。善男子、有爲の法は生も亦是常、住無常を以て、生も亦無常なり。住も亦是常、生生を以ての故に、住も亦無常なり。異も亦是常、法無常を以て、異も亦無常なり。壞も亦是常、本無今有を以ての故に、壞も亦無常なり。善男子、性を以ての故に、生、住、異、壞皆悉く是常なり。念念滅の故に常と說くべからず。是の大涅槃は能く斷滅するが故に、故に無常と名く。善男子、有漏の法は未生の時已に生性有り、故に生能く生ず。無漏の法は本生性無し、是の故に生生ずること能はず。火の本性有りて緣に遇はば則ち發す。眼に見性有り、色に因り、明に因り、心に因るが故に見るが如く、衆生の生法も亦復是の如し。本性有るに由りて業因緣、父母和合に遇ひて則便ち生ずること有り。」

爾の時に瑠璃光菩薩、及び八萬四千の菩薩摩訶薩、是の法を聞き已りて、踊つて虛空に在ること高さ七多羅樹なり。恭敬合掌して而も佛に白して言さく、「世尊、我如來の殷勤なる教誨を蒙り、大涅槃に因りて、始めて聞所不聞を悟解することを得たり。亦八萬四千の菩薩をして、深く諸法の不生生等を解せしむ。世尊、我今已に解して諸の疑網を斷ず。然るに此の會中に一りの菩薩有りて名を無畏と曰ふ。復諮稟せんと欲す、唯聽許を垂れたまへ。」爾の時に世尊無畏菩薩に告げたまはく、「善男子、意に隨ひて問難せよ。吾當に汝が爲に分別解說すべし。」爾の時に無畏菩薩、六萬四千の諸の菩薩等と倶に座より起ちて更に衣服を整へ、長跪合掌して佛に白して言さく、「世尊、此の土の衆生、當に何の業を造りてか

彼の不動世界に生ずることを得べき。其の土の菩薩云何が智慧成就して人中の象王たる。大威徳有りて具さに諸行を修し、利智捷疾にして聞かば則ち能く解することを得る。」

爾の時に世尊卽ち偈を說きて言はく、

衆生の命を害はず、堅く諸の禁戒を持し
佛の微妙の敎を受く、則ち不動國に生ぜん
他人の財を奪はず、常に一切に施惠し
招提僧坊を造る、則ち不動國に生ぜん
他の婦女を犯さず、自妻も非時ならず
持戒に臥具を施す、則ち不動國に生ぜん
自他の爲の故に、利を求め及び恐怖せず
口を愼みて妄語せず、則ち不動國に生ぜん
善知識を壞すること莫く、惡眷屬を遠離し
口常に和合語す、則ち不動國に生ぜん
諸の菩薩等の如く、常に惡口を離る
說く所人聞かんことを樂ふ、則ち不動國に生ぜん
乃至戲笑に於ても、非時語を說かず
謙愼して常に時語す、則ち不動國に生ぜん

他の利養を得るを見て、常に歡喜心を生じ
嫉妬結を起さず、則ち不動國に生ぜん
衆生を惱まさず、常に慈心を生じ
方便惡を生ぜず、則ち不動國に生ぜん
邪見にして施、父母及び去來無しと言ふ
是の如きの見を起さざれば、則ち不動國に生ぜん
曠路に好井を作り、果樹林を種植し
常に乞者に食を施す、則ち不動國に生ぜん
若佛法僧に於て、一香燈を供養し
乃至一華を獻れば、則ち不動國に生ぜん
若恐怖を爲すの故に、利養及び福德にも
是の經の一偈を書すれば、則ち不動國に生ぜん
若は利福を希ふが爲にも、能く一日の中に於て
是の經典を讀誦せば、則ち不動國に生ぜん
若無上道の爲に、一日一夜の中に
八戒齋を受持すれば、則ち不動國に生ぜん
犯重禁と、同じく一處を共にして住せず

方等を謗ずる者を呵せば、則ち不動國に生ぜん
若能く病者に、乃至一果を施し
歡喜して贍視せば、則ち不動國に生ぜん
僧鬘物を犯さず、善く佛の財供を守り
佛僧の地を塗掃すれば、則ち不動國に生ぜん
像及び佛塔を造ること、猶し大拇指の如く
常に歡喜心を生ずれば、則ち不動國に生ぜん
若是の經典の爲に、自身及び財寶を
說法者に施す、則ち不動國に生ぜん
若能く、諸佛の祕密藏を聽き、書寫し
受持し及び讀誦せば、則ち不動國に生ぜん

【一〇】光明徧照高貴德王菩薩の因緣を明す。

(一〇)爾の時に無畏菩薩摩訶薩佛に白して言さく、「世尊、我今已に所造の業緣、彼の國に生ずることを得んことを知る。是の光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩、普く一切衆生を憐憫するが爲に上に諮問する所、如來若說きたまはゞ、則ち能く人天、阿修羅、乾闥婆、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽等を利益し安樂にせん。」爾の時に世尊、即ち光明徧照高貴德王菩薩に告げたまはく、「善い哉善い哉善男子、汝今此に於て當に至心に聽くべし。吾當に汝が爲に分別解說すべし。因緣有るが故に未至不至、因緣有るが故に不至至、因緣有るが故に至不至、

因緣有るが故に至至なり。三何の因緣の故に未至不至なる。三善男子、夫不至とは是大涅槃なり、凡夫未だ至らず。貪欲、瞋恚、愚癡有るを以ての故に、身業、口業不清淨の故に、及び一切の不淨物を受くるが故に、四重を犯するが故に、方等を謗ずるが故に、一闡提の故に、五逆罪の故に。是の義を以ての故に未至不至なり。

善男子、何の因緣の故に不至至なる。不至とは大涅槃を名く。何の義の故に至なる。永く貪欲、瞋恚、愚癡、身口の惡を斷ずるが故に、一切の不淨物を受けざるが故に、四重を犯せざるが故に、方等經を謗ぜざるが故に、一闡提と作らざるが故に、五逆罪を作らざるが故に。是の義を以ての故に不至至と名く。須陀洹の者は八萬劫に至り、斯陀含の者は六萬劫に至り、阿那含の者は四萬劫に至り、阿羅漢の者は二萬劫に至り、辟支佛の者は一千劫に至る。是の義を以ての故に不至至と名く。善男子、何の因緣の故に至不至と名く、至とは名けて二十五有と爲す。一切衆生常に無量の煩惱諸結に覆蔽せられ、往來して離れざること猶し輪の轉ずるが如し、是を至と名く。聲聞、緣覺及び諸の菩薩、已に永く離るることを得、故に不至と名く。諸の衆生を化度せんと欲するが爲の故に、示現して中に在れども、亦名けて至と爲す。善男子、何の因緣の故に名けて至至と爲す。至とは即ち二十五有に名く。一切の凡夫須陀洹、乃至阿那含の煩惱の因緣なり、故に至至と名く。善男子、聞所不聞も亦復是の如し。不聞聞有り、不聞不聞有り、聞不聞有り、聞聞有り。云何が不聞聞なる。善男子、不聞とは大涅槃と名く。何が故に不聞なる。有爲に非ざるが故に、音

【阿那波那】アーナーパーナ（Ānāpāna）數息觀と譯す。觀法の一。入出の息を數へて心を一境に集中するもの。

聲に非ざるが故に、說くべからざるが故なり。云何が亦聞なる。名を聞くことを得るが故に、所謂常、樂、我、淨なり。是の義を以ての故に不聞聞と名く。爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩佛に白して言さく『世尊、佛の所說の如き、大涅槃とは聞くことを得べからずと。云何ぞ復常、樂、我、淨、而も聞くことを得べしと言ふ。何を以ての故に。世尊、煩惱を斷ずる者、涅槃を得と名く。若未斷の者、名けて不得と爲す。是の義を以ての故に、涅槃の性本無今有なり。若世間法本無今有なれば、則ち無常と名く。譬へば缾等の本無今有、已有還無の故に無常と名くるが如し。涅槃若爾らば、云何ぞ說きて常、樂、我、淨と言はん。復次に世尊、凡そ莊嚴に因りて成ずることを得る者は、悉く無常と名く。涅槃若爾らば是無常なるべし。何等か因緣なる。所謂三十七品、六波羅蜜、四無量心、骨相を觀じ、阿那波那、六念處、六大を破析す。是の如き等の法、皆是涅槃を成就するの因緣なり。故に無常と名く。復次に世尊、有を無常と名く。若涅槃是有ならば、亦無常なるべし。佛昔阿含の中に於て說きたまふが如し、聲聞、緣覺、諸佛世尊皆涅槃有りと。是の義を以ての故に名けて無常と爲す。復次に世尊、可見の法、名けて無常と爲す。佛先に說きたまふが如く、涅槃を見る者は則ち一切の煩惱を斷除することを得と。復次に世尊、譬へば虛空の諸の衆生に於て等しく障閡無きが故に、名けて常と爲すが如し。若涅槃をして是常等ならしめば、何が故ぞ衆生、得不得有る。涅槃若爾らば、諸の衆生に於て不平等ならば、則ち常と名けず。世尊、譬へば百人共して一りの怨有り。若此の怨を害すれば、則ち

多人樂を受くるが如し。若涅槃是平等法ならば、一人得る時多人得べし、一人結を斷ぜば多人も亦斷ずべし。若是の如くならざれば云何ぞ常と名けん。譬へば人有りて、國王、王子、父母、師長を恭敬、供養、尊重、讃歎すれば、則ち利養を得。是を常と名けざるが如く、涅槃も亦爾なり、名けて常と爲さず。何を以ての故に。佛、昔阿含經の中に於て、阿難に告げて言ふが如し、若人能く涅槃を恭敬する有らば則ち結を斷じて無量の樂を受くることを得と。是の義を以ての故に名けて常と爲さず。世尊、若涅槃の中に常、樂、我、淨の名有らば、名けて常と爲さず。如其無ければ、云何ぞ說くべけん。』爾の時に世尊、光明徧照高貴德王菩薩に告げたまはく、『涅槃の體本無今有に非ず。若涅槃の體本無今有ならば、則ち無漏常住の法に非じ。有佛、無佛性相常住なり。諸の衆生の煩惱覆ふを以ての故に涅槃を見ず、便ち謂つて無と爲す。菩薩、戒、定、慧を以て勤めて其の心を修し、煩惱を斷じ已りて便ち之を見ることを得。當に知るべし、涅槃は是常住の法なり。本無今有に非ず、是の故に常と爲す。善男子、闇室の中の井、種種の七寶、人亦有るを知れども闇きが故に見ず。有智の人は善く方便を知り、大明燈を然し、持ち往きて照燎して悉く之を見ることを得。是の人此に於て終に、念を水及び七寶本無今有に生ぜざるが如く、涅槃も亦爾なり。本自ら之有りて適今に非ざるなり。煩惱の闇の故に衆生見ず。大智如來善方便を以て智慧燈を然し、諸の菩薩をして涅槃の常、樂、我、淨を見ることを得しむ。是の故に智者、此の涅槃に於て、說きて本無今有と言ふべからず。善男子、汝莊嚴に因るが故

に涅槃を成ずることを得、無常なるべしと言ふは、是亦然らず。何を以ての故に。善男子、涅槃の體は生に非ず、出に非ず。實に非ず、虛に非ず。作業生に非ず。是有漏、有爲の法に非ず。聞に非ず、見に非ず、墮に非ず、死に非ず。別異相に非ず、亦同相に非ず。往に非ず、還に非ず、去來今に非ず。一に非ず、多に非ず。長に非ず、短に非ず。圓に非ず、方に非ず。尖に非ず、邪に非ず。相に非ず、想に非ず。名に非ず、色に非ず。因に非ず、果に非ず、我我所に非ず。是の義を以ての故に、涅槃は是常恆にして變易せず。是を以て無量阿僧祇劫善法を修習し、以て自ら莊嚴して而して後乃ち見る。善男子、譬へば地下に八味の水有りて、一切衆生而も得ること能はず。有智の人は功を施して穿掘すれば、則便之を得るが如く、涅槃も亦爾なり。譬へば盲人の日月を見ざるも、良醫之を療すれば、則便見ることを得。而も是の日月は是今有に非ざるが如く、涅槃も亦爾なり。先より自ら之有りて適今に非ざるなり。善男子、人罪有りて之を囹圄に繫ぎ、久しうして乃ち出づることを得、家に還りて父母、兄弟、妻子、眷屬を見ることを得るが如く、涅槃も亦爾なり。善男子、汝因緣の故に涅槃の法無常なるべしと言ふは、是亦然らず。何を以ての故に。善男子、因に五種有り。何等をか五つと爲す。一つには生因、二つには和合因、三つには住因、四つには增長因、五つには遠因なり。云何が生因なる。生因とは即ち是業煩惱等、及び外の諸の草木の子、是を生因と名く。云何が和合因なる。善と善心と和合し、不善と不善心と和合し、無記と無記心と和合するが如し。是を和合因と名く。云何が住因なる。下

に住有れば屋則ち墮ちず。山河、樹木の大地に因るが故に、而も住立を得。內に四大無量の煩惱有りて衆生住することを得るが如し。是を住因と名く。云何が增長因なる。衣服、飲食等に因緣するが故に、衆生をして增長せしむ。外の種子火の燒かざる所、鳥の食せざる所なれば、則ち增長を得るが如く、諸の沙門、婆羅門等、和上、善知識等に依因して而も增長を得るが如く、父母に因りて子增長を得るが如し。是を增長因と名く。云何が遠因なる。譬へば呪に因りて鬼害すること能はず、毒中つること能はず。國王に依憑すれば盜賊有ること無きが如く、芽の地、水、火、風等に依因るが如く、水鑽及び人、酥の遠因と爲るが如く、明色等の識の遠因と爲り、父母の遺體衆生の遠因と爲るが如く、時節等の如き、悉く遠因と名く。善男子、涅槃の體は是の如き等の五因の所成に非ず、云何ぞ當に是無常因と言ふべき。復次に善男子、復二因有り。一つには作因、二つには了因なり。陶師の輪繩の如し、是を作因と名く。燈燭等の闇中の物を照すが如し、是を了因と名く。善男子、大涅槃は作因に從ひて有らず、唯了因に從ふ。了因とは所謂三十七の助道法、六波羅蜜、是を了因と名く。善男子、布施は是涅槃の因にして、大涅槃の因に非ず、檀波羅蜜は乃ち名けて大涅槃の因と爲すことを得。三十七品は是涅槃の因にして大涅槃の因に非ず。無量阿僧祇の助菩提法は乃ち名けて大涅槃因と爲すことを得。『爾の時に光明徧照高貴德王菩薩摩訶薩佛に白して言さく、「世尊、云何が布施は名けて檀波羅蜜と爲すことを得ざる、云何が布施は而も名けて檀波羅蜜と爲すことを得る。乃至般若は云何が般若波羅蜜と名くるこ

とを得ざる、云何が般若波羅蜜と名くることを得る。云何が涅槃と名く、云何が大涅槃と名く。』佛の言はく『善男子、菩薩摩訶薩方等大般涅槃を修行するに布施を聞かず、布施を見ず。檀波羅蜜を聞かず、檀波羅蜜を見ず。乃至般若を聞かず、般若を見ず。般若波羅蜜を聞かず、般若波羅蜜を見ず。涅槃を聞かず、涅槃を見ず。大涅槃を聞かず、大涅槃を見ず。菩薩摩訶薩大涅槃を修するに法界を知見し、實相空にして所有無きを解了し、和合覺知の相有ること無し。無漏相、無所作相、如幻化相、熱時燄相、乾闥婆城空虛の相を得。菩薩爾の時に是の如きの相を得、貪恚癡無く、不聞不見なり。是を菩薩摩訶薩の眞實の相、實相に安住すと名く。菩薩摩訶薩自ら、此は是檀、此は是檀波羅蜜、乃至此は是般若、此は是般若波羅密、此は是涅槃、此は是大涅槃を知る。善男子、云何が是施にして波羅蜜に非ざる。乞者有るを見て然して後乃ち與ふ。是を名けて施にして波羅蜜に非ずと爲す。若乞者無きに開心して自ら施す。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若時時に施す。是を名けて施にして波羅蜜に非ずと爲す。若常施を修す。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若他に施し已りて還つて悔心を生ず。是を名けて、施にして波羅蜜に非ずと爲す。施し已りて悔いず。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。菩薩摩訶薩財物の中に於て四怖心を生ず。王賊、水火、歡喜施與す。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若報を望んで施す。是を名けて、施にして波羅蜜に非ずと爲す。施して報を望まず。是を則ち名けて檀波羅蜜と爲す。若は恐怖、名聞利養、家法相續、天上の五欲の爲に、憍慢の爲の故に、勝慢の爲の故に、知識の爲の故に、來報の爲

の故に、市易の法の如くす。善男子、人樹を種ゑて蔭涼を得るが爲に、華果及以材木を得るが爲にするが如し。若人是の如き等の施を修行せば、是を名けて、施にして波羅蜜に非ずと爲す。菩薩摩訶薩是の如く大涅槃を修行する者は、施者、受者、財物を見ず、時節を見ず。福田及び非福田を見ず。因を見ず、緣を見ず、果報を見ず。作者を見ず。受者を見ず。多を見ず、少を見ず、淨を見ず。不淨を見ず。受者、已身、財物を輕んぜず。見者を見ず、不見者を見ず。已他を計せず、唯方等大般涅槃常住の法の爲の故に、布施を修行す。一切諸の衆生を利するが爲の故に、而も布施を行ず。一切衆生の煩惱を斷ずるが爲の故に布施を行ず。諸の衆生の受者施者、財物を見ざらんが爲の故に布施を行ず。善男子、譬へば人有りて大海水に墮つるに死屍を抱持すれば則ち度脫を得るが如し。菩薩摩訶薩大涅槃を修して布施を行ずる時、亦復是の如く、彼の死屍の如し。善男子、譬へば人有りて深獄に閉在す。門戶堅牢、唯廁孔有り。便ち中より出でて無閡處に至るが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずる時も亦復是の如し。善男子、譬へば貴人の恐怖急厄して更に恃怙無く。旃陀羅に依るが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずるも亦復是の如し。善男子、譬へば病人の病苦を除き安樂を得んが爲の故に、不淨を服食するが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずるも亦復是の如し。善男子、婆羅門の穀の踊貴に値ひ、壽命の爲の故に狗肉を食啖せんが如く、菩薩摩訶薩の大涅槃を修して布施を行ずるも亦復是の如し。善男子、大涅槃の中是の如きの事、無量劫より來た不聞にして而も聞す。

尸羅、尸羅波羅蜜、乃至般若、般若波羅蜜、雜華經の中に廣く說くが如し。善男子、云何が菩薩摩訶薩大涅槃を修して聞かざるを而も聞く。十二部經、其の義深邃、昔來聞かず。今是の經に因りて具足して聞くことを得たり。先に聞くことを得と雖も、唯名字を聞き、而も今此の大涅槃經に於て乃ち義を聞くことを得たり。聲聞、緣覺は唯十二部經の名字を聞きて其の義を聞かず。今此の經に於て具足して聞くことを得。是を不聞而聞と名く。善男子、一切の聲聞、緣覺の經の中には、曾て佛、常、樂、我、淨有りて、畢竟じて滅せず。三寶佛性差別の相無し。四重禁を犯し、方等經を謗り、五逆罪を作り、及び一闡提悉く佛性有るを聞く。今此の經に於て而も之を聞くことを得。是を不聞而聞と名く。

昭和三年七月五日印刷
昭和三年七月十五日發行

昭和新纂國譯大藏經 經典部第五卷

不許複製

編纂者　昭和新纂國譯大藏經編輯部
代表者　三井晶史

發行者　東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社東方書院
代表者　坂戶彌一郎

印刷者　東京市神田區表神保町十番地
同興舍
代表者　井波康三郎

發行所　東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社東方書院
電話下谷四二五九
振替東京六八六一一

印刷所　西村・製本所　眞貝

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 3753